アニマザ

動脈硬化症

及びその結果症狀……

腦溢血・腎臓炎・狹心症

治療及豫防内服藥

神經の昂奮、精神の過勞、酒煙草の中毒、その他現代の緊張生活は生理的血管硬化の年齡（七十歲）を待たずして、人生の收獲季に在る四十乃至五十歲の壯年者をして早くも血管高張を呈し、老衰を急ぎ又は短命に導きつゝあり。

高血壓者及び緊張生活者に對し、アニマザの有効なるとは既に多數の臨床報告幷びに批判の結果殆んど確定的となれり

「說明書送呈」



三〇錠入……二圓四十錢
一〇〇錠入……六圓八十錢
著名藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

日本總代理店 株式會社 田邊元三郎商店
東京市日本橋、本町

A 70

最新刊

里見弴著

大道無門

定價金貳圓
送料金二十錢

豐かなる美感と、深刻なる描寫、自由なる構想と、妖艶の美女。吾々は氏の神品に接するごとに、唯々その豐潤なる美の香氣と奇矯なる人生の綾に醉はされきつてしまふのだ。今や、氏の熱誠の總てを傾倒せる駿品大道無門は遂に完成した。一點一劃の技巧をもゆるがせにせぬ氏が、此の長篇こそ、實に我が文壇と讀書界に大渦紋を呼び起さずには置かぬものである。凡そ文藝を口にするものの必讀玩味すべき書だ。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社



改造新年號目次

時評

現代苦悶の諸相とその打開

說話



新年號創作特別附錄

◇吉波彦作氏新著◇

大好評 新刊

韓非子詳解

（高等學校專門學校學生必讀の參考書）

韓非子の刑名誌術は其思想嚴勵峻直其文辭警抜簡勁實に支那先秦文學の精華であり諸子百家の白眉である本書は其最も人口に膾炙せる二柄・説難・孤憤・説林・五蠹・顯學等の名篇雄章二十有五篇を選拔しこれを篇旨・訓讀・語釋・通釋・評釋の五段に分ち每節詳密叮嚀に著者が其蘊蓄を傾注して韓非子の精髓を闡明したるものである。東洋古代思想の研究家は勿論文檢受驗者並に高等學校各種專門學校漢文科の參考書として必讀缺くべからざる唯一無二の好著である。

菊判最上製美本 全壹冊五百餘頁

正價金四圓八拾錢 送料廿七錢

書名	著者	價格
哲學の一斑 基礎概念講義	市川一郎譯	五圓八拾錢 送料廿七錢
高尚なる理論を平易に講義せる 哲學概論	市川一郎譯	四圓八拾錢 送料廿七錢
哲學教科書	稻毛金七著	參圓八拾錢 送料十八錢
最新哲學辭典	渡部政盛著	五圓八拾錢 送料廿七錢
カント研究	大關增次郎	七圓八拾錢 送料卅六錢
改訂增補 オイケンの哲學	稻毛詛風著	壹圓六拾錢 送料十二錢
社會道德論	一條忠衞著	參圓五拾錢 送料十八錢
體育原論	島田正藏著	參圓八拾錢 送料十八錢

好評 拾貳版

文部省檢定受驗用

大日本歷史

◇岡部精一・高橋與惣共著◇

（名は文檢を冠すと雖も何人にも有益の良書です）

本書内容は國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せる新説の穩健なるものは努めて之を採錄せり文檢準備としては第一回より最近までの問題を盡く解答して一々精密に各章末に添附せり加ふるに著者多年の經驗と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば本書は實に簡要適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たると共に更に斯學隨一の羅針盤たるべき良書である。

菊判最上製美本 全壹冊壹千百餘頁

正價金七圓五拾錢 送料卅六錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七七貳番





法律的闘爭と實力的闘爭

——小作法要綱に對する批評について——

末弘嚴太郎

一

現在吾國多數の人々は唯漠然と常識的に次の如き考を抱いて居る。

吾々社會各般の事物はすべて法律によつて規律されて居る。從つて事實爭議が起つた場合にも何が「法律」であるかを探求した上之を規準として其解決を計らねばならない。若しも何が「法律」であるかに付いて疑があるならば、裁判所に訴へて當該の問題に關する現行法の定めの何たるかを明かにして貰ひ、之を規準として裁判をして貰ふべきである。

かう言ふ考へを抱いて居る人々は、すべての爭は法律によつて之を解決し得べきであり又解決せねばならぬものと考

べて居る。又すべての爭は裁判所其他國家機關の裁判判定によつて解決せられ得るものであると考へて居る。從つて、彼等は先づ第一に、爭議の當事者が利害關係其他四圍の實情に鑑み相互的讓步による和解の手段により法律に準據せずして爭を解決するを以て何等か不法乃至少くとも不正式のものと考へ勝ちである。例へば、現在我國に於ては借地借家小作等に關する爭議を解決する爲め、廣く調停の方法が利用せられつゝある。而して調停は言ふまでもなく爭議の實情に鑑み必ずしも法律に準據せずして解決を與へるものである。當事者はいづれも其事實的解決に滿足してそれが現行法の定めに一致するや否やは毫も共意とする所ではない。然るに、如上の考を抱いて居る人々は、爭議が和解妥協により法律に據らずして解決せられたることに何等かの不正を感ずるのであつて、吾々は屢々此種の非難を法律家殊に辯護士の口より聽き又地主家主等の口から之を聽くのである。無論前者の非難は吾々も亦容易に其理由を理解することが出來る。然らば、後者の非難は何を意味するのであるか。彼等は言ふ。現行民法は云々の規定を設けて居る。それによれば余の利益は十である。然るに調停委員會は余に向つて三の讓步を勸めたる結果、終に調停上余の得る所は七たるに過ぎざることゝなつた。かくの如きは事實の力に押されて成立した法律に反する調停であつて、決して正當のものとは言ひ難いと。

次に又、同盟罷業小作爭議等の場合に於て資本家乃至地主は常に個々の勞働者乃至小作人を相手方として法律に據り裁判所に據つて事を片付けようと希望する。然るに、實際上同盟罷業は性質上法律に據る裁判に適せざるものである。元來同盟罷業は國家間の戰爭に似たものである。戰鬪手段そのものは法律によつて之を規律制限することは出來るとしても、戰鬪そのものゝ解決を法律により裁判によつて與へることは性質上不可能である。戰鬪は本來事實力による爭鬪であり、實力による解決手段であつて、賣主買主間の取引が兩者の懸引其他事實力によつて決せらるゝが如く、戰爭乃至

同盟罷業は當事者双方の實力鬪爭によつて事を解決せむとするものである。而して小作爭議も亦之と同一の性質を有するものである。然るに、地主は常に個々の小作契約を楯にとつて法律的解決を希望する。從つて、彼等は爭議が鬪爭の結果法律によらずして事實的解決を見るに至ること多きを見て、其處に或る不正を感ずるのである。

乍併、かくの如きは社會各般の事柄はすべて法律によつて規律し得べく、從つてすべての爭議は法律によつて之を裁判し解決し得べしとする迷信の致する所である。成程すべての事柄が法律によつて秩序整然と規定せられ、從つてすべての爭が法律によつて規則正しく裁斷解決せらるゝことは理想として誠に喜ぶべきことに違ひない。殊に社會の現在に滿足して自己の現狀を保持することに利益を感ずる人々——例へば現在の資本家乃至地主等——は自己の利益が法律的に規則正しく保障せられ、從つて縱令爭議が起つてもすべて法律によつて規則正しく平和的に解決せらるべきことを豫期し、其處に多大の利益を感じ從つて之を正義と感ずるのである。

若しも、社會が固定して居るものであり、從つて利害の變動なく又實力の變化なきものであるならば、彼等の希望する所も亦常に必ず之を實現し得るであらう。けれども、現實の社會は常に實力鬪爭の巷である。之を法律的に規律立てることは理想であるとしても、それは永久に理想である。あらゆるものは常に變動し鬪爭する。さうして各自其利用し得べきあらゆる手段を利用して鬪爭の勝利者たるべく努力するのである。從つて、現在國家の法律が或る階級者に與へて居る取扱が事實彼等の利益に合致しないならば、彼等が法律によらず寧ろ其實力によつて鬪爭の勝利者たるべく努力するのは當然であつて、社會的事實としては之を如何ともすることが出來ないのである。

此故に、實際上當事者對等の立場に立ちつゝ双方共現在の法律的秩序に從つて自由に取引した者であるならば、縱令彼等の間に爭議が起つたとしても、之を法律により裁判によつて解決することは彼等の初めから覺悟する所であるに違

ひないけれども、現在の如く自由契約なる名の下に實は資本家の立場のみから決定されて勞働條件乃至小作條件の下に屈從すべく餘儀なくされて居る人々は、決して彼等に向つて現行法の與へて居る法律的取扱に滿足する筈がない。彼等が其社會上事實的に有するあらゆる實力を利用して自己の地位を向上せしめ其利益を擁護すべく努力するのは當然であつて、吾人は社會的事實としてありのまゝに此傾向を是認せざるを得ないのである。

言ふまでもなく吾人も亦秩序を愛する。すべてが秩序正しく規律せられ規則正しく解決せらるゝことを希望する。けれども、例へば國家間の戰爭が現在未だ法律的裁判に適せざるが如く、事物の性質上國家的法律の規律に適せざる社會關係も亦存立すること、又國家の法律的裁判によつて解決するに適せざる社會的鬪爭も亦數多く存在するといふ事實を否定することは出來ない。蓋し社會的に實力あるものが其實力に目醒めて實力相應の社會的地位を要求し、實力によつて其要求を貫徹すべく努力するとき、之に原因して起るべき鬪爭は唯實力的鬪爭のみが之を解決し得る、國家の法律の如何ともし難い事柄であると言はねばならないからである。又國家は事實上決して萬能ではない。成程國家は刑罰を課する。强制執行を行ふ。其他其有する限りの力を以て各種の强い强制を行ひ得る。けれども、國家の力も亦有限である。國家の力も亦及び得ない事柄、國家の力を以て干渉するを適當とせざる事柄は實際上數多く存在するのであつて、之に向つてまでも無理矢理にすべて國家的干渉に及ぼし、國家的法律的解決を與へむとするが如きは、事實國家に向つて不能を强ふるものであつて、國家夫れ自身の爲めにも亦決して喜ぶべき事柄ではない。理想として國家の强力を希ふのは素より差支ない。國家的實力によつて國家的秩序の確立せむことを希望するのはよろしい。けれども、國家の力も亦有限なるべきことは事實として之を認めざるを得ないのである。

而して勞働爭議小作爭議の如き階級的實力的鬪爭は正にこの國家的實力により法律的裁判によつて解決を與ふるに適

せざる事柄であつて、國家の之に對する對策は其實力的闘爭たる事實を事實として確認したる上、實力的闘爭夫れ自身として之を解決することでなければならない。今遽に國家的法律を以て勞働關係乃至小作關係を規律し、之によつて一面爭議を防止すると共に他面萬一起るべき爭議に向つてすべて法律的解決を與へむとするが如きは、抑も根本的に誤つた企てであると言はねばならないのである。

然るに、現在吾國には國家の萬能を信じ法律の力を過信し、其結果社會各般の闘爭が法律裁判の外各種の事實力によつて解決せられつゝある事實をすら否認せむとする人々が少くない。而して私は今回小作調査會によつて審議答申された「小作法制定上規定すべき事項に關する要綱」に向つて加へられつゝある各方面の批評意見中に計らずも多數の此種の意見を發見するのであつて、殊に小作人側の人々の中にさへ此種の誤つた法律思想を抱懷するもの少からざるを發見することは私の最も驚きとする所である。

二

今回の「小作法制定上規定すべき事項に關する要綱」は夫れ自身決して今後吾國に行はるべき小作關係に向つて國家的規律を與へ、之によつて小作關係の根本的秩序を樹立せむとする大理想の下に企圖せられ決定せられたものではない。唯單に現在全國各地の農村を苦しめつゝある小作爭議を出來得る限り減少防遏すると共に爭議の惡化と之に伴つて生ずべき各般の社會的惡影響を避止する目的を以て差當り之に必要妥當なりと考へらるゝ臨時應急の施設を設けることが其主たる目的である。

それならば、要綱の先づ第一に志さねばならない事は、現行法中小作人の法律的地位に向つて著しき不安を與ふる規

定を除去改善することでなければならぬ。蓋し、小作人が從來の如き溫情的隷屬の狀態に甘んじて居れば格別、既に其勞働者たり生產者たる實力に目醒めて地主との對等取引を要求するに至つた以上、最早地主の溫情にのみ依賴して安堵して居ることは到底彼等の爲し得る所ではない。彼等にとつても亦一度爭が起つたならば正々堂々裁判所の手により法律の力によつて其公正なる主張を貫徹し得るだけの法律的地位が平素から保障されて居ることが必要である。かくの如き法律的保障のない小作人は一旦緩急の際を慮つて平素到底其堵に安ずることが出來ない。其結果、彼等は相寄り相集つて自衞の團結を組織し一度事あらば直に實力的鬪爭によつて其利益を擁護し、之によつて法律的鬪爭の到底彼等に與へ得ないものを獲得せむと努力するのは當然であつて、現在地主が小作人と戰ふに當つて其の專ら執る方策が訴訟其他法律的であるのに反し、小作人側の慣用手段が多く實力的であるのは實に此間の消息を雄辯に物語るものと言はねばならぬ。此故に、小作人の實力的鬪爭を防止せむとするものは、よろしく彼等に向つて有力公正なる法律的保障を許し與へねばならぬ。何等の法律的手段を與へずして唯專ら實力的手段を避止せむと欲しても事や明かに不可能である。然らば、要綱は此點について何を提議してゐるであらうか？　以下其中主要なるもの一二を例示して、要綱企圖の一斑を明にするであらう。

要綱は先づ第一に、「小作契約の第三者に對する效力」なる表題の下に、小作權に向つて——現行法が借地權借家權に與へて居るのと同樣——或る程度の物權的保護を與ふべきことを提議して居る。現行民法によると、普通の小作權は單純なる對人的の債權である。從つて地主の同意を得て登記することが出來れば格別然らざる限り地主が交代した以上小作權は之を以て全然新地主に對抗し得ないのであつて、地主が若し小作權の此弱點を捉へて法律的攻擊を加へるならば、小作人は之に對抗して自己を防衞し得べき何等の法律的手段をも許し與へられて居ないのである。此故に、要綱は

何よりも先づ此點を改正して小作權の法律的基礎を確實ならしめむことを提議して居るのである。

次に又要綱は「小作契約の繼續及消滅」と題して小作權繼續の法律的保障を堅固ならしむべきことを提案して居る。現在吾國に行はれて居る小作關係の大多數は不定期小作であつて、豫め小作期間を定むることなく特に不都合なき限り年々永く繼續して行くのが其慣行である。從來溫情的隸屬關係の下に眠つて居た小作人は此慣行の下に特に多くの不安を感じなかつた。彼等は其希望する限り現在のまゝ何時までも小作を續けてゆくことが出來るものと考へて居た。然るに、現行民法によると、地主は一年前の豫告を以てしさへすれば正當の理由の有否如何に關係なく何時でも自由に返地を請求し得る。而して之が爲め小作人が如何に損害を蒙り又如何に生活上の脅威を蒙らうとも、地主は何等の賠償を拂ふ必要がないのである。從つて若しも地主が此法律的武器を以て無遠慮に小作人に臨むならば、彼等は自己及び家族の生活の基礎を防衞する爲め法律上何等の防禦手段をも許し與へられて居ないのである。而して此點を緩和するが爲め要綱は返地請求の條件として必ず一定の賠償を支拂ふべきことを提議したのである。

又現行民法によると――定期小作なると不定期小作なるとを問はず――小作人が聊かたりとも小作料を滯納すれば其分量の如何に關係なく又滯納期間の長短に關係なく、地主は先づ相當の期間を定めて履行を催告した上其期間内に履行なきときは直に解約を爲し得るのである。從來の溫情的隸屬的小作關係の下に於ては地主は縱令小作人に滯納ありと雖も、地主は實際上決してかくの如き嚴酷なる手段をとることをしなかつた。從つて小作人も亦地主の此慣行的態度に信頼して兎も角安神して居ることが出來た。しかし、若しも地主が右民法の規定を武器として容赦なく小作人を攻撃するならば、小作人は之に對抗し得べき何等の法律的武器を有せず、彼等の生活基礎たる小作地は易々として地主の奪ふ所となり得るのである。此故に要綱は此點をも緩和して小作人の地位を鞏固ならしむるが爲め「小作人が惡意を以て小作

料の滯納を爲すが如き背信行爲ありたる場合」を除くの外小作人が「一年分の小作料を一年間滯納したるとき、引續き二年度に亙り各年の小作料の一部分を滯納したるとき又は滯納が二年度以上に亙り共の總額が一年分に達したるとき」に於て初めて「地主は小作人に對し二月を下らざる期間内に支拂を爲すべき旨を催告し若し共の期間内に支拂なき場合に於て初めて小作契約を解除し得るもの」とすべき旨を提議したのである。

右の中小作權の物權的保護に關する提案は法律的には相當重要の意義をもつたものであるけれども、經濟的には地主にとつても甚しき損害を與へるものでないから、此點については世上にも殆ど何等の批評をきかない。反之、第二の提案は直接小作問題の中心を成すべき重要問題に關聯する關係上地主小作人双方の側から極めて手嚴しい而かも内容上互に相反する批評が加へられつゝある。

先づ第一に、地主は言ふ。小作地は自己の所有物である。縱令不定期小作の場合と雖も適法に之が返還を求めるについて賠償を拂はねばならないと言ふ理窟がいづれにあるか。又小作人は債務者である。苟も債務者が遲滯に陷つたならば、債權者たる地主が直に履行强要の手段として契約解除の警告を與へ得べきは當然ではないか。然るに、要綱は「一年分の小作料を一年間滯納したるとき」等滯納狀態が相當重きに至つたときについて初めて解除を許して居る。かくの如きは、債務者たる小作人に何つて一定期間滯納「御免」の恩惠を與へるものであつて、甚だ不當である、と。

之に反して、小作人は言ふ。如何に不定期小作とは言へ、僅か一年前の豫告を以て何等特別の理由なしに勝手に取り上げてよいと言ふ理窟はない。殊に其際支拂はれる賠償が僅々「小作料一年分以下に相當する額の範圍内に於て」裁判所の決定すべき額に過ぎないとは何であるか。かくの如きは多年土地に親んで其上に生活を築いて來た小作人の生命そのものを脅かすものと言はねばならない。又小作料不納を理由とする契約解除を制限する提案にしても共許與して居る

年限はすべて甚だ短きに失する。加之「惡意を以て小作料の滯納をなすが如き背信行爲」ある場合にはかゝる期限の猶豫すら與へられないから、平素地主に對して恭順の態度を持して居た小作人ならば格別、然らざるものはすべて「惡意」乃至「背信行爲」を名として容易に返地を强要せらるゝに違ひない。果して然らば、今日小作人が地主との團體交涉上利用しつゝある最も有力なる武器たる「小作料不納同盟」の如きは今後全然之を利用し得ざることとなるであらう。かくの如きは、小作人に對する最大の脅威でなければならない、と。

此等地主小作人の批評は、それ〴〵の立場としてそれ〴〵相當の理由がある。けれども、此際彼等の批評に向つて一應の批評を加へ是非共此處に考慮を求めて置かねばならないのは、彼等批評の根本的思想乃至態度である。何故なれば、私にはどうしても彼等の批評が多く上述した誤りたる法律萬能思想に出發して居るやうに思はれてならないからである

地主は專ら自己の利益擁護にのみ專念して、「所有權神聖」の美名の下に多少とも小作人の權利を伸張し少しでも小作人の利益を增進せしむべき條項のすべてを小作法の中から排斥し去らむとして居る。それは彼等として一應尤の主張であるやうに考へられる。けれども、地主が今回の小作法改正夫れ自身に贊成するに至つた抑もの理由は、法律上多少の讓步をしてでも小作人を安定せしめ之によつて小作人の團體的實力的抗爭の態度を避止緩和せむとするにあるのではなからうか？　それならば、小作人が特に團體の力により實力によつて爭はずとも法律によつて平和的に自己の公正なる利益を擁護し正當なる主張を貫徹し得るに必要な充分の法律的手段を許し與へるのでなければ、到底充分に其目的を達することは出來ない筈である。一面實力的鬪爭の回避に專念しつゝ他面小作人に向つて法律的鬪爭の途を開き與へず、而かも之によつて已むに已むなき彼等生命の根强き要求を抑止し得べしと夢想するが如きは、甚しき矛盾である。ノンセ

ンスである。地主は從來現行法によりあらゆる法律的武器を利用して小作人を攻撃しつゝある。而して小作人は又あらゆる許され得る限りの法律的防禦手段を利用して之に對抗しようとして居る。之が即ち現在法廷を中心として盛に行はれつゝある小作爭議の「法廷戰」であり「法律戰」である。けれども、此「法律戰」は實質上法律の形式を借りた實力的鬪爭に外ならない。法律が權利を許し與へた本來の理由を無視して苟も利用し得べきあらゆる權利を利用して行ふ實力的鬪爭に外ならない。形は法律戰であつて實は全くの實力的鬪爭である。此故に、地主若し彼等が今日盛に行ひつゝある法律による實力的鬪爭によつて飽くまでも小作人と戰はむとするならば、彼等の此際要求すべきものは、彼等の法律戰上利用し得べき法律的武器の完備でなければならない。彼等としてはよろしく、「訴訟及調停の促進」に最も力を注ぐべきであり、又「土地立入禁止」及び「立毛差押」等の執行を今日以上一層迅速且有效に行ひ得べき方策を考ふべきであつて、一面小作權の法律的效力に因る多少の讓歩を爲すことを容認しつゝ他面それについて出來るだけ出し惜みをして居るが如き現在の態度は、現在の實力的鬪爭を移して平和なる法律的鬪爭に變らしめることを希望するものとして甚だ不徹底であるのみならず、法律戰により「法律的」實力的鬪爭によつて小作人を壓服し去らむとする人々の態度としても亦極めて不徹底である。此故に、私は言ひたい。地主若し眞に平和を愛して法律による秩序の樹立を希望するならば此際小作人に向つて充分なる法律的保障を許し與へよ。さうして彼等をして實力的鬪爭の必要なきに至らしめよ。又若し地主が飽くまでも小作人と戰はむとするならば、農村の平和を亂り農業の衰頽を來すべき責任を一身に負擔すべき覺悟を以て、彼等の利用し得べき法律的武器の完備に熱中すべきであると。然るに、彼等今日の態度は兩者の何れでもない、同時にいづれをも希望しつゝ全く矛盾した極めて不徹底の態度をとつて居るものと言はねばならない。

次に、小作人側の人々が要綱の提議した小作權保護を極めて不充分なりと批評して居るのは全然正當である。何故な

れば、小作人が地主の法律的攻撃を蒙つた場合之に對抗するに足るべき充分の法律的武器を許し與へらるゝことは彼等にとつて絶對に必要だからである。小作人の立場から言ふても、平和と秩序とは素より望ましいに極つて居る。法律が充分の法律的保護を許し與へてくれるならば何と好んで無用の鬪爭に精力を浪費する必要があらう。又假に爭が起つたとしても、法律により裁判によつて公正且規則正しき解決が與へられるならば、何を好んで實力的鬪爭の爲め無用の力を徒費する心要があらう。此故に彼等が小作法の制定を機會に彼等の利益の徹底的保障を要求するのは素より當然であり、此意味に於て彼等が要綱を非難するのは彼等として正に正當の態度である。

けれども、自己の力を考ふる所なく又政治的勢力の現狀をも顧みずして、唯漫然自己の理想を主張するが如きは關係當事者自らの實際的政治實際的立法に對する批評的態度として決して當を得たものとは言ひ難い。地主は小作人に向つて彼等の希望するが如き法律的保障を與へないと言ふのである。吾國現在の政治と法律とがどうして之を與へることが出來やう。それならば、小作人は覺悟しなければならない筈である。今後と雖も團結により其實力によつて自ら自己の利益を擁護する必要は少しも減少しないのである。否其必要は地主の覺醒を共に今後益々反つて增大しつゝあるのである。此故に、小作人側の人々が要綱を觀察するに當つて注意すべき最大の重要事は、要綱が小作權の法律的保護について何を與へようとして居るか、及び小作人の團體的實力的鬪爭について何を許し何を禁ぜむとして居るかの二問題を嚴格に區別して觀察することであつて、前者が到底滿足に解決されない以上、寧ろ注意を後者に集中して其處に實利を收めるべく全力を盡さねばならない。而してこれこそは小作人として又小作組合運動者として其正に力を致すべき最も重要の事項なりと言はねばならないのである。

三

抑も小作人殊に組合による團體的實力的闘爭の力に依賴する小作人等の最も重きを置くべきは寧ろ彼等の實力的闘爭に向つて妨害を加へて居る現行法の規定を改正することでなければならない。

此意味に於て先頃治安警察法第十七條及び第三十條の廢止を見、又此等の規定と趣旨を同じうする府縣諸命令の改廢を見るに至つたことは、小作法の制定によつて法律的保護に僅かの改善が加へられるよりも小作人にとつて遙に重要の意義をもつて居ると言はねばならない。

從つて又要綱提案の諸事項中でも、先に述べたるが如き個々の小作人の權利の實質的保護に關するものよりは、地主の法律による實力的闘爭に對抗すべき彼等の實力的闘爭手段を保護若くは制限する趣旨のものこそ、實際上彼等にとつて極めて重要の價値をもつて居ると言はねばならない。何故なれば、近來の如く地主が法律を武器として、土地立入禁止、立毛差押の如き實力的闘爭の手段を敢てする以上、之に對抗すべき防禦手段を制限せられ若くは許與せらるゝことは此際彼等の實質的利益に對して影響する所最も大なりと言はねばならないからである。

然らば、要綱の提議して居る諸事項中此點に關係ありと見るべきものは何であるか?

其中最も注目に値すべきものは言ふまでもなく、小作料の一部供託に依る立毛差押及立入禁止の制限に關する提案である。近時地主は小作人の實力的闘爭手段として最も有力なる小作料不納同盟に對抗する手段としてしきりに小作料請求の訴又は小作契約解除土地返還の訴を提起する。所が、元來小作人等が不納同盟によつて主張し爭つて居るのは、現在の小作契約を基礎として其解釋上彼等に小作料納付の義務なしとするの趣旨ではない。現在の契約から言へば彼等に義

務あること素より言ふを俟たない。彼等も亦勿論之を爭はむとするのではない。彼等が此際主として請求して居るものは現行契約の改正である。小作料の永久的減額である。而して此主張を貫く唯一有力なる手段として彼等の利用しつゝあるもの即ち現在の小作料不納同盟である。

元來個々の小作契約について言へば、小作料不納同盟は明かに債務の不履行である。それは同盟罷業が個々の勞働契約について言へば、債務不履行であるのと全然同一である。唯工業にあつては生産手段たる機械工場が資本家の占有にある關係上勞働者の利用し得べき最も有力な闘爭方法が集團的勞働拒否即ち同盟罷業の形をとるに反し、小作關係にあつては生産手段たる土地は爭議中も尙依然として小作人の手中にある關係上小作人は決して勞働の拒否によつて地主を苦しめる必要がない。否之を苦しめことが出來ないのである。何故なれば、彼等が土地を借りて居る以上事實之を利用して耕作を爲したると否とに拘らず小作料納付の義務は法律上毫も之によつて輕減せらるゝことがないからである。此故に、小作人によつて勞働の拒否は決して適當の闘爭方法ではない。嘗つて、農民運動者の或者は不耕作同盟によつて勞働拒否の手段を用ひたことがあるけれども、かくの如きは單に工業爭議に於ける勞働者の闘爭方法を形式的に眞似たゞけのことであつて、素より小作爭議には適當しなかつたのである。小作人は兎も角耕地の占有者である。現在の利用者である。彼等としては如何に小作料の請求を受けようとも又小作料不納を理由として返地を求められようとも、愈々訴訟により裁判によつて其事が決定し愈々强制執行によつて其請求が强行せらるるまでの間、事實小作料を納付せずして地主を苦しめれば足りる。さうして此實力的壓迫によつて地主を抑へ以て自己の主張を貫かむとするもの即ち現在の不納同盟である。從つて、同盟罷業を個別的に觀察して唯其處に債務不履行ありと考へるのが事態に適合して居ないのと同樣、不納同盟を目して其處に單なる個別的小作契約の不履行ありとするのも亦決して妥當ではない。若しも同盟罷業

について債務不履行の問題とは別に罷業權乃至罷業の自由の事が考へられるならば、同様の意義に於て小作人が不納同盟を武器として其主張を貫徹せむとすることも亦之を單なる債務不履行としてのみ觀察することは出來ないのである。

小作人の不納同盟に對する地主の攻擊方法は訴訟である。而して之に對する小作人唯一の防禦方法は訴訟の引延ばしである。訴訟を引延ばすことによつて小作料支拂乃至返地の時期を一日でも後らせることによつて地主を苦しめるのが彼等唯一の戰鬪手段である。

しかし、一度小作人が此手段をとるとき、地主も亦勿論無爲のまゝ訴訟の終結を待つて居る筈がない。於茲彼等のとるに至つた最後の手段が卽ち立毛假差押若くは假處分に依る土地立入禁止であつて、若しも之が有力且容赦なく行はれ得るならば不納同盟は其威力の大半を奪ひ去られるのである。

此故に、今日小作人の主として問題とすべきは此點であつて、要綱の提案して居る「供託に依る立毛差押及立入禁止の制限」は此意味に於て最も彼等にとつて意義ある條項なりと言はねばなるまい。元來立毛差押及立入禁止は地主最後の有力なる武器である。けれども、此武器の無遠慮なる使用は結局小作人をして全く窮地に陷らしめ、彼等が地主に對抗して之と小作交渉を行ふことを全く不可能なるに至らしめるものであるから、小作人が之に對抗する爲めあらゆる死力を盡して戰はむとするのは極めて自然であつて、木崎村事件其他各地の農村に起つた幾多の不祥事は蓋し此自然の歸結に外ならないのである。元來小作人は何等の理由なしに小作料の納付を拒否して居るのではない。地主との小作交渉の上彼等の主張を貫く一手段として之を行つて居るに過ぎない。して見れば、地主が彼等に臨むべき正々堂々の道は彼等に與ふるに取引交渉の自由を以てすることでなければならない。然るに、地主は一面之を與へずして從來其續け來りたる專權的命令の地位を保持せむとし、他面立入禁止乃至立毛差押の法律的武器によつて小作人を強壓し去らむとするので

ある。小作人が唯一最後の武器として暴力に赴かむとする蓋し當然の趨勢なりと言はねばならない。此故に、要綱は一面農村の平和を維持せむが爲め、他面は又小作人に向つて取引交渉の事實的手段を許し與ふるが爲めに、どうしても地主の手から此武器を奪はねばならない。少くとも其使用を制限せねばならないと考へたのである。けれども他の一方に向つて小作人等が不納同盟の繼續中小作料に充つべき米穀を賣却消費して、愈々事件が解決して之を納付すべき時が來ても、結局無資力の爲め事實終に之を納付せずに濟ませて仕舞ふやうな態度をとることは、素より之を禁止せねばならぬ。是れ要綱が小作料の供託を條件として立毛差押立入禁止を制限すべきことを提議した所以であつて、私は之を以て要綱の諸提案中最も重要なるものと考へるのである。

此故に、小作人が窮極の理想として彼等の實力に相應する公正なる法律的地位が法律上に確立せられ、之によつて敢て實力的鬪爭によらず平和に公正なる小作關係を樂しみ得べき日の來らむことを期待して居るのは素より正當であるけれども、過渡變遷の際殊に實際政治の勢力が主として資本家乃至地主の手中にある今日、彼等の實際的要求として此理想が直に完全に小作法中に實現せらるべきことを期待するのは極めて迂愚である。彼等にして若しも今日其實力に相應する最も適當なる立法を望むならば、一面實力鬪爭の時代尙當分存續すべきことを覺悟しつゝ其際彼等の使用し得べき武器の法律的保障を要求するのが最も時宜に適して居る。此意味に於て、私は小作人側の人々が要領を批評するについて「供託に依る立毛差押及立入禁止の制限」に關する提案に一層の注意を向けられむことを希望せざるを得ない。

然るに、今日までの所實際彼等の與へた批評は、殆どすべて小作權の法律的保護の不完全を攻擊することに集中して居る。かくの如きは小作人及び組合運動者が今日自ら利用し何べき最も適當且有力な鬪爭手段が今尙實力的鬪爭に外ならないことを忘れて居るものであつて、私の批評的態度として最も其當を得ずと爲す所のものである。

殊に、彼等は「債務不履行に因る解約」の條項中「惡意」の小作人に向つて法律的保障を與へざるの點に向つて極力非難の矛を向けて居るけれども、かくの如きは全く法律的鬪爭と實力的鬪爭とを混同した誤つた考に出發して居るものと言はねばならない。小作人が地主を壓服する實力的手段として小作料不納同盟を行つて居る場合に於ては既に初めから法律上契約の解除せられ返地の求めらるべきは覺悟して居るのである。而して團體の力により實力的各種の方策によつて事實上返地を爲すに至らずして而かも其要求を貫徹せむとするのが彼等の態度なのである。從つて、彼等の行爲が法律上にまでも解約返地の原因とならざることを希望し之を法規の上に實現せむとするが如きは彼等自らの特色とする團體的實力的鬪爭の本質を解せざるものであつて、私の最も不可なりとする所のものである。元來小作爭議は勞働爭議と同じく法律的裁判的解決に適せざるものである。初めより法律を超越した鬪爭であり鬪爭の解決方法である。從つて、彼等の主張が現在の法律上法律的に保護されて居ることは必ずしも必要ではない。否其保護がなければこそ實力的鬪爭によつて自ら其主張を貫かうとするのである。從つて彼等にとつて重要なるものは鬪爭方法である、鬪爭方法夫れ自身の法律的保障である。然るに、彼等批評の中心が此點に置かれずして、寧ち小作權の法律的保護の問題に集中されて居ることは、私の最も遺憾とする所である。

四

抑も勞働爭議に解釋的爭議と創設的乃至變更的爭議との區別あるが如く、小作爭議にも全然同樣の區別がある。同じく小作料の減免を爭點とする爭議の中でも、例へば凶作を理由とする一時的減免の爭議は兎も角現在の契約乃至慣行を認めつゝ之を基礎としてかはれる爭議である。之に反し、永久的減額を要求する爭議は初めから現在の契約を不當とす

るのである。從つて之が變更を要求し以て新なる小作條件を創設すべきことを希望する爭議である。而して現在不納同盟によつて戰はれつゝあるが如き多數の爭議は正に此種類のものである。

創設的爭議に於ける當事者双方の交涉懸引は性質上賣買取引に於ける賣主買主の懸引と同様のものである。賣主が最も良く賣らむが爲め買主が又最も有利に買はむが爲めに各法律上許され得るあらゆる手段及び其實力上利用し得べきあらゆる術策を盡して懸引交涉を行ふが如く、小作爭議の當事者も亦全く同様のことを行ふのである。唯小作契約借地借家契約勞働契約等の如き繼續的給付を目的とする契約にあつては――賣買の如き一回の給付を目的とする契約と異なつて――契約關係夫れ自身が同一性を維持して進行しつゝある間に契約條件變更の交涉が行はれる、從つて又其交涉に關する懸引方法が自ら現行契約の履行に影響を及ぼすに至ることがあり得ると言ふ差異があるに過ぎないのである。

果して然らば、今日の制度上賣主買主が如何なる契約を爲すかに付いては原則として之を當事者双方の交涉懸引に一任せざるを得ざると同様、地主と小作人とが如何なる契約を爲すかも亦法律を以て之を一律に決定し難い。現在の制度はすべて之を當事者の交涉懸引に一任して居るのである。

從つて、國家が此種の取引に臨むべき態度の根本は當事者双方に向つて交涉懸引の自由を平等公平に保證することに置かれねばならない。若しも當事者の一方が法律上不當に餘分の懸引手段を許されて居るならば、或は之を制限するか又或は相手方に向つても同様の手段を許すことによつて、平等的交涉を可能ならしむべく努力せねばならぬ。又當事者の使用する闘爭手段が――例へば國際間の戰爭に於ける戰闘手段として毒瓦斯を使用し無防禦都市を砲撃する等不當の戰法を用ふるが如く――暴力詐欺其他一般法の原則上許すべからざる不公正のものであるならば、國家はよろしく之を制限すべきである。而して、小作爭議に對する國家の立法的態度も亦これでなければならないと私は確信するのである。

要之、國家も亦唯其力を爲し得るだけのことを爲し得るに過ぎない。地主小作人間の爭議と雖も其個人的なるもの解釋的なるものは能く之を法律的に解決することが出來る。之に反して集團なるもの創設的なるもの實力的なるものは夫れ最自身早國家的法律を以て規則正しく裁判解決するに適せざるものである。國家は唯爭議に於ける鬪爭手段を制限することが出來るけれども、爭議そのものを法律的に裁判することを得ないのである。

元來小作法要綱の中には、個人的小作關係を法律的に規律せむとする條項と集團的爭議の鬪爭方法を規律制限せむとする條項とが併び含まれて居るのである。而して二者の間には上述の如き極めて密接なる相互的關係が存在するのであつて、要綱の批評者が此點に注目することは絕對的に必要である。然るに從來要綱に向つて批評を加へて居る人々は、地主側の人々も又小作人側の人々も、充分此點を意識して居るやうに思はれない。其結果、彼等は唯要綱を批評して居る。而かも其批評によつて具體的に何物を得むとして居るのかを知ることが出來ない。かくの如きは學者の理論的批評としてならば兎も角直接利害關係を有する當事者の批評として甚だ其當を得ざるものなりと言はねばならない。

五

勿論、更に一步を進めるならば、現在の集團的實力的鬪爭を平和化し合理化すべき途を考へることは、小作人の個別的權利保護を完備し又彼等の集團的實力的鬪爭の手段に向つて法律的保護を與へることよりも更に一層必要である。何故なれば、小作人の團結的傾向は彼等の覺醒と共に來るべき自然の現象であつて之を如何ともすることが出來ない。而して苟も團結する以上單に其鬪爭的方面にのみ留意することなく、其平和的協約的職能にも注目して之を法律的に規律することを考へるのが、事の自然に逆はずして而かも小作問題の合理化解決に導くべき唯一の方策だからである。此意

味に於て、小作組合の公認及び小作協約の法律的整理を企てることは新時代の小作法として最も力を致さねばならない事柄である。

従つて、要綱が少しも此點に手をつけずして僅に協調組合の變態たる「小作委員會」の提案をして居るに過ぎないことは、實は外部から最も激しい批評を受けて然るべき點なのである。然るに、今日一般の批評が未だ此點に及んで居ないことは私の最も遺憾とする所であつて、今後各方面の研究が此問題に向はむことを私は切に希望する次第である。

人間的教養

阿部次郎

この一篇は今年の夏、山形市教育會でした講演「藝術の教育的意義」の一節に多少の訂正を加へたものである。私が其處で企てたところは。社會に對する新しい提唱でもなく、研究の結果の發表でもなく、たゞ從來自分の考へてゐることを繰返して、出來るだけ砕いて、通俗化して、實際教育の任に當つてゐる人々の參考に供しようとすること（これも亦學者の任務の一つであると私は信じてゐる）に過ぎなかつた。從つてこれは本來『改造』のやうな雜誌で公表すべき性質のものではない。併しこの講演筆記は不日改造社から出版せらるべき私の講演集の一部分として收錄せらるべき豫定になつてゐたために、同社の側からその見本を雜誌に出して置きたいといふ希望が出た。これを『改造』に出すのは不適當であるといふ私の意見は依然として變らないが、不適當といふのは不都合といふほどの强い意味でないとすれば、頑固に自分の意見を云ひ張つて同社の營業上の必要を妨げるほどのこともないであらう。こんな考から、二三の押問答の末遂にその希望に任せることにしたのである。讀者の迷惑を慮つて最初にこれだけの斷りを附記して置く（大正十五年十二月十日）

完き人

我々が他人を教育すると、自分自身を育てると、その孰れをとるかの區別なしに、凡そ我々が教養を求める目的は何であるか。このことについては餘りやかましいことをいふ必要はない。それを云つても結局は同じ所に歸つて來るであらう。それは本當の人間になることであるといつて置けば大して差支はないのである。問題は寧ろその先に、凡そ本當の人間になるとはどういふことであるかといふ點にある。本當の人間といふ言葉を私は茲に完き人といふ名稱に置きかへる、凡そその完き人となるとはどういふ意味であるか、完き人となるには吾々はどういふ條件を充さなければならないか、吾々の考察は此處から出發する。固より完き人といふ言葉は、倫理學史や哲學史の教科書を卒讀した人に、一種の臭味を感じさせるであらう。彼等はこれによつて直ちにライプニッツの哲學の完全説と名けられるものを想起するであらう、さうしてカントによつて既に征服された時代遲れの考へ方として輕くこれを「見て過ぎる」であらう。私はそれを知らないのではない。併し一體に何とか學史とか、現代の哲學とかいふやうな書物は何であるか、それは極めて多くの場合、ほんの手引、ほんの地圖の類に過ぎない、而かも大多數は可なり不正確な地圖の程度以上に信用することが出來ないのである。さうして本當にその人の思想を知らうとする者は、やはり草鞋を履いてその人の著書を踏破しなければ駄目である。特にライプニッツの哲學には、カント以後に發見された重要な草稿（例へば河野與一君の譯した「形而上學叙説」があり、西洋に於いても日本に於いてもそれはまた繰返して新しく研究されつゝあるところである。これを簡單に片付けてしまふのは、彼自身が寧ろ時勢後れの部に屬するであらう。固より私はライプニッツの説をそのまゝ受繼いで「完き人」を説かうとするのではない、私自身がこの言葉に如何なる意味を附するかは、先になつておのづから明かになるであらう。たゞそれが、解釋のしやうによつては、カントの思想に或程度の訂正を要求する結果を豫想してゐることは、茲に一言して置かなければならぬ。

カントの思想は倫理學史上、普通に形式主義といはれて居る。カントの形式主義とは何であるか。それは固より精神を無視し、現實との交渉に無關心であるといふ意味に於て形式的なのではない。それは寧ろ精神を重んずるが故に形式的であり、現實に對して徹底的な要求を提出すべき普遍的根據を求むるが故に形式的なのである。彼にとつては、認識の場合に於けるが如く倫理の世界に於いても、理性が最後の立法者である。

吾々は理性の立法によつて慾望の內容を統一し整理する、この意味に於いて理性の法則は無上絕對である。この理性の法則が我々の心の生活に形式を與へ、關係を定め、一つ〱の要素の價値を決定する――此の如く關係を定める原理として理性を立てるところに彼の倫理思想の形式主義があるのである。さうしてこの根本見地によつて人格の概念に明確な意味を與へ得たところに、倫理學史上カントの特殊なる功績がある。併しカントが如何に「善」と「完全」との差別を力說するにせよ、それは「完き人」の理想を無意味にすることは出來ない。寧ろ彼は、人格として完き人になれといふことによつて、この概念に從來以上明確な內容を與へたものと見らるべきである。さうして人格として完き人になるとは完全に理性の立法に從ふことを意味する。實踐理性の斷言的命令に從ふことは人格として完き人になる所以である。カントはその著書の中に、人類（メンシハイト）とか、人間性（メンシユリヒカイト）とかいふ言葉を使用して居る場合も決してないことはないが、彼が特に注意して愛用して居る言葉は理性者（die vernünftigen Wesen）である。完き人になれとは、感覺的な人間として完き人になれといふ意味でもなく、總て自己の中にあるものはその內容の價値の區別なしにこれを完くせよといふ意味でもなく、理性者として完き人になれといふ意味でなければならぬ。固よりこの意味の「完全」觀がライプニツツになかつたかどうかは、哲學史上の問題として公平にして愼重な考慮を要する。例へば前述せる「形而上學叙說」の末節、宇宙に於ける理性的精神の特殊な意義を說くあたりは、殆んど既にカントを豫想する趣があると云つてよから

う。併しそれにも拘らず、倫理思想に於ける形式主義の代表者を求むるとき、吾々がその先輩と區別してカントを擧げることは依然として正當を失はないであらう。たゞカントにあつて、吾々がこの場合特に考へて置かなければならないのは、彼の所謂斷言的命令が人格の形式、換言すれば人間の中にある欲望と欲望との關係に適用するのみで、人格の一つ〳〵の內容には適用しないかどうかにある。カントの哲學に於ては、人も知る如く感性と理性とを隨分深刻に對立させ、さうして感性が理性に絕對に服從することを要求して居る。然らばカントの倫理に於て感性はどういふ位地を占めるか、それは、少くとも倫理的價値の世界に於いては、たゞ理性に追隨し屈從する義務を持つに過ぎないであらうか。所謂カントの嚴肅主義（リゴリズム）は、この點に於いて特に藝術家の反抗を招くべき因緣を持つてゐた。蓋し藝術家はその精神に體驗を感覺的形式を通じて表現する先天的約束を持つものとして感性の積極的（又倫理的）意義を或程度に認めて行かなければ滿足が出來ないからである。カントの後に詩人シラーが、カントの影響を極度に受けながら、而も猶あまり、峻別された（と彼が考へた）感性と理性との對立を和げて、藝術によつて兩者の調和を計らうとしたのも亦この點の不滿に基くのである。シラーがカントを補はうとした點は果して實際カントの缺點であるか。カントはシラーに補はれなければならぬほど感性の意義を認めて居なかつたか、又假りにカントにこの欠點があるにしても、シラーは果して論理上正當にこれが補足を實現することが出來たか、それは大なる問題である。併しこの問題は孰れに結着するにせよ、兎に角人格として完き人になるために感性の價値をどれだけ認めるか、これをもつと根本的におしつめて行けば、人格の概念そのものを形式的にのみ考へるか、若くは猶具體的に內容を容れて考へるかは、「完き人」の概念を明かにする上に於いて、從つて又凡そ我々が人生を考へる考へ方に於いて、重大な岐路の上にあるものと云はなければならぬ。リツプスの倫理學は、全體としてカントに從ふことの著しいものであるが、假りにカントをこの點に於いても純粹の形式主義

者であるを解すれば、リップスはこの問題については少しくカントから離れて居ると見なければならないであらう。リップスの考へた完全な人、理想的な人とはどういふものであるか。一々の動機欲望が充分な力を有つて居るといふのが一つの條件である。その人の有つ種々の動機が充分に豐富になつて居るといふのがもう一つの條件である。さうしてこのやうに充分の力を持ち充分に豐富になつてゐる動機が――換言すれば人格の諸内容が――一つの統一として總括されて居るといふのが最後の條件である。故に此處で要求されるものは、人格の與へられた内容が理性によつて統一されることのみではない、統一さるべき内容がそれ〳〵に充分に力強く豐かなものとなることも亦完き人となるための缺くべからざる條件となつてゐるのである。この考へ方に從へば、感性も亦理性の統一に從ふことのみを義務とすべきではない、それはそれ自身を充分力強く、豐かに伸ばして行く義務をも持つてゐるのである。さうしてその無限に伸び行く力と豐かさとを擧げて最後に理性の統一に服せなければならないのである。感性を――凡そ汝の人格内容を――强め、伸ばし、增せ。これも亦人格として完全になるために、理性が、吾々に下す命令の一つである。かう考へることを許されなければ、人格として、理性者として、完き人となれといふ理想の意義は完成しない。この意味を砕いて理解して貰ふために、私は玆に一つの譬喩を設ける。今玆に一つの苗床がある。その苗床には六本の苗が植ゑてあるとする。それが假りに人間を代表するとする。この六本の苗は、リップスの倫理でいへば、人間の中にある諸の動機の（諸の人格内容の）代表者である。あらゆる意欲や動機はこの六つによつて完全に代表されると假定するのである。そのとき、理性者の意味を形式的（關係的）のみに解釋すれば、吾々は完全な人となるためには、この六本の苗の植ゑ方、並べ方を理性に從つてすればよい、與へられたものを理性的に支配するといふことが人格として完全を求める唯一の道である。併し人格の意味をリップス流に考へるとき、吾々が完き人となるためには、この植ゑ方を理性の支配の下に置くだけでは

未だ足りない、彼の所謂理性は、同時に、この苗床にある一本の苗をも枯らすことなく、その一本〳〵の苗が伸び得る限り伸び繁るやうにすることをも亦要求するのである。固よりそれは無闇に一々の苗を繁らせればよいといふのではない、一つの苗の專横な繁茂は他の苗の凋萎や枯死を誘ふことも決して少しとしない、この間の關係を理性の支配の下に置くことによつて全體の繁榮を完くするのが理性者が理性者として完くなる所以である。

完き人の概念をかう考へるのはカントと矛盾するか、それはカントを離れて或意味に於いてライプニツツに復歸することになるか。私は前に「解釋のしやうによつては、カントの思想に或程度の訂正を要求する結果を豫想とする」と云つたが、これを訂正と認めるやうなカント解釋は果して正しいものと云ふことが出來るか。今この問題に深入するのは固より無用の道草である。私はたゞ、理性の概念を自ら自已の內容を生產し行く統一原理と解することによつて、從つて理性を關係原理とのみ見ずして創造原理と解することによつて、カント哲學はこの困難から脫却する可能性を持つてゐることと、リツプスが續いてゐる理想的人格の三要件はこの原理の現象的敷演としてそのまゝこれと調和させることが出來ることとを示唆するに止める。さうしてこの意味に於いてリツプスに贊意を表して自分の立場を定める。

要するに、完き人となるとは、我々の中に與へられたものを理性によつて充分に支配して、心の欲する所に從つて、矩を越へぬ人間になることのみでは足りない。心の欲する所そのものが力強く豐富な人間に我々はならなければならない、人格の秩序のみならず又その內容をも含めて、我々は人間として完くならなければならないのである。

併し完き人の概念を上に述べたやうに解釋することは、一つの重大な實踐的危險を含んでゐる。完き人になるとは、萬藝に通じて多能多才の人になることを意味してゐるか。あらゆる學問を學びあらゆる藝能を習得することが、完き人となるための必要缺くべからざる道であるか。事もなげに吾々の說を受取る人は知らず識らずこの迷路に陷ることを

け得ないであらう。それだけにこの誤解は特別な警戒を加へられなければならぬ。完き人となるの本道は決して此處にあるのではないのである。この事を明かにするために、私は茲に知識といふものの意義に就て一言して置きたい。知識とは何であるか。知識は一種の「財」である。學問の研究には米を作つたり、箱を拵へたりするのと通じた一面がある。我々の努力と活動とが財の生産に向けられる點に於いて相通じてゐるのである。指物師の働きは、生産された多くの箱としてあらはれる。學者の讀書研究は自然や人生に對する知識の集積として文化財を豐かにする。それは數學教科書の內容になり、物理學教科書の內容になり、又心理學教科書の內容になつて、人の使用を待つてゐるのである。恰も箱屋が箱を作つて積重ねると同じく、學者は學問箱を積重ねて行くのである。あらゆる知識を獲得するとは結局その積上げた學問箱を自己のものとして占有するといふことでなくて何であらう。若しこの占有の多さが、吾々の人としての完さを決定するとすれば──我々が完き人になる爲には先祖代々幾千年間貯蓄して來た知識の財寶を悉く所有しなければならないとすれば、完き人になるといふ理想は、單に絶望であるのみならず、又それは苦勞で、うるさく、少くとも私のやうなものには決して望ましい道ではないのである。この場合考へなければならぬのは、一體このやうにして作られた箱屋の箱は──若くは學者の學問箱は、何の爲めになるかといふ問題である。箱屋の場合に於いては、彼は如何に箱の上に箱を積重ねても、これを買ふ人がなければ箱を作りつゝ餓死しなければならぬ。箱屋は箱を買ふ人を豫想する。さうしてその代價によつて自分の欲しいものを購求する。かくすることによつて彼の製作した箱は始めて社會と自己とにとつて意義あるものとなるのである。この事情は學術上の財寶に於いても同樣である。認識の蓄積がたゞ暗記を强うるのみに止るならば、それは畢竟受驗生いじめの頭痛の種となるに過ぎないであらう。學問財が我々にとつて願はしいのは、その學問財を使つて、人間が自然を征服するところにある。我々の理性は飽くことなき、征服欲を以て自己を世

界の全體に擴充しようとする。この努力の途中に生れ、この努力を突通すべき手段として、それは始めて人生の間に意義ある地歩を占めるのである。凡て縮でも學問でも、それは我々の生活の中から生れて、生活の外へ飛出すものであつてはならない、それはもう一度生活の中へ歸ることによつて、生活を全體として押進める力になつて來なければならぬ。かういふ力になることによつて知識は始めて我々に必要なものになるのである。故に完き人となる理想にとつては、文化財の所有や蓄積よりも、寧ろこれを消化し活用する能力の方が遙かに根本的である。我々の心が我々を取卷く社會や自然や宇宙といふものゝ意味を理解して、その理解し得た意味に從つて宇宙や社會や自然の間に生きて行くとき、我々は迂儒死學者とは較べものにならないほど、「完き人」に近い道を歩いてゐるのである。固よりかういふのは、正當な位置を指定された學問財の人生に於ける意義を否定しようとするのではない。それは學問財を生活の外に積出さずにこれをもう一度生活の中に採容れて生きて行くためにも、我々の知識はやはり出來るだけ廣い方がよいからである。例へば私が花といふ自然な微妙なものと心を打開いて生活を共にしようとすれば、花を知るといふ必要が私に起つて來る。さうして花を知る道には色々あつても、植物學者のやうに花を研究して、植物學的に花を認識するといふことも亦、我々の花と親しくなる一つの道に相違ないのである。我々はこの意味に於いて、詩人ゲーテが自然科學に熱中した心持を理解することが出來る。それが藝術家として暇つぶしであるといふのは、愛が知を導き、知が愛を深くする趣を知らぬ者の言葉である。自然科學の研究によつて自然の全體に對するゲーテの親しみと洞察とが如何に深くなつたか、さうしてこの深さが彼の人物と世界觀とに影響して結局彼の製作の價値を如何に高めたか、この間の消息はこの人の研究を試みるほどの者は、誰でも認めずにはゐられぬところである。正しき知識の所待は——わけても正しき知識の追求は、人間に深みを與へる。たゞこの場合繰返して記憶して置くことを要するのは、此等の知識はその人の生活に沁

み込むことによつて、始めて我々を完き人に近づけるといふことである。巧妙なる知識蒐集の技師は、如何にその生産量の夥多を以てするも、たゞそれだけでは、人間としての完さに接近することが出來ない。自然科學者の人間的偉大は、彼の探究が自然に對する愛と敬虔とに導かれて更にこれを深くするところにある。それは指物師の人間的價値が、彼の巧藝に對する愛と熟錬とにあつて、積みあげた箱の高さによつて決定されることが出來ぬと同樣である。今日の自然科學者は、自分の仕事の人間的意義について、恐らくはもつと謙遜に反省する必要があるであらう。

然らば、正しく理解された意味に於いて自然科學を——若くは凡そ何かの學術を、深く研究することは、完き人となるために必ず通らなければならぬ道であるか。我々は、人間らしい人間となるためには、ゲーテの先蹤に從つて殆んど自然科學のあらゆる方面に研究の手を廣げる必要があるか。ゲーテの通つた道は總ての人に共通の道であるか。我々が人として完くなるためには、宇宙と人生との親しみの深さを必要とする以上、さうしてゲーテのやうな自然研究がその人の生活に特別な深さを與へるといふ事實を承認する以上、我々がこの道を閑却するとき、我々の完さには少くともこの點に於いて缺けるところあることは認めなければならぬ。併し孰れの道をとるも完さに到る道は無窮である。完きに到る道の選擇に於いて實踐上我々に最も切實な問題は、如何なる道を踏み初むべきかにある。さうして問題の重心を此處に置くとき、我々は安んじてゲーテの道は凡ての人に共通の道ではないといふことが出來る。凡そ完き人を目標とするほどの者は、必ずその生活に集中すべき一點を持つて居なければならぬ。而も如何なる點に集中すべきかは人によつて當然に相違しなければならぬ。それは我々の目標とするところは普遍であるが、人間的教養に於いて我々が求むるものは、自己を離れて普遍を立することではなくて、自ら普遍を身に體することであるからである。身を以て完き人に近づかうとする努力を外にして人間的教養はあり得ないからである。然るに出發點になる自己はお互の顏が違つてゐるよ

うに違つて居るのである。從つて普遍的の理想を實現するためには、總ての人が自己にふさはしい道を採つて行かなければならぬ。目標の一と、各自の立場の相違とは、各自の行くべき道の殊別を當然にする。例へばAは七十五度の角度を以て目標に向ふことが當然であるならば、Aと居所を異にするBやCは、Aと同一角度をとつて進行するとき、必然にその目標を逸れた到着點を持たなければならぬ。BやCにAと等しき七十五度の角度を强ひるのは人を誤るものである。この意味に於いて總ての人には夫々の道がある。我々が他人に對して云ひ得ることは、自分の目標はこゝにあるといふことと、自分は七十五度の角度を以て進みつゝあるといふこととのみである。これを理由として君も亦七十五度の角を描きつゝ進めといふのは僭越である。君は君自身に適當なる角度を發見せよと云ふこそ本當の親切である。さうして後に行く者は、先輩の進路を參考として自分自身の進路を測定するところに、彼が眞正に先輩に學ぶ所以がある。ゲーテはその溢れるばかりに豐かな天分によつて始めてあのやうな道を行くことが出來た。併し貧弱な我々が直ちにこれを學ぶのは鵜の眞似する烏である。而もこのゲーテでさへその晩年に於いては諦め（Entsagung）といふことを說かなければならなかつた。これは他の場合にも云つたことであるが、彼の諦めとは、世の中はかうしたものである、凡ての努力は空の空であるといふのではない。總てのことを悉くやらうとすれば結局何事も遂げることが出來ぬ、見極めをつけて捨つべきものを捨て、集中して勇敢に現實に生きよといふのである。此處に於いて捨てるといふことが、完き人に近づく道に於いても亦必要になる。何を捨つべきか、如何に捨つべきか、自己の個性に最もふさはしき捨て方を發見することは、眞正の生活術（レーベンスクンスト）にとつて極めて必要なことであり、又極めて困難なことである。捨離の術を知らぬ者の生活は遂に醉ひどれの千鳥足に了らざるを得ないであらう。凡そ諦めと捨離との必要は、苟も彼が一生を流蕩の間に送らずに完き人に近づくことを念願とする限り、個性の貧しき者ほど益々痛切を加へる。併し人といふ人が凡てこの限界を脫れ難いこ

とは、恐らく世界に於いて最も豐かに惠まれた者の一人なるゲーテさへ、その晩年に於いて壓搾された生活智(レトベンスワイスハイト)として諦めの教へを宣べなければならなかつたことによつても明かである。既にゲーテすらさうであるとすれば、我々のやうなものがゲーテの眞似をするとき、我々の生活が如何に千鳥足になつてしまふであらうか、深省を要するといはなければならぬ。完き人に近づく最も緊要な道は、萬能に通ずる人となることでないのは云ふまでもなく、又正しき認識を求むることによつてゲーテ的海濶に接近することでもない、それは寧ろ集中して一つのことをなし得る人間となること、その一つのことに自分の生活の全體をかけて、これと共に生死するほどに燃燒することである。「余はあまりに多くの德を持つことを冀はぬ者を愛する。一つの德は二つの德よりも更に德である。蓋しそれこそ運命の繫る結目となることが多いからである。」……「余は負傷にあたつてもその魂の深きものを、又一つの小さき體驗によりても沒落し得る者を愛する。かくて彼は喜んで橋の彼方に越えて行くのである」(ツアラツストラ如是說)。此處に人間的教養の最も中心的なところがある。これこそ完き人に到る道の脊骨である。固よりかういふのは、これさへあれば澤山であるといふのではない、この點を取り外すときその他のことは何の役にも立たないといふのである。我々が先づ明確にこの一點を把握すれば、その他のことは生活の進行につれておのづから與へられ、開かれ、流れ出でるであらう。

二、完き行爲

我々が完き人になるために、最初に把握しなければならぬ點は既に明かになつた。この把握の手をゆるめずに、完き人といふ普遍的目標に向つて努力して行くとき、何よりも先に必要なのは、自分の生活の方向を取失はぬことである。我々の生活を、小にせよ大にせよ、兎に角流れやまぬ川のやうに考へることを許されるならば、我々に取つて最も重要

な問題はその川の流れて行く方向である。さうして我々が我々の意志と努力とを以てある方向に動いて行くことを、私は總て廣い意味に於て行爲と名づける。この行爲の中には、全體の流れ方も含まれ、また全體として流れて行く間に我我の通過する一々の動き方も亦入つて來るのである。この廣い意味の行爲のうち、卓上のコツプを取上げるとか、友人をなぐるとか、人に親切にするとかいふやうな行爲は、特に外面的行爲、若くは外表的行爲と名けて、區別して置くことを便利とするであらう。今行爲を私が述べたやうに解釋するとき、あることを考へるのはやはり人格の一つの行爲である。あることを感ずるといふのも人格の一つの行爲である。さうしてあることを欲するといふのも亦一つの人格的行爲に相違ないのである。行爲の意義をこの意味に解するとき、完き人になるためには、我々は我々の行爲を完きものにしなければならない。我々が一つの點から他の點に進行するにはどうしても動いて行くより外に道がないからである。動き方が惡いとき我々の生活は目標をそれる。動き方の如何は、我々が完き人になる爲には、充分に重んじなければならないところである。この事は外部的の行爲に就いても十分の重さに於いて通用する。我々は先づ外部的行爲の重さについて明瞭な意識を持つてゐなければならない。この重さは客觀的方面と主觀的方面と、二樣に分けて考へることを必要とするであらう。客觀的の方面からいへば、我々の外部的行爲は、社會と自然との中に或るかりそめならぬ變化を喚起する。例へば私が殺人といふ外部的行爲を行ふとき、一度殺された人はもう生きかへることが出來ない、それは殺されろ人と社會にとつて固より非常な事件である。又此處に處女を誘拐する者があれば、その行爲は彼の意志の問題として充分に批評を受けなければならぬのみならず、誘拐された女の、心身の一切を獻げて純粹に一人の男に屬するといふ、恐らくは女にとつて最も重大な幸福は永久に破壞されるのである。さうしてサヺナローラが宗敎的狂熱に任せて世俗的題材を取扱へる繪畫を火中すれば、レオナルドの傑作もボツチチエルリの逸品もその時以來この世から姿を消してし

まふのである。この意味に於いて、外部的行爲は、單純な思考や意欲以上に重大な責任を持つてゐることを覺悟しなければならぬ。さうして主觀的にこれを云へば、それが一旦決意となつて外部的發表の形をとるところに、行爲者の人格を表現する特異の重さがある。固より、ゲーテもいつて居るやうに、我々が若し心の中に浮んで來ることをその儘に放置するならば我々は如何に恐ろしい惡魔となるかも知れないであらう。實際は如何に正しい人と雖も心の中には隨分暗黑な邪惡なことを多く思ひ浮べるであらう。併しこの妄念に反省を加へてこれを行爲に現すことを抑制するかしないか、この行動の關所を守るところに、特に人格の良否があらはれる。邪惡なる內心の衝動を否定することは、單に結果の害惡を避くる意味に於いて賞賛せらるべきのみならず、又彼が充分に自己を支配する點に於いて、その人格の强みを表示する。此間にあらはるゝ人格の價値を理解することを知らぬものは、凡そ人間を評價する着眼點を持たぬものと云はれても仕方がないのである。故に惡事を行へる者が、他人に對して、汝も亦內密に余と同一事を願つたことがあるであらう。故に汝は取濟した顏をして余を非難する資格がないといふのは、恥知らずの甚しきものと云はなければならぬ。彼が特に責められなければならぬ點は、これを思つたことではなくてこの思ひを支配する力がなかつたといふところにあるからである。彼の人格は、單に邪惡の思ひを懷くほど惡に染みてゐるのみではなく、更に決意の關を踏み破つてかりそめならぬ世界に働きかけるほどに腐つてゐるのである。

外部的行爲にはこれほどに重大な意味が籠つてゐる。併し外部的行爲の意義を充分に認めながらも、なほ云はなければならないのは、外部的行爲のみが行爲ではない、外部的行爲の正しさのみが我々を完全に正しいものにすることは出來ないといふことである。「完き人」の理想に近づくには、人格全體の積極的行動が必要である。心をつくし、心ばえをつくして善を求めることが必要である。生活の全體を貫く根本的行爲がその方向をあやまるとき、個々の行動の正し

さが、我々を完きものにあるために、どれだけの力を時つことが出來よう。塵埃とまじつて流れて行く紅葉は到底川の流れを逆にすることを得ないのである。故に行爲に關する人間的教養は、生活の流れを全體として正しくすることを第一義としなければならぬ。

この間の消息を明かにするためにたゞ一例をとらう。人も知る如くアナトールフランスの小説にタイスといふのがある。著者は奢澤にして淫蕩の生活を送つて來た遊女タイスと、禁欲的にして嚴格なる一僧とを對照する。タイスはその放埒な生活に於いても心の純眞を失はない。これに反して禁欲僧は戒律を守つてその欲を禁ずれば禁ずるほど罪に對する欲望が益々成長して遂に悲慘の死を遂げる。タイスの不行跡はその魂を滅ぼすにはいたらなかつた。僧はその禁欲の行を功績として自ら誇るが故に、一生の苦行も遂に墮獄の罪となつてをはるのである。魂の素直さと純潔とを汚す行爲は不行跡よりもその罪が重い。人としての完さを目標とする者にとつて、このやうな價値の轉換は、決して奇矯を好むもの〻惡戲とのみ見ることが出來ないのである。

(この點については特に、拙著「人格主義」中「人格主義、戒律主義、主觀主義」の章を參照せられんことを希望する)。

三、完き心情

ジンメルはその「ゲーテ」の中で、本當にその人から出で、又その人に歸つて行く仕事とさうでないものとの區別を說いてゐる。一體に我々のする仕事であり確かに私がしたに相違ない仕事であつても、その中には、それが私の仕事である場合と、私の仕事でない場合——若くは私の仕事として意味が少ない場合とがあることは注意して置かなければならぬ。私が睡中に手を延ばして枕頭の土瓶をひつくりかへしたとすれば、この土瓶をひつくりかへした事は私の仕事には

違ひないが、それが私の仕事と呼ばるべき意味は極めて少い、其處には私自身の感情も意欲も決斷も働いてゐないからである。凡て自分の心を使はずに機械的に外部的にした仕事は自分の手や足を動かしたといふ意味で自分に屬するだけで、人間の心の底から動いて創り出したものではないから本當に自分の仕事としての意味を持つてゐないのである。故に私が私の仕事をするといふことは、一方からいへば、苟くも私の手足を動かす限り、總ての場合を通ずる既定の事實であるが、一方からいへば、又實現の非常にむづかしい理想である。自分の心の底から出て、自分自身の仕事や自分自身の行爲をすることは決して簡單なことではないのである。行爲の善惡は暫く論外に置いても、凡そ自分の行爲をするといふことが既に困難にして修養を要する課題である。うかうかしてゐる者は、本當の意味で善惡の批判を受くべき自分自身の行爲を持ち得ぬもの、從つて凡そ生活を持たぬものと云はれなければならぬ。充ちたる心の底から湧き出でた行爲こそ始めて我々自身の行爲である。先づ行爲し得るものとなれ。これは正しく行爲せよといふ言葉の、もう一つ前に來る理性の要求である。さうして行爲し得るものとなるとは、心情と行爲との間に端的な繫りをつくること、行爲をその心情の全き象徴とすることを意味する。我々は凡そ生きるために、從つて又正しく生きて完き人の理想に近づくために、常に我々の心情を教養して置かなければならぬ。この意味に於いて人間的教養とは即ち心情の教養である。

一例を日本の文學にとる。門弟の傳へるところによれば芭蕉の俳諧では地を調へよといふことを説いて居るやうである。あの人には地が出來て居るとか出來ないとかいふその地である。又この着物は柄はよいが地が惡いといふときのあの地と通ふところがある。地を整へることによつて始めて造化自然と遊ぶ俳諧の修業に參加することが出來るのである。併しそのことは決して俳諧の修業にのみ限つたことではない、寧ろこの言葉自身が既に俳諧の根柢をなす人間的教

養を力說するものと見ることが出來るであらう。我々が正しい行爲を通して完き人に近づき行くためには、常に心を盡して、心の地を養つて置かなければならぬ。心の地を養養ふことは、私の考へるところによれば、教養のうちでも最も根本的な教養に當るのである。心の地が出來て居らぬとき、我々は自分の生活を全體として正しき方向に向けることが出來ぬのみではない、又個々の外部的行爲を決定する場合に始終迷つたりまごついたりしなければならぬのである。何故にさういふことになるか。我々の外部的行爲を要求する問題や事件は、我々に準備の餘地を與へぬ即題の試驗であるからである。平生の地が出來て居ない者は正しくこれに應じて行くことが出來ないからである。玆に於いて私は昔から我我の間に傳つてゐる「臨機應變」といふ言葉を想起する。臨機應變の意味が墮落して、心の誠との連絡を失ひ、たゞその場の都合がよいやうに誤魔化して行くことを意味するに過ぎないならば、固よりそれは極めて卑しいことである。それは今日の政治家が正當に（或る場合には不當に）非難されてゐるオツポーチユニズムのモツトーとなるに過ぎないであらう。併し言葉の正當な意味に於いては、臨機應變は固よりその基礎として心の誠を豫想する。それは教養された心の地によつて突發する機變に應じ、それを心の誠が眞摯に要求する方向に導き行くことを意味する。我々はこの意味に於いて臨機應變に、つき當つて來る問題を裁いて行かなければならぬのである。心の誠に立脚する臨機應變の働きを有つて居ないのは我々の缺點に違ひないのである。人は時として、半ば憐み半ば尊敬する意味に於いて「頑固」といふ批評を受ける。臨機應變の靈活に反對するものとして「頑固」は人間の惡癖である。然らば頑固の惡癖を矯正して臨機應變の處置を採り得るために我々には平生如何なる心がけが必要であるか。それは心を細かにして心の地を養つて置くことである。この準備を怠つて心田を荒るゝに任ずる者には、正しい意味に於て臨機應變の急に應ずることが出來ない。去來抄の「先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席にのぞんでは氣鋒を以て吐くべし、心頭に落すべからずと也」といふ

言葉をも參照すべきである。私は「發して中に當る」といふ言葉をも亦この意味に解釋する。さうして我々の祖先は心の地を養ふ點について、隨分眞面目な努力を重ね、又心の地を養ふ必要を充分に認めて居たのである。前にあげた焦門俳諧の教の如きも、我々の祖先全體が生活に對する態度の現はれと見なければならぬ。これを弊履の如くに捨去つて、心の地を養ふことを忘れ、たゞ役に立つ人や氣分の人などの製造を專らにするのは日本人の墮落である。それは我々日本人の生活が少くとも差當り棄されてゐる兆候と見なければならぬ。實際、政治上社會上の現狀を見れば、目標のみを見て基本を忘るゝ考へ方、のめるやうに前に驅け出すのみで腹の中に貯へることを輕視する思想が我々の生活を浮薄にしてゐることは爭ひ難い。長い目で見れば、さういふ器用な人間を造るよりも心の地の出來た人を拵へて置く方が、單に實用上の見地だけから云つても結局有効ではないであらうか。私はこの點に就いて特に教育者の愼重な考慮を希望したい。

然らば心の地を養ふとはどういふことであるか。それは一面に於ては、勿論我々の理性を以て突當つて來る事件乃至問題を正しく裁いて行くことが出來るやうに心の中心點、統一點を押へて行くことである。腰の据ゑ處、腹の置き所をとりちがへぬやうに心を修練することである。東洋流の修養に於てはこの點が特に力の入れどころとなつてゐた。さうしてこれが最も中心的な最後の點であることは疑ひを容れないであらう。併し十全を求めれば、心の地を養ふことは本當はそれだけでは足りないのである。そのためには、我々は昔からの修養法を新しく補ひ、若くは昔からあるところの芽をもつと充分に伸ばして花を開かせなければならぬ。補定を要する點は特に心の內容を豐かにするところにある。我我の心の中に社會や、世界や、人生を取容れ、これを咀嚼し消化して、その心を沃田のやうに富まして置かなければならぬ。この心がけを缺くとき、我々の生活は流動を失ひ、我々の心は常に頑固に墮するの危險に瀕するのである。單に行爲との關係からのみ觀察するも、自分の內界を豐にすることを知らぬものは自他に對して正しく行爲することが出來ない。

一例を教育にとれば、教育は兒童と教師との共同事業ではあるが、この共同事業に對する兒童と教師との、分擔は當然に相違すべきであつて、教師が指導の任に當つて兒童の生活の形成に共同する特別の任務を感じないならば、彼は如何なる意味に於いても教育家の名に價しないのである。さうして教育者が自分の內界を豐にする義務を怠るとき、彼の教育的行爲には如何なる缺陷が生ずるか。恐らく彼の內界の貧さは、凡ての兒童に七十五度の角を描いて進むことを命ずる誘惑に勝つことが出來ないであらう。それは、個々の人は個々の人であるといふことが實際上了得し難いからである。縱令理論上それを知らぬ者はないにしても、實際に當つて他人の心、他人の性質を考へるとき、結局自分と同じものしか理解し得ないとすれば、凡ての兒童に同一の通路を——同一の目標ではなくて同一の通路を——指定することが自然の成行であるからである。併し通路の劃一は個性の强制である。個性の强制は、凡ての兒童に彼自身にふさはしき道を發見させるといふ教育家の任務と矛盾する。この意味に於いて、頑固は特に教育家の避けなければならぬ惡癖である。併し心の地を豐かにする心がけを知らぬものが頑固に陷らずにすむことは殆んど考へ得ない。故に教育者にはとりわけこの方面に於ける教養の熱意を必要とするのである。教育者の頑固に對照するために、私は再び祖先傳來の言葉を復活する。「應病與藥」といひ「人を見て法を說け」といふ言葉は、その墮落した意味に於ては「臨機應變」といふ言葉と共に下劣である。心の誠をとりはづしてその場の調子を合せるための應病與藥は病を癒すのではなくて誤魔化すのである。對手を道に導かんとする誠意なしに、人を見て法を說くのはたゞ鼻をつまんで引張り廻はすのである。併し我々の志すところが本當に健康にあり法にある限り、藥は常に病に應じて與へられ、法は必ず人を見て說かれなければならぬ。眞正の教育家が應病與藥の活手腕を缺くことはそれ自身に於て矛盾である。再び芭蕉を引例すれば、彼はその弟子に教ふるに應病與藥の變通を心得た生きた教育者であつたらしい。「去來曰、先師は門人に教給ふに、其言葉極りなし。予に

示し給ふには、句每々にさのみ念を入る物にあらず。又句は手づよく俳意たしかに作るべしと也。凡兆には一句わづかに十七字なり、一字もおろそかに置べからず。俳諧もさすがに和歌の一體なり。句にしをりの有るやうに作るべしとなり。是は作者の氣性と口質とによりてなり。」（去來抄）。このやうな教育は詳かにその弟子の個性を察知する人のみの能くするところである。さうして自分自身の內生が豐かな者でなければ、細かに具體的に他人の內生を察知することが出來ない。

さうして內界の豐富を缺く教育者のもう一つの恐るべき點は、その學生から現實を味解する心の細かさを奪ふことである。一つの目標、一つの理想に醉ふ人は、それだけで一種の崇高なものを持つてゐるが、この陶醉が學生の若きこゝろに感染するとき、彼等は腦髓中のまぼろしにのみ生きて、現實の問題に面接するとき、些細なことに當つても殆んど答へる所以を知らないといふやうな場合も決して少くはないのである。この意味に於いて、學生を粗大なる理想の情熱のみによつて教育することは危險である。明かに、こまかに、敬虔と愛とを以て自然と人生との明暗を學び知らうとするリアリズム――リアリステイックに心の地に豐かな肥料を與へることも亦極めて必要である。特に必要なのは人間の心の不思議を見る眼のリアリステイックな教養である。この教養を缺くとき、完き人に到るの途には非常に重大な缺陷が生じて來るのである。實際、ふりかへつて考へるとき人間の心ほど不思議な妙な存在はないであらう。其處には恐ろしい點もあれば可愛い點もある、滑稽なところもあれば眞底から頭の下るところもある。實にくる〳〵變る猫の目のやうなものである。さうしてそこから出て來る人間の行爲の不思議、そこから出て來る迷ひ、過ちといふやうなものに眞實敬虔の心や理解や同情を繋げることが出來なければ、我々は本當の人間になり得る筈はないのである。さうしてその學生からこの重大な觀點を奪ふところに、自己の內界を豐かにする教養の意義を解せざる教育家と、彼の教育行爲との恕すべか

らざる罪過はある。

四、同　情

自分の內界の體驗を基礎として他人の生活と心とを解釋することを同情といふ。同情をいふとき我々は直ちに社會生活を連想せずにはゐられない。さうして私がこゝに同情といふのも亦主として社會生活の基礎としての同情を意味するのである。社會といふ言葉は、今の世に於ては、ある意味に於ては誇張されて居ると云つてもよい位に重んぜられ、且つ恐れられて居る。社會は我々が生れ落つると同時に我々を待受けてゐる一種の不可抗力である。我々が嬰兒としてこの世に生れて來てから、始終社會によつて育てられて居ることはいふまでもない。社會は又、單に我々を育てるのみならず、我々の仕事や我々の生活に方向を與へる。それは我々の教育の場所、活動の場所、戰闘の場所、受難の場所である。私は特にこれを受難の場所といふ。それは社會自身が社會自身の必要を有つて居て、我々の欲すると否とに關せず、云はゞ一種の賦役を我々に仰せつけるからである。

特に今日の工業的社會に於ては、鑛山の鑛夫も必要であり、機關車の火夫も必要であり、便所の掃除人も必要である。我々は自分の進まぬ仕事でも、社會がこれを必要とする限りは押付けられなければならないのである。この間に於ける我々の選擇は、自らこれを自覺して、犧牲の觀念を以てこれをするか、或ひは脅迫されて恐ろしさにこれを遂奉するかにあるのみである。苟もこの社會の中に生存しようとする限り、我々はこの賦役を辭するといふ自由は持つてゐない。この意味で社會は常に我々の生活に重くのしかゝつて來て居るのである。併し私がこゝで考へようとするのは、さういふ意味で我々の生活を支配して居る社會ではない。我々が人となるの道にとつて、もつと積極的な意味を持つ社會

である。一體に我々が他人とか、他者とかを理解することは不思議な現象であるが、しかもこの不思議な現象がなければ、人と人との結合は決して成立たないといつてよいのである。極めて簡單な例をとれば、若し我々が我々の相手を木のはし石の塊であると見て、少くとも彼等が飯を食はなければ空腹を感ずる人間であることさへ理解しないとすれば、この木のはし石の塊と我々との間にはどうしても社會的關係は成立たない。併しこれを少くとも飯を食はなければ腹がへる人間と見れば、其處には既に一緒に食物を探しに行くといふ共同動作が成立ち、その共同動作によつて不充分ながら社會的結合の萠芽は基礎づけられるのである。かくの如くにして相手の心に對する理解が深くなければなるほど相手と自分との心的關係は親密になる。固より親密になるとは喧嘩をしないといふ意味ではない、喧嘩をするのが親密の證據となり得ることは、夫婦喧嘩といふ不思議な現象によつても想察することが出來るであらう。兎に角その相手の心が自分に分れば分るほど、それは自分に採つて益々憎むべく喜ぶべきものとなつて來なければならぬ。深く憎むといふことも、亦相手の心がその程度に自分の心にしみ込んで來るといふことでなければならないからである。このやうにして相手の心と自分の心とが通ずることを、極めて廣い意味に於いて同情と名付ける。お互の心が通ふことは、その內容が喜びであれ悲しみであれ、この Sympathy の中に包括される。固よりこの用語法は、日本のみならず外國語に於いても、常識的な語感に或程度の變更を强ひるには違ひない。非常な喜びのために夢中になつて踊り上つて居る人に向つて、「俺は君に同情するよ」といへば、その人はこれを皮肉の意味に解し、氣狂扱ひにされたことを感ずるのは自然である。同情といふことは、泣いてゐる人、親を失つた人、子供に別れた人——さういふ不幸な人に對して、始めて順當の意味を持つて來るのである。併し我々はこの自然の語感に意識して强制を加へる。悲しむ人に對する同情の基礎となる心的作用そのものにこの言葉を適用して、この心的作用の向けらるゝ對象の性質を暫く不問に附する。大いに喜ぶ

人と共に大いに喜ぶのも亦同情である。さうしてこの擴張せられた意味の同情が人間的教養にとつて持つところの意味を考へようとするのである。

同情は他と共に感ずることである、而も他と共に自ら感ずることである。自ら感ずることを得ぬものに對して同情することは不可能である。先方の喜びが自分の心に反響して、我々自身の心も亦喜びを感じ始めるとき、彼我の同情は始めて成立する。他人の喜びに同情するためには、先づ自分の心の中に喜びの貯へがなければならないのである。併し若し同情とは我々にとつて過去の體驗の再生に過ぎないならば、それは結局體驗の繰返しの機會となるのみで、人間の教養に資すること割合に淺いと云はなければならないであらう。復習と雖も固より全然教養的意義を缺くわけではないが、我々にとつて必要なのは寧ろ新しき體驗による自我の擴大である。さうして同情は實際、後者の役目を果すだけの力をも亦持つてゐるのである。その理由は何處にあるか。例へば自分には未だ子供に別れた經驗がないと假定する、併しその人には親しき友と別れ、若くはその親と別れた經驗があるとすれば、彼は友と別れ、親と別れた類似の體驗を基礎とし、又子供に別れて悲しんで居る人に同情する。この同情には固より未だ徹底し得ぬ奥底が殘つてゐるであらうが、併し子を失へる親への同情は、兎に角に彼の中から新しい悲哀の體驗をひき出して、多少は彼を從前よりものゝわかつた人間にするであらう。總ての人が異れる運命の下に異れる道を探つて居るとき、我々を他人の生活に分闘せしめる力、他人の生活に分闘することによつて自己の心境を拓かしめる力は、同情を除いては他に求めることが出來ないのである。我々自身が直接に體驗し得る生活は、人の一生に於ては極めて限られて居るが、その限られた經驗を基礎にし、これを延長し、これに變容を與へて、他人に同情することによつて、我々の自我は始めて個人的運命以上に擴張されるのである。從つて、自分の內界を豐かにして完き人にならうとするためには、自分と根柢に於て相通じながら、而

も自分と異れるに個性を持ち、自分と異れる運命を辿る他人と同情することが必要である。縱令其處には常に一紙を隔つる遺憾は殘るにしても、この道によつて我々は千人の個性に觸れ、萬人の運命を身に包擁して行くことが出來る。その關係を複雜に求めて行けば行くほど我々は廣い複雜な社會の中にはひり、この社會と同情することによつて我々自身の完さを增して行くことが出來るのである。この意味で我々は、いくらうるさいことが起つても、社會に感謝をしなければならない、我々の教育者としてこれに感謝しなければならない。固より自己の內界に非常に複雜に鬱積するものがあつて、その始末のために全力を要求されるやうな場合には、社會と離れて自分の心と山とに籠つて見る必要もないとは云へない。併し社會の刺戟とうるささとに堪へ兼ねて、たゞそれだけで山に入るのは道德的勇氣が足りないのである。社會を離れることは、たゞ自分自身の仕事を完成するための專念を必要とする人にのみ許される道である。西行や兼好の遁世も亦この見地から批判されなければならぬ。

併し社會の教養的意義はこれに盡きたのではない。前述のことはその全體ではなくたゞその一つである。然らばもう一つの方面は何處にあるか。それは、我々が社會の一員として、社會に對して義務を負ふところにある。前の場合に於いては、我々は結局社會から受ける立場に立つて居た。併し我々は又一面に於て受けるばかりではなくて與へる位置にも亦立たなければならぬ。固よりこの義務の意識も、同情を基礎としなければ成立しないが、この同情を基礎として更に積極的に對手に働きかけて行くところに、前者との相違があるのである。この場合、與へるとは、勞力を與へることでもよい、知識を與へることでもよい、準據すべき原理を與へることでも勿論結構である。兎に角、我々が社會の一員としてふり當てられた役割、若くは自ら進んでその衝に當る役割を、義務として身に引受けることは、我々を人間として鍛錬する。縱令その役割は我々の心に染まないのであつても、まるで何の役割もなしにぶら〳〵して居るよりは遙か

に優つてゐるであらう。我々の完き人にならうとする志が眞摯であれば、我々はどうしてもさう考へなければならないのである。總て何かの役割を持つものは、身と心とを勞して働かなければならぬ。働くことは我々を健全にし、勇敢にし、我々の生活を大地につくものにする力を持つてゐる。故に社會に對して義務を負ふことがやはり我々の教育になつて行くのである。さうして社會に對して負ふところの義務の中には、場合によつては喧嘩をする義務も亦含まれて來る。我々が社會生活の中に惡いものを發見して、どうしてもこの社會的の病ひを治さなければならぬことを心の底に感ずるとき、我々は社會に對する義務の觀念によつて、この惡いものと鬪はなければならない。さうしてこの戰ひの義務は、皮相に見ればたゞ非常な場合のことであつて、人の一生に容易に遭遇することがないものゝやうに思はれるであらうが、その實我々の分擔する仕事を眞面目に實行しようとするとき、我々は殆ど毎日、大小さまざまの戰ひをきりぬけて行かなければならぬことを發見するであらう。責任ある地位に立つとは、此の如き大小の戰を敢て辭せぬといふ覺悟を固めることである。さうしてこの戰が我々の人間を完さに近づかせる重要な力になつて來るのである。

併し我々は、我々と接觸し、我々を教育するものは、社會のみではないといふことをも亦忘れてはならぬ。固より我我の生活は、社會の中で育てられ、我々の大體の感じ方、考へ方は大部分社會によつて規定される。併し我々がこの感じ方、この考へ方を携へて接觸しなければならぬ對象は——從つて又これとの同情を基礎として受けたり働きかけたりしなければならぬ對象は、決して社會ばかりではないのである。この對象をも亦社會に限定するとき、人間の眼界は狹く、人間の生活は息苦しく——かくて結局人間の社會そのものがそのために損傷を受けなければならぬ。我々の接觸する對象には、社會の外にも、宇宙があり、自然があり、生物がある。これ等のものとの同情を無視するとき、我々の人間的教養は決して完きを得ない。この事は藝術家の生活を考へる時特に著しく目に立つであらう。我々は時に社會から

我々の眼をそらして、星を仰ぎ、花と語り、土瓶やコップと物を云つた、聖フランシスのやうに小鳥に說敎することを學ぶのみならず、又土に働きかけ、山に働きかけて、我々の同情を宇宙的に擴充することを心がけなければならぬ。

私は又最後に我々の祖先の生活を回顧する。彼等は我々にくらべればもつとこの意味の敎養を持ち、この意味の敎養の意義を認めてゐた。一例を德川時代の文人畫家にとれば、柳里恭、大雅堂、浦上玉堂、渡邊崋山、田能村竹田その他の人達が、花鳥の言葉を解し、山水の言葉を解して、而もこれをその心の養ひとする點に於いて、今日の畫家よりも遙かにすぐれてゐたと私には思はれる。さうして此等の趣を解することを士君子の修養の一つと考へる點に於いて、當時の人達も亦彼等の仕事に今よりも心からの支持を與へてゐたらしい。自然と遊び、折ふしのもののあはれと遊ぶこゝろが――この實用と離れた美的敎養が人として完くなるための一つの途であることを認識し得た點に於いて、種々の缺點あるにも關らず、彼等は我々に一つの重要な問題を提出する。私の考へるところによれば、人間的敎養の問題は、遂に此處まで來なければならないのである。

時評

無産階級政治戰線の混亂

山川均

（一）

子供のころは（昔の子供はもつと野蠻だつたから）ねりべいなどによく樂書きをしたものだ。しかしまだ少しも樂書で汚ごされてゐない塗り立ての眞白な白壁には、さすがにちよつと氣おくれがした。けれどもほんのちよつとでも先例が示されてさへゐれば、それに十倍したほどの『へのへのもへの』を書くことも、大した膽力を必要としなかつた。

單一な無産階級の政黨は、塗りたての白壁であつた。この白壁には勞農大衆の要望といふ控へ柱が立つてゐた。そこで如何なる者も、まつ先きにこの白壁に樂書きするのは、ちよつと氣おくれがした。この白壁の清淨に對して何等の誠意をも持たない者、いな反對に、心の底ではこの清淨を破る機會を狙つてゐる者すらも、なほ躊躇せざるを得なかつた。

しかるに勞働總同盟の脱退により、白壁の清淨が一度び破られると、われも／＼と、無産階級の政治運動の上にもつと大きな『へのへのもへの』を平氣で書き散らす勇敢な子供たちがぞく／＼と現はれた。白壁が白いのは空想だ！　現實的な子供が斯う云つておそる／＼小さな『へのへの』を書くと、このいたづらを憤ほる他の子供らは、白壁の白さを擁護するためには、もつと大きな『へのへの』を書かねばならぬと考へた。單一無産政黨をぶちこはすための對立政黨の組織から、眞實に單一政黨に對する大衆の要望にそふ爲めの競爭政黨の組織！　かうして謂ゆる小黨分立の形勢が導びき入れられた。ブルジョアジーの或る新聞は『無産政黨は數でこなす氣か』と問ひ、他の新聞は離合集散のあわたゞしさに驚いて『恆産なき者は恆心なし』とまで疑つた。

（二）

無産階級の單一な政黨として生れた勞働農民黨に對して、先

づ第一に反旗をひるがへしたのは、北澤新次郎氏この日本農民黨であつた。しかし日本農民黨は無產者階級內部の一對立政黨であるかの如く自稱してゐるにも拘らず、一般に、無產者の政黨とは見なされて居らぬ。

日本農民黨は、さきに日本農民組合から分裂脫退して組織された全日本農民組合同盟と異名同體のものであつて、一つの事務所に掲げられた二つの看板に外ならぬ。全日本農民組合同盟を生み出した日本農民組合の分裂の蔭に、何者の手が動いてゐたかは、今は周知の事柄であつて、この全日本農民組合同盟の政治部に過ぎない日本農民黨が、一般に、無產階級の一政黨として取扱はれてゐないのは、怪しむに足りないことである。勞働農民黨をロシアの手先きと呼び、勞働總同盟の社會民衆黨をつかまへてまで、右傾の假面をつけた赤化黨だと云つてゐる某新聞——旣成政黨の一領袖の機關として知られ、反動主義を標榜する勇敢な一新聞——すらも、日本農民黨だけは眞實に眞つ白な、日本的な政黨であり、眞底からの右傾主義の政黨であるとして賞讚を惜しまないことが、この政黨の性質を最もよく物語つてゐる。また他の一新聞はその社說において、他日『日本農民黨は政友會と、上杉博士等の愛國黨は政友本黨と結ぶに對し、社會民衆黨が憲政會と手を携へて互ひに戰ふが如き形勢を作つたなら』、そのために傷つくものは旣成政黨ではなくして無產階級であると論じてゐる。これは固より假定であるが、必ずしも架空の假定であるとは云はれない。北澤氏らの日本農民黨といへば、人をして直ちに政友會を聯想せしめずしてはおかないものがある。

日本農民黨の眞性質とその當然の行くへを明らかにするためには、必ずしも旣成ブルジョア政黨との關係如何といふやうな、ことさらにおし隱さうとする事實を曝露するには及ばない。『天地の公道に則り……日本國本の振起』を目的として、農民を都市プロレタリアから隔離しようとする運動の着陸點は問はずして明らかだからである。

日本農民黨はその成立の動機と徑路からしても、また全日本農民組合同盟の異名にすぎない現在の內容からしても、少くとも無產階級側からは重きをおかれて居らぬ。それにも拘らず、この運動は相當に重要視する必要がある。それは無產階級政治運動の陣營內の一勢力として重要なと云ふ意味ではなくて、無產階級政治勢力の擡頭に對抗するブルジョアジーの運動として、注意と警戒とを必要とするといふ意味である。

農村の經濟は大部分、少ブルジョア的である。從つて農村の小所有者、無產者、勤勞民の間には、小ブルジョア的影響が勢ひ

有力ならざるを得ぬ。農村では無產勞働民の場合ですらも、標本的な資本主義と當面する工業プロレタリアの場合のように、階級的對立の事實が最も單純化した形で現はれない。かような小ブルジョア的な環境に應じた階級意識の曖昧は、都市と商工業とに對する、全體としての農村と農業の利害といふ非階級的な對立關係によつて一そう濁ごされる。『農民は農民黨へ！』といふ標語は、かうした階級意識の混濁に乘じ、この泥水をかきまぜることによつて、無產農民をプロレタリアの勢力から引き離さうとする標語である。

農村には小ブルジョア的環境が有力であるといふ事實は、かような誘拐運動には相當の社會的根據があるといふことを意味してゐる。從つてこの誘拐運動には、相當に成功の機會と可能がある。そこで『農民は農民黨へ！』といふ政治運動は、北澤氏によつて着手されなければ、何時かは他の北澤氏によつて着手されるにちがひない（ブルジョア社會は北澤氏に乏しくない。）日本農民黨でうまくゆかなければ、他の日本農民黨が作られる。請負人や仲買人に任かせておけないなら、ブルジョア政黨は直接本店の經營でやる。かように『農民は農民黨へ！』といふ政治運動は、ブルジョアジーが何かの形と方法とで、必ずやるに違ひない運動である。それはブルジョア社會に間違ひなく需要がある。必ず買ひ手の附く商品を生產することが、謂ゆる現實主義者の『現實に即した』運動なのである。

かような意味において、日本農民黨の運動は慥かに現實に立脚した運動であり、少くとも或る程度には成功の機會のあり得る運動である（現在の北澤氏らの日本農民黨が、このブルジョア的必要を立派に滿たして、順當に發達するか否かは、別問題であるが）。日本農民黨の運動が無產階級の運動としてではなく、純然たるブルジョアジーの運動として、充分な警戒を必要とする所以はこゝにある。

（三）

勞働農民黨組織の當初から、たゞ脱退せんがために參加し、最も有利な脱退の機會——脱退によつて最も大きな打擊を勞働農民黨に與へ得る機會——を窺てゐた勞働總同盟は十月二十四日の第四回中央委員會において、とう／＼この千載一遇の機會をつかまへた。しかし最も有利な機會をつかまへようとして遂につかまへたこの機會は、その實、最も拙劣な機會であつた。その結果は、勞働總同盟の孤立であつた。そこで總同盟の內部にさへも、脱退反對の氣分が濃釀した。この逆運を轉換するために急ごしらへの艤裝で漕ぎだした助け船が、即ち三教授の謂

ゆる無産政黨『産婆』運動なるものである。

脫退直後における總同盟の方針として傳へられたところは、『總同盟自身が中心となつて政黨組織の運動を行ふことはしない、しかし知識階級の中で無産階級の政治運動に理解をもつ人人、例へば獨立勞働協會、社會思想社、關西の政治經濟研究會(大原研究所系統の政黨促進機關として知られたもの)の有志などが中心となつて全國的な政黨が現はれるやうなことがあれば……加入して……支持してゆく』といふことであつた。しかるに無産階級の政治運動を理解したか否かはしばらく措き、少なくとも勞働總同盟の胸中を理解するほどの聰明な知識分子には事を缺かなかつた。

この『理解ある知識階級』の第一人者は、吉野作造氏であつた。吉野氏は、無産政黨組織の運動が始まつて以來、日本の無産階級のために、絕えず親切な忠告をして與れた學者である。氏は『中央公論』の評壇から、無産階級の政黨は必要だが、無産階級が政黨を組織するのは宜しくないといふ、聰明な忠告を繰り返へし繰り返へし與へて與れた理解ある人として、すべての人々の記憶に刻まれてゐる人である。この親切な忠告をも顧みないで、日本の無産者が無謀にも農民勞働黨を組織した直後の本年四月の同じ雜誌において、吉野氏は『昨秋以來』再三再四』與へられた訓戒と忠告とをもう一度くり返へし、次の如く約說せられてゐる。

『(1)無産者階級は自ら進んで政黨組織に干與すべからず、(2)政黨のことは自ら政治家を以て任ずる專門家に委すべく、(3)而して之等專門政治家の問題としても、政黨組織は無産階級代表の代議士を中心とするを得策とすべく、今急いで結黨するのは將來に於て政黨を大にする所以でない、(4)且つ政黨運動と政治教育運動とは根本的に其目的を異にするものなるが故に、政治教育者を以つて任ずる自分としては、斷じて政黨には干與せぬ……』

そして之は——吉野氏によると——『無産政黨運動に反對するためでないことは言ふまでもなく、無産者政黨の本當の發達を希望するからこそ、斯く苦言を呈するのであることは、讀者諸君も定めし諒とせらるゝところである』といふことであつた。慥かに吾々はこれを諒としたのである。

大正十五年十一月四日は、この時をさること七ケ月である(七ケ月は七十五日よりも長い!)この七ケ月後の今日、吉野作造氏が舉げられた四ケ條の條件とは一から四まで悉く精密に反對した條件のもとに、無産政黨の組織に着手せられたのが、この吉野作造氏とは別人ならぬ今一人の(恐らく政治教育では

なく、自ら專門政治家を以て任ずるところの）吉野作造氏であつた！

吉野作造氏は、今度は吾々に何を諒とすることを求められるであらうか？（吾々には、ブルジョア學者の如何なる行動をも『諒とする』用意がある！）。

助け船の艤裝がいかに火急を要したかを、窺ひ知ることができるではないか。

吉野作造氏と共に、勞働農民黨に對抗することを目的とする競爭政黨の組織を提唱斡旋せられた堀江歸一氏は、七ケ月前には勞働農民黨の『成立を喜び、』その『綱領並びに政策に贊成を惜まない』ことを公言した人である。たゞに贊成を惜まないばかりでなく、この綱領及び政策はむしろ餘りに『穩健』に過ぎたることを指摘して、漸次に若しくは急劇に、一そうラヂカルなものとする必要をさへも教へられた人である。

『……以上の綱領並びに政策に對しては、私は贊成するを惜まないし、又右の政策が實行されたなら、我國が社會的に經濟的に改善せられて、餘程立派な國に爲るであらう……然らば勞働農民黨の期する所は右の諸項を以て足れりとするかと問はれゝば、私は不幸にして「否」と答へざるを得ないのである。是等の諸項たる、今日聊かなりとも思想の進歩して居る人々の間に於ては、夙に主張され、近時に於ては寧ろ言ひ古された觀すらなきを得ない。勞働農民黨が今更らの如く是等を綱領とし政策とするのは、固より既成政黨に對照しては新を誇るを得るとしても、果して政界革新とか經濟組織改革とか云ふ標榜に副ふ所以であらうか。私は考へる、勞働農民黨の人々をして所信を披瀝するに憚る所なからしめたならば、綱領政策は決してあれだけには止まらなかつたであらう、唯官憲の嚴重なる監視を緩和し、又穩健を旨とする人々を糾合する必要から、當らず觸らず、而して多少の新味を發揮する所に綱領政策を置いたのであつて、今後時勢の進歩と共に幾變遷し、或は急劇に變遷を告げる所に勞働農民黨の妙味が存するのではなからうか。』（『改造』大正十五年四月號）。

遺憾ながら時勢はなほ何等の變遷をせぬ。勞働農民黨の綱領政策は、立黨の當初のまゝで一點一畫をも變遷して居らぬ。ただこの間に『急劇に變遷を告げた』のは、勞働農民黨に對する態度を二三にせられた堀江氏の誠意である。

堀江氏は同じ論文のうちに、勞働農民黨の組織に際し、氏が特別委員としてこれに關與すべき勸誘を受けたに拘らず、それを拒絶せられた理由を公けにされてゐる。私はこの理由を讀んで堀江氏の公明な心事を諒とし、多大の尊敬を拂つたものであ

る。堀江氏が無産政黨運動の渦中に投じられることを引き留めたこれ等の有力な理由は、今日は消滅したであらうか。堀江氏の今回の行動は、無産政黨運動のため（乃至は其他の何ものかのため）にたゞ『犬馬の勞』ないしは『産婆の勞』を取られたに過ぎないものであつて、その渦中に投ぜられたものではない、と云ふ人があるかも知れぬ。けれども既に成立してゐる無産政黨に對して、明らかに之と戰ふことを主たる存在の理由として生まれる政黨のために産婆の勞を取り、かような朋黨的陰謀者のために犬馬の勞を取ることは、取りもなほさず最も惡るい意味に於いて政黨運動の渦中に投ずることであつて、若しこれを渦中に投じたものでないと云ふならば、それは堀江氏自身は岸の上に立つてゐて、たゞ泥水の渦卷きをかき立てたのだ、といふ意味においてのみ、堀江氏はその渦中に投ぜられたのではないのである。

安部磯雄氏の出處進退にいたつては、公人の出處進退としてこれを責めるよりも、心中の片破れとしてその心事を諒とする方が適當である。

（四）

無産階級政治運動に『理解ある』この三人の産婆――ないしは犬馬――を煩はしていま産みの苦しみ（それは文字通りの産みの苦しみである！）をしてゐるのが、假りの名を社會民衆黨と呼ばれてゐる勞働總同盟黨である。勞働農民黨は二十項目の政策を掲げてゐるが、この項目は大體において、第一次無産政黨の綱領委員會に於いて、總同盟側の主張が勝利を得て採用せられたものを、さらに和げて出來上つたものであつた。社會民衆黨は二十七項目の政策を掲げてゐるが、勞働農民黨の二十項目の政策全部が、殆んど悉くそのうちに採用せられてゐるのである。これは社會民衆黨組織の動機が、勞働農民黨と異つた政策によつてブルジョア政治勢力と鬪ふ必要に存したのでないことを物語るものである。

社會民衆黨の三ケ條の綱領もまた、勞働農民黨の綱領を殆んどそのまゝ採用したものであつて、たゞ一つの點において、勞働農民黨のそれとは異つてゐる。そしてこの相違こそ、社會民衆黨の組織せられた眞實の動機と目的とを現はしたものでなければならぬ。たゞ一つの點とは、勞働農民黨の綱領第三項が『吾等は特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し、議會の徹底的改造を期す』といふに對して、社會民衆黨は『吾等は特權階級を代表する既成政黨、並びに社會進化の過程を無視する（原案は『現實無視の急進主義を奉ずる』）急進主義の政黨を排

す』と云つてゐることである。

社會民衆黨が云ふところの『現實無視の急進主義を奉ずる政黨』ないしは『社會進化の過程を無視する急進主義の政黨』とは、勞働農民黨を指したものであることは云ふまでもない。然るに勞働農民黨は、さきにも言及したやうに、勞働總同盟と官憲との協同の壓迫によつて、大體において右翼即ち總同盟側の主張する綱領と政策——堀江氏が寧しろ穩健に過ぎることを遺憾とせられた綱領と政策——とに基づいて組織せられた政黨である。この政黨は（主として、總同盟がその內部でサボターヂを續けてゐた爲めに最近にいたるまで、政治行動と名づけ得られるほどの何等の行動をもして居らぬ。黨の最高機關を構成する人物にも、初めから變化はない。この勞働農民黨はいつ如何にして、『社會進化の過程を無視する急進主義の政黨』となつたのか？ そして綱領と政策と、實際の政治行動と、黨の機關を構成する人物とに現はれないで、その謂ゆる『急進主義』なるものは、如何なる形を取つてどこに現はれ得るであらうか？ たゞ脫退せんが爲めに勞働農民黨に參加し、その脫退によつて勞働農民黨を致命的に傷つけんがためにこれに參加してゐた勞働總同盟さへも、政策の相違を口實にして脫退の機會を捉らへることに、かくも苦心したければならなかつたのはその爲めであり、そしてもがきにもがいて捉まへた機會が、最惡の機會であつたのも、その爲めである。

勞働總同盟の意中の政黨は、徹頭徹尾、勞働總同盟中心の政黨であり、勞働總同盟の政黨であり、勞働總同盟の指導者諸君が、ブルジョアジーの政治勢力と自由に取引きのでき得る政黨である。生まれんとする無產政黨が必ずしもこの註文にはまつた政黨でないことを知つた時、諸君は第一次無產政黨を絞殺した。諸君はこれによつて、總同盟中心の政黨組織の形勢が展開するものと待ち設けた。しかるに無產階級政治運動の實際の發展は、諸君の期待を裏切つた。諸君はやつきになつて、第二次無產政黨組織の主役を、日本農民組合の手から奪つて自分の手に收めようとした。この努力も失敗した。そこで諸君は心ならずも大勢に追從するか、さもなくば孤立の危險にさらされた。諸君が勞働農民黨に參加し、その內部からこれを崩壞せしめる戰術を選んだのは、その爲めであつた。

無產階級黨の毒殺に失敗し、サボターヂに失敗し、日々に高まりゆく大衆の彈劾の叫びに周章狼狽し、最も不利な形勢と條件とのもとに、勞働總同盟黨組織の本音を吹かざるを得ない窮地に追ひ込まれて產み落されんとしてゐるのが、社會民衆黨なのである。かように社會民衆黨は無產階級政治運動に對する纏

續した犯意の結晶であつて、それが無產階級の政黨――勞働農民黨――に對する鬪爭をもつて、主なる存在の理由とすることは、少しも怪むに足らぬ。政黨の綱領は、政治鬪爭の段取りを定めたものであつて、從つてその政黨の存在の理由を規定したものである。社會民衆黨が、勞働農民黨との鬪爭をその綱領の一項目に掲げてゐることは、第一には立黨者の心術を告白したものであり、第二には、既成政黨と勞働農民黨とを全く同一の範疇に入れ、これに對して同一の反對を表示してゐるのは、階級に對する社會民衆黨の根本觀念を物語つたものであつて、從つてまた社會民衆黨の階級的性質と階級的所屬とを明らかにしたものである。

吉野、堀江、安部三氏が勞働農民黨に對抗して新政黨を組織することを必要とせられた理由は、極めて單純簡明であつて、それは徹頭徹尾、勞働農民黨は合法的な政治運動を否認する黨派であるから、別個の政黨を組織する必要があると云ふにある（十一月四日の聲明書と同時に發表せられた吉野氏の談話、十一月二十日の協議會に於ける安部氏の開會の演說等々。）少くとも新政黨の提唱者は、勞働農民黨について、かくの如き印象を人々に與へることによつて、無產階級政治運動を攪亂する自己の行動を裏づけようとしたのである。あの店の饅頭には毒藥が這入つてゐる！　だからその筋向ひで衞生饅頭を賣り出さねばならぬ。諸君はその筋向ひに饅頭屋を開業する內心のひけ目を、かような宣傳――何人をも信ぜしめることの出來ない宣傳――によつて、僅かに自ら慰めようとしたのである。この饅頭屋の綱領が、公衆の衞生ではなくて、ひとへに隣りの商賣がたきを賣り負かすことにあるのは尤もである。

（五）

社會民主黨はいま生みの苦しみを苦しんでゐる。死產を豫想する人さへもある。けれども小ブルジョアの社會層はかくの如き政黨を必要とする小ブルジョア・デモクラシーの政治運動によつて、無產階級の政治勢力を攪亂することの出來る範圍においては、ブルジョアもまたかくの如き政黨を必要とする。よしこの政黨が、既成政黨のいづれよりも遙かに進步的な政策を揭げるものであつても、支配階級はその爲めに何等の損失をせぬ。小ブルジョア自由主義の政黨は、多かれ少かれ必ず勞働者と農民の一部をその指導のもとに收めるから、それだけ無產政黨の勢力を弱めるばかりでなく、無產階級の政治勢力との間に、緩衝地帶を設ける利益がある。この種の中間政治勢力が有力となることは、支配階級にとつても、時としては厄介である

が、この厄介は取引を容易にし、組織的にする利益によつて償はれる。かような『現實』に立脚してゐる限りは、社會民衆黨には僅かに存在の理由がある。

これはまた社會民衆黨が成功するためには、その前にはたゞ一つの道が開かれて居り、たゞ一つの道しか開かれて居らぬことを暗示したものである。一部の人々は、社會民衆黨は存在の必要のために、小ブルジョア自由主義の保護色を擴げてゐるものかのように考へてゐる。けれども事實はその反對であつて、それは成立の必要のために、無産階級黨の保護色を用ひてゐるものに過ぎぬ。社會民衆黨に今後の發達があるとしたならば、その唯一の方向は、無産階級黨の保護色を棄てゝ愈々益々、小ブルジョア自由主義黨たる眞性質を發揮することにある。

實際の情勢も、同じ事實を指さしてゐる。ブルジョア社會の現實の必要は、社會民衆黨に存在の理由を與へてはゐるが、ただ差し當り、社會民衆黨がどれほどの勢力となるかは頗る疑問である。安部、吉野、堀江三氏の聲明書によれば、三氏が進んで産婆の役目を引受けられた政黨は『新大政黨』であるとの由である。然るに『新』は兎も角として、三氏の政黨が差し當り『大』政黨となるか否かについては、一般に悲觀的な觀測が行はれてゐるのである。

先づ勞働團體の方面から見れば、今日總同盟黨に參加し、少くとも安部、吉野、堀江三氏などに忠實に、總同盟のために『犬馬』の勞を取らんとする義勇に富んだ勞働團體が幾つあるかゞ疑問である。組合幹部のうちには、總同盟の指導者と因緣の淺からざる人々がある。これ等の人々は總同盟黨に馳せ參じ、その指導を仰ぐにちがひない。けれども組合全體として積極的に總同盟を支持し得るものは、ほんの一二に過ぎないものと見られてゐる。

かような情勢は、何人よりも總同盟の指導者自身が、最もよく熟知したところであつた。そこで社會民衆黨はその計畫の當初から、謂ゆる知識分子の糾合に重きをおいてゐるようである。けれども知識分子を肉として勞働總同盟を核心とする政黨にも、いろ〳〵な難關がある。そこで組織の中途にある今日は、總同盟は努めてその運動の中心に坐ることを避けてゐるらしい。それにも拘らず、社會民衆黨はあまりにも勞働總同盟黨たる色彩が濃厚であつて、これを打ち消すよしもない。けれどもかりに總同盟黨が知識分子の糾合に成功するにもせよ、その結果は、小ブルジョア自由主義黨たる性質を、一そう決定的なものとするだけである。

勞働組合の方面に望みの少ないことは、勢ひ總同盟をして、

從來經濟上でも政治上でも、全く組合運動の共同動作の圏外に離れて立つてゐる特殊な勞働團體に注意を向けしめる。組合の經濟運動の方面における總同盟の謂ゆる右翼聯合の計畫が、一切の運命と希望を海軍勞働聯盟の向背にかけてゐるやうに、總同盟はその政黨の計畫においても、當然、海軍聯盟(並びに海員組合)に重きをおいてゐることは疑ひのないところであつて、これは先年の革新派除名の當時からの、一貫して變らない方針と見做される。かやうに社會民衆黨の勢力が、今後勞働階級(特に組織勞働者)の方面にのびるとしたならば、それは主として、勞働組合中の最も保守的な組合——典型的な組合官僚の支配する組合——と認められてゐる海員組合と、大部分は官憲の意向によつて支配せられてゐる海軍勞働聯盟とにほかならぬ。

海員組合が總同盟黨に對して好意を持つことは事實であるが、それと同時に、總同盟が海員組合をその政治的指導のもとにおくことは至難である。海員組合は數において總同盟に劣らぬばかりでなく、その狹隘な組合利己主義においても、決して總同盟にひけを取るものではない。たゞ海員組合の指導者は、その職業組合主義を侵されぬ程度においては、總同盟と手を取るものと思はれる。

海軍勞働聯盟にいたつては、その向背は容易に知ることができぬ。なぜならば右翼聯盟の場合と同じく(本誌十一月號に指摘したやうに)、現在の海軍聯盟の態度を決定するものは、組合大衆ではなくて、官憲だからである。(この點についても、總同盟たるものは、その筋の信用を得ることが肝腎である!)。今日のところでは、海軍聯盟が直ちに社會民衆黨に參加するものとは思はれぬ。けれども無產階級政黨運動の形勢次第では、官憲は海軍聯盟といふ取つておきの切り札を投げ出して、勢力のバランスを保つ必要に迫られる。

かやうに社會民衆黨が海軍勞働者を獲得することは、必ずしも考へ得られぬことではない。けれどもそれと同時に、社會民衆黨が海員組合と海軍聯盟との獲得によつて、無產階級政黨に對する勢力のバランスを有利に展開した時は、社會民衆黨の內部における總同盟の勢力のバランスにも、一大變化を來たす時だといふことを忘れてはならぬ。然しながら總同盟が指導するものとなつても、指導せられるものとなつても、社會民衆黨の性質には大なる變化はない。いな社會民衆黨は、小ブルジョア自由主義から更に反動主義に轉落するだらう。そしてこれが今後に於ける、小ブルジョア自由主義の當然の運命なのである。

この間に、勞働組合としての勞働總同盟そのものも變化する。その右方への躍進のたびごとに多かれ少なかれ避くべから

さる内部の動搖は、漸次に左翼分子をさび落とす。ゴムパース主義は益々固定する。この過程の進行が若し總同盟の大崩壊によつて中途で妨げられぬなら、それは罷業破りの請合人たる立派な反動團體にまで進化するだらう。

日本の無産者運動の内部に於けるかような過程を促進する『産婆』と『犬馬』の勞を取られたのが、『無産階級政治運動に理解ある』安部、吉野、堀江の三氏である。何人も歷史の道具でない人はない。そしてこれが三氏にふさはしい任務として、歷史が三氏のために選んだ役割なのである。

(六)

總同盟の無産政黨脱退と社會民衆黨の組織によつて立てられた波紋が收まらぬまに、更に第二の石は無産階級政黨問題の水面に投げ込まれた。即ち日本勞農黨の組織計畫である。

日本勞農黨の出現は、少なくとも二つの力の交叉を意味して居り、從つて少なくとも二つの方面から觀察することができる。

勞働總同盟はその内部において革新運動を起した組合を除名して、所屬組合及び組合員のほゞ半ばを失ひ、こゝに組合運動界に勞働總同盟對勞働評議會の對立を見た。(大正十四年四月)この大分裂のあとには、勢ひ餘震を伴ふことが豫期された。即ち第二第三の革新運動である。當時若干の組合は、進んで革新運動に參加はしなかつたが、謂ゆる公正な立場から、幹部派の暴擧に反對した。この餘震は、その後九州聯合會の除名となつて現はれたに過ぎないが、(個人的には多くの除名者を出したが)決してこれを以つて終熄したものではない。のみならず總同盟の内部に於ける不滿そのものも、この間に發展した。大正十四年の大分裂は、主として組合の內政問題に起因したものであつて、革新運動の標語は、勞働總同盟を官僚幹部の手から救ふにあつた。然るに鬪爭の進行につれて鬪爭の性質も進展し、分裂當時になると、最早や單なる組合內政の問題ではなくて、組合政策に觸れた鬪爭となり、さらに分裂を轉機として、純然たる組合政策上の鬪爭に發展し、こゝに總同盟と評議會との鬪爭は、組合運動の二つの指導精神を代表する鬪爭に展開したのである。

しかしながらこの鬪爭の展開は、これだけに止まることは出來なかつた。この間に我國の無産者運動は、組合の經濟運動から全無産階級の政治運動に進展する謂ゆる第二の方向轉換期に進入した。この作用の進行にしたがつて、組合の內政問題に發端した左右兩翼の對立抗爭は、無産階級政治運動の上の鬪爭

——非階級的な政治意識と階級的な政治意識との鬪爭——に發展した。そこで當初は組合の經濟運動の範圍內における指導精神の對立を代表した總同盟對評議會の抗爭も、政治的性質を持つた對立に進展し、從つて總同盟と評議會とは、たゞに組合運動と組合政策との上ばかりでなく、廣い意味での無產者運動——取りわけて無產者政治運動——の二つの指導精神を代表する選手の形を取るに至つたものである。

かような形勢は、大正十四年の總同盟の大分裂につゞいて起るべき第二第三の革新運動の性質の上にも、勢ひ影響せざるを得ぬ。大分裂後、最初に總同盟から除名せられた九州聯合會の主張の相違も、無產政黨問題を含んでゐた。最近に起つた總同盟の勞働農民黨脫退に對する所屬組合の脫退反對同盟も、その實例である。さらに幹部の社會民衆黨組織に反對して、總同盟所屬組合にかなりの部分が、公然、日本勞農黨の組織運動をもつて之に對抗するに至つたのは、その最も顯著な現はれである。（今日は、組合運動の政策や指導精神についての鬪爭が、もはや組合の經濟鬪爭の範圍內にのみ局限することが出來ないで、必然により廣き無產階級政治運動の問題と結びつかさるを得ぬことは、ひとり勞働總同盟の場合ばかりでなく、たとへば最近に勃興した組合總聯合關東地方改造同盟の運動によつても立證せられてゐる。）

斯くの如く、大分裂以後における總同盟內部の抗爭は、漸次に形と性質を變へ、今日は純然たる政治運動上の抗爭對立となり、大正十四年の抗爭對立とは關係のない全然別個の運動であるかの如き觀を呈してゐるにも拘らず、實は當年の對立抗爭の發展であり續きであつて、今度の日本勞農黨の組織運動は、それが總同盟の內部に關する限りにおいては、大正十四年に總同盟を眞つ二つに分裂せしめた革新運動の續づきであり、即ち第二の革新運動であつて、これを言ひ換へれば、當年の革新運動によつて始まつた總同盟內部に於ける指導精神の分化發展と、その結果としての總同盟の分解ないしは崩解作用の續きに外ならぬものである。（總同盟側から日本勞農黨の組織に參加してゐる人々のうちには、現に昨日まで社會民衆黨の組織に協力した人もあり、また現在の幹部との勢力關係から新政黨の組織に走つた人もあつて、その動機は必ずしも不純のそしりを免かれぬと批評する人もある。若しこれを事實としたならば、少なくともその範圍においては、日本勞農黨組織の運動は、總同盟內部における單なる反幹部運動の性質を持つわけになる。そしてこの反幹部派の運動が、總同盟外の謂ゆる『中間派左翼』分子の勢力と支持とを背景として行はれてゐるといふことになるの

である。個々の個人について見れば、かような動機と意識とからこの運動に參加してゐる人が、或はあるかも知れぬ。けれどもこれは日本勞農黨運動の意義を前述の如く解釋する上に、何等の妨げとなるものではない。むしろ個人的には異つた色々の動機と意識とが、大なる形勢の流れの道具となつて働らいてゐるのである。）

（七）

日本勞働黨運動のいま一つの方面は、謂ゆる『中間派左翼』の結成である。

意識的右翼（主として總同盟を指す）と『小兒病的』左翼（主として組合評議會と農民組合の一部を指す）に對して、その中間に立つ分子を謂ゆる『中間派左翼』として恆久的に別個の一勢力に『結成』しようする理論は、近頃一部の人々によつて熱心に主張せられたところである。この主張は、理論としてはその後發展してゐない。むしろ終熄したかの觀がある。それにも拘らず、日本勞働黨の組織は、この『中間左翼結成』の主張が事實において進行し、若しくは進行しようとしてゐるものに外ならぬ。現に日本勞農黨組織の運動には、謂ゆる『中間派左翼』をもつて任ずる多くの要素が參加してゐるばかりでなく、その聲明書の基調となつてゐるものは、かの『中間派左翼結成』の思想である。そしてこの事實のために、日本勞農黨の組織計畫は社會民衆黨の場合以上に、且つ全然異つた意味において、無産階級政治運動の上から重要視せられてゐるのである。社會民衆黨の場合は、無産階級政治運動の陣營から、小ブルジョア的非階級的政治運動が離脫し去ることを意味してゐるが、日本勞農黨の場合は、無産階級政治運動の戰線が二つに分れることを意味してゐる。無産階級政治勢力の眞實の分裂は、社會民衆黨の場合ではなくて、日本勞農黨の場合だからである。

無産階級運動の二つの方面――經濟運動と政治運動――とに亙つて（その當面の目標は勞農組合の全國的總聯合の組織と、勞働者農民の單一な階級的政黨の樹立である）、今日、二つの主張が現はれてゐる。その一つは謂ゆる『中間派左翼結成』の主張である。いま一つは、『中間派』たると中間派ならざるとを問はず、意識的右翼に反對する一切の左翼分子を結合して單一な左翼、ないしは大左翼を形成しこれによつて意識的右翼と鬪爭することが、現在の瞬間において左翼分子の當面の目標でなければならぬ、といふ主張である（私自身はこの單一左翼形式の主張者であつて、さきに『勞働農民黨と左翼の任務』、『中間派左翼結成か單一左翼の形成か』の二つの論文によつて、單一左

翼ないしは大左翼形成の主張を支持したのである。これに對しては左翼の理論的代表者と見做され、且つ我國におけるマルキシストの代表者と見做されてゐる雜誌『マルクス主義』の同人諸君その他からは、猛烈な反對批評を受けた。私の主張は中間派と結ばんとするものであるとして非難され、その主張は、私が辯證法を理解せず、マルキシストでなくて折衷主義者であり、俗學主義者であり、日和見主義者であり、機會主義者であることの新しいもう一つの證據と認められたのであつた。私がマルキシストであると折衷主義者であるとを問はず、私の信ずるところでは、我國無産階級運動の現在の時期において、且つ當面の問題（主として組合總聯合と單一階級政黨の問題）については、單一左翼の形成にあらざれば『中間派左翼の結成』であつて、この中間にもう一つの途はないのである。言ひかへれば、單一左翼の形成に反對することは、事實の上において——理論の上では反對しても——『中間派左翼の結成』に贊成し、かつ之を促進することを意味してゐる。それ故に私は、二つの主張とは云はないで、今日『二つの主張』が現はれてゐると云つたのである。私の主張の當否は、たゞ其の以後と今日以後とにおける事實の發展をして批判せしめるの外ないが、いづれにせよ、私は『マルクス主義』の諸君とは單に枝葉の點についてでなく、根本的な點において——即ちマルクス主義と折衷主義等々とを區別するほどに根本重要な點について、根本的に見解を異にするものであることを、この機會に明言しておきたいと思ふ。）

私はもちろん、今日までに現れた謂ゆる『中間派左翼結成』の理論に推服せぬものであつて、日本勞農黨の組織が、その組織者の意圖の如何にかゝはらず、事實上、この『中間派左翼結成』論への一歩であることを遺憾とするものである。けれどもそれと同時に、無産政黨組織運動の初めから、總同盟の勞働農民黨脱退當時をへて今日にいたる我國無産階級運動の實際の形勢には、或る人々をして自ら『中間派左翼』を意識させ、その謂ゆる『中間派左翼』なるものゝ結成の必要を感ぜしめ、且つ或る程度まではその結成を可能とする事實の存在したこと、また現に存してゐることを認めるものである。それ故に、私の見るところでは、眞に『中間派左翼の結成』に打ち勝つ唯一の方法は、かような實際の事實を克服することに外ならぬ。中間派左翼結成『論』を單に理論上から、ないしは筆と紙との上から論破することは、必ずしも困難ではない。けれどもかような『事實』は論破することはできぬ。そしてかような『事實』が克服されないで依然として存してゐる限りは、中間派左翼結成論

の論破によつて中間派左派の結成其ものを論破し得たかの如く考へて勝利に陶醉することは、折角の理論的闘爭を理論的遊戯に歸せしめるものである。無產階級運動の理論は、理論的遊戯をさへも時としては排斥してはならぬほどに重要である。遊戯も、遊戯する人の意識を深めるからである。それにも拘らず、中間派左翼結成論を粉碎して勝利を感ずるものは、畢竟、觀念の辯證法的遊戯にあらざれば、小兒病的陶醉以上の何ものでもないのである。

中間派左翼の結成を可能とする實際の事實は、たゞ單一左翼形成の努力によつてのみ、よく克服することが出來る。

（八）

日本勞農黨はなほ誕生して居らぬ。この生れ出でんとする子供の行く末は、有ゆる意味に於て、それが謂ゆる中間派左翼の結成を具體化するものとなるか、それとも單一左翼の形成に發展するか、に懸つてゐる。こゝに日本勞農黨の全重要の重點がある。（今日すでに、勞働農民黨と日本勞農黨との合同の主張が聞かれるのは、この第二の方向を暗示するものとして注意に値ひする）。

社會民衆黨と日本勞農黨とに對する、勞働總同盟內部の去就については、また明確には分らない。現にいろ〳〵の分野が想像せられてゐる。これは双方の宣傳もあることゝ思ふが、實際の形勢そのものが尙ほ不確なものと認めてよい。日本勞農黨は關東方面では、鑛夫、關東合同、紡織の外、關東釀造の一部にいたるまで、關西では尼崎、灘の諸組合を獲得するといふ、樂觀的な期待をもつ人々もあつた。これに反して關東釀造や尼崎については、全然反對の報道さへもある。要するに日本勞農黨が總同盟所屬組合を獲得する數は、一般に、少くとも當初の樂觀的な豫期よりは少ないものと觀測せられてゐる。日本勞農黨が、總同盟內に獲得する數量が少なければ少ないほど、總同盟分裂の可能は大きいとも云ふことができる）。日本農民組合の方面については、本論には言及しなかつたが、たゞ私は、日本農民組合の指導者は、日本農民組合の分裂を代價に拂つてまで、『中間派左翼の結成』を實現するような愚策を取らぬことを信じてゐる。また勞働農民黨と日本勞農黨の合同は、同時に、日本農民組合の分裂問題をも解決するものであることは云ふまでもない）。

兩黨の合同が行はれず、日本勞農黨が、謂ゆる中間派左翼の結成として發達すると假定したならば、その未來はどうだらう。

日本勞農黨は謂ゆる『中間派』的立場から、左の手では右翼

を抑へ、右の手では『小兒病的』左翼を制することを標榜して、無產階級運動の謂ゆる『正道』を進むことを期してゐる。けれども若し中間の道が正しい道であるとしたならば、正しい道は全ての意味において最も困難な道であり、絕望的に不可能な道である。なぜならば中央の道、必ずしも左右兩道の中央を走つてゐる道ではなく、その左側は左の道に接してをり、右の端は右の道に連つてゐるところの道である。中央主義者が中央の道の左端を步むか右端を步むかは、步む人の正義の觀念で決定するものではなくて、主として向ふから疾走し來る電車や自動車を避ける必要によつて決定する。謂ゆる中央主義者が、左右兩翼からの壓迫の結果として、いまだ曾て中央の道の中央を步み得たためしのないのは、その爲めである。

若し今後かなりの時期の間、日本勞農黨が社會民衆黨と勞働農民黨と鼎立することになると假定したならば、日本勞農黨は自ら眞實の左翼（小兒病的左翼に對し）をもつて任じて居り、實際にも多くの左翼的要素を包含してゐる必然の結果として、右翼の勢力に對してよりも左翼の勢力に對して、大なる感受性をもつに違ひない。言葉をかへて云へば、中間派なるものは、いかなる場合にも、當然、左右兩翼からの侵蝕作用を受けることを免かれぬが、眞正左翼をもつて任ずる日本勞農黨は、勢ひ主として左翼的勢力からの侵蝕を蒙らざるを得ぬ。したがつて日本勞農黨の立黨者の精神が、左右各々の手で左右兩翼を抑へるにあつたにせよ、その存在のための鬪爭は、主として左翼に對して行はれざるを得ぬ。即ち双手をもつて左翼を抑へんとして尙ほ足らざることを經驗するに違ひない。

この單純な、しかも避けがたき情勢の推測だけから結論しても、『中間派』としての日本勞農黨の行くへは明かである。

中間派左翼の結成か、ブルジョアジーと結託した意識的右翼に對する、單一左翼——ないしは大左翼——の形成か。少くとも今日及び今日以後における近き將來における無產階級運動の重心はこの問題に存してゐる。そしてこの問題は、先づ差し當り、日本勞農黨をめぐつて開展する。私は日々に高められ且つ擴ろめられてゆく無產階級の階級意識は、必ずやこの問題を合理に解決することを疑はぬ。全國的政黨運動の混亂に應じて、地方政黨もまた所在に起るだらう。無產階級政黨運動は今や極度の混亂期に突入した。それにも拘らず、私は日本の無產階級は、必ずやこの溶鑛爐のうちから鞏固な階級的結合を鍛へ出し、打ち破ることのできない政治勢力を提げて、この混亂のうちから躍り出ることを確信する。勞働者と無產農民との、全階級的單一政黨へ！（十二月二日）

無產政黨戰線上に於ける諸派の對立關係

大山郁夫

一　激震後の新狀勢

無產政黨の行動開始の前夜に、その戰線の上に一大龜裂が出じた。斯くて、さきに生れた日に壓殺された農民勞働黨の跡を追うて、初めから單一無產政黨主義の大旆の下に結成されてゐた勞働農民黨のほかに、從前から單一無產政黨主義を嘲笑し續けて來た日本農民黨及び社會民衆黨が、新に名乘りを上げて出て來たばかりでなく、更らにそれに續いて、別に單一無產政黨主義の一派を立てようとしてゐる日本勞農黨が樹立された。で、無產政黨運動上におけるかうした大激震が齎らした新狀勢として、結局、同じ單一無產政黨主義を標榜してゐる新舊二黨、及びそのほかに、その主義を背に向けてゐる二新黨が、ヅラリと肩を並べて、その戰線の上に立つやうになつたのである。

豫想されてゐる第五十二議會解散後の總選擧に於ては、それ等の四つの無產階級政黨が一團塊となつて、一方の側に共同戰線を張つて、他の一方の側に於けるブルジョア諸政黨の總聯合から成る一陣營を向ふに廻して、かうした明確なる階級的對立關係の下に於て、熾然なる無產階級的政治鬪爭意識の下に、實際的政治行動に乘出すであらうか？　若しさうとすれば、問題は兎も角比較的簡單になるであらう。少くともその際には、一旦形式的に破れた單一無產政黨主義が、實質的に實現されることになるであらう。

けれども、無產政黨運動開始以來、その政治行動への準備時代に於て絕えず動搖に動搖を重ねて來たその陣營內に於て、言葉の充分な意味に於ての現實的政治行動への突入時代を一分界線として、それからさきずつと引き續いて、そこに完全なる共同行動が示されるといふやうなことは、果して、常識的にも理論的にも、相當の程度に可能なことだと我々に考へ得られることであらうか？　この問ひに對しては、我々は、肯定的に答へ

得る有力な基礎を何一つ持たないのである。換言すれば、我々が我々の現在の立場から展望し得る限りの範圍内では、無產政黨の分野に於ける微震乃至激震、及びそれに伴ふ刻々の離合集散の關係は、無產階級的政治鬪爭意識の燃燒が必要とされる社會進化過程の最後の段階に間近き日までは、尙も脈々として續いて行くであらう、――と、かういふのがむしろ正當であるやうにさへ、我々には考へられるのである。

二　單一無產政黨への道程上に於ける分裂と合同との反復

我々は、何の根據もなしにかうした臆測を逞しうするやうなことを、極度に愼まねばならない。だがそれと同時に、我々がさうした根據が確乎として實在してゐるのを見てとる時には、我々は決してそれから眼を背けてはならないのである。かういふことは、無論、我々が單一無產政黨主義に絕望してゐるといふことを意味するものではない。我々は何處までも、無產階級の對支配階級的政治鬪爭の最後の勝利は、只究極に於ける單一無產政黨の結成を通じてのみ可能なことを確信してゐるのみならず、同時にまた、さうした日が必ず到來すべきことも確信してゐるのである。我々がさうした確信を持たないで漫然と無產階級の政治運動に參加するやうなことがあつては、そのこと自體が大なる矛盾でなければならないのである。只我々のこの確信が單なる一片の空想に過ぎないものでなくて、それが堅實な現實的基礎の上に築き上げられなければならないものだとすると、我々は、我々の確信が實現されるであらう日までに、幾多の悽慘な、險惡な、紆餘曲折に富む難路が、行く先々まで延びて行くのが見られるであらうことを、豫め覺悟しておかなければならない。そしてそれが單一無產政黨への唯一の道なのである。

今から約八十年前に、マルクス及びエンゲルスは、無產階級運動上の不朽の文書としてのマニツエストに於て、無產大衆を階級に、從つて政黨に結成する組織が、如何に勞働者たちの側に於ける相剋のために、完全なる團結への途上に於て、限りなき分裂に分裂を重ねるものであるかを指摘した。然し彼等ほど、衷心から無產階級の運動が『不可測の大多數者の利益のための不可測の大多數者の獨立的運動』であることを信じたものはなく、また彼等ほど、無產階級運動の最後の勝利の日の現實的到來の必然性を疑はなかつたものはあるまい。けれども、彼等は決して、彼等のさうした熱烈なる希望と確信とのために、眼前の當然に見るべきものを見ることを忘れるやうなウトピストでも樂

天家でもあり得なかつたである。

だが、我々はマルクス及びエンゲルスのさうした說明をまつまでもなく、無產政黨運動開始以來の我々自身の直接經驗からでも、單一無產政黨への數限りなき障碍の實在を指點することが出來る。殊に帝國主義政策の漸增的擴充と共に、支配階級が刻一刻と眼立つて反動化的傾向を示し出してからは、無產階級は彼等の手から出る懷柔と彈壓とのあらゆる手段及び政策の間に板挾みになるやうになつて來てゐるばかりでなく、少くとも無產階級の前衞諸分子は、常に支配階級が擁する、、權力に直面せしめられて、そこから絕えず放射される砲火の下に前進しなければならないやうにさへ、なつて來てゐるのである。そして、かうした大體上の位置の下に於て、支配階級の陰險惡辣を極めた分裂政策が巧妙に行はれて、無產階級の陣營を極度に攪亂しようとしてゐるのである。然かも、無產階級の陣營內に於ても、それと相呼應して階級的裏切りの行動をするものが隨時に飛び出したりするやうなことも普通のこととして見受けられ、よしまたさほどまでにならなくとも、所謂職業心理若しくは團體利己心が全階級的意識を壓倒して、その內部に軋轢や紛擾の空氣が不斷に釀し出され、それが嵩じて無意味な仲間割れが頻々と演ぜられるやうなことは、餘りに始終に起り勝ちのこととして見られるのである。

我々は、現在の無產諸政黨が現實的政治行動を開始するやうになれば、時々刻々の狀勢に應じて、それらのすべてを提携せしめる媒介物となる力のある幾つもの共同鬪爭題目が存してゐることを知つてゐる。だが、それと同時に我々はそれ等の各々を相互から阻隔させる目的のもとに、それ等のすべての上にさまざまに働きかけつつある諸原因もまた無數に實在してゐるといふことを無視してはならないのである。さうした諸原因を假りに類別することが許されるならば、それらの一部は支配階級の側に見出されるものであつて、それは前にも言つた通りに懷柔及び彈壓の政策もしくは手段となつて、二面的に現はれて來る。それからまた、他の一部は無產階級の側にあるものであつて、このこともまだ前に述べたことだが、それは主としてそこでの職業心理とか團體利己心とかの形をとつて、或ひは現在し、或ひは潛在してゐる。そして、かうした職業心理や團體利己心が全階級的意識を壓倒する程度が增せば增すほど、支配階級の分裂政策が益々彼等の思ふ壺に嵌つて來るのである。そして、それが彼等にとつて最も有利な狀態を現出せしめて來る場合には、無產階級の右翼諸派がそれぞれの程度に彼等の懷柔手段の餡を舐めさせられつつ『黃色』諸團體化して溫和しく納ま

つてゐる傍に、その左翼諸派が赤色諸團體として孤立せしめられて、彈壓手段の直接の目的物とされ、殆んど無拘束に追跡される地位に突き落されるのである。で、かうした狀態の下に於ては、それ等の右翼諸派中の少くとも或るものは、同じ無產諸政黨の列上のある他のグループに對してよりも、寧ろ却つて支配階級側の任意の或るグループに對して、より多く相互的索引を感じるやうにさへなるのである。實際問題としては、かうした狀態の現出の場合より以上に、支配階級側に有利なものとして想定し得られる如何なる他の場合も考へ得られないのである。

現在我國の無產階級の政治的戰線上に生じてゐる大混亂は、支配階級と無產階級との兩側上に於ては、今しがた私が上げたやうな現原因の交互作用の複雜なる錯綜から生じて來てゐるものに外ならないのである。我々が我國の無產階級的政治運動の主要問題の解決に立ち向ふ前には、我々は先づこの點を確實に把握しておかなければならないのである。が、その次に我々にとつても大切な仕事は、その無產階級の政治的戰線上の大混亂を現狀の下に於て、現在の各無產政黨がそこでそれぞれに占めてゐる地位――よしそれが暫定的若しくは過渡的なのものに過ぎないにもせよ――を精確に見定めておくことであらねばならぬ。で、私はそれをこの次の論題にすることとする。

三　無產政黨戰線上に於ける各黨の位置

我々が單に無產諸政黨の陣列だけを見渡す時には、先づ第一段には、右翼諸派としては、日本農民黨（以下略して「農民黨」と呼ぶ）と社會民衆黨（以下略して「民衆黨」と呼ぶ）とを算へることが出來、また左翼諸派としては、日本勞農黨（以下略して「日勞黨」と呼ぶ）と勞働農民黨（以下略して「勞農黨」と呼ぶ）とを算へることが出來る。無論、これは最も素樸な――むしろ『皮相的』な若しくは『形式的』なと言へるほどの――見方である。だが、同時にそれは、我々のこれから先きの考察の出發點とするには、少くとも最も簡單な類別だと言ふ理由によつて、最も取扱ひに便利な構成だと言へるものである。

けれども、若し我々が、或る理由――それは後に述べる機會があらう思ふ――によつて、勞農黨を極左翼として見、且つ農民黨を極右翼として見るときには、さしづめ民衆黨と日勞黨とを中間派の地位に据ゑなければならないものであるが、しかしそのうちでも前者が右寄りの中間派であり、後者が左よりのそれであることは、言ふまでもないことである。

だが、以上は單に無產諸政黨の陣列だけを取り纏めて見たところについて言はれたものであるが、然し、若し我々が多少こ

の觀點を變へて、既成ブルジョア諸政黨をもその分野の上に加へた上で、それ等の綜合體を、全面的に――と同時にその內部的聯繫についても――把握するときには、我々は更らに別樣の觀察をすることが出來るのである。即ちその場合には、我々は先づ第一に、農民黨と民衆黨とは、無論それ等の間に幾分右寄り左寄りとの差異こそはあれ、先づ大體としては相集つて一團を成して、――この組合せには後に記するであらう通りに、相當の或る理由がある――ブルジョア諸政黨を一團として見た最右翼と、上掲の第一の場合に於て無産政黨の左翼として算へられた日勞黨及び勞農黨を一團として見た最左翼との間にあつて、一の緩衝地帶をなしてゐる中間派である。との樣に見ることも出來るのである。

次に我々は、この最も全般的な綜合的對立關係のうちからブルジョア諸政黨だけを切り離して、再び無産諸政黨だけの陣列の上を見渡すときには、我々は農民黨と民衆黨とを一團として見た右翼と、勞農黨が單獨に構成する左翼との間にあつて、今度は日勞黨が一の緩衝地帶をしてゐる中間派となつて來るのを見ることが出來るのである。

これ等の諸般の配列の綜合のうちから無産諸政黨だけから或る陣列の上における各黨の地位を見定めることが出來るとすると、農民黨の右翼的地位と、勞農黨の左翼的地位とは、どの場合にも動かないところではあるが、然し民衆黨と日勞黨とは、それぞれの場合に應じて右と左とに偏ることがあるが、大體上に於ては中間諸派を構成してゐて、しかもそのうち日勞黨は、中間諸派中において、最も多く中間派的要素を保有してゐるものと見られるのである。

更らに我々が、この陣列の上に、再びブルジョア諸政黨を一團としたものを拉し來つて加へるときには、我々は、農民黨と民衆黨とが最も多くそれに接近してゐて、しかもそのうち、前者が特にさうなつてゐるのを見るのである。

かうした考察は、無論形式上の觀察を主としたものであるが、しかし形式が內容と或る意味に於て不可分の關係を持つものとすれば、我々がかう言ふ風にして得た觀察から、各黨の位置を見定めておくことは、少くともそれの將來に期待し得られる可能的移動を豫測する際に、多大の程度に役立つものと見ることが出來るやうに思ふ。

四　議會の內外に於ける離合集散關係

私は前に、無産諸政黨が現實的政治行動を開始するやうになつた曉には、隨時に彼等のすべての間を繫ぐやうになるであら

うところの様々の共通の闘爭題目が存してゐることを述べたが、この點に關しては、先づ第一に、實際上現在の我國に於ては、無産階級全體の上に强烈なる彈壓を加へることを目的として新たに制定された治安維持法を筆頭として、幾多の同類項に屬する諸法令が實施されてゐるやうな狀態が存立してゐるのであるから、所謂『自由獲得』の名の下に於て、それ等の諸法令の撤廢のために無産諸政黨のすべてが、或る時期に立つて、或る程度の共同行動を執り得る機會は、かなり多く出て來る見込みがあるのである。それから次に、それらの諸法令が最終的に撤廢されない限りは、無産諸政黨中の何れにしたところで、少くともその綱領や政策の上に、直接に無産階級的政治闘爭意識から出て來る各種の題目を自由に掲げることが出來ないに決まつてゐるので、彼等はすべて一齊に或る期間に處する過渡的手段として、社會政策的色彩の深い諸要求を提出するを決してゐるやうである。更らにまた、彼等のすべては一様に、無産階級の立場から合理的と見られ得る勞働及び農民組合法の獲得を期することなどを公言してゐるから、この方面に於てもまた、彼等の間に於ける提携の餘地が、全然、ないではないやうである。

けれども、それと同時に、彼等の間を阻隔するべく動いてゐる別の諸原因が、同様に、若しくは少くとも今後の或る期間に亙つては、同様にといひ得られる程度以上に、多く存在してゐるといふこともまた當然我々の考慮の中におかれなければならないものである。それらの諸原因中の議會行動以外の分野に屬するものについては、私は既に前に一言しておいた。だが、無産諸政黨の行動の上に於ては、彼等の間に於ける複雜なる離合集散の動きを惹き起すであらうところの楔機が、更らに一層多岐多端に現はれて來るであらうことが、我々は今のうちから、よく想像が出來るのである。

彼等の間に於けるさうした複雜なる離合集散の動きは、無産諸政黨の陣營内の左右兩翼及び中間の諸派の各々の支配階級全體もしくは支配階級側の諸集團への表面上及び裏面上の諸關係によつて決せられることもあらうし、また議會での討議に上る諸問題――たとへば外交上、軍事上、教育上、社會上、等々の無限に多くの諸問題――に對する彼等の各々の態度によつて決せられることもあらう。更らにまた、彼等の支配階級側への諸關係が、彼等の議會での態度に反映されることもあれば、遂に、彼等の議會での態度が、彼等の支配階級側への諸關係の上に影響することもあらう。かうして、議會の内外に於けるすべての狀勢が、容易に端倪を許さないやうに錯綜轉變してゆくに、

違ひないのである。

五　各黨の理論的及び實踐的立場の比較

前節で述べた一點に關しては、現在無產諸政黨の陣營內の左右兩翼及び中間にある各派の形成過程、及びその綱領や政策などの上に現はれてゐる指導精神を、この際一ト渡り調べておくことが、彼等の各々の將來の態度の大體上の可能的傾向の一端をなりとも豫測する上に於て、非常に必要なことであらねばならぬ。

農民黨は、早くから單一無產政黨主義を否認して、勞農黨以外に別に一黨を樹立する用意に取り掛つて居た日本農民組合同盟が、その主導力となつて、着々その組織計畫を進めつゝ、終に今秋の十月に至つて始めてその具體的結成を見たものである。が、民衆黨はそれに反して、勞農黨の創立以來その中で有力な一地位を占めてゐた日本勞働總同盟が、同じく今秋の十月にそれから脫退してから、新たにその背後に於ける支持者——若しくは指揮者——となつて、急に計畫し組織したものである。尤も、總同盟にしても、勞農黨內に居たうちからして旣に、絕えず單一無產政黨主義に水を向けて居たことは、一般的に周知されてゐる事實である。かくして、農民黨と民衆黨とは、共に單一無產政黨主義に對して共鳴を拒んで來た點に於て、全然同一の軌道を步んで來たものである。けれども、ただそのことの動機に至つては、兩者の間に多少の差異が見られない譯ではない。即ち前者は主として、都會勞働者と區別された意味に於ての農民の立場を强調してゐるのに反して、民衆黨は主として、小ブルジョア的諸要素と勞働階級との共同行動の必要を力說してゐるのである。

もとより、農民黨は一方に於て、農民本位の立場を强調してゐるとは言ひ條、他方に於てはまた、民衆黨と同樣に、小ブルジョア的諸要素の獲得のためにも、銳意努力してゐるのである。それ故に、農民黨はいつも民衆黨と調子を合はせて、無產階級の利害關係といふよりは、寧ろ『勤勞階級』の利害關係を云爲することに沒頭してゐるのである。從つて兩黨とも全力を擧げて、無產階級中の左翼諸派を排擊することに腐心してゐるのである。で、農民黨はその宣言に於て、勞農黨全部を『矯激なる直譯的共產黨的色彩』の濃厚なものとして痛罵してゐるまでの程度に突進してゐる傍らに、民衆黨は幾分控へ目にではあるが、その綱領中に於て『社會進化の過程を無視する政黨』を旣成諸政黨なみに排擊することを明言して、同一の精神を高揚してゐるのである。

我國に於ても、支配階級の反動化的傾向と相表裏して現はれてゐる『資本の攻勢』が段々と激甚化するにつれて、小ブルジョア階級の一部から、ファシスト的勢力が結成されて行くであらうことは、誰れにも容易に想像し得られることである。そして、そのファシスト的勢力から成る團體の役割は、單に支配階級と無產階級との間の緩衝地帶を構成するに止まらないで、資本家や地主の一團をして、安心して靜かに無產階級の搾取によつて私腹をこやすためのあらゆる活動に從事するを得しめるために、それから來る財力的後援を仰ぎながら、無產階級の中から擧げられる一切の反抗運動を彈壓するといふ一點にあるといふとも、必然の成行だとしなければならぬ。そこで、さうしたファシスト的團體が全國的に活躍するやうになつた曉に於て、無產階級戰線の右翼諸政黨は、それに對して果して、どういふ態度に出るであらうか？　我々は、彼等が、もしくは彼等の或るものが、さうした場合に、單に消極的に中立的立場を守るだけに止まらないで更らに積極的に參加するやうなことがないにも限らないことを虞れる。殊に農民黨は、その綱領中に於て、無產階級的立場から見て何の意味だかが、はツきり摑めないところの『社會正義の實現』だとか、『產業國策の確立』——このブルジョア諸政黨の口眞似みたやうな聲言は、或ひは國家資本主義への猛進を約束するものかも知れない——だとか、『農村文化の樹立』だとかのやうな樣々の諸項目をならべて、ブルジョア諸政黨の祖國主義と共鳴するやうな『日本國本の振起』といふ一項目を特に置いてゐるところなどを見ると、それにファシスト化の危險が最も多く含まれてゐるものとする豫想が、まんざら、根據のないものでもないやうに考へられるのである。

これ等の右翼諸政黨に反して、左翼側の日勞黨と勞農黨とは、共に積極的に無產階級的立場を强調してゐる點は一つである。だが、そこにもまた、兩者の間に可なりに色合ひの相違はある。そのうち、『左右兩翼の小兒病』を排撃することを宣言して出現した日勞黨の上に、中間派的特徵が極めて露骨に顏を出してゐることは、前に言つた通りである。

私には無產諸政黨中の中間派といつたやうなものが、永久に存續し得べき社會的基礎を缺いでゐるものであることを信ずるが故に、現在表面上可なりに有望に見られてゐる日勞黨の前途にしても、實は寧ろ甚だ悲觀すべきものだと言はない譯にはゆかないのである。それに、日勞黨の形成過程は、それをして、無產階級的立場から公明正大なものとして我々の眼に映ぜしめない事情もあるのである。殊に、單一無產政黨主義を叫んで日勞黨を組織した人々が、何故にその同じ主義の下に既存してゐた勞

農黨に加入して來なかつたかは、少くとも理論的には、到底把握ができないことである。假りに若し、彼等が理論よりも感情や行き掛りを重んじてゐるものとすれば、彼等の組織してゐる日勞黨は、無産政黨としては、甚だ頼りないものだ、といはなければならないのである。

ところが、勞農黨だけは始終一貫して、立黨の指導原理としての單一無産政黨主義を守つて來て居て、そしてそれに贊同して入黨して來るものを少しも拒否しない態度を示して來たのである。もとより、勞農黨の內部に於ても、將來その現實的政治行動の上に於て、政策や戰術などに關して、意見が多岐多端に分れるやうな現象が絕えず生ずるであらうことは、當然のこととして推測し得られるが、しかしさうした場合には、それは自黨內に於ても活潑に行はれるべきとされる理論闘爭によつて、その爭點を解決することを決心し、用意してゐる。この點に於て勞農黨は、無産諸政黨の陣列の上に在つて、最も明確なる立場を持つて居るものだといへるのである。ただ、それだけに、それは現在及び近き將來に於て、絕大なる難局を潜り拔けつつ進まなければならない境遇におかれてゐるものであることは、たしかに事實である。それは荊棘の道である。だが同時に、それはしかし、眞の單一無産政黨への——從つて無産階級的政治闘爭の最後の勝利への——唯一の道でもある。

人口問題の生物學的一考察

宮島幹之助

目次

一　緒言

人口問題は近頃我國朝野の間に喧しく論議せられ、政府も亦世論に鑑み、人口及食糧問題の一大調査會を設けて其對策を講ぜんとし、更に移民問題に神經過敏な英米の諸新聞の論評をも惹き起すに至つた。現下我國の直面して居る問題は頗る多いが、何と云ふても人口問題ほど我國の現在及將來に涉る重要な問題はあるまい。その解決策如何は直ちに國民の實生活に影響し、國運の消長を支配するもので、學者は勿論政治家も實業家も共にこの問題に深甚の考慮を拂ふに至つたことは喜ぶべきである。然し我帝國の最近大正十四年の統計は人口の自然增加八十七萬五千の多きを示したとはいへ、これは決して急に突發した事件ではないのである。明治の政治革新に際し建てられた國策の然らしむる處で、今更驚くにも當らねば、又狼狽するにも及ぶまい。むしろ吾人は政治更新當然の歸結として生ずる人口增加の對策を何故今日迄確立せなかつたかを歷代の爲政家に質したいような氣がする。我國土は狹小にして、其處に住む人口は多く、その密度は一平方里二四二五人で、世界中、白耳義、和蘭、英吉利に次で頗る高いことや、又我國は世界有數の山國で、耕作に適する面積少く、國內に殆んど山を見ない白耳義、和蘭、英吉利などと比較にならぬことは、夙に分つて居たことなのである。然るに近年に至り、脚下から鳥の飛出したように、人口問題が盛に論議さるゝに至つたのは何故であらうか。

恐らくこれは大正九年と大正十四年の國勢調査により、我國の人口に關し正確な數字が分り、事實がはつきりして來たことが、その動機となつたのではあるまいか。前後二回の國勢調査により我國の人口は最近五ヶ年間に增加すること實に六百四十六萬五千余、內地だけでも三百七十七萬三千余で、年平均七十五萬の增加に當り、然も帝國の領土は擴張せず、外北米や濠洲に於てはその門戶が吾々日本人に對し固く鎖され、內產業は不振にして食糧は豐ならず、爲めに人口增加が焦慮の種となつたと見るべきである。國家の興亡や民族の消長は一大自然現象であるから、之を生物學上から靜思するにあらざれば、妥當な對策は到底案出され得ないのである。依て筆者は我國の人口問題を經濟や政治を離れた、生物上の見地から靜に考察して、世の識者の教を乞はんと欲し、敢て此稿を草したのである。

二　人口の增加と國運

世界史上十九世紀初葉に於ける顯著な出來事の一として、アングロサクソン民族の激甚な膨脹が先づ擧げられねばならぬ。此事象は恰も商工業の發達と能く一致してゐる。此時代は丁度歐洲に於ける佛國全盛の末期に相當する。元來佛國は久しく歐洲の牛耳を握つてゐた西班牙の後繼者としてあらはれ、覇を全欧に唱へ、その繁榮はナポレオン時代に頂點に達したと言はれてゐる。佛國と一葦帶水を隔てた島國英吉利の擡頭し初めたのは、經濟的勢力によるもので、西班牙や佛蘭西の隆盛に赴いたのとは全く其の趣を異にしてゐる。然し此等隆運に向つた國の繁榮は、何れも國民の增殖に基いたのである。國運勃興のヴクトリア女王時代は實に人口增加の最盛んな時で、同時代の後半期に增殖率は殆んどその頂點に達した。而してこの民族膨脹は獨り母國内に止まらずその海外植民地たる北米に於ても、濠洲に於ても同様であつた。恰も西班牙が三百年前世界的に發展し覇權を握つてゐた時代の狀勢に彷彿たるものがある。一世紀を經たる近代に及び商工業の活舞臺は、アングロサクソン民族の獨占を許さゞるに至つた。獨逸民族は先づその頭角をあらはし、强き忍耐力と科學の應用とによりてその能力を發揮し、英の好敵手となり、又他の方面にも有力の競爭者が簇出した。殊に曾ては英を祖國とした北米合衆國は、豐富なる天然資源を彈藥として、世界の實業戰場にあらはれ、英國の一大脅威となつた。而も歐洲大戰後に及び、勢の赴くところ停止するを知らず、流石の英國も今やその覇權を固守する能はざるの狀態に瀕したのである。二十世紀に於ける商工業の發展による國運の消長も、その根蒂は何れにあつたかといへば、人口の增加に外な

らぬ。政治にせよ、商工業にせよ、活躍の原は民衆にあるのであるから、人口の増加せぬような國は決して興隆し得ない。例へば佛國は過去五十年來漸次人口増加率は減退した。殊に生產率の低下は甚しく、その生產は僅かに死亡を補ふに過ぎず、殊に歐洲大戰によりて數百萬の壯丁を失ひ、爲めに死亡率は生產率を超過し、近き數年間人口減少の悲むべき事態に遭遇したのである。英國は未だ佛國の如き程度には到達してゐないが、已に全盛期をすぎて國民の生產率は迅速に低下し、歐洲各國並の水平線に達した。歐洲各國に於ける生產率の低下は一九〇〇年以來著しく、殊に歐洲大戰の餘快は一般死亡率の昇騰となり、玆に人口増加は殆んど停止せんとするの狀勢を呈したのである。英國に於て生產率の最高を示したのは一八七六年で人口毎千三六・三であつたが今や低下して二一・六（大正十年―十三年平均）となり、彼國有識者の深憂の焦點となつてゐる。

然るに我國に於ては維新以前人口統計の調査は全くなかつたので知る由もないが、明治大正年間に於ける全國の生產率を見るに、漸次向上し近代は常に人口毎千三〇・〇以上の高率を示して、文明諸國の人口趨勢と相反するやうである。今全人口に就て日英兩國の明治十九年（一八八六年）より大正十三年（一九二四年）に至る四十年間の毎五年平均の生產率死亡率を比較すると、第一表の如くその間に著しき差異あるを認め得るのである。但日本の統計で明治十九年より三十年頃迄の數字は精確なものとはいへぬことを注意して見ねばならぬ。

第一表日英兩國の人口每千生產率死亡率比較
（明治十九年―大正十三年）

年次	生產率		死亡率	
	日本	英國	日本	英國
明治十九年―廿三年	二七・八	三一・四	二〇・二	一八・九
同廿四年―廿八年	二八・〇	三〇・五	二一・三	一八・七
同廿九年―卅三年	三〇・三	二九・三	二〇・二	一七・七
同卅四年―卅八年	三二・七	二八・一	一九・九	一六・〇
同卅九年―四十三年	三二・七	二六・一	二二・一	一五・一
同四十四年―大正四年	三三・五	二三・七	二〇・〇	一四・六
大正五年―九年	三三・〇	二〇・三六	二三・六	一四・七
同十年―十三年	三三・六	二一・一六	二二・三	一二・八

上表に見る通り英國で一八八六年―一八九〇年頃迄の生產率は人口每千三〇・〇以上の高率を示したが、漸次遞減し最近は二〇・〇前後に低下した。その間死亡率も人口每千一八―一九から一二―一三に降り辛ふじて人口の減少を免れてゐるが、人口増加率（生產率と死亡率との差）は一二・五から八・八に降り、諸般の衛生施設を完備して益死亡率の低下を圖るにあらざれば、佛國と同一の運命をたどることを免れ得ない形勢にあ

る。之に反し我國の生産率は近代に至るも尚三〇以上の高きを示し、殊に最近大正十四年の統計では三四・九の最高レコードをさへ示し吾人をして意を強ふせしめてゐる。然し死亡率は依然として四十年前と大差なく、年によりては反てより高き率を示し、その結果人口增加率に於ては生産率の著しく低下した歐米諸國と大差がない。これ日本が人口に就ても粗製濫造の國と批評される所以であらう。然も我國の生産率は何時までも今日の如き高率を保ち得るとは生物學上の原則や、他國の實例から考へて、保證され得ないのである。我國は西洋文明を輸入して已に六十年の星霜を經、陸上には汽車電車自働車走り、空中には飛行器横行し、電信電話は、全國に普及し、又電燈は山間の僻邑にまでも輝き、ラジオの音波は全國に傳播する大正の今日尚死亡率は依然として四五十年前と大差なき二二乃至二三の高率を示すといふのは、如何なる理由に基づくのであるか。吾人の探究すべき問題であらねばならぬ。

三　人口增減の諸因

人口の增減は生産率の高低に因ることは言ふまでもないが、生産率を支配する原因は、之を人的原因と自然的原因とに大別することが出來る。即ち近代の文化生活に伴ふ現象として、結婚が困難となり且男女共に遲く結婚する傾向を生じたとは、直ちに生産率に影響して居る。統計學者に從へば日本の生産と婚姻との相聯的價値は四〇%であるといふから兩者の關係の親密さは他に優るのである。例へば近年に及び二十才までの男女の婚姻が減少して三十才以上の婚姻の割合が漸次增加し、所謂晩婚の傾向の著しくなつたことは結婚者の平均年齢を見ても明である。即ち明治三十二年には男二七・五八才・女二二・九八才であつたのが、大正十三年には男七二八・三才・女二三・九九才といふ數字を示して居る。更に人口の都市集中なども生産率に影響する一因をなすことは明な事實である。現に我國の商工業中心の都市及其附近町村と、農業地の人口增加を大正九年及大正十四年の國勢調査に基き比較すると、僅か五ヶ年間に都市及其附近町村の人口增加率は一七・八%であるのに、農業地では僅かに四・三%である。如何に急激な人口の都市集注が我國に於て行はれつゝあるかを知るに足るのである。その他女子の職業增加や、酒類の濫用、花柳病の蔓延、並に人工的避姙の流行等も直接生産率を低下せしむる原因となるのである。然し此等の人的原因の生産率に及ぼす影響は之を自然的原因に比べると、微々たるもので言ふに足らぬ。何をか自然的原因と稱するのであるか。即ち死亡率殊に乳兒死亡率の高低、人口の密度、食糧等

がその主要なものである。死亡率と生産率との關係は二三・二%又乳兒死亡率と生産率との關係は二三・六%の相聯的價値を示し極めて密接であるが、生産率高い場合に死亡も亦多いと通常は考へられてゐるが、生物學上から考察すると、むしろ死亡率が主で生産率が之に隨從する現象とも見られるのである。例へば普通の魚類は一匹で數千乃至數萬の卵を産むが、その大部分は發育期間に或は他動物の餌となり、或は不適當な境遇に遭ふて死亡し、僅かに一小部分の卵のみが孵化發達して、成魚となるのである。魚類の中でも淡水に棲むトゲウオの如きは巣を營み、産卵後雄が之を守護し、外敵を防ぐので、雌の産む卵も數十箇にすぎない。次に鳥類では一般に巣を造くり親鳥は其處に産卵し、孵化して雛となつた後までも、食を與へ愛護するので、生む卵の數は少ない。更に哺乳類になると、子は長期間母胎内にありて發育し、後生れ出ても尚一定期間は哺育保護されるので、卵生の魚類は勿論鳥類に比べても子の數は少いのが常である。要するに子の生れてから成育するまでの難易により、子の數は略定まつてゐる。反言すれば發育期間死亡率の高い動物ほど、多く生れるので多死多産は一般生物の通則といふべきである。人類に於ても文化の度低き種族に在りては、死亡多くして生産率も亦高い。之に反し文明國民はその文化の進むに從て死亡就中乳兒死亡減少し生産率も亦低下する。故に多死多産は低級な文化の一表徴なりと唱ふる學者もある位である。この點から見ても我國現在の高き生産率は到底永續せず、歐米諸國と同樣に早晩低下すべきものと覺悟せねばならないのである。これ自然の命ずるところであり、文化生活當然の歸結なのである。

次に人口の密度や食糧と生産率との關係は單に統計上の數字的觀察のみでは明にし難い。故にこれを實驗的に研究するのが極めて須要である。然し人類をその實驗材料に供する譯にも行かず又期間も非常に長年月に渉らねばその結果を判斷し得ない。故に生物學者は短期間に幾生代も發生する植物や動物を試驗材料として原因と思はるゝ條件を各別に討究するのである。北米ジョンスホプキンス大學のパール教授（Dr. peare）は斯道の專門家で、嘗て合衆國農務省畜産研究所在任の際鷄に就て研究し、その産卵數は飼養所の面積に正比例し、稠密度に反比例することを發見した。即ち同氏は同齡の鷄をABCの三群に分ち、A群は五十羽、B群は百羽、C群は百五十羽とし、A及B群では一羽當り面積四・八平方呎、C群のは三・二平方呎とし、食物其他の生活條件を全く同樣にして飼養し置き、一九〇四年より一九〇七年に至る滿三ケ年間各群の鷄の産んだ卵數を計算せ

じに、一ヶ年一羽平均の產卵數は、A群一二九・六九個、B群一二三・二二個、C群一一一・六八個で、A群はB及C群に優ることを知つた。これにより鷄の產卵數は全く同一の生活條件の下で、一羽當りの面積狹きときは少く、又同一の面積を占有する場合でも羽數の多い時には又少しその結論に達したのである。更に同氏はドロソヒラ屬の小蠅を飼育してその繁殖は容器內の容積に正比例し、稠密度に反比例することを確め、尙死亡率は繁殖率と全く反對の關係にあることをも證明した。獨り鷄や小蠅に於て上記の現象が見らるゝのみならず、人類に於ても亦、土地の廣狹及人口の密度は重大な影響をその增加率に與ふべしと推論して居る。日本民族の住む土地狹少にして人口の稠密なとは早晩人口增加率の減退を暗示するものと考へねばならぬのである。

更らに生物の生存上一日も缺くべからざるものは多々あるけれどもその最たるものは何といふても食糧が第一であらう。食物の研究は近代大に隆盛に赴き榮養學なる獨立の一科目となり、文明諸國には榮養學の特別研究機關さへ設けられた。日本にも大正九年に國立榮養研究所は創設され、爾來幾多の重要な研究成績が發表された。食物は啻に生命をつなぐ資源たるのみならず。子孫繁榮上にも甚大の關係あることは、幾多の新研究により益明となつた。榮養學者は主に白鼠等に餌食試驗を行ひ實驗によりて色々の新事實を發見してゐるが、北米のマッカラム氏等（pnof. Mc-collum）の研究によれば白鼠の食料中蛋白質が不充分であると、仔が多く生れる。然し此の場合生れた仔の死亡するものが多い。之に反し白鼠に穀類（麥米等）豆。牛肉の主食品にカルシューム、ナトリウム、クロール鹽類及バタを加へ與ふるときは健全に成育し生產力も旺盛であるが、食物から鹽類を除くと成長は停止し、又バタを省けば榮養不良に陷り、その生產力も減退する。故にヴキタミンAは又繁殖に關係ありと見なされる。次に榮養價の低いと普通思はれてゐるトウモロコシ、アルファファ（牧草）及豆のみで白鼠を飼育すると、發育の度は前の食物を以てした場合に劣るが、活潑で、生產率も著しく高い。然し此場合にも仔の死亡多く、生存して成育する者が少い。更に穀類、豆、種子を基本とする食物を與へ、榮養過度となるときは、その生產力は減じ、代を重ぬるに從ひ、益その傾向は强まり、四五代の後には全く仔を產まなくなる。かゝる場合基本食に炭酸石灰、食鹽、燐酸鹽の少許を適度に加へ、尙バタ又は肝油及カゼインを與ふれば、不姙症を豫防し得ることも實驗的に證明された事實である。この他食物中のヴキタミンBが欠乏する時は生殖腺に退行變成の病的現象起り生產力がなくなるといふことも多くの研

究者によつて實驗された。エヴァンス及ビショップ氏等（Drs—Avans and Bishop）の研究によると、新鮮な萵苣菜（チシャ）、麥芽アルファファ（牧草）等の内には從來知られてゐるヴヰタミンの外に別種のヴヰタミンが含まれてゐる。このヴヰタミンは空氣中で攝氏百度に熱し、或は乾燥するも破壞せず、その少量を食餌に加へて、白鼠に日々與ふるときは、鼠の繁殖は旺盛となる。このヴヰタミンは已知のヴヰタミンＡＢＣとその性狀を異にするもので、八〇—九五％酒精及エーテルで萵苣菜を浸出し、これを蒸發すれば褐色の油狀物となるが、これを用ひて鼠の不姙症を治癒し得るといふのである。

何れにせよ榮養の過剩と不足とは、共に吾人人類の生活や繁殖に影響する處頗る大で、此方面の實驗的研究は人口問題の對策を研究する上に極めて緊要である。生産率と死亡率殊に乳兒死亡率とは相關聯するもので、已に白鼠の實驗に於ても食物の適不適は直ちに生産率と乳兒死亡率に影響を及ぼし一の原因が多死多産の不自然な結果を齎すことが分つたのである。又近頃乳汁の分泌には特別の榮養素即ち泌乳榮養素といふものがあつて之に關係するといふことが分つた。乳汁の分泌が乳兒死亡率に密接なることは分り切つた事である。今後榮養學の發達は人口問題解決の鍵となると信ぜられるのである。然るに現代の日本の爲政者等はかゝる重要の使命を有する我邦唯一の國立榮養研究所を尊重するを知らず、僅かばかりの經常費を犯りに半減して、其の機能を妨げて顧みず、徒らに人口問題に頭を悩ますのは何といふ矛盾であらうぞ。

四　諸文明國に於ける生産力の減退

前章に於て吾人は人口増減の諸因を討究し、生産率の低下は文化の必然的現象なることを知つた。今諸文明國に於ける生産率の消長を見る爲め、一八〇一年より一八八〇年に至る十年間と、一九〇一年から一九一〇年に至る十年間との生産率を比較するに、僅か百年の間に英吉利は二三％、獨逸及和蘭は一六％、白耳義及佛蘭西は一九％、伊太利は一一％の減少を示し、更に英領濠洲では二七％、ニユージーランドでは三四％減退した。即ちこれは歐洲婦人の出産能力の減退を示すものである。上記の内二三の國に於ける已婚女子千人に就ての兒數を左に比較表示せよう。

第二表　エングランド及ウエールスに於ける結婚女子
（四十五才以下）每千出産率

年次	平均出産率
一八五一年	二八五

一八六一年	二八〇
一八七一年	二八八
一八八一年	二八五
一八九一年	二六九
一九〇一年	二三四
一九一一年	一九六

第三表　スウェーデン、佛蘭西白耳義三國に於ける結婚女子（十五才以上五十才以下）毎千出産率

年次	スウェーデン	佛蘭西	白耳義
一八四六—一八五五年	二四一	一七九	二五二
一八五六—一八六五年	二四八	一七二	二七六
一八六六—一八七五年	二三五	一七二	二七〇
一八七六—一八八五年	二四〇	一六七	二六四
一八八六—一八九五年	二三一	一五〇	二三六
一八九六—一九〇五年	二一九	一三四	二一三

以上二表によりて過去五六十年間に歐洲各國女子の産兒能力が如何に減じたかを知るに足るのである。更に新興國たる北米合衆國に於ては如何であるか。ウォルコクス氏（Wilcox）によれば一八六〇年北米白人の生産能力ある女子（十五才より五十才まで）千人に付ての平均兒數は六三四人であつたのが一九〇〇年には四七四人で、約四十年間に二五%減少したのである。尙之を外國生れの女子と米國生れの女子とに區別して調査して見ると、外國生れの女子千人に付兒數七一〇人であるのに、米國生れの婦人では四六二人であつたとのことである。北米に於ても亦吾人は生産能率の著しき低下を認め得るのである。

子女の多少は貧富により著しく異るとは一般に言はれてゐる處であるが、ベルチリョオン氏（Bertillon 1897年）によればこの事實は統計的にも明白である。即ちロンドン、パリ、ベルリン等の大都會に於ける十五才乃至五十才の女子千人に付ての生産數を貧富の度により六階級に別ち、比較したのが次の表である。

第四表　貧富による女子の生産率（Bertillon による）

（十五才——五十才女子毎千生産率）

都市名（年次）	I（極貧）	II（貧）	III（中	IV 等）	V（富）	VI（富豪）	平均
ロンドン（一八九一—一九四年）	二〇〇	一六四	一五五	一五三	一〇七	七一	一五三
ベルリン（一八八六—一九五年）	一五八・〇	一二九・八	一一二・六	九六・二	六一・九	四五・八	一〇一・九
パリ（一八八六——九年）	一〇七・八	九五・二	七五・二	六五・六	五四・四	三五・三	八〇・五

即ち富の程度低きほど子數多く高きほど少い。更にこれを都鄙別に調査した統計がある。これはコールブルッゲ氏（Kohlbrugge）が和蘭に於て都市の四七五八夫婦と村落に於ける四

六八五夫婦とに就てその子數を調べ、その生活程度により四階級に分ち、各千夫婦の平均子數を擧げたもので、第五表に示す通りである。

第五表 都鄙に於ける貧富別每千家族生産率

種類	調査家族總數	I(極貧)	II(貧)	III(中等)	IV(富)
都市の家族	四七五八	五六一	五二一	四三五	四一八
村落の家族	四六八五	五一九	五〇九	四七五	四五〇

これによりても富者には常に子少く貧者に多いことが明である。のみならず村落に於ける富者には、都會の富豪よりも子多く、貧者では村落に於けるよりも都會生活者に子が多いことも分る。これ貧富の生産に及ぼす影響は都鄙に於て差あることを示すもので、特に注意すべき點である。村落貧民の食物は都市生活者に比してヴヰタミンなどの豐富な爲めであるまいか。今後の研究を要する問題である。

日本には未だ貧富による女子の生産能力に關する統計的調査なく、外國の例と比較し得ないが、先年内務省所管の保健衞生調査會に於て、高野岩三郎博士を主任として東京市内月島の生活狀態を調査したことがある。その資料中に些か參考に供すべき統計がある。即ち工場勞働者の多數を占むる月島と商業從事者の多い京橋區との人口每千生産率死亡率等とを比較するに

第六表 京橋區(商業地區)及月島(工業地區)に於ける人口每千生産率死亡率比較(大正二年—六年高野岩三郎氏調査)

年次	京橋區 生産率	京橋區 人口百人中女數	京橋區 死亡率	月島 生産率	月島 人口百人中女數	月島 死亡率
大正二年	二三・九	四六・二	一六・九	二五・九	四六・〇	一八・〇
同 三年	二二・九	四六・五	一六・六	二六・二	四五・七	一六・二
四年	二一・二	四六・四	一六・九	二五・二	四五・九	一七・五
五年	二〇・〇	四六・五	一五・九	二三・一	四六・三	一五・六
六年	一九・五	四六・四	一六・七	二二・九	四五・四	一七・八
平均	二一・三		一六・六	二四・五		一七・〇

上表に見るが如く大正二年より六年に至る五ヶ年平均の生産率は京橋區二一・三月島二四・四六で可なりの差がその間に認められる。然も月島では京橋區に於けるよりも男百人に對する女の數が少い。これなども生活程度の低い階級に生産の多いことを示すもので、俚諺の「貧乏者の子澤山」は洋の東西を問はず、古今を通じての現象と言ひ得るのである。更に之を一層具體的に示す統計は一九二〇年の北米各洲に於ける白人女子千人に付ての平均産兒數と、各地域の富の程度(一人當り資産高)の比較表で左の通りである。

第七表　北米に於ける母性每千生產率と各地域の人口一人平均資產額（白人のみにて黑人を除く）

	地域（州名）	母性每千平均兒數	一人平均資產額（弗にて示す）
I	Connecticut Massachusetts New Yor District Columbia	三三・二	弗 三四一七
II	California New Hampshire Vormont Oregon	三六・〇	三八三八
III	Ohio Washington Main Pennsylvania	四一・二	三一四五
IV	Indiana Wisconsin Kansas Maryland	四五・三	二九九一
V	Uichigan Uinesota Nebrasca Kentucky	五〇・〇	二八二二
VI	Virginia South Carolina North Carolina Utah	六〇・五	一八四〇

右に據ると概して一人平均資產額の少い地方に於て生產率が高い。此の如く富の度と生產率とは常に反比例し、生活に餘裕なき貧者に子多く、富有にして子女の教養を完ふし得る階級に子の少ないと云ふのは、一種の皮肉な天の攝理と言はねばならぬ。その原因を明かにして、これが矯正策を講ずるのが文化を維持し人類の福祉を增進する所以である。

又先年吾東京に於て、警視廳保健衛生調査會で、佐伯矩博士の指導の下に行はれた調査の成績に依ると、母體の榮養不良なるものは妊娠率高く、流產早產の數大にして、又產兒に先天性弱質多し、之に反して母體の榮養可良なるものは妊娠率低く、姙產事故少く、產兒亦概ね健康であることが分つた。同博士は貧乏人の兒澤山を榮養問題に歸して說明す可きであると力說して居る。

五　生產力と國民體質の

廿世紀初葉十年間の世界の人口增加率は每年人口千に付一一・五九であつたから今後六十年で世界の總人口は二倍になる割合である。一九二二年の世界の全人口は十八億と計算されてあつたが此勢を以て進めば約一千年後の西曆二九二六年には世界の人口は二五〇兆となり地球面一平方ヤードに一人の割合となると計算して、人類の將來を悲觀する論者がある。果して人口はかくの如く計算通り增殖するものであらうか。これが第一の疑問なのである。動物でも人でも生れ出てから成育するまでの期間に於て、急速に體重は增加し、身長も延びるものである

が、一定の時期に至れば、體重や身長の生長は停止し、更に老衰期に達すれば、反て減少し、遂に死に終ることは、吾人の日常目擊する處である。一個人や一動物の生長を時間的にあらはせば一の曲線を畫くのである。一團の動物も個々の集群でその消長は又時間的に變り同樣の曲線を畫くものである。繁殖迅にして生涯の短き小蠅の如き昆蟲に於て獨りかゝる曲線が見らるるのみならず、各國の人口統計上にも同樣の現象が觀取される。されば統計學者のパール氏などは、各國の年代別人口實數を基礎として計算し、各國人口の將來をそれ〳〵曲線を以て表はした。即ちスウヰーデンは西暦二一〇〇年に總人口七百八十七萬に達しそれ以後は靜止する、又佛蘭西の人口は二〇〇〇年に頂點に達しその總數四千二百五十七萬を限度とし、北米合衆國又二一〇〇年に一億九千七百萬の人口に達し之を限度とすべしと豫測して居る。各國人口の生産、死亡、並に增加率等は一定せず、種々の原因によりて變化するものである。然もその變化は生物生長の曲線と同樣の經過をとるものであるから、日本今日の高き人口增加率は決して永續するものとは考へられない。殊に人口の稠密その度を加ふるに從ひ增加率は急に減するものなれば、人口の現狀も決して樂觀を許さぬのである。然も我國には近代に至り生産率を遞減せしむべき幾多の人的原因加はり、一面には自然的原因の厳存するを以て、今日一ケ年八十七萬の人口自然增加ありとも、決して油斷はならぬのである。今日本國內に於ける人口增減の現象を一層詳に討査する爲め、地方的觀察を試みよう。大正七年以來十三年に至る七ケ年間の全國及青森、靜岡、沖繩の三縣に於ける人口每千生産、死亡、及增加率等を第八表に揭げる。此處に各府縣中特に青森、靜岡、沖繩の三縣を選んだのは、青森縣は北部靜岡縣は中部、沖繩縣は南部の地域を代表し、然も大都市を有せざるが爲め、自然的現象を觀察するに便宜だからである。

第八表　全國及青森、靜岡、沖繩、三縣下に於ける人口每千生産、死亡、並增加率比較（大正七年—十三年）

人口每千率		大正七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	平均
全國	生産	三二・二	三二・六	三六・一九	三五・〇五	三四・一六	三四・九四	三三・七九	[illegible]
	死亡	二六・八	二三・八	二五・四〇	二二・七一	二二・三二	二二・七八	二一・三三	[illegible]
	增加	五・四	八・八	一〇・七九	一二・三四	一一・八四	一二・一六	一二・四六	一〇・[illegible]
青森縣	生産	三九・八七	三七・四九	四九・〇一	四五・九九	四三・八九	四六・二九	四四・六五	四三・八八
	死亡	三〇・四八	二四・四四	二九・三七	二五・五三	三〇・一三	二六・五六	二四・五八	二七・二九
	增加	九・三九	一三・〇五	一九・六四	二〇・四六	一三・七六	一九・七三	二〇・〇七	一六・五九
靜岡縣	生産	三五・八五	三四・九二	三八・二六	三八・二六	三六・四五	三八・六七	三六・八七	三六・七五
	死亡	二一・五六	二一・三五	二四・四七	二一・九一	二〇・七二	二五・三六	一九・六三	二二・一四
	增加	一四・二九	一三・五六	一三・七九	一六・三五	一五・七三	一三・三一	一七・二四	一四・六一

沖縄縣 生産	二七・七六	二二・二三	二四・九三	二五・五四	二六・七五	二四・〇三	二三・四五	二四・九五
沖縄縣 死亡	二〇・三八	一七・二三	二二・二六	一六・一一	一四・九八	一四・八〇	一五・八七	一七・三七
沖縄縣 増加	七・三八	五・〇〇	二・六七	九・四三	一一・七七	九・二三	七・五八	七・一八

尚上記三縣下の人口の密度及民度等を知る爲め、大正十三年末現在の數字を第九表に掲けて置く。

第九表 全國及青森、靜岡、沖縄縣に於ける一方里平均人口一世帶平均人口毎百納税人員比較（大正十三年末現在）

	一方里平均人口	一世帶平均人口	人口百に付納税人員
全國	二四二五	五・〇	三・三三
青森縣	一三〇一	五・九	一・八七
靜岡縣	三三一〇	五・四	三・〇二
沖縄縣	三九九九	四・六	〇・八八

以上の二表により吾人は直ちに人口分布の疎な青森縣に於て生産率最高く、靜岡縣之に亞き人口の稠密な沖縄縣で著しく低く、又死亡率も生産率に相伴ふのを觀取し得るのである。玆に一見不可思議なのは、生産率竝に死亡率の最低い沖縄縣の民度が到底靜岡縣の比較にならぬのみならず、青森縣にも遙に劣ることなのである。現に沖縄縣の疲弊困憊はその極に達し慘憺たる狀態とその救濟の必要は有識者により絶叫せられつゝある。同縣下の耕地は狹く食糧は自給不能で、常に之を縣外よりの輸入に仰き、爲めに通貨は流出し、金利は高く、僅少の山林も夙に荒廢に歸した。就中農家の窮狀は甚しく、一戸當りの生産高は全國平均の三分一にすぎず、勞銀の如きも全國平均額の四分一以下に當り、一日男五十一錢女廿四錢六厘に過きぬといふ狀態である。從て食物なども甘藷が主で、米の消費高は一人當り一年僅かに四斗に滿たない。その結果人民は榮養不良に陥り、小兒や壯丁に青春の元氣がないとまで言はれて居る。これによりて見ると生産率や死亡率の低いのは必しも生活の向上を示すものでもなく、又その社會の幸福でもないのである。生産及死亡率の高低が國民の體質と如何なる關係にあるかを知らんが爲め、大正七年より十三年に至る陸軍の徴兵檢査の成績中から、特に青森、靜岡、沖縄三縣の數字を拔萃して左に表示せよう。

第十表 陸軍徴兵檢査にあらはれたる全國及青森、靜岡、沖縄三縣下壯丁の體格比較（檢査人員千に付）

	全國 甲種	全國 乙種	全國 丙種及其以下	青森縣 甲種	青森縣 乙種	青森縣 丙種及其以下
大正七年	三三三	三五三	三一四	三六一	三三一	三〇八
八年	三三二	三八四	二八四	三九六	三三五	二六九
九年	三七二	三九四	二三九	四二〇	三三八	二四二
十年	三六八	三七九	二五三	四一五	三六七	二一八
十一年	三六二	三七七	二六一	四二五	三五六	二一九
十二年	三三五	四〇四	二六一	四一四	三八六	二〇〇
十三年	三四〇	四〇四	二五六	三五一	四一一	二三八
平均	三四八・八	三八四・九	二六六・八	四〇〇・二	三五六・二	二四二・〇

靜岡縣 甲種	靜岡縣 乙種	靜岡縣 丙種及其以下	沖繩縣 甲種	沖繩縣 乙種	沖繩縣 丙種及其以下
三五六	三五八	二八六	二六一	三七五	三六四
三五四	三四二	三〇四	二九五	三四九	三五六
三七一	三六三	二六六	三一四	三五三	三三三
三七六	三三九	二八五	三一五	三五五	三三〇
三八八	三九〇	二二二	二八七	三五九	三五四
三四六	三八二	二七二	二五六	三六四	三八〇
三七〇	三八四	二四六	二一一	四一六	三七三
三六五・八	三六五・七	二八〇・一	二七七・〇	三六七・四	三四八・四

全國に於ける七ヶ年平均の檢査壯丁千人に付甲種合格は三四八・八、乙種合格は三八四・八、丙種及其以下の不合格は二六六・八である。然るに青森縣では甲種合格率最高く四〇〇・二で、遂に全國平均を超へ靜岡縣では三六五・八で全國中の中位に在り、沖繩縣では二七七・〇で、全國中の最下位に在る。丙種及其以下の不合格率は甲種合格率と正反對に沖繩縣最高く、三四八・四で靜岡縣は二八〇・一、青森縣は二四一・〇といふ最低數字を示して居る。今第八表と第十表とにあらはれた數字を對照すると、此處に一の顯著な事實を見出すのである。即ち生産率の最高い青森縣の壯丁は體格最優秀で生産率の最低い沖繩縣の壯丁は體格最劣等であることである。尚之を具體的に徵兵檢査にあらはれた身長體重に就て見るも、沖繩縣の壯丁は身長に於て全國平均より一寸餘も低く體重も亦全國平均より一貫目位劣るのである。之によりて見れば生産率の減退は社會の中堅たる壯丁の體質をも低下せしむるに至ることを知り得るのである。劣等粗惡の體格では能率の舉がる理はなく、平時にありては産業不振の元となり、一朝有事の日には、劣敗の慘を齎す因となるのである。國民の體質一たび頽廢に赴かば富國强兵も最早望むに由なく、遂に滅亡の外はない。沖繩縣に於ける生産率の減退や、壯丁の體格劣化等の事象は、吾人に一大警戒を與へるものである。日本全國對沖繩縣の關係は、世界對日本の關係の一縮圖と見られ得るのである。日本の國土狹小にして人口多く、食糧の產出乏しくして、常に海外にその供給を仰ぐが如きは、沖繩縣とその趣を等ふして居るではないか。大阪每日新聞經濟部長松岡正男氏の調査によれば、今日の沖繩縣即ち元の琉球王國には一種の共產主義が殆んどその建國と同時に發達した。これ即ち數百年間行はれた地割制度である。此制度によれば、土地は共有であつて、僅少の例外を除いては、土地の私有は全然認められなかつたのである。從て人民の土地に對する愛着心は極めて薄く、農業は進歩せず、所謂略奪耕作の弊に陷り、その結果食糧の欠乏を來した。尚此地割制度は、住民の貯蓄心と獨立心をも痲痺せしめ、今日の疲弊困憊の遠因をなしたとのことである。人口稠密にして天然資源に乏しき我帝國も、徒らに退嬰これ事とし、今にして國家の將來を慮り、積極政策

を確立して、勇往邁進するにあらざれば、早晩人口の増加は停止し、國民の體質は退化して、世界の劣敗者とならぬと、誰か保證し得ようぞ。吾人は沖繩縣の過去現在に鑑み大に考へねばなるまい。

六 結 論

外列強諸國に於ける人口の趨勢を見、内我國の人口增加の現狀を正視する時、吾人は此人口問題の解決が、帝國の將來にとり如何に重且大なるかを痛感せざるを得ないのである。本問題の論議は頗る多いが、要するに消極論と積極論とに分たれる。消極論者の内には、或はアングロサクソン民族の前に氣兼ねして、我國の海外移民政策を排すべしとするものがある。又無條件的平和主義にかぶれて、我國の人口增加を戰爭誘發の因と惧れるものもある。彼等消極論者に残された唯一の問題解決策は産兒調節の外にないのである。徳川の世封建制度の下に全國は大小の諸藩に分れ、鎖國主義を嚴守した。その結果各地方に避姙や墮胎の弊風行はれ、人口が人爲的に制限されて居たのである。然るに明治の初め新政は確立せられ、古來の弊習は法の禁ずる處となつた。更に近代産業の發達は、國民の生活を一變した。此等の結果が人口統計上にあらわれ、今日他の文明諸國に見るべからざる我民族の大膨脹となつたのである。これ國運の隆昌を意味するもので、國家の一大慶事と言はねばならぬ。然るに此事象を以て國家の深憂となし、犯りに人爲的の産兒調節を唱導するが如きは吾人の組みし能はさる處である。英國の百年前は恰も日本の現狀に彷彿し、人口過剰の聲も喧しかつたが、此時代に英國の産業は勃興し、海外發展は實現された。民族の膨脹なくして、何處に國力の振張を求むべきであるか。本年四月廿六日英國上院に於てバックマスター卿(Lord Buckmaster)が産兒制限の弊害を痛論したのを見るに、産兒制限は上流及中流の智識階級に行はれ、最生産率の高きに悩む下層社會には何等の影響がない。これ人口を量的に調節せんとして、反て國民の素質劣化の結果を來し無意義有害なりといふのである。同卿の擧げた現時の英國に於ける階級別産兒統計は次の如くである。即ち五十才以下の夫婦千に付ての平均兒數は、

小學校長　九三人　教會牧師　一〇〇―一〇二人
醫師辯護士　一〇三―一〇五人　熟練職工　一五三人
普通勞働者　二四七人

自然的にも中流以上の階級に常に生産なく下層階級に子が多いのに、更に人爲的の調節を行ふときは、益その度を高め、その結果は優良の人口を減し、反て下層の民衆を増加せしめ、彼等の生活の向上などは到底期待されぬといふのである。數十年に亘り産兒制限を實行した結果は右の如くであるのに、徒らに

白人の所爲に追隨し、産兒制限によりて我國の人口問題を解決せんとするが如きは、角を矯めんとして牛を殺すの類で、吾人の贊成し能はざる處である。何故積極的の解決策に精進せぬものであるか。海外移民を大に奬勵して、我民族の發展を計るのが第一策である。又內農業の科學化を實現して、食糧の充實を圖るのはその第二策である。第三策としては、原料を國外に仰ぎ、工業的生産を增進し、之を國の內外に供給するのは我人口を養ふの道である。第四策としては、組織立ちたる社會政策を一日も早く實行し、一般民衆の生活を安定せしめ、食糧の供給を充分にするのは、國民の不自然な多死多産を防止する所以なのである。

近來歐米の識者間にも人口問題が重要視せられ、種々の論議出て、人口過剩はこれ民族の自然なりとの說もあれば、又人口增加率の減退は、民族の幸福を將來する前兆なりとの樂觀說もある。而し、人口の生産率減退は樂觀するにせよ、悲觀するにもせよ、決して一時的若しくは限局的の現象ではなく、現在の文明諸國通有の趨勢なのである。故にこれを文化生活の必然的現象なりと考ふる學者すらある位である。この生産率減退は、古き歐大陸の諸國に於て、已に顯著なのみならず、新興國たる北米合衆國に於ても、近年著しくなつた。一九二五年紐育洲の人口統計中、興味ある事實は、女子の生産力の著しき減退である。即ち人口每千生産率は二〇・六で有史以來の最低レコードを示した。これ恐らく一九二四年の新移民法の結果ならんと推定されてゐる。何となれば同法の實施により、生産率高き下級の歐洲移民の入國が嚴重に制限せられたからである。元來北米生れの白人の生産率が年々低下することは周知の事實で、これまでその欠陷は歐洲移民の生産力によりて補塡され、人口動態の上に激變を見なかつたのであるが、利己主義の新移民法は、直ちに北米白人の增加率に大影響を與へた。この新移民法に少からず不快の念を抱く吾人は、天の攝理又妙なるかなと言ひたくなるのである。人口問題に關するアングロサクソン民族間の諸論中吾人の觀過し難いのは、次の所說である。即ち世界の人口は年々增加して、遂に地球上の地面は全人口を養ふ能はざる時に逢着するであろう、而して人類中繁殖力の最旺盛なのは低級な有色人種であるから、早晩今日の文明は破壞されるに至るであろうと。これ文明は白人の專有であり、白人の量的減少は世界文明の沒落なりといふのである。白人の人口增加は年と共に低下し行き、彼等の勢力は衰へ、之に反し有色人種は益增殖して、彼等を凌駕するのは避くべからざる趨勢とは云へ、これあるが爲めに、世界の文明は破產し、人類の末路は悲慘となるなどゝは、白人通有の獨斷的結論である。來るべき次の世紀に、今日の文明を益圓滿に發達せしめ、世界に平和と幸福とを齎す指導者は、生産力の旺盛な民族の外にはないのである。この點に鑑みても、吾曹日本民族は自重すべく、徒らに歐米の後塵を拜してはならないのである。

（大正一五、九、一〇日稿）

（終り）

總同盟罷業（その三）

英國勞働運動史上に記錄すべき九日間

蠟山政道

產業爭議か政治革命か

前二回の通信によつて、總罷業の發生事情、その計畫內容及びその進行狀態に就いて知る所ありたる讀者は、この總罷業の主動者たる勞働組合會議の立場が、全然消極的であつて、その規模の大なるを除いては普通の產業爭議の形式と多く異る所無きを察せられたであらう。然し乍ら、總罷業の指導者の心理が如何にあらうとも、斯くの如き計畫とその作用とは從來の產業爭議と異る面相と影響とを有し來るべきは蓋し想像に難からざる所である。この點を最初より意識して、それに對する態度を具現せるものは、一方に於いては、政府と資本家階級とであり、他方に於いては共產黨と勞働組合內に於ける小數運動（The minority movement）とであつた。前者が恐怖心理によりて之を持し、後者が鬪爭心理によりて之を迎へたるは多言を俟たずして明かである。

共產黨及び小數運動の活動は主として、地方勞働評議會を通じて行はれ、勞働組合員中最も積極的な行爲を執りたる者はこの分子であつた。從つて緊急權能法の犧牲となりて、區々たる行爲の下に罪に問はれたる者がこの分子に多かつた。然し總罷業全體の進行の上からは、何等の組織をも有せざるこの小數者の活動は、毫も大勢に影響は無かつた。なぜなら、これらの黨派の首領の大半は、昨年以來禁錮中であるか、或は出獄匆々であつて、黨としての獨立の活動を行ひ得る餘裕が無かつた。又現在の實力は、總罷業の進行に對して、公式的な既定方針を以つて、多少なりとも組合會議を動かし得る程、有力な又直接の關係を未だ有して居らないからである。彼等は、間接に、所謂組

合會議の左翼と稱せられるスウエールス、パーセル、ヒツクス及びブロムレーの如き人々の行動に期待してゐたのであるが、昨秋スカーバラ大會で氣焔を擧げたこれ等の人々も、實際の場合自己の代表する組合の利害存亡に至大の關係ある事態に遭逢すれば、右翼幹部の立場に壓せられて、全くそれと同樣な立場を執るか、又は沈默的態度を執つてしまつたのである。總罷業の終結後、共産黨執行委員が、その發表せる聲明書に於いて、これら所謂左翼幹部の態度を非難して、昨秋の追從とは打つて變つた批評を下してゐるのも、その立場から見れば蓋し當然であらう。政黨の側では、獨立勞働黨との提携に失敗し、組合側では目下特種の立場にある炭坑夫組合を除く所謂右翼幹部と乖離したる英國共産黨及び小數運動の現在の立場は、總罷業の結果として表面に現はれたる一箇の事實である。

産業爭議が政治革命に轉移する可能性を作り出すことと、それを意識的に利用することとは、必ずしも同一のことではない。組合會議總務委員會がこの可能性を自ら組織的に造り出し乍ら、その含蓄する意味を認識せず、或は認識してもそれを鬪爭目的に利用しなかつたことは、英國勞働運動の特質と現狀とを充分知る事無くしては、判斷に困難を感ずる所である。微少なる一工場の勞働爭議も野蠻なる政治的鬪爭の形式を現出する封建的遺習の域を脱せざる未開國や、勞働組合が産業組織の一單位として自治的地位を有せざる專制國に於いては、經濟と政治との關係が外觀上容易に一致し、又は故意に合一せられることは極めて自然であり、又その理解は容易である。しかし、長い間資本主義制度の下に、その自治的地位を享有し來つた英國勞働組合員の頭腦に、總同盟罷業が飽くまで社會組織を動かすことを目的とする政治革命と全く區別されて考へられてゐたことは嚴乎たる事實であつて、到底、この經驗に乏しき我々の想像出來ぬ所である。マルキシズムの所謂「唯物論的辯證法」の理屈を少しでも知つてゐるものの眼から見れば、實に頭の悪い次第であるが、彼等はその抽象的な「辯證法」の理論で無く、その事實的な基礎を造り出してゐるのである。彼等の有する實質的知識の缺點は、往々にして混亂を免れざる、不透明なものであるが、その特長は個々の行動に際して徒らに理屈の徹底と論理の歸結に急ならざる事である。フランスの保守系新聞フイガロの主筆ロミエーが、今回の總罷業に關連して、英國人が産業爭議を政治鬪爭と區別して考へることの理由を擧げ、それが全く英國特有の現象だと言つたのは注意すべき言である。

しかし、事實、多くの共産主義者の主張する如く、總罷業は單なる産業爭議として終始せぬ。それは明かに階級鬪爭である。

しからば、その當事者が事實的に意識するとせざることに拘らず、又目的的に利用するとせざるとに拘らず、それが嚴然たる階級鬪爭として現出することは、今日の英國勞働運動の發展階段から如何にして說明せられるか。惟ふに、階級鬪爭の語義は甚だ曖昧多岐であるが、政治革命に關連する階級鬪爭は、單なる、階級的利害の背反又は對立の事實を以て、直にそれと見做すことは少しく廣きに失するであらう。又時時偶發する部分的な暴動的行爲を直ちにそれと見做すことも甚だ當らざる所がある。これらの事情は、やがてそれへの條件又は徵候と見做し得るにしても、それらが政治的革命に導くべき階級鬪爭の全幅的意義を具備する爲めには、少くとも二つの要件が必要である。一つは、その階級鬪爭の兩當事者たる兩階級の側に於いて、その指導的地位にある團體が、反對階級の地位を奪ひ、それにとつて代るべき目的を意識して、その目的の爲めにあらゆる機會と手段とを擇ぶことを要する。これは歷史を通じて、あらゆる場合に於ける革命の樣相であると言つてよい。その機會を自ら又は他から與へられることを問はないのである。しかし、歷史は自ら作るよう與へられたる場合の多きことを示してゐる。次に、現在の經濟…………目的とする…………の場合には、第二の要件の存在することが、看過すべからざる所である。そは第一の要件が反對階級の…………目的とする戰術的方面であると言ひ得べくんば第二は自己階級への忠愛に根據する組織的方面である。この點は、種々なる心理的動機より發生するが、その發展の結果は、そこに新なる組織的運動を現出することである。而して、そは意識の上で積極的な革命を企圖せずとも、事實の上で潛勢的に革命への道を招いてゐるのである。この二箇の要件は、實際上互に因果關係あり、互ひに交錯するけれど、現代諸國の階級鬪爭の樣相に表れてゐる所から判斷するならば、各國何れもこの二箇の中、何れかの點に多くの特色を有してゐる。而して、現代英國の勞働運動は、その後者の點に多くの重點を有してゐることに就いては何人も之を認むるであらう。而して、その偉大なる組織的發展は、指導者の個人的意識の上に革命的心理の缺くるものありとするも、その組織的事實を齎らしたる階級的忠愛の心理によつて、四百萬の組合勞働者をして、炭坑夫組合への同情と自己階級の利益擁護と云ふ意識に導き、直接動機の上に現存秩序を動かすとに何等の意識も無く、この巨大なる武器を揮ふに至つたのである。このことは、總罷業の進行につれて、各幹部の間に意識の混亂を生じ、一般卒伍の間に行動の錯誤を生じたことから察せられるのである。なぜなら反對階級の組織的防禦は、總罷業を以つて單なる

產業爭議と見做さず、彼等の見て以て憲法的秩序となす社會組織の根底を動かさんとする政治革命への運動と宣傳したからである。從つて、總罷業の進行と共に、その爭點は炭坑爭議を原因とする理由より離れて、全く別個の問題に轉向したのである。これは社會心理學上究明に値する、興味ある問題である。

遮莫、勞働組合會議總務委員會にとつては、この矛盾と障碍とに當面して、尙ほ且つ總罷業を繼續すべきや否やは、總罷業の發生せし週日末に至つて、彼等の頭腦を惱ました最大の問題であつた。即ち、總罷業をして政治鬪爭と化せしめた原因は、全く政府側の態度及び術策に存したのであるが、この政府側の態度及び術策と、その結果として生じたる社會一般の心理狀態とに正面より應對すべきか、又は總罷業に終末を告げしむべきかが總務委員の決すべき重大なる問題であり、心理的契機なのである。而して、總務委員會は後者の方針を執つた。そこで、私はこの總罷業の終熄の形勢を齎らせる、政府側の攻擊的態度及び術策に就いて更らに若干の實例に就いて述べて見よう。

總罷業終熄への形勢

この點に關し、私は三箇の事情を擧げる。その一は、罷業破りの勸誘及び募集である。その二は軍隊の使用である。その三は、法律による威嚇である

第一に「罷業破り」の勸誘及び募集は、第二回の通信に述べたる政府の準備を以てしては、到底事態の重大なるに應ずる能はざるを思ひ、總罷業發生の翌々日五月六日、政府が罷業未參加者に向つて仕事の繼續を要求し、罷業者に向つてはその復歸を勸誘し、その條件として、一定の公約を治安委員の名に於いて發表したに始まる。その文句は左の如くである。

> 現在の總罷業の終了したる場合、政府は、罷業に參加せずして仕事に留まり、又は罷業に參加しても復歸する者が、その勞働組合によつて報復的犧牲に供せらるること無きやう、之を保護する有效なる手段を執るべし。又政府は、相當の期間、この保證を僞さざる、又必要の場合刑罰を以てその執行を保證せざる解決に對しては承認を與へざるべし。何人と雖も現在の危機に當り、國家に忠誠なる義務を盡しつゝある者は、將來の報復に關して、政府の保護を受くべし。

又十日の「ブリテッシュ・ガゼット」の紙上に於いて、ボルドウイン署名の下に、右の保證を一層具體的に再約した。

> 現在の危機に際し、國家に忠誠を盡し、その仕事に留り又は復歸せる者は、勞働組合の諸權利金、年功手當金、又は年金を失ふ事無きやう政府の保護を受くべし。政府は、この點に關して議會その他に於ける必要なる手續を執るべし。

この政府の公約が如何なる効果を齎らせるかは、實際上調査に困難であるが、苟も一國の政府たるものが、その名に於い

て、普通の產業爭議に類例無き斯くの如き恥辱的なる勸誘方法を試みてまで、總罷業の擴大と存續とを防止せんとした事實は、一方に於いて、今回の總罷業の威力の大なりしことを示すと共に、他方に於いて、この總罷業の政治的意味を濃厚に印象せしむることに大に役立つたのである。

第二は、政府の軍隊使用である。緊急權能法に基く勅令の示す如く、政府は軍隊の使用に就いて、豫め用意する所があつた。然し一九一九年の鐵道爭議、一九二〇年及び二一年の炭坑爭議の場合の如く、最初より軍隊の使用を試みることの却つて惡結果を招くことを慮り、今回は出來る丈け軍隊の使用を差控える政策を執れるものの如くであつた。そは勞働組合會議側の平和的態度に相應ずる定に賢明なる方法と云ふべきであらう。若し、共產黨の希望せる如く、最初よりこの方針に出でたならば、如何に平和的なる英國勞働者と雖も、その感情を害し、多くの障害を來し、その結果は內亂に導く處ありしことは、決して有り得ざる想像では無い。なぜなら、通信機關の充分備はざる場合には、一般の民衆は一種のパニツク的心理に支配され、如何なる妄想的訛傳も容易に信ぜられるからである。にも拘らず、遂に、政府は部分的ながら、軍隊の使用を行はざるを得なかつた。如何に彼等が恐怖心理に捕はれてゐたかゞ分からう。勿論全國要所々々には、總罷業の開始と共に、陸、海、及び航空軍を配備して置いたが、その使用宣言を公表したのは七日だつた。それ以前は、專ら特別警吏(Special constable)を募集して警備に宛ててゐたのである。(政府の管理の下にある無電放送局が、專ら政府筋の宣傳及び情報用に供せられ、かゝる募集の爲めに大いに利用されたことは見易き所であらう。)八日及び日の兩日、リヴアプール、ミツドスバラ及びハル等に於いて、軍隊と罷業團との衝突のありたることが喧傳されたが、ロンドンに於いても八日に至つて最初の軍事的行動が行はれた。それはロンドン船渠よりハイド・パークへ向けて、麥粉を運び出す際、種種なる困難と紛擾の發生するに備へる爲め、裝甲自動車と鋼鐵ヘルメツト帽を以て、貨物運搬車を擁護させたのである。長さ二哩程の長さに續いた、約二百六十臺の貨物車をものものしい十六臺の軍用自動車が擁護して行く行列を眼のあたり見たる多くのロンドン市民は、恐らくもの珍らしい感じをもつて眺めたであらう。我々外國人には、寧ろ政府の仰山な警戒振りが滑稽に見えた位であつた。勿論全國を通じて、一度の發砲事件も無く、事實上軍隊の使用は無用であつた。しかし乍ら、一般の民衆及び罷業者たる勞働組合員に對しては、この軍隊の使用が、政府の態度の峻嚴なると事態の緊急を思はせる心理的

効果を與へたことは否むことが出來ない。

第三は、總罷業を以て違法行爲なりとする法律的宣傳を試みたことである。最初、六日の下院議場に於いて、自由黨のジョン・サイモンが、緊急權能法に關する討議の際、總罷業の違法なることを述べ、組合幹部は損害賠償の責に任ずべき可能性あり、且つ組合幹部の命令に從はざる組合員も、その組合に對する權利を奪はれる理由無きことを論じた。その違法なりとする理由は、雇傭契約に規定されたる罷業通告期間の滿了を俟たづして罷業に出でたること、即ち契約違犯たることを以てした。然るに、彼はその結論に於いて、かゝる言辭を用ひた。

私は、私の意見に對して多少の注意なりとも拂はれる人に對しては、この總罷業の宣言が、勞働組合の將來と云ふ見地からして、大なる過失である、と云ふことを明言して憚らぬ。そは第一に何をしでかしたか。そは、一撃の下に、此の國の炭坑夫が當然に享有してゐた同情を奪つて了つた。そは彼等の有してゐた要求、訴願、及び主張を背後に投げ捨てゝ了つたのである。なぜなら、我々は今や社會そのものに對する全く新しき又最も危險なる攻擊に當面してゐるからである。

……………

先きにカンタベリー大僧正の和解を主張した政府は、このサイモンの演説を早速利用して、直ちに全國に向つて放送せしめると共に、津々浦々到る處にポスターとして張り付けたのであつた。勞働組合總務委員會は、八日の『ブリチツシユ・ワーカー』の紙上に於いて、このサイモンの演説を駁擊した。その理由とする所は、私法上の「契約違犯」が或る箇所に行はれたと云ふことが直ちに憲法上「社會そのものに對する攻擊」となると云ふ論理の法律解釋上不當であるばかりでなく、炭坑夫に對する同情を表明しつゝ尙且つ今回の總罷業の發生理由が全く政府側の挑戰にある點を看過するサイモンの政治的立場の矛盾を痛擊したのであつた。十日の議會に於いて、勞働黨の法律顧問の地位にあるスレツサーが、サイモンの擧げたる「通告無きことを理由とする契約違犯」が、今回の如く、周旋(プロキユーアメント)の形式に行はれたる場合、普通法(コンモンロウ)上直に損害賠償の理由とならざる幾多の先例ありたる事を説明して、サイモンの主張の法律的にも薄弱なることを論證した。これに對して、サイモンは翌十一日の議場に於いて、全くその以前の論據を更へ、總罷業の不法なる所以は、一九〇六年の『産業爭議法』に規定されたる「爭議」に該當せず、そは個々の傭主に對するものにあらずして、一般社會、政府及び議會を以つて何事かを爲さしむる目的を有するものあるが故である、と主張した。そして、彼は、偶々この日發表されたるアストベリー判事の判決を引用して、自説の根據とした。これによつて見るも、サイモンの主張は、法律的立場

より見て何等の權威に値するものでなく、單に彼の屬する自由黨の政治的立場（ロイド・ジョージ一派の立場は除く）を法律的假面の下に發表したに過ぎぬ。アストベリー判事の判決は、「船員及び火夫組合」の一支部の役員が、その本部の意思に反して——本部には協調組合主義者を以て名あるハヴエロック・ウイルソンが會長をしてゐる——總罷業に參加し、その組合の名に於いて、支部員に罷業命令を出したことに對して、それを阻止せんが爲め本部がその禁止令を得んとして、訴訟を提起した結果なのである。而して、その論旨は、單に「産業爭議法」の規定は、今回の如き總罷業の場合に該當せざるが故に、「違法」なりと判決し、その違法行爲に基く組合員の行動は、本部に於いて禁止する權利あり、としたのであるその判決中にある次ぎの一句の如きは、その主張を最も明瞭に表してゐる。

勞働組合會議委員會によつて命令されたる所謂總罷業は違法(illegal)であり、且つ不法(contrary to low)である。而してそれの參加を煽動し又は自ら參加せる者は一九〇六年の産業爭議法によつて保護さるゝことと無し。炭坑夫の場合を除きて、他の一凡の參加組合の場合には何等の産業爭議の存在の引證又は立證されたるもの無く、又一方勞働組合會議と他方政府及び國民との間に何等の産業爭議も存在せず又存在し得ぬ。……從つて上述の勞働組合會議の諸命令は法律違犯であり、而して被告は法律上不法にその命令に從へるものであつて、その當該組合によつてその行爲を抑止せらるべきものである。

アストベリーの判決に謂ふ所の「不法」「違法」又は「法律違反」等の用語が、英法上如何なる特種の意味を有するか、門外漢の私には充分理解し得ない所であるが、假りに今回の總罷業が一九〇六年の「産業爭議法」なる一制定法に該當し得ないとするも、從つてそれによる保護を受け得ないとしても、そのことが直に、他の法淵たる普通法又は刑法上同じく不法であると言ふは、明かに論理の超躍である。この點は勞働黨側の法律家の主張を俟つまでもなく明白である。況んや憲法上不法であるか否かは、全くかゝる局部的な法律的解釋からのみ斷定し得る所でない。この點に關する論議に就いては、次段に項を改めて詳細に論ずるつもりであるが、保守黨政府が、かゝる演説や判決を、宣傳に利用したる動機は、決してかゝる法律技術上の論議を考慮したのでは無く、單に政略的見地からそれらの演説や判決の結論を超越した點までを一般民衆に印象せしむるに在つたのである。而して、一般の民衆は、法律制度やその用語に全く無智であるが故にかゝる場合狡猾なる政府の宣傳に乘せられ易きは見易き事理であらう。殊に十日頃、一般に行はれたる流言に依れば、ヒツクス、チヤーチルの如き戰鬪派の主張によつて政府は閣議を以て、勞働組合幹部を捕縛し、その基金の沒收を

企つることに決し、爲に勞働組合會議總務委員會は狼狽の體である、と云ふことであつた。實際、斯くの如き閣議の決定ありたるや否や、又總務委員會がそれを信じて狼狽したりや否や、は私の與り知り得ざる所であるが、私個人の觀察と判斷とに依れば、そは單なる流言に過ぎず、かゝる馬鹿々々しき事のあり得ざること、正に勞働組合幹部の後日の聲明の如くであらうと思ふ。しかし、兎もあれ、總罷業の進行中、サイモンの如き法曹家の主張とアストベリー判事の如き權威ある立場に在る者の判決のありたることは、それが如何に正當なる法律的解釋以外の政略的動機によつて歪められてゐるにせよ、一般輿論を政府の側に動かし、傾けしむるに與つて力があつたとは爭ひ難き所である。ジノヴイエフ書簡事件の惹起したと同じやうな群衆心理の一現象である。

總務委員會は、斯くの如き三箇の事情が形成する事態に當面した。而して、尙且つ敢然として總罷業の續行に邁進するが爲めには、局面は更に轉換することを要する。革命か退却か。その二途何れか一つを撰ぶの外は無い。これが總罷業の第二週間目に於いて、總務委員會の逢着せる十字路であつたのである。

サミユエルの調停

總罷業發生の第二週間目、即ち五月十日は、その進行にとつての峠であつた。一方に於いては、總罷業計畫の第二戰線たる機械工業及び造船業に對しての（官業工廠に從業する者を除いて）罷業開始の命令が總務委員會より發せられ、更に總罷業の範圍は擴大するに至つた。けれども事實如何なる形式に依つて如何なる程度まで、この命令が當該事業の組合によつて受け容れられたかは、今日に至る迄詳細に分り兼ねる所である。この二箇の事業に屬する組合は、所謂熟練職工を以て組織せられ、最も典形的な英國式職業組合である。合同機械工組合は、その中心團體となれるものは、既に一八五〇年に組織せられたものであるが、最近一九二〇年に大なる組織改造を行ひてより、機械工業に屬する、殆ど大部分クラフト・ユニオンを包容し、一五九三の支部と、二三萬四千の組合員を有してゐる。總ての重大な問題は、組合員の票決を要すると云ふ、或る意味に於いて最も自治的な、或る意味に於いて最も保守的な組合である。最近三年半の組合の支拂へる共濟金の如きは六百萬磅を超えてゐるのである。造船業に從事する組合には全部で九箇の關係組合がある。いま、その代表的なる「機械工及造船組合聯合會」をとつて見るに、組合數二十四の聯合せるものであつてその組合員數九十六萬を超え、「合同機械工組合」と同樣な込み入つた規

約を有する尨大なる組合である。この組合は、他の同僚組合と共に、英國に於て最も强大なりと言はるる資本家組合たる「造船業主聯合會」と對抗してゐるのであるが、最近に於ける事業不振の結果、その資本主組合と合同して「造船業に於ける外國の競爭及び事情」なる調査書を發表し、又勞働爭議に關しては特別の仲裁規約を協定してゐる。即ち現在の經濟事情に於いては、戰闘的態度を避け、妥協的態度に出づる方針を執るべく餘儀なからしめられてゐるのである。

かやうな事情にあるこの二種の組合が、總務委員の一片の命令によつて、總罷業の陣列に參加するや否やは、今回の總罷業に對する全體としての英國勞働運動の意嚮の程度、更に目下進行中にある總罷業の續行に對する決意の如何をトするに足るものでなければならない。勿論總務委員會は、五月一日の組合執行委員會議に於いて、斯種の組合に對して、强制的に罷業命令を行ひ得る委任を得てゐない。從つて、その罷業命令なるものは、各個の組合執行委員の自由意思に從つて採否を決せらるべきものである。而して、各組合執行委員はその罷業命令を採擇したが、その採否の自由を、更に地方支部に與へたものゝ如くである。そこで、幾干の地方組合が、その命令に從つて、罷業に參加せしやは、全く區々であり、又その組合員の幾パセントが、之に應じたるやは殆んど不明である。最も好成績なる或る地方組合は、九〇パセントと云ひ、その最も不成績なる所は二五パセントと云はれ、統一的な數字は得られない。罷業に參加すべかりし十二日中の形勢を以てすれば、第一線の場合の如く一齊に罷業の行はれた事實の無かつた事は確實であるが、比較的に相當の成績であつた事は概言し得よう。然るに、その當日に於いて、地方總務委員會內に進展し居りし平和への運動が、急速に開展して、總罷業の終熄命令となつた。これが爲め、この第二線の戰列參加は、その充分なる明白な結果を見ずして終つたのである。

總務委員會の產業委員より選ばれて、炭坑爭議の交涉委員となりたる者の中、トマスが決定的の發言者であつたことは總罷業の開始前の經過によつて知られる。即ち彼は勞働組合側の外交的任務を代表して居つたと言へよう。外交的接衝、破れて、總罷業一度開始せられるや、その指揮は擧げて「罷業組織部」のベビイン及びパーセルの手に落ちた。彼等は、言はば、參謀的任務を帶びたのである。而して、總罷業終熄の形勢漸く釀成せらるゝや、總務委員會の內部に於いて平和への新運動に向つて動き出せるものが、罷業中は「對外交涉部」に屬してゐたトマス及びピュの一派である。彼等は、勞働黨側の代表者マクド

ナルド及びヘンダーソンと謀し合せて秘かに媾和への機會を捕へることに腐心したのである。この時伊大利旅行より歸國した者が炭坑業調査委員長であつたハーヴアート・サミユエルであつた。それが政府の命を受けて然りしものなるや、又自發的に然りしものなるやに就いては、判然しない。何れにしても歸國匆々九日、彼が、首相とトマス及びマクドナルドと夫々私的會見を遂げたことは事實である。この日より十一日に至る三日間、總務委員會交渉委員とサミユエルとの間に、又總務委員會自身に於いて、更に總務委員會と炭坑組合代表者との間に、數次の會合が開かれたのである。そしてその間より出來上つたものが、サミユエル覺書なるものである。この覺書を中心として、總罷業は終熄を告げたのである。いま、その顛末を叙述して見よう。

サミユエルとの私的會見の結果、總務委員會の交渉委員が見て以て總罷業の終熄理由と爲すに足ると思惟する提案内容が、兩者の間に略一致を見たるは、十日の夕であつた。此の間、炭坑組合の役員たるスミス、リチャードソン及びクックの三人も、サミユエルと會見したのであつた。その新提案が直ちに炭坑組合執行委員會に送られたが、炭坑組合は大なる修正を加へて、總務委員會に返附した。勿論總務委員會はそれを拒絶した。炭坑夫側の反對理由は、クックが發表せる聲明書——これを一般の新聞紙が發表せるにも拘らず、獨り勞働組合會議の機關紙たる『ブリチツシユ・ワーカー』が、その掲載を拒絶せるは、寔に奇怪至極の事であるが、又以つてこの際に於ける兩者の意志の阻隔を見るべし——にある如く、その提案内容の作成に際して、炭坑夫代表者の出席を求めざりしこと、その内容が二月の誓約に反して、報告書の含む賃銀削減を容認しあること、サミユエルの調停が私人の資格にて政府の保證なきこと、及び復職に際しての犠牲に對する確證の存せざること等である。この反對にも拘らず、翌十一日、更に數次の會合が行はれ、總務委員會は、一向、平和への努力を續けた。

十一日の午後八時であつた。總務委員會の全員と炭坑夫組合執行委員の全部とが、組合會議本部に會見をしたのは、總務委員會議長ピユは、サミユエルより交渉委員に提出されたる覺書が、交渉委員の採擇する所となり、更に總務委員の全會一致を以て承認する處となりたるを以つて、炭坑夫組合に對して、之を採擇の上、交渉開始の基礎條件となさんことを求むると共に、總罷業終熄の通告を全國の組合に向つて、發すべき旨を陳述したのであつた。之に對して、炭坑組合長スミスは、前夜決定して反對理由となせる諸點に就いて、ピユその他に詰問する所があつた。

之に對して總務委員會が、炭坑夫組合を滿足せしむるやうな答辯の出來得やう筈が無かつたことは、これまでの經過を知る者の容易に想像し得られる所であらう。例へば、サミユエル覺書の效力保障の點に就き、トマス等の答へ得たる所は、「英國の紳士を信ぜよ」などと云ふ薄弱極まる一句のみであつた。炭坑夫側の委員は、これに對する返答を決する爲め、隣家である勞働黨本部に引下り、十一日の夜半、左の決議を決定したのであつた。

炭坑組合執行委員會は、勞働組合會議交渉委員に依つて、現在の炭坑爭議を解決する爲めに得らるべき最良の條件を示すものとして起草され、又總務委員會に依つて承認されたる提案に對して、愼重なる考慮を與へた。

彼等は、交渉委員がその起草の準備に當れる場合、或ひは五月十一日以前の討議に就いて炭坑組合の責任ある代表者に對して、考慮を拂ふ機會を與へざりし事を遺憾とする。

その提議は、結局の所、大部分の炭坑夫に對する賃銀率の削減を包含するものであつて、それは炭坑組合の屢々繰り返へし來れる聲明に反するものであり、且同僚たる勞働組合員が今正に、それに反對しつゝあるものなることを彼等は信ずる。

彼等は、從つて、それによつて重大なる問題が惹起されることを慮りつゝも、尙ほ且つその提議を拒絕せざるを得ないことを遺憾とする更に、若し斯くの如き提議が總罷業終熄の手段として提出せらるゝならば、斯くの如き行動は全然總務委員會の責任に於いて爲さるべきものである。

炭坑夫側の推測にては、若し彼等がこの提議を拒絕したならば、よもや總務委員會は、これを理由として總罷業を終熄せしむるの擧に出ずる事あるまいと考へたものゝ如くであつた。然るに、總務委員會は、炭坑夫のこの態度を以て大なる過失なりとして、全く反對の態度を執つたのである。總罷業にして明白に成功し、政府を屈服せしめたらんには、事情は一變したであらうけれど、事情の全く反對なる今の如き場合に於いては、總務委員會が斯くの如き態度に出づべきは、蓋し容易に想像せられる所であるからである。なぜなら、總罷業開始以前に於けるピユの演說を見るも、又總罷業の開始理由を示せる宣言に徵するも「炭坑調査報告」を基礎として、調停を試みると云ふことは、總務委員會大多數の既定方針であつたからである。此の點は、總罷業終熄後に發表されたる總務委員會の報告によつても明白である。唯、問題は、終熄の機會とせしサミユエルの調停が、政府及び資本家を拘束すべき保障力を如何程有するやの一點である。總務委員會の立場は、若し炭坑夫組合だに承知するならば、總罷業を賭して企てたる目的が、サミユエルの調停によつて、少くとも道德的效果を奏したことゝなるから、それを理由として總罷業の終熄を來すを以て時機を得たる賢明なる政策と考へたものであらう。然るにも拘らず、炭坑夫組合の爭

議方針に關する傳統的先例は、今回の場合にも繰返へされ、この場合勞働運動全體の意見として、政府及び社會に立向ふ機會は、永久に失はれたのである。總罷業終熄後、數旬の孤軍奮鬪力漸く盡きんとして炭坑夫組合が、このサミエル覺書の内容よりも反つて劣れる「基督教會」の調停案を採用せざるを得ない窮境に陷り、尚且つその足元を見透してゐる政府の承認を得る見込み少なきを見る時、產業爭議に於いて「機會」を捕へることの重要なることを今更ら感ぜざるを得ない。勿論、總務委員會の思惟せし如く、若しあの場合炭坑夫が承認を與へたとしても、果して、政府及び炭坑主がそれに對して豫期の如き態度を示したであらうか、は全く一箇の問題である。唯ベヴィンの發表せる如く總罷業の主要目的たる炭坑組合を孤立の地位に遺して、無條件休止を行はんよりは、餘程ましであつたらしい、と想像されるのみである。

サミユエルの覺書

十二日朝、總務委員會は、炭坑夫組合執行委員の來集を乞ひ、後者が前夜決定せる反對決議にも拘らず、サミユエル覺書を基礎として、總罷業の終熄を行ひたる上、首相と會見し、炭坑爭議の再交渉の開かるべき條件を作るべく決定せる旨を告げた。そして、この際も、炭坑夫側に對して、その態度を改め、その決定に加はらんことを慫慂したのであつた。がしかし、炭坑組合委員は、依然として、これに應ずる態はざる所以を陳述した後、左の如き悲壯なる決議を殘して、九日間運命を伴にせる同僚組合と分れ。獨り將に開かれんとする深淵の如き前途に臨むこととなつたのである。

勞働組合會議委員の報告を聽取したる後、我々は五月十一日の決議を再び確言するものである。而してこの際我々炭坑夫の生活權を擁護せんが爲め直ちに罷業の擧に出でたる全勞働者の示されたる、驚嘆すべき忠愛の表示に對して、深厚なる感謝の意を表する。最後に、出來得る限り近日中に開かるべき組合大會にこれを報告すべし。

今左に、十二日、サミユエルと總務委員會との間に取交されたる書簡及び覺書を原文に忠實に譯出して置かう。

○サミユエルより總務委員會へ。

貴委員會と談合の結果生じたるものとして、その際到達したる結論を包含する覺書一通を添ふ。

小生は貴委員會に對して最初より、小生が全く自己の發意に從つて行動せるものであつて、政府より何等の權能を與へ居らず、又政府を代表して何事も確證を與ふるを得ざるものであることを明白になし置けり。

小生は、覺書中に包含され居る諸提議は採擇に値する妥當なるものであり、炭坑業に於ける爭因の解決の促進に資すべきものなることを信ずる。

交渉が再會されたる場合、政府がそれを採擇せんことを力強く勸告する。

○總務委員會よりサミユエルへ。

總務委員會は、本日付の貴簡とそれに添付されたる覺書とを愼重に審議したる後、それが炭坑業に於ける諸條件の交渉を再會する基礎たり得べしと云ふ貴下の意見に同意したり。

總務委員會は、總罷業の終熄に次ぎて執らるべき手段に關しては首相の發表せる公約を信じて、總罷業を休止すべき必要なる手段を執りつゝあり。彼等は、交渉の再會期中補助金が再び繼續せられ、炭坑夫に對する閉出し通告の直ちに撤回さるべきことを豫定す。

○覺　書

一、炭坑業の諸條件に關する交渉を再會し、その目的に必要なりと思惟せらるる期間、補助金を再び繼續すべし

二、炭坑業の爭議を解決する爲めには、炭坑主と炭坑夫ゝの會議以外の機關を創設するに非れば交渉の成功は覺束なかるべし。從つて、全國賃銀局を設定し、その中に兩當事者の代表者を包有せしむると共に、中立的要素と獨立の議長を加ふべし。炭坑業調査委員會報告中に、この件に關する暫定的提議を强調すると共に、その權限を一層擴大せしむべし。

三、賃銀局に對する當事者は、論議に上される爭點に關係ありと思惟する總ゆる問題を提出する權利を與へられる。賃銀局も亦、斯る問題を採用して審議すべき義務あるものとす。

四、調査委員會によつて提議されたる改造手段がその實行の爲め採用さるゝてう、充分なる保證の與へられざる限り、事前に於いて舊行の賃銀率に改訂を加ふべからず。首相によつて提議されたる如く、勞働者側の代表者をも含む一委會を設置し、政府と協力して、必要なる立法的及び行政的方策の準備をなさしむべし。該委員會、或ひはその代りとして賃銀局は炭坑業に關する限り、如何なる必要手段をも無視又は不當に遷延さるゝこと無きやう確證を與ふべし。

五、是等の諸點に就き一致を見たる上、又賃銀局が現存する直接な財政的困難に處すべき總ゆる實行的手段を考慮したる上、その課程が絶對に必要なりとせば、新なる賃銀協定を準備する方向に進むことを得。

六、その協定は、

(1) 若し實行可能ならば、從來行はれたるものよりは、一層簡明なる輪廓の上に爲さるべし。

(2) 如何なる方法に依るも最低給與者の賃銀に觸れて之が減額は爲されざるものとす。

(3) 一定の賃銀額を定めて、如何なる場合にも、あらゆる階級に屬す勞働者の普通、週間の賃銀額を削減せしめざるものとす。

(4) 新なる修正の爲されたる場合にも若し事實がその必要を保證する場合には、賃銀局は時々その修正を改訂する準備を爲すべし。

七、炭坑業に對して新なる勞働者を供給せんとする場合には、若し炭坑夫の失業せる者の得らるゝ限り、十八歳以下の者を雇入れることを禁止する政策を採るべし。

八、不經濟的なる坑區を閉塞する結果として生ずる勞働者の移轉に關しては次の諸點を確保すべし。

(a) 斯くの如き勞働者の移轉は、それに必要なる政府の補助を以て、調査委員會報告に勸告され居る如き方法にて行はるべきこ

と。

(b) 確定さるべき一定期間内に、その移轉の不可能なる者及び他に代るべき職業の發見し得ざる者の維持を爲すべし。その維持は失業保險法に於ける失業手當の現行率に對して協定の結果定めたる一定額を附加增したるものを包含するものとする。斯くの如く支拂はるべき附加額の支辨は大藏省に依つて支給さるゝものとす。

(c) 移轉されたる勞働者を收容すべき新住宅を急速に建造すべし。勞働組合會議は、當該事業に關與するものと商議の上、之と共同して、その便宜を企つるべし。

媾和に於ける政府の態度

斯くの如く、五月十一日、總務委員會は、サミユエル覺書を基礎として、總罷業の終熄を告ぐべきことを政府に通告し、首相に對して正式にその會見を申込み、その結果十二日の正午ダウニング・ストリートに於いて、總罷業の兩當事者が會見することゝなつた。その會見の模樣を述ぶる前、總罷業の將に酣なりし時、首相が無電放送を以て國民一般に告げたるマニフエストに就いて一言して置く事が便宜である。なぜなら、こは前揭の首相の公約の一つであり、總罷業に對する最も和解的なる政府の態度を示せるものであつて、今その媾和會議と見らるべき十二日の會見模樣を知る好箇の材料であるからである。そのマニフエストは、先づ如何にして總罷業が發生せるかに就いて語り、その責任は勞働組合會議側の總罷業計畫の發表にあることを述べ、次に政府が何故に之と戰ふかの理由として、勞働組合の炭坑夫擁護の方法は全社會を攻擊するものたるが故なりとし、政府は決して炭坑夫の勞働條件の低下を企圖するが爲めに、戰ふものに非ず、と斷りたる際、次の注意すべき文句を述べてゐる。

私は、政府が炭坑夫又は如何なる部門の勞働者の生活標準をも低下せんが爲めに戰ひつゝあるものに非ざる事を出來得る限り明瞭にしたい。かやうな風說は可なり廣く流布されてゐるが、それは眞實で無い。私は正直なる何人と雖も、勞働者の生活標準を維持する事が、私の滿腔の希望であり、又私がこの目的の爲めには產業の存續を可能ならしむることと一致する限り、傭主を壓迫して如何なる犧牲をも拂はしむる用意を有することを疑ふ人はあるまい。しかし、世の中には、斯ふ云ふ人が多い。『自分は總罷業には贊成せぬが、炭坑夫には充分贊成せざるを得ない』と。私もさうである。しかし、議會が二千三百萬磅を炭坑業の補助に支出し了へたる後、又有能なる調査委員會がその報告を提出したる後となつて、その報告書が見て以て炭坑業の存續を可能ならしむる唯一の條件なりと宣言せる基礎の上にその解決を齎す以外如何なる道が存しようか。從つて、私は、政府が今も尙ほ從來然りし如く、他の當事者にして然かなすならば、その報告書全部を採用する心組なることを再び繰り返へす。私は既に言つた、又今繰返すものであるが、政府はその報告書に於ける改造案を遂行する爲めに實行可能なる如何なる手段をも採るであらうと。政府は是等の手段が國家をして炭坑業に於ける屢々繰返へされる爭議より脫せしめ得る爲めに、

該事業を經濟的な基礎の上に置かしむる要素であることを信て止まぬのである。我々は、若し事情にして許すならば、炭坑主及び炭坑夫と商議し、如何なる方法によつてこの政策が實行され得るかを究むべき用意あり、又國家はその時が來るならば政府がその提議を準備するであらうことの確證を與へられて安堵し得るであらう。……以上政府の立場である。總罷業は絶對且つ無條件に終熄せしめられねばならぬ。炭坑爭議はその時、解決されるであらう。そは公平なる處置であつて、それを採用することは、一日延引すればする丈け悲慘と困厄とを增すのみなる闘爭を續くることに優る事千萬無量である。解決は勞働組合會議の指導者達が總罷業を捨つる意嚮を有する瞬間に於て國民の掌中に握らるゝであらう。私は平和の人間である。私は平和を望み、その爲めに働き且つ祈りつゝある。しかも、英國憲法の安全と保障とを委棄するわけには行かぬ。諸君は十八ケ月以前に於て幾年間此の方、如何なる黨派にも與へられたること無き絶對多數を以て私を政權に据へた。私は何事かこの信任に背くことを爲したであらうか。諸君は、各當事者に公平なる處理を爲しめ、人と人との間に正義を確保せしむべく私を信頼することが出來ないであらうか。

かやうな美しい文句を陳べて國民の賞讃を博したボルドウインその人が、果して文字通「平和の人」であり「公平と正義」とを確保する爲めに努力する人であるか、或ひは單なる感傷的言論を事とする僞善的政治家であり、頑强なる資本家階級の前には自說を固守し得ざる妥協的政治家であるか、の試金石として、十二日の會見は來たのである。なぜなら、今や勞働組合會議は、彼の注文通り「絶對且つ無條件」の總罷業終熄を宣言して、彼の前に和を媾ふべく集り來つたからである。

總務委員會側は會長ピユ、副會長スウエールス、書記長代理シトラインを始め多數の委員列席し、政府側は首相始め閣僚六人立會ひの上、會見は、十二時二十分首相官邸に開かれたのである。先づピユよりして次ぎの如き意味の陳述があつた。「九日以前、議遂ひに纒らずして分れたる我々が、今日再び會見するに至れる所以のものは、畢竟するに總罷業に於て兩者の側に示されたる意思が共に究極に於て交涉を獲得するにある事が分明となりたるのみならず、輿論の趨勢も亦、その方向に於いて交涉再開の機會を提供するに至つたからである。この點に於いて、首相が無電を通じて國民に訴へられたる趣旨も、我々の無視し得ざる所であつた。そこで我々は種々なる可能性を考慮したる後、その交涉の再開を期さねばならぬと云ふ決意を爲し、只今より後、總罷業の終熄を爲すべき手筈をした。そして、その交涉が開始せられて滿足なる解決の得られることを希望する。これが我總務委員の爲すべき聲明である。」之に對し、首相は「先づその決意のなされたることに對して神に謝すと言ひ、只今は長き議論に時を費すべき時でなく、お互ひに爲すべき事が非常に多く有る、兎に角、早速閣議を開いて、政府の意思を

發表すると共に、他方坑主側と坑夫側の交渉再開の段取りに入るべく努めるであらう」と、極めて要領よく答へたのみであつた。之に對して、トマスが、總罷業を終熄せしめたる總務委員會の立場が、如何に思ひ切つた事であるかを語り、之に對して政府の側に於いても、同樣に大なる犧牲を忍んで貰ひたいと要求する所があつた。更にベヴインが、之が後を受けて、もつと具體的に政府の所見に就いて求むる所があつた。即ち、彼は、總罷業の終熄は決して弱きを示すものでなく、反つて强さを示すものであり、それは寔に勇氣を有するものであることを述べたる後、總罷業終熄後の復職に關し、雇主側の復讐行爲を未然に防ぐ爲め、政府より一般的の聲明を發して貰ひたいこと、及び炭坑爭議の交渉再開をして圓滑に進行せしむる爲め、炭坑夫の閉出しを撤回せしむべく政府に於いて決意して貰ひたいことの二點に就いて、首相に求むる所があつたのである。首相は、之に對して、考慮を要することであつて、即答は致し兼ねるが、出來る丈け速かに政府の意思を發表すべく、それには議會において發表するのが適當であらうと述べるに止つた。斯くの如くして、總罷業に終焉を告ぐべき會見は閉じられたのである。即ち、さしも、九日間全英國を震憾せしめた總罷業も勞働組合側の政府への無條件降伏として終熄を告げたのである。しかし、寔に、ベヴインの云ふ如く、彼等總務委員の個人的立場としては、あの場合に、總罷業を終熄せしめたことは、精神的勇氣を要したことであつたに違ひない。なぜなら、一時の無條件降伏が英國勞働運動全體の立場よりして、果して不得策なりや否やは、自ら別箇の問題であつて、總罷業が斯くの如き有樣に於いて終熄した事實のみより判斷し得ることで無いからである。總罷業は戰ひの手段であり、戰ひの目的では無いからである。この目的の爲に、一時の汚名を忍べる總務委員の立場にも亦、掬すべき一縷の道德的意義がある。總罷業の終熄理由に就いて、總務委員會を詰問する聲大なるものある裡に、かやうな觀察を下せる者、豈獨り筆者のみでは無いであらう。

その日の午後、議會の開會劈頭、マクドナルドの要求により、ボルドウインは、總罷業の終熄に就いて左の如き聲明を發した。「常識の勝利」なる言葉は、この時發せられたものなのである。

勞働組合會議總務委員會は、今日午前面會を申込み來り、總罷業を終熄すべき旨を傳へた。私は、閣僚と共に、可及的速かにその解決を齎らすべく、炭坑業の兩當事者間に交渉の再開を行はしむるやう、迅速に努力する積りであることを告げた。只今は只次のこと丈けを申述べるに止めたい。即ち、今正に到來したものと信ぜられる平和は、又獲得せられたる勝利は、國民一部分の常識の勝利ではなく、全英國民

の最良部分の常識の勝利である。而して目下の如き場合に於いては、總ての國民が、その眼を過去に向けず、たゞ前途に向け、總ての怨恨と復讎とを振り捨てて協働の精神によつて仕事を再開することが、最も重大な事である。

國民最良部分の常識の勝利！　確かにそれに違ひない。ただ、その常識なるものは、我々の常識によつて解釋は出來ぬ。それは、エドマンド・バークによつて主張され、ジョン・モレーによつて敷衍されはしたが、今日依然として尙ほ究明に値する英國政治哲學の課題であるコンプロマイズの別名に外ならぬ。而して、今回の總罷業は、この課題への新なる一の材料を提出したに過ぎぬ。その全幅の意義は將來の史家の手に委せらるべきであらう。

阿部次郎著

北郊雜記

◆定價壹圓九拾錢　菊半截◆
◆送料十八錢　天金美本◆

十六版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した氣品ある評論と隨筆だ。氏が論壇に於て第一人者なるが如くそのスッキリした文章を通して氏の人格主義乃至藝術觀、人生觀を知ることの出來る高雅な隨筆だ。

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

現代苦悶の諸相と其の打開

機能主義の未發達と實現

杉森孝次郎

「現代生活の倫理的苦悶とその打開」といふ題で都合を問はれた。結局、それが事情因をなして、私は、その問ひに酬いる意味でこの一文を作る。

「現代生活の倫理的苦悶」は、その表現を出來るだけ有意義に受け取るならば、機能主義の未發達を原因とするものだと私は考へる。隨つて、それの「打開」は、それに發達を與へることにあると考へる。

私がここで機能主義と呼ぶところのものはなにか。それは、一全體に於ける各部分が、その部分自身にとつては目的を、その部分以外のすべての部分にとつては手段を形成する狀態にほかならない。その狀態を目的觀念として持つ意思にほかならない。

その一全體は個人でもありうる。それは社會でもありうる。

倫理は綜合善を目的とする認識及び行動にほかならない。善とは欲求の滿足をいふ。綜合善は、社會的綜合善を條件とする個人的綜合善のほか、現代人のものとしては、ありえない。

機能主義は專制主義と兩立しない。それは隨つて卑屈を否定する。機能主義は奴隸制度を許容しない。

マールクス及びエンゲルスが、かれらの有名なる共作に於て、「各人の自由發達がすべての人々の自由發達にとつての條件」である社會を期待したのは、意味に於ては、機能主義の主張にほかならなかつた。

機械時代に入つてこのかた、經濟的生産は、藝術的創作とは、それの過程に於て、全く似もつかぬものとなつた。道具時代に於ける生産過程には創作的意義が必然的にあつた。どうしてかといふに、道具は、手から離れては無能だ。道具が作用することは、手が作用することの直接延長だ。手が作用することは頭が作用することの直接延長であると同時に、一全人の集中的一作用にほかならない。道具使用的生産には使用當人の生命が必然流露する。

然るに、機械の特徴は自動にある。手から離れて有能であることが機械の存在理由だ。汽車は車掌の腕力によつて運轉させられはしない。かれの腕力は汽車のいはば極小限的一小部分を動かすにすぎない。運轉の最大部分は機械組織の自給功績だ。絶えず捲く必要のある時計は碌でもない機械だ。すべての道具には畫家の筆がある。すべての機械は事務員のタイプライターの兄弟だ。いな、多くの機械はそれよりも遙かに遠く自動的だ。

道具使用的生産には個人の自己表現の快樂があるが、機械生産には物理學、化學、數學そのものの自己實現があるだけだ。けれどもその自己は無心だ。

機械時代に入つて以來も、經濟的消費は依然としてそれ自身にも價値を持つ。通則としては、機械生産を消費することの方が道具的經濟生産を消費することよりも一層有價だ。駕籠旅行よりは汽車旅行の方が要するに餘計愉快だ。

機械時代に入るに及んで、經濟は物品及び物的奉仕を消費することにのみ目的が成り立ち、それを生産することには、勞働的部分が關する限り、かへつて多少の反目的が成り立ち始めたのだ。ただ、消費するために生産が必要である限りに於て、その生産に價値が成り立つ。その價値は、それゆゑに、獨創でなく派生だ。消費價値の一反映にそれはほかならない。

勞働としての生産行動が關する限り、それをせずに消費が出來さへすれば、その事情下には、なに人も勞働を忌避すべき人間性的、道德的完全理由を持つ。

機械時代に入るに及んで、及びその時代の發達につれて、經濟は消費のみに快、幸、目的が、そして勞働的生産行動にはそれらの性質の不在が、及び多少の反對性質が發見され、發達する必然理由があるのだ。

然るに、現代には、勞働階級の發達的、增大的傾向に於て顯著な存在がある。この階級は、最も適當に、生産階級と呼ばれうるものだ。かれらは經濟的生産階級そのものだ。他面に、かれと層別的に對立する位置に消費階級がある。

その勞働階級は、現代に於ける生産專門階級であるがゆゑ

に、手段階級だ。手段階級が存在することは、その社會が機能主義社會でない證據だ。

機械は、それの發生、發達、作用に於て、科學者、技術家、勞働者の功績だ。及びかれらを中心とする社會全體の功績だ。商賣人の功績たる意味はそこに遙かにすくない。單なる株主の功績は無視または反對視されて然るべき性質のもので今日すでに概般的にありまさつて來た。然るに、現代の事實としては、勞働者は勿論、技術家も、科學者までもが、商賣人「實業家」、單なる財力者の管理、支配、權力下に卑屈、不自由してゐる。

機能主義社會は資格證明を問ふ。勞働者、技術家、科學者は、産業に從事する資格を、實力のかたちに於て、持つ。單なる財力者と實業家と商賣人とは然らず。制度さへ變はれば、かれらを缺くも産業は不便しない。かへつて益する。

勿論、企業、經營、組織の必要が、産業には、常にある。しかし、現代に於ける所有權と經營權の持ちぬしは、發達した産業國に於て殊に、いよ／＼ます／＼現實、眞實の企業者、經營者、組織者ではなくなつて來た。

物を使用する當人がその物の所有權を持たず、それを使用しない遠方の遊閑者がそれの所有權を握つてゐる。仕事または事業をやる當人はその仕事または事業の經營、管理、決定權をすこしも持たず、その仕事または事業に現、眞實にはすこしも時間と精力を消費しない遠方の遊閑者がそれらの權利を握つてゐる。それゆゑに、物を現、眞實に使用する當人の自由が束縛されて充分に有意義に使用することができない。結果は社會及び當人の兩損だ。同樣に、仕事または事業を現、眞實にやる、またはする當人の自由が束縛されて充分に有意義にはたらけない。これは機能主義社會には許容されない現象だ。機能は最も正しい意味に於てはたらくことだ。機能するとは、一全體に於ける各部が、自己にとつて目的の遂行であり、他のすべての部分にとつて手段の享用であるしかたに作用すること、即ちはたらくことにほかならない。

現制に於ては、然るに、物を使用する人の目的がかれ自身に屬することが許されず、かへつてそれを使用しない外部者に屬することが許されてゐる。仕事をする人の目的がかれ自身に屬することが許されず、それをしない或他人に屬することが公許されてゐる。それでは、物の使用される能率も、仕事の成績も充分にあがりやうがない。

所有權と經營權が、非使用物者と非從業者にほとんど專屬してゐるがゆゑに、使用物者と從業者は貧乏と苦役をあはせ受けさせられる。反對に、單なる所有權者と經營權者が産と閑を、

浪費するほかないほどに、贅澤至極に享樂する。

貧乏は、他の事情が同じなら、目的でなく反目的だ。苦役は文字通りに苦役だ。しかしながら、經營權なき仕事は、創作的意義なきものであるがゆゑに、單なる苦役たるをまぬかれない。貧乏と苦役は反目的だ。その貧乏と苦役が、同じ社會內に、反對の、即ち富足と遊閑の階級を維持するための方法である限りに於て、その貧乏と苦役の經驗主體者は單なる手段階級だ。機能主義社會には見られない、在ることを許されない、性質のものでそれはあるのだ。

現代に於ては、また、產があれば閑があり、產がなければ閑がないといふ事情が發達してゐる。閑とは、勿論、無爲、不聊を意味するものではない。それは、勞働即ち苦役を必要としない狀態を意味するものにほかならない。時間を非勞働的形式に於て消費する自由が即ち閑だ。されば、閑さへ許し與へられれば、人は、すくなくとも通則的には、個性表現を意味する創造的行動を必ず選び實現する。知識慾、美慾の滿足を追求する學問・藝術とか、競技とか、健康及び强壯とか、政治、企業、敎育、品性、各種愛等の自由追求にかれは必然おもむく。人間性は、實に、心理學的に、さう出來てゐるのだ。

閑は、かくして、目的體系內の一大項目だ。有閑階級と無閑階級との對立は、現代に於て、勿論、有產階級と無產階級との對立を直接に反映する一現象にほかならないが、それは、それ自分だけとしても、目的階級と手段階級との對立を意味するものであるのだ。

機械時代に入つては、奴隸は機械によつて全部構成され、人はみな產と閑の享樂者、自由使用者である狀態が當然目的として實現されべきだ。

然るに、現代に於ては、產業がまだ社會的一機能化されてゐない。したがつて產の有無を特徵とする階級別が許されてゐる。

產業が社會的一機能化されてゐない現實を、それの原因にしたがつて分析すれば、現代が半機械時代にあるといふ事實が第一に發見される。

半機械時代とここで呼んだのは、道具時代から機械時代への過渡期をさしたものにほかならない。

現代は、實に、生產の物的過程に於ては機械時代だが、生產に於ける物的過程以外の部分に於ては道具時代だ。道具時代に合理的であつた實行が、現代に於て不合理な習性として作用してゐる。これが產業の社會的一機能化——機械時代に於ては當然さうされべき根本理由あるにかかはらず——をさまたげ、そこからして種々の時代的悲劇、悲喜劇、苦悶が生じてゐる。以

下、それの或種類だけを、手あたり次第式に雜拾して見よう。

即ち、例へば、現代は、しかしながら個人としての資格に於てでなく社會としての資格に於て、財物を不適當に評價する。いひかへるならば、物品、物的奉仕、したがつてまたそれらのものを獲得する手段、いはゆる購買力即ち錢を、不當に勿體ながる。

道具時代に於ては、生產は大勞小果だつた。それこそ、一粒の穀に一粒の汗が反映してゐた。道具時代は小量生產時代だ。だから、その時代に於ては、財物は珍重される當然の事情があつた。

機械時代に入つて、しかしながら、この事情は一變して實はなくなつた。機械は自動する。しかも高能に、大量に生產する。道具時代に於ては、大量生產の自由が科學的、技術的無能ゆゑに、なかつた。機械時代に於ては、その自由が、道德的、社會科學的、制度的にだけ社會が聰明化しさへすれば、充分にある。然るに、現代は、道具時代的習性ゆゑに、財物を個人的努力及び功績たるかの如くに誤想してゐる。財物の與、不與を、個人的勸善、懲惡の具に供したがりもする。たとひ財物は、現に生產されたかたちに於て、及び容易に生產されうるかたちに於て、有り餘つてゐても、これを人に只でやるべきものではないといふ迷信が現代にはある。勞働しない人間に食、衣、住を供給することは、機械が容易にそれを供給しうる場合に於てさへなほかつ、財物の尊嚴を侵犯する行動だとやうに現代は想ふ。

その結果、現代は、生產制限、分配制限、購買力制限等を無意識的に大きく實行しつつある。生產、分配、錢を制限して稀有、拂底にしないならば、財物の與、不與を方法として人を賞、罰することはできないからだ。誰れでもが、自由に、いくらでも、欲するにまかせて取りうるものを與、不與することによつて人を勸善、懲惡することは勿論徒勞だからだ。サンマが腐るほど取れた場所でサンマでは御馳走にもみやげにもならない。一兩日間サンマを食はさないと宣告しても譴責とはならない。發動機船で取れば樂にいくらでも取れる魚をわざと取らずに置くか、取つた魚を、只で人にやるのは勿體ないと考へて海へ棄てるか、腐らない物なら隱して置くか、なににしても容易に人間に消費させては世道、人心、風敎、品性のためにもよろしくないと現代は考へる。錢があると買ふからといふので錢を渡すことをも制限する。

けれども、錢は、金であらうが銀であらうが、いかなる人間よりもつまらないものだ。物品及び物的作用は、どんな人間にとつて有用であらうが、それ自身は無心だ。機械も勿論それ

だ。かれらをこき使ふことはすこしも氣の毒がるべき理由がない。現代は、然るに、道具時代的習性ゆゑに、生きた人間に對してよりも死んだ、例へばマグロ、に對して敬と愛をささげてゐると判斷される部分を大きく持つ。

道具時代的習性と、機械時代的習性との混成的變態現象としての悲喜劇、悲劇、苦悶も現代には多々ある。

機械時代に入つてからは、經濟は消費にのみ獨立的價値があるのに、現代はそれをのみ込まない。現代は、勞働しうる體力の持ちぬしがどれだけあるかを問ふ。勞働的體力の持ちぬしが勞働せずにゐることは罪惡だと、政策的にでなく、永久則的にも、現代は多少見る。かくして、科學と機械に充分の自由を與へれば省きえられる勞働をまでも、その自由を犠牲にして健體者に押しつける意思も現代には決して不可能でも、非存在でもない。これには、勞働を目的視する半機械時代的無反省の習性が原因となつてゐるのだ。また、樂に財物を與へてはすまない、勿體ないといふ道具時代的習性がそこに同時に作用してゐる。

半機械時代としての悲喜劇、悲劇、苦悶は現代の失業觀にもある。失業は、機械の發達と共に必然、當然普遍化する。その失業が勞働としての業を失することを意味する限りに於てだ。方法に於て自動、結果または目的に於て高能、大量生産である機械の發達が、勞働を廢用にすること、勞働の優等代用物としてさうすることは極めて平明な事理であらねばならん。失業は、實に、根本的には産業發達の一必然的測度計だ。

産業の目的は、機械時代に於ては、失業救濟に存すべきではない。社會の消費的必要を滿足させることにこそ存すべきだ。機械時代に進み入るに隨つて、この理はます〳〵有力化する。どうしてかといふに、そこでは産業は機械の發達ゆゑにます〳〵集團、社會の直接功績化する。また、その機械の發達ゆゑに、それは社會の消費を滿足させうるものとます〳〵なる。さうだとするならば、産業の目的は、その時代に於ては、勞働としての業を供給することをば積極的目的とすべきでない。社會的消費が、それのみが産業の主目的であり、勞働としての業を供給することは、機械でまにあはない部分を補足する消極的必要として評價されねばならん。

機械の發達と共に、勞働は極小限化するほかない。勿論、機械を造るためにも勞働は多少必要だ。また新企業にも最低限的必要の勞働はある。産業そのものに不可避な額の勞働がある。しかし、一定額の生産が關する限り、勞働は、機械の發達と共に、極小限化するほかない。この事理は、機械の發達と勞働の廢用化との間なる必然關係を反映する。産業革命の結果として

勞働階級が發生、發達したこと、無産無閑階級がさうしたことは半機械時代を意味する現象にほかならない。

機械が發達した結果、仕事が殖え、また多忙になるといふ一面の事實はある。汽車が出來たために間斷なく旅行する身の上となる場合があるやうにだ。しかし、これは、正しい意味に於て機械が閑を助けず、かへつて減殺する必然をば暗示しない。その反對が眞だ。

半機械時代の一苦悶としては原料の國際的無機會も注意される。機械は交通機關、分業の發達を方法として産業、經濟の國境を必然改廢する。現代には、然るに、道具時代の民族主義、國民主義が習性として頑張つてゐる。ここに於てか、或主權國家は、當然の權利顔をして、原料の持ち腐れをも公行し、他の或民族や國民は、原料以外のすべての經濟的生産條件と、消費的必要を揃へて持つてゐても、原料がないばつかりに泣き寢入る。産業が社會的、國際社會的一機能化されるまでは、この苦悶は救はれない。

産業が社會的一機能化されてゐないゆゑに、現代に於ては、産業の純粹能率がいちじるしく制限されてゐる。産業の純粹能率と私がここで呼んだものはなにか。それは、企業者や商賈人や實業家の財嚢を肥やすことでなく、生産及び分配そのものの能率をさしたのだ。

例へば技術家の自由が、現代に於ては、廣義商賈人の都合の支配下にある。産業に於ける技術家の位置は、實驗室に於ける科學者の位置に酷似してゐる。知識、討究、公開が、そこには生命的一必要だ。然るに、その自由は、私營産業、營利主義的産業が當然必要とする「秘密」のために拘束される（ヱブレン氏著『アブセンティー、オーナーシップ』その他想起）。産業物理學、化學、機械、發明等々の發達が、營利主義産業に於て受難する程度は甚だ高い。技術家の創造的自由も現制下では制限されるが、消費者が、産業の純粹能率が受ける制限ゆゑに、結局、受難する。

公開といへば、技術のみならず、生産費と利得の一般的公開が、産業を社會的一機能化するために生ずる、及び先づ要求される一性質だ。現代は、それの不公開ゆゑに隨分損害を受けてゐる。政治の公開はともかくも議會に於て機會を持つ。外交の公開も聲だけは出た。産業の公開が半機械時代の自己超越と共に必然だ。

大觀すれば、資本主義も、社會主義も、勞働運動も、失業も、階級も、それの意識及び鬪爭も、ことごとく半機械時代を反映する多少の悲喜及び苦悶だ。それらは、みな、産業の社會的一

機能化を條件として歴史的過去のものとなる。資本主義と社會主義との爭ひは、産業主義と人間主義との爭ひへすでに意識的にも移り始めた（ラッセル氏著『産業文明の前途』その他想起）。資本主義も、社會主義も、産業主義内の一形と他形にほかならない。産業と人間性との間なる關係の改正が、社會主義の無意識的强點だ。それが意識化する餘地がある。

教育も、政治も、學問も、藝術も、それぞれに、社會的一機能化する餘地を示す。それらは、いづれも、機械以前的形式の個人主義から解放されて、機械時代の個人主義へ移屬する必要がある。いひかへるならば、それらは、いづれも、閑主義（Inactionism）から機能主義（Functionism）へ進歩する必要がある。一切の現代的苦悶を解除する第一鍵はこゝにある。

現代の閑は、種族及び資本本位のものだ。社會的一機能として位置を與へられることによつて始めて充分に作用しうる諸文化内容が、閑用的位置ゆゑに、あまねく、はげしく不自由してゐる。現存の無産階級運動も、注意を忘れれば閑化しうる。

現代苦悶の世界内に、生理的病弱、一般的性生活に屬するものがきた大きな位置を占めてゐることは事實だ。しかし、これらも、各種文化内容の社會的一機能化を待つて自然、必然、救除される事情を持つ。

中間階級の苦悶とその對策

青野季吉

中間階級といふとよほど範圍が廣くなつて、獨立の小經濟主體を形造つてゐる例へば醫師とか商人とか言つたものもその中に包含されることになるが、こゝではそう言ふ廣い範圍ではなく、主として俸給生活者階級を中心として論じ度いと思ふ。

それと言ふのは、中間階級のうちでも、今日最も苦しい狀態にあるのは、この階級であり、したがつてその動搖が社會の表面へ强く現はれて來てゐるのも、この階級だからである。

勿論、開業醫とか小商人とか言つた小經濟主體をなしてゐる

廣い意味の中間階級も、今日決して經濟的に安定を得てゐるわけではない。俸給生活者同樣に、不安と苦痛とを經驗してゐる。しかしながらそれらの中間階級の苦痛と、俸給生活者階級のそれとは、今日、程度においても質においても違つてゐる。したがつて同じ取扱ひをすることは出來ない。そんな譯で、學者によつては、前者を舊中間階級、後者を新中間階級として嚴別して取扱つてゐる。

何故兩者が嚴別されねばならぬか、兩者の苦痛と不安が量に於ても質において違つてゐるかと一寸說明して置かう。舊中間階級の場合では、自分が經濟行動の主體であつて、その範圍で別に、資本家と直接の對立關係に在る譯ではない。ところが新中間階級の場合になると、自分は決して經濟主體でなく、例へば會社とか銀行とか言つた大きな經濟單位の中にあつて、それの主體たる重役とか取締役とか言つた階級と、資本家對勞働者の對立關係に在るのである。これが兩者に置かれた經濟關係の違ひの根本である。そこで舊中間階級の不安や苦痛の種は何であるかと言ふに、自分の經濟がやつて行けないことである。どんなにやりくりしてもどんなに仕事をしても利益が上つて行かないことである。そうして絶えず商賣の前途が不安になり、生活が脅威される。が、俸給生活者の場合のやうに、突然の失業の不安が、夢魔のやうに襲つて來てゐると言ふやうなことはないし、非人間的な使役を直接に他者から受けると言ふやうなことはない。それに反して俸給生活者では、自己の『儲け』などと言ふものは問題でなく、また彼等が何も經營の主體でもなく經營に參與してゐる譯でもないなら、自分の雇傭されてゐる會社や銀行の利益なども、彼等にとつて問題ではない。問題なのは、自分の俸給額であり、自分の地位の安定であり、上からの取扱はれ方である。ここに多少の形式上の差はあつても、結局彼等の立場は勞働者の立場と同じものである。

いまさら說明するまでもなく、舊中間階級も新中間階級も、今日は最早安定を失つて、そこからいろんな動搖が渦卷いて來てゐる。今日の社會相を濃厚に色づけてゐるものは言ふまでもなく、資本家階級と勞働者階級との對立、鬪爭の醸し出してゐる險惡な空氣であるが、中間階級全體の不安と動搖も、近年殊に、社會相を色づけてゐる。特に目についた最近の二三の實例をあげると、あの長野縣騷擾事件なども、單なる一知事の暴政とか警察署廢止とかに基くものだと解すべきでない。、、。それはあの騷擾を生んだ二三の小都會を構成する舊中間階級の窘窮と、それに發した漠然たる政治

的・、、、、、、、、、。この實體が摑まれない以上、あの事件の發生と、あの事件の喚起した全國的の深刻な注目とを理解することは出來ない。新中間階級の場合でも、最近には特に新現象が見られる。と言ふのは俸給生活者の爭議が續々として起り、それが一個の勞働爭議の內容を具へて來たことである。一二年前の郵船會社の下級社員の同盟罷業の時にはまだ十分に勞働爭議の體を具へて居らず、最初から非鬪爭的であつたが、最近のになると純然たる爭議化して居り、それに勞働者の場合と異つて、そこにいろんな副次的な現象も加はつて面白い關係が生出されてゐる。最近東京で起つた爭議だけで見ても、一番はつきりしてゐたのは八千代生命の社員の罷業で、全然勞働爭議と選ぶところはなかつた。次に變つてゐたのは南明座の音樂手の爭議や、家庭購買組合の從業員の爭議、極く最近での曠野社の爭議である。南明座のでは『階級と超越』してゐるやうな藝術家でも、資本家と對立しては一個の藝術勞働者でしかないことが證明され、音樂手達が生活の壓迫によつてそれを自覺したことが證明され、音樂手達が生活の壓迫によつてそれを自覺したことが證されてゐる、家庭購買組合は一個の社會改良の運動であるが、そしてそこの從業員は多かれ尠かれその改良運動に理解があるわけだが、それだけで彼等の急迫した生活の壓力をはね返し切れるものでない。そこで、當然資本家對勞働者の關係が曝露されて、爭議となつたのである。消費組合は意義のある改良運動の一つであるが、資本主義社會の環境にあつては、その作用と效力は制限されてゐる。組合內部に生ずる資本家と勞働者の關係、そこから來る勞働者としての要求、それもその制限を來す一つの要因である。家庭購買組合の實例はそれを鮮やかに物語つてゐる。興味ある現象である。曠野社印刷工場のは現在ではまだ完全に爭議化してはゐないが、これも興味ある現象である。こゝの工場及び關係の仕事には、武者小路氏の人道主義・平和主義に心醉する『新らしい村』の同人も加つてゐるのであるが、その同人だちの受けてゐる經濟的待遇が、同じところで働いてゐる勞働者のそれよりも一層惡いと言つた妙な現象がある。そこで爭議にはその同人だちの方が勞働者よりは積極的に參加してゐると言ふ有樣である。空疎な人道主義の心醉者も、現實の生活の必要には勝てない。そして現實の生活の必要は彼等が一個の頭腦勞働者にすぎず、資本と勞働の對立の關係におかれてゐると言ふ現實を、彼等の肉眼に叩込まずにはおかぬのである。これらは單に東京だけであるが俸給生活者の勞働爭議は、いまや全國的の事實となつてゐる。これはいかに彼等の生活が不安であり、彼等の置かれた社會的位置が低下してゐ

るかを語るものであり、兼ねて彼等の眼が、欲せずして、社會の現實の前に開かせられたかを示すものである。彼等の眼が、社會の現實に視點を結べば一個の頭腦勞働者としての自己の哀れな姿を發見しないではおれないのである。

洋服細民とか、腰辨とか言つた侮蔑的な稱呼は、早くから行はれてゐる。俸給生活者の苦しい生活の內容は、早くから當人にも自覺され、社會からも認められてゐた。それが最近になつて特にひどくなり、俸給生活者自身の生活運動にまで誘導して來たのは何故であるか。これには廣汎な社會經濟的理由があり、それを一通り知らなければ、十分な理解は成立たない。がこゝでその說明を委しくしてゐるわけにはいかない。で、ほんの示唆的に說明しておけばかうである。

資本主義の經濟組織のなかにあるもの一切の經營組織は、ピラミツド型になつてゐて、その頂點には廣い意味の資本家階級がゐる。そのすぐ下の中の巾の廣い部分が中間階級であつて、最も下の巾の廣い部分が勞働階級である。この組織形態は獨り經濟的經營組織で見られるばかりでなく、資本主義社會でのすべての經營組織に見られる。たとへば軍隊や役所の組織でもそうなつて居る。最高級武官、下士官、一兵卒の組織がそうも成つて居り、最高當局、官吏、最下級び雇員の關係がそうなつて

そこで資本主義社會でのこの普通組織の著しい特徵は、上から下へ搾取關係、支配關係で組立てられてゐて、上と下とが合意的協同的關係におかれてゐないと言ふことである。

この組織形態で分る通り、中間階級はまことに資本家と勞働者の中間に存在してゐる。が、上の資本家と合意的協同的關係に立つてゐないこと、資本家階級、支配階級にたいして隸屬的な地位にあることは、勞働階級と選ぶところはたいのである。ところでこれもその組織形態で分るやうに資本家は直接に勞働階級に當面して立つてゐるのではなく、機能の上で勞働階級と直接の關係が結ばれてゐるのは中間階級である。これだけで見れば中間階級は飽までも機能の上で勞働階級と對立してゐるだけで、何も資本家の利益を代表してゐるやうには見えないが、この組織全體が資本家の利潤を目的として、支配者の便宜を目的として組立てられてゐるものであるから、客觀的には中間階級は資本家の利益、支配者の目的を、勞働階級にたいして代表してゐることになるのである。これが大切の點である。

この關係は資本家階級、勞働階級及び中間階級それ自身の意識にも、反映しないではおかない。資本家階級は中間階級を直接に自己の擁護階級と意識し、勞働階級はそれを廣い意味の敵對階級中のものと意識する。そうしてまた中間階級それ自身

は、一種の資本家階級であると意識する。事實、資本家階級は、あらゆる手段で中間階級を保護し、それを實質的に擁護階級たらしめる。極端な場合では大資本家は自己の直接に經營する學校で自己の使用者を養成し、獨自の家憲的道德を吹込むと言つたことさへ行ふのである。

しかしそれも資本家の地位の安固である間、即ち利潤が十分に上つて、潤澤に中間階級を賄ひ得る間のことである。即ち資本主義の經濟的生命が、蝕まれない間のことである。一端それが蝕まれて來て、資本家の利潤が不安定となつて來ると、最早、資本家階級は、全體として、中間階級を十分に、言ひ代へると意識的擁護階級たらしめておくに足るだけ十分に、賄つてやることは出來ない。そうなつて來ると愈々露出されて來るものは、被搾取階級、被支配階級としての中間階級の現實である。それに一方、資本主義が最近代化されて、トラストやカルテルの如き企業形態が發達し、經營單位が大規模になつて來れば來るほど、新中間階級が飛躍的に數に於て增大する。それだけまたこの階級內部に競爭が激烈となり、失業の脅威が強くなつて來る。それがまた被搾取階級、被支配階級としての中間階級の現實暴露を行ふ一つの力である。これらの階級としての運命は、一人の例では專門學校の卒業者の例を見れば明白である。以前には專門學校を出ればとにかく社會的階梯の中位を占め、漸次上位へと昇つてゆける可能があつたが、今日では卒業後直ちに就職難があり、就職後にも競爭による失業が絕えず脅威してゐる。況んや社會階梯の上位へ昇つて、自ら資本家となるといふ如きは、例外的にも殆んど不可能となつてしまつた。今日では或意味に於て、中間階級の地位は、勞働階級のそれよりは絕望的だと言つてよいのである。

曩に述べたピラミット型の組織形態は、上位、次位、下位の經濟的連絡を示すばかりでなく、それを反映した意識連絡を示すものであるが、事態がこの段階に入ると、その經濟的連絡が切斷されるばかりでなく、それに相應して漸次、意識的連絡も切斷されてしまふのである。そうして、中間階級の親和力が資本家階級に對して稀薄となる度合だけ勞働階級にたいして濃厚となつて來るのである。たとへば曩に述べた曠野社の同人の場合の人道主義などは、客觀的に云つて中間階級の資本家階級への親和力を濃厚にする意識作用であるが、經濟的必要はその意識作用を切斷してしまつたのである。

日本の新中間階級の置かれた今日の段階は、正にこれであつて、俸給生活者の集團化、その活動の集團行動化、最近のその運動の勞働運動化は、それを實證するものに外ならない。尤も

今日はまだその萠芽期であつて、中間階級の苦痛の增大と共に、その過程に急激に進行するものと見なければならない。

それならば新、舊中間階級のその不安と痛苦と動搖との救濟策は何であるか、爲政者が謂ゆる中間階級政策（ミツテルシユタンドポリテイク）を樹て、主として舊中間階級の沒落を、政治的に、阻止しやうとしてゐることは、誰でも知つてゐる。が、それがいかに無效果的であるかは、かの自作農創定の如き一つの政策によつても曝露されてゐる。そこには政府の支出する僅かな金で、極く少數の自作農が創定される代りに、多數の自作農の大げさな小作農への沒落があると言つた皮肉な現象が認められるのである。それでもまた舊中間階級に向つては爲政者のそんな政策もあるが、新中間階級に向つては、今日爲政者に何の救濟策もないのである。知識階級の失業者救濟などと時々思ひ出したやうにやかましく論ぜられるが、何一つ積極的な方策も樹てられたのを聞かない。勞働階級に對しては、ともかく工場法のやうな施設があつて、その勞働の多少の安定が約束されてゐるが、俸給生活者階級になるとそれさへなく、謂ゆるハガキ一本でその『首』が左右されても法的には異議がはさめないのである。

そこで俸給者階級にとつては、勞働者階級が長い間の鬪爭によつて、不完全ながら工場法を戰ひとつたやうに法的な保護を戰ひとる如きことも當面に必要である。また日常に集團的な鬪爭によつて、その賃銀（俸給）の維持、向上を圖ることも必要である。それには何より先づ、意識的に結合することが必要になつて來ることは言ふを待たない。これらは現に俸給者階級の自覺した部分が踏んでゐる過程であつて、眞の『救濟策』はこの過程のうちに見出されて行くものである。資本家階級の中間階級政策や、現實關係を無視した、空想的な、中間階級自身の自身救濟策などは、決して眞の救濟策ではなくて、或苦痛を隱蔽したり、苦痛にたいする無感覺狀態を人工的に案出するものでしかないのである。

が、こゝに留意すべきは、中間階級がそれ自身だけで、職業的に結合して資本家と對抗したのでは、まだ十分でないと言ふことである。それればかりでない複雜化してゐる今日の産業組織は、そう云ふ中間階級それ自身の獨立な結合を或程度まで無意味にもしてゐるのである。資本家と有力に鬪爭するためには、中間階級者は、自己の屬する産業に從事する勞働者階級と結合しなければならない。このことは勞働者階級についても言ひ得られるが、中間階級の場合では一層その必要に迫られてゐるのである。一産業一組合主義の如きはその必要に基いたものであり、現在日本の勞働運動で、産業別組合への運動の整理が唱へ

られてゐるのもこれがためである。かくして、一產業の一切の勞務者の結合體による一產業の管理、更にそれより進んだ段階を意識的に齎らすこと以外には、俸給生活者がその生活を確立し、その技術、才能を眞に社會的に發揮する道はないのである。(一一、三〇)

政治の行詰まりと將來

室伏高信

一

今日の政治が行詰つたといふことはよく聞くところである。けれども政治が行詰まつたといふことが何を意味するかといふの點になると人々の答は直に行詰まつてしまうのである。

政治は何ゆえに行詰まつたといふか。政治の行詰まりといふことが若しも政治の局面においての變化の可能性の問題であるを考へられるならばそれが打開といふことは決して面倒なことではない。靑木信光の向背といふことの一事によつてもこの問題は直に解決されるのである。この意味においての政治の鍵はたしかに彼の手において握られてゐるのである。彼は今日の政治においての weather—cock である。彼が幾何の才幹をもち、幾何の慾望をもち、若しくは幾何の政術に長じてゐるかを知らない。けれども彼の政治的感覺が拔群であるといふことは遠方からの政治の見物人にも理解せられることである。彼は政治における新感覺派であり、そして最高の感覺を代表する。彼はこの點において一個の天才であるといふことができるのである。そしてまたこの意味において彼は若槻よりも、田中よりも、床次よりも、若しくは政治の倫理化といふごとき田舍芝居の後藤よりも遙に高き政治を代表することが出來るのである。高等政治といふことは、今日においては、彼のごとき高等感覺においてのみ

意識され、實現され、そして主張されることができるのである。

けれども彼の感覺の高さといふことが果してどれだけの高さであるか。新感覺派といはれるものが遂に一個の都會的感覺であり、そして都會のデカデンスを代表するところの末梢的、世紀末的、小理智的なものであるに過ぎなかつたごとくに、政治上の新感覺派もまた遂に一個の政治的感覺であつて、政治の領土のほかには一歩も出てはゐないのである。それは床次についての感覺であり、田中についての感覺であり、若槻についての感覺であり、若しくは床次の一黨、田中の一黨、若槻の一黨についての感覺であつて、それは貴族院と衆議院とのほかには一歩も出てはゐないのである。言葉を新にすれば政治界といはれるところの一つの世界においての末梢的な、世紀末的な、小理智的な臭覺を代表してゐるのである。即ち今日における政治のデカデンスが、その最も高き意味において、青木信光において要約されてゐると私はいふのである。

こゝにおいて政治の局面展開といふことは政治の世界においての展開である。政治家と稱するところの一團の職業人の間においての局面の展開であり、政權の取引である。若槻に代へるに田中をもつてするといふことである。田中と床次とを提携させるといふことである。朴烈事件である。僞證罪である。機密秘事件である。若槻の謂ふところの陰謀なるものがこれである。そして床次はこれを「政策以上」だと名づけたのである。それはたしかに政策以上である。今日の政治においてはこれは正しく政策以上である。それが政治の原則においての戰ひであるからといふのでは勿論ない。今日の政治は原則においての戰ひをもたないのである。こゝに政治の爭ひは原則から政策へと移つたといふかも知れない。原理喪失といふことからすると政治上の問題が政策のうへに移されたごとくに見えないことはないのである。けれども政策上の爭ひが今日の政治において存在するかといふ點になると何人も答辯を差控へるのである。政策においての相違といふものは今日は殆んど存在しないのである。凡ての既成政黨を通じて政策上の相違といふものは事實上にないのである。存在するところの多少の相違と雖もそれは存在するものではないのである。作られたのである。殊更に作られたのである。反對せんが爲めに反對したのである。政黨が政策によつて離合集散するものでないといふことは政黨員自身が一番よくこれを知つてゐるのである。政黨員の態度においてはたゞ二つの可能がある。反對するがための反對、そして贊成するがための

賛成がそれである。後者においては一つの政黨が成立し、前者においては數種の政黨が成立するのである。だから多少の相違はあるにしても眞に多少の相違である。どうでもよき相違である。相違しない方が一層いゝのである。相違した部分において弱く相違しない部分において强いのである。されば ブライスが亞米利加の政黨政治についていふたところは至言である、曰く亞米利加に二つの大政黨は二つの空瓶である。レツテルさへ保たれてゐるならば何れの液體を入れても差支へないのであると。

政黨の間においての區別は今日はたゞレツテルにおいての區別である。そのレツテルに名づけてわれ〳〵はこれを政友會といひ、政友本黨といひ、若しくは憲政會といふてゐるのである。されば甲が乙に代り、乙が丙に代るといふことは實質においては何等の變化はないのである。ビイコンスフヰイルドに對してグラツドストオンが代つたといふごとき意味は最早や今日の政治においては見ることはできないのである。從つて內閣が代つても代らなくても政治の局面においては何等の展開もないのである。かくのごとき展開は國民の立場からすればあつてもよく無くてもよいのである。たゞ歌舞伎が一ケ月に一回づゝ與業物を代へなければならないやうに、若しくはキネマが金曜日每にプログラムを代へなければならないやうに、政治の局面のうちにおいて變化のあるといふことは、見物人にとつては退屈をまぎらすものとしての價値を認めるのである。この意味において政界の金曜日といふことは無意味ではないのであるが、けれどもたゞそれだけのことである。否、人々はキネマを待つごとくに政治の金曜日を待どうしく思つてゐないのである。政治に對する一般の興味はかくして先づ人々の心から去られなければならなかつたのである。

二

政治は原則において爭はれなくなつたといふことは政治が政策において爭はれるといふことを意味するものではない。原則においての爭ひがなくなり、そして政策においての爭ひがなくなるのである。今日の政黨の間において政策上の爭ひが事實上存在しなくなつたといふことはそれが原則においての爭ひでなくなつたからである。政治が眞に政治家の政治ではなくして技術家の政治となつたからである。技術は一つの科學である。それは數學の尺度において行はれるのである。それは一つの社會觀でもなく、歷史觀でもなく、若しくは人生觀でもない。從つて各人別々のもの、人格的のものでもなく、若しくは階級人格的のものでもない。從つてそれは何人が局に當るも差支へはな

いのである。何人が局に當つても同一の結果が生ずるからである。Causa aequat effectum である。こゝに政治の機械化が存在するのである。この世界において若しも何等かの違つた結果が生じたとするならばそれはその間に不純なことが行はれたといふことを意味するのである。尺度において行はれずして利害によつて行はれたといふことを意味するのである。スポイルス・システムなるものはその最も代表的なものである。その制度が誤つてゐることは勿論であつて、それはあまりに多く誤つてゐたがために、政黨それ自身、スポイルス・システムの創設者でもあり、利用者でもあつたところの政黨それ自身がこれを廢止しなければならなくなつたものである。一般に政務と事務とを區別するといふことは世界の行政組織における原則として各國に利用されることとなつたのである。けれどもその政務と事務との區別が果して可能であるかといふことが今日は再び問題となつてきたことをわれ〳〵は注意しなくてはならないのである。今日の政治において政務と事務とが果して區別することが可能であらうか。われ〳〵は今日は眞面目にかくのごとく問はなければならないのである。政治が事務化したからである。原則においての政治が失はれ、それによつて政治そのものが事務のうちに埋沒されてしまつたからである。この意味において若槻禮次郎氏のごときは理想的の政治家である。最も信頼することのできる政治事務家であるといはなければならないのである。

三

何ゆえに原則においての爭ひがなくなつたのであるか。若槻が事務家であるがためか。政治家らしい政治家が存在しないためであるか。

それは政治家の必要がなくなつたからである。政治らしい政治、原則においての政治が要求されてゐないからである。少くとも一つの支配階級が絶對的に支配してゐるところにおいては、階級的不安が横つてゐないところにおいては、原則においての政治は必要を認められてゐないのである。政治の原則といはれた古るき立場が崩壞してしまつたのである。

この意味において、、、、、、、、、、、、、、、、、、國民的意思が、、、おいて表現されなくなつたからである。政治において國民的意思を組織することもできないし、また政治家がそれをとほして國民的意思を探りもとめるといふことも、、なくなつたのである。Vox populi Vox dei といふことが政治とはかゝわりがなくなつたのである。國民が次第に

政治の外に立つやうになつたのである。而して最初は政治に無關心となり、長き無關心の過程の間に、、、に對する敵意さへも民衆の心において起されてきたのである。松島事件、僞證罪、機密費、朴烈事件といふが如きものが「政策以上」の價値をもち、國民が一般に政治的無關心であるにもかゝわらず、かくのごとく問題に注意を怠らないといふことは、現代政治に對する國民の不平、反感、敵意を證據立てゝゐることのほかの何ものでもないのである。

近代の歴史のうちにおいて今日のごとくに政治が國民の注意を惹かなくなつたことは少くないであらう。新聞紙の記事が最も多くこれを反影してゐるではないか。政治は最早やキネマやラヂオやスポオツほどの注意を引くの力を失つたのである。そして讀者の年齢が若ければ若いほど、即ち思想が新しければ新しいほど、政治に對する注意を少くしてきたのである。ベエスボオルの勝敗のためには時間と金錢とのありたけを投じて熱狂するところのものが政治に對しては全く無關心である。キネマ女優の名に比べて、ベエスボオルの選手の名に比べて政治家の名聲は一般には評判の種子となつてはゐないのである。

今日においても無政府主義はもとより一般の注意に價ひしてはないであらう。無政府主義はたゞ奇矯なものであるといふことによつてだけ民衆の注意に價ひしてゐるに過ぎない。大杉榮のポピユラリテイといふことが無政府主義を深く一般の印象に殘したことは事實であるが、それは尙ほ一般の心裡においては兇態に對する興味とは何の撰むところもなかつたといふことができるのである。

けれども政治に對する民衆の無關心といふことは既に民衆の心においては政治、、、、、、同一の結果をきたしてゐるのである。獨り日本だけではない。世界の各國を通じて政治熱といふものが全く冷却した。そして政治に對する言論といふものが今日は願望の時代から批評の時代へと入つたのである。一八三〇—七〇年の間の言論に比べて今日の政治に對する一般の批評の革命的變化といふことはブライスの近代民主主義のうちにおいての寂しき老政治家の訴へである。今日は未だ政治に對してこれを否定するものは無政府主義者の一角であるにしても、しかも、、、、、、、は既に一般の感情にまで進み、そして今日は進んで政治のために効能を述べたるものはなくなつたのである。纔にその例外として見ることのできるものはマルクス派の一團であるといふて差支へはないのである。

政治が一つの願望であると思はれた時代は過ぎ去つた。政治の側に立つものは政治が止むをえないものであるといふの一點において今日は避難所をもつてゐる。ヘエゲル時代において政治が國民の最高の意志でもあり、救濟主でもあると考へられたのに比べると今日の政治のための辯護は實にその影を薄くしたのである。ラスキの Grammer of politics はこの意味において現代政治思想を最もよく代表せるものとしてわれ〳〵の一讀に價ひするものである。それが徹底した政治學說としてではない。徹底しない政治學說として、政治のデカデンスを代表するものとして、この書物が先づ紀念されなければならないといふのである。

政治の必要が今日存在することは勿論である。けれどもたゞそれだけである。われ〳〵は最早やヘエゲルの如くに政治についての壯嚴な理論を必要とはしない。政治はたゞ必要である、否、止むをえないものであるといふの最低度の常識において政治理論の悉くを盡くすことができるのである。政治の機能が低くめられ、政治の信用が低くめられ、政治の威嚴が低くめられ、そして政治理論がメディオクルの低きにと墮したのである。

四

政治に對する唯一の希望は、、、、においてある。、、、、が政治の舞台に立つに及んで始めて政治は再び原則においての戰ひに引もどされるものと思はれてゐる。、、、が政治を皷舞するであらうかといふことは、、、、が眞に戰ひに價ひするかといふことによつて決定されるのである。、、、が戰ひに價ひするであらうかといふことは、、、が、眞に、、、であるかどうかといふことによつて決定されるのである。、、、、が眞に、、、要素をもつてゐるとしたならば、、、、、は遲かれ早かれ政治を皷舞し、政治の局面を打開し、民衆のエンツウシアズムに訴へるに至るであらう。

けれども、、、、が唯物主義の一つの新しい典型であり、そしてそれに甘んじてゐるものだとすればそれは眞にわれ〳〵の戰ひに價ひすることができるかどうか。否、それが眞に原則においての戰ひを意味するといふことができるであらうか。私は資本主義の否定者が安價なる妥協主義に陷ることを中止して眞にわれ〳〵の戰ひに價ひするところの新らしき大原則において立つことを望むのである。

現代經濟苦悶の特徴と其克服

高橋龜吉

一 現代經濟苦悶の特色

中世紀時代の苦悶の特色が主として「精神生活」の悩みであつたとすれば、現代の苦悶の特色は主として「經濟生活」の悩みである。例へば、中世紀時代の中心問題は宗教であつたが、今日の中心問題は所謂「社會問題」であつて、專ら經濟生活を基調とするが如きである。而して、この苦悶の時代相に斯く差異の生ずるに至つた根因は、要するに、現代の經濟的苦悶の特徴の然らしめたものに外ならない。

思ふに、現代の經濟的苦悶の特徴は、之を次の三點に要約することが出來るであらう。

一、恒久的生存不安の増大
二、社會の固定凝結と希望の消滅
三、現在の生活破產の脅威

以下、右の三項につき、項を分けて詳述すると共に、如何にして之を克服すべきかの大略を併せ述べるであらう。

二 恒久的生存不安の増大と其の克服

現代の經濟苦悶の第一特色は、「怠けさへしなければ食つて行ける」と云ふ安定の著しく欠けて來たことである。昔は、働かんとする意志のある限り、働く機會がなくて生存が脅かされると云ふが如きことは殆んど無しと云つてよかつた。然るに、現代人の最大不安は就職難であり、失業である。即ち、如何に働かんとあせつても、働く機會を捕へ得ないと云ふ苦悶である。

この苦悶は、先づ世の父兄などがその子弟の前途のために悩み、子弟自らは世の中に出でんとして痛苦し、一度世の中に出でたるものは解雇の悪夢に襲はれて苦しむ。現代人にして、この苦悶に多かれ少かれ悩まさるものは無く、しかもこの苦悶は、年と共に益々深刻になりつゝある。實に、斯の如き生存の不安は、前代人の全く知らざる所である。

なる程、職業世襲と云ふ一大安定のあつた前代に於ても生存の不安は絶無ではなかつた。しかし、その不安は例へば凶作とか洪水とか云ふが如き不可抗的の自然力に基くものか、乃至は領主の苛斂誅求に由るものであつて、働くことそのもの丶機會を奪ふが如き根本的なものでは決してなかつた。しかも、科學の發明と政治の發達とは、この兩者の不安を著しく乃至は完全に克服して、十七八世紀以來（日本について云へば明治維新以來）の新天地即ち資本主義經濟の發展時代を現出したのである。いかにも、資本主義の發展期に於ても、資本主義獨特の生存不安——就職難と失業苦——は存在してゐたに違ひないが、しかし之を今日（即ち資本主義衰退期）に比せば、その程度は遙かに輕微にして且つ局部的であり一時的であつた。例へば、さうした問題の起るのは專ら景氣の惡化した場合に限られてゐたのであつた。

然るに、今日に於ける就職難、失業苦は、斯樣な一時の不景氣に基くもの丶みでなく、更に恒久的性質のものが之れに加はり、しかもその恒久的性質の方が益々深刻に、一般的になりつ丶ある。斯樣のわけで現代の經濟苦悶の特色の一は、この後者、即ち恒久的性質の、就職難、失業苦に主としてあると云つてよい。

いま、右の如き就職難、失業苦が何故に益々深刻に一般化しつ丶あり、恒久化しつ丶あるかと云ふに、その主なる原因は之を次の諸點に要約することが出來るであらう。

一、資本主義的仕組みは、或る程度までの粗雜な交換經濟の調節には少からず有效であるが、或る程度以上に復雜した交換經濟の調節に對しては其の能力なく、茲に破綻を起すに至る。その結果が即ち就職難、失業苦となつて現はれる。蓋し、この種の就職難、失業苦は、社會の要求する職業の何であるかを知ることの出來ない結果として起る需要供給の不投合に基くものである。

二、資本主義的仕組みに由つて開發し得る資源に比し人口の過多となつたこと。乃至は之を逆に云へば、人口の增加につれて必要な資源の培養が資本主義的仕組では出來ないこと。

從つて、右の原因を除くことによつて、就職難、失業と云ふ生存不安の一大苦悶は克服し得るのである。それは、要するに、働かんと欲するものには常に職が與へられると云ふ仕組を作ることであるが、その具體的方法としての主なるものは左の三點である。

一、經濟統計の完成に由つて、その國の需要と供給との總體を豫め知り、之に基いて、將來の推移を察し、生產の種類分

量、從つて職業の種類分量を統制し得る仕組みによること。

二、萬一、右の豫算に狂ひを生じたる場合には、新事情に應じた調節（例へば轉業）を行ふこと、及びその期間の生活を政府が保證すること。

三、資源の開發が、資本主義的に束縛せられてゐるのを解放して社會的に必要な資源の培養及開發は、國家又は社會自らその責任に當ること。云ふ意味は、一體、資源の多少と云ふことは、結局、人智の自然を征服する能力の如何に由つて定るもので、例へば、いま日本に石炭の資源が欠乏しつゝあると云ふも、それは今日の技術を以てしてはさうであると云ふに過ぎず、いま若し、現在は三百尺以上の地下を採掘すること能はざる場合、之を四百尺、五百尺採掘し得る方法が發明せられるに至れば、日本の石炭の資源は玆に著増するに至るが如きである。斯く、技術の發達によつて、日本の資源（現在貧弱な）を今後著しく豐富にし得る余地は鮮少でないのである。然るに、資本主義の仕組に依賴してゐたのでは、目先き利益が約束せられなくては之をやらないから、國家或は社會自ら此の重大責任を負擔して、その研究に當るべきである。

以上の他、現代人の生存不安の内容としては、或は病氣廢疾等の場合、或は老廢に於ける時等の生活難の脅威を見逃がし得ない。しかし乍らこの種の不安は、往古よりズット存在してゐたものであつて、現代に至つて始めて現出したものではない。從つて、これ等は、現代の生存不安の特徴として擧げることは出來ないが、兎にも角にも、現代人は、既述の生存不安と共に、これ等の生活脅威をも併せ除去せんとする强い要求を持つてゐる。而して、その克服の具體的方法としては、例へば、健康保險養老保險等の國營、或は最低生活の國家保證等が提案せられてゐるが、しかし玆には紙數の都合上、これ等に就いてはこれ以上觸れないことにする。

三　社會の固定凝結と希望の消滅

如何に凡庸と雖、大名家老等の家に生れゝば社會の支配者としての位地につき、如何に非凡と雖、百姓町人の子として生れては一生社會の下積として土芥の如く終らざるを得ない。假令武士の家に生れるも、下士の親を持てば、上士に對しては一生頭は上がらない。世事萬端、すべては祖先以來固定した階級別と家柄等に由つて決定せられ、人の子は單に之を代々世襲するに過ぎず、そこに少しも、人の賢愚、勤怠の働くべき自由の天地はなかつた。之れ即ち封建末期の社會相である。云ふ迄もな

く、斯の如く固定せる社會に於ては、單に、先祖代々の職を世襲して之に引ずられて行くより外に途なく、人心に何等の希望も感激もあらう筈はなかつた。例へば、福澤諭吉氏の父の如きは諭吉氏が下級武士に生れて一生其のまゝ階級に縛られて了ふことを惱み、當時腕次第で自由に飛躍し得る唯一の天地たる僧侶に彼をやらんとしたと福澤自叙傳は述べてゐる。以て、當時の中下士以上の武士を始め農工商等社會下層の人心を蝕んでゐた苦悶の何であつたかを容易に認め得るであらう。

明治維新の革命は、要するに、この苦悶克服の非常手段に外ならなかつた。事實、明治の革命後、世の中は功名手柄勝手の時代となり、腕次第働き次第で、匹夫より起つて宰相に登るもの、貧児に生れて一世の富豪となるもの等續出し、人心は、暢々とした希望の光を浴びて著しく緊張するに至つたのである。王侯將相豈に種あらんやと云つた意氣は天下に滿ち、弊衣破帽の青年は洋々とした前途に醉つて、現在の苦學を忘れ、西國立志編が野火の擴がるが如くに世の青年の間に讀まれ、カーネギーや、ロツクフエラーや、岩崎や、大倉や、古河や、安田や、伊藤や、西郷や、山縣やが青年の心を掴んでゐたのはこの時代のことである。

然るに、この功名手柄勝手の時代、腕次第働き次第の時代は、大體に日露戰爭前後を以て終熄し、世の中は再び、封建末期の如き固定した時代に漸次化石するに至つた。即ち、今日に於ては、假令如何に凡庸と雖金持の家に生れゝば社會の上層に君臨して社會を支配する位地を與へられるが、貧家に生れゝば假令如何に非凡と雖、一生を社會の下積に埋れざるを得ない。例へば、漸く小學教育を終へるか終へない程度で直ちに少年勞働者となつて終日疲れ切る迄に働かされつゝある者の生涯と、大學教育を終へ得る迄の財産に惠まれたる者の生涯とを比較せよ。又、等しく大學教育を終へたる者と雖、資産ある家の子弟が直ちに重役となり社長となり主人となり乃至はその候補者となりて支配的位地を占めるに反し、その資産に惠まれざる子弟は平社員として僅かの給料で單調極る機械的仕事に疲れ、その前途は著しく灰色に包まれてゐる。しかも、斯く青年子弟の前途を決定する萬能力ある富は、今日に於ては、明治初期の如く功名手柄勝手に萬人の能力に解放せられてゐるものではなくて、資本を有せざるものにはその途は全く閉鎖せられてゐる。斯くて今日に於ては、封建末期の階級別世襲の如き社會の固定化が、財産世襲の名に於て再現するに至つたのである。實に、政治界も經濟界も藝術界も宗教界も、貧乏人の子弟には全く門戸を閉して、金持子弟の獨占に委せられてゐる。茲に、現代人

多數の無希望があり、煩悶があり、斯くて、時代に對する反抗の心燃と、時代の改造に對する熱情とが醞釀せられるのだ。最近に於ける一部先覺者の間に於ける社會運動の勃興は要するにその一つの表現に外ならない。

斯の如く、今日の社會が再び封建末期の如く一種の世襲的階級制度に化石し去るに至つたわけは、要するに、（一）財産の世襲に對して過當な保護を加へてゐること、（例へば華族に對しては一代論が漸く勢力を得つゝあにも拘らず財産は一代論すらも唱へられてゐない）（二）一國の政治經濟就中經濟に對し財産に對し過當な專制權を與へてゐること、（三）財産の搾取權を過當に擁護してその位地を覆し難きものにしてゐること、宛も昔の王侯の收稅權を絕對的にして、その位地を擁護するが如き狀態にあるに似てゐる等に在る。從つて、今日の如く一種の階級にまで固定してゐるこの無希望と煩悶との社會を改造して、之を希望と緊張との社會にするには、要するに、以上の如き資本主義の諸權力を削減乃至撤去すること、宛も、封建的諸權力が明治維新に於て削減乃至撤去せられたるが如くになせばよいわけである。

その具體的方法にして、しかも今日已にその實行にまで熟してゐるものは、思ふに左の諸點であらう。

一、資本の專政を抑壓乃至撤去する方法

1、生産の民主的經營制度の樹立

2、需要供給の民主的統制――統計の完成に由る國民的經濟豫算の編成と其實行、

3、重要産業及金融の公營化

4、無産階級の團結と團體的且つ全國的交涉權の確立

5、教育の國家負擔（無産階級に對する教育機會の解放）

二、資本世襲及搾取權の制限乃至撤去

1、相續稅の重課及累進率の高度化

2、一程度以上の利益の社會化

イ、財産收入に對し勤勞收入よりも高度の累進的所得稅を課すること

ロ、獨占的事業の公營化、

3、利子低下

イ、金融制度の改善と公營

4、所有權よりもそのもの〻利用權を保護すること

四　現在の生活破産の脅威

次に現代經濟苦悶の特徵の第三は、これ迄續け來つた生活程度を維持し得ず、之を漸次に乃至は急激に低下せねばならない

と云ふ一般的不安に脅かされてゐることである。この脅威は、已述第二項の生存不安の苦悶ほど深刻ではないが、その代りに、その脅威に犯されるものゝ範圍は遙かに廣い。

そも／＼、資本主義制度は、その當初より多くの弊害を伴つてはゐたが、しかしこれ迄に於ては、兎にも角にも、我が國民の生活程度を一般に向上せしむる能力があつた。事實、我が國民の生活程度は、幕末に於て著しく退化し困難となつたものが、明治以來長足の發展向上をなし來つたものである。然るに、資本主義のこの國民生活向上の作用は、(一)は資本主義經濟の作用そのものが老衰退化したがために、(二)は從來の資本主義的技術及組織に由りて開發し得る我國資源の涸渇老衰したるがために、最早曾に從來の如く國民の生活程度を向上せしむる能力なきに至れるのみならず、進んで國民の生活程度を低下さす外に、資本主義經濟を運轉さす方法なきに至つた。蓋し、資本主義經濟の構造は、資本家の利益追求心を原動力として全經濟の齒車が運轉する仕掛けであるから、以上の如き二大原因の發生せることは、直ちにそれだけ利益の減少乃至消滅、並に損失の發生することを意味し、直ちに資本主義經濟の運轉に故障を生ぜしむる。之れ所謂不景氣である。而して、この不景氣を脫する途は、資本主義的仕掛に由ると、再び資本家に利益を約束する狀態を造出する外にないが、その方法は、此際(已述の二大原因による事業利益の減少の際には)專ら勞働賃銀を低下さす(直接間接の方法で)外に策はないのである。而して玆に勞働賃銀とは即ち有ゆる勤勞に對する報酬を意味するものであつて、賃銀、月給、賞與等を包含すること云ふ迄もない。

斯かる時代に於ては、一般に資本家の利益と雖、資本主義全盛期の場合の如く、巨大なるを得ず、精々、その國の標準利益を得るを以て滿足せざるを得ないから、資本家から之る見るも、その收入は減退せざるを得ない理である。

斯樣のわけで、いま我が國民は、(而して英國其他の資本主義衰退期に入れる國々に於てもそうであるが)一般的にその生活程度低下の不安に脅かされつゝある。然り、就職難や失業苦を幸ひにして脫し得たる人々と雖、この生活程度低下の不安に脅かされずにゐるものは、いま、殆んど無しと云つて大過ないであらう。

生活低度の低下！　それは就職難や失業苦の不安が絕對的なるに比し遙かに凌ぎ易いかの如くにして、實は、それに劣らぬ多くの悲劇を伴ふものである。收入減に應じてこれ迄習慣づけられた生活を直ちに低下さすことの困難と云ふことために、生活に多くの無理が釀され、それが累積して、その家庭を蝕み

つゝ、遂に破産の斷崖にまで之を押し詰める悲慘がそれである。所謂人心の惡化、□□熱の勃興から各種犯罪の激增の如きまで、何れも、要するに、この不安と脅威（已述第二項の生存不安と共に）との結果に外ならない。

この不安は、その原因が要するに資本主義機能の老衰退化にあるのであるから、例へば幕末の生活低下の不安を除くには老衰せる當時の封建制度を撤去して潑剌たる資本主義制度を樹立する外に策の無かつた如く、今日のこの生活低下の脅威を克服する途は、已に老衰せるこの資本主義制度を改革して、之に新生命を注入する外にない。而してその具體的方法は重なるものは、大體に、已述第三及第四の克服策として擧げたものを採用することに出つて、目先き實行に熟してゐるものの主なるのを略ぼ網羅してゐるので、之を茲に繰返さないであらう。

科學世界のゲッセマネの園

——現代に於ける形式宗教の煩悶——

賀川豐彦

一

生命の流れは、ともすれば脇道に外れ易いものである。機械の發明は人類生活に祝福を持ち來らすべき性質のものであつたに拘らず、それが反つて、人間社會を機械化し、思想までをも機械化したと同じやうに、宗教に於ても、生命の本流と掛離れたものになつて來れば、いつでもその宗教は、文明に對する禍の源を爲すものである。

マルクスが、商品中心の經濟學をフエテイシユ崇拜だと罵つたと同樣に、生命の本體を忘れ、それを表象的に取扱ふ場合に、偶像主義と形式主義がいつも腐つてしまふ。そして宗教は、表象と形式で禍され、その本質である價値運動を無視して

しまふ。

二

宗教は一種の價値運動である。人生の目的を決定し、社會律法を定め、選民の自覺に這入り、その歴史の中に神の力が加はつてゐることを信じ、凡てを神から力付けられんとする、價値上進の運動である。

然し、人間の力が絶對でない以上、價値の凡てに向つて一時に進歩し得ないものだから、客觀的價値に專念するものが、どうかすると、主觀的價値の上進を無視したくなる。科學的發明に專念してゐる者は、他人の不幸をも忘れ勝ちになる。そして、ダイナマイトを發明したはよかつたが、それに依つて、同胞を殺す力が、更に增大したことを發見して後に驚くのである。宗教が、時代遲れのやうに見えるのは、全くこの價値に對する運動が、客觀世界に於て、猛烈であつたに比べて、大いに立遲れになつた氣味があるからである。

科學は著しく進歩した。それに比べて宗教の表象と形式は、二千年來少しも動かないで、未だに舊套を脫し得ない。其處に宗教の煩悶があらう。然し、宗教を靈魂の外側に於て嘲笑するのは間違つてゐる。宗教の煩悶は即ち靈魂の煩悶である。愛と智慧の運動は、昔ながらにして少しも進んで居ないのだ。

三

まことに我等はもう一つの眼が欲しい、それで私は、物質の內部構造を根本的に見究めたいものだ。

私は今實在の內側を覗く一つの眼を持つてゐる。それは私の心である。私は、私として實在する『私』を通して、宇宙の內部構造だけは、多少理解出來ないこともない、然し、外側にある物質の內部構造をもう少し委しく私は知りたい。

電子の周期律的廻轉が、物質を作つてゐると、物理學は敎へてくれた。然し、その電子の正體は何であるか？私はそれが知り度い。それは、エネルギーの流動する一つの形であると、人は說明する。それなら私は、そのエネルギーの正體に就いてもう少し知りたい。兎に角私は、物質の奧を見究める眼が欲しいのだ。

然し、不幸にして、心の工夫はさうする程度にまで進んでゐない。天啓と默示に就いては、繰返して解かれて來た。然し、我々は未だに物質の奧をすら見定め得ないでゐる。そこで、近世科學は宗教を無視してぐん／＼前へ進んで行つた。そして宗敎は、棄置きにされた形で居る。昔人間の能力が今日のやうに

分裂して考へられなかつた時には智力と、主情意が仲好く神秘の前に跪いた。

然しアダムが智慧の實を食つてから、智慧までが神秘に裏切るやうになつた。實際は智慧そのもの程神秘なものは無いのだけれども。たゞ余りに魂の內側の世界が、昔ながらに變つて行かないものだから、外側に向つた人間の智慧は、內側の魂を棄てゝどし〳〵物質の仲間入りをしてしまつた。そこに魂そのものゝ煩悶がある。

四

然し宗教の煩悶はそれに止まらない。表象と形式に捕はれてゐるうちに、生活樣式は全部變つてしまつた。今日ではもう表象と形式だけで人間が承知しなくなつた。ミサと燒香が幾ら繰返されても、巷の失業者は永久に救はれない。そこに形式宗教と現實生活の分裂がある。形式宗教の祭司等は、表象と形式は要するに符合であることに氣が附かないでゐる。生命の律動には、永遠に符合を不必要とする時代は來ないであらう。それは恰も言語が人間の思想を表すに、永遠に必要なものであるのと同樣である。然し言語が變るやうに、宗教的符合も變つて行かねばならぬものなのだ。殿堂藝術の符合で滿足してゐた時もある。それは、活字と云ふ符合のまだ出來ない時であつた。然し、生命の延び行くまゝに外側の符合は信ぜられなくなつて、內側の符合がだん〳〵必要となつて來た。その爲めに、偶像は儀式によつて置き換へられ、儀式は經典にその位置を讓り、經典は教儀にその位置を讓らねばならぬことになつた。斯うして偶像から教儀までの步みは、客觀的偶像主義から主觀的符合への步みであつた。然し、その教儀とても生命そのものを生かす力ではない。それは要するに符合である。成長して行く蟬が脫皮して行くと同じやうに、生命は同じであつても宗教的符合は變つて行く。そして、符合を飜譯する宗教家は、新しい時代に於て古典的藝術家として、尊重される位のものになつてしまふ。古典主義が尊重せられてゐる間はそれでいゝが、生命が躍動してゐる時には、さうした階級の人々は唯、有閑階級の玩具としてまた家庭教師として、保存せられることが積の山である。

然し、宗教そのものが、不必要であるわけではない。生命のある間生命の工夫としての宗教は、永遠に必要なのだ。たゞ生きる工夫に努力しないで、生命の符合を讀むことにのみ苦心してゐる古典藝術家が無用になるだけのことである。

五

私は再び繰返して云ふ。宗教は價値の運動であると。價値を測定し、價値を創造し、價値を保存し、價値を補修して行く運動を宗教とは云ふのである。それであるから、永遠に宗教の不必要になる時代は來ない。たゞ價値の創造を忘れて、價値の保存に窮々としてゐる人達が、古い時代の表象と形式のみを守つて、新しい時代の現實の悲哀を救濟し、補修し、更に新しい價値を創造して行くことを忘れた時に、古き型の宗教と宗教家が、時間と共に葬り去られるのである。

宗教は、一切の價値運動を包含するものである。今日では、科學による價値創造が旺盛である爲めに、宗教の創造的力を馬鹿にする傾向があるが、宗教は生命そのものを意味してゐることが判れば、科學と宗教を分離することの愚さを知る時が來るであらう。その時まで、宗教家は煩悶するであらう。そして、科學者は淋しがるであらう。

要するに、人間に對する最後の神殿は、生活そのものゝ價値運動の上に築かねばならないのである。生活即宗教！辻の失業者と淫賣婦を救濟し、物質の心の奧にまで徹する科學的活動を、宗教内容にするまで、宗教と宗教家の煩悶は永遠に續くのである。神聖なる煩悶、科學世界に於けるゲッセマネ園の、宗教そのものを磔柱にかけてしまふ日に、まことの神が、拜せられるのであらう。ほんとにさうだ。宗教とか科學とか、さうした部分的の名を全部取消してしまつて、生命そのものゝ中に神を發見する日――その日に神は、生命の衷に住み、生命は神の衷にあることを發見するのであらう。宗教が宗教と呼ばれる日の間、永遠に宗教の煩悶は續く。うんと煩悶するがいゝ。宗教の凡ゆる符合と形式を噛み破つて、生命の眞髓に徹するまで、宗教と宗教家は煩悶すべきである。

描象的な神は何度でも葬式するがいゝ。唯生命の神は永遠より永遠に、私の爲めに存在してゐてくれ！

轉換期に立てる吾國資本主義の苦悶と其打開

武藤山治

これが改造社より私に與えられたる表題である。然るに私は吾國の資本主義が別に苦悶して居ると認めぬ。從つて別に、之を打開せねばならぬとも考えぬ。近來時々改造誌上の論説中に資本主義の苦悶と言ふような言葉を使つてあることを見受けるが、私は何時もこう言ふことを無造作に書き立てる人は、其人自身が實經濟に就て今少しく研究せられたらば、全く此見方が變るだらうに、惜いことだと思つて居る。

幕府の時代に有名な物組徠と言ふ儒者があつて、江戸に門戸を張り全國より其教を請ふ爲めに集まり來る青年は多かつた、當時信州より一人の青年が物組徠先生の門を叩き入門を許されんことを願つた。其時先生が此青年を座敷に請し、第一に質問されたのは、お前の國の信州では米が一升何程するかと言ふことであつた。信州より遙々江戸へ來て物組徠先生の門に入りて、大に學ばんとして先生を訪ねたる此青年は四書五經を暗んじ、如何なる難問を先生から受けても直に御答へせんと勇みに勇んで居つたが、先生より意外なる質問を受けハタと其答に窮したのである。そこで物組徠先生は此青年を戒めて學問とは、空理空論を目的とするものでない、必らず實經濟に離れてはならぬものである、然るにお前は自分の國で米が一升何程するかかと、問はれて之に答るられぬようでは入門を許すことは出來ぬと斷はられたのである。此青年は物組徠先生の言に感激し實經濟を大に研究して、後に彼の有名なる太宰春台と言ふ儒者になつたのである。吾國に於ては、昔から儒者の間に實經濟を説くものが極めて尠なかつた。之は士の教育なるものが所謂士分の教育で經濟の教育は全く與へられなかつたから自然其必要がなかつたのである。此因習が、知らず識らず今日まで傳はり實經濟に關する研究が怠り勝であつて、經濟に關する議論すら空論が多く實際問題に觸れて議論する人が尠ない。

私は、社會主義と資本主義と孰れが優れりやと言ふ議論をすることは、努めて避けて居る。それは吾國民中には、道理に耳を傾けないで、感情で爭ふ人が多いから、此種の議論の中には、私の立場より、求めて立入りたくないと思ふからである。然しながら貴誌の讀者の中には、將來吾國家を荷ふ青年が多い故に、成るべく空論を避け、實例を擧げて研究の資料に供することとする。

私から見れば、今日世界に於て苦悶して居るものは資本主義でなくして、寧ろ共產主義社會主義である。共產主義の露西亞は、共產主義なるものが、人間の最も貴ぶべき自由を奪ひ、而かも猶經濟的には極めて不良なる結果を現はし、今や露西亞人は最も好きな御茶すら印度から買へない位、貧乏なる生活に甘

んぜざるを得ないようになつた。然して印度はそれが爲め英國や日本より、綿布を少なく買ふべく余儀なくさるるに至つて、方々へ迷惑を與へて居るのである。

獨逸は帝政時代の國有鐵道を民有に移し又鑛山を官營にしたところが之も大失敗で、民營に移した。今度の世界大戰爭で新に建設されたチエコ、スロヴアキは新らしい國であるだけ、森林鑛山は勿論銀行までも一時官營にして見たところが、之も大失敗で何れも民營に移した。

是等の國々は高い研究費を拂つて、世界に共產主義社會主義なるものは、猶病理研究所の問題であつて、患者に服用せしむべきものでないことを示して吳れたのである。我國の經濟界が近來不景氣であると言ふことを以て、それを資本主義の苦悶である、と考へる人があるが、それはトンダ見當違ひの考方である。

資本主義制度の妙用は、常に景氣、不景氣の循環があつて巧みに調節するところにある。勿論かゝる變化に伴ふ弊害はあるが此弊害は、人間の政治經濟道德の感念が進めば除かれ得るものであつて、それは資本主義の罪でない。

之を人間の身體に就て言へば、共產主義社會主義は、人間が不養生をするから種々の病氣が起る故、一定の時間に一定量の食物を與へ、衣服も寒暑に依りて一々其原薄を定め、嚴重に之を守らしむれば、病氣はなくなると言ふと同じである。成るほどチヨツト考へると尤ものようであるが、偖之を實際に行つて見れば人間全體が弱々しい體質となつて、人間各個として自由に食せしめ自由に衣せしめることよりも却つて、不良の結果を來たすことは明らかである。資本主義は、恰かも喰ひ過ぎたり着過ぎて病氣になつたりするが、それを人間各個自身に調節させるようなものである。

資本主義の下に不景氣が起るからとて、それで資本主義が惡いとか、苦悶の立場にあると判斷するのは誤りである。勿論斯く言へばとて、私は、絕體に資本主義が良いと言ふのではない。今日の世の中では、共產主義や社會主義よりも社會の進步發達を促がす上に効果があると言ふに過ぎない。故に資本主義を非難する人々は、古い共產主義や、社會主義を高唱するよりも、共努力を資本主義以上良い考案を研究する爲めに拂ふよう希望するに過ぎない。私は、是れより我國今日の經濟界の行詰りが、資本主義の罪でなく、他に大なる源因があることを說き示さう。その前に一言讀者諸君に理解して置いて戴きたいことがある。それは富と資本の區別を知つて置くことである。我國官民中には、此極めて簡單明瞭なる經濟上の原理すらも理解

せぬ人が多いから、本誌の讀者に向つてこんなことを説明するは、禮儀を失するかも知れぬが、話の順序として、聞いて戴きたい、資本は富の一部であつて、富の全部は資本でないことは、茲に一人の人があつて自働車を持つて居るとして、其人がこれを物見遊山のみに使ふ場合には、自働車は其人の富であるが資本ではない。同じ自働車でも、商賣用に使へば資本となるのである。

此極めて見易い經濟上の原理を明らかにして置いて、假今日、我經濟界の行詰りは何んの爲めに起つたかと考へて見れば、戰時中の資本の濫費が源因を爲して居ることに就ては何人も反對はあるまい。殊に我國の政治は資本とならない富を造る爲めに資本を濫りに濫費するから今日に至るまで、日々資本は失われて居る。今日利倘息の下からないのは其病氣の一つの現はれである。

近來、吾國で人口問題が喧ましいが、人口の增加を憂ふるは大間違である。若し吾國に憂ふべきものありとせば、人口の增加率の多いことでなくして、資本の增加率の之に伴はぬことである。英國で九十年前、マルサスの人口論が喧しかつたことがある。マルサスはこう人口が增加しては行詰まる、と言ふことを唱へたのであるが、其時から、英國の人口は約八割增加したが、少しも困らぬのみならず、益々進歩發達したのは、資本の增加率が多かつた爲めである。米國の繁榮も人口の增加よりも、資本の增加率が多いためであつて、此事は明らかに統計に示されて居る。

要するに、吾國經濟界の將來は、一に資本の增加が人口の增加率より以上に進むや否に依つて、決せらるるのである。

茲に於て、吾々は資本の增加を妨げて居るものが、資本主義制度の爲であるか否かを調べて見ねばならぬ。私は茲に讀者諸君に告げたいことがある、それは我國では資本主義の色彩よりは、社會主義の色彩が濃厚であることである。此事は私が拙著『實業政治』の上に詳細を説明して居るから、委細を知らんとせらるゝ方々は御一覽を願ふこととして、私が茲に簡單に數字に依り説明すれば、吾國では政府自らが生產運輸業を營み、それに使つて居る資本は、參拾四億圓に達して居ることである。之に對し同種の事業に民間で投ぜられた資本を大凡知り得る限り調べて見ると、六拾貳億圓位に過ぎぬ。これ丈けでも、讀者は吾國經濟界の問題を、英國や、米國のような全然資本主義制度の國と、我國のような社會主義制度の濃厚な國と、同一に考へて我經濟界の行詰まりを以て資本主義の苦悶などと速了せらるれば、大なる考違いである。

私が茲に述べたいのは、我經濟界の現狀は、此社會主義制度の弊害の現れであつて、吾々は我國の此國家社會主義に類する政治のやり方が　資本主義の完全なる働らきを妨害して居ることを知り、之を改革するにあらざれば今日の行詰りは救はれぬことを悟らねばならぬ。

私は、茲に一例を擧げて、我國では官營事業の如何に資本が失はれて居るかを示さう。我政府が、國有鐵道に大正十三年度までに投じた資本金額は、二十二億八千萬圓であつて、敷設された鐵道は七千五百五十八哩であるが、今日鐵道壹哩の建設費は、二十萬圓であるから、現在の價値はザツト拾五億圓である、二十二億圓以上の資本を投じて出來たものが十五億圓であるとせば、如何なる社會主義者でも國有官營の弊害を認むるであらう、更らに此國有鐵道が生み出す純益は、壹億五千萬圓であるが政府の仕事は民營なら負擔する營業稅と所得稅附加稅等を拂はぬから、之を差引すると壹億參千五百萬圓位よりない譯である。然して此僅かな利益金も歳入に入れずに、全部利益のない又は極めて利益の薄い新線敷設に振向けて居る。こう言ふ風で、鐵道線路は延びても、それに依り生産の上に効果がなければ、自働車を物見遊山に使ふ個人と同様、國家は富が增したと言ふことが出來ても資本としてはそれ丈なくなる譯である。又郵便貯金を見ても此事が分かる。郵便貯金は、全國三千萬の貯金者の預けたもので、今日では十二億圓に達して居る。郵便貯金は、一大資本でこれが大藏省預金部に持つて行かれ、資本と言ふ點から見れば如何に濫費されてゐるかは、政商に喰ひ荒らされた、特殊銀行救濟に二分や三分で貸出す位だから、稍ぼ想像することが出來ると思ふ。

是等一、二の實例を見ても、我國では政府と言ふ資本の大浪費者があつて、資本主義の完全なる運用が妨げられて居ることが分かる。此點に就て、吾國民の多數が理解するに至らば、普選の曉初めて吾國の不經濟なる政治は改革され、吾經濟界は自然の發展を遂げるの至ることは明らかである。此事が實現するや否やは、新有權者が、經濟問題に對し、定理空論に惑はず、又各自の立場に制せられず、吾國民共同の利益の爲めに協力一致し、從來踏み荒らされたる吾政界より、職業政治家を追拂ふや否やに依つて決する

英國の昔話に、或村に旱魃があつて今や水が盡きんとする時、其村の庄屋が此村に古い井戸があつて、底に淸水がただよつて居る、それを汲み上げるにポンプが付いて居るが、之を運轉するには三升の呼び水が入用だと言つて、村人に少しづゝ貯へて居る水の中から出すよう勸めたが、今殘り少ない水を出す

ことを嫌つて、誰れも出さなかつたため、ポンプを運轉することが出來なかつた、それがため終に村人は渇き死んだ、と言ふ話がある。此話は共同の利益に向つて一致協力の必要を說いたものである。私は最後に我國經濟界を今日の行詰まりに逢せしめたる、我國の腐敗せる不經濟なる政治改革の爲、國民の協力一致の必要を說いて筆を擱く。

都會及び農村生活者の惱みとその打開策

河西太一郎

次に紹介する一話――ロシア白衞軍付きの一新聞記者が某ニユーヨオクの新聞通信員に親しく語つた實話――はロシアの勞農革命が何故に起つたか、又それが何故に成功したかの基本的理由を最も實感的に暗示說明するものであり、又いろ〳〵な意味に於て頗る含蓄に富んだ出來事であると思ふ。――

『……君も知つてゐるやうに、ボルシエヴイキはもとの聯隊の名稱を變へて居つた。例へばモスカリ軍團の如きは皆その肩の上にカール・リープクネヒトの頭文字をつけて居つた。ところが或日我々は此のカール・リープクネヒト隊に屬する一聯隊全部を捕虜にした。そこで訊問が始まつた。ところで白衞軍營に於ける此の訊問なるものは至極簡單明瞭なもので、捕虜には誰にでも、お前は共產主義者かどうだ、とやる。若し相手がそれを承認しやうものなら早速絞殺又は射殺に處すると云ふ譯である。そして赤衞軍の方でもこういふ手つ取り早いやり方をやられると云ふことは百も承知だつた！

その時刑執行の任に當つて居つたK中尉はその捕虜聯隊の前に進出て、嚴そかに且つ冷やかに口を開いた。――

『貴樣等の中で本當の共產主義者は二歩前へ出ろ！』

怖ろしい。息も止まるやうな瞬間……と云ふのは捕虜達は中尉の此の問が何を意味するかをよく知つて居つたのである。

それから……始めはためらひながら、しかしやがて決然と、

その聯隊の半數以上が、運命の二歩を歩み出た！

歩み出た者は勿論射殺された譯だが、その前にまだ話がある、と云ふのは彼等は殺される前に自分で自分の墓を掘つて置かなければならなかつたんだ。

共産主義者の死刑はいつも日沒前に教會の近くの野原の上で行はれたんだが、この時も薄暮であつた。あたりの空氣は花の匂に充され、教會の綠の塔は周りの白楊を靜かに瞰下ろしてゐた。物皆は眠り、そよとの動きもない。そこに人間の慘酷な行動が始まらうとしてゐるのだ。その怖ろしい光景を見やうとして農民や婦人や子供等が集まつて來た。彼等は嵐の前の小羊のやうにオヅオヅと小さく塊まつて顫えてゐた。

最初に捕虜達は脫衣の命令を受けた。と云ふのは白衛軍は貧乏で、軍隊がひどく缺乏して居つたので、赤衛軍のやつを取り上げて白衛軍の爲めに用ひやうと云ふ譯であふ。命ぜられた赤軍の兵士等はためらひながらそのシャツを脫ぎ、着物を丸めて、側へ置いた。——それは誠に不思議な光景であつた。恰かも入浴する爲めに着物を脫いでゐるのではないかと思える位であつた。

彼等は凍る寒さに顫えながら野原に立つた、彼等の皮膚は異様に白く、殆んど見透うせる程に白く見えた。やがて彼等の或者は尖つた鍬を、他の者は鋤を渡された、それで以て彼等は大きな共同の墓穴を掘り初めたのである。その仕事は長い間續いた。

十五分の後にやつと半メートルの深さに達した。その時偶然私の手が私の着物に觸れたので氣がついたのだが、着物はしつとり夜露に濡れてゐる。重い露に草もうなだれてゐた。が相變らず裸のコンミユニストは墓を掘り續けてゐる……

半時間經つた時にK中尉は部下に墓掘りを手傳ふことを命じた。そこで兵士達は捕虜達の側に進んで行つたが、此時あたりは益々暗くなつて、赤裸の捕虜と軍服の兵士との區別がつかない位になつて居つた。唯聞ゆるものはそこでうごめく手近の呻きのみであつた。K中尉と私とは側に近づいて行つて始めて個々人を見別けることが出來たが、彼等の身體は旣にその立つてゐる墓の中に隱れ、見ゆるものは肩先ばかりであつた。

しかし遂に墓は必要な深さに迄掘り下げられた。捕虜達はこの勞役にすつかり疲れて呻いてゐた。彼等の多くは柔かな濕れた土の上に身を投げて、辛うじて息をついた——それは彼等の

最後の休息であつた。私は始めて見付けたのだが、彼等の多くは繃帶を卷いてゐた、彼等は戰場で負傷してゐたのだ。

K中尉は、神經質に且つ殆んど吃人の如くに叱りながら、彼等の最後の望みを聞いた。二人だけは薄い指環を指からぬき取つて、それを中尉に渡した。その二人共ペテルスブルグ生れの者であつたが、一人は家族があり、もう一人は妻を殘してあるのだ。……しかし殘りの大抵の者には最早何の望みもなかつた、彼等の感情は既に死んでゐた。恰かもとつくに息を引きとつて居つたかの如くに。――私はかくの如き平靜と無頓着とを言葉で説明することは出來ない。これはまさしくロシヤ人式の無頓着の典型的のものである。

私は彼等の一人に、お前をコンミユニストにしたのは何か、と聞いて見た。驚くほど無頓着に彼は答えた『呪はれたる生活だ。人生には幸福が要るんだ！』

兵士達は射撃の用意をした。裸體のコンミユニストはその墓の口にお互に密着して並んで立つてゐる、丁度月光の中の白壁のやうに見える。……命令が出た、それに續いて閃めく火花、轟く銃聲。……それでも尚彼等は眞直ぐに且つ傲然と立つた儘である。

第二の銃聲、……彈丸は數名の捕虜の胸を貫いた、血は迸り出た。しかし尚大多數の者は輕傷を受けたに過ぎない。今や銃聲は引續き起つた。一發の後に來る一瞬の平靜の間に私は慟哭の深い呻きを聞いた。かくて彼等の數はだん／＼に減つて行つた。それでも尚生き殘つてゐる聲は叫んだ『もつとよく狙え！』或者はその心臟を指し示しながら叫んだ『こゝを狙え！』……そして銃聲の轟き、血潮の迸り。

遂に總ての者は死んで行つた。……數人の者は墓の緣に倒れた。しかし大抵の者はその自ら掘つた墓の中へ倒れ込んだ。總ては過ぎ去つた。あたりの靜寂を妨げるものは何一つなかつた。……』

（Bruno Tant, Die Auflösung der Städte,1927,S.76―78.）

私は此物語に對して今更クダ／＼しく感想を述べる勇氣もなければ、又その必要をも感じない。「呪はれたる生活」に對する反抗「幸福なき人生」に對する嫌厭は、或場合には死よりも強

いことを讀者はマザ／＼と感悟させられた筈である。

ところで今の社會に於て何者の生活が最も呪はれてゐるか、何者の人生に最も幸福が欠けてゐるか、と問はれるならば私は躊躇するところなくそれは就中農村無産階級の生活であり、生涯であると答へる。

人は農村の疲弊を云ふ、それは誠に事實である。人は又農村生活者の惱みを叫ぶ、之誠に事實である。しかしながらさういふ場合に先づ以て考へなければならないことは、凡ての社會の構成がそうであるやうに、今の農村社會も亦完全なる統一體ではなく、その中には生産條件を異にし、生活條件を異にする種々の階級が存在すると云ふことである。地主階級の生活にも惱みはある、がそれは如何にかして現在の搾取と支配とを保持せんとすることに關する惱み、常に少數の支配階級のみか惱み得る、又惱まなければならぬ云はゞ贅澤は惱みに過ぎない。彼等の惱みを打開するの道は搾取階級としての自己の存在を滅却し、生産階級として更生する外にない。若し夫れ現在の農村生産階級の惱みに至つてはそれと全くその性質を異にする。彼等は人一倍勞働する、そして甚しい粗衣粗食に堪える、所謂人間以上の勞働と人間以下の消費だ、そうしてもどうしてもその生活を切り開いてゆけない惱み、これが彼等の惱みだ。これこそ「呪はれたる生活」にあらずして何ぞ、これこそ「幸福なき人生」にあらずして何ぞやである。多くの小自作農にして既に然り、況んや農村無産階級をやである。農村の疲弊は彼等に體現し、農村生活者の惱みを我等はこゝに見る。而もその惱みをまぎらすべき何ものかがそこにあるか。否。『教會と酒店以外には殆んど何ものも彼等の憂愁を中斷してくれるものはない。政治的集會は殆んど不可能であり、親しみ易い文學書は極端に欠乏して居り、藝術的演伎は全然無いか、或は精々二年毎に一度位、數日間、旅役者の群がやる位のものである。勿論自然は彼の近くにある。が併し何事にも研究が必要であつて、享樂としても亦然りである。と云ふのは何も都會人だけか自然の美に對して感覺を有すると云ふのではない。自然は、その多樣性を研究する機會を有する凡ゆる人々、即ちひとり藝術家及び都會の自然愛好家のみならず、又その職業上廣濶なる自然に對する絶えざる且つ注意深き研究を必要とする獵師、アルプス牧羊者、水夫共をも亦恍惚たらしめる。然るに彼等の場合には、そういふことはめつたにない。彼は晝は勞働に强ひられる、而して夜には自然は少しも見えないと來てゐる。彼等は感傷的な月光崇

拝者ではないのだ。從つて、自然に近いと云ふことは、殆んど凡ゆる社會的享樂、及び又實に都會には非常に豐富に存在してゐるやうな生活の刺戟及び變化、の欠乏を彼等の爲めに償ふものではないのである。』(Karl Kautsky, Die Sozialisierung der Landwirtschaft, 1921. S. 25-26.)

彼等にしてよし人生の幸福を斷念して只管働けど働けど倘その暮し樂にならざる時、彼等はやがてその原因が自己の個人的資性に基づくにあらざることを悟るに至るであらう。茲に於てか彼等は遂に起つ、階級的に起つ。彼等の惱みを打開する第一歩は茲に展開せられたのである。

翻つて都會を見る。『現代の産業及び經濟制度は絶えず多衆の人々を大都會へ大都會へと吸引する。そこは工業及び商業の本場であり、交通の中心であり、そこには大資産家が住み、中央官廳や軍司令部や上級裁判所が存在する。そこには大なる敎育機關もあれば、大なる娯樂機關もある。職業、娯樂、及びそれにも増して輕易な所得と愉樂な生計とを得んとする期望が多くの人々をそこに引き寄せる。』(August Bebel. Die Frau und der Sozialismus.1923.S.439)

かくして茲に大都會が成立した。絢爛なる都會。一切の文化機關、一切の娯樂機關は茲に集中し、資本主義的物質文明は茲に燦然たる華を開き、傲然として天下に號令するの概を示すに至つた。しかし茲にも亦生活の惱みはなければならぬ。何となれば、『今日の都會は全的統一體ではなくなつた。思想の共通するものはない。都會は偶然に集まつた種々雜多な人間の塊りに過ぎない。彼等はお互に知り合はず、共同の關心もない、唯多衆人を犧牲として自ら富まんことを念慮するのみである。』(Peter Kropotkin. Der wohlstand für Alle. S.154.) からである。かくして都會に於て富める者は物質的幸福に於て事缺くるところはない。有り餘る稼金を有するものにとつては近代都會の生活は大いに面白いものに相違あるまい。彼等が骨の髓からの黄金崇拝者たること誠にその所と云はなければならぬ。享樂を求めて得られざるなく、その刺戟の强きに飽滿すれば、暫らく「靜寂なる別莊生活に自然を友とする」彼等ブルジョアの生活にも若し惱みがありとすれば、それは誠に人間以上の惱みでもあらうか。

しかし彼等の驕奢なる生活の下積みとなつて呻いてゐる無數の民衆の生活に至つてはまさしく近代生活の惱みそのものである。被搾取、隷從、貧困、不安、焦燥、不健康、これがプロレタリア生活の特徴である。成程彼等の周圍には數多くの娯樂機

關もあれば、文化機關もある。しかし之れに近づくことは彼等にとつては甚だ容易ではないのである。但し此點に於て都會プロレタリアが農村無産階級よりも幾分惠まれてゐることは否定出來ない。資本主義文化は概して民衆にとつては阿片であるけれども、又その半面に於て民衆の自覺を促進するに役立つ矛盾を持つ。其上に彼等は工場に於ける協同勞働と街區に於ける密集生活とによつて團體的訓練を受くる。即ち最も精美なるプロレタリア運動が都會に發生する所以である。若夫れ住むに家なく働らくに職なきルンペンプロレタリアに至つては近代都會の生んだ最大の犧牲である。彼等の生活にはまるで希望と云ふものがない。彼等は被搾取階級の唯一の武器たる團結運動の能力と意志をさへ奪はれてゐる。彼等にあるものは疾病と焦悴と絶望と自暴自棄のみである。而も彼等の巣窟たる貧民窟が凡ゆる大都會に存在し、大都會の發達すると共に益々繁榮し行く事實を見よ。

最後に大觀的に人類の集團生活の形式としての都會と農村とを考へて見やう

今日の都會及び農村の生活を以て健全なる人類の集團生活と考へる者は恐らくあるまい。一方は密集に過ぎ、他方は分散に過ぐ。一方は猥雜、他方は荒凉。一方は刺戟の多きに惱み、他方は變化の少なきに苦しむ。都會は肥り過ぎたる病人の如く、農村はひからびたる病人の如し、都會を象徴するものは肉體的荒廢、農村を特徴づけるものは精神的荒廢。――

かくの如き不健康なる人類生活の狀態は何によつて齎らされたか。それは全く資本主義的生産方法の所産に外ならないのである。資本主義的商工業はその營利目的をよりよく達する上の必要より度過の要衝に陣取り、ここに人口を集中せしめ、こゝに大都會を成立せしむるに至つたのである。而してその半面に於て農村より人と資本とを吸收し、その結果農村の荒廢を根絶せしむるに至つたのである。かくて商工業による農業の搾取、都會と農村との對立は資本主義的生産方法の必然的成果なのである。大都會の成立が全く近代の現象であり、今日の如き農村の疲弊か又全く近代の現象であることを知る者は何人もこれを疑ふことは出來ないであらう。

そこで問題は進轉する。今日の肥り過ぎたる都會と瘦せ過ぎたる農村が資本主義の下に於ける農工業の極端なる分離、都會に依る農村の搾取、の必然的結果であるとすれば、現狀打開の方策も自ら明かであると云はなければならぬ。――現狀に於て

「呪はれたる生活」「幸福なき人生」を餘儀なくされてゐる人人、都會及び農村のプロレタリアが結束して、力を養ひつゝ、資本主義の除去に向つて進むことでなければならぬ。而して彼等は現にその運動の進展途上にある。がその運動は遂には進んで、「農業と工業との經營を結合すること、都會と農村との區別を漸次に除くこと」(Das Kommunistische Manifest) に至りつかなければならないであらう。

無産階級運動の終局目標が結局かやうな方向に向ふものとして、「農業と工業との經營を結合すること、都會と農村との區別を漸次に除くこと」のやうな大變革が果して可能であらうか。我々はかやうな問題についても決して空想の翼を擴げて遠き將來を夢見る必要はない。現實の事實をよく注視すれば、資本主義經濟自身が今からその準備を進めつゝあることを發見するであらう。それは何であるか、近時に於ける工業の田園分散の傾向即ち之れである。注意深き觀察者は工業が交通機關の發達と共にその原料には動力又は安價なる勞働力を得るに便利なる田舍地方へ漸時分散しつゝある事實を看過しないであらう。

かくて『交通機關や生産設備等の發達によつて、教育機關や博物館や劇場や音樂堂や圖書館や公會堂等を田舍に移すことが可能になるや否や、都會住民の田園移動が始まるであらう。從來の大都會の愉快なる生活が、その半面に存在せし不利益を伴ふことなしに、そこでは達せられるであらう。その生活は遙かに健康且つ快適なものとなるであらう。農民は工業に、工業民は農耕及び園藝に關與することになるであらう。

人口の分散によつて又現在存在する農村と都會との對立が消滅するであらう。』

(August Bebel Die Frau und der Sozialismus, S. 440. 441.)

かくしてそこに出現するものはミリューテインの所謂「都會的農村」或は「農村的都會」である。そこでは「呪はれたる生活」や「幸福なき人生」はまさしく赤の他人である。人類の理想的集團生活形式は玆に展開する。

(一九二六・一一・三)

現代教育の矛盾性と新教育の發生過程

長谷川如是閑

今日の文明國の教育は、矛盾した二つの目的をもつてゐる。一つは希臘式市民教育の復活したもので、他の一つは、中世の徒弟教育に代る職業教育である。前者は、中世の貴族教育が軍國政治に伴ふ集合意識を高調して、個人を壓迫したのに對する反動として、個人を絶對とする意識の上に立つたものである。後者は、徒弟教育が職業的集團の自主的傾向の上に立つて軍國的支配者から獨立し、それに對抗するやうな組織の下に成り立つてをつたのに對し、之れを分解して市民的支配の下に持ち來たさうとする態度である。

中世紀の教育は、中世の社會の割據狀態に基づいて、やはり割據的であつた。軍國的支配階級は、その社會だけの教育をもち、各種の職業的集團は又それ自らの社會の教育を持つてゐた。そしてこの二つの教育は互ひに外國的で、一方は全く他方に通ぜず、それ自體で完成してゐること、兩者の社會的傳統、生活の組み立て等が互ひに相通ぜず、互ひにそれ自らで完成してゐたのと同じであつた。之れは社會的の統制が、兩者の間に全く別々に成り立つてゐて、謂はゞ社會的に可成りはつきりとした分裂狀態が出來上つてゐた爲めであつた。從つて抽象的な教育の精神といふやうなものも、原始的の部落的社會の間の宗教と同じやうに、一方の教育精神は他方のそれと互ひに反撥し合ふもので、今日の所謂一般的な教育學といふやうなものは成り立たなかつた。それは教育の實際に於て、さういふ統一が成り立つてゐなかつたからである。それは更らに社會的に分裂狀態が存在したからである。

近代の教育は、社會が前世紀の割據狀態から或る意味の統一狀態に移つた事に伴つて、所謂教育の統一を持ち來したのである。この社會の統一といふのは、近代の歷史の上の意味では、所謂國家的統一であつた。封建的に分割された小國家がその事實上の獨立を失つて、所謂民族國家に統一されたのであつた。而かもこの運動の動機は、産業的であつて所謂封建的の經濟の

組織が、國民的經濟の組織に移り、更らにそれが世界的經濟に進む道程であつた。政治もそれに應じて、封建大名の間の國際關係は、より大きい國家間の國際政治となつた。これは產業的の世界共通に移る過程であつて、その單位としての國民生活が先づ成立したのであつた。それは軍國的統一の形をとつたがその內容は產業的統一の組織であつた。產業組織が軈てその外部表現たる軍國組織の衣を脫ぎ捨てて、その形を現はしたものが所謂市民階級である。それは市民階級に依る產業的統一であつた。國家とか民族とかいふ名はそれの看板に過ぎないのである。從つて近世に於ける教育は、その社會統制の主人公たる市民による教育の統一として現はれたのである。

　この市民階級の教育は、新たな產業組織に伴ふものであつて、その社會に於ては、中世に於て自主的であつた職業的集團は、その新たな市民階級の資本主義的產業組織に吸收されて、次第に獨立性を失つてしまひ、近代的工場組織の機械的な勞働集團に形を變へるのである。さういふ過程に伴つて、市民階級の一般教育なるものは、職業階級を近代的工場組織の目的に叶ふやうに造り變へる事である。この造り替へに於ては、二つの方法が必要である。一つは專門的技術家の養成であり、他の一つは機械的勞働者の養成である。

　近代の產業組織は、極端な分業の發達によつて、中世紀の綜合的な職人技術即ち、クラフトマンシツプといふものが、不必要になつて、職人の技術は極端に簡單な單純なものとなり、その熟練に十年二十年の年期を要するやうな事はなくなつた。が、それの他方には、精密な機械工業の組織が發達すると同時に、益々精密な、然しながら小數で差支へない專門技術家を必要とするに至つた。從つて、市民國家の教育方法は、この二種の道具を造る事に向つた。

　專門技術家の養成は高級の大學、專門學校等となつて現はれた。そして他方の一般勞働者の養成は、全く技術的でない所謂普通教育なるものとなつて現はれた。この二つが既に矛盾の要素をもつてゐる。前者は技術專門でその教育といふ事は、高級技術の機械的修得であつて、所謂「精神」なるものは勢ひ閑却される。精密な技術家であればいゝ、といふ事がその教育の目的となる。之れに反して、所謂普通教育の方は、技術は要らないので、主として「精神」の涵養を目的とする。この精神は市民階級の產業組織に於ける書記乃至勞働者としての服從性を養ふ事であり、軍國的隷屬精神に代るに、市民的隷屬精神を養ふ事であつた。一方の教育は技術が主であり、他方の教育は隷屬的精神が主である。それを一つの「教育精神」に纏めやうとす

る處に大きな矛盾がある。石と餡とで一つの液體か乃至は個體を造つたやうなもので、いつまで經つてもその尨雜性は失せない。

矛盾はそれに止まらない。市民階級は、右のやうに、前世紀に於ては、職業集團の自主的組織であつた教育制度を、市民階級的統制のうちに持ち來たすと同時に、職業集團でなくて支配者集團であるところの市民階級自體の教育をその組織のうちに持たねばならぬのである。そしてそれを統一された教育の中心としなければならないのである。

その市民階級自體の教育に於て希臘式市民教育が復活したのである。中世紀の軍國的教育は集合生活の軍律的統一が必要であつたから、極端に集合意識を高調し、個人意識を壓迫し、個人を階級社會の裡に沒却せしめる事が軍國々家の支配階級自體の教育精神であつた。この集合主義は、近代的産業が個性的能力の解放から出立し、國家的強制に對し、自由放任の經濟が社會組織の根柢をなすものであつたので、自然に崩壊し、それと同時に教育もその目的に添つて個人主義的となり。集合意識からの解放が、即ち個人意識の高調が、教育精神の根本となつた。迷信的な統一精神を完成せしむる事のかはりに、社會的功利と、個人の絶對性とが、教育の信條の基礎をなした。之れは所謂希臘的精神からその種族國家式の統一傾向と、小國家的統一傾向とを拔き去つたものであつた。希臘式教育は一方に極端な個性的傾向があると同時に、小國家の當然の性質として強烈な統一意識が支配してゐた。近代産業の性質に伴ふ大國家主義は、個性的である點に於て希臘的であるが、小國家的統一精神は、産業の國際的性質の爲に當然排除された。市民國家の教育精神は統一的支配の意識を造る代りに、個人的支配の意識を作る事で、その教育の神は「我」であつた。

市民階級は、自己の支配階級的社會構成の必然から個人的自由主義を教育精神としなければならなかつたが、而かも彼れ自らが統御する一般教育に於ては、その自己の階級の教育精神を徹底せしめる事は出來なかつた。市民國家の一般教育は前に云つた如く、彼等の産業組織の機械的使用人を造る事に集中された。從順な専門技術家と、技術を持たない服從者とを造らねばならなかつた。それに向つて個人的自由主義を徹底せしめる事は、その教育の目的と相反する事になる。そこで市民階級は二重人格を出現せしめて、支配階級的市民の教育精神と全く別な教育精神——集合的の隷屬精神——を、一般教育に於て實現せしめなければならなかつた。そしてそれを實行した。

何處の國でもこの矛盾は、或は露骨に、或は隱約の間に曝露

された。イギリスでは市民階級は所謂ゼントルマンの教養を受くべきものであつて、職業教育を受くべきものでないと、意識の上では明確に矛盾を排除し、大學の性質をその支配階級的目的に局限した。そして一般教育は出來るだけこれを國家の手から引き離して、社會的性質をもつた不統一のまゝに置かうとした。然し市民國家はその生命たる産業に於て昔の國家のやうに、一般人民から掠奪的に奪ふ組織ではなく、一般人民をその産業組織の支配下に取り入れて働かせる組織であるから、イギリスのやうに市民階級が或る期間國家を遠ざけやうとした時代には、一般教育も國家には屬さないでゐられるが、市民階級には屬さずに置けなかつた。舊ロシアのやうに、多數が農民である場合には市民階級は中世紀の支配階級と同じく、一般教育を無視して貴族的階級教育に沒頭する事が出來た。然しやはり近代國家の性質が發達すると同時に、專門教育及び一般教育を支配階級の手に收めねばならなかつた。日本は比較的早くから一足飛びに近代國家的矛盾を持つた教育的統一を實現して、その矛盾性をだん／＼と育てていつた。

支配階級が特別の教育精神を持つ場合でも、昔のやうに、それが一般社會的の徒弟教育と沒交渉でゐられゝば、言ひ換へれば、職業教育や、一般教育やを、自分の統一内に持ち來たさないで濟めば、教育學も教育政策も矛盾なしに階級的精神を押し通す事ができる。孔子は農業を學ばうとする弟子を「小人なる哉」と罵つた。アリストートルは商人や職人や農民は、市民になれない人間だと斷言した。それは何れも社會的生活者即ち生產者を別な組織に隔離して、支配階級が、たゞそこから掠奪する軍國的組織であればさういふ風に沒交渉を宣言する事が出來るのであるが、今日の支配階級はさうはいかない。自分が商業工業農業の教育を統一せねばならぬ立場にある。而かも違つた教育精神をもつてそれをせねばならぬといふ難境にある。

さういふ事が、うまくゆく筈はない。市民國家の教育は必然にその自由主義を、一般社會意識のうちに育て上げる事となる。さうしてさういふ事は、産業組織が強制管理から、産業自體の有機的管理に移る過程と伴つて、生産階級の自主的地位を造り上げる事となる。市民國家の教育は自然それを手傳ふ働きをする。そこで矛盾が露骨になる。市民階級は自分がした事の結果に狼狽せざるを得ない。彼等は、專門教育と普通教育とに對して、近代的精神が大いなる禍をなしたと考へる。そしてこれに對して、中世紀式統一精神を以つてせねばならぬと考へるに至る。壓迫が近代の自由國家主義の末期に教育方面へ逆襲して來るのはこの理由である。

それに伴つてこの矛盾をどう修正したらいゝかが近代國家の教育學及び教育精神の問題となる。然し國民教育の實際に於ては中世紀式の壓迫を回復する手段しか思ひつき得ない。そして實際上はそれで可いかの如く思はれる。が所謂近代的の「教育學」なるものに至つては、何んとかしてその矛盾性を意識の上だけで抹創せねばならぬ。その方法が二つの方面に展開する。一つは純科學的と稱せらるゝ教育的學的傾向であり、他の一つは觀念哲學的教育學である。

教育が科學化する場合には、それは純粹に現代的資本主義產業の機械と化するのである。能率主義の教育が即ちそれである。產業の機械たるべきものを一般社會人から造り上げるに「精神」を除外して、機械化した人間を造るのである。それが爲めに心理學、生理學等の科學が利用され、アメリカのやうな處では教育がその「精神」なしの科學化の方へと移つてゆく。同時に他方に於ては「教育精神」を出來るだけ社會的現象から引き離して、觀念界だけの所謂「學的精神」（アカデミック・スピリット）といふ超越的意識に造りあげるのである。文化哲學、價値哲學に基づく教育學が即ちそれである。之れは、それらの哲學に基づく政治學や國家學乃至社會學等と同じ目的を持ち、同じ形をとり、同じ作用を働くものであつて、要するに現實と意識との矛盾を、意識を現實から引き離す事によつて修正しやうとするのである。教育精神はもと／＼社會的現實の要求であつて、その時代の社會的生存を維持する人間的能力を養ふ社會過程に一致する意識として產出されるものであるが、現實の生活に於て矛盾が存する場合には、意識もその矛盾を反映せしめねばならないので、さういふ矛盾をもつた近代國家の教育は、勢ひ教育精神の矛盾として現はれる。この矛盾を生活の現實に於て修正しやうとすると、つまり、資本主義的產業組織の矛盾そのものにぶつからねばならぬ。その大きな現代的矛盾が、どうにもならない――どうかなつてはならぬ、とするとその矛盾には觸る事が出來ない。そして教育精神の矛盾だけをどうかしなければならぬといふ事になる。そこで「精神」を現實から引き離して、觀念世界の寶物とする。そして無限の循環過程である處の、觀念的渦卷――論理の遊戲――のうちに投ずる。いろ／＼の超越的思索がそれを捏ね返す裡に、益々それが經驗的意識を遠ざかるものとなり、從つて立派な觀念的構造物となる。文化哲學、價値の哲學の教育學は、さういふ風にして學的に完成される。同時に社會的には全く無意味のものとなる。この事は教育學のみに於てゞなく最近の政治學、國家學、社會學等の現狀に於ても見出し得る現象である。

それは社會的には無意味であるが、然し階級的支配の上の機

能を持つてゐる。一つは崩壞する階級の觀念的自慰として役立ち、また他方では一般社會人の觀念的傾向に投じて、それが現代的精神に對する「鎭魂」の役をつとめる。今日の普通教育、專門教育は極めて機械的の功利的の目的と內容とを持つたものであるが、それを受ける社會人は青少年期の觀念的傾向によつて、絕えずその機械化される作用に不滿を感じてゐるがそれから遁れる何らの手段も希望も與へられないので、觀念がそれらの遁れ場所となる。壓迫された機械化された教育を受けるもの程「觀念的」である。近代國家の觀念的の教育精神は、或る場合に特にそれに似た傾向をもつ若い人々の觀念生活を嫉る事だけはなし得る。彼等の現在の生活の經驗過程を科學的に認識する力を與へられない處へもつていつて、さういふ觀念の過程が與へられると、それを解決の最も奇い鍵だと錯覺するやうになる。そこに觀念的教育精神の役目がある。それによつて階級的統一の目的を意識の側から助けることになる。之れが社會的に無意味な教育哲學や社會哲學の盛んに奬勵される所以である。さうして盛んに若い人々の間に流行する所以でもある。昔宗教が勤めたやうな阿片劑的作用を、今は之等の哲學的意識が勤めてゐる。

然し、現實はそれにも拘らず必然の過程を歩んでゐる。教育精神はその儘であり、教育制度もその儘であつても、社會過程が、產業過程が轉廻する。矛盾に立脚する市民的教育は、現在の社會人の集團即ち生產者階級の集團に其實際的權威を失つて行く。科學化された教育の方法は恐らくどんな社會に於ても方法として有效に存在する事の出來る部分もあるだらうが、今日のそれはそれらの社會的作用が歪められてゐる。生產階級者の組織的進化は、それと全く別な科學的轉回をとつて、その機械的科學化を無效にする組織的方法を持つに至る。即ち人間の機械的使用を不可能にする組織が生產者集團の過程の裡に發達する。同時に「精神化」された市民階級的教育は、國民的義務としてそれを受ける以外には、全的に拒否されて、生產者集團自身の社會的教育が、彼らの間に發達する。市民的支配に對する生產者の支配の教育が急激の速度で社會的に行亙りつゝある。それは生產者集團が組織化され、その社會的構成が、市民階級のそれに對抗し得る實質をもつて完成しやうとしてゐるのに伴ふ現象である。

この變化は外觀上よりも內容的に餘程進んでゐると思はなければならぬ。無論科學的研究の機關、社會的意識構成の手段、方法といふやうなものは、まだ無產者集團の間にそれ自身の機關として、市民國家のそれに追ひ付くやうなものは出來てゐないが、さういふ不便な、不完全な境遇の間に於てすら、生產者集團の社會的の意味に於ける教化の內容は頗る有望な傾向で充

たされてつゝある。何よりも科學的に有望である點は、社會現象の認識に於て、市民階級のそれに對し、生産者集團の認識が恐ろしく錯覺から免かれてゐる事である。社會の組織的進化は、認識の確實といふ事が、その出立點である。宗教國家が滅びて軍國國家が興る當時に於ても、その出立點は宗教國家の認識の錯覺的であつたに對し、軍國國家の認識が現實的に確實であつた事を根本條件としたのである。この認識の錯誤を免かれてゆくといふ過程に於て生産者集團の方は市民階級の集團に比して一歩を進めてゐる。錯覺的な教育精神が現實に於て生産者集團に無視されるのもその當然の結果である。

　現代の國家教育は、右のやうな崩壊過程をとつてゐるに對し、新たな社會的な教育の意味は、その産業組織の進化に伴つて生産者階級の社會集團のうちに育てられ、そこから新たな社會的な教育と、その精神とが組み立てられる。

性の苦悶とその打開

小酒井不木

一

　現代の病氣のうち何が一番多いかといふと、誰でも神經衰弱と肺結核だと答へるであらう。而もその肺結核患者の大部分は神經衰弱に惱まされて居るのであつて、神經衰弱は、たしかに現代人の最も多く惱む病氣であるといつて差支ない。むかし俗言に「色氣とかさ氣のない男はない」と言はれたが、今では「色氣と神經衰弱のない男はない」と言つても敢て過言ではないのである。

　神經衰弱は文明病であるといふ。これは多くの人の口にするところであつて、たしかに現代文明の副産物であるといつてよい。機械文明、科學文明は、人間の頭腦を過勞せしめて、この一大文明病を起すに至つたのであるが、而も現今の科學文明がこの病氣を十分に除き得ないといふことは何といふ矛盾した現

象であらう。尤も、病氣の原因となるものが病氣をなほす力となり得ないことは當然のことかも知れぬけれど、かうして人類が、文明、文明と喜んで居ながら、漸次、その文明のために破壞されつつあるのかと思ふと、頗る寒心に堪へぬところである。

抑も神經衰弱を起す直接の原因のうち、何が一ばん多いかといふに、先づ第一に擧げられて居るものは、心身の過勞であつて、その次には性の苦惱である。もとより神經衰弱には、否、神經衰弱に限らず如何なる病氣でも、內因と外因とがあつて、上記の原因は內因と相俟ちて作用してはじめて、神經衰弱といふ症狀をあらはすのであるが、內因となる素質なるものも、多少は現代の人間生活そのもののために影響を受けるのであるから、だん／＼時勢の進むに從つて愈よ益々、神經衰弱的傾向が人類の間に濃厚になつて行くのである。

原因が結果となり、結果が原因となるといふことは、慢性病に常に見られる現象である。神經衰弱の外的原因の第一として擧げられて居る心身の過勞なるものは、その實、神經衰弱的素質をもつた人に起り易いのであつて、第二の性的の原因なるものも、やはり、神經衰弱者に特有な性的行爲から來る原因を意味して居るのである。又、神經衰弱者に特有な性的行爲は、やがて、心身の過勞を起し易い原因となり、從つて神經衰弱の原因なるものは、よく考へて見ると一にして二にあらずといふことが出來、換言すれば、神經衰弱の原因は、唯一性的原因に還元し得るとも言へるのである。それ故また、現代人の肉體的苦悶は、唯一性的苦悶に外ならぬといふことも出來る譯である。

その性的苦悶のうち、何が一ばん多いかといふと、誰でも知つて居るごとく、オナニー即ち性的自慰である。現代の文明人は、早くから色々の書物を讀み、色々の特殊の場所に出入して性的刺戟を受くること多く、而も一方から迫つて居る生活難は、婚期を遲らし、ために、、、、、、、機會もまた多く、これが神經衰弱の有力な原因となつて居るのである。尤も、、、、を行ふ理由はたゞそれだけではなく、後に說くやうに、もつと複雜なものであるけれど、兎に角、現代の性の惱みを論ずるに當つてはオナニーの問題を十分理解し、それに對する適當な處置を考へなければならない。ユリンス及びフイリツプスの統計によると、神經衰弱者三百三十三例のうち百二十三例は過勞とオナニーがその原因であつたといひ、フロイドやクラフト・エービングなどは、神經衰弱の眞因はオナニーにありとさへ斷言して居るのであるから、如何にオナニーの問題が、重要なものであるかがわかる。

而もオニナーなるものは、最初に科學的にこの問題を論じたチツソーが、これをもつて「罪惡中の罪惡」と斷言し、すべての人間の悩みはこれから生ずるとまで揚言したゝめに、從來その害が誇張せられて傳へられ、この習慣に染んだものは、いづれもはげしい自責の念に攻められながら、而も、その習慣を脫し得ないといふ苦悶に襲はれ、いはゞ二重にも三重にも苦悶を重ね、時には救ふべからざる可憐な狀態に陷ることさへあるのである。

オナニーの習慣の最も著しい中學時代の生徒に向つて、オナニーはそれ程害がないものだなどゝ言はうものなら、それこそ、ゆゝしい結果を齎らすにきまつて居るから、教育者たちは、その害毒をあくまで誇張して、かやうな習慣を罪惡視させようとするのが普通である。これはまことに止むを得ざることゝいへば云ひ得るのであるけれども、この誇張せられた有害說が、本人に與へる影響は、豫想外に大きいものであつて、極端にいふならば、神經衰弱者の大部分は、オナニー有害說の犧牲になつて居るといつても差支はないのである。

私は最近肺病療養法なる「闘病術」といふ一書を著はして、その中に、質問券を添へて、讀者たる肺病患者が、何か心に悩んで居ることがあつたならば、遠慮なく質問してもらひたいと註文したところ、オナニーの習慣に悩んで、それを取り去らうとしても取り得ずに苦悶して居る人が、可なりに質問者の中に多かつた。それで私は、それ等の人々に向つて、オナニーの害毒が一般に誇張されて傳へられて居ることを說明し、かやうな習慣を取らうと焦躁するよりも、むしろ害毒はないものと信じてその儘にして無關心にして居る方が、却つて、その習慣を脫する最も有效な方法であると返答した。この返答は見やうによつては可なり無謀な、亂暴なものであるかも知れぬけれど、それより外に自分はこの惡習に處する方法はないと思ふのである。害があると知つて悩んで居る人に、更にその害を說いてやめさせようとすることは、古い言葉であるが木によつて魚を求めるの類である。若し世の教育者がオナニーの害を說いてその惡習を防がうとしたならば、それは却つて害毒を多からしむるに役立つのみであると言ひたいのである。

前記のチツソーの書物の中には、フォン・カニッツの左の詩をあげて、この習慣を持つものに對する誡めの言葉としてある。

若し惡念が起つたならば、
死人の枯骨の繪を、
目の前に浮ばせて、

もつて邪慾を打ちはらへ。

然し、こんな詩で、オナニーの惡習を止めさせることは到底出來るものではない。

世の中にはオナニーの害を思ふ自責のために高度の神經衰弱を起して居る人が決して少なくないのであるから、私は、こゝに、この點に關して、正しいと思はれる説を紹介し、もつて、神經衰弱退治の一策としたいと欲するのである。

二

抑も自から淫する性質即ち「オートエロチズム」は、人類に具はつて居る一つの本能である。我々は、食物を攝る本能をもつて居ると同時に「オートエロチズム」をも持つて居るのであつて、人間である以上、これのないものはない。從つて手つとり早く言ふならば、食物を食ひ過ぎることを誡めても、食物を食ふなと誡める者のないごとく「オートエロチズム」に對しても、之を行ふなと誡めるのは理にもどるのであつて、たゞ過度に行ふなと誡めて、はじめて意義があるのである

この「オートエロチズム」はハヴロック・エリスの深い研究によつて、はじめて、これに關する注意を促がされたのであるが、今日は、すべての學者がこれを承認して、もはや動かすことの出來ぬ眞理となつて居る。從つてオナニーのごときも、決して人類にとつて異常な現象ではなく、ある程度までは生理的の必在の現象なのである。フユールブリンゲルはオナニーをもつて、不自然な、病的な現象だといつたが、なるほど誰が考へても、××といふことゝ比較すれば不自然なことであるにちがひないけれど、オナニーなるものが徹頭徹尾不自然だといふことは、人間が物を食ふことを不自然だといふのと同じく不合理であらねばならぬ。だから、メッチニコッフも、生殖器關が成熟せぬ先に、性的感覺が發達することは、人類の一の素質であると説いて居る。從つて、オナニーをもつて、一種の道德的犯罪と見做すことは決して當を得て居ないのである。動物界をながめても「オートエロチズム」の現象は到るところに見られるのであつて、換言すれば、生物に共通な現象に外ならぬのである。

されば、オナニーは男子に限らず女子にも普通に見られる現象である。かやうな習慣が、如何にはげしく擴がつて居るものであるかは、こゝに述べることを憚るけれども、それは實に人人の豫想する以上である。從つて、女子のヒステリーの精神分析の際には、何よりも先に、これを發見するにつとむべきである。又、成人の男子で、オナニーを經驗しなかつたといふ人

は、曉天の星のごとく少なく、而も、その悉くが神經衰弱にかからないのみか、何等の認むべき害をも蒙つて居ないのは、要するに「オートエロチズム」が一種の生理的の現象に外ならぬからである。

それ故、今日の醫學ではオナニーがもし、適度であるならば、決してその個人の健康には害がないものといふ意見に一致して居るのである。たゞ前に述べたやうに、食物も適度ならば害がなく、過度ならば害があると等しく、オナニーも、過度に行つた場合はじめて害を生ずるのである。尤も、如何なる程度が適度で、如何なる程度が過度であるかといふことは、體質を異にして居る人々に向つて一概に言ふことは出來ないのである。クルシユマンは、十一年間、はげしいオナニーを行つても少しも害のなかつた秀才のことを記し、ブロツホは、四十歳の文藝家で五歳の時からこの習慣に染み、甚しい時には一日に數回に達したに拘らず、その體格が偉大で、而も立派に仕事の出來た人のことを書いて居る。だから、體質次第では、普通に過度と思はれる場合でも、その個人には何の影響も及ぼさぬのであつて、ちやうど、一日一升の白米は普通人には過量であるけれども、相撲取りにはあたりまへであると同じことである。それにも拘はらず害があるといふことを一概に聞かされて居るために、その個體にとつては適度であるに拘はらず、はげしい心配と恐怖をもつて自責し、ために高度の神經衰弱を起すといふやうな現象が到るところに見られるのである。

かういふ現象を歎くのあまり、ある學者たちは（たとへばエルブやクルシユマンの如きは）オナニーが神經系に與へる影響は、、、そのものが與へる影響よりも少ないとさへ說いて居る。尤もこの說はブロツホなどの反對して居るところであつて、、、、、、、、、、較べたならば、前者が後者よりも害のあることは誰にもわかることであるが、兎に角、從來は害毒が誇張せられて居たゝめ、現にそれによつて災禍を深めつゝある人は決して少なくないのである。

一旦神經衰弱にかゝると、オナニーの恐怖を持ちながら、却つてそれを脫却することが出來ず、いよ／＼恐怖の念を強くし、ます／＼神經衰弱の度を增して行くのが、一般の有樣なのである。恐怖しながら恐怖に近づかずに居れぬといふのが神經衰弱者に見られる特種の現象なのである。だから私は、神經衰弱者を取扱ふ醫師は勿論、一般の人がこの點に正しい理解を持ち、恐るべき文明病の驅逐に力を致してほしいと思ふのである。

然し、過度のオナニーが、どんな害毒を及ぼすかといふこと

は、誰しも一應心得て置くべきであらうと思ふ。先づ第一にかやうな人は精神が甚だ陰鬱になる。かのゴーゴルの作物がすべて陰鬱に出來て居るのは、彼が過度のオナニストであつたからだといはれて居る。次に肉體に及ぼす影響のうち最初に擧ぐべきは眼の障害である。眼の調節力が弱り、結膜が充血し、羞明があり、眼瞼が痙攣を起す。なほ又心臟や血管にも多少の障害が起り、脈が不整になつたり心臟部に痛みを覺えたりする。最後に一番起り易いのは、生殖器關の障害であつて、就中、夢精の現象が、殆んどつきもののやうになつて居る。

かう書くと讀者の中には、たま／＼心臟部に他の原因で痛みを感じたり、或は、他の原因で結膜の充血を起しても、それをすぐ自分のオナニーの習慣に歸して、恐怖したり心配したりする人がないと限らない。私はいつも言ふことであるが、文明人は物を知つてそれに惱むのがその通弊であるから、筆者がうつかり書いたことでも、讀者に意外な惡影響を及ばさぬと限らない。で、繰返して言ふが、上記のオナニーの害毒なるものは、過度の時にのみ起るものであることをはつきり理解しておいてほしいのである。而も「過度」といふ言葉は比較的のもので、誰が考へても過度だと思はれる程度でも、ある特種の人には少しも過度でないことをよく／＼頭の中に入れておいてほしいと思ふのである。

かういふと、いかにも私が、從來甚だしい害毒ありとせられたことを、故意に害毒が少ないものであるかのやうに書いて居ると思はれる人があるかも知れぬけれども、決してさうではないのである。私は、現に神經衰弱に惱みつゝある人が、あまりにも「作り苦勞」をして居るのが見るに忍びないから、正しい知識を述べたに過ぎないのであつて、ブロッホの「現代の性的生活」を繙いて下されば、私が嘘を言つて居ないことがよくわかると思ふ。

過度のオナニーの惡習をなほす爲に、從來、色々な方法があげられて居る。ことに子供の時にこの習慣をつけないやうに工夫することは甚だ大切であるけれども、それは今、こゝで立ち入つて論ずべき性質のものではない。私は現に、神經衰弱に惱みつゝある人を對象としてこの一文を綴つたのである。

神經衰弱を治すために、從來は、ブロム加里や轉地療養などが推賞せられたけれども、私たちはもはや左樣な治療法で滿足するものでなく、その由つて來るところを深く考察し、その原因に對して、適當な處置をしなければならぬと思ふ。前にも述べたやうにオナニーは必ずしも神經衰弱の原因ではなく、むしろ神經衰弱の一症候と見做すべきものであるけれども、原因が

結果になり結果が原因になつて、オナニーのために神經衰弱が愈よ深くなつて行くことは事實であるから、オナニーに對する正しい理解を持つことが、神經衰弱の治療に最も必要なことはいふまでもないのである。

神經衰弱の際に起る性的異常はオナニーに限らず、色慾亢進、夢精、早漏など色々あつて、性の苦悶を說く以上、それ等のものについても一應、その正しい理解を與へて置く必要があるけれど、要するに、恐怖を恐怖することさへせず、それ等の異常現象を心配しさへせねば、比較的容易に之れを除くことが出來るのである。

性的苦悶の範圍に取り扱はるべきことは、單に神經衰弱に限らず、性的抑制の問題、賣笑婦の問題、性病の問題、産兒制限の問題など色々あるけれども、それ等を一々說くことは不可能であるから、私は、當面の問題としてオナニーを論ずるに止めたのである。

無産政黨の惱と其打開策

三輪壽壯

一

『我國の勞働運動なり社會運動なりは、二三箇月も目をつけないでおくと、情勢がまるで分らなくなる』と誰やらが言つたのを聞いたが、之は誇張した言ひ表し方ではあるが、然し確かにさうした一面のあることは否定出來ぬ。或は無産階級運動の一局面で——例へば某工場に大きな勞働組合が出來たかと思ふと大爭議の結果潰滅するといつた様な——大小とりどりの異動が絕えず起つて居る、かと思ふと階級戰の全線にわたつて影響を及ぼす様な變動が一年に何回となくまき起される。顧みれば大正七八年このかた今日まで僅に六七年の間に我無産階級運動が辿つて來た道程は如何に紆餘曲折に富んで居ることであるよ。」その運動の描く線は圓みのない銳角的な直線の連鎖である。

政治否定、直接行動すなはち經濟行動一天張の四五年前の運

動が『方向轉換』の掛聲で政治行動へ展開して來た。そして此鮮かな方向轉換の後に全國的單一無産政黨の標語は地方政黨主義を壓倒して農民勞働黨が作られ勞働農民黨が打ち樹てられた。その勞働農民黨が左右兩派の抗爭から右派組合の脱退となり、左翼的色彩を濃厚にしたとき、右翼の重鎭たる勞働總同盟は逸早く右翼政黨の旗擧を企てた。此時突如として——然しながらそれは當然に起るべきものではあつたが——日本勞農黨の運動が社會民衆黨に走らんとする總同盟と、勞働農民黨にひとり取殘された日本農民組合の各の一角から起つた。

「空漠なる理論とこの理論を以て現實を律せんとする左翼、徒らに左翼排擊に狂奔して次第に反動化して行く右翼」、此兩者の鬪爭に慊らずして無産階級運動の正道を確立せんとする日本勞農黨の運動は無産階級の陣營に一大衝動を與へた。右翼の堅壘を以て自ら任じ人も亦之を許して居た日本勞働總同盟が又しても分裂した。左翼派の糸に操られて來た日本農民組合が大動搖を來して之また分裂の運命に逢着しないだらうかといふことが氣づかはれた。左右兩極端派の抗爭に飽き、その挾擊から身を退かうとした中間派諸團體が、頓に積極的になり活氣を帶びて來た。

今や我無産政黨運動は混沌たる紛亂の時代を現出した。今は我國無産階級運動の戰國時代ともいふべきである。勞働農民黨あり、社會民衆黨あり、日本農民黨あり、而して日本勞農黨あり、また幾多の地方政黨は或は結黨し或は結成の過程にある。野心家もあらう、××家もあらう、所謂小兒病者もあらう。經濟的鬪爭の爲に幾年間の辛酸を以て固められた組合がわけもなく引き割かるゝ。昨日までは兄弟と呼び僚友として手を携へた者が或は背き或は對抗する。反動化した或組合員は暴力をふるつて僚友を傷ける。血迷つた左翼熱病患者は支那の戰爭みた様に僞電や誇張した宣傳文書やで反對派を中傷失墜せしめ様とする。惡くすれば泥合戰もしかねまじき機運が遺憾ながら覗はれぬではない

我無産政黨運動は過去一年有半晴々したことのない陰欝な空の下にその力を伸す由もなく、徒に焦り跪いた。今やその總勘定の日が來た。あらゆる不純なものは此大暴風雨によつて一掃し盡されねばならぬ。混沌の中から何か生れるであらうか。情勢は如何に展開するであらうか。

二

我無産政黨運動は當初から、單一無産政黨主義が大衆の要望であつたにもかゝはらず今や現に小黨分立の状況にあり、單一

政黨主義の實現至難なるを思はしめる。然しながら無產階級の政黨と單一政黨を結成するのが如何なる障碍あるにしろ決行されなければならぬことに就ては私ももとより異存はない。然しながら諸種の前提條件を考慮せず、只單一政黨主義のお題目さへとなへて居ればそれで目的が達成さるゝ様に考ふるのは大きな錯覺である。のみならず單一政黨主義を主張しながらむしろその反對の結果を生む樣な行動に出でたことは何といつても左翼政策の失敗であつたといふことが出來ると思ふ。

右翼墮落幹部の攻擊もいゝだらう。組合乘取策にも何とか理窟はつくであらう。何人かの御定連が寄つて何々協議會とか何何準備會とかの名稱で決議文や聲明書を作ることも時にとつての戰術である。然しながらかゝることが常習となり時と處を選ばず行はれるとき光明を求むる解放運動が陰欝なものになる。陰謀と反噬の暗い蔽はるゝ、人情の弱點に乘ずる好言令色が正義の名によつて橫行する。只さへ慰藉少き陰慘な階級戰が益々暗くなる。左翼戰術はかくの如き點に於て當事者の意想外な缺陷を存しては居ないだらうか。政治上の爭は權謀術策を以てせられ勝である。況んや階級鬪爭としての政治鬪爭が眞正直に行はれ難いことは否定出來ぬ。然しながらさりとて支配階級に對してもまた同じ階級戰の僚友に對しても術策を用ふることは決して自らを生かす所以ではない。

私がかくの如く左翼の過失を指摘するが如き態度に出るのを片手落だといふ人があるであらうが、支配階級と醜關係を結ぶ右翼指導者に對して私は根柢から相容れないのであつて之は左翼を責むるとは性質を異にして居ると思ふので玆で問題にしないだけである。

單一政黨主義を眞に確立しやうとするには各團體間の溝渠があゝも深く掘られて居ては成立しやうがない。一方の手で毆り金をやりながら一方の手で握手しやうとする樣な狀況で單一政黨も何もあつたものではない。自分の意に從はないものを『共產派』とよび排擊之努むる右翼と、觀念的理論に迎合しないすべてを日和見と呼び墮落幹部と罵る左翼と吳越同舟ではお互に力を消し合ふに過ぎぬ。兎に角理論の如何に拘らず此形勢は打開されねばならなかつた。果せる哉筋書通り總同盟は脫退した、そして今まで無產階級運動に協力して來た知識階級のみならず技術者の團體としての工人俱樂部等と提携して社會民衆黨に全組合員を參加させ樣とした、然しながら總同盟が勞農黨を脫退したとき、既に總同盟の態度が常に消極的なるに慊らない部分が少しばかり頭を擡げて來た。勞働農民黨を終始一貫支持して來た日本農民組合の中に同組合が勞農黨を介して左翼的指

導の下にずる〳〵と引き込まれてゆくのに對する危惧の念が萌して來た。此二つの相離なした團體の中から發生した、似通つた二潮流が期せずして合流したのが日本勞農黨である。地方的に相離るべからざるものを組合の向背から引き離さうとしたところに無理があつた。そしてまた思想的傾向なり運動方法なりに何等徑庭なきに拘らず、幹部の意見の相違の故に別れさせ樣としたのにも無理があつた。此無理に我慢出來ないで立上つて「階級意識に基く現實政策の確立」を叫び出したのが日本勞農黨の結成である。一しよになりたいものを一しよになさず、なりたくないものを無理に一しよにした樣な在來の行きがゝりを棄てて、左右兩極端を切斷して、提携して行ける者だけ提携しやうではないかと大膽に素直に叫んだことが比較的いゝ反響を呼び起し、組合總聯合、司厨同盟、製陶勞働同盟、自治會等の中間團體で作つた中堅聯盟が贊意を表して來て、その齎した勞農總聯合の問題が急速度で實行されんとする。日本勞農黨の結黨式は之等の團體の支持を以て賑やかに而も何のわだかまりもなく擧げられんとする。

右翼政黨あり左翼政黨あり、而して日本勞農黨は呼んで中間政黨といふ。されば之は單一政黨とは勿論謂ひ得ないが、然し單一政黨の理想には今までのどの無產政黨よりも近い。日本の無產政黨運動は日本勞農黨の出現により一大波瀾をまき起したが、然し之によつて一道の光明を見出した譯である。即ち知る我々は、勞働農民黨の分裂、社會民衆黨の組織、日本勞農黨の出現、總同盟農民組合の分裂的危機等此分裂的小黨對立的傾向は大なる結成――全國的單一政黨結成への過程である。

玆に私が打開策を講ずるまでもなく、時の勢は行詰つた局面を打開したのである。今流行の唯物辯證法の學徒たちは何かといへば闘ひ取らねばならぬと連呼するが、事實は正しく戰ひ取られたるか如き觀を呈する。然しながら眞の左翼が更にまた戰ひ取るの時期も來るであらう。

三

過去一年有半內部闘爭に終始して來た我國無產政黨運動が日本勞農黨の出現により淸新さを加へたことは既述した。然しなほ無產政黨の運動の上に特に考慮されなければならぬ點が多々ある。中に就き一は勞働組合農民組合と政黨との關係であり、二は黨費の問題であり、之は總選擧對策の問題である。

(一) 勞働組合が相當發達してから勞働者階級の利益を代表する政黨の必要が感ぜられ、勞働組合が他の社會主義團體と政治的に組合して勞働黨を作つた英國に於ては、勞働組合と政黨と

の關係は利害衝突を來す場合が少かつた。然し政黨が勞働組合の發達を促し、勞働組合が始めから政黨の指導の下にあり而も政黨が二派に分れて居た獨逸では組合と政黨とは英國に於けるが如く然く簡單にはゆかなかつた。同一企業家に雇はれる勞働者が政見を異にし政派を異にするが故に有力なる經濟闘爭の結果を阻まれる等之によつて蒙る損失尠からず、爲に勞働組合の政治的中立が高調されたり政黨と勞働組合とが相反目したことすらある。

我國に於ける無產階級の政治運動は極めて錯綜した關係にある勞働組合と農民組合によつて企てられたが、單一政黨主義といふ空漠たる目標で結合することは實際に於て極めて困難な問題であつた。分裂前の勞働農民黨の中央委員會はいつてみれば勞働組合農民組合の政治部の連絡協議會以上に出でなかつた。中央委員會が決定することもそれぞれの組合に歸つては何の權持もなく、中央委員會自らが之を破壞し、組合本部が決議に反する方針を平氣でやつてのける樣な不統一を暴露したのであつた。又組合に就て之を見れば、政黨問題から組合の統制を紊るといふ樣な名目の下に除名沙汰ひいては組合の分裂にまで及びまたは及ばんとした事例は一二にとゞまらない。初期の政治運動として必然經過しなければならぬ道程ではあるが、之を如何に切り拔けて行くかは無產政黨の發達の爲の重大な前提條件である。既に市電自治會はまづ政黨問題を組合員の自由なりとして分裂を防止したが自治會內に於ける政黨問題はまだ之だけで解決されては居ない。最近日本農民組合がまた日本勞農黨と勞働農民黨との何れかに組合の去就を決しなければならぬといふ難關にぶつかつて、之亦分裂の危機を脫する爲中央委員會は政黨の問題を自由問題と決議した。然しながら經濟行動の主體としての組合と政治行動の主體である政黨とその兩者の使命がはつきり組合員に理解される爲にはなほ幾波瀾を見た上でなければなるまいと思ふし、我國の勞働組合の現實を以て將來を推すならば此解決策は著しく悲觀的な結論に達せざるを得ぬ。然しながらうまく行けば此上のことはない。努力されなければならぬ一手段ではあると思ふ。

然るに茲にまた別個の方法を試み樣とするものがある。それは日本勞農黨と勞農總聯合結成運動との提携である。日本勞農黨が結黨式を擧げ樣とする直前此擧に贊意を表する中堅聯盟（組合總聯合、司厨同盟、製陶勞働同盟、自治會）は結黨式に先ち其政黨を支持する勞働組合、農民組合の總聯合準備の協議會を開催することが提案されて、結黨式の前日以上の四團體の外日本船夫組合、關東合同勞働組合、關東紡績勞働組合、高砂

工友會及日本農民組合（有志）によつて日本勞農總聯合準備會が作られたのである。日本勞農黨と勞農總聯合とは恰も車の兩輪の如きかたちに立つわけである。我國に於ける勞働組合の總聯合ひいて勞農總聯合は數回試みられて成らなかつた懸案である。單一政黨といひ勞農の經濟的團結といひ之を全般的に解決することは少くとも現狀が許さなくなつて居る。經濟行動、政治行動の兩面を通じて左翼結成、右翼結成は今既に其外廓だけは覗ひ得る。今回の勞農總聯合は中間派の結成と見らるべきものであるが、之が後ればせながら却つて一番早くその形體を整へそして發展性があると思ふ。兎に角勞働組合農民組合が堅固な團結を作つて政黨と密接な關係を保つことが出來るならば政黨の職能は一層發揮され、組合の威力は幾倍するであらう。

（二）黨費の問題は勞働組合の組合費のそれと共に實に困難な問題である。近頃組合幹部の墮落が問題にされ殊に左翼の陣營から猛烈なる攻擊さるゝのであるが、之に就ては深くその原因を考へてみなければならぬ。現在の組合費とその徵收の成績とで有給幹部をおいて充分な活動がやつてゆけるかといふとそれは至難のことである。それならば組合費を値上するかといふとそれは更に困難である。此解決の一策として組合の産業別合同、それに次いで全國的合同にまで進めることが考へられる。其他種々の點が考慮されなければならぬが、要するに現狀としては組合員の支出する組合費だけで組合役員の給料が充分拂へない。その間隔から支配階級の魔の手がさしのべられる。又出所の分らぬ運動費が問題にされる。

黨費の問題も之れと同樣である。此危險性は政治運動にあつては更に大なるものがあることを豫想し得る。選擧運動の費用等を考ふれば尚更のことである。然し最小限度の本部支部の活動費だけは黨員自分が負擔する習慣を、是非今からつけたいものと思ふ。勞働農民黨は大正十五年度の決算費目を分つて公表した。私も關與して居たことだがそれには聊かの虛構もない生地のまゝの貧乏世帶の公開である。今參考の爲左に之を揭げる。

十五年度決算

△歳　入

一金二千四百八十八圓三十錢也收入總高

△歳　出

一金二千三百卅九圓五十四錢也支出總高

歳入出差引金百四十八圓七十六錢也後期繰越金

△歳入之部

項　目	
黨　費	九七八、七〇

負擔金	五六三、四三
寄付金	六〇四、六一
雜收入	二一、五六
借入金	三二〇、〇〇
歳入合計	二、四八八、三〇

〈歳出之部

事務所費	八八八、五九
人件費	二九三、〇〇
旅費	一九九、九二
需要費	六二三、一三
印刷費	二三四、一〇
料金及利子	二、三三
會議費（臨時費）	九八、四七
後期繰越金	一四八、七六
歳出合計	二、四八八、三〇

黨費の集りは決して良好とはいへない。また寄附金も充分集め得なかつた。無産政黨の貧乏世帶は之に賛意を表する人の筋道の通つた寄附金を何等の條件を附せらるゝことなく受けて、その足らざるを補つて行く外はない。然し之は餘分の（實際は餘分でないが）活動費に充つべきもので、黨の經常費は黨費を以て支辨する計畫を樹てねばならぬ。その爲黨費はたとひ十錢でも二十錢でも確實に納付する習慣を作らねばならぬ。黨員十萬人として一人十錢宛でも年一萬圓で、月千圓足らずであるが、それだけあれば本部の最少限度の經常費だけは出るのであつて、その爲から云つても黨員を多くして黨費を少くしても完全に徴收出來る方針を立てなければならぬと思ふ。

(3)總選擧のことであるか、之には分立して居る各政黨が如何に協力するかゞ第一、第二には選擧費用の問題である。

勞働農民黨といひ日本勞働黨といひ、また社會民衆黨といつても、其構成分子なり政治行動の手段——もとよりそれは黨の持把して居る理論の相違から來るのではあらうが——かりに相異はあつても、現在の議會によつて如何に行動するかは略同じであるといふことが出來る。その證據には夫々の政黨の綱領政策は同巧異曲で特別の相違點はない。若し議會に代表者を送れば院內で。は共同戰線を張らなければならぬことは明白であるから、分立して居る政黨がやがて落つく處に落つくであらうといふことはかくの如きことを考へて樂觀し得るのである。それ故に總選擧に當つては大體右の諸派が候補者につき或は選擧地盤につき協定をとげることが望ましい。勞働農民黨の諸君が排撃を叫ぶ社會民衆黨の推す候補者は必ずや政友會や憲政會の候補者よ

りはより多く無産階級の利益の爲に行動するであらう。一選擧區に無産各派が入り亂れて戰ふ日には投票はブルヂョアの方にけし飛んでしまふ。空漠なる共同戰線論よりはかくの如き實際の共同行動の方がどれ丈單一政黨主義を徹底せしむるに役立つか分らないことが考へられる。

選擧費用のことは黨員の保證金提出制度等が提唱されて居るが是非さうした實例を作り進んで選擧民が選擧費用全部を負擔する樣なことに向ひたいと思ふが、第一回の總選擧位ではなかなか、さうした準備は出來ないであらうと豫測する。

四

我無産政黨の現時の惱みは前述した樣にまづ内部鬪爭の惱みに指を屈しなければならぬ。左右、中間、かうした分け方が正確であるかどうかは別として現狀は大體に於てその形を示して居る。その理論鬪爭は尙ほつゞくであらうし、又續けられなければならぬ。然し勝つものは理論ではない。實際に於て力を占めたものが勝つのである。勝つ負けるの問題でなく結局日本資本主義の發展の將來に無産政黨の全般の發展の運命が懸つて居るのである。各はつきり自己の主張を提げて爭ふべきである、但し泥試合式の醜い爭ひは避けられなければならぬ。論爭を合理化しなければならぬ。然しながらよしまた爭が一時匹夫の爭に墮してもやがて無産大衆は歸趨するところを知つて居る。爭を爭はしめよ、然らばまたそこに道が開けるであらう。

(十二月九日日本勞農黨の結黨式の直前偬促急なる中に走り書する。匆卒の際編者と讀者の寬恕を乞ふ。)

「戀愛の苦悶とその打開」

廣津和郎

現代の有らゆる苦悶とその打開策について諸家の意見を集めるといふ事で、その割當てが自分には「戀愛の苦悶とその打開

策』といふ問題となつたのだが、自分はうつかりそれを引受けてしまつて、さて後になつて考へて見て、これは恐ろしく難問であつた事に氣がついた。農村の苦悶とその打開策といふやうなものであつたら、その方面に志してゐる人には、それについて意見を述べる事はそれ程六ケ敷い事でないかも知れない。何故かといふと、農村の苦悶には、農村をして苦惱の淵に沈ませてゐるいろいろな原因がある。それを指摘する事は、それ程六ケ敷い事ではないに違ひない。そして又その打開策も、現實問題として、それが直ちに實行し得るや否やといふ事は暫く措き、一つの思想としてその打開策を述べる事は、なし得ない事でないに違ひない。その他の問題も、各々何等かの原因をたづね、又それを打開する何等かの意見を提出する事は、不可能事でないに違ひない。

ところが、戀愛の苦悶とは、果してその原因は何處にあるのであらうか。それよりも、その先に、そもそも戀愛といふものの原因は、一體何處にあるのであらうか。それの生理學的原因、又それの精神分析的原因は、いくらでも指摘する事が出來るであらう。男女青春に達して、互に索引を感ずるやうになる狀態の説明はいくらでもつくであらう。けれども、何故ひとりの男性が或特定の女性に戀愛を感ずるやうになつたのであるか、又あべこべに、何故ひとりの特定の女性が、或特定の男性に戀愛を感ずるやうになつたのであるかといふ事は、單に生理學では、又は生理學に關聯した精神分析では、とても説明出來るものではない。互に女を求め、又は男を求めてゐる事が遠因であるに違ひないが、何故彼が彼女に戀愛したか、又は何故彼女が彼に戀愛したか、その『彼』『彼女』といふ特定の人間を擇び出したかといふ近因になると、區々まちまちで、到底筆紙に盡しがたい。或者は相手の人格に惚れたと云ひ、或者は相手の笑顏にひきつけられたと云ひ、或者は相手の美貌に魅せられたと云ひ、或者は相手が自分を好きになつたから好きになつたと云ひ、或者は石に躓つまづいて轉びさうになつた時、手を握つて抱きとめてくれたから、その時から忘れられなくなつたと云ひ、或者は雨に降られて、傘を貸してくれてから、ほだされたと云ひ、或者は始めは大して好きでもなかつたのに、氣紛れに關係してから、だんだん心から惚れるに到つたと云ひ、或者は電話で聞いた聲からぽつとなつたと云ひ、等、等、等、等。その種種相は、恐らくこんな風にして並べて行くだけで、この原稿用紙百枚を費しても、盡きないかも知れない。

それは偶然であり、いつくるか解らないものであり、又來る事の待望んでゐても來ないものである代り、思ひがけない時に

來るものであり、實際目的も意企も何もなく、忽然として、いきなり我々の前に現れて來て、我々をそのとりことする。人類學的目的の上から云へば、それは生の保存のために違ひないが個人の主張から云へば、何の理窟も何もあつたものではない。

これは昔も今も變りがない。『現代苦悶』中の一つとして今更新しく生れたものでなく、その心的現象は殆んど同じである。唯その狀態が、祭の夜に見初めたといふやうな事の代りに、ダンス場の歸りに同じ自動車で歸つたといふやうな風になつただけに過ぎない。

その苦悶の種々相も亦、一口で說明出來るものではない。『お釋迦樣でも草津の湯でも、惚れた病は癒りやせぬ』と昔から云ふ通り、惚れた心が相手に通じない時の苦悶、相手にそれを通じても、相手がそれを受けてくれない時の苦悶、又一度戀愛關係に達したのに、相手の心が自分から離れて行つた時の苦悶、離れたといふ程でなくとも、自分より相手の方が、何處か冷淡だといふ時の苦悶、又精神的に愛してゐるのに、肉體的に物足りないといふ時の苦悶、或は反對に肉體的に執着を覺えながら、精神的に飽足りなさを感ずるといふ時の苦悶、相愛の間柄でありながら、結婚出來ない時の苦悶、それにもいろいろあつて、親のゆるさぬといふものもあり、經濟的に不可能だといふのもあり、その事情を探索してゐては、キリがない。等、等、等。戀愛苦悶の種々相も、一々これを數へ立ててゐたら、これ亦百枚の原稿用紙を費しても盡きるわけのものでない。

そして又自分が以上述べたやうな例は、甚だ卑近の例に過ぎると云つて、非難するものがあるかも知れない。『私達の戀愛はもつと高尚であり、優美である』といふ人々もあるかも知れない。けれども、それは理窟のつけ方で、戀愛的感情、愉悅、苦悶は、由來恐ろしく主觀的なもので、その當事者の感じてゐる心持と、それを側から見た觀察とでは、甚だしく相違する。當事者が自分等ばかりが高尚な、人格的完成をそれによつて得られるやうな戀愛をしてゐるものだと思つてゐる場合、そのやうなうまい言葉でそれを形容する術を知らない無學文盲の人々でも、感情としては、やはり同じやうなものを感じてゐるのである。極端な主觀的な氣持から、自分等がよういに感情を始めて感じたものであると自惚れてゐるのに、人類は昔からさういふ感情は度々經驗してゐ、又同じく今も亦同時に、多くの人々がそれと同じ感情を經驗しつつあるのである。――何もめづらしいものでもなければ、特に高尚といふわけのものでもない。もつとも、人事萬端、心がけ一つによつて、人はその經驗する

ものを、その人の心の糧とする事が出來るらしい。そしてさうしたものの中でも、戀愛は特に人の心のよきものを與へる重要な要素の一つではあり得る。さういふ意味で、それが高尙な感情であると云ふ事を云へない事はないかも知れない。併し戀愛至上主義的思想に共鳴を覺えない自分は、その價値を他の人生の諸事相と比較して、相對的であると思ふだけで、それに絕對的な意味を認めようとする人々には、與することが出來ない。

扨て問題の戀愛苦悶打開策であるが、この數限りない戀愛苦悶の種々相に、一々當てはまるやうな打開策など、講じ得るものではない。失戀のために苦悶してゐるものには、その戀を思ひ切れといふのも一つの打開策であらうし、もつと何處までも執着して、相手の心を動かすまであきらめるなといふのも一つの打開策だらうし、(と云つて、相手の心が動かなかつたならそれまでだが)又得戀の人々でも、それが互の人格を高めつつ幸福な生活に浸つてゐるといふやうな人々なら、無論打開策などの必要はないものだが、併し得戀の人々にも、その大部分は、それぞれ戀愛的苦悶に惱まされてゐる。といふのは、戀愛といふものは、戀愛至上主義者の云ふやうに、それによつて人格が高まつたり、人生に始めて意味が出來たりしてゐるばかりのものではない。二人の人間の心が互に生きて居り、互に自我を持つてゐるために、そこには何等かの爭鬪が伴ふ。その爭鬪にもいろいろの種類がある。が、それを一々擧げてゐる事は出來ない程、その種類の數は雜多である。そしてそこに又おのづからなる苦悶が湧く。それも昔のやうに戀愛といふものが、恥づべきものであるやうに思はれてゐた時代と違つて、今のやうに戀愛が開放的になり、文字通りに自由戀愛の時代を出現した時に當つては、その戀愛には、今までよりも一層兩性の自我の爭が必然的に附き纏つて來る。そしてそこから總括して戀愛苦悶と稱すべきいろいろの苦悶が浮んで來る。

その打開策は、その苦悶の種類によつて、一々違つて來なければならないし、又人間が戀愛のやうな自我的感情を露出する場合に生じて來る苦悶には、言葉によつて、その打開策を述べる事の出來ないやうな複雜な種類の苦悶もあるが、それを一括して、若し戀愛的苦悶を打開するには如何にすべきかといふ事を問はれれば、自分は戀愛が人生の諸事象に對して、又自己の他の生活感情に對して、相對的のものであつて、それが人生で絕對的意味を持つてゐるものだと云つたやうな觀念から、遠ざかる事だと答へようと思ふ。つまり戀愛を輕く見るといふと語弊があるが、それの人生に對する相對的位置をはつきり知る事だと思ふ。

もつとも、さう云つてしまふと、一種修身の講義見たやうなものになつてしまつて、戀愛に身も世もなく沒頭してしまふ事を、否定する事になるが、併し戀愛的苦悶から人間を解放しようとするには、人々がさういふやうに、戀愛の意味を限定するより仕方がないと自分は思ふ。

けれども、戀愛の意味を輕く考へれば、從つて戀愛的苦悶も輕くなるといふやうな云ひ方は、實際は大して有意義な云ひ方ではないかも知れない。といふのは、戀愛的苦悶が、つまり戀愛を重いものに人々に思はせてゐる重大な原因であるかも知れないからだ。人生の有らゆる事象の中で、最も重大なものであるやうに戀愛を讃美する戀愛至上主義者の心的動機には、戀愛的苦悶尊重が暗默の間に動いてゐるかも知れないからだ。人生の他の現象と比較して、相對的な位置しか認めないで、その上で始めて戀愛すると云つたやうな事は、戀愛の性質に悖るものであるかも知れないからだ。何もかも忘れて、ひたすら思ふ人の事のみ思ふといふ事は、別段責めるべき必要のないものかも知れない。それから生ずる苦痛、苦惱、苦悶は、その戀愛をして益々戀愛たらしめるところの特性の一つで、それ故に戀愛は生甲斐あるものであるのかも知れないからだ。——かう考へて見ると、戀愛苦悶の打開策なんていふものは、人情を知らない人間が、『人の氣も知らないで』企ててゐるところの、たはけ切つた代物なのかも知れない。

何でも戀愛的苦悶に堪へられなくなつた或人間が詠んだ歌に、上の句は忘れたが、下の句の『なすな戀ぞと知れよ世の人』といふのがある。『ああ、戀などするんぢやなかつた、こんなに苦しく切ないものであるなら』といふやうな事は、青年男女が溜息まじりに時々呟く言葉である。けれども、それは『ああ、生れるんぢやなかつた、人生がこんなに苦しく切ないものであるなら』と同樣、如何ともする事の出來ないものであるのかも知れない。共にさう云ひながら、戀の苦しさ、人生の苦しさに、一面魅力を感じつつ生きてゐるのかも知れない。——戀の苦悶を訴へる人に、戀を輕く見よといふのは、人生の苦しさを訴へる人に、人生を輕視せよといふのと一般かも知れない

扨て、結論として、戀愛苦悶の打開などといふ事は、戀愛當事者の勝手に委せて置くのが、一番好い事なのかも知れない。學ぶ能力のある人は「苦悶」から彼自身勝手に彼自身のものを學ぶだらう。（終）

現代の苦悶を漫畫にして

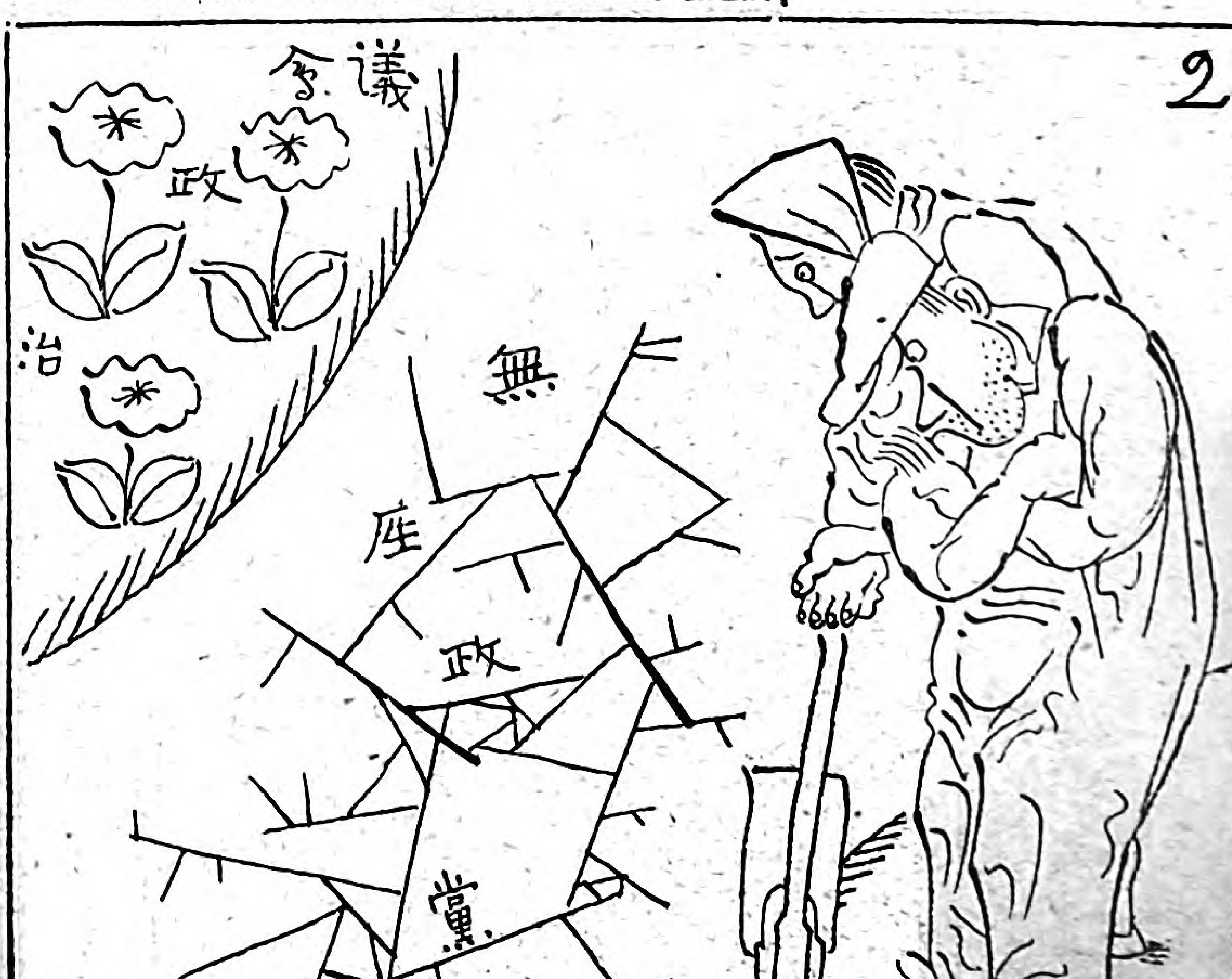
岡本一平

一 現代生活の倫理的苦悶



立志成功を目標にする自助論(セルフヘルプ)の舶來個人主義倫理のゴム靴も穿き古るした。獨立自尊の長靴も同じく。孔子樣の消極的修身の長袍を復活してみたが不活潑だし武士道のチョン髷道德は鬘だから脫け易い。といふて社會意識の上に立つ新道德のルバシカはまだ〳〵今のところ好みには合はない。現代人の倫理の裝ひはて難しい。

二、無產階級の政治參政問題の苦悶

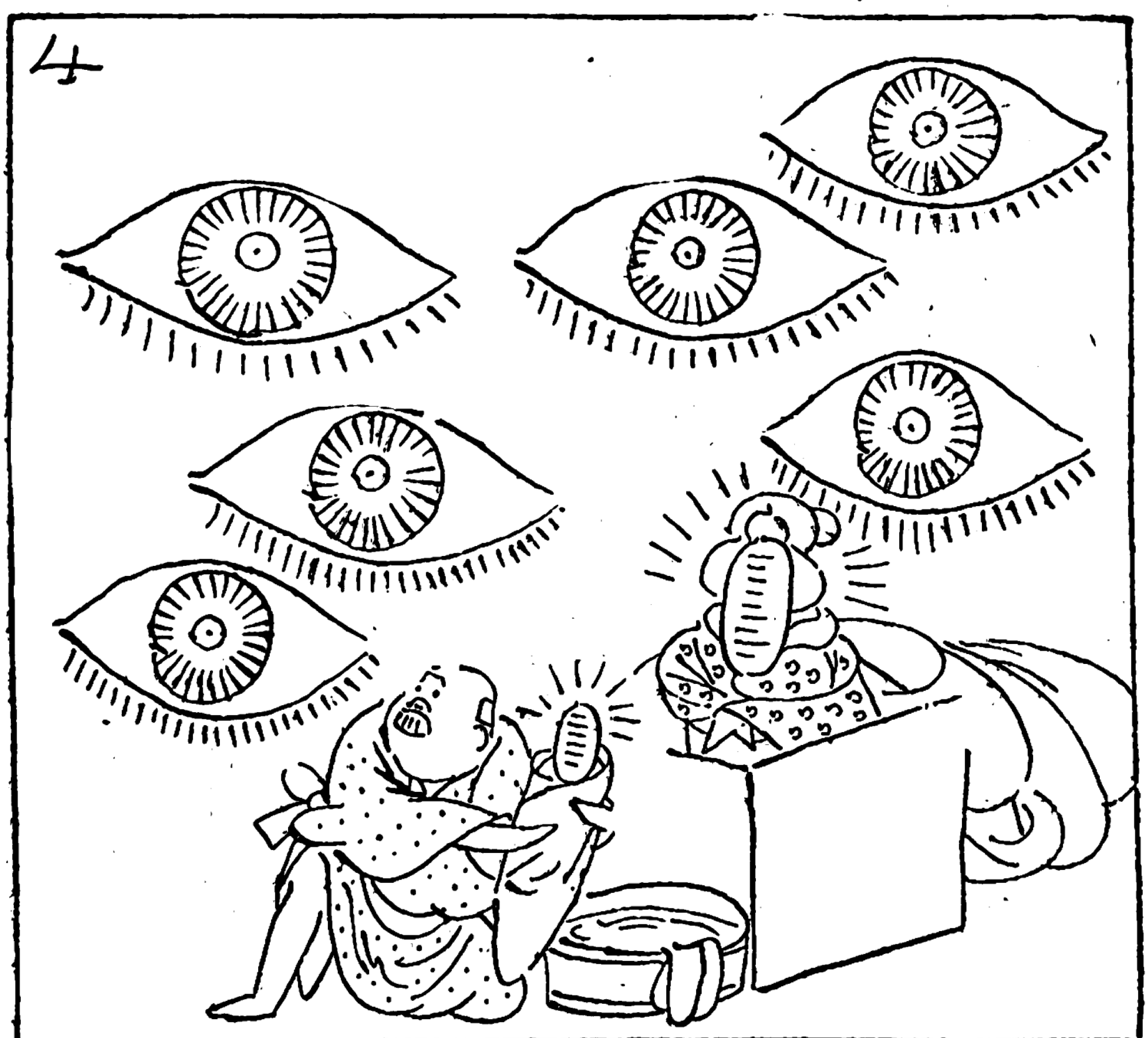


向ふ岸の花園へ涉るかけ橋の川の結氷も結んで旬日ならぬに割れてヒヾが入る。小さくより更に小さく割れて行く。『どこのところへ足踏み入れたらよからう?』無產者當惑。



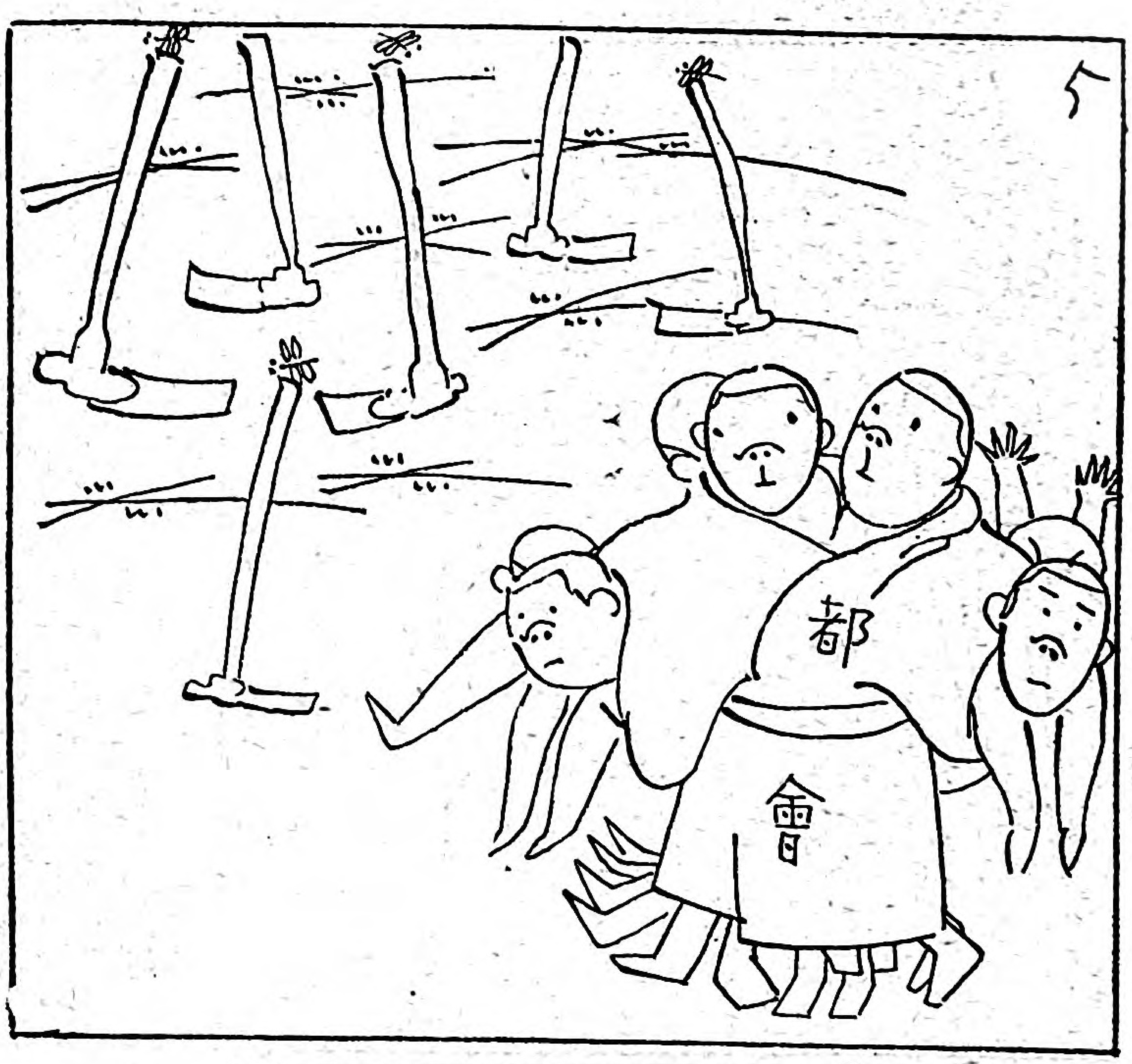
三、中産階級の苦悶

物價騰貴のさす浪、評價低減のひく浪はブルジョアの大岩を小ゆるぎもさせず、寧ろ一番中産階級の資産の積煉瓦を突き崩す。ブルジョアの岩に飛び移るのが人生の最大目的である中産階級人種、容易く飛移れぬ間にこの始末に進退將に谷まりつゝある。



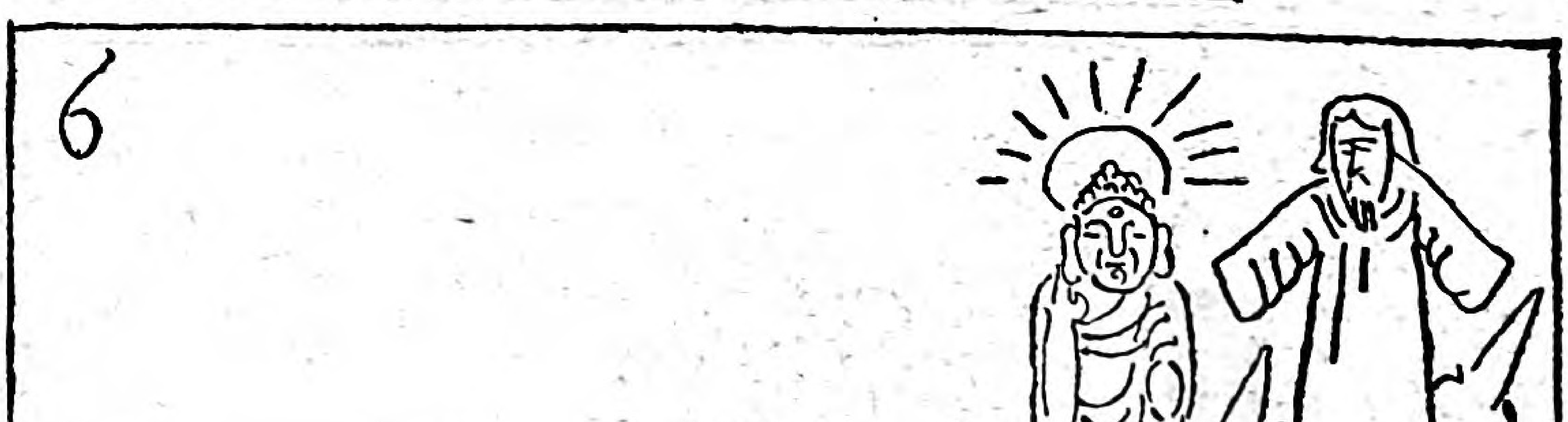
四、資本家の苦悶

資本家曰く『この頃は世の中がうるさくなつた。お金さんに子を産ませると幾つもの眼がじろ〳〵見張つてるやうで氣がつまる。俺れの持ものに俺が子を産ませる、だからよかりさうなものだがやつぱり氣が引ける。』



五、都會と田舍の苦悶

田舍には鍬ばかり殘つてトンボのとまり台になつてる。都會には入り切らぬ程人間が集まつて來て互に不自由や難義をして居る。田舍の都會病は衰弱症を來たすし、都會の都會病は脂肪過多症に陥らす。

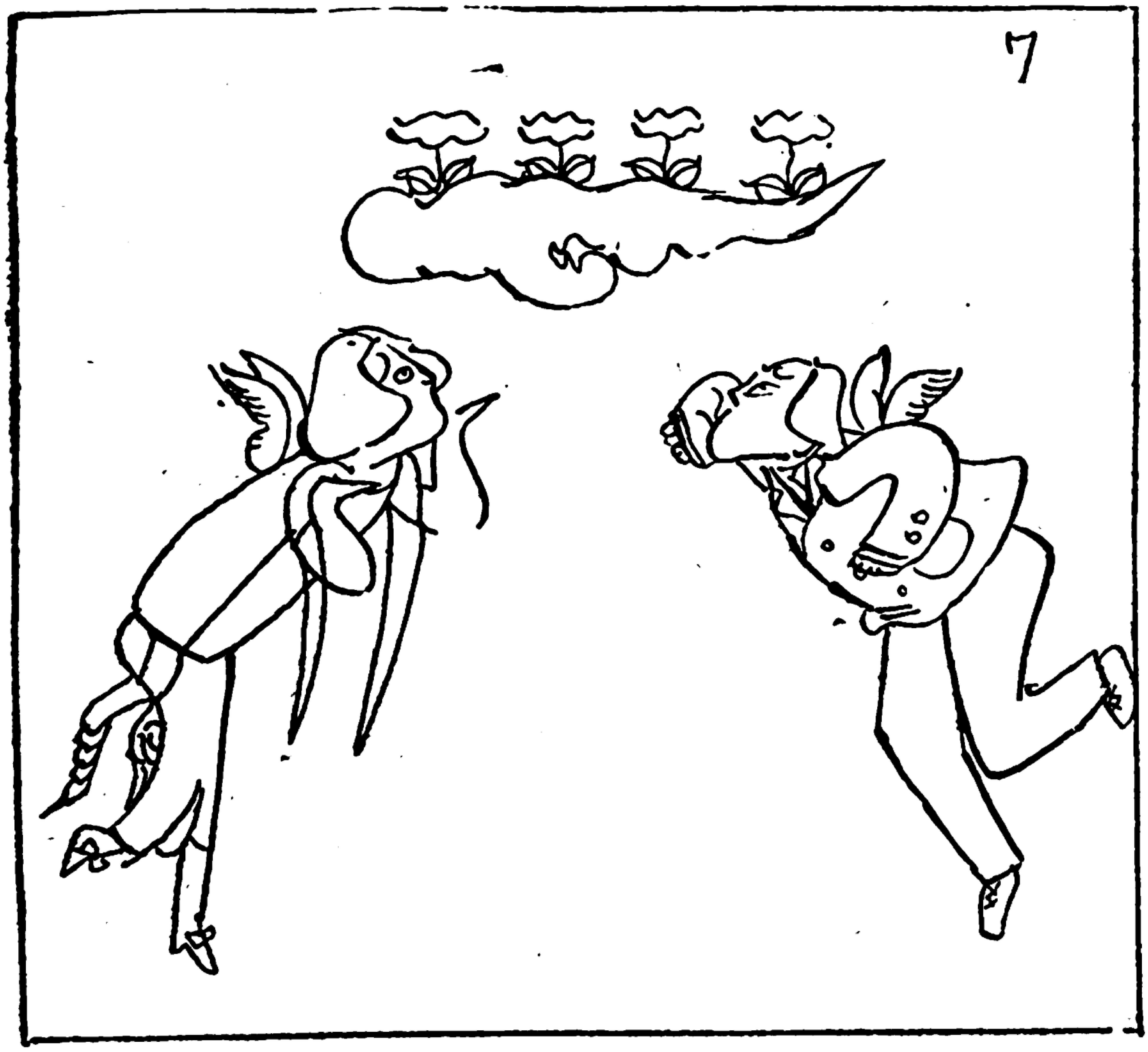


六、宗敎家の苦悶

パンに蟻の如く痩せた人間が蛸りつく社會問題。人はパンのみにて生くるものに非ずと訓へる神佛。この兩者の矛盾をどう結び付けたものか、宗敎家は紐をもつてまご〳〵して居る。まご〳〵してゐるうち宗敎家彼自身が社會問題の厄介の中の一人となる。

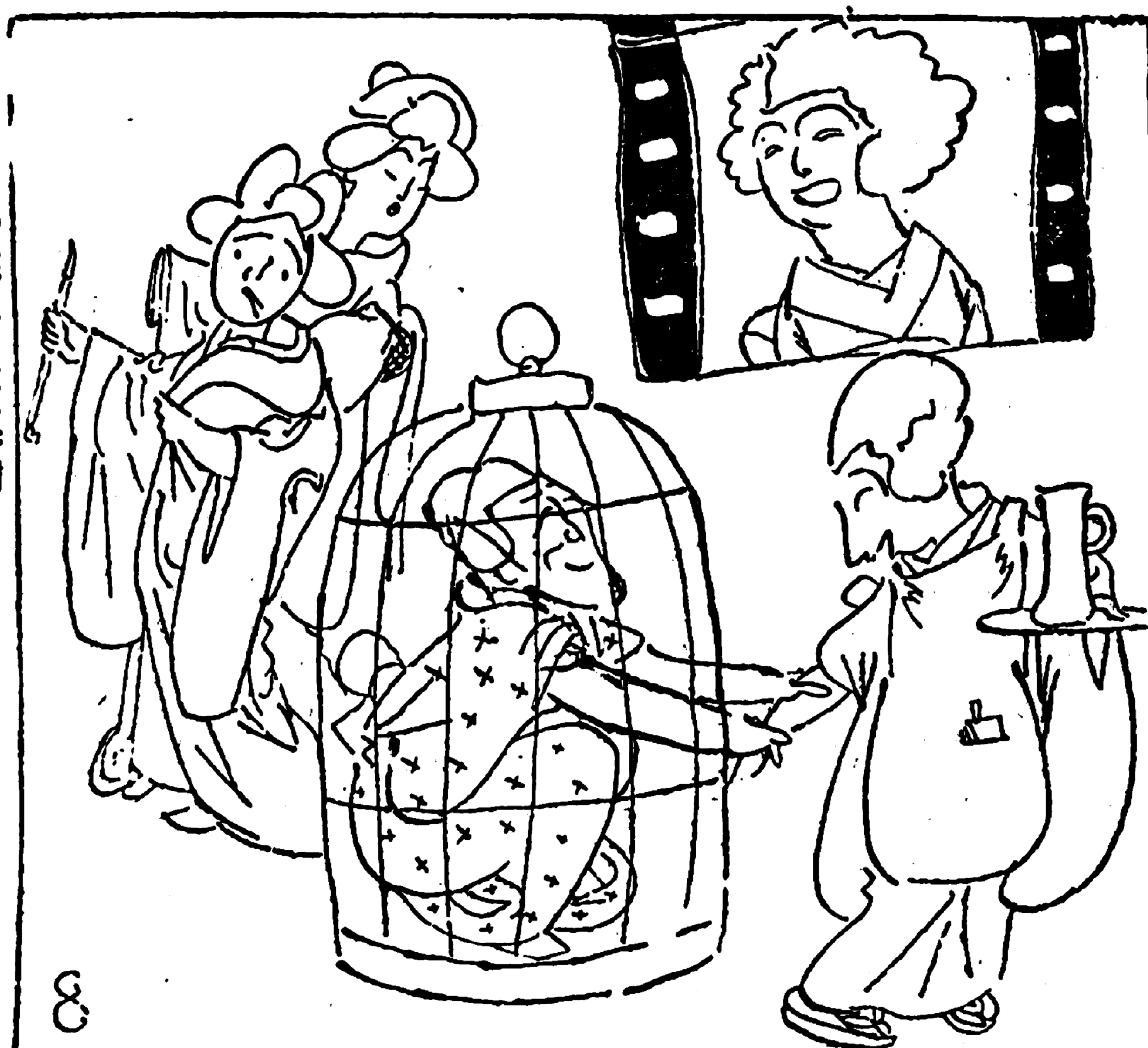
七、近代戀愛の苦悶

現實で睨み合つては戀は成立しない。夢の世界に飛上つて男女は戀てふまどはかしに醉へる。近代人はリアリズムによつて夢の世界へ飛上る。羽翼を段々小さく縮められて來て居る。彼等は現實で夢みやうと無理な羽翼をバタバタさしてる。



八、現代青年の性の苦悶

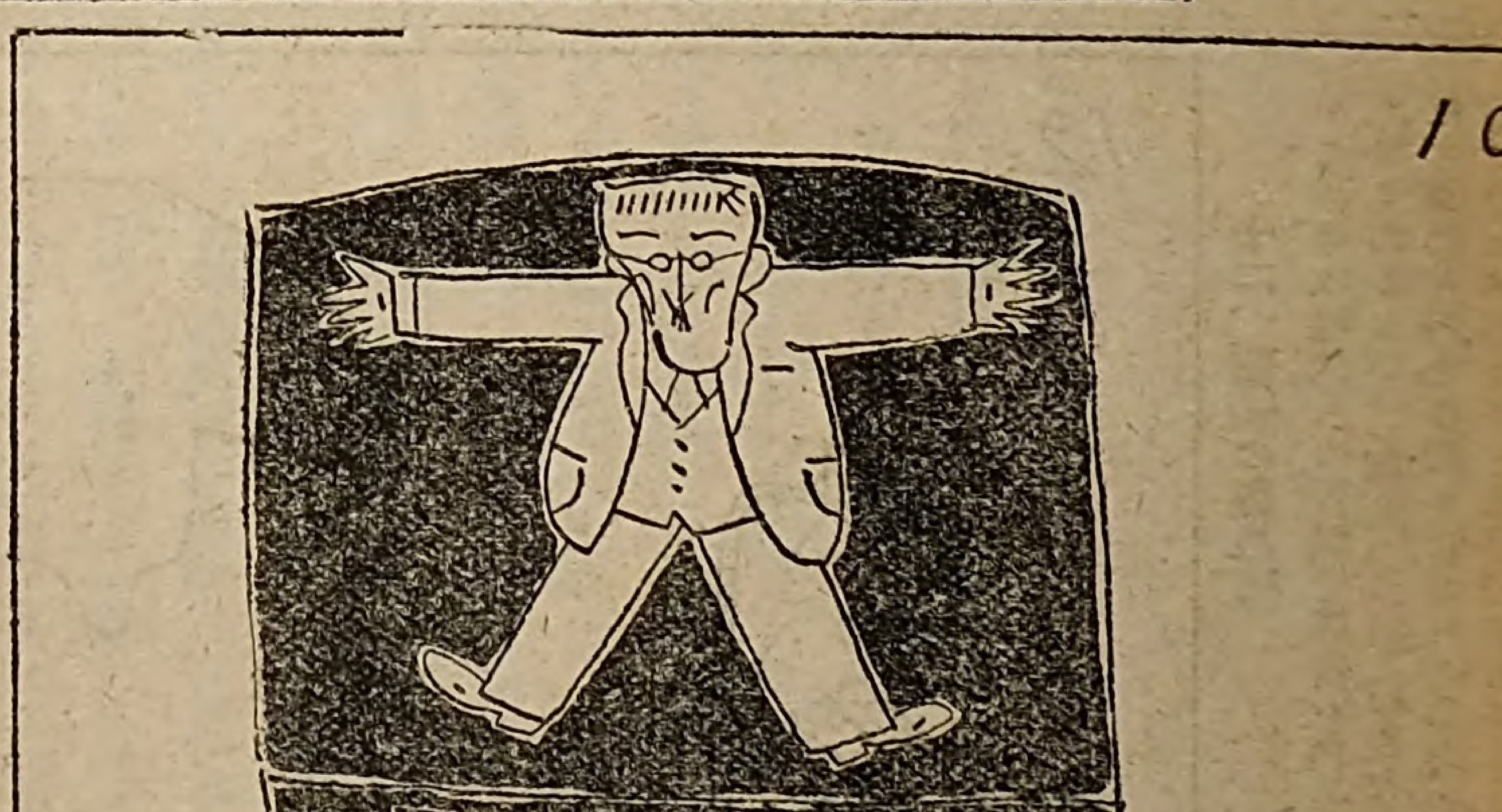
いくらなんぼなんでももうお女郎買ひやおいらんは名からして青年に性の滿足を與へない。藝者はブルジョアの獨占玩具。映畫女優はフキルムの上だけ。殘された唯一の方法はカフエの女給の手を握る事だ。「籠の鳥よ」といふ流行唄があるがあれは現代青年の性の苦悶を唄つたものでもある。





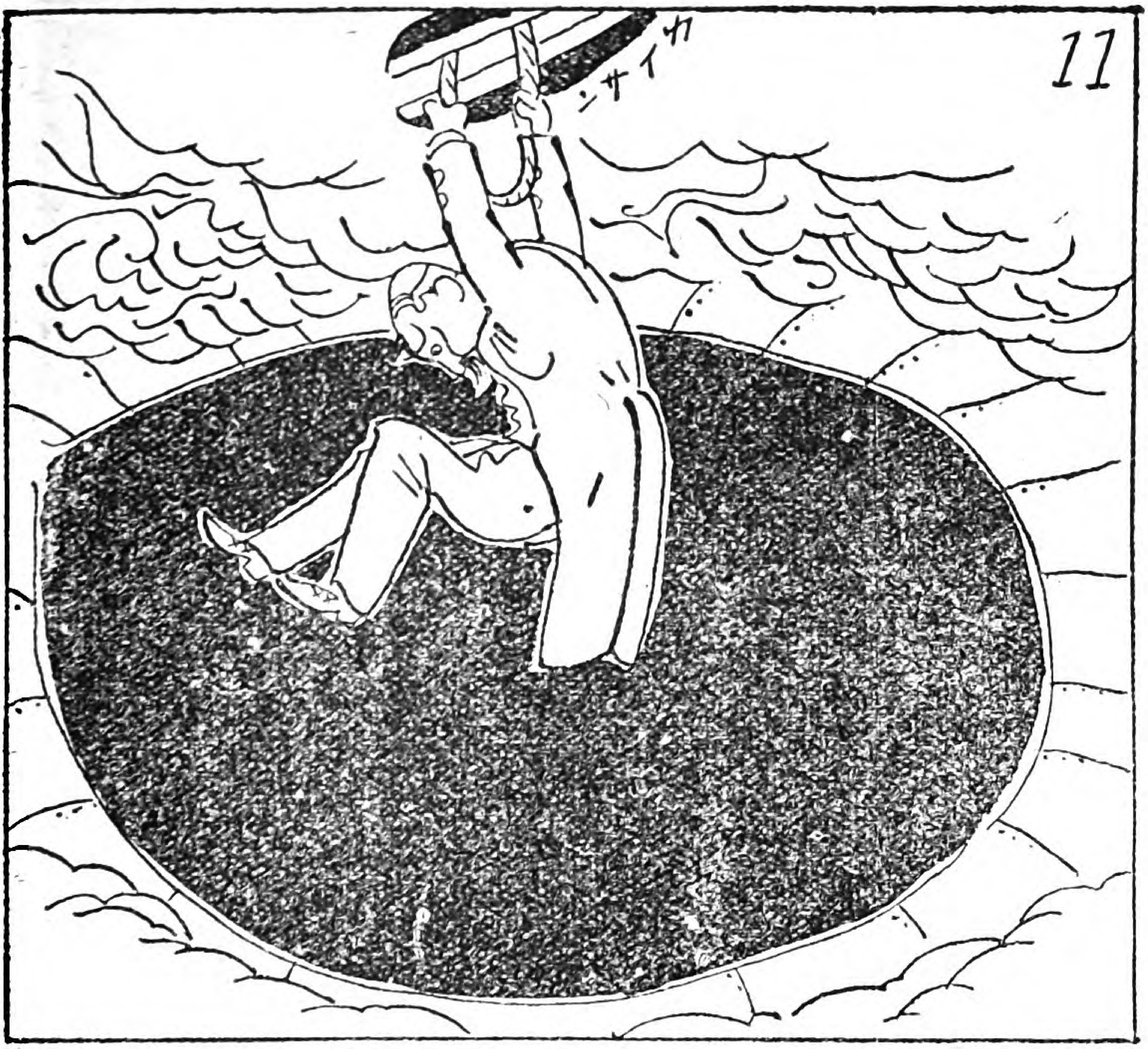
九、現代人經濟生活の苦悶

需要品は生産者より小賣商人に移るまでの間に數々の手を經て數倍の高價にされてる。衣食住は和漢洋三式の二重生活三重生活だ。その上習慣は盆暮の贈答の如き無駄な金のかゝるものだけを殘してる、やり切れない。



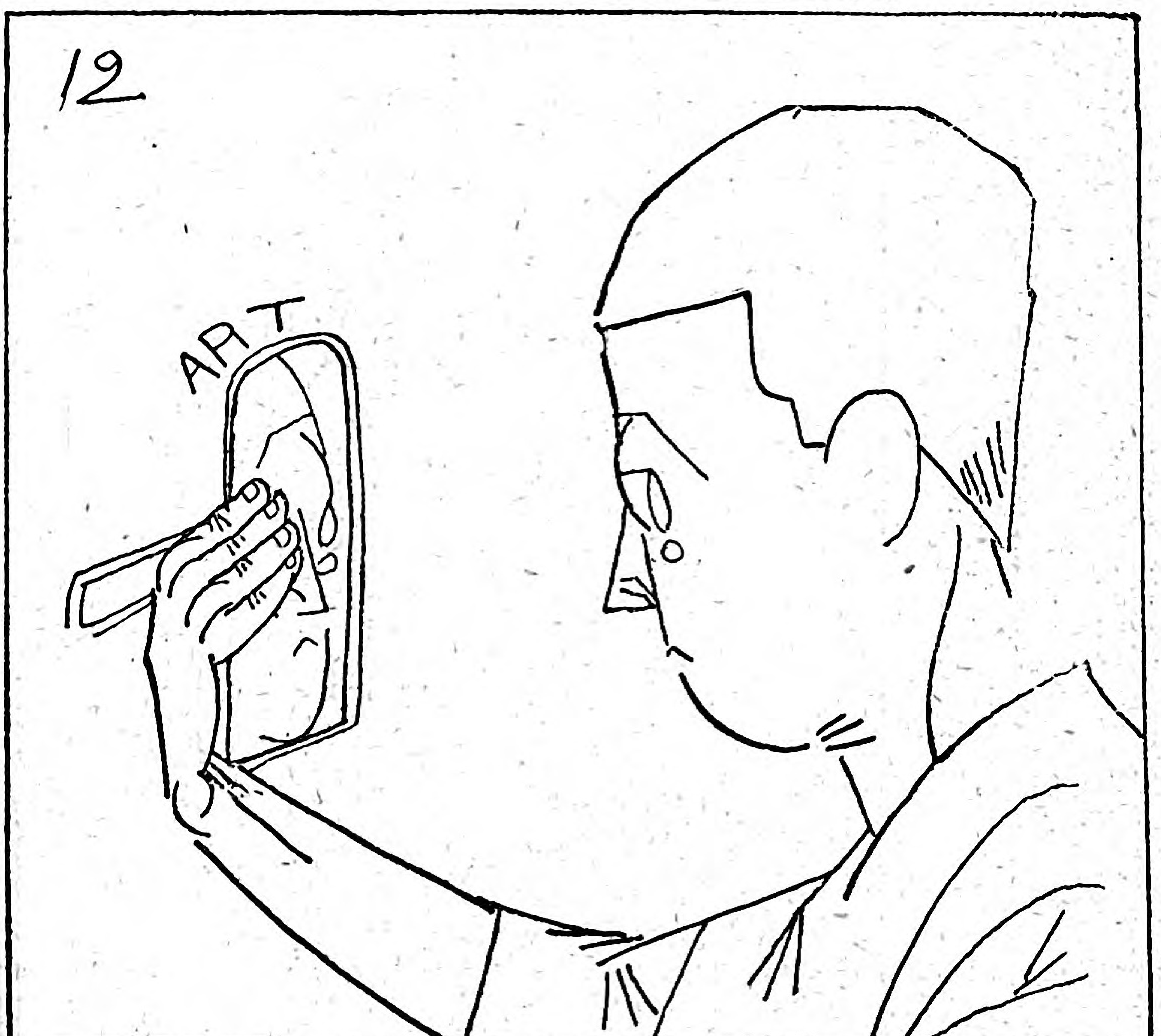
十、教育家の苦悶

教育家といへば年中黑板に釘付になつて居て飯を食はんでもいい剝製の妻や子供を持つてると世間では思つてるらしい。チョークを食つて生きてると思つてるらしい。『教育家も生きた人間だぞ』教育家の苦悶を表すにはこの一言の叫びで澤山だ。



十一、政治家の苦悶

普選は謎の沼だ。これへ一ぺん陥ちて二度代議士の岸へ匍ひ上れるかあやしい。たとへ匍ひ上れたにしろその先にどんな模様の政治にぶつかるか誰も知らない。



十二、藝術の慰め

これ等の現代人の苦悶を確信を持つて除き得ると斷言する人はあまりあるまい。藝術のみが慰めを與へる。藝術は同情深い鏡だ。彼は苦悶を苦悶させながらに表現し悩みを忘れさせる。藝術の鏡はまた何物よりも敏感である。もし苦悶の打開の方法が發見されるとしたならその先を逸早く映發するものは亦この鏡だらう。

二た子

駒井卓

一

人間は一度に一人づゝしか子を産まない。

世の中にこれ程當り前の事はないが、此分り切つた當り前の事が世のあらゆる人間に關はる現在の事物現象の基をなしてをるものである。これが若しかうでなかつたら、假に一度に二人づゝでも子が産れる者としたら、世の中の事は何から何迄根柢からやり直しである。恐らく今日吾等の周圍に見る制度でも組織でも一として今の如くではないだらう。然し幸か不幸か知らぬが人間の大多數は實際一度に一人づゝしか子を生まない。けれども之には例外がある。即ち少數の人は二た子、甚しいのは三つ子、四つ子等をも生み得る者である。

誰でも其知つてをる家族の中に大抵一組やそこらの二た子の生れたものがあると思ふが、統計上の二た子の數は、人種によつて多少の差がある。即ちドイツ、フランス、アメリカ等では大抵九十乃至百回の出産に就て一回の割で二た子が生れる勘定であると云ふ。處がユダヤ人は此倍位で四十回に一回の割に當る。

日本人ではどうかと云へば、今迄あまり確かな統計が無かつたが、此頃發行された統計局の人口動態統計調査大正十三年度分に載せられた材料に就て、東京大學心理學教室の小保内虎夫氏の計算されたものによると、三百三十五回の産に就て二た子の出産が一回の割になるさうである。して見ると、前に述べたドイツ其他の國々に比べて三分の一以下、ユダヤ人等に比べると六分の一に過ぎない事になる。これは著しい違ひであつて、何かそこに相當の理由が無ければならぬ。果してこれは單に日本人の人種的の特徴であるか、又小保内氏の想像のやうに、日本で昔二た子を殺す習慣があつたので、二た子を生む遺傳的の素質を持つた人がだん／＼少くなり、其結果實際日本人には二た子の生れる事が少なくなつたものであらうか、或は二た子が生れると、一方の方は別人の子として屆出ると云ふやうな關係

でこんな事になつたのではないかとも思はれるが、とにかく日本人に統計上これ程二た子が少いと云ふ事實は注意すべき事である。

三つ子になると、二つ子よりはずつと少くなる。三つ子が産れると新聞に出る程である。西洋の統計では凡て八千乃至一萬の産に就て唯の一度と云ふ事になつて居る。殊に三つ子が三人とも無事に成人すると云ふ事はよほど珍らしい事である。私は曾て紐育で或見せ物に二十一歳とかになる娘の三つ子と云ふものを見たが、これなどはめつたにないもので、又珍しいから見せ物にもなるのである。

面白い事には二た子の生れる度數と三つ子の生れる度數との間には一定の數的の關係がある。即ち二た子の生れる度數を全體の産の數の$1/n$とすると、三つ子のは$1/n^2$となる。前に云つた九十回の産の中に一回生れるとすると、三つ子は九十の自乘で八千回程に一度と云ふ事になるのである。

四つ子も凡て此筆法でゆくのであつて、即ち$1/n^3$になる。前の例で云ふと、九十の三乘は七十二萬九千になるが、ドイツあたりの統計では多少これより割が多くなつて、四十萬の産に一度位の割に四つ子が生れる事になつてゐるやうである。

それでは一體人間は一番多くてどれ程迄の子を一度に生み得るかと云ふと、五つ子六つ子はどちらもよほど稀ではあるが、それぞれ信ずべき記錄が日本にも幾らもある。その上になると、あまり信用は置けぬが、全くない事でもないらしい。先づ七つ子は千六百年頃にプロシヤで一度生れたが、これは流産で母子共死んでしまつたので、それを悲しんでこしらへた記念碑のやうな者が後日になつて見出されたので此事實が分つたと云ふ。それから一八七二年ボストンで發行された醫師雜誌の中に八つ子の生れ、しかも皆丈夫であつたと云ふ記錄があるさうである。尤も其八人が皆成人して犬某と名乘り仇討でもやる程になつたかどうかは書いてない。とにかく此邊の處が一回の産兒の數の世界記錄であるやうである。

二

二た子三つ子の生れる性質は遺傳するもので、親も二た子で子も二た子だとか、親の兄弟に二た子があると云ふやうな事は決して珍らしい者ではない。

二た子三つ子等の生れる系統で今迄報告された中に最も著しいのは米國オハヨー州クリーヴランドに住むC夫人と名づくる人の系統である。此C夫人は其母も其又母も産をする度に必ず二た子三つ子四つ子の外は生まなかつたと云ふ驚くべき婦人等

であつたが、當人のC夫人は前後三度結婚し、其第二の夫に一組の男の二た子を設け、此夫に死別したので、再婚し先づ男女よりなる二た子を擧げたが、次で男一人女二人の三つ子を生み、此三人が腸患の爲めに死ぬと間もなく男女の二た子、引き續いて又同じく男女の二た子を得た。其後C夫人は三度結婚し、此夫によつて先づ男の二た子を生み續いて一人の男と二人の女よりなる三つ子を孕んだが、男兒だけ健全に生れ女兒二人は死産した。之より後一年して三人の女兒を流産し、二年して男女の二た子を生み、其翌年男女各二人の四つ子を流産した。處が此超人的なる婦人は更に二年の後此度は男女の二た兒、其翌年男女二人の三つ子を得た。それより後又々女の四つ子、男の四つ子及女の三つ子を流産した。かくして此婦人は流産を合せて總計四十一人の母である譯だが、其中でも第三の夫によつて二十年間の間に三十人を孕み、一度に凡そ三人づゝを生んだ事になる。又此女の第二の夫によつて生んだ長女は人に嫁して一組の二た子を生んだと云ふから、此系統は少くも四代に亙つて二た子三つ子を生んだ世にも稀な多産の系統である。

これは殆んど吾等の想像を超える程の著しい例であるが、此材料は米國コールドスプリング・ハーボアの優生學記録所で調べた材料であり、比較的新しいものであるから、他よりも信用してよいものであらうと思ふ。彼國の移民法に肩を持つ連中等がよくカリフォルニアの日本人の百姓某の妻君が十年間に八人とか子を生んだのがあるとか云つて、今にカリフォルニア州が日本人の赤ん坊で埋まるやうな事を云ふ事があるが、アメリカにもさすがは何事も世界一の國だけあつて、此C夫人のやうな剛の者がある。

今一つベルゲルと云ふ人の記した例に或男が二度結婚して第一の妻より四つ子一組二た子十組を得、第二の妻より三つ子三組二た子十組を得、總計六十八人の子女の父となつたと云ふ。これも亦前のC夫人と何れとも優劣を定め難い著しい例である。

三

以下三つ子四つ子等の事は措くとして、話を專ら二た子に限るとする。先づ第一に述べておきたい事は今一般に信ぜられてゐる處によれば、二た子に全く違つた二種類あると云ふ事である。其一種類は卵巣から二つの卵が同時に落ち、それ等が別々の精子によりて受精せられ、同時に子宮の中で發育した結果出來上つた二人の子である。これは唯時を同じくして發育し又出產すると云ふだけで、其由來から云へば、全然別の人である。

若しこれが同時に發育すると云ふ事がなかつたら、たゞ兄弟姉妹となるに過ぎなかつた者である。此種の二た子は顏付體格性質等總て兄弟姉妹以上に似寄つて居ると云ふ事がない。又時として一方は男で一方が女である。それで此方の二た子は之を同胞二た子と名づける。例へば創世記にあるエサウとヤコブの二た子の中で、エサウは體中毛もくぢやらで毛皮のやうだつたが、ヤコブはさうでなかつたので、母が盲の父を欺いてエサウだと思はせるのに、ヤコブに山羊の子の皮で手と頸と滑かなる處を掩はなければならなかつたとあるのは此同胞二た子の方であつたのだらう。



（同型二た子の一）

今一つの種類の二た子は之と違つて、發育の當初は唯一つの卵である。それが一つの精子によつて受精せられ、發育する中に、どこかでそれが二つの胚に分れたものである。されば本來一人の子となりて生れるべき筈のものが、云はゞ誤つて二人となつたものである。されば此方は顏附體格性質等所謂瓜二つで、親戚や友人でも見違へる程似てをる事が多い。かやうな二た子を同型二た子といふ。沙翁劇の中の喜劇「間違ひつゞき」のアンチフオラスとドロミオとの二組の二た子は此種類の二た子であらう。

一體本來一人となるべき者が發育の途中で二人になるなど云ふのは一寸あり得べからざる事のやうであるが、然しこれには色々證據があつて今では之を疑ふ人は殆んどない。即ち先づ此種の二た子は胎盤も又羊膜も共有の事が多い。時として臍の尾も途中迄一緒の事がある。それから現に獸類の中で南米から北米の熱帶地方等に居る犰狳と云ふ奇妙な動物の類には、定つて最初一つの卵から起り、途中で分れて、種類によつて四つ或は八つ位の子即ち四つ子又は八つ子が出來る。これから推すと、人間にも時として之と同じやうな事がありさうに考へられるの

（同型二た子の二）



である。

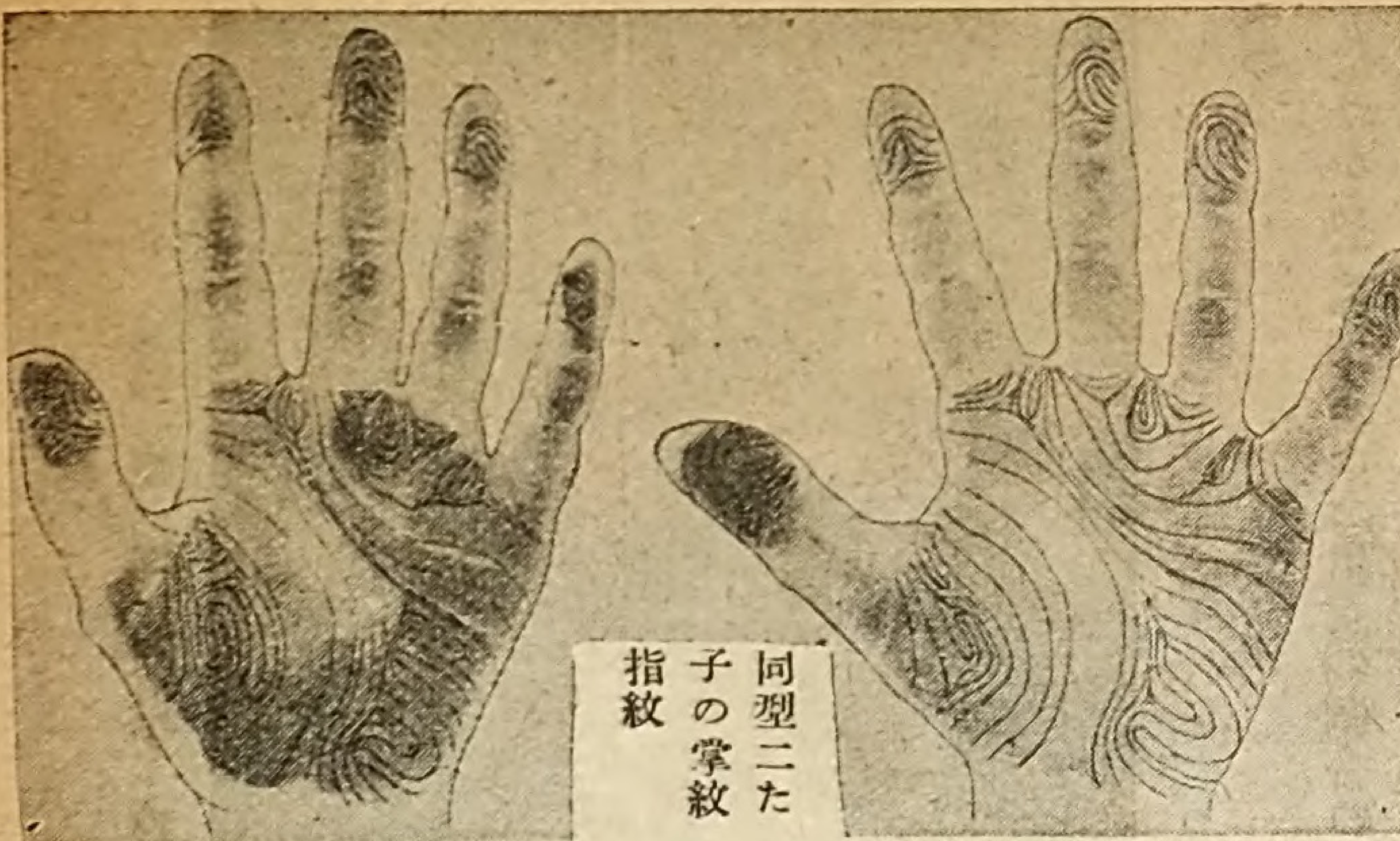
それから二た子の中の男女の割合の統計を取つて見ると、之も人種によつて多少の差はあるが、大略を云ふと、男のみの二た子、女のみの二た子、一人が男で一人が女の二た子は其數が凡そ同じで一一一の割合になる。そこで若し二た子が總て初め別々の二つの卵から起るものとすると、生れる一人の子が男であるチャンスと女であるチャンスとは半々であるから、同時に生れる二た子が二人とも男であるチャンスは半分の又半分即ち四分の一である。又二人とも女であるチャンスも同じやうに四分の一である。そして殘りの二分の一は一方が男で一方が女である場合よりなることになる。それであるから此場合には男のみの二た子、女のみの二た子各一、一人が男で一人が女の二た子二の割になるべき筈である。處が實際の統計によれば前云つた通り之等が一一一の割合になる。即ちこゝに男二人又は女二人の二た子の數がもつと多くならなければならぬ理由のある事が示されて居るのである。言を換へて云へば同型二た子と云ふやうなものがあるべき事が暗示されてをる次第である。



（同型二た子の三）

四

二た子の生物學上最も興味ある問題である事を早く注意した人に名高いフランシス・ゴルトンがある。彼の一八八三年に公にした著「人間の能力の研究」の中には二た子の事が極めて面白く論じてある。其論は今日でもなほ傾聽すべき者であつて、大體に於て決して誤つて居ないのみならず、其後の研究も此長からぬ一章の中に論ぜられてをる處に附加へるべき事を餘り見出して居ないやうな有樣である。



同型二た子の掌紋指紋

　ゴルトンは二た子に右の同胞同型の二種類のある事を知り、其集の得た材料の中から此二つを區別し、各の例について色色の面白い實話を附加へて紹介してをる。例へば彼の集めた中から得た十三組の同胞二た子と思はれる者の中にかやうなのがあつた。

　其或組に就て子等の親の云つた處によれば「二人は生れてから今日まで全く同じにして育てられ、二人とも病氣もせず丈夫でありますが、他の點では全然違つて、體も心も氣立ても、關係のないたゞの二人の子供のやうです」

　又別の一組で其一人は早く死し、一人は殘つてケムブリッヂ大學を首席で卒業したが、此人は自分たち二人に就て次のやうな事を話した。



(同型二た子の蹠紋)

「吾々は技能から云つても性質から云つても、彼此相補ふと云つたやうな二人であつた。彼は瞑想を好み、詩想文藻の豐かな方で、其方面に大に其技倆を表はしたが、私は又實際的な方で、計數語學を得意とした。二人をつき交ぜたら多分丁度いゝ位の人間が出來たであらう」。

かやうに違つた二た子は決して珍らしいものでない。二た子と云ふと、よく似たものと云ふ先入主の考へがどこにもあるが、決してそれに限つたものでない。かやうな二た子に就て色色體格をしらべたり心理學の實驗をしたりしたのが幾つもあるが、平均した處ではたゞの兄弟姉妹以上に似て居ると云ふ點は殆んど見られない者である。

五

かやうな似て居ない二た子即ち同胞二た子にも決して面白くない次第ではないが、元々兄弟姉妹と殆んど變らぬものであるから、自ら生物學上の興味も亦兄弟姉妹の關係以上にあまり出る譯にはゆかない。たゞ此等と違ふところは初め母の胎に宿つたときから生れ落ち、それから成長する迄殆んど同じ環境の下に成育すると云ふ點だけである。

之に反して同型二た子の方は其出來方が極めて面白く、動物界にも餘り見られぬ現象であると共に、其成長の狀態、出來上つた結果等色々の面白い生物學上の問題を提供するのである。然し私は今直にさう云ふ生物學の話をする事をやめて、先づ此種の二た子に關係した色々の世間話から始めたいと思ふ。

二た子があまり似てをるので色々の喜劇の種を作つた事は昔からどこの國もたくさんある。學校等でもそれが屢々起る。私は元ある中學校を教へて居たが、そこの或級に二た子があつた。級主任の先生は氣を利かしてそれを別の組に入れておいたが、新任の先生が來ると一人としてそれが間違の種にならぬ事はない。それがどの先生に就ても大抵同じプロセスを取るのである。即ち初めの間は其二人が二人であると云ふ事に氣がつかんで一人の人間だと思つてをる。暫くして生徒たちの顏に少しづゝ馴染ができると、別の組にいつて見ても、同じやうなところに前の組で見た筈の子が又坐つてをるから、何だか變な氣持がして甚しい場合には自分の頭を疑つて見るが、きまりが惡くて同僚に訊して見る程の自信もない。それで獨で變だ變だと思ひつゞけてをるうちに、或朝などその二人が連れ立つて來るのにふと出會はすに及んで、愕然として一切の謎が解けたやうな氣持になるが、それでも一人一人離して間違はない先生は先づ無しに二人の卒業迄濟む。と先づかやうな風であつた。

、それだから學校などで二た子の一人が惡戲をすると大騷ぎである。先生はどちらを叱つてよいのやら分らない。どうかすると、どちらを叱つたかも分らなくなつて、何もしない同じ人間を二度叱る等云ふ事もあり勝ちである。或二た子娘は踊りの場で知らん顏をして相手を取換へたが、相手の男は一向氣遣かずに踊つて居た。又二人で音樂を習つてゐた時には、一人が休みたくなると、他の一人が二度いつて課業を受けてやつた。先生はそれでも一向知らずに教へてやつた。

良く似た二た子のラヴァフェアにはきつと「間違ひつゞき」以上の滑稽が幾らもあるだらうと思ふ。そゝつかしい人はたゞの姉と妹とを取り違へる事もある位だから。現に私の知人にもそんなのがある。然し姉と妹ではなくて二た子なら、實際問題として、取違へた處で大した損得はないかもしれない。森鷗外博士は與謝野夫人に女の二た子が生れた時

「婿來ませ一人は山の八峰越え
一人は河の七瀨渡りて」

と云ふ祝歌を贈られたさうであるが、八峰七瀨の二人の娘さんたちが同型の二た子であるから、どちらの婿にも大した損得はなささうである。

或る話に盲の娘が二た子の一人に戀するのがある。それが自分の手を戀人でない方の男の手に觸れる事があつても何ともないが、戀人の手に觸れると、一種ピクリと電氣に觸つたやうになる。それで二た子を見分ける事が出來たとあるが、それはあまり神祕過ぎて僞らしい。

さすがに母親だけは二た子の子供を取違へる事はあまりないやうである。けれどもそれが赤ん坊の時ででもあつたら、間違ふ事もありさうでもある。尤も間違つた處で間違つたと云ふ事も中々分らぬだらう。少し大きくなつてから、裸にして湯に入れてやつたりする。時には、同じ子を二度入れたりする事があると云ふ。成人してからでも一方が暫く外國にいつて居たりすると、親でも取違へる事があるらしい。

ゴルトンは犬に同型二た子を嗅ぎ分ける力があるかどうかを試して見たら面白からうと云つてゐるが、誰もやつてみたと云ふ事を聞いた事がない。

二三年前紐育のある劇場で「青い着物の二人娘」と云ふ音樂劇を出した。其主役を勤めたフェアバンクスといふ二た子娘の名聲のために、興行主が或日紐育中の二た子を招待した。その招待に應じて集つた二た子は九十三組許であつたが、劇の果てた後に彼等を集めて撮つた寫眞が或雜誌に出て居る。又此時出席した二た子の一人が其雜誌に當時の光景を描いてをるが

「觀覽席の至る處に全く同じ顔が二つづゝ並んで、同じ樣に動いたり笑つたりする有樣、笑へば必ず同じ聲で笑ひ、一つ感情の表はるゝ毎に、同じ顔に同じ顔が動き同じ皺が造られるのは實に何とも形容し難い異樣の光景であつた」とある。

六

良く似た二た子はたゞ一見した處が似て居ると云ふばかりでなく、精密に身體檢査をして見ても殆んど同じてある。例へば前記の小保內氏が東京府下の小學校生徒の中から探した六十八組の同型二た子と思はれる子等に就て述べて居られる處を見ると、身長等は平均して百分の二しか違つて居ない。個々の一組に就て云へば身長は一分も違はず、體重は數十匁の差もないと云ふやうなのが決して珍らしくない。又尋常一年生から高等一年生迄の間、身長の二分以上違つた事が全くなかつたと云ふ二た子もある。其他頭の長さや幅、髮の毛、眼の色、爪の形、握力の強さ、血液の性質、又は腕骨一つ一つの形迄色々と細かい計測をしたものが多くあるが、愈々細かに調べれば調べる程、二人の良く似てをるのに驚くばかりと云ふやうな事が幾らもある。

西洋の二た子でも、成人する迄、體重から云つて一ポンドと違つた事はなかつた。又いつでも衣服を取換へて着でもキチンと良く合つた。二人の近眼鏡を取換へてもいつも差支がなかつたと云ふやうなものがある。右の紐育の劇場に集つた二た子の中に居た七十八歲の百姓の二た子にも二人とも左の眼の上に生れた時から小さなほくろがあつた。そして左の掌の同じ處に同じやうな妙な皺がある。又或二た子娘は二人とも上の二番目の前齒が同じやうに歪んで居る。

長崎醫科大學の國友博士は同型二た子の內臟の比較解剖をせられたが、二人の內臟の形、大さの極めて良く似てをる事を確められた。又西洋に死產の同型二た子と思はれる者の腦を解剖して比べた報告もある。又同型二た子の腕を解剖して血管の分れ方などを比べたのもあるが、要するに同型の同型たる事が愈愈確かに證據立てられるのである。

七

然し同型二た子の類似の程度を計るに最も良い標準と云ふべきは其指及掌跡の條の模樣である。誰も知つてをるやうに、人間を見別けるには指紋が一番正確なものとされて居る。實に吾吾人間の十指の頭にある異樣の細かい條線は、樹登りの猿時代からあるもので、枝を握んだときに滑らぬためにあるものだと

いふ說もある者であるが、そんなことを拔きにしても、これこそ、不可思議千萬の者である。之は人毎に必ず違ふもので決して同じと云ふ事はない。又年齡によつて變化すると云ふ事がない。元より體の成長に比例して全體として擴大されてはをるが、それはちやうど同じ寫眞を引伸ばしたやうに、線の排列離合に寸分の違ひもない。誠にこれは神が其造つた人間一人一人に押した番號入りの烙印のやうなものである。それから又指頭で物に觸ると、指紋がそれに殘り易い。それに其細かな條は之を算へて分類して置くのに極めて便利である。そんな事で指紋は罪人の探査には非常に大切な手がかりになるので、日本の警察や刑務所にも犯罪者の指紋は皆取つて祕藏してある次第である。而も指紋は罪人を見附けたりする時の便宜のみに、手形の僞造を防ぐとか、證人の眞僞を定めるとか云ふやうな際にも使へば使へるもので、總て吾々の使ふ印の代りとして無上の便利正確のものである。この事は指紋ばかりではなく、掌の上の紋、蹠の紋に於ても同樣である。

偖此等指紋掌紋蹠紋はかく千變萬化の妙を極めて居るものではあるが、良く似た二た子のを比べて見ると、又驚く程に似たのが多い。挿圖にあるのは其一例に過ぎぬが、長崎醫科大學の倉上博士の研究されたのにも、同型二た子の指紋に今世に行はれてをる分類の仕方では全く同一のものとしなければならぬ程に似てをるものがあつた。尤も一本一本の條に就て一々離集する樣を仔細に檢べたら無論二人の間に違ひのある事が分るのであつて、同一人の同じ指頭の紋理が年齡と共に毫も變化しないと云ふやうな譯のものではない。たゞ今警察等で用ゐて、決して同一のものとすべき組合せが二つとは出て來ないと思はれて居た程の細かな分類法を以てしても、なほ分け切れぬほどに似て居ると云ふだけである。こゝに生物學上面白いのは此點に遺傳質の勢力範圍の限界が見られると云ふ事である。即ち吾々の持つて生れた遺傳質は吾等の體を造るに、いかほどの細かな點まで其支配權を主張し得るかと云ふ事が、同型二た子の指掌蹠紋によりて見られるのである一口に云へば遺傳質は此等の條理の大凡の形を定める。然し個々の條の形は其支配の外にあるとせねばならぬ。

私は自分でも此種の二た子の指掌蹠紋を集め、又他の人々の研究をも參考して調べた結果、同型二た子の間では同じ人の右と左との類似の程度よりも、二人の右と右、又は左と左との間の類似の程度の方が高い事が屢々ある事を確めて居る。言を換へて云ふと、此種の二た子は此意味に於て同一人の左の半分と右の半分との似てをる以上に似て居ると云つて差支ないのであ

る。

八

體が此通り似てゐるとすれば、自ら其氣質とか嗜好とか能力とか一切の精神の性質狀態が似てをる事も當然である。二人の同型と思はれる二た子が全く同じやうな趣味を持ち、同じやうな點で人に優れてゐるとか劣つてをるとか云ふ事は殆んど總てがさうと云つてよい位である。先頃の神宮競技で世界的レコードを作つたと云ふ寺尾孃姉妹は此種の一例であるが、或る老人の二た子は二人とも子供の時から苺と酸ばいものが嫌ひでたべられなかつたと云ふやうなのがある。心理學上の色々細かな實驗などをしても極めて近いスコアを得る事が珍らしくない。若しひどく違つた成績が出たら寧ろ實驗法の方に疑をかけるのが至當であるくらゐである。學校の成績でも非常に似寄つたのがある。私の許に集つて來た二た子の中にも二人とも學校の成績が良くて大抵同じ點を取り、級長と副級長とを二人が交代でやつてゐると云ふのがある。アメリカのアマスト大學を出て二人とも立身した或る二た子の兩人は在學中成績の評點が一パーセントの十分の一と違つた事がなく、趣味も嗜好も全く同じであつた。たゞ異性の問題になると一致しなかつたと云ふが、之は何故か思案の外である。或る子供の二人は同じ時に空腹になり同じ時に眠くなり眠ると同じ夢を見ると云ふ。

又某と云ふ英國の二た子は總ての精神の働き方同じであると見え、一緒に居て人の話を聞くと、其談の途中に全く同じ言葉を挿さんだり、又同じ連想を呼び起したり、又時として同じ歌を唱ひ出したりする。かう云ふ事があまり多いので、例の精神感應の信仰家として有名なサー・オリヴア・ロツヂが非常に二人に興味を持つたと云ふ話である。

實際かやうな精神感應と見やうによつては見られるやうな事は二た子には時々あるらしく、色々と面白い話が傳はつてゐる。例へば前に云つた女優フエバンクス姉妹等も其母親の談によれば、學校に通つてゐた時分、宿題の作文を書かせるのに、別の室でやらせても、いつも全く同じやうな作文ができるので、相談し合つたのではないかと云つて、よく先生に咎められたと云ふ。或は二た子が別の處に離れて住んで居て、互に思ひ出してなつかしくなつて手紙を出すと、それが行き違ふと云ふやうな事が屢々ある。ゴルトンの書いてをるものの中にも、或二た子の一人Aがスコツトランドに旅行した時、イングランドに居るBは土産にと思つてシヤンペンの盃を貰つて歸つたら、其Bも亦同じ模樣の盃を同じ時にAに與へるべく貰つて、見せ合つ

て大いに驚いたと云ふやうな事も出て居る。

元よりかやうな話の中には少々おまけもあらうし、又偶然の一致と云ふこともあるものであるから、どれ程迄が兩人の二た子であると云ふ事から起つたものであるかどうか、容易に分らぬことではあるが、かう云ふ風な事も確かにあり得べき事には違ひなからう。

九

同型二た子ではこんなに體や心の狀態が似て居るのであるから、病氣等も同時に同じ病に罹ると云ふやうな事もありさうな事である。私の集めた例の中にも二人とも同じ耳に耳漏があると云ふのがある。ゴルトンの擧げてをる例にも、二十三才の時とかに、同じ齒が痛み出して、同時に拔いたと云ふのがある。又或子供の二た子は大抵一緒に同じ病氣になつて一緒に治る。それは百日咳でも水痘でも麻疹でも皆さうであつた。又一方が輕い黃疸をやつたと思ふと、片方がすぐ後からそれになつた。此場合には傳染と云ふ事が無論あらうと思はれるが、又體質の良く似てをる事が原因となつたに違ひない。

或フランスの醫者の書いてをるものの中に、一日此人が二た子の片方が眼病に罹つたのを見舞つたところが「私の兄弟も多分今同じ眼病を患つて居るでせう」と云つた。醫者はこれを聞いてたゞ馬鹿な事をと思つてあまり氣にも止めなかつたが、二三日たつて、其患者が其兄弟からの手紙と云ふのを見せた。それには「私は眼病に罹つてゐる、お前もやつてゐるだらうね」と書いてあつた。

又マルセーユ生れの二た子は二人ともひどい喘息持ちで而も妙な事に、他所から生れ故鄕のマルセーユに返ると、必ずひどい咳が出て來る。それが又妙にツーロンまで出て往くとケロリと忘れたやうに治つてしまふ。それが二人とも全く同じである。彼等は商賣上いつも旅して步いて居る人々であつたが、土地によつて何ともない處と、ひどく持病に障る處とある。それが又二人とも同じであつた。

倘二た子で二人とも同じ精神病で憂鬱症で強迫觀念に苦しめられて居たのがあつたが、此二人は全く別の精神病院に入れられて居ても、同時に同じやうな病の發作が兩方に起つた。其他近頃二た子の早期性痴呆症がボストンで報告されたが、其前にもそれと同じやうなのが幾つか文獻に出たのがある。

十

右數頁に亙りて述べた處は要するに所謂同型二た子が其體も

又心も如何に互によく似たものであるかと云ふ事であつた。眞に彼等二人の類似は詳しくしらべればしらべる程其甚しい事を見出すのである。日本では瓜二つと云ひ西洋では同じ莢の中の豆粒と云ふが、實は人間の體が瓜や豆よりも精密に出來てをるだけ細かな點までが一致して居るのである。これは何によるかと云ふと、先づ彼等が元同じ一つの卵より出來したが爲めである。即ち全く同じ遺傳質を持つてをるからである。又吾等は此例によつて遺傳質と云ふものの力がいかにも強いものである事に氣附くのであるが、それならば同型二た子を全く違つた境遇に置いたらどうなるか。境遇の力がどれ程迄遺傳力を抑へ得るか、言を換へると、遺傳と境遇との力の對照はどのやうなものであらうか——これは非常に大切な問題である事は云ふ迄もない——と云ふ事を見るのに此同型二た子程都合のよい材料は無いのである。次に紹介する一例は此疑問に答へる一助となるものであらう。

之は米國に住む三十歳の二た子の女である。一人をBと云ひワイオーミングに居り一人はJと云ひアリゾナの住人である。彼等は生れて僅かに半月にして別れ別れになり、其後十八歳になつて始めて相見、それからも殆ど別々に住つて時々しか會ふ事もない。二た子の母は産後の弱りで死んだので、二人は別の家に養はれた。Bは其後繼父母と共に所々に轉々して歩き、學校には四年しかゆかず、諸所の會社などに入つて事務員となつた。Jは之に反して正規の教育を受けハイスクールも卒業し、九年前に結婚して一子を擧げ其後教職に就いてをる。

處が此二人はかく別々に離れて育てられ、教育の程度や身邊の狀況も違つてをるに拘らず、殆んど區別する事が出來ぬ程に似てをる。即ち彼等の身長も體重も全く相等しく、衣服を取換へて着る事が出來る。眼も髮も同じ色であり聲は友人でも區別が出來ない。齒も爪も殆んど同じである。二人とも肺に故障があつて時々床についたが、病氣を報ずる兩家の手紙が行違ふ事が屢々あつた。又互に知らずに同時に斷髮した。二人とも人中ではどこまでも持てる方で皆から重寶がられる氣質は良く似て快活で、精力主義で、歷史とか政治とか云ふやうな事に興味があり算術は嫌ひである。

此二人に就てテキサス大學のムラーと云ふ學者が精密な心理學的檢査をやつた。處が智能の試驗の結果は兩人の經歷や境遇の違ふに拘らず殆んど同點で、二人とも最高の智能の部に入る。之に反して智能に關係のない機械的の反應時間連想時間の檢査とか、好惡快不快の情緒等の檢査の成績はよほどの差が見られ、こゝに境遇の違ひの影響が明かに現はれた。尙兩人の手

紙の書きぶり等も大分違つて事務員を勤めるBの方は教育が低いに拘らず、文章が正しく要領を得て居り、Jの方は教育はあつても手紙は非事務的家庭的である。人に遇ふ態度等にも同じやうな差異が見られると云ふ。

十一

右は僅かに此種の一例に過ぎないから、之れだけの事實から概括的の結論を出すのは危險である。然し前にも述べた通り二た子殊に同型二た子は、たゞにその現象自身が生物學上の色々の根本問題例へば生長分化相稱變異等の問題と關連してをるばかりでなく、全く遺傳質の同じい二人が世にあり得ると云ふ事實は、之を自然に與へられた屈竟の對照試驗の材料と見る事が出來る。總ての科學的の研究には對照試驗を必要とする。例へばビタミンの作用を研究するには、同じ親から生れた鼠などを使つて、同じ條件の下に育て、食物にはたゞビタミンの有る無しだけを違はせるやうにして養つて、其結果を比較すると云ふやうな事をするのである。處が此同型二た子こそは遺傳質迄同じ人間の duplicates である。彼等の上に運命が行ふ自然の試驗は之を注意して見れば、此上も無き貴重な對照附の科學的實驗と見る事が出來る。それで此頃シドメンスと云ふ人は特に二た子に就て病理的方面を研究する科學が成り立ち得ると云ふので「二た子病理學」と云ふ書を現はした。二た子病理學ばかりでなく二た子を材料として、「二た子心理學」「二た子教育學」「二た子遺傳學」等も成り立ち得る者ではなからうか。此點に就き特に大方の御注意と御指教を仰ぎたいと希ひつゝ此篇を了る。

（京都帝大動物學教室にて）

暴力

土方成美

一

暴力の考察と云つても敢てジョルジ・ソレルの向ふを張るつもりではない。庭のあんずの樹に來て鳴く百舌から思ひ着いたことである。それも來るので思ひ出したのではなく、今年は急に來なくなつたことから何となしに淋しい氣持がするからである。百舌の來なくなつたのは復興局の通路作業に驚かされたものらしい。尤も之は百舌に聞いて見なければハッキリしたことは云へないから、恰もマルクスを地下から呼び起して其學校の如何なる解釋が正しいかを聞いて見るのと同斷である。併し假りに然りとしたら、人間が相集つて爭ふために、人間に害のない百舌を斥けたやうなものかも知れない。尤も人間は爭つてばかりゐるものでないことは確であるから、人間が和衷協同するために百舌に遠慮を願つたとして置かう。話は段々と岐路へ這入つたが百舌と暴力と關係するところは百舌は專ら鳥界の暴力團であると云はれてゐるところである。小鳥を食ひ殺して横暴を極めてゐるとか、人間仲間では大層評判がわるい。鳥界の暴力團には百舌の外にふくろふもゐるさうだ。あのうるんだ親しみのある眼付でまさかと思はれるやうであるが、人のいや鳥の寢靜まつた頃に出掛けて散々小鳥をイヂめるとの事であるが、之は一層御念のいつた陰險暴力團とでも云ふべきであらうか。

兎に角私の居宅の附近では前に云つたやうに百舌が來なくなつて、盛んに道路作業が營まれてゐる。百舌の暴力がなくなつた代りに、時々親方が土方を毆つたり、土方同志で毆り合ひをしてゐる。が話は之からである。正直なところを云つて、私は親方が時々土方を毆るのを勿論よいこととは思はないが、大人が赤子の手を捻つたり、代議士が代議士の頭を毆るほど暴力だと云ふ感じがしない。そこで暴力とは一體どんな力の行使だらうかを考へて見る氣になつた。よく世間では暴力革命には反對だとか暴力、、も亦止むを得ないとか、暴力とはハッキリ分

つたことのやうに問答されてゐるのを見受ける。其暴力には人の頭を毆ることや、人を鐵砲で打ち殺したりすることが含まれてゐるに相違ない。主として腕力の行使を意味してゐるのだらう。かう云へば一見極めて明瞭のやうであるが、それでは一般同盟罷業は矢張り暴力の中に這入るかどうか、ソレルは無產者の抱く社會主義に關するあらゆるものを包含してゐるが一般同盟罷工で之を暴力と名付けてゐるやうであるが、唯音なしく同盟罷業してゐるだけなら、文字通りの腕力の行使と云ふ部類には入れにくいだらう。翻つて思ふと人間は動物を腕力を以て自分の意思に服從せしめて置きながら、暴力を行使したとは思つてゐないらしい。恰も高い塀を廻らして自ら動物園に這入りながら、自分は動物園に這入つたと思はないのと同樣であるかも知れないが、茲では獸は人間に與へられたもの、獸には魂がないと云ふ人間の世の中にだけ通用しさうな論據で、動物に對する腕力の行使は暴力にあらずと一應片付けて置かう。ところでまだまだ厄介な問題は消えない。人間同志で時々腕力を行使しても暴力だと思はない場合が隨分澤山ある。國技館の相撲など明に裸で御互が相手方に腕力を行使してゐるのである。現に之を見て喜んでゐる人も澤山ある。如何なるソフイストも此現實を否定することは出來まい。土佐犬の喧嘩は多くの府縣では禁止せられてゐるやうだが、人間の相撲の禁止せられたのを未だ聞いたことがない。土佐犬は嚙みつくからいけないと云ふかも知れないが、嚙み付くばかりが暴力だと片付けてしまふわけにも行くまい。人間の人間に對する腕力の行使而かも暴力だと考へられない場合は數へ立てたら限りなくあらう。警察官に許された腕力の行使、國際法規條約で認容せられた方法でやる戰爭など最も著しい例である。

かう考へて來ると一概に暴力とは腕力の行使と云へないばかりか、不法な腕力の行使と云つてもまだ納まらない。何を不法とするかは何か理由があつてのことに相違ない。一概に腕力が暴力であると我々が考へるのでないとしたら、結局我々は或力の行使方法は不當であると考へて、之を倫理的に惡であると見て、暴力と名付けてゐるものと思ふ。何を惡い腕力の行使、暴力と名付けてゐるかを反省して見ると、必しも相手方の承諾の有無を標準としてゐるのでもない。成程國技館の相撲は御互の承諾の下に行はれてゐるが、いくら相手の承諾があるからといつて、竹刀で頭をなぐるのは暴力に相違ない。巡査が相手の承諾なしに強盜を組伏せるのは相手が承知しないと云ふ理由があつても暴力とは考へられない。結局人間相互の精力を無用に消耗するやうな方法で力を行使するのが暴力だと感ぜられてゐる

らしい。理窟を云つて聞かせればわかるに頭を殴るのは暴力であるが、いくら云つてもわからない馬の顔を殴るのはいくらか止むを得ないとして容認せられる。之等は結局前に云つたやうな理由に基くのだらう。相互が生命の取り合ひをする戰爭でも双方の戰闘力に關係のない教會を砲撃するのが不當と判ぜられるのも同様の理由に基くものであらうか。

そこで腕力の行使はすべての場合に暴力であると云へないが相互の力を無用に消耗させるやうな力の行使方法は、腕力の使用でなくとも暴力と名付けなければなるまい。精神的な力の使用に於ても無用に相互の活力を消耗するやうなことは暴力になるわけである。

或は人間の精力を振起せず浪費消耗せしめる不當な力の使用は其有形無形を問はず暴力であると云ふのは廣過ぎるとの感がないでもない。「破壞的結果を企圖する」とでも云ふ制限をつけるとよさゝうでもあるが、秩序的合理的な破壞もある。道路作業のために沿道の住宅を取こはすのを暴力とも名付けられまい。

二

精神的な暴力などは滅多に例がないかと思ふと、中々さうでもない。暴論を吐くと云ふやつが第一それだ。最も著しいのは思想上の暴力行使である。學問上の論爭に相手の學説の誤謬を理論的に説かず、人身攻撃や皮肉で應酬するのは此類である。或は反對學説に對して徒に氣狂呼はり、無智呼はり乃至危險呼はりするのも同斷である。何か相手方を傷けるやうな、簡單な譬喩や標語、例へば曲學阿世と云ふやうな言葉で相手の言論を葬り去らうとするのも當節流行のやり口であるが、之等は何れも學問的な研究心を刺戟するどころか、徒に論爭を感情的にして研究心を消耗せしめる。氣狂だと云はれて怒らない者も少いから、其應酬が又感情的になると云ふ風に學問上の論點は何時の間にか圏外に投出されお互の精力の消耗に終る。學問上の本を買つて感情的な喧嘩を見せられる讀者も結局精力浪費の馬鹿を見る。

議論の席上で多數をたのんで、二人の間の論爭に「おれもさう思ふ」「俺も賛成だ」と云つて一方に氣勢を副へ、相手方を悲境に陥れようとするなどもよくあることである。言論機關を獨占して、聲を大にして相手方の理論に耳を傾けようともせず理由なく排斥する、――野球戰に競技の技術で競爭せず、旗指物や太鼓で勝たうとする、――自分の勢力の下にある後輩や若い者の前で理由なく他人を誹議して、其人を墜さんとする、――之等は皆無益に人間を落膽自暴に陥れる陰險暴力の行使である。滿腹したお客に無暗に汁粉を強ひるなども、可なり質のわ

るい暴力の行使とも見られやう。結局双方共に疲れて水を入れる迄に大分エネルギーを失ふ。

之等の精神的な暴力の行使は假ひ法律で不法と認められないでも倫理的に見て、腕力の無法な行使と遽に其優劣を判斷することは困難である。陰謀政治、情實政治の議會が腕力沙汰になる場合に、我々は腕力の行使を悩み淺ましいと思ふが、扨翻つて思へば、多數を恃んで理由なく議案を通過せしめようとするのも暴力行使たるに於て擇ぶ所はなからう。陰謀政治はお互を腹の探り合ひに疲れさせて國民の精力消耗に終る。不當なる腕力の横行と弊害何れが大であるかは容易にわかるものではない。古い沿革付の大きな會社などの中に生活する人が、ともすれば沈滯的になり其中の一人が何か仕事をすると、それを皆でよつてたかつて何かケチをつける、そこで利口（？）なものは結局何事もせざるが可と云ふ態度をとり、皆が時間の徒費に油賣りで暮してゐるやうな例は多々あると思ふ。物語の中で聞く千代田の大奥なども如何にも陰險らしい、いつも梅雨のやうな陰鬱な空氣の中に黴が成長してゐる。無理にも日の晴れ間を見たい氣持が時として人々に起るのは寧ろ當然ではなからうか。

屁理窟が横行すると理窟抜きと云ふことが一部から歡迎せられる。屁理窟と知りつゝ、これをコネて相手方を弱らすのは暴力の行使だからである。濱口藏相の消極政策が一部から歡迎せられたのは理窟は兎に角ハッキリしてゐるからでもあらう。之に對抗せんとする者は結局積極政策の論議を指示すれば足りる。

暴力は悩むべきであるけれども、「わからなければなぐつてしまへ」と云ふ通俗な考へ方に全然同情せられないわけでもない。ソレルが議會政治を唱導する社會主義の曖昧よりも一般同盟罷工の明瞭なるに如かずと考へるのも、もとより其結論に贊成するわけには行かないが、以上の通俗見解と一脈相通ずるものがある。若い生氣潑剌たる青年が、理窟はうるさい、何でも始めろと云ふ氣持、毒を含んだ世辭よりは悪罵の方がましだと云ふ心持なども大に參考しなければなるまい。

今や陰に陽に思想的の暴力團が横行してゐるか。くの如き精神的暴力の横行は抑々亦何に基くものであらう。一つは一般の無知にも原因しよう。併し主として一般の怯懦と無關心に因ると思ふのは偏見であらうか。

贊成はしないが、こんなことを云ふと人氣を落すと云ふ漠然たる恐怖から反對を差控へると云ふ場合が可なり多からう。もつと大きな原因は無關心から來てゐる。何が行はれ、何が主張せられてゐても、まるで自分達の生活に緣のないことのやうに見物氣分で多くの人が社會の出來事を、何かセンセイショナル

な出來事が起るのを興味中心で眺めてゐる。何時の間にか、精神的暴力が社會を横行してゐる結果を導いてゐる。著しい例は選擧であらう。一部が無關心である間にいろんな候補者が當選する。後悔した時は既に遲いと云ふやうなのが現狀ではなからうか。物質的な暴力の横行を抑へんとするものは、精神的な暴力の跋扈を矯めなければならない。それには一般の反省關心が何よりも大切に相違あるまい。

カタストロフイツクな社會の變革は、徒に犧牲を多く出すと思はれるので私は極力之を斥けたい。しかし反面に於てすべての人が沈滯して、陰謀と嫉妬の中に疲れて行くのも悲しいことではなからうか。何にしても早く復興局の工事がすんで冬晴の空に百舌のなく、鮮明な景色が見られることの一日も早いのを祈つてゐる。

右翼こき下しの記

高畠素之

一

私は次男坊につれられて、たいてい毎週一度づつチャン〳〵バラ〳〵の活動をのぞくことにしてゐる。映畫も西洋ものは早くから好きで、この方は親爺それ自身の道樂として主もなる封切は大抵缺かさずのぞいてゐるから、なか〳〵以つて駈け出しのファンぐらゐには負けないつもりだが、チャン〳〵バラ〳〵と來ては余り有難くなかつた。しかし、これも住めば都で、觀ることを習慣にしてゐると、觀なければ矢ッ張り淋しい。觀てゐるうちに、だん〳〵役者の贔負もでき、それ〴〵の巧拙や持ち味も解かつて來て、次第に深か入りさせられるやうになる。いまの阪妻がマキノで賣出しの時分、高木新平や月形龍之助と同類同型の人氣役者として、人氣はあつてもその焦點が精々トンカツ屋の女中か芋屋の子倅程度を出でなかつた頃からして、この男のもつ特異な技能と持ち味には確かに將來を期待してゐた譯であるが、案のぢやう彼れはいま映畫時代劇の比較的善い意味での親玉といつた。先頃、菊池寛君であつたか阪妻を賞めてゐたといふ噂をきいたが、阪妻を賞めたのでは恐らく僕の方が二年ばかり先きであつたかも知れない。

が、そんな事はどうでも好い。茲では映畫役者の品定めをするのが目的でない。次男坊から話が始まるのだ。この次男坊につれられて、毎度立ち廻り映畫を見物させられる譯だが、それについて五月蠅さい事が一つある。昔、堺利彦翁の賣文社に何見とかいふメリケンの社會主義者と稱する男が來て、それを帝劇物に案内させられたことを覺えてゐる。向ふは日本語が出來ないから、出てくる人物について一々何とか英語らしい言葉で說明してやらねばならない。初めのうちは、これも修業と思つて精々念入りに說明してゐたが、それを善いことにして一々のセリフの通譯まで强要し、しまひには舞台に隱顯する黒ン坊を指してあれは仇の方か忠義の方かなどと言ひ出したので、ぐつと

癪に障り、どうにでも勝手にしやがれと捨てセリフを殘して逃げだして來たことが、いまでも笑草になつてゐる。

活動小屋で次男坊を對手にしてゐると、ちやうどこれと同じやうな苦しみがある。出てくる人物について、一々執拗に『善い人』か『惡い人』かを問ひ質されることだ。善い人、惡い人が、なぜ子供にとつてそんなに興味ある問題なのか、その點は餘り調べたことがないが、芝居を見ても、映畫を見ても、我々の小供の關心は殆んど全く、この一點に吸收し盡されてゐるやうに見える。大人から見ると、まことにたわいもない馬鹿々々しい心理だと笑ふかも知れないが、大人の心理にも實はこれと五十步百步の素朴單純さがあることを言ひたいがために、この話を持ち出した譯なのだ。

二

明治四十年頃、幸德秋水がアメリカから歸つて、直接行動論といふものを唱へ出したのが緣で、社會主義者の論陣が兩派に分れた。一を硬派と稱し、他を軟派と稱して互ひに鎬を削り合ひ、硬軟それ〲の一語が、直ちに善惡そのものの符徵ででもあるかの如くに、この言葉が社會主義者だけの天下に流行した。かうなると物好きな奴もあるもので、さながら戶籍巡査のやうに一々同志を戶別訪問して、おまへは硬派か軟派かと詰問して步くといふ代物も出て來た。文明が進步して、汽車や自動車は愚か、飛行機やラヂオでさへ、モウそろ〲廢れ氣味だといふのに、人間の心理は依然として善玉惡玉の範疇に縛ばられてゐる。殊に何かの原因で爭ひが起つて、その勢ひが白熱化すると、一切が無內容な善玉惡玉のモットーで支配される。

この頃社會主義運動屋仲間に大流行の左傾右傾又は右翼左翼といふ言葉も、畢竟するところ、我が次男坊の『善い人』『惡い人』が、幸德秋水期の硬派軟派を經由して大正化された善玉惡玉の實質を一步も出て居らぬやうだ。謂はゆる左傾派に言はせると左傾に一廉の理窟があり、右傾派に言はせると右傾のみが眞實の眞理で、左傾派は皆スリかゴマの蠅ででもあるかのやうなことをいふが、さういふ理窟そのものの實體が、どう考へて見たつて洗濯石鹼の泡以上に値打があるものとは思はれない。

三

尤も左傾右傾といふ言葉には、歷史的の謂はれがあるさうで、試みに高畠素之君著『社會問題辭典』といふ本を開いて見ると、この言葉はもと、ドイツの國會で保守黨は議場の右翼に席をとり、急進黨は左翼に席をとつたことから由來したとあ

る。つまり左傾とは急進に傾くといふこと、右傾とは保守に傾くといふことになる譯だが、どだい保守とか急進とかいふことをさう簡單に片附けてしまふといふことが、認識不足の善玉惡玉的頭腦にだけ許された特權ではないか。この筆法から行くと、筆者の如き保守的急進主義とでもいひたい思想の持主は、右傾的左傾派とでもいはないと納まりが附かなくなる。

謂はゆる左傾派の連中は、少くとも口吻と感情の上では現在の社會制度を否認し、國家をも否認するのであるから、その理論的根底の可否の詮議は暫く措き、その立場の單純と鮮明さとに於ては、たしかに如上の定義に照して左傾派と稱するに相應はしいものといひ得るかも知れない。筆者の如きは、現在の社會制度を否定する氣込みと理論とに於ては、これらの左傾派にも敢て負けないつもりだが、國家の本質に叩頭する理論的武裝に於いては、神武以來のコチ〳〵な國粹保守主義と目すべきであるから、これは便宜上、右傾的左傾といつて言へない事もなからう。斷はつて置くが、右傾的左傾といふのは、右傾でもなく左傾でもないといふのではない。理論上謂はゆる右傾たるべき方面は極度な右傾であり、理論上謂はゆる左傾たるべき方面は極度な左傾であつて、その間に一貫した論陣を張るのであるから、これはこれなりに獨自の積極的立場だ。洞ケ嶽ではない。

翻つて右傾派と稱する一隊を見るに、これは又ちよつと處分に困まる代物だ。この派と來ては、青年團の蠅取デーと同じく、ただ右翼だ右翼だと騷ぐだけで、何が右翼なのか齒張りわからず、善玉惡玉の小兒病的傾向を最も端的に表現してゐる。卑俗低級な罵詈讒謗と、ヒステリー的自己擁護とを除いて、一體何が殘るのかと疑はせる位ゐだ。

右翼なら右翼で宜しいから、なぜその理論を堂々と眞向に振りかざさないのだ。理論がないのか。それとも實際運動に理論など要らぬ、波のまに〳〵大勢順應主義で誤魔化して行かうといふのか。理論的根底に立たない社會運動や政治運動なら、既成政黨だけで十分ぢやないか。普選實施を眼前にした大正十何年の日本社會主義運動界に、いま更ら既成政黨の糟粕のやうなものを擔ぎ込んで、どうしようといふのだ。

四

由來、日本の社會主義者の理論及び感情の共通的基調となつてゐたものは、無政府主義的傾向である。それが、いろ〳〵の必要や流行に迫まられて、或る者はサンヂカリズムから共產主義に鞍替し、或る者は又共產主義から、更らに現今流行の右翼派と稱する方面に商賣替して來たやうな始末で、それを我々は

決して惡いことだとは思はないが、變說改宗したのならしたと、男らしくはつきり言つて貰はないと鬱陶しくて仕方がない。これは現今の左右兩翼に區別のない通有性だが、猫も杓子も變說改宗をまるで惡事のやうに心得てゐる。それだから、盜人の夜來たるが如き態度を採る。電車がこみ合つて座席のないとき、立つでもなく座るでもないやうな腰附きでもぢ〳〵しながら、いつの間にか座敷に割り込んでしまふ奴があるが、日本の主義者の變說改論にも、ちやうどさう言つたさもしさがある。何か疚しい良心で變說改論してゐるとしかは、解釋のしやうもない譯だ。

五

今の國家はブルヂオア國家だといつて、心の底から現在の國家本質を否定してゐる連中が寄り合つて、先きに勞働農民黨といふものをでつち上げた。その宣言と稱するものを見るに、大體は紋切型の社會主義的口吻を當り障りのない文言で表白したものに過ぎないが、終りの方へ持つて行つてちつと許り我が國情に降參するとか、三千年の歷史に叩頭するとかいつた文句を竝べ立てゝゐる。今の國家がブルヂオア國家であり、歷史的の凡ゆる國家が階級搾取の國家であり、而してブルヂオアや階級搾取はプロレタリアの敵であるといふ、社會主義者はお定まりの口吻を以つてすれば、義理にも我が國情に叩頭したり、三千年の歷史と握手したりすることは許されない譯だが、從來の考へ方が間違つてゐたことに氣がついたから、この際思ひ切つてさういふ右傾化を斷行したといふなら、それも決して惡いことだと思はない。

が、さういふことは、苟くも主義主張を以つて立つ程の人間にとつては致命的に重大な事件だ。非國民的立場から國民的立場に改過遷善することは、惡魔が天使に鞍替したも同然である。何故、その改過遷善の次第を堂々と天下に向つて宣明しないのだ。勞働黨の宣言を以つてその懺悔狀に役立たせるといふなら、それでもよいから何故その懺悔の趣意をもつと明瞭に高調しないのだ。終りの方へ持つて、中分け半分にちつとばかり降參の合圖を與へただけでお茶を濁さうといふ料簡は、曩に述べたやうな中腰になつて滿員電車の座席に割り込まふといふ態度と同じく、あき巣ねらひのさもしい性根を曝露したものだ。

これでは、まだ〳〵、本心からの叩頭とは受け取れない。たゞ、中腰になつてゐるといふに過ぎない。中腰をエサとし、玉よけとして、官憲と世間の目を眩ましつつ實行運動の座席に割り込まふといふ考へだ。理論の本質から割り出した變說改論で

はなく、政策上の單なる功利主義に過ぎない。さういふ手くだを見破れないで、こんなふざけた政黨の存在を許して置く官憲も官憲で、よく〳〵の朴念仁といふほかはない。そんな料簡だから、國體に降參し三千年の歴史に叩頭した筈の右傾勞農黨が何時の間にか共產分子に占領されてゐるといふ痛快な結論を展開して來ることになるのだ。かうなると、前の第一次無產黨たる農民勞働黨には共產分子がゐたから解散したのだといふ、官憲の間拔けさ加減をます〳〵笑つてやりたくなる。

六

が、官憲の間拔けさ加減は、もと〳〵それが商賣だから致し方もないが、勞農黨に引つ込まれて右傾の看板だけ利用され、揚句の果ては放り出されるやうに脫黨した總同盟以下何々會某々組合の鬪士諸君に至つては、一體どのツラ下げて天下にまみえようといふのだ。

第一次無產黨は、總同盟がぬけたから解散された。第二次無產黨たる勞農黨は、總同盟が加盟したから解散されなかつたのだといふと、總同盟はまるで官憲の三太夫みたいなもので、全く以つて偉いものになつてしまふ譯であるが、それならそれで勞農黨そのものを官憲の三太夫たる位置にまで向上させる位ゐな實力と誠意と努力があつて善ささうなものぢやないか。それを共產派襲來の羽音に脅えて、こそ〳〵に逃げ出すとは何たる不爲體だ。共產派が襲來して、共產派がそんなに不都合なものなら、自分が逃げ出す前に先づ敵を撃退することに憂身をやつしたらどんなものか。敵が既に黨內に食ひ込んでしまつたといふなら、進んでそれを放り出す工夫をすれば好いぢやないか。工夫はしたが、放り出せなかつたといふなら、それは自分が無力無能な證據だから、默つて神妙に引き退がれば好い。脅えて逃げ出したくせに、偉らさうなことをいふから、ちよつとからかつて見たくなるのだ。

かういふ場合の實力といふものは、單に頭數だけの問題ではない。大義名分の問題だ。たとひ頭數は少なくても、その言ふところに理義が立ち、至誠がこもつてゐるならば、必らず大方の同情と共鳴を博し得る。勞農黨を曲りなりにも右傾させて、コソ泥的にもせよ兎にかく國情と歴史に準據した愛國的立場に讓步させるまでにした點は、恐らく黨內右翼分子の努力の結果と思はれる。そこで、彼等は飽くまでこの立場に膠着し、この立場を力說して、共產派一味の侵入を撃退すればよかつたのだ。それには、ただ小兒病的に右傾だ左傾だと怒鳴つてゐるだけでは駄目である。何故、共產派の加盟を許すべきでないかの

理論的根據を宣揚することが必要だ。何故、共產派が非國民賣國奴であり、何故、反共產派が愛國主義國民主義に改過遷善したかの論據を洗練し高稱して、堂々と對立した戰陣を張ることが必要だ。

七

ところが、彼等はさういふ態度に出られない。出るほどの論據も何もありはしないのだ。ただ、ふとした利害衝突、勢力爭ひから、共產派との對立となり、その結果專ら官憲に對する玉よけとして右傾の看板を揭げるやうになつたといふだけのものに過ぎない。若しさうでないといふなら、何故論理を以つて改過遷善の筋道を立てないのだ。何故、コソ泥的の中腰だけで誤魔化さうとするのだ。

彼等にだつて、理論的關心が全然缺けてゐるといふ譯ではない。その證據には、時々理論めいたモットーを持ち出す。初めに『科學的日本主義』といふやうな鎌首を出しさうにした。さういふ名稱に相應はしい理論的內容が果して成立し得るかどうかは私の知らないところだが、これでも結構の筈であつた。この名稱に從つて、理論の構造をでつち上げ、それを旗印にして反對派と論陣を張るといふなら、それはそれなりに見上げたものだと言ひたい氣になつたであらう。ところが、さういふ鎌首を出しさうにしたから、ちよつと小突き廻はさうとしたら、その儘おとなしく引ッ込めてしまつた。彼岸前の靑だいしよだつて、いま少しはたよりになる。

扨てその次ぎに浮び出たのは『現實主義』といふ幽靈だ。現實主義、結構である。みづから現實主義を以つて任じようといふからには、敵は定めし空想主義を旗印にしてゐることであらう。それならそれで結構だから、何故今日この際しかく改まつて現實主義を高調せざるべからざるに至つたかの所以を明にしその前に先づ、謂ふところの現實主義とは一體どんなものかを說明してかかる必要があつた。しかるに一向、さういふ事をしようとしない。そして、ただ現實主義、現實主義と怒鳴るだけだ。怒鳴るだけなら、夜店の叩き屋だつて、もつと呂律が廻はる。

現實主義とは官憲の三太夫を勤めたり、玉よけの工夫をこらしたりする事だけをいふのでもあるまい。それだけの現實主義なら、共產派の空想主義の方が餘つぽど現實的ぞ。共產派の理窟と作戰の方に現實味がヨリ多いからこそ、いつも此方は押されたり、乘つとられたりしてゐるのではないか。結果はお臺目を裏切つて、右翼理論の虎の子のやうな現實主義も、斯うして

いつの間にか影が薄れて行つた。

そこで、今度は何を出すか。引つ込める度び毎に、幽靈の理論的輪廓が薄くなるのは悲慘の極だ。最初の科學的日本主義といふ奴なら、滑稽は滑稽でも角張つてゐるだけまだ取り柄があつたが、それが現實主義となり、續いて『小兒病』となり、最後に『國法の範圍內』『社會進化の過程』と來ては、もはや何とも申上げようがない。一體、どこの何國の政黨に、國法の範圍外を標榜したり、社會進化の過程を無視したりして政黨を造らうとする間抜けがあるか。『それはさうだらう。けれども、我々は從來國法非認主義でやつて來たのだ。それを今度改めて公人にならうといふ譯だから、國法遵守の一點を强調することに意味がないとはいへまい』――と、こんなことを言つて、嘲弄の網の目を潜らうとした右翼主義者がある。が、それは此方で言ふことだ。さういふ次第なればこそ、尙更ら先づ第一點に、何故國情と國法に降服せざるべからざるに至つたかの論據を展開する必要があるといふのだ。しかるに、一番大事なその方の理論は中腰でお茶を濁して置きながら、やれ國法に從ふの、直接行動を排斥するの、やれ溫淳の、忠實の、と徒らに妥協的な弱音を吐く以外に知惠がないのは、これこそあさましい素町人根性といふもので、現實主義でも何でもない。

八

要するに、日本の右翼主義者といふ一派には、理論的の武裝や根據が微塵もなく、有るものはただ現狀への妥協降服的本能と、利害打算のブルヂォア的手管だけだといふことになる。ほかに、さも一廉の學說でもあるらしく自由主義的に口吻を弄する傾向も見えるが、この口吻の濫費が、國家國體への降服と如何ばかり頓珍漢してゐるかといふ根本の考察などは、一向にお構ひなしである。

そこへ行くと、左翼共產派と稱する一派には、單純ながらも型の如き一個の理論がある。この理論は、全部外國からの受賣りである。受け賣りといふと、少なくとも『受け』てから賣ることを意味するが、その『受ける』餘裕すらない位ゐの切迫した輸入直賣品である。けれども、もと〳〵相應にたしかな材料を種にして、マルクスやレーニン以下多數の老練な製造元に依つて叩き上げられた品物だけに、この方はどことなく確かりしたところがある。だから、その儘の輸入品ではあつても、單純な頭の持主には信仰や熱意を起させ得る力もあるし、運動統合上の千なり瓢簞たるに相應しい原動力ともなり得るのだ。謂ゆる左翼革命主義の連中は、斯ういふ輸入品を唯一無二の御神輿

として擔ぎ上げ、それに隨喜渇仰の涙を滾してゐる。

筆者の如きも、この輸入直賣の御神輿に對しては、或る程度の興味を有ち、共鳴も感じてゐる。若しこれを純粹の學說として、それだけを評價するといふ段になれば、謂はゆる右翼派の言ひ分や口吻を理論化したとして考へた場合の學說よりも、筆者は左翼派の學說の方にヨリ多く傾倒するであらうことを斷言し得る。

九

しからば、それほど傾倒し得るところのある左翼理論──共產主義なるものを、筆者は何故それに加擔しないのみか、寧ろ仇敵視してかかることを持論としてゐるのか。それには理由がある。第一に、今の世界は國家對立の時代だといふこと、而して世界の强國はみな（日本も勿論）帝國主義を國是としてゐるといふこと、第二に、共產主義の本場たる勞農ロシヤの如きも、世界に於ける最も露骨旺盛なる帝國主義國家の一つであるといふこと、第三に、今日の共產主義なるものはロシヤ帝國主義の侵略的武器の重大なる一要素となつてゐるといふこと、先づ大體これだけの理由である。

今の世の中では、如何に立派な學說と雖も、それを或る一國が自國の特殊教條として宣揚してゐる限り、これをさういふ關係から引き離し、單なる學說として贊否を決定する譯には行かない。一國內の問題ならば兎もかく、苟くも國對國の問題になるとすべてを自國本位の立場から考量し評價するやうになることが當然である。

勞農ロシヤといふ背景から引き離した共產主義理論には、たとひ幾多の長所があり、大いに採るべきものがあるとしても、勞農ロシヤが巨大なる帝國主義の國家である以上、この背景から獨立した共產主義の評價は、その現實的贊否の問題とは沒交涉たるべきである。そしてロシヤが帝制以來の一大帝國主義國家であるといふ事實を疑ふやうな態度を採る者は、恐らく共產黨の手先き以外の仲間には見出されないであらう。

勞農ロシヤは、少なくとも陸軍に於いては世界に於ける最大軍備國の一つである。彼れは今、常備步騎兵四十八個師團、民兵二十七個師團を擁し、現役兵六十萬、軍費三億八千萬圓といふ尨大なる軍備力を左右してゐる。この尨大なる軍備を右手に提げ、共產主義のコーランを左手に振りかざして、世界征服の壯圖を行はうといふのが、彼れの本能的野心である。革命の當初、民族自決とか何とか體裁の好いお題目を振り廻したが、それが全然ヨタであり世界を欺く瞞着手段に過ぎなかつたこと

は、帝制以來の尨大なる侵略領土シベリアを手放さうともしなかつた一事に徴しても明かである。手放すどころか、これを足場として今やます／＼滿蒙方面に侵入の手を伸ばさうとしてゐるのだ。

十

共産主義を武器として、その宣傳にかぶれた民族を片つ端から統合し、以つて一大ロシヤ的帝國を形成しようといふのが、彼れの本來の意圖である。彼れは斯ういふ立場から、先づその政策をドイツその他の歐洲諸國に對して實行しようと努めたが、この計畫は事毎に失敗した。そこで鋒先を東洋に轉じ、東洋から逆に西洋に勢ひを及ぼして、その目的を貫徹しようといふのが、現在に於ける彼れの對外發展方針となつてゐるのだ。かの天山からゴビを横ぎり、北滿を通じて浦鹽に達する尨大な地域を自由の勢力範圍となし、將來極東にロシヤ帝國を建設しようといふ帝制以來の宿望も、今日に於いては更らにその規模を擴大して、西はペルシヤ、アフガンから、東は北滿殊に東支鐵道沿線にわたつて勢力を植ゑつけ、ホロンベールや新疆にまでも魔手を伸ばし、唐努烏梁海を併呑し、外蒙の殆んど全部を勞農聯盟に誘ひ込み、進んでは全蒙聯盟を形成せしめて、これを自己の支配下に置かうとしてゐる。

東洋に對する勞農ロシヤのこの帝國主義的野望を、最も現實的に裏づけるものは、蒙古方面に於ける鐵道敷設の大計畫である。最近の報道に依れば、勞農政府はこの計畫の第一步として、先づシベリア鐵道沿線の一都市ウェルフネジンスクよりキヤクタ經由外蒙の中心クーロンに達する新鐵道の敷設計畫に着手し、すでに工事上の諸材料を送つて、着々工事を進めてゐるとのことだ。この鐵道計畫の實現に依つて、いよ／＼外蒙併呑の宿望が事實となつて現はれる譯である。これを足場として、勞農政府が更らに支那中央に對する政治上及び經濟上の進出を企てるであらうことは既定の筋書といつて差支ない。

要するに、斯くの如きものが勞農帝國主義の正體である。而して共産主義なるものは、斯かる背景から浮び出で、斯かる背景の力に依つて利用せられつゝあるところの帝國主義的侵略武器の一つに過ぎない。それ故、斯ういふ狀況から引き離して考へた單なる社會理論としての共産主義が、たとひ如何に完備された理論體系であるにしろ、苟くも獨立の一國民としてそれに傾倒し、それに隨從するといふことは、これ取りも直さず、事實に於いてロシヤ帝國の勢力範圍に自國を賣國する結果となる。それも斯ういふ現實の狀況を十分に認識した上での話なら

まだしも、日本の共産主義者と稱する手合のやうに、ただ譯もわからず中學生が女學生を讃美するやうな調子で、夢中でその尻を追ひ廻はすといふのでは、洒落にもならない。

尤もこれは、共産主義についてのみいふことではない。イタリアのフアツシズムにしたところで同じことだ。イタリアのフアツシズムはイタリア現在の帝國主義的基調原理であるから、これをその儘日本に持ち込んで宣傳するといふことは、日本の國民精神をイタリアの帝國主義に同化せしめる結果となる。若し、フアツシズムの宣傳者下位春吉氏がこの意味で日本にムツソリーニズムを發賣するといふなら、我々は彼れに對しても、ロシヤ帝國の出張員山川均氏に對すると同じ非國民的取扱を報酬することになるであらう。

要するに、レーニズムにしろ、ムツソリーニズムにしろ、善いところは善いと判斷するのも結構だし、進んでその善い部分を採用することも一向差支ないことだとは思ふが、それもこれも皆、日本國家を目安としての話だ。日本國家の發展のため充實のために有利なものであるならば、共産主義だらうが黑シヤツ主義だらうが、善いところはドン／＼採つて利用すべきである。

けれどもそれは、利用であつて隨從ではない。主體は日本だ。日本が消化主體になるのだ。ドイツの毒瓦斯を日本に採用し、イギリスの軍艦を日本に採用するとしても、それは日本がドイツの家來となつたり、イギリスの手下となつたりすることを寸毫も意味すべきでないと同じだ。それは日本の武力の充實と精練のために、日本の身體それ自身の榮養のため、發育のためにするのである。日本人として日本の國家國體以上に尊貴なるものはあるべき筈がない。日本人としては、日本を大にし、日本を強くし、日本の國民的理想を行ふことが最高の道德である。

この立場から、ただこの立場からのみ、どんな外來思想でも、それが日本のためになると鑑定されたなら、遠慮なく朝鮮牛なみに活殺利用して行けば好い。右傾たると、左傾たるとは、問ふところでない。

河北新報

報知新聞家庭部編

家庭の醫書

四六判五二〇頁
定價二圓送料一八錢

報知新聞の誇とする家庭欄から四年に亘る記事の粋を拔き現代醫學界の權威數十名の意見二一八項を集めた眞に

國民の衞生讀本である

最新刊

□□内容の一部□□

◇狂犬にかまれたとき◇春は何故若き男女に危險か◇天然痘と二期の種痘◇初夏に多い妊娠の脚氣◇夏の旅と船醉◇乳兒脚氣◇恐ろしい小兒病二つ◇秋口と子供の寢冷え◇子供の肺炎◇肺炎に二種ある◇百日せきの話◇月經を豫告せよ◇血族の結婚◇お乳で出來る產兒制限◇嫁入前に起り易い精神病◇子供のお腹の蟲◇神經質の子供を持つ親へ◇赤ん坊の夜泣き◇文明が生んだ腺病質の子供◇チフスの素人診斷◇血を吐いても驚くな◇あくびの出る肺の初期◇肺病は養生で治る◇消化力を增す心得二つ◇赤鼻の人へ◇丹毒患者が皆治る◇早老を防ぐ法其の他二一八項

東京丸ノ内
報知新聞出版部
振替東京四二〇六五番

小樽新聞


北海タイムス
朝刊夕刊
十二頁
發行所
札幌市



讀賣新聞
ラヂオ版二頁添付
努力は酬いられたり
本紙近來の活躍を見よ
1ヶ月 .80
日曜夕刊發行
電話
京橋
1111 1116
1112 1117
1113 1118
1114 1119
1115



喧しき人口問題の解決は？
沃野千里の滿蒙にあり！
滿蒙開拓の羅針盤は！
われ等の有てる鍵にあり！
見よ堂々の
◎來るべき商戰に成功せんとする
廣告主は須らく
◎智識有產階級を代表する
わが滿日を利用せよ
本社・大連
内國支社
東京市京橋區宗十郎町十一番地
電話銀座三四七〇番
大阪市北區曾根崎上三丁目三二番地
電話北六一八四番
（關東廳大連市公布式）

シンクレア著

前田河廣一郎譯

義人ジミー

定價金貳圓

送料二十錢

最新刊

現代社會組織の破綻を見事に織り出す驚くべき文豪シンクレアの筆頭に、我が親愛なる、無智純情倭軀のジミー君は如何に活躍するか、アメリカ大陸と歐洲大戰亂を背景にした、この驚くべき構想の中に踊り、走り、笑ふ、このジミーに思ふ存分吾々は叱られ、奴鳴られ愛撫され、そして醉はされてしまう。だが、それは單なるユーモアではない、全人類の本性に呼びかける涙ぐましき叫びである。藝術と思想がかく迄に美しく融合された至完のものが全世界何處にあらう。オオ、親愛なるジミーよ!!やがて將來さるべき曉の光輝ある旗手であり、鼓手である。我が虫喰齒のジミーよ!!

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

尾崎紅葉集

現代日本文學全集の始刊

蘇峰生

改造社の山本實彦君が、一念勃起して、現代日本文學全集の出版に着手したのは、如何にも殊勝の事だ。作者の選擇、作物の取捨等には、十人十色、銘々の了簡もあらう。されど大體に於て、其選擇は、現代の代表的として、間違あるまい。而して其の作品に就ては、先づ出版の後を待つより外はない。

＊　＊　＊

それにしても一冊一圓とは、餘り廉價である。廉價と云へば、與謝野君夫婦等の日本古典全集が、五十錢にて刊行せられつゝある先蹤はありとしても。但だ廉價は廉價だが、其の實物は如何にやと、聊か掛念無きこともなかつた。

＊　＊　＊　＊

然るに其の始刊の『尾崎紅葉集』を手にして、頗る安心した。順序としては、紅葉集は第六篇となつてゐるが、發行の都合上、此れを手始めとしたのであらう。卷首には著者の肖像、及び筆跡がある。而してその小傳が掲げられてゐる。卷末には著作年表がある。而して其の正味は、多情多恨、二人女房、色懺悔、巴波川、戀の蛻、やまと昭君、拈華微笑、紫、胸算用の諸作の外、小品隨筆、書翰、病骨錄等があり。それが菊版三百餘頁に、ぎつしり詰まり、然も其の紙質善く、印刷の鮮明なる、鼇頭の細字ではあるが、老眼燈下尙ほ讀むに難からず。何事にも凝り性にて、氣むづかしき紅葉山人も、これでは決して不足は云ふまい。

＊　＊　＊

記者は書中の拈華微笑を一讀して、實に懷舊の情に堪へなかつた。此は明治二十三年一月、國民之友の新年附錄に掲げたるものにして、記者親しく紅葉山人を訪うて、其の寄稿を依賴したるものであつた。而して其の書翰中には、門人小栗風葉に忠告したるあり。友人杉野喜精氏に與へたる長文あり。然も風葉既に逝き、杉野氏は今や兜町邊に於ける、大立者の一人と聞く。有爲轉變の世の中、我も人も遲くも亦た是非もなき。

＊　＊　＊　＊

若夫れ絶筆の病骨錄を讀めば、紅葉山人も亦た一個の教養あり、且つ修養ある紳士であることが分明だ。其の最後の宣告を、入澤博士から受くるや、彼は記して曰く、

……十四日(明治三十七年三月)の午前九時半、入澤博士は、自ら來つて、其の診斷の結果を告げ、而して去るに臨んで、『私の誤診であることを希望するのです』

＊　＊　＊

唯だ此の一句、如何に悲慘、如何に沈痛。此の如くして紅葉山人は、同年十月三十日夜十時、享年三十七にて逝いた。文人命無しそれ奈何とは、眞に此の事であらう。

＊　＊　＊

記者は山本君の大企畫の門出を、祝福す。但だ今後に必要なるは、此の好例を趁うて、刊行の期日を誤らぬ事。編纂に念を入れる事。校正を嚴密にする事。而して印刷、裝釘、紙質等を、改惡せざる事である。約して言へば、總ての集をして、尾崎紅葉集と同一水平に立たしむる事である。それさへ間違なくば、其の成功は決して間違あるまい。而して是れ實に我が文化普及の爲めに、一大功德である。

ラムボオとヴエルレエヌ

堀口大學

ヴエルレエヌは、アルチユウル・ラムボオを「わが惡靈」と呼んでゐるのだが、この不吉な形容詞も、年若いこの友が、彼の一生に及ぼした災厄の大さに思ひ及ぶ時、決して苛酷ではないやうに思はれるのである。

實にラムボオが新婚後まだ僅に一年にしかならぬヴエルレエヌ夫婦の不和の原因をなしたのであつた。彼等夫婦の離婚の理由をなしたのもまた彼であつた。それぱかりか、彼はまたヴエルレエヌの厭ふ可き飲酒癖を增長して終生治す事の出來ぬ痼疾となしてしまつた。彼はまたヴエルレエヌを誘つてあてどもない漂泊の旅に連れ出したのであつた。彼は初から氣の毒な薄志弱行漢である、わがヴエルレエヌを全然征服しつくし、魅了し、呪殺して居た形である。

ヴエルレエヌはその一生を通じて、幾度かその朋輩のある者に對して特殊な愛情を感じたことのあつた男である。エドモンド・ルペルチエの云ふ所によれば、ヴエルレエヌがまだほんの子供であつたころ、早くも彼は北の國アルルウの近くのレクリユスに住んでゐるチユジヤルダンと云ふ名の從兄弟の一人に對して熱烈な友情を感じて盲目的にこの少年を愛したこともあつたと云ふことである。「それは眞に精神的な男と男との間の友情とは全く別なものであつて、彼はこの從兄弟の少年のことを語る時には、愛する女のことを賞めて語る戀する男のやうな言葉を用ゐた……」云々と云つてゐる位である。然るにこのヴエルレエヌの竹馬の友であり、また最初の傳記家であるルペルチエは「中學時代のヴエルレエヌは、まだ無垢の衣を脫ぎすてずに居た。」と云つてゐるのである、彼も斯うは書いて見たものの、あんまりそれは噓ツ八に聞えるやうに思はれて氣がさしたと見えて、「一見信じ難いことのやうに思はれるけれど。」と書き加へてゐる。成る程、一見も二見も信じ難いことのやうにわれ等に

は想はれる。

ヴエルレエヌはまた巴里でボナパルト中學に通つてゐた頃、弱々しい幽鬱な一人の學生と親交を結んだことがあつた。この青年の名はルシアン・ヴイオテイと云つて、千八百七十年に悲劇的な最期を遂げた。

その次に來たのがアルチユウル・ラムボオであつた。

エドモンド・ルペルチエは、ラムボオがヴエルレエヌの風儀に影響したことを主張する許りでなく、またラムボオの空想的な畫策と途方もない空論とが彼の頭腦に大きな作用をなして、彼の詩人としての氣質に一大變化を及したと論じて居るのだが。之れは極めてあり得ることのやうに思はれるのである。

尤も、ラムボオは決して、ヴエルレエヌの最後の「友」ではなかつたのである、彼はこの後もなほ多くの青年と結んだのであつた。その多くは詩人であり、畫家であり、教師であつた所から、彼は好んで彼等をその弟子だと呼んでゐた。彼がレッテルの中學で教師をしてゐた時にも、また英吉利でアンドリユウス氏の經營する學校で教鞭をとつてゐた時にも、ヴエルレエヌはルペルチエの所謂、「烈しい魂の關係」を持つてゐたのであつた。然しそれ等の「關係」の何れも、その持續的なことと、その深さの點に於いて、彼が「酔ひどれ船」の作者と結んだ「關係」には遠く及ばぬのであつた。

アルチユウル・ラムボウも亦、ヴエルレエヌのやうに、アルデンの生れであつた。彼は千八百五十四年の十月二十日の誕生であつた。不思議なことに、ラムボオの父も亦ヴエルレエヌの父と同じく陸軍士官であつた（歩兵大尉）、そしてヴエルレエヌの場合と同じくこの遺傳は彼に軍人になり度いと云ふ希望を起さずにしまつたのであつた。

ラムボオは實に奇怪な思ひ設けぬ人物であつた、そしてまた彼の生涯も彼が彼自身の爲めに夢想してゐた如き奇怪な思ひ設けぬ生涯であつた。

ラムボオはその母とシヤルルヴイルに住んでその市の中學へ通つてゐた。成績も相當によくことに羅典語が得意だつた。彼は幾度か賞典を與へられた。殊に羅典語の詩作にかけては全校、全縣に彼の右に出る學生は一人もなかつた。彼の智能は驚く可き早熟な、創造的な智能であつた。彼の教師たちはこの少年を神童と呼び天才兒と呼んだ。彼はちと讃辭に中毒した傾きがあつた、學校でのこれ等の賞め言葉と家庭に於ける彼の母の自慢に滿ちた滿足の言葉とは、生來の彼の中にある矜持の心をいやが上にも增長させることとなるのであつた。彼は中學生から一足とびに一かどの文人になつたつもりになつて了つた。す

でに中學生であつた頃から、彼はしきりに詩を書いて居たのであつたが、それ等は例によつて彼獨特の奇怪さを備へた立派な詩品であつた。「縊死人の舞踏會」だの「第一聖體拜合式」だの又はその後になつて世間に發表されて一世の賞讃を貰ふに到つた樣な作品を、彼はすでに十五六才の時分に田舍の中學校の敎室の机の上で作つてゐたのである。だから才能のない世間の人たちが何と云つてこの無作法な少年の言行に腹を立てた所で、彼が天才詩人であることは疑ふ餘地がないのであつた。然るに彼には社交的な才能は全然なかつた、彼は無愛想であり無口であり、粗野であり、近づく人には悉く不快の念と反感とを懷かせた。何人も先づこの少年の中には「惡」がひそんでゐるを感ぜずには置かぬやうな人格であつた。彼のこの性質はその一生を通じて少しも變らずに殘つた、ことに文壇方面の交際に於いては、彼は思ふままにこの人づきの惡るさと默り屋の性質とを發揮したのであつた。

十四五才の時から、彼は巴里に對する熱烈な憧憬を持つてゐた。彼には巴里が藝術と革命との中心であるやうに思はれて仕方がなかつた。彼は其所へ行つて生活がしたかつた。千八百七十年の八月二十九日に、彼は遂に巴里へ向けて母のもとを逃げ出した。十六才の時である。路用には賞典に貰つた書物を賣つた金を當てた。巴里へ行つてどうする心算なのか？巴里の誰を訪ねて行く心算なのか？巴里へ行つてからはどうして金を儲けて糊口をしのいで行く心算なのか？そんなことは彼自身にもまるで分つてはゐなかつた。彼は家人の目をぬすんで家を飛出して驛長の目を盜んで無切符で汽車に乘りこんだ。巴里の東口停車場へ著くといきなり彼は無切符乘車のかどで驛員の手につかまつて官憲に引渡されてしまつた。訊問されても默りこくつてゐて、名前をさへ明さぬので、役人たちを大いにてこずらせ、立腹させた。そうしてそのまま留置所へ投りこまれて數日間をそこで過した。その內にやうやく生國と姓名とを自白したので、國許へ送りかへされた。九月二十七日である。

實に馬鹿げた逃走をしたものである。彼はあこがれの巴里もろくに見ることも出來ずに、只非度い目に逢つただけで、もとの古巢へ送り返されたのであつた。然しラムボオはそんなことでは仲々に巴里に對する初志を抛擲するやうな少年ではなかつた。十月七日に彼はまた家を飛出して、今度は徒歩で白耳義に向つた。フユウメイ、ヴイルウ、シヤルルロア、ブリユクセル、ドウウエ等を漂泊して歩いて、行く先き先きで、興到れば詩を作つて、悠々濶步天地の大を樂しむの風があつた。怖る可きの少年である。然し母が知人を送つてやうやく彼の居所をつ

きとめて、彼はまたしてもシャルルヴイルへ連れもどされた。十一月の初の頃であつた。

彼は田舍にひそんで、遠く巴里の空を眺めながら、時節の到來するのを待ちながら、しきりに新詩の創作につとめたり、諸友と文通をしたり、戰爭を罵つたり、巴里市民の防禦ぶりを嘲つたり、浪漫詩派とヴイクトオル・ユウゴオの惡口を云つたりしてゐた。

その頃、彼が尊敬する詩人は唯一人「土星びとの歌」の作者があるのみだつた。彼はむさぼるやうにしてヴエルレエヌの作品を讀み、人の顏さへ見ればそれを暗誦してきかせたものであつた。

とうとう我慢がしきれなくなつて、彼はまた巴里へやつて來た。千八百七十一年の二月のことである。

エドモンド・ルペルチエがこの時のラムボオの冒險を面白い筆で書いてゐる。

「ラムボオは巴里へ着くと、いきなり畫家アンドレ・ヂルを訪ねて行つた。何故であるか?それは分らない。ともすれば途中汽車の中で讀んだ新聞にこの有名な畫家の漫畫が出てゐたのを見て、それに感心したと云ふ程度の單純な理由に過ぎぬかも知れぬのである。彼は平氣な顏をして見も知らぬヂルの家へ入つて行つた。われ等が始終ラムボオの言行の中に見ることの冷然たる豪放さ、この行儀作法に對する輕蔑、人の思想に對する平氣さ、これは實に彼の性情の極めて目に付き易い一面であつた。丁度その時、畫家は外出して不在だつた、何時も彼がするやうに、その日も彼は畫室の鍵を鍵穴に入れたままにして置いた。彼が歸宅して見ると、一人の見も知らぬ男が長椅子の上に長々と寢ころんで、轟々たる鼾聲を發して氣持よささうに眠つてゐた。びつくりして、よく見ると、それは一人の少年だつた。惡心があつて茲に來てゐるものだとはどうしても思はれぬやうな寢顏だつた。

「畫家は眠つてゐる少年を搖り起して 彼が其處で何をしてゐるのか、また彼が何人であるかを訊ねた。するとアルチュル・ラムボオは名乘りを上げて、彼はシャルルヴイルの住人であり、詩人であり、巴里を征服する爲めに出て來た者であり、等等々と告げた、そして最後に、まだ眠い兩眼をこすりながら、切角いい夢を見てゐたのに搖り起されたのは如何にも殘念だつたと嘶いた。するとヂルは持ち前の快活な人のいい調子で答へて云つた。――僕も時々いい夢を見るのさ、ただ僕は君とはちがつて自分の家でそれを見るのだ!」と。

「眠つてゐた少年はそれでも殊勝のな託言を云つた。見るから

に可哀相な少年であつた。この廣い巴里に一人の知り人とてもない少年詩人、世に頼りない惡童の一人でそれはあつた。ヂルは慈愛深い心を持つてゐた。彼はこの少年を氣の毒に思つた、それで彼は巴里には詩人のなす可きやうな仕事は何一つとしてないと敎へてやつた。彼はその日の彼の全財産であつた十法の金貨を出して與へた。そして母が待つてゐる故鄕の家へ歸るやうにと忠告した。」

ラムボアはその忠告に從つた。尤もそれはヂルの家を出てから數週の間漂浪をつづけた後の事ではあつたが、兎に角彼は徒步で巴里からシャルルヴィルへ歸つて來た。當時佛國の北部をプロシャの軍勢が占領してゐたのであつたが、彼は巧にその間をぬけくゞつて、百姓たちには義勇兵の落人だと見せかけて百の危險を冒し、千の難儀に出遇つても更に懲りることもなく無事にシャルルヴィルへ歸つて來たのであつた。歸つて來て見て氣がつくと彼の尻はこの田舍の市ではいよいよ据りの惡るいのを感じて、また巴里へ向けて飛出した。今度三度目に彼が來た時には、巴里は騷亂の眞最中だつた、彼は得たり賢こしとコムミュンの亂に加はつて流血の巷に奔走した。コムミュンが敗れるに當つて、あやうく投獄をまぬかれてまたシャルルヴィルへ歸つて來た。

この時である、彼は或る日ヴェルレエヌに宛てて長い手紙を書いて、彼に對する熱烈なる敬慕と賞讃の情を告げた。同時に彼はヴェルレエヌに捧げられた長詩「醉ひどれ舟」を送り、またあの有名な詠嘆曲（カンチレエヌ）「虱をとる女たち」を示した。

ヴェルレエヌはこの少年の詩に深く感動して、世話してやるから早く巴里へ出て來いと云つてよこした。彼はこの少年に宛てた手紙の中にかう書いた。「來れ余が愛する偉大なる魂よ、余は君を待ち、君にこがる。」と。かうしてこの二つの、ともすれば十九世紀が持つた最大のそれであるかも知れぬ、この二つの詩魂は、まだ見ぬうちからすでに互に相求め、互に相慕つてゐたのであつた。かうして、或る朝、アルチユウル・ラムボオが、ヴェルレエヌの家に、否、ヴェルレエヌが同居してゐた彼の妻の兩親の家に來て、その旅裝を解くことになつたのである。

その前からヴェルレエヌは近いうちに文學の世界に於ける驚異的な人物が巴里へ乘り込んで來ることを皆に告げて、彼は現存するすべてをくつがへし、すべてを後に瞠若たらしめるだらうと云つてゐた。皆が心待ちにこの怪物の出現を待つてゐたのであつた。爲めに、人たちが顏いろの惡いさびしさうな樣子をした、何時も隅つこに不機嫌な佛頂面をして、心配げた疲れた

らしい態度でだまりこくつてゐる髯もまだないこの少年を見た時には、隨分皆が失望したものであつた。

それでも初めの間は、ヴエルレエヌの言葉を信じて、皆がいい感情を持つて、ラムボオの來着を待つてゐた、モオテ夫妻もヴエルレエヌ夫人も、この不作法極まる人物を見て最初先づ吃驚したのであつたが、やがて彼を嫌がり憎み出すやうになつた。數日の後には、この闖入者の無遠慮な性格に愛想が盡きて、我慢がしきれなくなつて、モオテ夫人が、ヴエルレエヌにこの新しい友を自家から追ひ出すやうに命じた。

仕方なしにラムボオはモオテ家を出て、巴里を右や左へごろつき廻つた。或る時はここで世話になり、ある時はかしこで一夜を明し、詩人に助けられたり、畫家に追ひ出されたり、俳優に救はれたり、ブウルヂヨワの家へ天くだつたりして。

ヴエルレエスは、家人の命令によつて、止むなくラムボオを家から追ひはしたとは云ふものの、彼に對する果のない賞讃を續けてゐることには何の變いもないのであつた。それで千八百七十二年の冬には、彼は到る所へこの少年を連れて出掛けた。あらゆる文學藝術に關する集會には必ずラムボオを連れて行つて彼を賞讃し、奇蹟的な天才兒だと云つて皆に見せてゐた。

この二人の姿は巴里の文學界の到る所に毎日のやうに見受けられた。それでヴエルレエヌは自分でもよく出席する「いやな奴等の晩餐會」にラムボオを案内した。この會合には當時すでに有名であつた文藝界の人物や、その後有名になつた人たちが何時も大勢集るのであつた。バンヴイル、コツペエ、ド・エレヂア、レオンヂエルス、アルマン・シルヴエストル、レオン・ヂイルス、レオン・ヴアラド、カミエユ・ペルタン、カムボン兄弟、レガミイ、ヴエルレエヌ、ソオラン、ブラツクモン等がその重なる定連だつた。

ラムボオも幾度かその師傅（マントオル）に導かれてこの晩餐會に出席した。或る晩、食事の後で詩の朗讀があつた。ジアン・エエカアルが自作の詩を讀んでゐた、エチエンヌ・カルジヤがしきりに喝采した。するとラムボオが大聲に笑ひ出した。そして、

「――よせやい、馬鹿野郎喝采なぞしやがつて!」と怒鳴つた。するとカルジヤが負けては居ずに、

「――默れ!」とばかり疾呼した。

それに答へてラムボオが、

「――默りたかつたら默る、大きにお世話だ!」と返答した。

今度はカルヂヤが劫をにやして、

「――默らぬかこの洟つ垂しめ、默らぬと耳をひつぱつてやる

ぞ！」と呼んだ。

すると青年は物も云はずに、室の隅に置いてあつたヴエルレエヌの仕込杖を取つて來て、拔く手も見せずに白刃をひるがへして、カルジヤに切つてかかつた。列席の人たちが總立になつて止めたので幸に事なきを得たが、さもなければ、カルジヤは一突きに刺れてゐただらうと思はれる見幕だつた。このやうな狼籍に來會者一同が呆れてしまつたことは勿論であつた、その結果として、今後ラムボオの參會を禁止する旨がその場で決議された。

この決議に對してヴエルレエヌが極端な不滿足を示したことは勿論であるが、一説によると彼がその若い頃の文學の上の友人だちとことごとく仲たがへするに到つたのも、そもそもその端緒をこの事件に發してゐると云ふことである。

「いやな奴等の晩餐會」が、ラムボオの出席を以後禁止したのに反感を抱いて、ヴエルレエヌは彼の若い友を、他のもつと理解力のある藝術家たちに紹介することにした。一例を擧げれば、彼はラムボオをヴイクトオル・ユウゴオの所へ連れて行つた。當時ユウゴオに謁見することは無上の光榮であるとされてゐたものであつたのである。この半神はオリンプスの神のやうな清澄な態度で「醉ひどれ舟」の作者を接見した。ヴエルレエヌがこの少年の潑剌たる詩的天才に就いて語ると、大ユウゴオはぬからずに、この少年を「子供のシエツクスピイア」だと云つて一禮した。

ヴエルレエヌはまた千八百七十二年の展覽會に出品されたあの有名なフアンタン・ラトウルの作「卓の一隅」の中に、ラムボオを描かせることに成功したのであつた。畫布の中央にはエミル・ブレモンが立つてゐる、その右にはピエエル・エルゼアアル、その左にはジヤン・エエカアル、そして今食事の終つた許りの卓の角の所には、ポオル・ヴエルレエヌとアルチユウル・ラムボオとレオン・バラアドと、エルネスト・デルヴイとカミルペ・ルタンとが腰掛けてゐるのである。

ペルタンの脇にもう一人アルベエル・メラが入る筈であつたが、彼は來なかつた、ラムボオやヴエルレエヌと同席することをいさぎよしとせぬからであつた。それで彼の代りにその場所には一鉢の白いゼラニヨムが描かれた、そしてフアンタンは「詩人を花に轉身させた」と云つて自らを慰めてゐたと云ふことだ。

こんな風に、ラムボオはその行く先き先きで彼の周圍に集る人たちを顰蹙させた。それに彼の生活それ自身がすでに、幻に生きる人の常規を逸した奇怪なものであり、醉漢のそれであつ

た。彼は家常の原則として不斷にハシシか酒精か煙草かに醉つてゐた。彼はまた好んで夢中遊行と不眠症の快感とをたじなんだ。要之、彼は夢の中を行くやうにして實生活をなしてゐた。

　ジヤン・ブウルギニヨンとシヤルル・ヴアンの云ふ所によると、「ラムボオはその風彩、その態度、その言辭等によつて見る者を驚かし、不安がらせ、仰天させ、驚駭させずにはおかなかつた。そして多くの人たちは詩人としての彼のほかにそこに「いとふ可き無賴漢」否それ以上のものを見るのであつた。

「他のどの社會にも增して、自惚と、嘲弄と、氣儘と、個性の尊重との跋扈してゐる文學者及び美術家の社會に這入つて、ラムボオは少しもその生得の完全な獨立自尊の精神と、かたくなであると同時にまた氣まぐれな、然も亦生來の內氣に多少の人を食つた横着さとデリケイトな感受性との加はつたその全性格とを寸分もためやうとはしなかつた。その爲めに、彼は多くの人たちにとつては一個謎のやうな人物としか思はれなかつたのであつた。かうして或る者は彼を輕蔑した、或る者は彼を羨望的な疑問の眼を持つて眺めた。その爲めに今日われ等に傳はる彼に就いての思ひ出が多くは曖昧であつたり矛盾してゐたりするのである。ラムボオの巴里生活に於ける精神的失敗とも呼ぶ可き事實はかうして說明されるのではないかと思はれるのである。」云々と。

　ラムボオ自身も亦、これ等の人々に向つて自分を賞讃し尊敬することを强ふることは不可能であると感じたらしかつた。それでヴエルレエヌただ一人が忠實なる彼の「弟子」として殘るのであつた。然し惡靈は遂に惡靈であつた。この外來者の闖入が、如何に激しいいさかひをヴエルレエヌ夫妻の間に捲き起したことか？

　結婚後まだ月日も淺いこの夫婦の仲はいよいよ益々わるくなつて行く許りだつた。それにはさまざまな理由があつた。第一には先づ酒に對して戰はねばならなかつた。夫婦の間の不和の最初の原因であつたこの酒の病を退治しなければ決して圓滿に行く譯はなかつた。ヴエルレエヌはしらふの時には實に溫順な夫であり友人であつた、然るに少し醉つて來ると、不快極まる亂暴者になるのであつた。彼の親友たちでさへも「始末のわるい酒」だつたと云つてゐる位であるから、年若い彼の妻君がそを持ちあぐんだであらうことも十分に察せられるのである。許婚であつた當時、一時廢して居つた酒が、戰爭のまねごとに行つて居た間にまた復活して、ぐでんぐでんに醉つぱらつて歸宅するやうなことが幾度かあつた。妻君がそれを歡迎しないのは分りきつたことである。

第二の理由は妻の兩親の家へ彼等が夫婦して寄寓したことであつた。

第三の理由は彼が市役所の吏員をよしたことであつた。明けても暮れてもほかにせうことないので、彼は珈琲店へ行つて酒を飲むのを仕事とするやうになつた。

尤も夫婦の間に一子ヂョオルヂが生れたことは、夫婦の絆を强める有力な材料であつたのである。ヴエルレエヌはその一生の間、この息子のことを語る時には常に慈愛の情にその眼を輝かせる程であつたから、長くこの子のそば近く生活することが出來たなら、よく愛しいつくしんだであらうと思はれるのである。何はともあれ、子供の生れたことは妻君にとつては、自分から去りつつある夫の愛情をひきもどすには十分な好材料であつたらうと思はれるのである。然しその時にはすでに、ヴエルレエヌ夫人の心の奥に夫婦の愛よりもなほ强い疑念が宿つてゐたのであつた。この疑念はラムボオが彼等の家に初めてその姿を現したその日から生れたのであつた。「醉ひどれ舟」の作者の天才に對するかの女の夫の途方もない熱心さと、ほとばしるやうな友情の發露とは、早くもかの女の心の内に猜疑の念を起させたのであつた。然るにその後間もなく、長時間に渡る二詩人のさし向ひの親密な交際や、それとなく見て取た二人の握手や、怪しげな二人の馴れ馴れしさや、等々が、かの女の疑念に褒書するのであつた。

ラムボオは、その若々しい顏の美しさと、その靑春の光のみなぎる肉體のチヤアムとを持つて、誰れの眼にも明かに綺麗すぎ、やさし過ぎると見えるのであつた。彼は身丈が高く、立派な體格をしてゐた。頭髮は明るい栗色で眼は氣味の惡い程の碧さであつた。完全な楕圓形を描く彼の顏は、人を魅了すると同時に一種不安な心持を與へるのであつた、眩しい程にきらめくその眼の中にあまりに多くの熱情を貯へてゐるからである。

この不思議な靑年は人を引つけると同時にまた人を反撥した。然しどの道、何人もこのボオドレエル風な敗德の美少年の側を過ぎて、そのオリヂナリテイに打たれずに居ることは不可能であつた。

すでにこの當時、神經質であり、不安な精神狀態にあつて、その上にまた日頃の過度の飮酒の結果、極度に苛々してゐたヴエルレエヌが、彼の年若い友の美しさと才能とに熱中したことはほぼ想像の出來ることである。

彼はこの頃からすでに、後に彼の妻が法官の前に立つて苛酷に彼を責めた所の「罪の情熱」に燃えて居たであらうか、そして彼の妻がそれを感づくに到つたのであつたであらうか? 確

なことは何人も知る事が出來ぬのである。ともすればその頃の二詩人の間にはまだ空想的な精神的な誘惑があつただけかも知れぬのである。

よしまた彼がこの誘惑の陷穽に落入つたとしても、それは只に彼一人の罪であると許りは云ひ難いやうでもある。この不安な、神經質な、何時もそはそはしてゐて、何時もさびしい、そして何時も許して貰ひなぐさめて貰ふことを必要とした詩人の魂を了解し得なかつた罪は當然彼の妻と彼の母との上にも分たる可きであるやうに思はれるのである。

エドモン・ルペルチエも云つてゐるやうに、彼の一生を通じてヴェルレエヌの上に感化力を持つてゐたのはたつた二人しかなかつたのであつた。彼の妻と彼の母とがそれであつた。然るにヴェルレヌの母は彼の女の息子に對してあまりに寛容に過ぎ、嫁とその家族とに對しては甚だ不公平であつた。そしてまた彼の若い細君は、一日增にわるくなる良人の酒ぐせと亂暴とに、ただおどおどと泣きほろめいて、全くなす所を知らなかつた。

このやうに、彼の上に何事かをなし得る力を持つた二人の女が、それに氣づかずに、その爲す可きをなさなかつたのは彼にとつては實に大きな不幸であつた。

そればかりではなく、彼の細君はまたその良人の名聲と仕事に對してあまりにも無關心であつた。かの女はその良人のうちに野卑な缺點以外の何物をも見る事を欲せなかつた。すでに幾度か云つたやうに、ヴェルレエヌは薄志弱行の徒であり、一種の病人であり、感情的な人物であつた、然し彼が若し、その最愛の妻であり、かつて一度も愛することを止めなかつたかの女から、了解され、助けられ、「看護」されたとしたら——ともすれば彼と雖も、あのやうな放埒な生活に身を持ち崩さなかつたであらうと思はれるのである。ヴェルレエヌも自分でそれに氣がついて、次のやうにそれを殘念がつてゐる、

あなたには我慢が足りませんでした
それも決して無理だとは思ひません
あなたはまだお若いのだから
そして思ひやりの足りぬ心は若い人にはありがちなことな
のだから

彼はわれとわが身の上を嘆き、またそれと同時に、詫び言を言ふのである、

あなたにはやさしさが足りませんでした、

それも決して無理だとは思ひません、
おお、冷たい私の戀人よ、あなたはまだお若いのだから、
あなたの心が無關心なのもまた止むを得ぬことでせう！
それだから私は今あなたにお詫びするのです、
勿論私も陽氣ではありません、然し心は落付いてはゐます。
この悲しい月日をあなたのおかげで、世にも不幸な男となり果てた自分を嘆きはしてゐますが。

それは果して妻のつれなさに對する激怒の結果であつたか？それともまたラムボウの憑きものである旅を愛する心がヴエルレエヌにも感染したものであつたか？その何れであるかは今日われ等には知る由もないが、兎に角、ヴエルレエヌはやがて巴里には居難い心持ちになつて來た。彼にも「出發」の執念がつきまとうやうになつてゐた。

彼の妻が良人を引き留める爲めに何事をもなさなかつたことも亦事實である。他方、妻君の兩親たちも、亂暴極まる彼等の婿の生活ぶりを見て、かれ等のブウルジョア氣質で刧をにやして、詩人が旅へ出て不在の間を利用して、行く行くはヴエルレエヌ夫人を離婚の方へ導く心算であつたらしいのである。

兎に角、ヴエルレエヌは出發の用意をしてゐる間、誰にも邪魔されなかつた。そして千八百七十二年の七月の或る日、ラムボオと彼の二人は暫く外國へ旅行することに、何か當然のことをなすかのやうに、決めてしまつたのであつた。いよいよ旅へ出ると定ると、今度は二人のうちの誰が云ひ出したと云ふでもなく、子供らしいなぐさみ心から、嘘の出發をして彼等の馳落の豫習をしたら面白からうと云ふことになつた。つまり二人は馳落すると見せかけて、實は馳落しないのである。かうして世間の人たちを愚弄したり、二人が久しく憧憬れてゐた自由を思ひのままに味つて、足の爪先の向くままに町でも村でもかまはずに歩き廻つて、狂人のやうに笑つたらさぞ愉快だらうと云ふのである。かう考へただけでもすでに嬉しくなつてたまらず、彼等は教室から放たれた小學生のやうに陽氣な心持ちでアラスへ向つて出發した。彼等がピカルヂイのその市に到着した時にはまだ時間が早くつて、ヴエルレエヌの知り人の家を訪ねて行くには都合が悪るかつた。それで彼等は先づ停車場の食堂で休むことにした。其所で、時間を過す爲めに、二人は差しつ差されつ、しきりに酒杯の數を重ねた。さて醉が廻つて來ると、いたづらをして彼等の周圍にゐる田舎者を一つ吃驚させてやらうではな

いかと、忽にして相談が一決するのであつた。極めて冷靜な態度で彼等は互にその兇行の樣子を語り出した。殺人、强盜、老婆强姦等々、彼等は何一つ忘れずにことも細かに語り合つた。そして彼等の物語に事實らしい假面を被せる爲めに、彼等は其所此所の刑務所の印象をさもよく知つてゐるらしく語り合つた。然もそれ等のことは誰れはばからぬ大きな聲で語られたので、彼等のあたりに集つた旅客の耳にも入つて、やがてその人たちの間に一種の不安な空氣がただよひ出した。彼等はこの怪しげな二人の旅の者は破獄囚に相異ないと思ひこんだ。それで官憲へ密告するのが一番に用心深いやり方だと人たちは思つた。やがて、二人の男が來てラムボオとヴエルレエヌについて來るやうにと命じた。二人は音なしくその命令に從つた。

二人は、目くばせと、ささやきと、あきれかへつて見てゐる人たちの顏との中を押しわけて停車場を出た。すると間もなく構内に生れた噂が市中へひろまつた。有名な二人の殺人犯人がつかまつたと云ふのである。仲には殺された人々の性や、年齡や、職業や、傷口の寸法まで事も細かに語つてゐる人さへもあつた程である。

市役所へ引立てて行かれた二人は早速取調を受けた。するとラムボオは音なしやかな子供らしい樣子をして、しくしくと泣き出した。次に調べられたヴエレエルヌも亦ラムボオの申立どほりのことを云つた。檢事もこの時には巡査が間違つて罪のない人をつれて來たのだと氣がついてしきりに詫び言を云つた。するとまだ此時全く醉の醒めきらぬヴエレエヌは大聲をはり上げて怒鳴り出した。彼は檢事を脅した。彼は列席の役人たちの上に怖しい視線を投げて、この亂暴な拘引を新聞に書き立てて、一大問題にしてやるぞと脅かした。彼の共和黨の同志等はこんなことをされて默つて居りはせぬから覺悟しろとも云つた。次に彼は自分はメッツに生れたのだが選擇によつて佛國人たるの國籍を取得した得のである。然るに今日の如き橫暴なる佛國官憲の取扱を受けるに及んでは、彼は獨乙官憲の保護を願ひ出る心算である。少なくも彼等は惡黨だけを拘引するものだ位のことは心得てゐる筈だ、とも辯舌をふるつた。

法官が立腹して巡査を呼び出して、この二人の者を停車場へ護送して最初の汽車で巴里へ送還せよと命令した。

二人は巴里の北停車場へ着くと、下車して、食事をして、すぐまたその足で白耳義行きの汽車に乘つた。白耳義から彼等は英國へ渡つた。

彼等の旅行の第一歩に於けるこの冒險は先づ大した災害もなくつて終つたのであつた。然しこの旅行の間にはもつと大きな

不幸が幾度か彼等二人の身の上に起きたのである。不幸にしてそれ等の悉くは今日人に知られて居らぬのである。殊にこの二人の友人が千八百七十二年の秋から冬にかけてロンドンに滯在してゐた時の事はほんの少ししか知られて居らぬのである。

然しそれにしても、その年の九月の頃、ヴエルレエヌは度度、ロンガム街(ストリイト)にあるレガミイの畫室を訪ねて行つた事だけは知られて居る。彼は其所で長い間畫家と無駄話をして歸つて行くのであつた。畫家は話をしながらも畫筆持つ手をしきりに働してゐるのであつた。

或る日、ヴエルレエヌはこの畫室で感興が湧いて來て、一枚の紙片をとるといきなりそこへスダンの敗戰後のナポレオン三世の漫畫を描いた。畫が出來上つて見ると、今度は何だか畫だけではまだいたづらが足りぬやうな氣がして、そこへ文學を少少追加することにした。そしてコッペエの詩風を眞似て漫詩を即座に書きつけて、コッペエの十字架を書きこんだ署名と花押までしてしきりに悦に入つてゐた。

このやうな子供らしいいたづらをして、ヴエルレエヌは、ロンドンの旅の空が彼の上に注ぐ重い痛はしい退屈を忘れようとしてゐたのであつた。ヴエルレエヌに比べるとまだ多少實際的な所のあるラムボオはこの時の英國滯在を利用して英語の勉强を始めてゐた、そしてシテイの大商人の二三と交際して後日探險家として身を立てる下地を作つて居た。ロンドンに於けるラムボオの生活費は悉くヴエルレエヌの負擔であつた。

然しヴエルレエヌは一體ロンドンで毎日何をして日を暮してゐたのであらうか？昨日氣輕な初心な調子で「やさしき歌」を歌つた詩人は自ら求めたこの追放の旅の退屈な日日の退屈な時間を何をして過したものであらうか？彼は靜かに彼の四圍に起る事物を觀察して一々それを書き留めて居たらしいのである

これ等ロンドンに關する氣儘なノオトはどれも皆書つぱなしな投げやりなものではあるが、然しまたそこにはそれぞれの生々した面白味と巧みに捕へた眞實とがあつて捨て難い小品をなして居るのである。ヴエルレエヌは友人ルペルチエに書き送つて多くの手紙の中にその一端を示してゐる。

次に示す斷片の二三は彼がロンドン生活の樣子をわれ等に暗示するのよすがともなるであらうか？

「ロンドンと云ふ市はぺちやんこな黑い虱のやうな市だ。黑ずんだ小さな家々、それ等はむしろゴテイツク風の或はヴエネチヤ風の長持と呼ばるべきであるかも知れぬ、ちよいと飲める程度の珈琲店が四五軒はあるが、どうせそれと

て大したものでない事は確だ。バチウルに見せたら笑ふだらう！(註。バチユウルといふのは「殉教者のビイヤナホオル」でヴエルレエヌやルペルチエを常得意としてゐたボオイ、バプチストのあだ名であつた。) その餘はことごとくDining-Room許りだ、そしてそこで酒は出さぬと來てゐるから文句はない。それでなければCoffee-Housesであつてここでもl'esprit (spirits) は念入りに除外されてゐるのである。さかしくも僕が發した One Absinth, if you please-mademoiselle!-といふ注文に答へて一人の maid が答へたものだ、うちにはESPRITは置きません。」と。

「雲霞の如き大勢の赤い顏をしたボオイスがたつた一ペネイで朝から晩まで靴を磨いて呉れる。あのねばねばした靴墨のおかげで光澤が出て來ると、ラペルトオジエエルがその秘傳を掘つたと信じてゐる例の光澤だよ、(註。ラペルトオジエエルと云ふのは、俳優フランセスがニナ・ド・カリヤスの家で演じたことのある獨語(モノロオグ)の中の人物の名なのである。)今度は舌を延して本當にペロリペロリと靴を舐めて呉れるのである、さて又其の上で、片手には硬いブラシ、片手には柔かいブラシを握つて勢よく磨きにかかるのである。さうすると靴が光るの何のつて、お話にならぬ程だ！

ここは襤褸屑の勝利の市である。こんな襤褸屑が他にまたとあらうとは一寸想像も及ばぬ事である。例へばどんなみすぼらしい乞食でも、勿論例の赤い顏の靴磨のおかげでその靴たるや、靴の底も足の指も一緒に、シリユス王のそれか思はれれほどにぴかぴかと光つてゐるのである……

「ここではすべては小さい。尤もシテイだけは例外だ、其所には大きな事務所や銀行がある、尤もサウスヮアクも例外だ、其所は大工場や大倉庫の立ち並んだ廣い通りだドックも例外だ、尤も之れはアンヴエルスのそれに比較するとやや見おとりがするけれど、ベルクラヴイヤ廣場も大きいものの一つだ、それからまた素晴しく大きい終點ホテルもあるが、然しそれにしてもこの市ではすべては小さいのである。家は三階建てで、屋根は下からは見えない。戸口も、廊下も、玄關脇の呼鈴も、Public-hous.s のコムパアトも、(これはまるで柘榴の實の內部のやうにこまこまと仕切られてゐる)、壁の煉瓦までが小さいのである、そして忽のうちに赤黑くなり、やがて眞黑くなつてしまうのである。凡が小さく、薄く、やつれてゐるのである、殊に貧民たちがさうなのである、靑ざめた顏をして、疲れたらしい様子をして、骸骨のやうな細長い手をして、まばらなあご

ひげを生して、空倉の中で精氣を失つた馬鈴薯のやうに、溫室の花のやうに、もやしのやうに、力なげに自然にちぢれた何の興味もないけれど然しまた美しい品格の備つた貧民達の殺されてもいいとまであきらめ果てた悲慘な苦しみは何ものも語り傳へることは出來ぬだらうと思はれるのである、……」

　ヴエルレエヌはまた他の機會に、不味い煙草のこと、高價くつて手の出せぬ葉卷のことを書いてゐる。綺麗な珈琲店は一つもなかつた、（このことについてはヴエルレエヌとラムボオが如何に骨を折つて搜索をしたかは神さまが御承知です！）、「穢らはしい居酒店か、さもなければライセスタア・スクエアの商人御用の珈琲店で我慢をするより仕方がない。」と彼は書いてゐるのである。自家と珈琲店とをとりちがへたやうな生活を、巴里でしてゐたこのボヘミアンは、ロンドンへ來て氣に入るやうな立派な珈琲店が見つからぬので大いに難儀したものらしいのである。

　黑奴の多いのにも彼は感心してゐる「まるで雪がふるやうにうようよしてゐる。」と彼は書いてゐる。寫眞屋のウインドオには必ずスタンレイの肖像が出てゐた。政事犯で追放されて來てゐるリスガレイ、ヴエルメッシ等と珈琲店で會つて話をすることが時々の慰安であつた。

　かうしてゐるうちにヴエルレエヌもだんだんロンドンに慣れて來たらしいのである。彼はラムボオを通じてシテイの大商人の二三とも知り合になつた、或る時、彼等はヴエルレエヌに事務所へ來て働いて與れないかと申出た。さぞ立派な事務員が出來上つたであらうと思はれるのである！然しヴエルレエヌはそれには應ぜずに、またしても、毎日明けても暮れてもロンドンの市ぢゆうを步き廻つてあすこのバア、此所の居酒屋で、お行儀のよい活潑なバア・メエドにからかひながら强いジンを飮みつづけて無爲なその日暮をしてゐた。

　それで、彼の仕事は、詩作は、どうだつたのか？ヴエルエヌは決して人が考へるほど、それを忘れてゐたわけではないのであつた。ラムボオがシテイへ出掛けて商人たちと片言の英語を喋つてゐる間に「やさしき歌」の詩人は一卷の詩集を書き上げてゐたのであつた。「言葉なきロオマンス」がそれである。

「僕の生活は徹頭徹尾智能的である。僕がこんなに仕事をした事は實に今日まで未だかつてなかつたことだ、それと云ふのも今の僕が、うるさい饒舌や、無駄話や、意地惡るや、惡口や、罵詈やから遠ざかつて生活してゐるからだらうと思ふ……。」斯う

彼はルペルチエにその近況を書き送つてゐる。勿論、自己辯護の爲めにする多少の誇張はあるにしても、彼が當時ロンドンにあつて詩作に熱心してゐたことは事實であつた。數週間の後に彼はまた同じ友に宛てて次の手紙を書いてゐる。

「近日中に「言葉なきロオマンス」の原稿を印刷所へ渡す心算だ。一卷は、言葉なきロオマンス、白耳義風景、おどけた夜(民衆的十八世紀)Birds in the night の四章からなつてゐる詩集だ。題詞には、

　襟紐のついた灰いろと緑の衣を着て、
　私が心かなしかつた六月のとある日に、ほほ笑みながらかの女は私の目の前に現はれた、
　私は後先のことも忘れてひたすらにかの女に見入つた。

と置く考へだ。全部で四百行ばかりの詩集になる筈だ。本が出來たら直ぐに送る。千八百七十二年の一月には出來上る豫定だ。」

ヴエルレエヌがこの時、果して彼の詩集がロンドンで出版されると信じて居たものか、それともわざとかう云つて友人を瞞したものか、その邊のことは分らないけれども、この詩集は遂にロンドンでは出版されず、二年後になつて作者がモンス監獄に入獄中の千八百七十四年に、ルペルチエの世話で、佛蘭西で出版されたのである。然し彼がロンドンでこの詩集を出版する本屋をたづねたことは事實である。

その頃彼の苦勞は、ただに詩集出版の苦勞だけではないのであつた。巴里に殘された彼の妻君は五月蝿く彼に手紙を書いて年額千二百法の扶助料を要求して止まなかつた。然るに彼は一文たりともやり度くないのであつた。かの女に對する彼のこの心持が分ると、かの女はいよいよ彼に向つて最後の手段として、法律の手續による攻撃を開始して、離婚の訴訟を起す準備を始めた。モオテ夫妻が娘の離婚に都合のよい云ひがかりとなるヴエルレエヌの外國滯在を內心大いによろこんでゐたことはさもある可しと察せられる。彼等は辯護士の助を借りて、ヴエルレエヌの不在を利用して、氣長に離婚訴訟の準備をなした。そしてその目的の爲めにロンドンに於けるヴエルレエヌとラムボオの生活に就いて汚辱的な噂をしつつこく流布した。やがて機會の熟した頃を見計らつて、彼等はいよいよ離婚訴訟を提起した。告訴狀には「恥ず可き罪過」が一々生々しい言葉で書き立ててあつた。

ロンドンの閑居にあつて、このことを知つたヴエルレエヌ

は、烈火の如く憤つた。彼は叫んだ、

「吐ミゼラブル！こんなことをして吾輩を困らせやうと云ふ計略か！よろしい、それならこちらにも覺悟はある。その手は桑名の燒蛤。（「その手はオスタンドの燒蛤」とこの時彼は大陸の空をにらんで叫んだかも知れぬのである。）吾輩にも味方の友人がある、彼等の助力を借りて、新聞に書かせ、證人をあげ、名譽裁判を設定して見せるからさう思へ。」

彼は一氣に筆を取つて、彼の母に、エドモン・ルペルチエに、エミル・ブレモンに、その他數人の友人に手紙を書いて、彼の潔白を證據立てる爲めに、彼が考へてゐる手段を細々と云ひ送つて、各位の援助を求めた。彼はラムボオと一緒に醫學上の檢證を受ける覺悟だとまで云つてゐる。

人々は彼に沈著と冷靜とを勸告した。然し彼の心の中の怒の浪は仲々にそんなことでは落付かなかつた。然るに他にまた色色の事件が發生し來て、彼は自分の夫婦關係のこと許り考へてはゐられなくなつた。事件の一つはラムボオの出發だつた。この實利的な青年は、自分の未來に必要だと信ずる英語を學び、二三の商人の知遇を得てしまうと、やがて此上ロンドンにうろうろしてゐても仕方がないと感じ出して國へ歸ると云ひ出した。

この離別はヴエルレエヌにとつては實に非常なつらい事だつた、彼は一朝にしてこの外國の大都會のたゞ中に知り人もなくてたつた一人で殘されたのであつた、それさへあるに彼にはその他にも山と積る物質上精神上の苦勞があつた。間もなく彼は病氣になつて旅の空で床についた。彼は自分を重態だと判斷した。それで彼は、ラムボオの所へ、母の所へ、妻の所へそれぞれ電報を發して早く來て死水をとつて呉れるやうにと嘆願した。ラムボオと母とがあたふたと驅けつけた。病氣は何でもなかつた、只ヴエルレエヌは非度く神經をつからせて居たに過ぎなかつた。それで彼の愛する二人が枕頭に看護するやうになると、彼は忽ちにして全快してしまつた。

彼の心を悩ました事件のもう一つは詩集「言葉なきロオマンス」であつた。彼は色々と奔走したのであつたが、ロンドンではどうしても出版することは出來なかつた、他方ルペルチエも巴里で色々と骨折つて見たが出版を引受ける本屋が見つからなかつた。然るに彼の希望ではどうしても離婚訴訟の判決前にこの詩集を世に問ひたかつたのであつた。

これ等の重(かさ)なる苦勞と、それにまた彼の母の、息子が靜かな田舍の自然の懷に歸つて其所で穩健な生活をもう一度取りかへす事を欲する希望もあつたので、彼は一端英國を去つて白耳義

のジエオンヴイルに住んでゐる叔母さんのエヴラアル未亡人の許へ行つて數週間を過すことに決心したのであつた。

千八百七十三年の春の初めに、彼はかうしてロンドンを立つたのであつた。かうして彼は今その一生の最大の災厄に近づきつつあるのであつて、次の年の春を監獄の四壁の間で過さうとしてゐるのだとは神ならぬ身の知る由もなくて。

＊＊＊

肥沃な白耳義の田園は、ヴエルレエヌにとつては幾度か浮き世の苦勞を忘れる爲めの隱棲の場所となつた。事實また、時とすると野卑な物質主義者だとしか受取り悪い言行を示すこの詩人は、ここワロニイ地方の森の匂ひを含んだ淸淨な空氣を呼吸して、陽氣な百姓たちと、心おきない隣人たちと、よく飲みよく食ふ元氣な田舍者たちの間に立ち交つて、呑氣に暮すことを無上の悦びとしてゐた。村人たちもまた何時になつても快よく兩手をひろげてヴエルレエヌ大尉の息子を歡迎するのであつた。

この間の消息を窺ふ爲めには、ヴエルレエヌが、如何に感動と感謝に滿ちた筆でこの豐饒な地方のことを「白耳義の寫生」なる文章に書いて彼の愛着を示して居るかを見る可きである。

この度も亦、この田舍の環境が彼の疲れ果てた神經に無上の好結果をもたらすものであつた。長い時間を彼はサモア河の流に針を垂れて、靜かに自分の妻との間の葛藤を繰りかへし卷きかへして考へて見た。そしてその結果として、これはどうしても妻と仲直りをするより他に解決の方法はないと心付くのであつた。然しどうしてそれを實現す可きであらうか？彼の妻は果して今もなほ彼の愛情を受ける價値のある女であらうか？それさへ今では疑はしい事の一つであつた。彼は友なるエドモン・ルペルチエに頼んで、一度行つて彼の妻に會つて見て貰ふことにした。彼はその時の手紙にかう書いてゐる

「それで僕が欲することは、僕は仲直りだとは決して云はない、——何故ならば僕はかの女に對して一度だつて腹を立てたことはないのだから——たゞ單純にかの女が僕の所へ直ぐに歸つて來ることだ。最近に僕はその事をかの女に手紙で云つたやつたのだ。これがこの交渉の最後のものであることも念の爲めに書き添へて、僕はかの女が何と云ふか今その返事を待つてゐるのだ。勿論、暫く待つても返事が來ないとすれば、僕も自由に行動にする心算だ。いらいらしながら當も無い女を楡の木の下で何時までも待つて暮すほどの僕もまだ馬鹿ではない！」

彼はかうして洒落（あつさり）と彼我の位置を轉倒してしまつたのであ

る。彼としては仲々な手ぎわである。今では彼が妻の歸復を夫としての權力を楯に要求してゐるのである。次に彼はその外見程熱心に妻の歸復にこがれてゐるものではないことを示す爲めに、數個月以來彼のうちに生れてゐる文學上の計畫について滔々と語つてゐる、

「僕は今これから書かうと思ふ實に素晴しい短篇小説や詩やの腹案で身體中がむづむづしてゐるのだ。僕は最近に散文の劇を一篇書き上げたことはすでに君に云つたと思ふが、それは「オオバン夫人」と云ふ一篇だ。――ジヤツクとはまた別な意味での「素晴らしい裏切られた良人」を取扱つたものである。僕の「良人」は近代人なのだ。そして極端に皮肉なのだ。つまり小デユマの作中に出て來る策士どものそのまた一枚上を行つたやうな人物なのである。他にまた僕は今喜歌劇の仕上げをしてゐる。これは二三年前にシヴリイと合作で始めたもので時代は十八世紀だ。音樂が出來上つたら、ブリユツセルのアルカザアル座で初演される筈だ。「百人の處女」も「マダム・アンゴの娘さん」も皆この座で初演されてあんなに評判になつたものなのだ。――その他にもまだ一つ散文の小説がある。これは及ぶ限りのサデイツクなものなのだが、わざと乾燥した文章で書いた。それからまた一群のソンネが出來さうだ、そしてLES AMIES はその一部分をなすものだ。その序曲（プロロオグ）を玆に同封して送るから見て呉れ給へ、大分錯綜してゐるけれども意のある所は十分に分る心算だ。云々。」

ただ殘念なことには、これ等の腹案がどれ一つとして完成されなかつたことである。腹案は遂に腹案として永久に殘されるのであつた。それ許りか「言葉なきロオマンス」の原稿はルペルチエの骨折で本屋から本屋へと持ち廻はられてゐるのだが、まだどうしても出版を引受けて呉れる所が見つからぬのであつた。他方夫婦の仲直りの事も一向にはかばかしくは運ばなかつた。

彼の妻の感情に呼びかけてその愛情を呼び起さうとする彼の試も、母としてのかの女の本能に呼びかけやうとする彼の試も、すべて悉く無駄に終つた。彼が示す好意に對する返答としてモオテ一家は印紙を貼つた書類を次々に彼の所へ送つてよこすのであつた。かくて離婚の訴訟はいよいよ進行して判決の下るのもやがて間もない事だと察せられた。

このやうに進退共に谷つた狀態に陷つて、今やわがヴエルレエヌは、何か向ふみずの自暴自棄な事をでもするより他には全くのつぴきならぬ狀態になつてゐたのであつた。一體人たちは彼に何を責めてゐるのか？　彼がラムボオと親交があると云ふ

ので、世間は彼を悪人扱にしてゐるのであつた。「よろしい見てゐやがれ！」と彼は捨料白を殘して、わざとモオテ一家の人たち及びその一味を驚す爲めに、またしても、これ見よがしにラムボオと相連立つて大びらに旅に出たのであつた。

彼等は二人あひ携て白耳義を歩き廻つた、そして毎日行く先々でしたたか酒を食つて醉を買つた。ふとまた二人は氣まぐれな心持から、またしても英國へ渡つて見る氣になつてアンヴエルスから船に乘つた。「十八時間の手頃な海上散策、樂しい脫走、云ひやうもなく美しい旅行だつた」とロンドンへ着いた上でヴエルレエヌは書いてゐる。その次の便では彼は英京に於ける彼等の生活の様子を少しく洩してゐる。食ふ爲めには仕方なく佛蘭西語を教授してゐることなぞを語つた後、またしても「言葉なきロオマンス」の原稿に關する注文を云ひ送つてゐる。彼はこの詩集の原稿をわざとふざけてギユスタアヴと呼んでゐる。彼は云ふ、「ギユスタアヴはどうなつたか？ ギユスグアヴは身を落付けることが出來たか？ 一體人たちはギユスタアヴの何所が氣に入らぬと云ふのか？」そうして彼は月給百法のフレンチ教師(ティチャア)としての目下の彼の結構な御身分に付いて、例によつて面白い懐疑的な笑談を云つてその手紙を綴つてゐるのである。この手紙で見ると、數日の後にあの大災難が起るやうな様子は少しも見えぬのである。

時は千八百七十三年の六月の末である。二人の友人は暫く定住する心算でロンドンに落ち付いた様子である。然るに思ひもかけず、或る日突然に、ヴエルレエヌは急に鎖を斷ち切る事を思ひ立つた人のやうに、一文なしのラムボオを、一言の挨拶もなく置去りにしてアンヴエルスへ逃げて歸つたのである。

二人の間に果して何事が起つたのであるか？ ヴエルレエヌはこの脫走を實行した時に正氣であつたのか？ 私たちはそれに就いては何にも知ることは出來ぬのである。ただ一つここに特筆す可きことは、ヴエルレエヌが當時非常に亢奮して居たことである。いよいよ切迫して來たその最愛の妻との離婚の宣告が、彼をまるで氣違のやうにしてゐた。その宣告が下されたその時から以後、彼とかの女との間の關係は凡て消えてしまつて、互に路傍の人となるのだと思ふと、あのやうに深く愛した女だけに、彼はかなしくつて居ても立つても居られなくなるのであつた。彼は幾度か自殺する心算だと人に語つた。この頃彼に逢つた人は誰でも皆彼が極端なる亢奮狀態にあることに氣づいたと云ふことである。

瘋癲院から逃げ出した狂人のやうに、彼は船にかけつけてアンヴエルスへ着いた。翌日にはブリユッセルへ來て、其所から

彼の母に宛てて手紙を書いた。彼はまた妻君にもどうか彼の所へ來て呉れるやうにと嘆願した。例の病的に發達した想像力で考へて見て、彼は妻が來て呉れるものだと信じ切つて少しも疑はずにゐた。彼の母から手紙が來て、妻君の決心はすでに堅くつて動し難いことを報じた時には彼の失望はまた大きかつた。母は息子に暫く我慢して待つやうにと云つてよこした。そして二三日後でかの女自らブリユツセルへやつて來た。

妻の方が絶望だと知ると、ヴエルレエヌの心はまたもラムボオの方へ向き直つた。彼はラムボオの所へ手紙を書くやら電報を打つやらして、しきりに謝罪した。そしてどうか來るやうにと哀願した。ラムボオは直ぐにやつて來た。然し彼が來たのはヴエルレエヌとの共同生活を續ける爲めではなかつた。彼はもうそれには飽々してゐた。ことにヴエルレエヌが、彼をロンドンに置去りにして以來、彼の決心も出來てゐた。彼はヴエルレエヌに金を出させて、その金を持つて巴里へ行つて暮す心算だつた。ヴエルレエヌはラムボオのこんな要求は全然はねつけて聞入れやうとはしなかつた、彼はただ從前通り共同生活をすることだけを承知するのであつた。この二人の爭ひの間に、ヴエルレエヌの母がブリユツセルへやつて來て二人の間に邪魔者になつた。

かの女が着いた翌日に、二人の間に最後の談判が行はれた、後年、退屈な病院の長い宵の物語りに、ヴエルレエヌが當時を思ひ出して、アドルフ・レツテに語つた所によると當時の模樣は次のやうだつたと云ふことである、

「わしには、その時のブリユツセルに於けるラムボオとわしとが、今でもありありと眼に見えるやうだ。私たちはパチエコ街のあの怪しげなホテルに宿つてゐた。わしはベツトの足の方に腰かけてゐた。彼は、戸口の近くに立つて、腕を組み合せて、見るから挑戰的な態度でわしに臨んでゐた。ああ、あの時の惡意と慘酷な炎とに燃えてゐた彼の罰せられた天使のやうなその瞳！その前にわしは、彼がわしと一緒に殘るやうにと言葉をつくして說いたのであつた。それなのに、彼はどうしても去ると云ひ張つて、何と云つても承知しなかつた。そしてわしはその時、何物も彼の決心をひるがへさせる事は出來ぬのだと心に感じるのであつた。

「わしの妻と子との所へ、わしを連れもどさうと、わざわざ巴里から出て來られた氣の毒なわしの母もその場に居られた。母はこの時すでにわしが夢中になつてゐるのを見て取つて、わしを靜める爲めに片手をわしの肩の上に置いてゐられた。

「ラムボオとわしは、かうしてものの五分間も、無言で身動も

せずに睨み合つてゐたであらうか
「最後にラムボオが背後むきになつて、
「――行きます。」と云つた。
「そして廊下へ出ると、彼は走るやうにして階段を下りて行つた。彼の足の下で音を立てる階段にわしは耳を傾けてゐた。すると思はず識らず、わしの呼吸はずんで來て、私にはあたり一面のものが眞赤に見え出した。その時、わしには彼がわしの腦味噌と心臟とを奪ひ去つたやうな氣がするのであつた。
「わしには彼の足音さへもやがて聞えなくなつた、するとわしの心の中は大暴風雨のやうになつた。わしは立ち上つて、戸口の方へ馳け出した。母が立ちふさがつてわしを障らうとした。
「――ポオル、お前は今狂つてゐるのだ、氣を確におもち、お前の妻子のことを思ひ出すがよい！」と嘆願するやうに叫んで云つた。
「然るに怒の方が强かつた。わしは何とか大聲に毒づきながらかの女を突きのけた。それでもまだかの女がわしの前に立ちふさがらうとするので、わしは手荒くかの女を突き飛ばした。わしの力が强かつたので、かの女はしたたかその額を戸口の框に打ちつけた。
「わしは落ちるやうにして階段を下りた。街へ出て見ると歩道の上をボタニツク廣道の方へ向つて歩いて行くラムボオの後姿が見えた。彼は決し兼ねた樣子でゆるゆると步を運んでゐた。わしは彼に追ひついて云つた。
「――歸つて來て呉れ、でなけや用心しろ、きつとおそろしい事がもち上るから！」と。すると彼が答へて、
「――五月蠅い！」と云つた。
「それを聞くと、わしはもう此の上は彼を殺してしまうより他に仕方がないとわしに云つて聞せた。わしは何時も身につけてゐる拳銃を取出して二發放つた。ラムボオは倒れた、人たちが寄つて來てわしを捕へた。」
本當にこの話のやうに事件は行はれたのであつたらうか？ヴエルレエヌの記憶はあんまり正確ではないのだから、彼のこの話も多少疑ふ可き餘地もあるやうに思はれるのである。それにまた事件の後で、唯一の傍觀者であつたヴエルレエヌの母が、ルペルチエに語つた所によると大分また話がちがふやうである。
ルペルチエが傳ふる所は次のやうである、
「ラムボオが去ると云ひ出したのを切掛に、二人が云ひ爭つてゐたブリユツセルのリエエジ・ホテルのその小さな一室に、かの女もまた第三者として居合せたのであつた。

「ラムボォはこんどヴエルレエヌの所へ來たのは、その足で直ぐにまた去ると堅く決心して來たのだと判然云つてゐた。金だけ貰つてすぐにおさらばをする心算だつた。二人とも酒を飲んだので氣が荒々しくなつてゐた。酒に弱いヴエルレエヌの方が餘計に興奮して激怒してゐた。ヴエルレエヌの母は二人に向つて、食卓に就くやうに、そして明日になつて、もつと二人とも氣が落つくまで話し合ひは延すやうにと賴んで見たが無駄だつた。ラムボォは何と云つても承知しなかつた。彼は例の素氣無い調子で、今すぐに去ると云ひ張つた、そして何時もの横柄な樣子で金が入用だと云ひ出した。彼は神經質に、燈明皿の火の明滅のやうなリズムを持たせて聲を大きくして、「金、金！」と彼の要求を繰り返した。

「ヴエルエヌは、その暫く前にピストルを買入れたのであつた、彼の妻君の思ひ出に惱まされてゐた所に、ブリユツセルへ來て呉れと云ふ彼の嘆願を、かの女が容れなかつたのを見て、いよいよかの女の決心のほどが判然と分つたので、彼は漠然と自殺する決心をして居たものらしいのであつた。ピストルを買入れたのも、實はその爲めであつたのである。當時、彼はしきりに彼の顳顬のあたりを飛び廻る怪物のあることを氣にしてゐた。夜になると彼は酒精のけむりの中から立ち現れる脈におびやかされてゐた。彼は激怒のおさへ難い身ぶりでポケツトから凶器を取出してラムボォの方へ向けて發火した。

「この時のヴエルレエヌの動作は可成りにゆつくりしてゐたので、ラムボオは本能的に片手を差しのべてピストルを奪いとらうとする時の樣な身構をするとが出來たのであつた。第一彈はラムボオの左の手首を掠めた。その間にラムボオはヴエルレエヌの手からピストルを取上げやうと努めてゐた、それで次に發せられた第二彈は筒先が下を向いてゐたので床板に命中した。

「三人はその場に茫然として立ちすくんでゐた。ヴエルレエヌの母が、息子の手を引いて自分の室へ連れて行つた。ヴエルレエヌは泣いてゐた、彼はしきりに悔悟の言葉をもらした、そしてふたたび默つて立つてゐるラムボオの方へ引返して來て叫んだ、「このピストルをとつておれを殺して呉れ！」と。ヴエルレエヌの母は、しきりに二人の男たちを落ちつかせやうとつとめた。かの女はラムボオの手首に繃帶をしてやつた。ラムボオは、すぐにまた懲性もなく、先き程からの金の要求を始め出した。それでヴエルレエヌの母は彼に、シャルルロアの母の許へ歸る爲めの路金として二十法渡した。三人の者はこれで事件は全く落着したものと思つてゐた。そしてラムボオが受けた徽艦傷（かすりきず）も、それつきりで、醫者の世話にもならず、法律の手に

もかからずに治つてしまうだらうと思はれた。

「わづかながらも怪我をしたラムボウが、すぐ次の汽車で母の家へ歸り度いとしきりに云ふので、ヴエルレエヌも、それでは停車場まで見送つてやらうと云ふことになつた。停車場へ行く道すがらも、ヴエルレエヌは昂ぶる神經をなだめ惱んでゐる樣子だつた。

「ラムボオはそれを見て、ヴエルレエヌはきつとまたポケットからピストルを取出して彼に向けて發射するに相違ないと思つた。彼が果してさう思つたものかどうかは分らないが、後に彼が警官に訴へて云つた所ではさうであつた。果して彼が怖をなしたものか、又は、彼の性格の一面であつた惡魔的な氣持のあらはれであるかは別として、兎に角、彼に五月蠅さく付きまとうヴエルレエヌを追つ拂つてしまう方法として、彼は一人の巡査の方に向つて一目散にかけ出した「人殺し！人殺し！」とわめきながら。ヴエルレエヌは彼の後を追つて、狂氣のやうに、身振をしたり叫んだりして馳けた。その時彼はともすればラムボウを脅迫するやうな態度をしたかも知れぬのである。ラムボオは巡査に近づいてヴエルレエヌを指摘した。そこでヴエルレエヌは拘引された。

「しらべて見ると、ヴエルレエヌはピストルを持つてゐた。證據はこれだけで十分だつた。」

かうしてラムボオは何食はぬ顏をしてシャルルロアへ歸つてしまつたが、その後でヴエルレエヌはアミゴ拘留所につながれてゐた。

この拘留所のことをヴエルレエヌは自分で次のやうに書いてゐる。

『アミゴは一向に美事ではない。何によらず、無暗に清潔が自慢の國だから、さすがに小綺麗なことは確である。私が金を持つてゐたものだから、役人たちはいきなり私を自費獨房へ入れて呉れた、この方がいい事は勿論だ。この自費獨房と云ふのは、高い所にある明り窓から空氣と光線を通はせる仕掛になつてゐるのだが、其所にはベットが二つ、卓子が二つ、椅子が二脚あつて、その他中々設備は完全してゐるのだが、ただ一つ安靜だけが欠けてゐるのであつた、と云ふのは、堂々たる風彩の醉つぱらひが、やつかいな奴さ、同居しにやつて來て、一晩ぢゆう騷ぎ立てて私を困らせたものだ。それ許りか、外からも、夜おそくなるまで、歌だの、叫び聲だの、高話だのが聞えて來るのであつた。その頃白耳義にとつては新らしい流行歌であつた「マダム・アンゴの娘さん」の中の節が夜の明けるまで私を五月蠅がらせるのであつた。幸に一リツトルのフアロ麥酒と乾酪（チイズ）と麵麭と、そ

れから人たちが私に與へたと云ふよりもむしろ歸して呉れと云ふ可きである、やがて間もなく自由にされるだらうと云ふ希望とが、時間の長いことを私に忘れさせて呉れるのであつた。朝の七時になると私の戸口が開いた、(何と云ふ錠前だ!)私は數段おりて石をしきつめた中庭のやうな所へ連れて行かれた、其所へ私の朝飯が運ばれた。珈琲と牛乳と麵麭である。そして麵麭はブリユツセルで皆が食べる例のピストルと云ふ奴である。

「多くの時間か過ぎたやうに私には思はれた、何時になつたら私は此所から出ることか出來るのだらうかと云ふ私の質問に對じては何時も、半分巡査であり半分は平人のやうな、スリツパアをはいてゐて、怠け者で、不親切で、おべつかつかひの監守が答へて云ふのであつた、「もうぢきです、すぐ後で人が呼びに來る筈だから、暫くお待ちなさい。」と云ふのであつた。一時頃になつて、いやいやながら、馬鈴薯と犢だつたか小羊だつたか今では忘れたが、半分煮て半分燒いた珍料理の晝めしを呑みこんだ所へ、人が私を呼びに來た。そして私は一台の四人馬車の方へ導かれた、この馬車と云ふのは、巴里で私娼たちを檢査の爲めに市役所へ運ぶに用ゐてゐる俗に「サラダ籠」と呼ばれてゐる馬車によく似た奴なのである。外側の金屬製の箱を黄色と黑で塗つて、中から外部が見えるやうに小さな風孔のあけてある奴なのである。」

この四人馬車がヴエルレヌをプチ・カルム留置所へ連れて行つたのであつた。

「石を敷きつめた廣い長方形の中庭。見るとそこに居る人間はどれもこれも皆おそろしい人相の奴ばつかりである。勿論その大部分は白耳義人だが、獨乙人も大勢ゐる、伊太利人が澤山にゐるのは當り前だとしても、醜い佛蘭西人が目に餘る程ゐるのはどうした事だ。私はまた仰天したまんまで醉つたやうな心持で其所へ着いた。私が彼等に較べると立派な身なりをしてゐるので、私は同僚たちのひやかしと嘲笑の目標になる。何と云ふおそろしい目つきで彼等は私を見ることだ。私は爲めに殺されたやうな思ひがした。當番の番人が、これは金ぴかの服を着たわからずやなのだが、私を突き飛ばすして怒鳴るのだが、私には彼のフラマン語が皆目分らぬので、やうやくその響によつて彼の命令の意味を察するのである。彼は指で私に馬鈴薯の皮をむいてゐる一團を示す。一時間も、立つたままでこの仕事をしたが隨分くたびれる。鐘が鳴る。晝飯の合圖である。食堂は石灰で粗塗をした室である。食卓も腰掛もよごれてゐる。伍長と此所で呼ばれてゐる先き程の番人より、また一さう金ぴかな服を着て、胸一面に銀モオルの筋骨をつけて、金筋を無暗につけ

た帽子を被つた助役が十字架を切つて、おそろしい聲を出して、食前の祈禱を始める。」

その間に留置所長がヴエルレエヌの所へやつて來てペコペコと頭を下げたり色々と云ひわけをしたりする。見るとこれは髯の中に顔の埋つてゐる小男であつて、白髪交りの肥滿した人物である。彼は片手に一通の手紙を持つてゐる。彼は云ふのである。

「――ヴエルレエヌさん、どうぞおかけ下さい。私は今義務の命ずるがままに止むなく、あなたに宛た手紙を一通開封して、讀んだ所ですが、その手紙と云ふのはあなたに取つて非常に名譽な手紙なのです。」

ヴエルレエヌが受取つて見ると、それはヴイクトオル・ユウゴオからの手紙だつた。ヴエルレエヌがこの窮地に陷入つて、あがきが取れなくなつてから、この大詩人に宛てて助力を願つて書いた手紙に對する返事だつた。

手紙には次のやうに書いてあつた。

「わが哀れなる詩人よ、
私は君の愛す可き妻君に逢ふつもりだ、そして君の幼ない一子の爲めに、かの女に君のことを善いやうに話すつもりだ。
勇氣を失はぬやうに、さうして眞實の途に立ち歸へり給へ。

ヴイクトオル・ユウゴオ」

留置所長はこの手紙を一讀するに及んで、忽ちにして、かかる有名な人物と親交のあるこの罪人に對して非常な敬意を感じてしまつた。彼は大急ぎで手配をしてヴエルレエヌを自費獨房に移すことにした。その時からヴエルレエヌは一人で獨房を占領し、食事を留置所外から取寄せることを許された。彼はまた勝手な時間に一人で中庭を散歩することも出來るのであつた。

四壁の間にとぢこめられて、爲すこともないので彼はものを書いた。彼は小さな木片と敷瓦の間隙に貯へたインキとを以つてものを書いた。

後に詩集「昔と今」の中に收められた"Crimen Amoris"及び「騙されたドン・フアン」の二篇の惡魔的な作をなしたのも實はこの時であつた。その他にも亦彼は多くの詩を作つた、「智慧」の中に收められた、

そこの木にゐる一羽の鳥が

心につもる呟きを歌ふ……

の詩もこの時の作である。

かうしてゐる間に、ヴェルレエヌの訴訟審理はどんどん進んでゐた。巴里へも照會して詳しく被告の身の上に就いて取調べがなされた。ヴェルレエヌの巴里に於ける住所の門番(コンシエルジユ)だの、隣人だの、出入の商人だのによつて提供された情報は、どれも甚しく被告に不利益なもの許りであつた。無智なこれらの人々によつて誇張されて、ヴェルレエヌの家庭の不和は、夫の放蕩と亂暴とを原因とする怖ろしい夫婦喧嘩として傳へられた。モオテ氏も亦取調に答へて、先に離婚の理由として擧げたラムボオとヴェルレエルとの同性愛の非難をまた繰りかへした。

それ等に影響されて、ほんの僅な犯行にさへすぎないこの事件が、大袈裟にも輕罪裁判所の所管に廻はされた。そしてヴェルレエヌはブリユツセル地方裁判所で裁かれることになつた。

ヴェルレエヌはその著「わが牢獄」中に次のやうに書いてゐる。

「昔は石灰で粗塗をしてあつたのだが、今ではそれがはげ落ちて、げじげじの這つたあとのやうにきたなくなつて、うす氣味の悪い廢墟のやうに見えるこの室、否この法庭は、見つきのわるい、狹つ苦しい、汚れくさつた室である。正面の壁には、疥癬かきのやうなキリストの像がぶら下つてゐた。頭髪の長いキリストで、單に「こわい顔をして」被告をにらみつける爲めにそこにぶら下つてゐるやうに思はれた。傍聴人は書類を手にして木のベンチの上に並んで腰かけてゐた、泣いて頼まれたので仕方なしに此所に來てゐるとしか思はれぬ様子であつた。

「私の裁判の係りの三人の評定官が、肱かけ椅子にもたれて着席した。はゞの廣い法服の袖のかげにかくれて椅子は見えない。かれ等の服装は佛蘭西の法官のそれと大差はないやうである。みどりの無地のテイブル掛に被はれて、上には法典だの、書類だの、文具筐だのが置かれた卓子がある。また中央には裁判長の爲めのデスクがある。

『いよいよ私の裁判が始まつた。佛蘭西に於けると同じ式が先づある。

――被告、起立せよ。

――其方の姓名は?

――職業は?

――其方は何々の罪により告發されたものである。

そして、あんまり苛酷だとは云ひ難いほどな簡單な訊問

のあとで、例のお定りの。
――被告、腰掛けてよろしい。
「そして私がその命令を遂行してゐるうちに、檢事が立ち上つた。
「私には今でもなほあの人物が目に見えるやうである。小さなカイゼル髭を生して、それだけではまだ足りぬと見えて「カムプロンヌ」型の顎ひげまで生して、片手は白い雲齊のズボンのかくしにふかぶかと突こんで、(何故一さうのこと思ひきつて緬布にしないのかね?)輕騎兵のやうに勇ましく黑い法衣をまくり上げて、片手で彼の小さな頭にかぶつた恰好の惡い法帽を取つて自分の前にある小さな卓子の上に置くのであつた。この卓子の上にも判事たちのそれと同じ綠紗裝置がしてあるのであつた、即ちその上には、テイブル掛がかけてあり、法典や書類や、文具箱が置いてあるのである。
「諸君。」とばかり、彼は私を指しながらその論告を始めた。「諸君の前にゐるのは一人の外國人である……」云々と。
『つひ此頃、ルウヴアンかガンか、またはそれに類した田舍の大學を卒業して來たばつかりのこの若い檢事が、あんまり耳ざはりにならぬ程度の白耳義なまりでかう云ふ御託を並べるのを聞いてゐることは、實に此上もない滑稽なことであつた。やがて彼は事件の事實に論及して、先づ、軍法會議にあつては酩酊は決して申譯けにはならぬことを論じ、次に民事裁判に於いても酩酊は軍法會議の場合と同じに取扱つて居らぬことを悲しんだ上で、さていよいよ、私を卑怯者だと云つて貶すのであつた。(何と云ふ理論で世う!)「さうです、諸君。彼は人殺しです。――この馬鹿檢事は私が人殺しをしやうとしたことは告訴狀も認めて居らぬのを忘れてゐるのであつた、――この人殺しはポケツトから實彈のこめてある六連發のピストルを取り出して、(阿呆、彈がこめてなかつたらポケツトから取り出す必要が何所にあるか、ちと考へてものを云へ。)被害者目がけて二發打つて、その一彈で不幸な男を傷けたのである。」(おお、ラムボオよ、その時、お前のおいたには念入りに手當をしてやつたのだが、然し私は死ぬまでそれをしたことを悲しむことであらう、その時はもつと非度いことをしやうと思つたのではあつたけれども。この法廷でお前がお前のことを不幸な被害者と呼ばれたと聞いたなら、今は死んで歸る日のない友よ、お前はどんなに笑つたであらう!)

「それだけでもまだ足りなくつて、第一の犯罪に次ぐに……
……云々」

「そして檢事は立ち上つて、彼の言葉と彼の方法で、例の街上に於ける出來事を極めて不正確に語つた上で、いよいよ最後に、法律に許されてゐる範圍に於いて最も重い刑罰を私に與へられるやうと求刑するのであつた。」

「私の辯護人の立派な辯護も効がなくて、檢事の求刑の通りに、裁判長は最も重きについて私に二年間の重禁錮を宣告した。

「その場では、人目があつたので、私は確りしてゐた。然し鐵鎖を引いた守衞に守られて、巡査が私を待つてゐる廊下まで來ると、私は我慢がしきれずに、わつと子供のやうに泣き出した。私があんまり泣くので、巡査たちも氣の毒に思たのであらう、彼等までがかう云つて私を慰めるのであつた。

「――これは一度だけさ、まだあとに控訴と云ふものがありますよ。』

「其所へ私の辯護人が來て、控訴狀に署名をさせた。」

然るに悲しいことには、控訴も決して初審以上にヴエルレエヌに親切ではなかつた。法官等は單に初審の判決をそのまゝ裏書するにとゞまつた。ヴエルレエヌは、服役する爲めにモンスの獄へ送られた。

この牢獄で彼がすごした十八個月がどんな月日であつたかは、彼自らがその著「わが牢獄」中で語つてゐる、また當時牢獄からその友ルペルチエに書き送つた手紙の中にもうかゞはれる。二年の刑期が十八月になつたのは、獨房で服役したので割引されたのであつた。

在獄中も、ヴエルレエヌは失望したり悲觀したりはしてゐなかつた。手錠をはめられてゐても彼は、彼の本來の面目である子供らしい心を失はなかつた。見る物聞くものがすべて彼をお可笑がらせたり悦ばせたりするのであつた。彼の獄中記はシルヴイオ・ペリコのそれとは似もよらず、むしろピトレスクな文學であるのもそれが爲めである。元氣な筆と溫和な疑懷主義とを以つて彼は自身のゐる牢獄をさへも冷笑してゐるのである。彼はまづ彼の住居のピトレスクなことを承認する。

「エエノオの主府にあるこの監獄は、出來るだけの範圍で美しいものであることを、私は自白する。この建築、このまことの建築は、外側は、桃色かと思はれるやうな色のうすい

煉瓦で出來てゐて、内部は石灰で白く、瀝靑で黑く塗つてあり、鋼と鐵とで質素な建て方である。』

彼はこのお城の中に、住んで、食を給され、着物をきせて貰つてゐるのであつた。

「革の帽子はルヰ十一世式とでも呼び度い程である。上衣もチヨツキもズボンも、私にはそれが何と云ふ布であるか名も分らない同じ布で出來てゐる、色はみどりがかつてゐてかたい布だ。太織によく似た布で馬鹿にこわばつて手ざわりが粗い。毛糸の襟卷　靴下に木靴……」

彼はまた面白さうな口調で附け加へて云ふ、

「私はまた靑い布でつくつた目出し頭巾を被る、これは中庭へ散歩に行く時に通る廊下で、行き來の人々の眼から囚人の顏をかくす役に立つのである、――それからまた、大きな銅版に黑の地にぴかぴか光る美事な金文字で私の番號を浮き彫りにしたハアト型の札がある。私は散歩に行く度に上衣の釦にこの金看板をぶらさげて行くのである。

「次に、おかかへの床屋が來て獄則に合うやうに私の髭を剃つてくれた。私はハイカラな好男子になつた。」

暫くすると彼は本を讀む事を許された。彼は古典字書だの、英文學の書だのを取寄せた。彼がシエックスピイヤを愛讀したのは實にこの入獄中のことである。彼はまたラシイヌ、フエヌロン、ラフオンテエヌ、コルネエユ、ヴイクトオル・ユウゴオ、ラマルチイン、ミユツセエ等の作品を耽讀した。

獄屋の四壁の間に閉じこめられた人間に、讀み書き以外に何が出來るだらう。ヴエルレエヌもしようことなしにしきりに多讀した。例によつて空想力の强いヴエルレエヌは、自分はも早刑期を終つて自由な身體になつたものだと想像して見たりした、そして今後どうして生活して行つたものかと考へて見た。何をしたらよからう？彼はさまざまな計畫を反覆して考へて見た。その中の一つがすつかり彼の氣に入つてしまつた。それはもう一度ロンドンへかへつて、共所で飜譯事務所を開くことであつた。その爲めに彼は熱心に英語を研究した。やがて彼は自由自在に英語が讀めるやうになつた。彼はすつかり有頂天になつてこのことを友人ルペルチエに手紙で知らせてゐる。

彼はまたしきりに筆をとつて、母とルペルチエとに宛てて手紙を書いた。彼はその親しい友に云つてゐる、「少なくも十五日

に一度は手紙を書いて呉れ。僕はもう六個月も新聞を手にしたことがないのだ。」と。政治界のこと、文藝界のこと、彼は一々それ等世上の出來事に就いて知りたかつたのである。次で彼はまたしても例の「言葉なきロオマンス」の原稿のことを語り出すのであつた。彼は獄中にあつても尚ほこの詩集の出版の志を斷たなかつた。

この時ルペルチエは、例によつて政治上の問題に深入りした結果、巴里を追はれて、サンスに亡命してゐた。彼が主筆をしてゐた新聞「支配する民衆」は、戒嚴令下の巴里では發行を禁止されたので、この田舍へ來て新聞をつづけて居たのであつた。彼は自分の新聞を印刷する印刷所に「言葉なきロオマンス」を組み上げるに足りる程の新活字のあることを發見して、早速組みにかからせた。彼はまたワツトマン紙を買つて來て、ヴエルレエヌの新集を作り上げた。

獄中でこの快報に接したヴエルレエヌの歡喜は思ひやられる。彼は自分で校正をしたり訂正したりした。

詩集は五百部の少部數の限定出版であつた。千八百七十四年の三月に發行された。ルペルチエが細心の注意を持つて新聞雜誌及び個人に宛てて、多數の寄贈をしたけれど、批評どころか本の名を一行書いた新聞も雜誌もなかつた。意地の惡い沈默がこの愛す可き詩集を迎へたのであた。以前からすでにヴエルレエヌに對して好意を示さなかつた批評は、今では地獄に落ちたヴエルレエヌに就いて語ることを羞しいことだと思つたのであつた。廣い佛蘭西の言論界に、その作者の私生活と切りはなして、作品それ自身の美しさを高唱するだけの、自由と勇氣とを持つた批評家が一人もなかつたのである。今日から見ると想像も及ばぬ馬鹿らしいことである。然し仕方もないことである。

身をめぐる獄屋の高い塀の中にあつて、彼の昔の新詩運動の戰友であつた人たちが、この機會に示すであらう所の友情の證を待つてゐたヴエルレエヌが、どんなに失望したかは察するに余りあることである。彼等はこの時になつてもまだ、彼等同士の中で第一の優れた才能を持つてゐた一人を認めることを欲せぬのであつた。詩はつひに薄情ものの仕事であるか？

大ていの人間が、この時もう落膽して望を失つてしまつたであらうと思はれるのである。然るにヴエルレエヌは、すでに一種ボヘミヤン風な、ものを苦に病まぬ性格を持つてゐた。それに彼にはまた、例の強い空想力があつた、そのおかげで彼は、自分の運命の最も苛酷な時間を過しながらも、なほ且つ、未來に彼を待つてゐる幸福な時を思ふことが出來るのであつた。

この有難い空想力が、次に彼の身の上に起つた宗教的發作の

場合にも大いに役に立つのであつた。

改宗者ヴエルレエヌ！この二つの言葉はどう考へて見ても、一緒にするにはあまりにかけはなれてゐて、不似合に思はれるのである。然しまたひるがへつて思ふ時、私たちには氣がつくのである、彼の生活と彼の悔恨とに不拘、依然として一個の童兒として殘つたこの詩人の魂ほど稚氣に滿ちて單純に、香氣な魂は他にないことに。彼の心のやうに熱烈な、眞摯な心臟も、彼の魂のやうに感動し易い魂も亦他にないことに氣がつくのである。

既に數ケ月以來、彼はこの監房の中で起臥してゐたのである。そして彼の瞳はわれにもあらず、終日、そこの裸の壁にかけてある銅製のキリスト磔刑像の上にひきつけられるのであつた。

「二三日前から、私の監房の壁に、先に私がそれについて書いたと同じやうな、銅のキリスト磔刑像の下に、隨分不出來な石版刷の「聖心圖」が貼りつけてあつた。馬のやうに長面のキリストの顏、大きなひだを見せた衣の下のやせ細つた身體、細そりと肉の落ちた手が心臟を示してゐた。それはその後私が「智慧」の集中で

光りかがやき血を流す

と書いたあの心臟であつた。」（わが牢獄）

この繪とこの磔刑像とが、ヴエルレエヌの眼をとりてしまふのであつた。この二つのものが幾度か、彼をしてわれとわが身をかへり見させ、また彼の心の奥底へあの痛ましい消息子を下させて、そこから泥と芥とを引出させるのであつた。

ヴエルレエヌは決して生得の神秘家ではなかつた、然し彼は藝術家であつた、詩人であつた、空想家であつた。かつて多くの人々がなしたやうに、彼も亦、選ばれたる人々の心に打ち消し難い平和の寶を注いでくれるキリスト教が持つてゐる詩に心をひかれたのであつた。然し、若し此時に、思ひ設けなかつた慘酷な事件が起つて、彼の心を打つて、またしても新らしい悲の淵におし沈めなかつたなら、ともすれば彼は、自分の改宗の心持ちを自分及び他人に對して示さなかつたかも知れぬと思はれるのである。

或る朝監獄長が彼の監房へ入つて來た。彼は囚徒ヴエルレヌに向つてかう云つた。

「哀れなる友よ、私はまたしても君の爲めに、悲しい知らせを持つて來たのである」（わが牢獄）

そして彼はヴエルレエヌの前に、巴里の民事裁判所からの判決書を出すのであつた。それにはボオル・ヴエル レエヌとその妻マツチルド・モオテとの離婚の宣告が明記してあつた。ヴエルレエヌはその時の事を、

「私は涙にくれて、私のみすぼらしい床に、私の哀れな背中を下にして倒れた。その時、獄長が私に與へた握手と肩の上にして呉れた一たたきとは大いに私に元氣をつけてくれた。そして、その時から一二時間あとには、私は何を思つたものか、珍らしくも、話しがあるから誨教師に來て呉れるやうにと頼んでやつたものなのである。誨教師はすぐに來て呉れた。私は彼に教理問答書を一冊貸して呉れるやうにと頼んだ。すると彼はゴオム大僧正解説の一冊を貸して呉れた。」（わが牢獄）

と書いてゐる。これで見ても知れるやうに、彼と妻との間の離婚の決定が大きな動機となつて、わがヴエルレエヌをしてキリストの腕の中にその身を投じさせたのであつた。

一見、信じがたい事のやうに見えぬでもないが、然しまた、よく考へて見ると、それは決して驚くに足らぬ事のなり行きなのである。何故なればヴエルレエヌは、どんな場合にも、やがて何時かは再び愛するマツチルドと一緒にならうと云ふ希望を未だ全く失はずに居たのであつたのだから。入獄した後になつても、彼は幾度かそのことについてルペルチエに手紙を書いて居た、彼は最後まで、この途方もない希望を失はずにゐた。そして彼は馬鹿らしくもやがて彼の妻がすべてを許して呉れる日が來るだらう、さうしたらまたふたたび彼等の結婚の初めの頃のやうな幸福な日暮しをすることが出來るだらうと信じてゐたのであつた。今やましても彼の凡の希望がくづれ落ちるのであつた。

この時彼の心におこつた反動は深刻に、時を移さず現はれて來た。數日の後には、その反動はありありと改宗のそれであると感じられるまでになつてゐた。

「私は、何が、又は誰れが、その時に、不意に私を起き上らせ、私をベツドから飛び出させ、そして着衣する猶豫も與へずに啜泣きながら、私をして、例のキリスト磔刑像と

聖心圖との前に膝まづかせたかを知らぬのである。その時、私の目にはこの二つのものが近代に於ける宗教本義の最も有難いあらはれのやうに思はれるのであつた。』(わが牢獄)

此時も亦彼はすぐに誨教師に來て貰つた。そしてしきりに嘆願して、懺悔を聞いて貰ふことにした。ヴエルレエヌは跪いて身に積る罪過のすべてをそこへ吐き出した。

「すると誨教師は平氣な顏をして、驚いた樣子もなく落ち付き拂つて、他の質問の間に次の質問を發するのであつた、――あなたは獸と交はつたことはなかつたか? と。

「否! と答へたあとで、――私はこの否を質問のあまりに亂暴なのに對する驚嘆なしには云ふことが出來なかつた、――私は心からなる正直な懺悔の後でやうやく落ちついて來た悔悟の顏を差しのべて、そこに祝福(ベネヂクション)のしるしを受けるのであつた。然しこの時はまだ、私があのやうに熱望してゐた赦免(アブソリユツシヨン)は與へられぬのであつた。やがてそれに價するまでに身を淸める爲めに、私は誨教師の手引に從つて、私の日課と、さまざまの讀書、ことに聖詩篇の朗讀をつづけることにした。私が「智慧」の詩を書いたのは主としてこの頃の事である……。」(わが牢獄)

彼は不信仰な書物をすてて、ジヨセフ・ド・メストルや、高僧達の說法や、聖オオギユスタンやを耽讀した。彼はまた羅典語の勉强もした。「親切な監獄長と人のいい誨教師とが毎日のやうに私の所へ來て話をしてくれた」(わが牢獄)と彼は書いてゐる。

彼が新信者として、一度忘れてゐた宗教に再び歸依して、何彼と教法上の指導を受けてゐたこの時代のことに就いては、ヴエルレエヌは長い間いい思ひ出を持つてゐた。

「當時私は本當に信仰を持つてゐたのであつた、そして私は自分の淸さを感じてゐた。私の生涯は純潔であり、私には健康と幸福と二つながらあつた。惡の思念は一つも私には起らなかつた。私の精神は靜穩であり、且つそれが一つの感覺となつて感じられる程だつた。私には、自分が不斷に新らしい淸潔な下着を着てゐるやうに思はれた。」(わが牢獄)

他方に於いても、監獄長の寛大な取扱ひと、説教師の保護と相待つて、彼の獄中生活を大いに緩和してくれるのであつた。彼はそのおかげであまり苦しみもせずに出獄の日を待つことが出來た。

「それからまた、私の牢番の男は、これがまた感心な奴で、「もつと學問をして」この「箱」から出たいと云つてゐた、他にもつといい仕事を見つける爲めなのであつた。彼は或る日、私に佛蘭西語のルツソンをさづけてくれと頼んで來た。私たちは早速始めることにした、私が讀むと彼はそれについて最初に先づ文法の例を大きな筆蹟で書き取るのであつた。

Etes-vous madame de Genlis? etc.........

あなたがド・ジヤンリスの奥さまですか?云々……

そしていよいよ進歩のあとが明かに見えるやうになつてから、私たちは、カムブレエの僧正ド・サリニヤツク・フエヌロンによつて分りよく抄出された「若きテレマツクの冒險」を讀むのであつた。

「この授業のお禮として、この氣のいい男は、私に菓子だの、土地の新聞だの、ボンボンだの、チヨコレイトだのを持て來て呉れるのであつた。また時々には美味いお酒を持つて來て呉れるのであつた、彼はまたよく嚙煙草を持つて來て呉れた、その嬉しかつたこと、有難かつたこと、嚙煙草は獄則で禁じられてゐるのであつた。それからまた嚙んでしまつたあとで、その形跡を消滅させることに骨の折れること、そのことがあるために一層私には嚙煙草が美味いと思はれるのであつた。』(わが牢獄)

然しどんな居心地のよい住家でも、一度は去らねばならぬが浮世の定法だ。ヴエルレエヌの爲めにも、彼の牢獄を去る日が來た。それは千八百七十五年の一月十六日であつた。獄門には母が一人來て待つてゐくれた。おお、何と云ふよろこび。何と云ふ眞情吐露。かの女はまたしてもこの大きな息子を、その環境から奪い取つて、彼等の父祖の地へ連れて歸へるのであつた。ワロニイの廣い牧場と肥沃な田畑の間で、十八個月の獄中生活に痩せ果てたこの哀れな男にもう一度肉と魂と二つの生氣をとりかへしてやる爲めに。

不幸なことには、人はその獄中生活によつて、時としては肉體上の病を得て久しくその爲めに惱むことがあり、また精神上の病を得てその爲めに死ぬことがある。私たちは躊躇なしに斷言することが出來るのである、獄中生活がわがヴエルレエヌの詩的氣禀を更へた事が事實であるならば、それはまた彼の性格に大きな變化を及ぼしたことを。そして彼を社會の外の人間にしてしまつたのである。彼はこの時分からあらゆる種類の奇拔なことと極端なことに對する誘惑に陷り易い素質を持つに到つたのであつた。その結果は、やがて彼の生活に禍をなし、やがては彼の詩才をも蝕ばまねば止まなかつた。彼の後半生の悲慘事は、その原因を、彼の光榮あるミゼラブルな一生涯のうちの第三期に相當するこのモンス牢獄中に胚胎すると云つても過言ではないやうに思はれるのである。

大近松の遺跡から

木谷蓬吟

一　高野山

今を距る二百二十年の往昔、寶永三年六月に高野山女人堂で若い男女の情死があつた。弘法大師開山以來、女人禁制の靈場での出來事であつたから、大變な評判となつた。近松巣林子が、この事實を戯曲化して『心中萬年草』と題し、大阪道頓堀竹本座の人形淨瑠璃に興行したのは、ちやうど情死のあつた時から二年目の春であつた。

尤も近松翁にしては大した名作と云ふ程でもないが、それでも一般向きのする艶やかな事件の經緯と、文學的な情景の描寫とに、力强い魅力を持つてゐた。殊に一種獨特の異彩を放つ高野情調と云つたものが、實に巧く描かれてあつたことが、好奇的な民衆の心理を掴んだものと見えて、この戯曲から影響されて三都の歌舞伎にも上演され、京傳や種彥の稗史小説にも移され、宮薗節や其他の俗曲にも歌ひ囃されるほどに流行した。元祖佐野川市松が、江戸市村座でこの戯曲の小姓久米之助に扮した時、石疊の型の袴を着け、華やかな美童ぶりを見せたのが、滿都の人氣をそゝり、爾來石疊の型を稱して市松染と呼び、流行久しく今日にまで及んでゐるなど、いかに此戯曲が好評判であつたかゞ分る。

女人禁制の靈山に起つた若い男女の情死——久米之助と云ふ美しい寺小姓と、お梅と呼ぶ神谷の宿の小町娘との戀。それにからまる久米之助と律師祐辨との熾烈な同性愛。高野山僧坊生活の特異な風俗。これ等を織り込んだ『萬年草』に、尠なからぬ興味を持つた私は、尙ほ一つ、旅行嫌ひ——と云ふか、その暇を持たなかつたと云ふか、兎角、出無精な近松翁が、奇妙にも高野だけは實際に就て、囑目の森羅萬象を一筆に收めたと云ふ事實に、一層好奇の感興をそゝられて、たうとう高野巡禮に登らざるを得なくなつた。

私は、いつも機會を得る毎に、大阪京都の翁が根據地は云ふ

に及ばず、その因縁のあるといふ各地の山川にも屢々出游した……大阪市内だけでも翁の戯曲に關聯した遺跡が二十餘箇所ある――然かし翁の足跡は、そう／＼京阪を離れた遠隔の地には及んでゐない。私の寡聞では、主として大阪京都を中心とした播河泉、山城大和の地方環内を來往してゐたらしく、少しく足を伸したところでは、東は江州路か、南は紀州か、北は北播を限りか――それでも、そう再々は出てゐないらしい――たゞ西方では、かねて各説があつて、生國を長門又は九州などと云はれた關係上、何國までを割つてよいか分らないが、生國を京都あたりと信ずる私には、先づ西播地方を出まいと考へる。以上は空想上の構圖、新記錄の出現と共に當然訂正すべきもの。

兎に角、ある時期の間は、一年中五六種の戯曲を書き上げつつあつた事實に見ても、遠隔地への旅行は時間の餘裕を持たなかつたことゝ思ふ。それにしても市塵をはるかに隔てた深邃の靈境、交通不便な難路を冒して、高野山まで詩嚢を運ばせたのは、無論女人禁制の聖域に起つた、女人堂心中といふ好題目に惹き付けられたに違ひはなからうが、一つには又翁が、日頃渴仰する眞言宗に對する宗教的趣味(?)から發足されたのであらう。

◇

私が高野山へ、『心中萬年草』を懐にして登山したのは、兩三年以前の夏であつた。高野口から九度山椎出神谷を經て、極樂橋から不動坂の嶮路を二十餘町登つて行くと、やつとのことに女人堂に着く。その昔、お梅と久米之助が手を執つて、神谷の宿から女人堂まで登つて來た不動坂は、勿論今日のやうに改修されなかつた以前の峻坂で、嶮巖崎嶇、容易ならぬ難路であつたらしい。

女人堂から内部は、所謂結界の淨域で、その傍に立つ嚴めしい總門から、女は一歩も入ることを許されなかつた。と聞くと、このあたり蓊蔚たる老杉老檜のたゞずまひ、今尚ほ肌寒い心地がせぬでもない。參詣人所緣坊案内所と掲げられた、芝居のお白洲のやうな建物の前まで來ると、夕暮の杉木立の中を、十二三の小僧さんが何々院と記した提灯をさゝげて、出迎ひに來てくれる。海拔三千尺の山嶺とは思はれぬ坦々の大路を迂曲して行くと、やがて豫定の宿坊何某院に着く。

洗足を勸められて座敷へ通ると、早速二人の年若い役僧がやつて來る。『ようこそ御登山、山中とて御風情もございませぬが、どうぞユルリとおくつろぎを』と、慇懃で如才なく、人なつこい態度の待遇、スッカリ遠來の客のくたびれを緩めてくれる。次に院主の代僧、納所などが、入れ代り／＼挨拶にやつて

來る。女人禁制など云ふ、いかつい莊嚴なお寺に來たといふやうな窮屈な思ひは失せて、いつもの定宿に腰を卸した時と、同じやうな落着いたのんびりとした心持ちにとろけてしまふ。

そこで、行李の中の『萬年草』を展べて見る……高野山南谷の吉祥院へ、播磨大名の使者が登り着くと、法印自ら出迎へて

『はる〴〵のお使者御大儀〳〵、いざ〳〵これへ、それお盃、お茶持て參れ』

叮重な挨拶をすまして、法印が奧へ引き下ると、豫て用意された銚子盃に重箱、吸物の椀折敷、善美を盡くした御馳走が運び出される。御住の弟子を始めとして納所同宿が、入替り立ち代り挨拶に顏を出す。

『山中と申し風情なくとも御時分よし、お吸物でもお代へなされ、それ小姓衆相手になつて御酒一つ、ゆるりとあがつて下されとあひしらへば愛嬌の、小姓はお合ひと色めきける……』

と書いてゐる。今日では、この高野名物の美童、所謂兒若衆こそ其あとを斷つたが、寺僧の愛嬌に僥かなこと、客扱ひの物馴れたこと、待遇の行屆いたことは、今も昔も變りはない。流石に一千年來の習俗、山内の僧坊は凡て壇家や信徒の爲めに、一種の旅宿として開放されたゝめ、お寺は旅館と變りなく、寺僧は社交的に訓練されてゐる。この宿坊なる熟語が、遊里の馴染茶屋に轉用され、お宿坊と呼ぶやうになつた如く、極めて民衆化して柔かな習俗が遺つてゐる。翁の『萬年草』には、この特殊風俗が遺憾ないまで描き盡くされてゐる。

『萬年草』には、まだこんな高野風俗が、二三書き込まれてゐる。

播磨大名の使者は、石塔を本國から高野の奧の院まで引かせて登る、その目附の役であるが、俗に『お墓引き』と稱し、澤山の人夫に木遣歌をうたはせ、拍子を揃へて勇ましく山上へと曳き揚げて來るので、なか〳〵に大層な事業とされてゐる。これも變つた風俗の一つである。

『時に麓の山どよむ、木遣に法のひんよえい、聲はりま路の大名より、御墓引くこそ殊勝なれ』

と、近松は叙べてゐる。現に奧の院の廣大な塋域には、貴賤道俗、大小二萬餘基の墓塔が立ち並んで居る。此等の多くは各國各地の遠きから、この高嶺の絕頂まで隨分の嶮峻を、所謂お墓引して、運び上げたものである。

『萬年草』には又、數ある寺小姓のうちに、お梅の兄にあたる花之丞と呼ぶ愚鈍人を出してゐる。滑稽な言動で、常に一山の

笑ひものになつてゐるが、この假作の痴人も、用意深い作者は、根據なしに書いたのでは無く、やはり山の古風習によつて登場せしめたものである。寺院の一種の經營策として、壇家又は親族の依囑により、實社會に用立たない愚鈍兒を、ある意味の祠堂銀と共に、永代預りにした弊習を諷したものである。これは高野のみに限つた風でもないが、殊に甚しかつたものである。

この作の題名とした『萬年草』は、多くこの山に生ずる苔の一種で、旅行又は遠地にある人の生死を占ふ奇草であると言はれてゐる。久米之助の姉が、萬年草を水に浸して、弟の生死を占ふことに活用されてゐる。この外、この作の『久米之助お梅道行』の條には、山上に散在する多くの名所舊蹟が、丹念に綴り込まれてゐる。

斯んな風に、一山の風俗情景を、在りの儘に作中に採り入れた筆のこなれ、巧緻な氣持の現はれなどから考へても、單なる聞き學問讀み智識では無いことがわかる。必ずや翁は實際に登山し、宿坊に寄寓して、自ら實地に材料を獲得したものに違ひない。如上の記述が著々一山の實際に即してゐることは、足一とたび當山に入つた者の、均しく認め得るところであらう。

◇

然かし、此等は尚ほ外面に現はれた風俗習慣の採收に外ならぬので、翁の興味慾はこんな事で滿足できなかつた。翁は除ろに野山の雰圍氣に浸り込んで、僧坊生活の實相に親しむうちに、おのずからなる『眞言秘密』の妙諦に觸れることが出來た、この『眞言秘密』こそ最も力强く劃切に翁の創作慾を煽らせたに違ひない——その『眞言秘密』とは何？　弘法大師草創以來一千餘年の久しい間、殆ど白蟻の巣喰ふやうに、高野全山に蝕入しつゝある『衆道』が夫れである。

高野山と衆道——高野山は、實に我が日本衆道史上の、謂はば檜舞臺と云つてよい。この大劇場に入つて、觀棚の一人となつた翁は、どうして此興味深いお芝居を見逭して置かうものぞ——この感興は直に、詩藻ゆたかに盛り入れられて、やがて優麗な彩筆によつて『萬年草』の卷頭を飾ることになつた。その最初の第一文を誦して見る。

『女嫌やる高野の山に、なぜに女松は生ゆるぞや、なぜに女松が生えまいならば、夜道星でも飛ぶまいか、松より梅より柳より、お寺小姓の兒櫻、兒文珠の御相伴、大師の廣め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道祕密のお山とかや』

高野の山に登つた人は、少しく注意を拂つて見ると、殊に女松の多いことに心着くだらう。女人の登山を禁じ女性を毛嫌ひ

する靈山に、『なぜに女松が生ゆるぞや』と、頭劈一番皮肉の甲矢を浴びせかけてゐる。それも其筈、この御山には、松よりも梅よりも柳よりも、美くしい寺小姓の兒櫻が眞盛りであると、更にまた諷刺の乙矢を放つてゐる。そして弘法大師が、廣めて置かれた、、の情の眞言、『衆道祕密の御山』であると、辛辣な止めの一刀を加へて、、、萬能の高野の暗面を寓してゐる。

本來、、、は支那五千年の俗と稱せられ、孔子も『宋朝が美色あらずんば今の世に人の憎を免るゝこと難し』など賛してゐる。その美色の道を日本に移植したのは、高野開山の弘法大師だと、不思議の浮名の立つたること、既に時久しいものがある。と、浮名の高らかなだけ夫れだけ、、、祕密の山として、事實に於て否定できぬ顯著なものがあつた。

高野山史を繙ひて行くと、屢々山内の僧徒間に、原因不明の鬪擾が見受けられる。記錄にはわざと秘されてゐるが、多くは若衆念者の爭奪戰か、男色に關する嫉妬痴情が、その根底に蟠つてゐるのである。長い星霜の間、この暗流が高野山生活の裏を流れて、傳統的に强い潜勢力を保つて來た。故に、徹底的に高野山史を知らうと云ふには、その暗面の衆道史に通曉する必要がある云々、と說く人のあるのも、萬更の嘲罵でもなささうである。近松翁か、『衆道秘密の御山とかや』と喝破したのは、の機微を穿つた名言と云つてよからう。

山の僧坊には、寺小姓または兒若衆と稱する衆道の美少年が、公然同住して居たが、それでも表面は、學問行儀諸藝作法見習ひの爲め、院主に仕へると云ふことになつてゐる。その實、院主や高級の僧等の念者であつたのは言ふまでもない。小姓等は朝夕美くしく粧ひ飾つて、院主たちの御機嫌を取結ぶことに餘念がない。その結髮の役は、寺男の兼務であつたらしく、『萬年草』の寺男に

『私共は皆々樣の髮を結はねばなりませぬ、寺方のお小姓は俗の內儀と同じこと、法印樣の奥樣の髮は結はずにすみますか』

など喋らせ、愚人花之亟の口を藉つては

『在所の父樣や母樣は嘘つきぢや、法印樣を親と思へとばかりで、、、とは聞かなんだ』

と、現實暴露の銳い筆觸に、翁の緻密な觀察眼が光つて見える。

吉祥院の寺小姓久米之助が、山から放逐される罪科は、神谷の宿雜賀屋の娘お梅と通じたといふ、所謂邪淫の破戒罪とはなつてゐるが、その裏面には、同じ寺の祐辨律師の、久米之助に對する衆道の嫉妬が、大に與力あることに作爲されてゐる。翁

は隨分露骨に、祐辨律師の怨言を紹介してゐる。

祐辨は、最愛の念者久米之助が、衆道の節操を破つて、お梅の女色に惹きつけられたを憤り、足蹴にかけて踏みつけ〳〵罵つた。

『エヽ見損ふた悴め、その根性とは夢にも知らず、兄弟の契約のねんごろしたは何事ぞ……俗の女を慕ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千優るぞや、その兄分を袖になし、志を無下にした、憎や無念や淺ましや』

僧の身として若衆を愛慕する心の眞劍で、全く死身である切實な心持をぶち開けてゐる。久米之助が、泣きながら答へた詞のうちには、さすがに念者は念者らしい、優しい焦慮の訴へが見えてゐる。

『二世と賴みし兄分を袖にしたとの恨みの詞、悲しふて〳〵死んでも迷ひとなりまする、とくに髮を剃つたらば、この悔みもあるまいもの、坊主頭のすげない顔、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳を越すまでと、髮を撫で顔作り身だしなみが身の敵、お梅に思ひそめられた、これも前世の因果かや』

院主または高級の僧には、きつと斯うした寺小姓ヽヽヽヽの對象を持つてゐた。その愛情の熾烈なことは、異性の戀愛以上だと云ふ話を、多くの實例を並べて高野の長老たちから聽かされたこと屢々である。その例證に擧げられる一つは、寛元頃の名僧で、六十七歳になる道範阿闍梨が、故あつて讃岐に流された途次、淡路の船場まで慕ふて行た若衆が、別離を悲しんで投身したといふ物語である。これは阿闍梨自身が、その著『南海流浪記』に書き遺した實話だと云ふことである。

院主や高級の僧を別にして、その他、有象無象の僧侶の間にも——無論同じ人間である以上——ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ。野郎笠の柔かいのを被つた白面の旅の若衆が、小脇差に印籠、脚絆に草履ばきの可憐な姿で、藥、油、紙の類を携へて、各寺の所化部屋を廻りながら、相場以外の取引ヽヽヽヽヽヽヽヽ。山上に在る商家でも、常に三人四人のヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ、異りがない。この風習は、現に明治二十年頃までも續けられてあつたと云ふ。

山上にはまた、兒若衆に因みを持つた地名や名所が、可なりに多い。櫻咲く春になると、稚兒の泣く音を立てるといふ、花折坂の兒が瀧がある。或る兒若衆が、失戀の爲め身を投げたと傳へる、金堂背後の兒が池がある。兒若衆の怨念の一群が立ち並んで、本堂の紙障を撫でて通るといふ某寺の、所謂『座敷坊主』と稱する怪話がある。老如法と小如法との不思議な弁天を

語る登天の松が、金堂の西にある。蓮華谷の兒櫻も、何か寓意が秘められて居やう。蛇柳や、千丈轉しの刑場などにも、また衆道に關した哀話悲話が、尠からず傳へられてゐる。

私は嘗て、全國的に行渡つた高野宣傳文學の隨一である、『刈萱石童丸』の物語を解剖して あれは父子の哀史を叙べた一面に、實は衆道のローマンスを描いたものだと臆測した。そして、あの年少可憐な、嫋々しい悲劇的境遇に泣く石童丸は、一山の僧侶が常に渇仰する理想的念者の表現であつたと想像する。而かもこの物語の作者は 山房に隱れた錦心繡腸の文學僧ぢあつて、理想の兒若衆を主人公に、靈場第一の御廟の橋を背景とし、哀れに美くしく和讃したものではあるまいか……と說いたこともある。

されば、衆道萬能の高野僧が、ひたすら降三世明王を欽仰したのも無理ではなかつた、降三世明王は男女配偶の兩體を足下に踏んで、突立つた四面八臂の梵神である。また、これが反動から、男女、、即身成佛をモットーとした立川流の勃興したのも、寧ろ自然の數であつたと思ふ。近松翁は西鶴法師のやうな、女若兩色の耽美者ではなく、戀愛成佛の讃仰者であつた爲め、『萬年草』の久米之助は、祐辨律師の熱烈な衆道の絆から切り脱けて、やはりお梅の戀の掌に還つて行くことに脚色されてゐる。

久米之助が、女犯の罪科によつて山を逐ひやらるゝ時、山靈の憤りに逢ひ、天地忽ち晦冥、雷雨大荒れに荒れ狂ふ描寫がある。

『男女破戒の御咎め、俄に吹き來る天狗風、岩も枯木もどうどう〳〵、震動雷電雨あられ、天地一つに黑雲蔽ひ、長夜の闇とぞなりにける』

久米之助が女子と契つたといふ、所謂邪淫の罪罰で、忽ち山靈の忿怒を買ひ、雷電風雨、全山を長夜の暗に包んだ怖ろしさに引代えて、滿山の萬僧が、日夜浸り込む、、、、、、に對しては、山靈何のお咎めもなく、一山はいつも晴天麗朗であるといつた、翁一流の皮肉觀が、こんなところにも首を出す。

◇

寺小姓の久米之助と神谷宿雜賀屋の娘お梅との情死は、實際は未遂だと云ふ說がある。柳亭種彥の『高野山萬年草紙』の序文にも見えるが、私が親しく高野の古老から耳にしたのも、女人堂での情死を人に抑止せられ、夫婦となつて龜鶴の壽齡を全ふしたとある。翁は此實說を都合よく潤色して、情死遂行に改め、殊に眞言陀羅尼の呪文での情死――『只今ぞと脇差拔き胸に押當て、おんあぼきや、べいろしやのまかもだら、まにはんど

まじんばらはらはりたや、うんと突込む切尖の、膽にあたれば反り返り、はりたやうんと刳り通す』――と云つた奇抜な趣向を試み、『死骸の上にのりの花、梅と枕を並べける』と美しく結び、それに、最も翁の感興を高潮に導ひた大師相傳の兒櫻、所謂高野獨得の衆道情調を、全編の上に描張したものである。

翁が親しく山房に就て見聞した高野土産は、こんな風に『心中萬年草』の一編によつて記念される。

翁はこの他に、高野山を背景にした初期の時代戯曲に『いろは物語』の作がある、この時は未だ高野を識らなかつたらしく、全然空想によつて描かれたものである。

二　久々知

現代の人が、つとめて多く自己を語らうとするに反して、近松の自ら語ることの甚だ乏しかつた爲に、一代の經歴さへ鮮明を欠くのは口惜しい。

翁は何處で目をつぶつたか、その遺骨は何處に安座されてゐるか。永眠の地は、恐らく大阪に違ひはあるまいが、その骨を埋めたといふ墳墓は、現に三ケ所を數へられる――攝津國久々知の廣濟寺、大阪谷町の法妙寺、肥前國唐津の近松寺――がそれである。廣濟寺と法妙寺とは度々見舞ふたし、唐津の近松寺も一度は訪づれた。翁を杉森信盛（翁の本名）として、家庭の人として見る時は、大阪の法妙寺に深い佛縁を持つてゐるが、作家近松門左衛門として、藝術の世界から眺めやうとする時に、久々知の廣濟寺ほど、親しみとなつかしさを持つ恰好の遺跡は、全く他に無いであらう。唐津の近松寺に至つては、何の根據も見付からなかつたことを遺憾とする

廣濟寺の所在である攝津國久々知村は、大阪市の西北三里半の地にあたる。鐵道によると、大阪梅田驛の一つ西、神崎驛で下車、やゝ廣い村道を北へ辿ること十余丁にして達する。この道すがらに、潮江と神崎の遊里の趾などを指顧することができる。潮江村は、往時河原左大臣融が京東六條の河原院に、陸奥の鹽竈浦の勝景を模し、毎月難波の潮水二十斛を汲ませて取寄せたと云ふ、その潮の汲み場の跡である。同じ神崎のあたりは往古の海邊で、今の神崎の北、傾城塚の邊は名高い神崎の水口で、妓樓櫛比し殷盛を極めたものだと云ふ。翁の作『賀古教信七墓廻』には、重要な一場となつて舞臺の上に現はされてゐる。程遠からぬ中山寺の小法師眞光と、神崎の遊女との間の、哀しい因果劇を描いたものである。出雲や文耕堂の合作『平假名盛衰記』で評判の梶原源太の情話、『梅ケ枝の手水鉢』も、この色里に取材してゐる。

斯うした戯曲に縁故の多い舊蹟を東手に望みながら、やがて久々知の村に入ると、隘巷陋屋の間、さゝやかな杜の下に、荒癈無殘な一小寺が見える。これが大近松の英靈とこしへに睡ると云ふ久々知山廣濟寺である。

いかに其荒れ果てたことよ！

寛政十年板の攝津名所圖會を展べると、寺域はさのみ廣くはないが、社寺の配置の能く整ふた、見るから淸淨な境地が描かれてゐる。今から九百余年前、天德年間に、多田滿仲が日本最初の北辰星を齊祀した址であつたのが、その後殆ど癈滅に歸したのを、德川期に入り、正德四年日昌上人に由つて、法華道場として再興された。近松翁が當寺に交渉を持つたのは其時代のことである。

荒れ果てた築土に倚り門を入ると、往時は境内に別域を保ち、京大阪各地の信者を雲のやうに吸集した、日本著名の久々知妙見堂も、今は坊宇の一隅に、みすぼらしくも遷座されてゐる。

本堂と妙見堂との間を縫ふて東手へ出ると、そこは稍小廣い空地で、東から北へかけての展望も惡くはない、古い木立もあり、小さな丘もある、翁の墳墓は此空地を前にして、東面して立つてゐる。一樹の黐の木を自然の傘にして、わづか尺餘の青い自然石の面に、阿耨院穆矣日一具足居士とある翁の法名と、一珠院妙中日事信女といふ妻女のとが、並んで二列に刻まれてある。

この墓石はまことに小さい、曲尺で實際に測つて見ると、縱が一尺三寸餘、横幅が五寸余、厚みが二寸余りのお粗末なものである。

私が最初に翁の墓を知つたのは、日露戰役に出征する前、多分明治三十五六年頃であつたと思ふ。まだ若輩の時とて仔細の記憶は喚び起されぬが、それでも、生ひ茂つた黐の木の下影に、半ば倒れかゝつた苔蒸した小碑と、その周圍の古い木柵が殆ど朽ち倒れてゐて、十余本の卒塔婆……他人の施餓鬼などに使用したもの……を寄せ集めて立て並べ、黐の木に釘付けにして、やつと柵の代用にしてあつたことだけは、ハツキリと覺えてゐる。尤も近松の事は、當時上梓された逍遙梁川兩先生の『近松の研究』を讀んだゞけの智識しか持たなかつたが。それにしても余りに無殘な荒れ方に、『誰れか大阪の金持でも、何とかしそうなものだが……』と、その時フツと思ふて無暗に口惜しかつたことを思出す。

その次に訪づれたのは、十年も後の明治四十三四年頃のことゝ思ふ。この時には、嫌やな卒塔婆の柵はモウ取除けられてあ

つて、お粗末ながら竹の矢來で圍まれ、その附近も余程整ふて見受けられたが、小さな碑石は依然として其儘に、觸れば落ちんばかりである。聞けば大阪の紳士紳商が寄つて、近松會と云ふのが組織され、雜誌が發行され、墓碑の手入れも行はれ、その修築の基金も集つたが、二三の濫費者や無斷費消者が出來たため、中途に絶滅、旨い汁は人に吸はれ、相變らず翁の靈は一尺三寸の石の下に、つくねんとして眠つてゐる。

由來當寺は、久しい以前から壇家の村民等と利權爭ひが續き、果は裁判沙汰にまで及び、其間、寺寶や近松の遺物までも散逸し、危ふくも翁の墓碑にまで、執達吏の札が貼られやうとした時代もあつたと云ふ。

それに、いつも氣にかゝる事は、あの一尺三寸の小碑である、而かも墓石とは離れ〴〵になつてゐて、兩手で輕々と抱え上げることも容易である。好事な大阪の所謂紳士紳商が、天ぷら屋のだし入れの德利を徵發するやうに、或は萬引の擧に出ないかと云ふことである。料亭に上つて、人知らぬ隙を窺ひ、せんとくの火鉢をマントーの羽翼に忍ばせて歸つたといふ名譽職を出した大阪である。近松門左衛門とは多額納税者だと教へた女學生の親もあるといふ大阪である。私の心配りも決して杞憂ではない筈である。

今年の春、久しぶりで展墓した時は、碑の四方は新しい石垣で繞らされ、もの寂びた碑面の苔もサッパリと洗ひ落されて、今まで見馴れた苔蒸した寂びれ顏が、一變して薄化粧の近代紳士の、つや〱しさを見るやうな感じがした。私にはやはり苔の儘の面影の方に、親しみが深かつた。

このあたりの村落を見渡すと、寒村の二字で能く言ひ現はされてゐる程に、何となく蕭索の氣に打たれる。名ある家も無ければ名ある人も住んでゐない、田も畦も木も丘も、總てが平凡なたゞずまひを見せてゐる。寺も平凡、碑石も平凡である。その平凡のたゞ中に、靜に落着いた瞑目を續けてゐる翁の俤は、いかにも平民主義のわだかまりの無い、大きな心持の藝術家らしい態度が窺はれるやうな氣もする。

碑面の文字も、西鶴のやうに『仙皓西鶴』とあるやうな洒落たものでなく、並木正三のやうに『南無三寶正三之墓』と云つた氣取つたものでもなく、これとても唯『阿耨院穆矣日一具足居士』と、平凡な法名を刻んだばかりで何の奇もない。殊にその妻女の『一珠院妙中日事信女』と、相並んで一石に彫り付けたゆかしさ、つゝましやかさには、さすがに愛の詩人である翁の風丰が、目に見えるやうである。

翁が男女の戀愛を、いかに美しく、詩化し醇化して描いたか

は言ふまでもなく、また、夫婦の愛、親子の愛、兄弟姉妹の愛、友朋の愛を、いかに親しく叙べたかと云ふことも周知のことであるが、尙ほ進んで翁は、一視同仁の慈眼を注いで、仇敵、惡人、姦婦、毒婦、盜賊、鬼畜の類に至るまでも、廣大な人間愛の同情を以て描き活かしてゐることを見逭してはなるまい。翁の本領は、愛の詩人と云ふよりも、寧ろ愛の思想家であつたと信じる。こんな意義から觀ても翁の靈魂の安住として、廣濟群生を意味する廣濟寺の名に、千兩役者を千兩の舞臺に配するの妙味が漂搖する。

千兩の舞臺と云へば、翁の墓前はるかの東方に、脈々と聳える生駒の連山が、恰も千兩の大舞臺であるかの觀を呈するのも、處所に因んで興が深い。

大阪の街頭からは、紅塵煤霧に遮られて、却て目に止りにくいが、此處から眺めらるゝそれは、麗姿晴れやかに、大阪の東を繞らす海拔二千尺の大屛風を作してゐる。その屛風の表面には、二千年來の傳奇物語から生れた幾多の歌舞伎繪が、張り交ぜに貼り付けられてゐる。

大阪市街の眞東の山頂に見える茂りは暗峠（くらがり）で、その南の峯續きに今一つの小さな茂みは、大和へ越える十三峠の絕頂である。この峠の中腹、河內の方面に北高安、字神立（かうだち）の里がある。全村悉く梅花、村孃凡て美姬と傳へられてゐるが、こゝに名高い高安の宮が祀られてある。翁の作『井筒業平河內通』には、業平が天皇を奉じて都から落ちのび、高安の社頭で、河內の戀女生駒姬に邂逅する舞臺面がある。『攝州合邦辻』の俊德丸こと、信吉長者の嫡子信德丸の舊蹟も、その東南に存してゐる。北に續いた敎興寺村は、翁が社會戲曲の第一作『曾根崎心中』を改作した『往昔（むかし）曾根崎村噂』の一齣に描かれてゐる。山脚を北へ目をやると『新版歌祭文』で名高いお染久松の野崎村や觀音堂がある。暗峠の麓、牧岡神社のあたりは、乳母が火の怪を描いた『河內國乳母火』の背景として用ひられてゐる。

斯うした貼りまぜの歌舞伎屛風、四時不斷の畫看板を前に展べた眺望が、いさゝかなりとも地下の靈を慰め得れば嬉しい。

明治年初の頃までは、翁の遺蹟を慕ふて、又、妙見尊信仰のため、大阪から遠路を厭はず、賽至した藝界の人々は、夥多しい數に上つたといふ。それは多く言ふまでもなく、現に存する大谷友右衞門が建納した石燈籠一對、中村歌右衞門が奉納した妙見堂內陣の法燈一對、並に歌川豐國の筆になれる娘道成寺の舞臺繪に見て、他は推して知る可しである。

◇

こゝに最も我々の興味を惹くものは、今も尙ほ妙見堂から出

る吉凶百番の神籤である。第一番より第百番に至る百枚のおみくじは、實に當寺中興の開祖日昌上人と、近松翁との合作に成る珍重すべきものである。前記の漢文（左記引例參看）は日昌上人の筆で、後記の和字は翁の譯文であり眞筆であることは疑ひない。その翻譯文の圓轉滑脱も面白い。

□三番　大吉

○自在無レ碍大道何空
　ものごとじざいにしてさはりなく、ねがひ事心のまゝなり
○公私有レ悦　財祿方涌
　上下よろこびありて、ざいほうまさに得べし
○禍病消散　萬吉和同
　わざはひきへて、萬事ゆたかなるべきなり

□六番　凶

○太陽失レ光　迷暗不レ明
　にちりんに雲のかゝるごとく、よろづあきらかならず
○官病同惡　口舌常生
　家職にさはり有り心をつくすべし、こうろん等つゝしみてよし
○求レ事未レ到　過レ旬吉祥
　もとむることいたらず、佛神をいのらばよからふぞ

□十五番　吉

○六合生レ日　事事合レ道
　天の惠みありて、萬物皆みちにかなふべし
○官財同吉　所レ求有レ命
　官祿ともにすゝみ、もとむる所かなをふぞ
○病去禍散　榮似二春林一
　わざはひきえて、たのしき森のはなさく

翁と日昌上人との親しさは、この合作神籤に見ても想像に餘りあるが、これには當然の因縁が繋がれてゐた。日昌上人の前身は、翁がその隱居所を書室として寓居したといふ、大阪寺島（今の松島邊）の船問屋尼ケ崎屋吉右衛門の子息であつて、こうした機緣から、翁と日昌上人は殊に親しい交りが結ばれてゐたらしい。それにしても、船問屋の子と生れながら、俗縁を斷つて佛門に入つた經緯は不明であるが、大阪から此僻地に移り住んで、久しい荒廢の聖跡を再興し、法燈を再び輝かした學德圓滿の名僧だと稱せられてゐる。いづれは數奇な前半生の持ち主であらうが、或は翁の作品の孰れかにモデルとなつて甦生して居るかも知れぬ。代々甲冑の家に生れながら、武門を棄て藝林に身を投じた翁の生涯と較べて、相似たのも一奇である。

翁と廣濟寺との負緣には、尚ほ一つの重因がある。日昌上人が當時再興に際し、本堂を一個人で建立した大信者に山本治重がある。日昌と親交あつたは言ふまでもないが、この治重の子こそ、近松淨瑠璃の院本を常に版行した正本屋九右衛門であつた。翁は日昌上人と其父尼崎屋吉右衛門の關係、及び著書の版元正本屋九右衛門との負緣から、二重にも三重にも廣濟寺との

親しみを加へて行つた。

寺には、再興當初、寄財のパトロンの名を列記した開山講中列名表がある。翁の名は、正本屋九右衛門や佐野川萬菊、同花妻、嵐三右衛門等と共に掲げられ、尙ほ百人講中にも、御經十部の施主として記名がある。

翁はまた、母の法要を營んで、後西院帝勅筆の色紙、二位大納言實藤卿筆慈鎭和尙法華經和歌二卷など、貴重な品々を寄附して居る。

斯くまで濃やかな親昵な關係に徴しても過ぎし享保の春秋には、月に花に、翁の訪づれ寄つたことが頻りであつたと想像される。ある時は、筆硯を携へて、思索執筆の爲め永く滯留したこともあらう。日昌上人の老父尼ヶ崎屋の隱居や、版元の正本屋の人々と相伴ふて來賽したこともあらう。淨瑠璃界の巨匠筑後掾や革新派の偉材政太夫や、三味線道長老竹澤權右衛門や俊秀三二儉校や、作者並座主の機才竹田出雲の一族や、おやま人形の巨擘辰松八郎兵衛などゝ、遊樂の袂をこゝに連ねたこともあらう、上人を繞つて此等の人々と共に、藝を談じ道を講じ、茶を啜り盃を擧げたこともあつたに違ひない。大阪の紅塵を西北に距る四里の僻邑に、斯うした睦まじい一大藝術倶樂部の出現したことを、想像するさへ愉快である。

◇

思ふてこゝに到ると、久々知の墳墓は、翁が唯一の遺跡として、社會人は、大に尊重し保護せねばならぬ筈である。

荒れ果てたあの廣濟寺……あの妙見堂……あの墓域の現狀を何と觀る！

程近い大阪には、巨萬の富を抱く者が、無緣の亂塔よりも夥多しくあるではないか、今日の大阪の驚く可き富が、二百年往昔に翁が栽え付けた魂の糧と、何の關係もないとは誰が云へやう。

大阪の富はいよ／＼增し大大阪の人はます／＼榮えて行く。翁は二百年一日の如く、さゝやかな靑石の下に、徐かな睡りをつづけてゐる！

菱川師宣論

田中喜作

房州保田の林海山別願院に現存してゐる師宣寄進の梵鐘と云ふものは、已に古くから諸書に散見してゐる上に、其の外には彼の此の郷國にも研究すべき材料と云ふものは全く遺存しないと聞いてゐるので、私はこの數年間、恒に期しながら、毎に疎懶をきめて、まだ訪ふことを怠つてゐたのが、最近ふと機會を得て保田に遊びM旅館に宿ることとなつた。偶、室に入つて楣間を見ると十號ばかりの油繪額の一面があつた。私は直に其の落款によつてそれがX女史の作であることを知つた。それは一面の靜物だが、その人の餘技としては思ひの外丹念に、綺らしく、美しく、解りよく云ふとピトレスクに、またそれだけ思ひの外常識的に繪かれてゐる。永い歷史の間に綺らしく畫かうと云ふことを堆積して來た經驗が、この無經驗（イネキスペピアンス）なるべき人の中にも入り込んでゐることを見た。私は無論その人を知つてゐる譯ではないが、此の土地で見るその人の油繪と云ふものと、師宣との不思議な對照に氣まぐれなチウルナリスチイクな興味を繰り返しながら保田の夜を明かしたのであつた。

私が師宣と云ふもの——私は師宣の作品とは云はない。『師宣と云ふもの』と云つておく——を愛するのは、此の永い經驗の堆積でなくて、また先生（メエトル）と云ふ他人の目を借りずに、いつも自分の目で對照の世界を愛撫しながら、どんなに自分が醜いにしろ、いつも素裸で——私はルナンが神はいつも素裸であると云つた言葉を思ひ出す——大手を振つてゐる點にある。たとひどんなに稚拙であるにしても、僞らず、飾らず、黑白の單純な、明快な調子の間に、或る時は謙讓で樸茂な丹緑の筆彩を交へて、人間の姿を力強く彫り付けてゐるところに在る。そして私が彼れの肉筆の大部分と、中期以降の版畫のあるものを屏けるのは、また是れと反對なものが畫面に浮んで、而もまだ春信以下に見る爛熟の淋しい美しさを味ふことも出來ない點にある。

師宣といふものの上には其の前後と其の左右との間にこんな大きな矛盾があり、價値の高下がある。隨つて彼の全部を總括

して唯一つの水準に當て嵌めようとすることは、多くの場合彼れを正當に味解する道ではない。だから若し彼を鑑賞し批判せんとするものがあるなら必ず何よりも先に彼の藝術の推移を明にし、また肉筆と版畫との別を明にし、然る後彼に取るべきを取り屛けるべきを屛ける必要がある。

私はこゝに一例を擧げる。岸田劉生君の近著『初期肉筆浮世繪』の一本は明透な批判によつて初期肉筆浮世繪の美的價値を限定されたもので、此の一派に對する評論として劃期的な名著であることは自他ともに認めてゐるものである。無論私には私の一家見があつて、不滿の點がないでもないが、君の師宣論も亦その一つであると云はなければならぬ。君の一本中にかう云ふ一節がある。

『師宣は有名な作家である。そして又明らかに偉れた作家であり功績ある作家である。しかし人が思つてゐる程、彼れの藝術に價値があるか否かについては私は異議を持つて居るものである。その版畫は中々力強いものがある肉筆はどうもその美が通俗的で甘たるいやうに思はれる』（同書一〇九頁）

尙君は是れを敷衍して彼の肉筆といふものゝ平凡な甘さを力說してゐられるのであつて、其の說くところは私も無論一々同感し得る所であり、また、多少藝術を味解し得るものなら、誰れしも言ひたい、言はなければならない言葉である。然し若しかう云ふ立論の基礎によつて師宣と云ふものの全部を批判することが可能であるとすれば、多くの浮世繪師（師宣後派と云つた方が正しいが）と云ふものは何れも五十步百步であつて、君の歌麿に對する同感は云ふまでもなく、春章に對する愛惜すら成り立たない譯である。言ひ換へると歌麿春章に對しては彼等の版畫を標準として歌麿春章を論じ、師宣に對しては彼の肉筆を標準として師宣を論じようとすることは統一を缺く憾がある。無論、君も『版畫は中々力強いものがある』と云つてゐられるのであるから、この立論の基礎は初期肉筆浮世繪論から序を追つて師宣に入つたことから、自然に起つたパラドクスに過ぎないだらうとも解しられるが、それでも尙君は彼の版畫を論じて『その審美を嚴しくたゞす時はその底に流れるものは、やはり多少纎弱な師宣一流の審美である』（同書一一八頁）と云つてゐられるところを見ると、無論私にしても多少そう云ふ一面を感じない譯ではないから、それが常人なら恐らく何等の不滿もないであらうが、それにも拘らず師宣に對する愛惜の最も大きい私にとつては默つて観過するよりも、彼のために一篇の辯護をすることが私の義務であると信じられる。同時にまた私は君の立論の基礎となつてゐる師宣の作品と云ふものが果して何

んなものであるかを疑はなければならない。もつと具體的に云へば岸田君の師宣の標準となつてゐるものは、最も多く目に觸れる彼の後期の作品即ち天和以降の作品であつて、前期即ち寛文期の作品と云ふものを餘り多く見られなかつたのでないかとすら疑はなければならない。若しさうでないとすれば君の特別なドグムであつて、鳥居派の作品と初期の肉筆畫との間に君獨自の水準を當てたことから起るパラドクスによつて、不幸にも師宣が外道視されたものとしか解することは出來ない。

勿論私は決して君の所説を否定するがために此の一篇を書く譯ではない。(否、それ以上に私は君の所論を最もよく理解してゐる讀者の一人であると信じてゐる。)たゞ私の師宣に對する愛惜は何人よりも強いものであつて、其處に自ら起る見解と批判との相違に過ぎないが、此の岸田君の一節を機緣として、君以上に師宣の善き方面を見ようとするばかりである。

本論に入るに先つて私は師宣自身の矛盾が岸田君の矛盾となり、また同時に多くの浮世繪研究者の矛盾となつてゐるものを解きほぐして置かなければならない。それは何であるかと云へば、肉筆と版畫(この中に繪本が包括されてゐることは云ふまでもない)との別である。由來師宣前派のやうな版畫と云ふものを作らなかつた時代の作家を論ずる上には立論の基礎は毎に非常に單純で、唯一つの水準に據つて是れを批評することが出來るが、版畫製作の方面が開拓された師宣以降の畫人については、肉筆と版畫との概念の區別を明確に限定しておかなければならないので、この兩者を同一の標準によつて見やうとすることは毎に矛盾の種を播くことである。何となれば肉筆と云ふものは、其の一筆一彩の上にも作者の情意が最も直截に表現されるのであつて、一幀の肉筆は常に作者の全部を露骨に表現してゐるが、版畫特に浮世繪版畫になると、第二者或は第三者の手になる彫刻と摺刷との製作過程によつて、作者の情意は異常に限定され縮小され狹窄される代りに、毎にその限定された範圍のうちで深められ強められまた活かされる。(それが若し丹緑彩色の如きものになると、色彩と云ふ本質的なものまでが第四者の手によつて加へられるので、この關係は一層甚だしい)そこでかう云ふ意味から云ふと、ある一人の畫人を論ずる上には常に凡ての標準を肉筆の上に置くべきが正當であると解しられるので、岸田君の立論の基礎を裏書するに過ぎないが、然し浮世繪版畫と云ふものは、さう單純に片付けてしまふ譯には參らない。我々が浮世繪後派の畫人を説く場合にはいつも其の版畫の作品を標準としなければならないのである。たとへその一葉が歌麿で

ある場合、多くの人は是れを歌麿の作品と解して其の功罪ともに歌麿その人に負はせてゐるが、實は歌麿と云ふものは、たゞ其の代名詞に過ぎないもので、寧ろ西歐に於ける版刻畫の "gravé par X d'après Y" の後者に當るもので、殊に浮世繪版畫は色彩と摺刷とによつて其の畫者より離れる關係を二重にしてゐるのである。たゞ西歐のそれと異つてゐる點は畫者が其の刻摺の功果を常に豫想してゐることで、その點から前者を代表者とすることが認容されるに過ぎない。隨つて我々は師宣或は歌麿と云ふものが師宣或は歌麿その人の作であると否とに拘らず、たゞ其の版刻畫そのものを玩賞批判するのである。このことは多くの人の間にも或る程度までは闇默のうちに認められてゐることで、それ有るがために岸田君の歌麿論の形式も生じる譯であるが、若しかう云ふ見解を是認する以上、師宣も亦この點から批判されて、出來るだけ師宣といふものの長所が認められることが私には望ましい。偶、師宣の肉筆と云ふものが多く說かれるのは、彼が肉筆と版畫との過渡期の人であることから、彼自身にもまた第三者にも此矛盾を起さしめる源因となつたのである。

そこで私の場合である。已に上述した樣に私は師宣の肉筆と云ふものにはたいして興味を持つてゐないものであるから、私も亦畫人としての師宣その人に、後に說かうと思ふ條件を除いては多くの價値を賦與することは出來ない（その點に於ては春章の如きも同樣である）ものであるが、たゞ師宣と稱してゐる版畫には他の何人よりも偉れた或るものがあることを力說したい。

今一つの問題は師宣と云ふ名が歌麿春信程ではないとしても、春章や寫樂以上にポピュラリゼエされてゐるにも拘らず、彼程その版畫の誤傳されてゐるものはないので、それを先づ明確にした上で師宣と稱する版畫を論ずべきである。

たとへば一例を彼の一枚繪にとつて見やう。今日師宣の一枚刷版畫として傳襲してゐるものを數へて見ると、諸家の浮世繪史及び蒐集目錄には相當に多くの種類が擧げられてゐる。然しその大部分は秘畫冊の斷片か『本くづし』であり、それ等を差引いて殘つてゐるもののうち、十中八九は師宣と稱しながら師宣の下繪でないと認むべきものである。

今それ等を列擧して見ると先づ松方氏蒐集品中に左の五圖がある。

(1) 花見（ヴイギエエ目錄圖版三、河浦氏版畫全集圖版三）

(2) 蹴鞠（松方浮世繪版畫集圖版一）

(3) 月下牧笛（ヴイギエエ目錄圖版三）
(4) 鳳凰丸舟遊（大阪毎日新聞社主催展覽會圖錄）
(5) 見立牛若淨瑠璃姫。
又ヴイギエエ目錄には十種を擧げてゐるが是れと抵觸しないものは
(6) 娘子軍（オウベエル版畫史圖版三）
(7) 扇の的
(8) 梅樹下の散策、ミジョン圖版十七）
(9) 淸水寺（河浦氏版畫全集圖版四、）
(10) 殿上遊樂（カモンド蒐集圖錄一）
及び秘戲畫冊斷片である。其の他の諸書には
(11) 名古屋山三郎道行（河浦氏版畫全集圖版一）
(12) 萬歲（同上二）
(13) 俳優總踊（芝居錦繪集成二）
(14) 社殿の婦女（浮世繪五十二號）
(15) 松風村雨（グウキン日本版畫志圖版一）
(16) 四武士と三人の女（林目錄一八〇、芝居錦繪集成一）
(17) 朝比奈時宗。（林目錄一七四）
等があり、尙、林目錄には前者の細物と思はれる賴光將退治、大江山の二種と畫帖斷片とがある。またバルブウトゥ目錄には五圖の圖版が挿入されてゐるが、目錄中の其の他のものと共に、稍正體の明かならぬもので畫帖の斷片らしく思はれる。以上の外には北里帖の斷片をまゝ散見することがあるが（藤懸氏著木版浮世繪大家畫集中に収められてゐるものもそれである）是等の畫帖の斷片中には師宣の版下と認むべきものも多いしまた此の外諸書の圖版に現はれてゐる秘戲畫冊の斷片中には師宣と師宣でないものとが相半してゐるやうに思はれる。然し今それ等を除いて、眞の大版らしいものは上記の十七種以外には、私の見ない諸家の目錄或は其の他の秘庫中にも、恐らく數種を發見し得る位であろう。

　そして以上の十七種のものは何れも師宣と傳へてゐるが、僅に(1)(3)の二種だけが師宣らしく思はれるもので、其の他の全部は師宣の下繪でないと斷言し得るものである。岸田君の「初期肉筆浮世繪」中に収められてゐる『玉取物語圖』と云ふものも師宣でないものゝ一種である。私がかく斷言する理由については多分後に說く機會があろうと思ふが、こんな點から(1)(3)の二圖すら多少の疑問が附き纏ふので、私は一面に師宣は大版一枚刷の下繪に筆を取らなかつたのでないかと思ふことに傾いてゐる。

　師宣と云ふものは、この一枚繪の一例が示してゐる程今日尙

誤られてゐるものであるが、轉じて繪本或は繪入本に就いてはどうかと云ふと、是れは幸にして、先年、外骨氏が多くの苦心を費して研究せられた業績が殘つてゐるし、また一枚繪とは違つて署名のあるものが多いから、前者に見る程誤られては居ないが、然し氏の研究が早かつたゞけ、それだけ不備の憾も多いし、特に私の云ふ寛文期の繪本らしい繪本は一部も見てゐられなかつた樣である。隨つて今日多くの人々が師宣の繪本と云つてゐるものは大抵彼の墮落期に近い時代の作品に過ぎないので、若しそれ等を標準として師宣が批判しられると云ふことは私として些か平かならざるものがある。たゞ不幸にして寛文期の作品となると繪本らしいものは僅に七八種が遺存してゐるだけで、其の多くが秘畫冊であり、それも今日では僅に一部位が諸家に分藏されてゐると云ふ性質のもので、此の少數のものすら容易に目に觸れることは困難である。

それだけ此の半面にはまた岸田君の所說を是認しなければならぬ一面もある。たとへば曾て某氏によつて師宣繪本の格付けが試みられたことがあつたが、それに依ると上の上と評價されたものが『千代の友鶴』『貞德狂歌集』『名古屋山三繪盡』の三部であつたが、當時此の筆者は署名のある刊年の明かなもののみを採り、秘畫冊を數へなかつた（たゞ一部が誤つてはいつてゐるが）のであるから、是を以て私は其の筆者の不明であるとするのでないが、然し今日一般には、かう云ふ標準によつて師宣の天才が說かれてゐることだけは事實である。然し是等の作品は何れも私の云ふ墮落期のものであつて、要するに書肆的評價に過ぎないのである。隨つて岸田君がかう云ふ評價に對してのみ『多くの人が思つてゐる程偉れた作家でない』と云ふなら私も亦君の言說に同意を表したい。

かうして考へて見ると多くの浮世繪師中に彼の如くポピユラリゼエされながら、而も彼の如く誤られ、また誤られ易い作家もないと思はれるから、私は此の機會を幸として私が今日までに得たる彼に關する智識を擧げて、師宣に關する文獻の一として後の研究者の便宜に資し、同時に師宣と稱する作品に對する一篇の辯明でありたいと思ふ。

彼の家系に就いては先人の調査に增訂を加へたものが、外骨氏の『師宣畫譜』に載つてゐるから私は再び言及することを避ける。たゞ私が過般彼の鄉國房州保田を訪ふた際に、思ひがけなく菱川やす女なる師宣の後裔（彼女に就ては今日まで何人の調査にも記されてゐない。彼女が師宣の正系であると否とは明でないが菱川家の相承者であることだけは事實である）に逢つ

て聞いたところに據ると、菱川家は近い數代の間、非常に落魄の生活を營んだがために盛時の事情に就いては一切知ることは出來なかつたが、彼の女の傳聞する所に據ると、祖先は京都より出でゝ此の地に移住したものであると云ふことであつた。また一面から見ると上總國竹岡の松翁院に現存せる菱川吉左衛門道性の製作にかゝる刺繡涅槃像（畫面だけで幅六尺長さ九尺に餘る大刺繡圖で驚くべく精巧を極めたものである。梅風子の浮世繪師系傳には『髮毛にて縫し』とあるは誤で、純然たる五彩の色絲を以てしたもので、『萬治元暦極月十五日、縫物屋房州平郡保田住、菱川吉左衛門尉觀室道性六十二才時奉縫之者也』とある）を見ても其の技巧は決してこんな邊境に得らるべきではないから、彼女の言ふところは事實であるであらう。隨つて家系に於ける祖先七左衛門の如きは、果して保田に住してゐたかどうかは疑はしい。たゞ何故にこれだけの技術を持つて彼がこんな一寒村に移住したかは明でないが、何等か特別の事情があつたものと思はれる。殊に彼の家が當時相當に富裕であつたらしいことは保田の林海山別願院に現存せる師宣寄進の鐘の銘記によつても想像しられるから、其の事情も亦決して單純なものではなかつたであらう。たゞ稍不審な點は師宣寄進の鐘銘には父を吉左衛門道茂とし、此の刺繡には吉左衛門道性とあることで、何れも最も重要な根本資料であるが、然し是れは晩年に道茂と改めたもので同一人であると解することが正當である。

師宣の生年に就ては全く知る由もない。或は正保中と傳へ、また寛永二年と傳してゐるものがあるが、正保説の如きは彼の繪本の刊行より見て成り立たないし、寛永二年説も亦何等の確證がない。其の歿年は鐘銘にある元祿七年五月以後、『姿繪百人一首』の跋記によつて、其の版行の元祿八年四月の間であることは、この二種の根本資料によつて明であるが、元祿七八年の何れであるかは明ではない。京傳自筆の『師宣筆薩摩太夫芝居圖考』に『師宣は元祿七年歿せる故云々』の語句があるが、是れも單に『姿繪百一人首』の跋記に據つて推定したものに過ぎないであらう。たゞ元祿八年一月版行の『好色五れいかう』『和國百女』の何れもには、まだ現存せるものとして出版されてゐることを見ると、是等の版行着手後に歿したもので元祿八年と認める方が正しいに近いであらうと思ふ。

此の歿年の元祿八年と、私が今日まで百方搜求して漸く彼の處女作と認めてゐる萬治三年版『吉原枕』（師宣畫譜はこの以前に五種の繪入本が擧げられてゐるが何れも師宣ではないと信ずる）の圖中に記入されてゐる文字の書體が後年のものに比して殆んど變化してゐないことから考へて、少くとも三十歳には旣

してゐたと想像すると、自ら寛永八年より以後ではないと云ふ結果になる。そして父の道性が萬治元年六十二歳より逆算して慶長二年の出生であるとすると、寛永八年は三十五歳に當るので不合理とは思はれない。同時に師宣が六十五歳以上で歿したらしいことが算出しられるのであるが、是等に就いては何等の確證もない空想的遊戯に過ぎない。其の他には私が菱川やす女に就いて聞き得たる新しい事實は『浮世繪師系傳』中に『旦那寺は隣村元名村龜福山存林寺といふ禪宗の寺なり』とある其の存林寺は菱川家の旦那寺ではなく、中頃隣村より入夫せる某の家の旦那寺で、菱川家は代々別願院に葬られてゐると云ふことで、稍事實らしくも思はれるが、存林寺の過去帳に父道茂の歿年があつたと云ふ系傳の記事を事實とすれば是れも明ではない。たゞ師宣に至つてあれだけの梵鐘を彼れ一人によつて寄進したと云ふことは、別願院により多くの佛緣があつたことは事實であらう。

この外師宣關係の雜記に就いては外骨氏の『師宣畫譜』にあり、また別願院の梵鐘及び松翁院の刺繡涅槃圖に就いては國華二百二十九號に濱田耕作氏の調査があり、また梵鐘の銘記文は雜誌『浮世繪』第二號に三村竹淸氏の記事がある。たゞ鐘銘の記錄に就いては三村氏と濱田氏のものとの間に多少の異同がある。多分屢々水火に逢つて磨滅してゐる部分があるための誤寫であらう。私は梵鐘の銘文と上記の二氏の謄寫とを比較對照して最も正しいと信じられるものを得たが、こんな瑣末な事項の詮議立てに就いては他の機會に讓ることにする。

然し如上の詮索は何れも彼の作品の上には重要な問題ではない。それよりも彼の畫系である。

在來諸家の定說となつてゐるものは、彼の畫系が全然江戶に屬し、江戶の地に生れたもので、師宣前派の肉筆の畫人が何れも京都に生ひ立つたのに比して、全然畫系の流傳を異にしてゐると云ふことであるが、私は此の定說に就いて少からず疑問を以てゐるものである。私は少しこの點に就いて私の見る所を語つて彼の畫系を明にしよう。

慶長より寛文末、即ち師宣の畫名が漸く世の認める所となつて、彼が始めて其の繪本に署名を施すやうになつた頃までに、版行された繪入本或は繪本は、お伽草子や淨瑠璃もの、古物語等を初として教訓的雜著より秘畫册に至るまで、硬軟百般の部門に分れて可成り多くの數に上つてゐるであらうが、それ等の畫者が果して何人であつたらうと云ふことに就いては、今日全く闡明すべき由もない。我々は今日それに關する一行の文獻も

持たないし、また一冊の署名本すら發見しない。隨つて我々は唯多くの書冊のうちに同種の筆格を辿つて、是れを系統立てる外に道はないのであるから、私も亦此の方法によつて其處に四つの主要なる畫系を發見する。

第一の畫系は光悦本と稱され、繪入本の嚆矢と云はれてゐる伊勢物語りより下つて、寛永末に最も盛行した草子もの丶挿繪の系統で、西洋銅版の影響を受けたと信ぜられる層雲法(弧線の連續によつて雲を描き、其の間に無數の並行直線によつて一種の線影(シエウル)を描けるもの)の間に最も稚拙な人物を配した一派で、そのうちには三四の畫人を數へることが出來る。然し此一派は要するに挿繪史上の最もアルカイックに屬し師宣その人には重要な關係はない。そして第二以下の畫系は私が假に名づけて、第二、女鏡(慶安五年版)系統、第三、寢物語(明暦二年版)系統、第四は狂言記(寛文五年版)系統とするもので、其內第四は狂言記以前の版行があるらしく思はれるが多くは寛文以降のものであり、寧ろ師宣に後れて發達し下つて純京派の畫人吉田半兵衛に入つた畫系であつて、師宣の源流をなしてゐるものと見ることは出來ない。隨つて此處に最も重要な關係のあるものは、即ち殘るところの第二第三の畫系である。

私はこゝに畫系の文字を使用してゐるが、是等二畫系の包有してゐる繪入本は是を互に對照比較すると各一人の畫人によつて成されたことを知るのであるが、此の第二第三の兩系統の筆格と師宣初期のものとの間には、非常に親しい近接があつて多くの書冊の中には師宣と否とを詮較し決定することの困難なものが非常に多いのである。それにも拘らず私が師宣の作品を辨別することの出來るのは、是等の書冊の刊行地の異同であつて、第二第三の書冊の畫系が少數の松會版を除いては全部京版であるに對して、師宣のものに至つては百數十種中一二の例外を除いては江戸以外の版行を數へることの出來ないことである。

此の刊行地の問題に就いてはもつと細說を要するものがあり、また以上の三系統の畫入本の分類的出版年表を舉げるべきではあるが、已に私は雜誌『浮世繪の研究』十五、十六號に其の一部を發表したことであるから、今はそれ等の煩瑣な詮議を避ける。唯、上記の材料を基礎として師宣の畫系を考へて見ると、私はどうしても彼が壯時笈を負ふて首都に畫技を學んだものと解釋せざるを得ないのである。尚一歩を進めるなら彼は恐らく京洛の地に第二系統の畫人の門に入つたのであらうとすら解釋せざるを得ないのである。『奈良名所八重櫻』の一部は延寶六年以前に彼が上方の地を踏んでゐることを物語つてゐるが、寛文四年の『薄雪物語』にも已に清水寺の景致を筆にして

ゐるのである。そして若し上記の菱川やす女の談話をも考慮に入れると、師宣その人の生地が何處であつたとしても、彼と京洛の地とは決して緣の遠いものではなかつたことも思はれ、恐らく若き師宣がその地に在つて畫道に志したらうと云ふことが決して不合理とは思はれないのである。そして畫技稍成るに及んで彼は江戸に下つて江戸版刻畫の創始期に立つたのであらう。

彼が江戸に於ける處女作が何であつたか。またその以前に、彼が畫技を京都に學んだと假定して、彼の作品が京都に於て版刻せられたかどうか。それ等の問題に就いては彼と第二第三系統の畫人との近接が餘りに親しいために、當時のやうな版刻術の幼稚な時代の作品によつては明に推定することは不可能である。而已ならず當時の繪入本の遺存してゐるものが重刷本求版もの等多く初版の刊年刊地を明にすることが出來ないので、萬治三年版『吉原鑑』『吉原枕』の二部以上の作品を發見しないのである。（曾て外骨氏が編せられた師宣作品年表には萬治三年以前に女諸禮集以下五部を數へ、またビニオン・セキストン版畫史には是を踏襲して女諸禮集中の一圖を師宣としてゐるが、何れも私の云ふ第二系統の畫人の作である。尙この『吉原鑑、吉原枕二部を師宣の作と推定した理由については書物往來二年五號所載拙稿の『吉原枕に就いて』を參照して頂きたい。）そして萬治三年以後の作品について、私は外骨氏年表中の三十五部を刪除し、十五部の刊行年次を是正し、新に五十部を訪索して、通計凡百五十部の彼の作品を得た。（古淨瑠璃本を除く。また私の編した年表の大部分は、これも已に浮世繪の研究第十五、十六號に發表したので、其後に新に得たものは二十部程あるがこれも他日の機會に發表する事として、此の一篇の冗長となることを避ける。）今是等を年次を追ふて通覽すると、在來多くの史家が彼の後期の作品をのみ標準として、彼の畫技が土佐に出で狩野に參したことを說いてゐるにも拘らず、私は彼が決してそんな正系の畫技を承け繼いでゐるものでなく、單に名もなき町繪師の畫室に育くまれたものである事を斷言する。彼が土佐を學び狩野に參したのは、彼の畫技が漸く熟して行く過程に於て自ら成されたものである。

それだけ彼の初期の作品は自由で樸茂である。彼の延寶後半以後の作品が、其の版刻畫すら段々執拗な描寫の力を缺いて一つの線條さへ鈍く弛んで行くにも拘らず、其の初期の作品には簡素な引き緊つた表現が、どんな副景の上にも行き亘つてゐる。私の年表中萬治寬文期の作品として二十六部（古淨瑠璃本を除く）を數へてゐるが其のうち上記の『吉原鑑』（某氏藏）『吉原枕』（自藏）の外『枕屛風』（寬文九年版、某氏藏）『うわもり

草』(寛文中期、自藏)『高屏風くだ物語』(寛文五六年版、京都、小山源治氏藏)『伽羅枕』(寛文末、梅原龍三郎氏藏)『讃嘲記時の太皷』(寛文七年版、自藏)の如きは其の好例證とすることが出來る。唯是等の書冊は吉原鑑、高屏風くだ物語、讃嘲記時の太皷等の吉原ものを除いては、全部が秘畫冊であることと、また何れも最も稀覯に屬し現今では各一部或は二部位が遺存してゐるに止まつて、容易く見ることの出來ないことは最も遺憾とすべきである。

以上の外、私は澁井清氏珍藏の最も稀有な一枚繪(寛文中期)を擧げることが出來る。それは一枚繪と云つても後期のものに見る美濃版の一枚繪ではなく、天地七寸許、左右二尺五寸位に秘戯の四圖を描いたもので、元は三枚十二圖を以て一套を成すものとして版行せられたものの樣である。『伽羅枕』に比しては稍單純な圖樣ではあるが、其の表現の緊密に至つては必ずしも劣つては居ない。殊に圖樣の單純を償ふて餘あるものは、其の驚くべく自由に簡素な、而も鳴り響く金石の樣な丹綵彩色である。(私はこの丹綵彩色が師宣自身の筆であるとは考へない。それが何人の手に成つたとしても、其の紙質と墨の刻線と共に、不可分の形と成つて師宣と稱する一圖を組み立てゝ居る。隨つて畫人師宣はこゝに重要な役目を待つてゐない。たゞ版畫師宣があるのみである。)由來師宣の作品中畫冊の形式をとつてゐるものの外には寛文期の作品は遺存しない樣に思はれるから、私は在來寛文期の一枚繪と云ふものはないと信じてゐたが(松方浮世繪版畫集には大版蹴鞠圖を寛文頃とあるが私は信じない。恐らくそれは天和以後のもので、また師宣でないものの一種であることは已に前に述べた通りである)最近この一葉を見るに及んで、初めて彼の一枚繪が已にこの寛文中期に製作されてゐる事を知つた。然しこんな資料的骨董的價値以上に、その作品は藝術的價値をより多く有してゐる。そこには緊密な、力強い線状によつて包まれた、すばらしく美しいデッサンがある。同氏の藏品中にはこの外に後期の師宣及師宣派の一枚繪の多數が珍藏されてゐるが、此の一葉に比べては遙に低劣なものであると云はねばならぬ。

是等の外に寛文期の彼の作品は金平本を除いて二十部に近く、其の大部分は假名草子の挿畫である。それにも拘らず私が主として上記のやうな秘畫を擧げたのは、其れが秘畫であるからいゝと云ふのではないが、また秘畫であるからいゝと云ふのである。言ひ換へると秘畫なるが爲に觀者のエロチズムに纒綿する事を云ふのでなく、秘畫なるが爲に作者は他の凡ての繋縛から開放されて、自由に客體(オブゼェ)の美を表現することを得たことで

ある。元來師宣の作品が包有する書冊の範圍は歌書、假名草子、名所本、吉原もの、風俗繪本、雜書等に亙つて非常に廣汎な題材を有してゐるが、是等のうち最も部數の多いものは秘畫冊であり、一枚繪を一組の組ものとして數へても、今日遺存するものは五十種にも及ぶであらうが、他の種類の作品が、延寶以後年を下るに從つて其の藝術的價値を低下してゐるにも拘らず、此の秘畫冊だけは他の作に比べて、それ程庸劣とはなつて居ないのである。こゝに二つの理由を數へることが出來る。一は他の種類のものにあつては各其の書冊の約束によつて何ものかを物語る事を目的とせるに引換へて、秘畫冊に於ては何れも何等の他の條件に煩はされる事なしに、たゞ人間そのものを描き得るからである。たゞ物としての眞實を求めて、物としての眞實を描き得るからである。二は前者に關聯して、物語るべき約束が常に畫中の人物を小さくするに引換へて、此の單純な圖様は自ら強い大きな線狀によつて表現される事になるからである。(然し師宣以後、一枚繪としての版畫が獨立する時代になると、かう云ふ關係はない。春信にしても歌麿にしても他の錦畫に比べて秘畫がいゝとは云へない。清信すらさうである。私は決してエロチズムを推賞するものではない。)

寛文期の作品に就いてはこゝに止めて次代を見ると、それが延寶期の八年を經て天和に至ると、彼は生涯の最多産期に入つて一般に彼の傑作と稱されてゐるものは、悉くこの時代から貞享にかけて描かれて、さながら豐饒の角のやうに彼の一管の筆から流れてゐるが、然し嚴しくそれ等の作品を批判すると、其の藝術的價値に於ては確に墮落期に入つてゐることを思はしめる。それは岸田君の云はれる通りに、また私も說いた通りに、彼の作品と云ふものは何れも客體に對する感覺は遲鈍となつて線は柔媚になつてゐる。前期の諸作に見る緊密な畫趣は全く求める事の出來ない樣になつてゐる。(たゞ延寶期の秘畫冊『雜書枕』『戀の息うつし』等が漸く前期の諸作に見る強い伸張性を殘してゐる。)是れは或る意味に於て彼の進歩である。彼の感情が漸く洗錬を經たのである。世人が主として此時代の作品を擧げようとするのは、實はこの感情の洗錬を喜ぶのであつて最も解り易い美であるからである。此の墮落或は進歩は彼の內からも說明が出來るが、又彼の外からも當然に起らなければならない推移であつた。

由來寛文と云ふ時代は文化史的に見て果してどう云ふ時代か。私は先づそれを說かう。

室町末期に貴族中心の社會相が戰國亂離の世と共に崩壞したが、かの悠久百年の戰國時代と是れを承けて少しづつ拾收して行つた織豐の治世とは、近世的經濟組織の苗芽を植えつけた時代であり、庶民階級が漸く富力を掌握しやうとする時代であつた。經濟的にもそうであつたが藝術的にも亦さうであつた。庶民階級が始めて文化史上に擡頭した事實は室町文藝の上に明に認めることが出來るが、我々の畫壇にも始めて近代的繪畫の發祥を見た。それが元和偃武の時代となつて世人が泰平靜謐を謳歌するやうになると、上下の思想が渾然たる融合點を形作つて、ここに初期肉筆浮世繪の傑作が相繼いで生れた。然し眞の庶民藝術を中心として云へば慶長元和寛永の盛期は室町から次代に渡る橋梁であつたと云ふことが出來る。當時の庶民的勢力の驚くべき興隆は此の豐饒な貴族的庶民思想の時代をも永く繼續せしめないで、早くも次代の庶民中心時代に入らしめた。もつと具體的に云へば室町末期は貴族思想が庶民思想に一歩近づいた時代であり、慶長寛永はこの思想的接近が完成されて貴族的庶民藝術が生れた時代である。然し當時はまだ庶民階級の文化史的勢力が彼等獨自の藝術を生育することが出來なかつたが、寛永期から漸次に培養された庶民的勢力が寛文期に至つて始めて勃然として擡頭した。今一度云ひ換へると室町末期は貴族的文藝の第一下行期であり寛文は其の第二下行期であると同時に眞の庶民藝術の勃興期であつたと云ふことが出來る。

師宣は實にこの新興の潮流に乘つたのである。由來新興の思潮に乘ずるものは、善かれ惡しかれ常に容體に對する潑溂たる感受の心を表はしてゐる。師宣の寛文期も亦それであつた。然し情緒が洗練を經るに從つてヴイヴイツドな感覺は逃げる。これは東西古今の藝術史が語つてゐるところであるが、彼自身にとつても亦そうである。彼は庶民中心藝術の興隆期に、何人よりも多く其の功績の分け前を持つたが、それが成就すると彼はもう一歩を進めて彼自ら貴族を以て任じようとした。多くの史家が説いてゐる樣に彼が大和繪師と署名したことが、彼の浮世繪を大和繪であるとする自負の心であるとするなら（私は必ずしもそう云ふ考方をしたくはないが）彼自ら成り上らんとする虚な衿持であつたと云ふことが出來る。その上寛文に次ぐ延寶期は江戸の經濟的膨脹が最高潮に達した時代であり、貴族の奢侈が四民に移つた時代であり、また江戸の淫風があらゆる社會に瀰漫して近世文化が完成され、而もまだ爛熟を得なかつた時代である。彼の作品が漸く柔媚となつたのも當然である。

然しかうは云つても私は此の時代の師宣を岸田君が云はれる

程見くびりたくはない。云ふ意は岸田君が春章よりも遙に下位に置かんとする程彼を見くびりたくはない。私の彼に對する愛惜は或は餘りに大きいかも知れないが、こゝには多少彼の畫史的位置をも考慮に入れなければならぬ。彼はかく新興藝術の劈頭に立つてゐるが、それだけまだ版刻畫藝術の獨立期には入つてゐない。――こゝで岸田君は當時の版刻術の未熟が彼の美の表現を都合よくしてゐるかも知れないと云つてゐられるが（同氏著初期肉筆浮世繪一一九頁）それは問題とはならない。我々は彼の版刻畫の上に畫人師宣を見るのではなくて、版畫師宣を見るだけであるから、其の作品の版下畫を想像する必要はない。――彼は終始版刻畫と肉筆との間に左顧右眄してゐるが、それだけ彼は客體に對する廣汎な心象を持つてゐる。彼の作品は非常に多數に上つてゐるが、また非常に多種に上つて、彼は人間の個々の姿にも、人間の物語にも盡きない感興を持つてゐながら、またあらゆる自然の上にも驚くべき愛情を有してゐる。

大體彼の作品のうちに表現されてゐる副景の樹草は初期から後期に至るまで、實に自由で力強く、簡素で裝飾的な功果を有つてゐるが、天和年間の作と信じられる『情のうわもり』を見ると、日光の中にきら／＼と光つてゐる葉裴をも表現しやうとしてゐる樣に見える。それ程彼の客體に對する感興は廣汎であつて、師宣後派と云はれる畫人の誰もが、何れも彼を母胎として生れてゐることが當然彼に賦與せられた特權である樣に思はれる。それを彼以降の畫人が何れも旨として客體の範圍を狹縮して、單に役者繪と限り、美人繪と限り、其の間にのみ生きて、飽くまで其の神經を砥ぎ澄ませてゐるのに比べると、彼にはそれ程狹く深い興味を感じ得ないことは事實であるが、それは同時にまた彼の長所でなければならぬ。その上私が上述した樣に彼の史的位置は上代の傳統からまだ明に蟬脫することが出來ないで、ともすれば物語ることに腐心してゐることは彼の短所を助長してゐる樣に思はれる。隨つて彼の作品には春章の役者繪の如き苦味の深さを見られないが、若しこゝに春章の苦味が劇的皷氣の苦味の一面であると云ふハンヂキャップを附することが容れられるなら、彼にも亦彼の史的位置のハンヂキャップを差引して批評することが許されてもいゝわけである。勿論私は上記のやうに彼の畫材の廣いことや、此のハンヂキャップによつて彼の作品を價値づけようとするものではない。だから若し論者にして此の春章の苦味が劇的皷氣の苦味ではないと云ふならそれでもいゝ。それなら私は師宣の秘畫冊を持ち出さう。勿論そこにも春章の役者繪の苦味は見出し得ないとしても決してそれに讓らない辛味がある。一歩を進めて若し春章の『呼子鳥』のや

うなものと對照し比較するなら、どれ位師宣の優越が説かれてもいい譯ではないか。彼の墮落期のものすら尙そうである。

然しからは云つても、私も亦岸田君と共に、世人が思つてゐる程彼が偉れた畫人ではないことを云ひたい。私は已に彼の版刻畫に對する世人の誤つた批判に就いてこの事を云つたが、こゝでは版畫としての師宣ではなく、肉筆畫の筆者としての師宣に就いて云ふのである。勿論こゝに偉れた畫人でないと云つては語弊があるが、少くとも初期の肉筆浮世繪の優品に見るやうな美的觀照の特異な深さを持つてゐないことだけは事實である。

彼の寛文期の肉筆の作品と云ふものが、どれだけ遺存してゐるか私は知らないが、知つて居る範圍に於ては帝室博物館の藏品となつてゐる北里圖卷中の寛文十二年云々の落款ある部分だけである。當時の師宣の畫技は無論まだ稚拙の名を縱にするだけには至つてゐなかつたろうから、自ら苦心の大作と云ふべきものも遺存しないだろう。隨つて單に此の一點によつて彼の寛文期を批判することは出來ないが、然し其處にたとへ客體の撲茂なる表現があり、また小さな人物の上にも美しい寫實的のデッサンがあるとしても、彼の版畫に見る程强く辛辣な滋味は到底見出すことは出來ないことを悲しまなければならぬ。

是れに比べると延寳期のものは稍多く遺存する樣であるが、私の知れる限りでは、單に前期の畫趣を柔媚にし姸麗にした以外には全く特異な味ひを見出し得ない。それよりも天和以降の作品と思はれる益田家の北里墨江遊樂圖長卷や原家の戲場圖屛風等は、それが苦心の大作であるだけ、彼を知る上にも、彼を批判する上にも重要な作品である。そこには驚くばかり濃麗で而も重厚な畫品を見るが、それ以上に味ふべき特異な滋味を有しては居ない。岸田君が單に綺麗事に過ぎないと云はれる評語は是等の作品に對しては過酷であると思ふが、然し彼以前の初期肉筆浮世繪に見る卒直な撲茂な、人間そのものの表現を忘れて、彼は餘りに多く典型的な裝的判斷を加へてゐる。個體の眞實を棄てゝ餘りに世相修飾に眩惑してゐる。是等に比べると私にとつては帝室博物館の友竹描きの美人圖（元祿に入つての作と思はれる）は遙に多く私の彼に對する愛惜に酬ふてくれるものがある。簡素でありながら濃艶で、而もまだ彼以後のだらしなく弛んだ畫致を見ないばかりでなく、そこには思ひの外緊密な線によつて包まれた人間の姿がある。前者が眞實らしさを求めて餘りに媚嫵に陷つてゐるに對して、是れは尙いくらか眞實そのものを有してゐる。前者はまだ長春にも求めることは出來るが、是れはさすがに次代の畫品ではない。他の多くの彼の肉

筆の作品が常に淺く廣く而も畫面のどの片隅にまでも小綺麗に整へられて、少しも生な味ひがないのに比べるとしても尙或る深さと生々しさとを包んでゐる。かうして考へて見ると彼の價値と云ふものは人が思つてゐる程傑れてゐないことは事實ではあるが、然し長春や春章や歌麿などと比して彼等の下位にあるものとは考へることは出來ない。たゞ彼の作品がどれ程妍麗であつたとしても、遂に師宣前派の傑作の高貴な畫品を再びすることが出來なかつたことを悲しむのである。

以上に於て私は彼の作品と云ふものに就て、概說ではあるが出來るだけの同情を以て、而も出來るだけ嚴しい批判を下し得たと信ずる。是れ以上に細說を試みても圖版を挿入することの不便な本誌にあつては少數の特殊な讀者以外には興味のないものとなつてしまひそうであるから、私は是以上に及ぶことを避けやう。たゞ私が前記のやうに師宣の大版なるものが大部分（或は其の全部が）師宣の作品でないであらうと斷言したことに就いて、今少し細說することは、彼を批判する上に可成り大きな問題であるだけ、私にとつて避け難い義務であるやうに思ふ。殊にこの問題に就いては澁井淸氏の談話が今春都新聞紙上に掲げられ次で週刊朝日誌上にも同氏の一篇が載つて、或る程度までこの問題に觸れられたのであるが、それ以上に文獻的に記述されては居ないのであり、また澁井氏の發見當初から私は多少この問題に携つた關係から尙更私の義務であるやうに思ふ。

元來師宣の大版と稱せられてゐるもののうちに異人の作が混入してゐると云ふ事は何人も感じてゐたことで、決して耳新しい事ではない。殊に聞くところによると、故小林文七氏の如きは早くからその內の或ものに就いて杉村某の作であると云つてゐたそうである。勿論此の點に就いて小林氏はどれだけの推定材料をもつてゐたかは明でないが、然し同氏のことであるから相當に確實な材料を有してゐたろうとは想像することが出來る。澁井氏の發見と云ふものはこゝに綯はれたのである。隨つて當時研究者の間には決してそれが同氏の發見でないと云ふことが說かれてゐたが、發見であると否とは私にとつては問題ではない。たゞ私として杉村治信なる畫人が師宣一派にあることを確認することを得て彼に對する注意を喚起されたことだけは同氏の賜であると感謝してゐるものである。

大體同氏の發見と傳へられたものは、同氏が偶然杉村治信署名本『ふり袖まくら』一冊を見たことに發してゐるので、これと傳師宣大版中のあるものに『杉村』或は『杉』の記入あるものと、また外骨氏の『師宣畫譜』中の杉村の條を結び付けて、こ

師宣の大版の或るものを杉村と稱した畫人の作であることを唱道せられたのである。たゞ不幸にしてこの『振袖枕』一本は澁川氏が一見して其の一圖を寫眞に撮影したゞけで姿を隱してしまつたから、私は其の寫眞一葉を贈られたゞけで遂に原本を見ることを得なかつた。爾來私は同書の遺存本を百方捜求し、宮武氏に就いて同書が天和四年版の『好色古今男』の後刷改題本であることを確め、また『午の春』によつて此の『古今男』が大阪に二部遺存してゐることを知り、最近漸く其の零本一冊を見ることを得た。私は是れによつてたいした研究資料を得なかつたが、然し傳師宣大版中の杉村とあるものと同書との共通點が、思つた程多くなかつたことを發見したので、今日では澁井氏の所説の『振袖枕』と傳師宣大版中の杉村とが同一筆者であると云ふ點に就いては多少の疑を持つてゐる。隨つて此の點に就いては同書の完本を見た上に讓らなければならないが、たゞ杉村某の作と信じられる『好色大黑舞』(元祿九年版)失題歌仙畫冊(刊年不明元祿中期)及び秘戯の一枚刷等を參照して比較すると、私が最初に擧げた傳師宣大版中の十七種中三四を除いて全部に非常に近い共通點があつて、其れ等が悉く同一筆者であることを確實にし、同時に師宣署名本との間に相當に大きい溝渠が横はつてゐることも發見し、また其の内の或るものに『杉村』或は『杉』の記入あることから見て、是等を杉村某の版下であつたらうと想像するやうになつたのである。

此の推定的基礎から考へて見ると、其處に『月下牧笛』のやうな一二の疑はしい、師宣らしいものが遺存してゐるとしても、天和貞享頃、師宣盛期に於ては、此の一枚刷と云ふものは書冊に比して遙に低級な出版物として、師宣の巨手を以て其の版下繪に染むことを潔しとしなかつたのでないかと考へられ、また師宣自身が元祿以降には已に肉筆にのみ筆を揮ふて書冊の挿畫をも描かなかつた(此の點に就いては多少の考證的研究を要するが已に『浮世繪之研究』第十五、十六號にも多少書いたことであるから、今は煩を避けて是れを確言するに止めておく)ことを思ひ、また其の大版の凡てが天和以降のものであることを考へ合はすと、秘戯畫帖の斷片や、また畫冊的形式の下に出版せられた斷片を除いて、眞に大版一枚刷と云ふものの間には、師宣の正蹟を發見することは出來ないのでないかと疑はれる。

こゝに私の云ふ杉村なるものが、『江戸圖鑑綱目』所載の杉村治兵衛正高か、或は『好色古今男』の杉村治信か、或はまた何れも同一人であるかに就いては尙一段の研究を要するが、元祿中期までの作品を見ることは事實であり、而も天和以上に溯るものを見ないことを思ふと、師宣との師弟關係の有無は明かで

はないが、石川流宣等と共に彼の追隨者の一人であつたことは確であらう。彼の畫技は無論師宣の寛文期の偉作の如きを見ることは出來ないし、天和期のものに比しても遙に劣るものがあるが、然し師宣直系の師重等に比しては必ずしも劣るとは思はれない。そして彼と師宣との畫技の異同は何處にあるかと云ふと、師宣の作品の常に自然的であり寫生的であるに對して、彼は常に圖形的であり裝飾的である。師宣には常に餘裕を感じるが――此の半面には多少彼に淺い廣さを感ぜしめるが――彼は常に小さく迫つてゐる。彼の作品の線狀は可成り單純であるが常に圖案的な弱さを持つてゐる。師宣が常に描畫を自然に則つてゐるに對して、彼は空想によつて客體をコンポゼエしてゐるやうに見える。（是等の點から見て私は彼が染織意匠師でないかと想像する。）

由來師宣の畫技の萬治以降の推移を見ると、寛文の初期に、私の云つた第二第三系統の畫人が、まだ形式的な疊雲法（寛文を中心とする西洋銅版畫風の雲霞の描法に次いで現はれたもので横線を重ねて疊のやうな雲を描くもの）を殘してゐるにも拘らず、彼はもう其の描法の重苦しい典型から全く離脫して二線並行描法を試みてゐる。また古大和繪風の鳥瞰的圖樣から、最も早く平面描寫に移つたものも彼であるらしい。かうして彼は在來の典型的な畫趣から常に蟬脫することに焦慮してゐたやうに思はれる。そして此の傾向は彼の晩期にまで及んで彼の作品の特長となつてゐるが、此處にもまた此の點に於て杉村に一步を進めてゐることが感じられる。

尙彼に就いては今後の研究に竢つべきものが多いが、然し傳師宣大版の大多數が彼の作品であらうと想像することだけは可成りの確信を以て明言すると共に、私のこの研究に口火をつけた澁井氏に感謝してゐるものであることを附け加へておく。

師宣の生涯及び作品に關してはまだ云ふべき多くの問題と材料とを有してゐるが、與へられた紙面を早く既に費してしまつた私は、彼の作品年表と共にそれ等を他日の機會に讓るより仕方がない。

江戸賣笑記

宮川曼魚

上古より現代に至るまで洋の東西を問はず如何なる無數の變遷に際しても、一貫して易らざるものは悲しむべき不自然なる必要の上に立脚する賣笑といふ制度の存在である。

許されたるもののうへにも宗教家は神の名によつて、道學者は倫理をもつて、科學者は病毒の怖るべきを誨へ、殊に私娼の類にはいつの世の爲政者も愁々たる法令をもつて是を中和もしくは防遏しようと焦つても、いづれも完き効果を得られなかつた事實は古來幾度となく繰返された實例が立證してゐる。

時代の文化が進めばすゝむ程この傾向は益高調され、その制度は彌々複雜を加へて發展し壓迫の激しい程猶力強く反撥し種々に姿を換へて持續したことは、この賣笑制度の根づよさである。

賣笑行爲の禁令もしくはそれに對する壓迫は激しいほど常習需用者の興味を饒にし、享樂の度を深からしめて却て反對の結果に陷ることが往々ある、供給者は變態自在の形式を採つて隨所にその職業を延長し殆ど停るところを知らない。

この怖るべき毒草は深く根をはり葉を茂つて、地上至る處に放縱の莖を延ばし、あやしく美しき闇に咲く花は不斷の春を人に媚びてやまなかつた。

此稿は東西の永き時代を連續せる賣笑史から觀れば、比較的近代の極めて短き期間である徳川期二百餘年の江戸に於ける狹斜の沿革賣笑の變遷を略述して、現代の賣笑制度に對する一考察を下すべき貧しい資料に過ぎないものであるから、周到なる準備のもとに成つた江戸の賣笑史でもなければ、其沿革の總てを盡したのでは勿論ない。單にその變遷の一班を叙するにとゞまつて區々たる約束の如きに就ては全く煩を省くことにした。

江戸最初の公娼

天正十八年家康公江戸入府と同時に既に公娼が官許されてゐたことは、其年から僅か十五年後の慶長十年に、千代田城修築のため常磐橋附近の柳町が馬場御用地となり、其邊の遊女屋に對して同じ丸の内の元誓願寺前へ換地を賜つて移轉させたといふ記錄があるので立證される。

當時の公娼は前記常磐橋内の道三河岸柳町に二十餘軒、京都六條から移つた娼家十六七軒が麴町八丁目に、駿河の彌勒町から來たもの十四軒が鎌倉河岸に在り、其他伏見の撞木町、奈良の木辻邊から江戸へ移つて賣色を營むものも所々に散在した。

一定の廓を設けず所謂散娼であつた當時の娼家が、いづれも申合せたように千代田城を中心として其附近に存在してゐたことは、繁華を一小部分に限られて昔ながらの武藏野に未だ人口も多からず町家も稀れであつた江戸初期の世態を窺ふに足りる。

事跡合考に

御入國以後江戸中所々に追々遊女宿出來候節、御年寄中御停止にも可被仰付、諸武士惰弱に罷成候はん儀如何と奉伺候處、神君上意に日本國中諸武士末々の者に至るまで江戸に來て諸國になき樂みを致さんと存じ、勇み寄るこそよけれ不苦其分に永々さし置き候へとの議にて、末代に至り遊女町御城下に並ひ可被置と云々。此事老輩の申留所也。

とあるのをみれば德川氏が娼婦を利用して中央集權の一方便とした施政方針の一端を知り得るばかりでなく、江戸創業時代の德川氏に附隨して入府した諸國の武士を唯一の需用者としたものが江戸最初の公娼であつたことを窺知される。約五十軒の娼家に各十人宛の娼婦が抱へられてゐたものと假定すれば其頭數は略想像するにたりるが、此期の娼家の構造やその制度は明かでない。

以上三ヶ所の娼家の内柳町のそれのみは何處から江戸へ來たものか知れないが、或は土着の女であつたらうか他の二場所の例をみればこれもいづれも上方邊の娼婦であつたらうと想はれる。

家康公の入府と共に諸國の人が一時に入りこんで宛然植民地の觀があつた當時江戸に於ける娼婦が、東方に遷つた中心勢力を慕つて移住してきた出稼人によつて充たされたのは當然すぎることである。鎌倉河岸の駿河女に較べて麴町八丁目の京女は、多年戰塵にまみれた三河武士をいかに滿足させたであらうかは想像にあまりある。

大盃を傾けて聲高に戰功を誇り、扇拍子にさんざめくより他の趣を辨さないむくつけき關東武者は、異性であることのみをもつて隨喜する性慾一點張りの單純な享樂振りであつたらうと

想はれるが、洞房語園の當時の遊興に關する記述によると

慶長、元和の頃は歴々の御方も兼日の約束にて、いづれの日には誰が家何といふ太夫が手前にて茶の會に参るなどとて、心易き同志は誘引ありしと也。

とあるのをみると京育ちの高級の遊女には相當の素養があつたことが知れる。又其頃は遊女の外出が公然に許されて、客の招きに應じてその邸宅へ白晝から出入してゐた記錄もある。

三河、伊勢、近江、駿河其他の諸國から新しき都會に移住してきた覇氣にみちた商人には妻帶の中年者が多かつたらうから、遊興から離れて稍實利的の傾きのある當時の娼家へはあまり足繁く通つたものとは思はれない、江戸最初の公娼が官僚を主な顧客として生れでたことは鳥渡珍しい現象といはなければならない。

永祿に渡來した三味線が江戸で一般に流布されたのは元和寛永の頃であらうが、既に慶長頃の京阪の遊女によつて玩ばれてゐたらうから、此時代の娼婦の手によつてこの新しい樂器も江戸へ輸入されたに違ひない。當時の遊女が三味線を弾いて坐興を添へた場面もあるべき筈である、とにかく三味線は慶長期の娼婦によつて最初江戸へ傳つたものと斷定して謬りなからうと信じられる。

江戸最初の私娼

開府と同時に公娼が置かれたことは前述のとほりであるが、私娼も殆どこれと前後して發生した。前に擧げた洞房語園の賣笑に對する當時の爲政者の執つた方針をみれば、徳川初期に於ける私娼の類の取締がいかに緩慢を極めたものであつたらうかは容易に想像される。慶長見聞集に湯女と稱する一種の私娼に就いての記述がある。

同書によると、慶長期にこの湯女といふものが江戸に起り町々の錢湯は十五文或は二十文などとり、いづれの風呂屋にも艶めいた妙齡の美女を二三十人づゝ雇ひ置き、浴客の垢をかき髪を濯ぎ湯よ茶よと運びて戯れ浮世がたりするとある

また落穂集の記述によると、湯女を多く抱へて置く風呂屋が其頃の江戸の隨所に在つて、朝から夜の七刻までの間は一般の浴客を迎へ、それからのち湯女は身じまいをして風呂のあがり場を坐敷に迎へ、金屏風などを引廻して三味線を掻き鳴らし、小唄などをうたつて客を呼んだとある。十五文二十文をとつて浴客の脊中を流すために、一軒の風呂屋に美女の二三十人も置くといふことは、いくら慶長の昔でも話があまり悠長すぎる、灯ともし頃から抱女に化粧させ風呂のあがり場を急ごしらへの坐

信じられる。

敷にかへて、文字どうりの混柔獰を現出させたものであらう。

この湯女と稱する江戸最初の私娼も當時の公娼と同樣に各地から移住してきた出稼人であつたらうと想はれる。婦女の風俗も未だ素朴であつた慶長頃のことであるから、見聞集の所謂美女の標準もあまり高く見積ることは許されない。身じまいといつても漸くこの時代に泉州堺の錢屋宗安、小西清兵衞等が明人の製法にならつて、おしろひを製して售り創めたばかりで、伽羅の油の如きは此時から約三十年も過ぎた正保年中に、東都芝の大好庵脊齒喜左工門といふ人によつて售弘められたものだといふことであるから、慶長頃の湯女の身じまいがあまり窈窕たるものであつたとは想はれない。

湯女といふ名のみを聞けば、いぢらしく優しく響くが完成の過程にある荒寥たる新都會の小さき街の薄暗き風呂屋の一隅に、哀しく低き三味線に合せて望鄕の唄をうたふ湯女の群れは、美しいといふより寧ろ異樣なものであつたらう。

初期の廢娼と散娼の統一

慶長の末年江戸の娼家があまりに繁昌を續け、日を逐つて其數を激增し月とともに風紀を紊すといふので、時の當局は俄に從來の方針を革めて廢娼の令を布いて江戸中の娼家を壊し遊女は盡く箱根以西へ追放したといふ記述が見聞集にみえてゐる。この記錄によると當時追放された遊女は「和尙」と稱する最上位のもの三十四人、他に名ある遊女百餘人と記されてゐるが、慶長十年にはやくも柳町、麹町、鎌倉河岸の三ヶ所のみでも既に約五十軒計りの娼家があつたとして、後年益々發展して遂に風紀の取締に對して緩慢な方針を執つてゐた當局の眼にも餘つてこの廢娼が布告されたものとすると、以上の記錄に現れた遊女はあまり少數に過ぎるやうに想はれるが、或はこれは僅に公娼の中の一部であつて、其他下級の遊女やまた當然湯女の如き私娼の類まで同時に追放されたものとしたら、可なりな人數に登ることであらう。

この江戸最初の廢娼も極めて短時日の間のことであつて、再び江戸の街々に遊女屋が現れ例の風呂屋女等も復活したことは、慶長末年から僅に二年後の元和三年に柳町の娼家庄司甚右衞門等が再び官許を得て、各地に散在した娼家を集め新に花街を日本橋に近い葺屋町邊に開ひて葭原町と名づけ、翌四年十一月其處へ移つたといふことで知られる。

元葭原開基

庄司甚右衞門は同業の山田宗順等とはかつて、當時江戸の各

所に散在した娼家を一個所に集め京大阪駿府等の例に倣つて廓を開設することが、當局の取締の上にも便宜であり自家の營業からみても利益があると考へて、左の三ヶ條の覺書といふ文書を添へて慶長十七年（元吉原繪屏風圖說及享保十年七月町奉行へ書上げたる吉原由緒書には慶長七年とあり）その許可を申請した。

三ヶ條の覺

一　遊女を買ひあそび候者遊興好色に耽り身の分限を不辨、家職を忘れ不斷傾城屋へ入込み長居候とも、傾城屋の儀け其者方より金銀だに申請候へば幾日も留置馳走仕候、然る間自ら其主人親方へ奉公を缺き引負押領致候事は、傾城屋ども金銀を限りに幾旬も幾日も留置候故と奉存候、一ヶ所の場所に被成下候者、唯今迄有來候傾城屋共を一ヶ所に集め吟味仕り今より一日一夜の外逗留無用爲仕申間敷候事。

一　人を勾引候者の儀前々より皆御制禁被遊候處、今以て粗有之當時於御府内も人を勾引候樣の不屆者ども有之候、其仔細は手前困窮なる者の娘を養子と名付貰置き、成長後妾奉公又は遊女奉公に出し大分給金を取り渡世と仕候、斯樣なる不屆者は人を勾引候も可仕候樣奉存候が此譯合も乍存養子娘抔相對にて傾城奉公に召抱へ候者も有之候樣に及承申候、傾城屋一ヶ所に集候は勾引の者の儀は否及申養子娘の筋吟味仕り左樣なる者奉公に出候は、屹度御訴訟可申上候事、

一　近年世上御靜謐に治り候と乍申、濃州御平均の事も不遠候得共、自然透間を伺ひ惡事相企申諸浪人の類も可有しと奉存候、左樣なる惡黨の類は人目を忍び住所を不相定流浪いたし此所へ參候とて、出所致詮議候者は無御設候間幾日留置申候、如右族所々方々の遊女屋にかゝはり罷在候はゞ御詮議破敗とも輒くは御手に入申間敷と奉存候、此度願ひ通り傾城屋一ヶ所に被仰付下置候ば、此儀は別して入念何者にても不屆者傾城町徘徊致候はゞ其者の御出所吟味仕りもし怪敷者共屹度御訴可申上候事。

右　御公儀樣廣大の御慈悲を以て奉願候通被仰付不候はゞ難有可奉存候。以上

この覺書といふものゝ中で第三條などの項目は可なり甚右衞門の頭腦の良さを示してゐる。當時の左傾團體である關ヶ原以來の浪人達の消息を暗にほのめかして、其筋の急所に觸れ自分達に廓を許可して呉れさへすれば、所謂左樣なる惡黨共の類を吟味して御訴へ申上げるといふのは多少當局の意を動かしたに相違あるまい。

果然出願の翌年の慶長十八年に甚左衞門等は幕府の評定所に呼び出されて、本多佐渡守から種々の訊問を受けたのち更に元和三年の春首尾よく出願通り許可された上、敷地を葺屋町に賜はつた。

これと同時に左の如き賣笑制度に關する德川幕府最初の取締規則が發布された

一　傾城町之外傾城屋商賣等不可致、並傾城町圍の外何方より雇來候共、先々へ傾城遣候事向後一切可爲停止候事。

…の趣は人目を忍び住所を不相定徘徊いたし此所へ參候とて、此所致共、先々へ傾城遣候事向後一切可爲停止候事。

一 傾城買遊候者一日一夜の外長留致間敷事。

一 傾城の衣類惣縫金銀の摺箔等一切爲着申間敷候、何地にても紺屋染を用ひ可申候事。

一 傾城屋家作普請等美麗に不可致町役等は江戸町の格式通り屹度相勤可申事。

一 武士町人體の者に不限出所吟味致不審に相見候者、奉行所へ可訴出事。

右之通り屹度相守可申者也。

この取締規則の最後の條項が當時の其筋をして廓を公許させた唯一の原因であつたので、以來永く遊客の身元調べだけは實行されたらしい、現代に至るまでもたとへ形式だけにもしろ娼客の住所と姓名を記帳することは、全く此時代の遺風であらう。

一説に慶長初年中既に京橋邊に葭原町と稱した花街が在つたとも云ふから、甚左衞門等の許可されて開設した葺屋町の元葭原遊廓は創業でなくつて繼續であつたかも知れない。

新吉原の開發

その後約四十年を過ぎて、江戸未曾有の大火のあつた同年の明暦の二年に葺屋町の葭原町を召上られ、新に千束村日本堤の邊に四萬四千餘坪の換地を賜つて總數二百餘戸の娼家が移された。此時から葭原を吉原と改め元葭原當時には晝間に限られた遊興を夜間も許されて後年の不夜城の名を得る基をなし、一層の繁榮を現出した。吉原遊廓の完成は全く千束村移轉後の夜間營業の許可にあつたものである。

千束へ移された新吉原は翌明暦三年正月の大火に災されて、一時本所彌勒寺邊の荒地へ假の花街を設けて營業を續けた。自來火災の度每に江戸の各所に假宅を許される例となつたが、それは此時の本所をもつて最初とする。千束村の換地は荒蕪の地を拓く意味で元地の葭原町全部の居住者に互つて、前居住地の五割增を小間割十五兩の金子とともに賜つたといふから、現時の區劃整理に於ける減分率と全く反對の結果を示すものであつた。

公娼が比較的に江戸の中心に遠い邊鄙の域に移つた明暦以後は、當局の廓を許可した最初の趣旨に反して再び私娼が跳躍を壇にして新都會の風紀を紊したことは自然の大勢と云ふべきであらう。

江戸賣笑の第一期

慶長から元和の創成期をその搖籃時代とみて今江戸の花街及私娼の沿革を三期に分けて攷ると、寛永から元祿までの約六十

年間を第一期とし、正徳から天明に至る約七十年を第二期に、寛政から天保の革政に至るまでの約五十年間を第三期と分けて記述することが便宜のやうに想はれる。

揺籃期を過ぎた江戸狹斜は、徳川幕府の基礎も稍ととのつて漸く御世泰平の暉光をみるに至つた寛永にいつて着々發展の機運にむかつた。

寛永二十年版の色音論草子に、當時の葭原には太夫七十五人、格子女郎三十一人、端女八百八十一人の遊女かゐたと記されてゐるさうであるから、當時の花街の規模はこれで想像することができる。これでみると江戸でも既に此頃から高級の遊女を太夫といふ名稱をもつて呼んでゐたやうである、見聞集の廢娼の記事にみえる和尚といふ妓級はこの太夫にあたるものであらう。太夫といふ名稱はもと京都の娼家が毎年一回四條河原へ舞台を構へて、能樂に類した亂舞を催し立方も地方も遊女をもつてこれにあてた行事が古くから續けられたので、この催に出演する遊女を太夫といふ名で呼ぶようになつた慣例か其儘江戸でも踏襲されたものであらう。端女郎とは娼家の見世で中央に居並ぶ太夫に對して兩端にならぶところからでた名であつた。

此頃から江戸の世相も昔日のごとき殺伐の風も薄らいで、漸く普及し始めた三味線に仕舞を合せた舞踊が案出され、柴垣といふ小唄さへ流行したといふから、自ら教場へ出入する遊子の態も實利主義の慶長度と異つて可なり暢かな遊蕩情趣が加つたであらうと想像される。

明暦以後の新吉原は萬治から延寶にかけてその規模も彌々成り、遂日に興隆して名妓も輩出し漸く華美に遷つた江戸の婦女の時世粧に先鞭して、遊女の風俗も昔の質素をすてて次第に華麗に赴いた。

貞享、元祿に至つて江戸の町人が時流に棹して容易に獲た黄金の力をもつて遊里に豪快の限りを盡くし、記文奈良茂の徒を大盡舞の歌謠に名をとどめた新吉原の全盛はあらためていふまでもない。これまで武士を最上の顧客とした江戸の花街は、第一期の終りに至つて始て民衆の歡樂場となつたわけである。

併しまだ此時代の遊興は總て遊女本位で、小數の男藝者のみは存在したが、廓藝妓の出現までは餘程間がある。名ある遊女の權式は高貴の姫君を凌ぎ、遊客の方から却てその歡心を迎へるのに汲々たる體であつたことは、西鶴などの草紙をみてもあきらかに知れる。

第一期の新吉原

揚屋制度

當時の吉原には、元葭原時代から引續いての制度で、揚屋と稱する客と娼家の中間にたつ一つの組織が存在した。格子女郎以下の遊女を買ふものは娼家で迎へたが、太夫買は直接に娼家へ行かずこの揚屋から名差しの太夫を招いて遊興した。揚屋は客の望む遊女の名を書いた揚屋差紙といふ傳票を抱主に渡し、娼家からはこれと引替へにその遊女を揚屋へ送つた。左のごとき元葭原時代の揚屋差紙といふものの文面が傳はつてゐる。

今日客御座候に付其方の御内何某殿と申女郎衆晝内屋申候、此客御上より御尋ねの御法度衆にては無御座候、いかにも慥なる人に御座候、若し横合より御法度の衆と町者御置候はゞ何方迄も我御等能出申分可仕候爲後日如件。

月　日

宿主（揚屋主人）　何　某

月行事　何　某

某（抱主）殿

明歷移轉後の新吉原になつて、いつかこの差紙の制を失つたが、揚屋の制度は延寶、天和年中を最盛期として第二期の寶曆にまで及でゐる。

揚屋に就いては元葭原開基の天和時代に四ヶ條の揚屋作法と、いふものが設けられてゐるから、初期のこの制度を知るために書ぬいてみやう

一　客歸り候跡にて遊女留置き申間敷候事。

一　遊女送迎屹度致可申。尤下男素足にて罷出候事。

一　身揚り爲致間敷遊女達て申候はゞ遣手へ申聞け得心候はゞ差紙遣はし算用の節揚代相立可申事。

一　兼約の遊女を貰ひ遊客よりシユライ請取候て兼約の揚屋へ可渡候若し名代遊女揚候はゞ右に不及不參候兼約は御座敷代受取申間敷事。

全盛な太夫になると晝夜客の名差しが多いので、振りに行つたのでは招くことが出來ないから豫め日を期して揚屋へ太夫の豫約を申込んで置くことを兼約と稱した。他家に兼約のある太夫をひいて招く時には、揚代の外にシユライ銀といふものを其太夫に兼約をつけてある揚屋へ支拂ふ規定があつた。

揚屋の繁昌と全盛な太夫が雨のように降る兼約の申込みに寧日もなかつた有樣は、第一期の終りの時代の遊里の態を描寫した西鶴の一代男に

さて太夫はと尋ねければ九月十月兩月は吉御方市左衞門方にて、共跡霜月中は利左衞門方に御入の約束、年忘れ三十日はこれに御けいやく早正月も定まり年内に御隙とては一日もなし、此方に年を御取あそばし春の事になされませいと申、いづれもあきれて其敵は何者じやと聞けば、小判は木になる物やら海にある物やら知らぬ人也、世之助も

此度つかひ捨かね千兩の支拂では中々及難し、十月二日初の亥の日より說顯てやう〳〵共月の廿九日に請十郎不吉が働きにて欸すまゝ迯あいと申事に定めぬ。

とあるのみても知れやう。この揚屋も第二期の中頃寶暦を名殘りに太夫といふ妓級の遊女が吉原に亡びたので自然消滅をして、散茶女郎が向上して呼出しとなり座敷持部屋持といふものに進化したので、その繁昌を後年の仲の町の引手茶屋に讓つた。

散茶女郎の出現

從來の遊女の階級は、太夫、格子女郎、端女郎の三種に過ぎなかつたものが第一期の終り頃から散茶女郎梅茶女郎局女郎などの妓級を新に生じた。新吉原初期の遊女の揚代は太夫三十七匁、格子二十五匁、端女郎十五匁といふ比例であつたといふことであるが、第一期の終りの貞享頃にはこの揚代が二倍された。

寛文八年の私娼取締に召捕られた女達を吉原へ下渡されてたので、廓ではこれを伏見町堺町の二個所へ置いて營業させることにした。これを散茶女郎と呼んでこの遊女を置く娼家を風呂屋風と云つた。

風呂屋女等から進化した散茶女郎の出現と時を同じうして更に「けんどん」と呼ぶ下級の遊女も現れた。此等の下級の遊女が年を追つて增えたことは今迄は有產階級のみの遊場所であり從つて比較的大金を要する傾城買が最も普遍的に引下られたもので、新吉原になつての新制度たる夜間營業とともに後年の繁昌を現出する重要な種因となつた。

元祿になつて更に梅茶女郎、切見世女郎と稱する妓級ができた。梅茶とは散茶に水をうめたといふ意味ださうで、娼家の構造は散茶見世を模して揚代は初め銀十匁であつたが、後には晝夜を二分して金二朱宛に改めた。切見世女郎は梅茶以下の至廉な揚代であつたといふことである。

第一期の私娼

湯女

本期以前の慶長に既に萌芽を發した湯女は第一期の初寛永年代に至つて益時好に投じたものとみえて、多くの女を擁する風呂屋は江戸の街々に頻出し、頗る大規模の設備でその譽を續けた。その代表的のものに有名な丹前風呂がある。

この頃神田佐柄木町（一說に雉子町）の堀丹後守の屋敷前に例の溫柔鄉をひらいたものがあつた。屋號を攝津國風呂といつて多くの抱女は他處の風呂女の群を拔いて美女揃であり、家屋の結構もすぐれてゐたので、浴客は朝夕群集して絕へる間もな

く、其噂を聞き傳へて二里三里の途を遠しともせず連日神田まで通つて來るものさへあつた。中には身分ある武邊の者で此家の抱女の容色に迷つて身を亡したものまであつた位で、攝津國風呂の評判は忽ち江戸中に弘つた。其所在地が堀丹後守の屋敷の前であつたから、丹前風呂の名で呼ばれた。

以來江戸の街々に此種の風呂屋が續出したので、寛永十四年に風呂屋一軒につき三人以上の抱女を許さぬといふ制限が其筋から達せられた。それでも猶湯女の弊害は防ぐことができなかつたとみへて、十年後の慶安元年二月江戸中の風呂屋に對して、今度は絶對に湯女を禁制するといふ嚴重な法令が布かれて、漸く湯女の姿は江戸の風呂屋から消えたといふことである。湯女の發生を慶長の中頃とみれば禁令の降つた慶安元年まで約半世紀の間、江戸の賣笑史に湯女の名をとめるわけである。湯女に換つて登場したものは天和年中の歌比丘尼である。

これはまた思ひきつて變つた姿の私娼の出現で、嚴しい私娼取締の法令の下をくゞつてその壓迫から免れるために採つた窮餘の策とは云へ、彼等が得意とする變通無碍も殆ど端倪すべからざるものがある。

古代の羅馬貴族の歡樂を思はせる浴場の美女に換つてこの比丘尼姿は、菩提樹下の涅槃を憧れる印度への推移である。

歌比丘尼

歌比丘尼とは其頃神田多町邊に多く住つてゐて、客の招きに應じて所屬の中宿へ出張つて媚を賣つた私娼の一種である。

これも初は熊野比丘、勸進比丘などといつて熊野繪と稱する因果を說いた繪卷を手にして、遍路した比丘尼の墮落したものが蛹をつくつたものであるが、後には本來の私娼がこの比丘尼の姿に扮して賣笑した。この歌比丘尼は普通の尼僧のやうに色も香もない木の端かなんぞのやうに想はれる墨染の法衣をまとつて殊勝に勸行したわけではなく、落飾の代りに常に綸子や羽二重の色めいた頭布に世を忍び、白裏をつけた黃がら茶の小袖に黑繻子の卷帶といふ風俗をして丹前柴垣などの小唄を節面白く唄つたもので、繻子鬢といふ名で呼ばれたのはその頭布からである。

念佛を小唄にかへた歌比丘尼は、かうして美事に法令の下を潜り有緣無緣の衆生を遍く濟度した。

注意すべきはこの私娼が始て中宿といふ賣笑の媒介所を利用したことである。當時は遊里にも置屋揚屋の制があつて太夫の居所と遊興の場所が區別されてゐたが、私娼が中宿を使用したのは歌比丘尼の新機軸である。それも最初は其筋を憚つての手段であつたらうが後には需給相互に却つてこの制度の便宜を

認めて公然と中宿ばいりをしたことであらう。

物好きな浮れ男にこの歌比丘尼が餘程歡迎されたとみえて、可なり永い命脈を江戸賣笑の記錄の上に殘してゐる。天和の歌比丘尼で美女と謳はれたものに、永玄、お姫、おまつ長傳などの名がみえる。

貞享から元祿へかけてあまり比丘尼が旺んに流行したので、寶永年中に例によつてその禁令が布かれ一時屏息したが、降つて寬保にはまた異常な勢をもつて復活した。それは第二期の項で述べやう。

歌比丘尼の直後に興つた綿摘みといふ私娼も家庭に在つて綿の手藝をしたり、綿摘みを多く抱へてこれに手藝を傳習するのを口實とする綿の師匠と稱する私娼宿も永く第二期の末頃まで續いた。

綿つみと云ひ前の歌比丘尼といひ此時代から私娼の多くは、たとへ形式だけでも何等か表面に職業を標示してゐた、これは以後の德川全期を通じて何時の時代にも襲用されてゐた方便であつた。大正初期に於ける淺草十二階下の造花屋などは、皆この手段を延長したものに過ぎない。

江戸賣笑の第二期

此稿で第二期と呼ぶ正德から天まに至る間での約半世紀間は、德川治世三百年の丁度中心に位置する時代で、絢爛たる江戸文化の釀成期であるとともに洗練を極めた都會情調の完成されつつあつた時であるから、從つて江戸狹斜の興隆も目覺しいものであつた。

正德三年の四月木挽町山村長太夫座で、はじめて助六の狂言が上演され滿都の人をして華かな廓の情趣に醉はせ異常な好評を得た以來、江戸歌舞伎と吉原はかたい握手をして色里を題材とした狂言が屢上場されるやうになつた。

打續く御代昌平に刺戟を失つて生活の無事に苦しむ上下の大衆は、その餘力を藝術へむけて發散させた。直後に勃興した江戸文學も全くこの退屈の賜物と云はなければならない。わけても江戸音樂は此期に素ばらしい發達をとげて、前代の土佐節、說經節の單純さに飽きて江戸長唄は完成され、上方から輸入された半太夫節からは江戸特有の勢調をもつた河東節が生れ、豐後節は江戸の常磐津となり、めりやす其他の俗謠の流行、蘭八正傳の流布などは自ら遊蕩の氣を助長することに充分であつた。

然も享保以後吉原の娼家の樓主連には世才にたけ文筆の技に堪能な才人が多く、此等の連中はその友人であつて日夜吉原に

出沒しては無事に苦しむあまり何事にも趣向好きな、江戸坐の俳人達を絶好の相談對手にして、廓の年中行事に時ときの催しものに智慧をしぼり想を凝らして遊客の好奇心をそゝり、その吸收に努めたので此期の新吉原は宛然江戸文壇及社交の一大倶樂部のやうになつた。

宣傳につとめたのは樓主連のみではない、遊女自身も此頃からさかんに自己宣傳を試みた、異色のある風俗に文選の道にあらゆる手段をとつて名妓の稱を得ることに努めたやうである。參詣の群集を見あてに淺草寺の境內へ一本毎に寄進した遊女の名札を付けた櫻を植え、奉納の提灯に名を記して評判をかち得ようと焦つた。享保の末年に萬字屋又右衛門が京の島原から遊女を下して新奇を喜ぶ都人士の歡迎をうけ、以來これに倣ふ家が續出したのも、寶暦になつて女藝者といふものが初て廓へ現れたのも、皆目先を替へた一種の趣向にすぎないことであつたらう。

寶暦以後明和安永天明に至る間の江戸の世相は前にも增して唯美的な傾向を生じ、世を擧げて極端に美そのものの禮讃に醉ふ狀態であつた。

目も綺する色刷りの東錦繪が獨特の藝術の域にまで進んだのも此の時代である。湖龍、春章等の畢世の事業は一圖に女性美の表現に外ならなかつた。なかでも春信の筆のあたかも春の夜の夢にて、儚くもあやしき幽婉なる線をもつしどけなき美女の繪姿は、放縦の血の燃え易い青年を如何につよく蠱惑したかは想像にあまりある。

此時代にあたつて戲文學の興隆は、當然來るべき機契とはいへ火に注ぐに油をもつてした觀がある。世相の諷刺を主とした黃表紙の類、笑話を輯めた小册本はまだしも、當時の青年が新刊を待兼ねて爭つて購讀した洒落本のごときに至つては、まつたく遊蕩の手引草であり情事の教科書とされた。

機才に富み遊藝の道に暗からず色道の機微を蒟蒻本に知り盡くし、遊蕩三昧の眞儀を究めた者を「大通」と呼ぶことがいつか行はれた。

流行の本田髷にきんきんの黑仕立、銀煙管をひねくりながらめりやすに深江露友の節をまね、はやりものの二挺鼓に投扇興に飽きれば女の品定めに日を暮らすのが此種の者の生活の全部であつた。世俗はまたかゝる通人を尊び、通たらんことを願ふことが其頃の一般の階級を通じての理想であつたらしい。

第二期の新吉原

妓級及揚代金

元文に新錢が鑄造されて、あらゆる物價が急激に昂騰したので、寛保以後は遊女の揚代も從つて高められ、太夫が銀九十匁、格子女郎銀六十匁散茶までが金三分及ひ金二分（銀三十匁）の二種となつた。

寶暦になつて王屋の花紫を名殘として吉原に太夫といふものがなくなつてからは、揚屋に替つて必要なものとなつたのは第一期の寛文に散茶女郎が出現したことによつて新に生れた新制度の引手茶屋であつた。徒らに格式が高く遊興に煩はしい形式を要した太夫や格子の衰へたのは、晦日に月のでる里にも止を得ざる時代の要求であつた。

此頃から散茶女郎の位置は次第に向上されて「呼だし」といふ妓級が新しくその中から生れた。呼出しにも二別があつて細見の記號に入山形に二つ黑星をつけたものは揚代金一兩晩一兩一分、同じく二つ白星の者を一兩とした。普通の散茶も晝三、附廻しの二階級に分けて、前者を晝晩三分後者を同二分とした。

呼出しと晝三は、古の太夫の例に倣つて二人或は三人の禿を連れて仲の町を往來して揚屋に換る引手茶屋へ客のある度に通つた、これを道中と稱して衣裝も趣向も出來得る限りの派手を盡した。附廻しと梅茶から進化した「部屋持」及び「座敷持は道中を許されず自樓に張見世をして客を迎へた。

部屋持の揚代は金一分座敷持は金二朱であつた。この下には切見世といふ制度があつて泊り二分ひときり百文といふ最低な玉代で下級な客に對手にする娼婦もあつた。此等の妓級は第三期までそのまゝ繼續されたが、揚代は錢相場の異動その他で時によつて變化したことは勿論であらう。

又此頃から「新造買」といふ一種の遊興方法が行はれ始めた。新造には振袖新造、留袖新造、番頭新造の三の種別があつて、振袖といふのは十四五歳になつた禿が、愛の諸分や手管のわけを見習ふために姉女郎に隨つて見世へ出て客に接したもので、中には禿といふ過程を經ない妙齡の女子を抱へて振袖新造として出す場合もあつた。

留袖新造とは前者の年が稍長じて廿歳計りになつた頃を袖をとめると云ひ、留袖を呼んだ。この兩者は全く遊女と相違した所がない、新造の揚代金は大雜で金一分、半雜で金二朱であつた。最後の番頭新造といふのは前者と違つて、呼出し晝三などの上級の遊女のために遣手と殆と同樣の役目を執るもので、引手茶屋其他への交渉から遊女の經濟方面のことなどを取しきるものであつた。

禿が振袖新造となつて初て見世にでることを新造出しといつて、樓主はその禿が附てゐた姉女郎に命じて一切の世話と全部

の費用の負擔をさせる慣例であつた。姉女郎はこれを「お役」といつて身分に應じて出來得る限り派手を盡くした。

まづ十日計り前から七ヶ所の懇意の處から鐵漿を貰ひ集めて振袖新造の齒をそめる、これを附初めといつて其日は樓内の男女へはもちろん平生出入する廓內の茶屋から客を送る船宿へまで蕎麥を配り、心易い他樓の遊女へは赤飯を贈る。妹女郎が初て見世へでる突出しの當日は、格子さきから往來へまで蒸籠を積み累ね、その上に二間計りの白木の臺に縮緬純子などの積物を飾り、茶屋船宿へは菓子折を出入の者幇間等には反物羽織煙草入などそれぞれの物を配る。突出しの新造へは七日の間日々に新調の衣裝を着せ替へて、仲の町の茶屋を連れ廻る、朋輩の遊女はその新造のために仕舞をつけとりどりの贈物をよこす、これに對する返禮其他の諸入費を含めて、「お役」を引受けた姉女郎の負擔は三百兩から往々五百兩以上にも登つたといふことである。

岡場所の全盛

その中に一部の所謂通人達は漸く吉原の平凡に飽き、異種をあさつて深川へ猪牙で通ふ氣易さを喜ぶ風を生じた。此頃の岡場所と稱する土地を擧げれば、深川七場所及常磐町、內藤新宿、品川宿、本所のお旅、一つ目辨天、入江町、松井町、谷中感應寺前、根津七軒町宮永町、小石川音羽、牛込の市ヶ谷、赤坂の溜池、四谷鮫ヶ橋、芝三田の同朋町及び三角等で、その中でも深川七場所の繁昌は岡場所の尤なるものであつた。岡場所とは當時吉原以外の娼婦の在る場所全部をさして呼んだ名稱であるが、此等の場所にも自ら等級があつて、深川、內藤新宿、品川の三ヶ所は稍遊里の姿を備へてその娼婦も公娼と私娼の中性のものであつた。

深川の巽七場所とは土橋、仲町、櫓下、裾繼、大小新地、新古石場、佃町である。その娼婦には呼出し伏玉の二別があつて、前者は子供屋と稱する置屋に抱へられてゐて、客の招きに應じて表面は茶屋を粧つてゐた土橋仲町の妓樓へ出張した。子供屋は多く仲町裏の山本町に在つた。伏玉は櫓下の各所のこれも表面は茶屋といふ云ひたての娼家に抱へられて遊客を迎へたものである。

深川の呼出しは同期の吉原の妓級に倣つてつけた名稱であるが、揚代は他の岡場所の娼婦に比して頗る高く、吉原の晝三に匹適し、伏玉も同じく吉原の附廻しの揚代に相當した。巽の遊里の約束や娼婦の揚代其他の記述は、守貞漫稿及び豐芥子の岡場所考、巽もの〻洒落本などに詳細を讓つて此處に說かない。

享保五年に一度廢せられた內藤新宿も、安永の初年に再び許

されて、旅舍を表面の名とする娼家五十二軒、抱女百五十餘人といふ記錄をもつて、品川の宿場娼家と對峙した。

第二期の私娼

踊子　山猫　けころ其他

次に第二期に於ける私娼を說くに就いて再び此期の冒頭の時代元文に溯らなければならない。

遊藝の流行が江戸を風靡した享保以來、この世潮に巧に乘じて生れた新形式の私娼が起つた、それは元文に始つた踊子(をどりこ)である。

其頃までの江戸には遊藝のみをもつて職業的に客の招きに應ずる女性はなかつた。吉原に歌扇といふ最初の女藝者が現れたのも、これより後の寶曆であるから、元文の踊子は現代の藝妓制度の濫觴である。

想ふにこの踊子は最初から賣笑のみを目的として生れたものではないらしい。時代の風に促された遊藝自慢の處女で自ら好んで衆人の慰みものとなつた者もあらうし、中にはまた十六むさしの子を喰ふ親が娘の容姿を賣りものに花簪、この頃流行だした梅の折枝の造りものをさして日の出衿も眼だつて美しく龜藏小紋の振袖を酒宴の席に翻して、氏なくてのる玉の輿の榮華を望んだものもあらう。

この踊子が時流に迎へられて急激に殖え、村松町橋町邊に屯して頻りに風紀を紊したので、寬保元年に嚴禁されて此種の女の跡を絕つた。我衣の著者曳尾庵が、江戸轉出藝者の元祖と稱した元文の踊子は僅數年の存在にすぎなかつた。

第一期の天和に興つた歌比丘尼が數十年後の本期の寬保に至つても衰へなかつたことは、私娼として曾て見ざる同一形式の永續であつた。

昔日の繻子髮は、正德に一時淺黃木綿の質素な頭巾に換つたが、再び年と共に復活してついに優美な黒縮緬となり、兒比丘尼二人を遊女に於ける禿のごとく左右に引き具して中宿通ひをするものさへ現れた。神田多町に限つた住居も、早稻田、下谷竹町、本所の諸所に擴がり、中宿の數も夥しく日本橋和泉町、京橋八官町、同太田屋敷、淺草門跡前及同心町邊に散在して繁昌を續け、櫻田邊の武士でこの歌比丘尼と深く云ひかはし情死沙汰さへ出て江戸中の評判になつたので、寬保三年に比丘尼の中宿はきびしく禁じられた。

優しい歌比丘尼が成佛の跡をうけたものは名も怖しげな山猫と呼ばれた私娼である。諸所の宮寺の境内に巣をはつて、表面は水茶屋を營みながら、參詣の男にあらたかな利生をさづけて

ゐた。

勿論はるかに後世まで續いた水茶屋女の全部が賣笑したものではなく、比丘尼廢止の直後に現はれた私娼の一部が、水茶屋女の形式をかりて本來の職業に從つたまでである。

延享年中に上梓された果然の時津風といふ弘く知られてゐる俳書がある。それは當時の江戸名物や流行ものを繪畫で現はしてそれ〴〵に俳句を添へてある、その中に「山下敝膝」と題して杯盤を置きならべた挿繪があつて

　　ひと銚子足に恨みやこぼれ萩

の句が贊としてある。これも比丘尼後の私娼の一種である。

けころといふ名は後世遊廓に於ける下級な娼家或は娼婦の名稱となつたが、その起源は獨得の私娼の名詞であつたらしい。これを一に蹴ころばしとも云ふから、動作の卑い私娼を云つたことが知れる。

後には上野山下に限らず、下谷數寄屋町、同提灯店、廣德寺前、堀田原の諸所に「けころ見世」と呼ばれる私娼の巣窟ができた。明和以後の洒落本のあるのにもこの名稱が見えてゐたやうに記憶するから、これも又相當に永くその命脈を保持したものであらう。

けころが初て山下に現はれた延享頃の上野近傍は頗る多事であつた。不忍池には新に中の島ができ其處から西茅町の裏へ板橋を架けたりして、辨天堂を中心に此邊一帶は俄に活氣を呈して賑かな盛場となり、妖艶な女を抱へた水茶屋や楊弓店が軒を並べて繁華を現はしたことは、これも化粧の者の招いた人氣であつたのは云ふまでもない。

寶暦六年には本郷の大根畑と稱する土地が町家に組入れられて、此處にも怪しげな女を置く茶屋が急激に數十軒もできた。新開地は昔も今に變らず賣笑婦の出現によつて忽ち賑かな土地と化した。此處もまた大根畑といふ名を殘して可なり永い間續けられた。

安永年間に埋立られた隅田川の河口の中洲新地も、この例に洩れず賣笑婦によつて開拓された。女をたくはへた茶屋九十三軒が埋立の完成された最初の年から在つたといふ事實をみてもそのさまは窺へる。わけて盛夏の頃は此時代から流行だした中形の染ゆかたを着て水邊の灯の明るい新開街をぞめく當時の青年の群れで、さぞ賑はつたであらうことは容易に想像されるではないか。

兩國の回向院附近の茶屋には金猫銀猫といふ賣笑も現れた。見世さきに金と銀の猫を置いてその階級を示したといふことである。辻君と云へば優しく響くが夜鷹と呼ばれて闇に咲く色香

も薄い下級なものは廿文廿四文で忙しい情を賣り、船饅頭と呼ばれる水上の流れの身に梶枕、うきくさのところ定めず漂ふはかない女もあつた。

本期の終りの天明の七年十一月の火災によつて吉原は又全燒の厄に遭つた。永い傳統をもつて久しく榮えた此廓の全盛も、次期の終りに近づく頃は全く昔日の華さを失ひ張りや意氣地を謳はれた吉原の情趣が亡びたのも、その機運は既に此頃から萠芽しつゝあつたのではなからうか。

江戸賣笑の第三期

寛政から文化文政を經て天保の革政に至る第三期の半世紀は、前期の釀成期の後をうけて江戸文明はまつたく爛熟の極致に達した時代である。

閣老松平定信の執つた寛政の綱規肅正も、糜爛をきはめ廢頽を盡くした風紀の紊亂、上下を擧げて昌平に皷腹して遊惰に流れた世相の推移は滔々として救ふことは不可能であつた。

一編の戯作の筆禍に作者は手鎖版元は身代半減といふ酷刑に、洒落本のごとき前期末に起つた遊蕩文學の出版こそ一時跡を絶つたが、極端な春戯の繪畫などは却てその間に發達して、精巧を盡くした繪本が續々と出版されてゐた。

享和を過ぎ化政度に至つて益々磨きのかゝつた纖細な都會趣味が總てのものの上にみなぎつて、外面的な前期の寛濶華麗の嗜好は野暮と罵り淺黄裏と嗤はれ、質素を表にして眼にみえぬ裡に贅を盡くす風を粹と呼び意氣と尊ばれた。この傾向は性的享樂の上にまで多少官覺的な影響を與へた觀があつた。

天保時代にいつては化政度に洗錬し盡くして極致に至つた都會情調が漸く行き詰り、あらゆるものの上に却て趣味の低下を現した。戯作といへば洒落に乏しき凡作の人情本か愚劣なる合巻ものが續出し、所謂天保調と後世に呼ばれる卑俗な狂歌狂句は惡落に墮して、情趣深き諸流の音曲は忘れられて娘義太夫の出現となり徒らに感傷的な月琴の流行さへみた。何の風情もなき異種の萬年青や松葉蘭の珍奇のみが喜ばれ、市中には毎夜何者とも知れず寺院の墓地に忍びこんで家々の石塔を磨きその戒名に朱をいれるなどの氣味の惡い惡戯が諸所に繰返されたりした。末梢的な變態趣味の發露は、あかるい江戸文明の上にも漸く世紀末の悒鬱な陰影がなげかけられた。

第三期の吉原

籬制度

寛政六年に全燒した後の吉原の娼家は、その等級も家屋の構造によつて瞭然と區別することになつた。

同七年の吉原掟書に

一　家作の侈美麗に不可致段、前々より被仰出有之候間、此度相守別して三階體の家作不仕、金銀張付同滅金物等無用に可致事。
　但し家作三階體の儀は此間早々相直し、軒高さ一丈八尺限り其餘高き分追々修復の節相直可申事。

一　屋根の儀は柿葺大屋根にて別して火事の節は不宜候間、古來總て家作三間梁より大きく致間敷候、御定に付有來の分は是又普請の節、三間梁に限可申候。

一　吉原町圍外見通目隱板の儀以來にて無等閑相守可申候。

とある。これは其頃遊女の衣裝夜着などに僭上の贅澤を禁じた掟證文と共に其筋から發布された簡單な建築條例であつたが、其頃から廓内には見世構への構造に就いて犯すべからざる嚴重な申合せがあつて、これが實行されてゐた。

娼家の等級は見世さきの籬と稱する格子戸の高さで區別した。籬の高さが天井に達するものを第一級の家としてこれを大籬と云ひ、その高さ二分の一或は四分三のものを二級として半籬と呼んだ。籬を僅に二尺に限られた家を三級として町並大町小見世と云つて籬の代りに竹を横たへた家を四級としてこれを小格子とし、裏々の長屋連のものを切見世とも局長屋とも呼んだ。

大籬は間口十三間のうち四間を見世として右方五六間を千本格子に造り、入口は九尺から二間として別に一間の格子を構へてこれを供部屋にした。奥行は廿二間を限りとして格子の幅は七寸で上方風の紅殼塗にする。この大籬以下の等級の娼家は間口十間を超えることを許さず、殊に小格子見世は格子の幅を三寸に限られる規定であつた。

此期の廓は文武の奬勵勤儉の御觸れなどの時流に超然として空前の全盛を極め、扇屋玉屋松葉屋其他の大籬には諸藝を通じて嬌名を江戸中に馳せた名妓が飛出し、吉原掉尾の極盛期を現した。妓級其他の制度は第二期の項で記述したものに大同小異であるから、總てこれを略すことにする。

江戸町藝者の發達

化政度に至つて時代の嗜好は絢爛な前帯に濃艶な裲襠姿の遊女よりは、いつそ小意氣な變り小紋に唐繻子の丸帯の瀟洒な姿で左褄をとつて途を往く町藝者の風俗が喜ばれ、性慾一方の遊女買は漸く一部の遊子の間に疎まれて、藝者遊びの茶屋這入りが氣のきいたものとされてきた。

江戸の割烹界は此時に全く急足の進歩を遂げた。前期の終りに近い明和頃までは寥々たる有様で僅に洲崎の升屋、竹市、大紋屋、八幡境内の二軒茶屋、芝口の春日屋、伊勢町の百川、向島

の武藏屋大黒屋等を數へるに過ぎなかつた會席茶屋が、深川の平清、山谷の八百善其他の名家が續々と相ついで出現した。

茶屋遊びの流行が江戸割烹の進歩を促し、會席茶屋の續出が町藝者の發達となつた。

前期末に旺に上梓されて今も二百幾種か現存する洒落本は、いづれも吉原其他岡場所の遊里に於ける客と娼婦の遊興のさまを描寫するにとどまつて、町藝者のそれを題材としたものは僅に一二種に限るが、化政度以後に出版された人情本の類に至つては全く前者と反對に町藝者と客の仲とを脚色したものが大部分をしめるやうになつた事實を見ても、此時代の遊子の趣味が娼婦を放れて町藝者に移つた過程があきらかである。

數寄をこらした會席茶屋の奥座敷で淺酌の藝者遊びに仇な三味線の音締めにつれる小唄の抒情詩、それからさきは人情本の筋書どほりで、當然起るものは客と藝者の情事である。

まづ戀愛の形式をとつて後に成立つ結局は賣笑行爲が、當時の町藝者によつて作られた新例である。賣笑の組織もかうして漸く有閑階級のみに許される複雜したものとなつた。

料理茶屋の多い河沿ひには、當時の交通機關であつた屋根船猪牙の船宿が軒をつらねた、後にはこの船宿が客と藝者の間にたつて、まつたく現代の待合茶屋と同じ制度のものに變形した。

第三期の私娼

宇田川町の若鶴と白瀧

文政五年に深川安宅の切見世が取拂はれた翌六年の六月から、芝宇田川町に當時としては異數の大規模な隱窟が出現した。

宇田川町の繁華な町並の中へ若鶴、白瀧といふ二軒の茶屋が隣り合つてできた。兩家とも評判の美人の娘のほかに數人の抱女を置いて、初は秘かに客を迎へてゐたが、美しい娘の噂を聞き傳へて通ふ蕩兒が跡をついで次第に繁昌したので、後には兩家とも抱女の數を增し互に競ひ合つて二十幾間かの座敷さへ增築して目覺しい發展をしたので、客の種類も漸次に向上して大身の留守居役富裕の町人達が踵を接して、大見世の娼家を凌ぐ全盛を現したので附近にはこの若鶴白瀧の二軒へ通ふ客をあてこんで數軒の料理茶屋や仕出し屋までできた程のありさまで、殆ど公許の娼家のやうになつたので遂に其筋の目にもあまつて取拂ひになつたといふことである。

其他の私娼は、第二期の岡場所の部で擧げた場所に散在して、別に本期に至つて發展した土地もなく、新しい形式のも現

はれなかつた。

岡場所取潰

天保六年の正月に吉原の遊廓は又々全燒し、翌七年は前期末及寛政以來度々の諸國の出水による當然の歸結として未曾有の凶作から江戸は官庫をひらいて細民に御救米を賜はる程の空前の大饑饉、八年は疫癘の流行と續く天譴に江戸の狹斜も各所の盛場もまつたく火の消えたやうに寂れはて、ひとり暗夜に行人の袖をひく夜鷹のみが淋しき江戸の街々に横行した。

天保十三年正月廿七日の夜、深川七場所の中でも尤も繁華な場所であつた仲町通りの巽きつての大茶屋尾花屋から火を失して、同家を始め附近の娼家數軒を燒き拂つたことは、明和以來引續いて江戸岡場所の隨一として吉原に次ぐ繁昌をもつて榮えた巽の狹斜も、やがて衰頽する機運に近づいた象徴ともみられた。

その年の三月十八日には、吉原以外の狹斜にとつて晴天の霹靂ともいふべき閣老水野越前守の天保革政の鐵槌が降つて江戸各地の岡場所は全部取潰された。

此時を最後として江戸賣笑史から姿を消した遊里は、深川七場所をはじめ本所一つ目お旅松井町、入江町鐘撞堂、吉田町、吉岡町。淺草の堂前と呼ばれた龍光寺門前。三田の三角。麻布市兵衛町。市ヶ谷谷町。根津門前。谷中いろは茶屋。音羽。鮫ヶ橋。赤坂田町の麥めし等の二十餘ヶ所であつた。

微にいり細に渉つたその時の大檢擧は、この他の街々に巣くふ私娼の類も一人殘らず絶滅させたことは云ふまでもない。

さしも二百餘年の永きに亙つて幾多の變遷を經て時に隨つて種々な形式を取つて出沒した江戸の賣笑も、纔に氣息奄々たる吉原を除く外悉く亡びつくして、一時に最後の幕をおろした。

以上略述した江戸賣笑の沿革の三期に就いて、劃時代的に攷へれば、搖籃期から第一期を通じた天正より元祿に至るまでの間を單純な性慾滿足時代とし、第二期の正徳から天明に至る期間を遊女萬能の遊蕩情調時代に、第三期の寛政から最後の天保革政に及ぶ期間を、世紀末的な變態性慾時代と假定することができる。

この杜撰な江戸賣笑記が、過去の沿革の古きを溫ねて聽て新しき現代の賣笑制度に對する近代人の要求を覗ひ、猶將來の歸納に就いて考察を加へる資料の一部ともすることを得たら、筆者にとつてそれは望外の歡びである。

晩年の石川啄木

——啄木最後の思想的轉回に就て——

金田一京助

啄木の歿後、その最後の思想的轉回に關して、私自身一つの波紋を投じて數多の人の疑惑を釀してゐる。此事に就て、私は甚深の責任を感じてゐるものである。人から度々それに關する說明を求められるので、何時かは此の責任を、自分で公に仕末しなければならないものと思つて居た。但この事は、終に私一己のみの關知してゐることらしいので、私さへだまつて居れば問題が無いのであるとも思つた。更に又考へれば、私一人のみ知るとすると、此を發表する責任がたゞ私一己の上に亙く懸つてゐることをも痛感する。幾度か書からとして書き切れなさに躊躇も感じられた。併し、遂にその時が來たことを感じる。今こそ私は、自ら進んで、故人に對し、世間に對する古い債務を果さうとするものである。

一

事の起りは、啄木七ケ年忌に溯る。當時、時事新報社から、啄木の追憶談を賴まれて、『石川君最後の來訪の追憶』と題し、故人が晩年私の家で、『私はまた思想上の一轉機に立つた』と自ら語つたことを紙上に發表したのである。その骨子は次のやうなものであつた。

『石川君の病が一時小康を得たことがある。其は四十四年の夏から秋へかけての事だつたと思ふ。其間に一度、杖に摑まつて私の家迄來てくれたが、恐らく石川君が此世で人を訪問した最後であつたらう。私が驚いて玄關へ迎へると、其處に立つてゐるのは、石川君、といふよりは、石川君の幽靈といひたいやうだつた。其程而痩してゐたに係らず、氣分は極めて輕さうに、やあと云つてにこ〳〵してゐた。中二階の私の室へ通つて坐つた時には、少し息切れがしてゐた樣だつたが、それでも目馴れがして來るうちに、いつもと違はない、いつもよりも、もつと晴やかな石川君に見えてゐた。挨拶しながら『けふは本當に來たくなつて、急にやつて來た』と懷しく云つて、『實に愉快で堪らない今の心持を、少しも早くあなたに報告したさに來た』『私の思想問題では隨分心配をかけたものだが、もう安心をして下さい』『今僕はまた思想上の一轉期に立つてゐる』（實際はどの語がさきで、どの語があとだつたかは判然しないが兎に角かういふ意味のことを、普通二人の間に交はす少しの敬語交りの詞遣ひで立てつゞけに云つたあとに『や

つぱり此の世界は、このままでよかつたんです』『幸德一派の考には重大な過誤があることを今明白に知つた』さう云ひ切つて、『今の僕の懷くこんな思想は何と呼ぶべきものだか自分にもまだ解らない。こんな正反對な語を連ねたら笑ふかも知れないが、(自分でも決して適當だとは思はないが、自分のこの心持を表現するのに、假りに云ふのだといふことを何遍も斷りながら、國言葉で、『お笑はえんすなや』と斷つて)――社會主義的帝國主義ですなあ』云々。(但し、括弧內は今、補註したもの)

當時、思想的に何もわからなかつた私には、石川君の自ら名づけ兼ねた所の、そして珍奇なこの名稱の意味した深い意味をよく了解しかねたけれども、石川君の思想の大きな轉回だといふことは直覺した。何ぜなれば日頃の奇峭には似ず、驚くべき論理の落付きが見えて、理路がさら〳〵と自然にほどけて隅々まで透徹し、すべてを抱容するやうな険い言葉の端々に、わからぬながらも打たれて、私は涙を抑へて聞き入つてゐた程だつたからである。

歿後、賴まれてすぐに書いた『石川啄木傳』(東雲堂發刊啄木遺稿の卷尾)には、この日の事は單に『夏時分には大分恢復して七八丁ある私の家までやつて來た』とだけしか記さなかつたが、あれは匆卒の間に君の生涯の單なるアウトラインを書いたに過ぎないものだつたからだ。何しても、石川君の全部を理解する上には、此日の言葉は極めて重要なものだと信じた私は、七年忌に『時事』から、賴まれた時、何を措いてもこの事を發表したかつたのである。七年忌の頃にはもう私も、遠くあの言葉の意味を玩味して、『石川君が、再び大きくこの現實を肯定したのだ』と會得することが出來る氣がしたので、『二大對立を包容する統一態へはいつたのだらうと思ふ』と附說して、發表したのであつた。

然るに、『時事』に此を發表したその日の午後、淺草等光寺の七年忌追悼會の席上、これが一場の物議を釀した。荒畑氏は徹底な態度で嚴かに『啄木晩年の思想に永遠の謎を投じたものだ』と嘆かれた。その外、啄木愛好者に九割九分まで、私の以上の發表は、有らずもがなの、甚だ不人氣な證言だつたと知るのであるけれど、事實を事實のまゝにといふ立場から、後年新潮社の啄木全集へ『啄木年譜』を書く際にも、私は是を重要視して、出來るだけ冷靜に、何等自分の解釋を加へること無しに、石川君の言葉の印象を其まゝ簡明に書きつけようと試みた。如何せん永い歲月を隔てゝ居るので、文句の少しの相違が出來たやうだ。併し私の印象から云へば、何れもがひどく違つてゐぬ事を切言し得る。『年譜』に書いた文言はかうだつたのである――

此の頃、杖につかまつて休み〳〵、弓町から森川町まで歩いて金田

一を訪ね、今自分が思想上の一轉機にあること、並にアナキズムの重大な誤を發見したといふことを物語つて、態々安心してもらひに來たのだと云つた。そして「自分の今到達した思想の傾向については、自分ながらまだ適當な名を知らない。强いて云へば――こんな反對な二名辭を結付けるのが可笑しいけれど、外に自分は今云へないから假にいふならば」と云つて、社會主義的帝國主義といふ表現を用ひ、そして、病床に危坐して火を吐くやうに現代の社會組織を呪咀した口から、涙ぐましく一切の現實を此儘肯定しようとする血の出る樣な言葉が溢いた。

年譜の性質上、出來る丈簡結に、自分の推測的解釋を一切省いてこれだけ表現したのであるが、これが一層物議の種を蒔き、この數行の記述がある爲に、武藤直治氏（早稻田文學）その他に、『啄木は晩年變節したか』と激語せしめ、或は『我等を裏切つた』と叫ばしめ、方々で私の言葉が叱られてゐるやうであり、眞摯な青年は直接に私を詰問したり、手紙で說明を求めて來たりする。

私は思想問題や文藝には盲目であるから、たゞ事件の報告者としての役目、材料供給の役割をしただけで、その解釋は寧ろ本當の啄木愛好家の方々に伺ひたいのであるが、私の表現が拙い爲めに讀者を疑團に導き、累を故人に及ぼすのが心苦しいから、私に關した限り、即ち、故人が態々さう云つて私を訪ねた行きがゝりと、私を訪ねた時の容子を、一層詳かに報導して、私があのやうに敍述した心持を明かにしたいと思ふのである

二

本來石川君は、山深き（一）禪房に生れて生活苦も知らず、純に育つた、寧ろ腕白の、明るい氣持の人だつた。年少名を成して自ら天才の矜を誇負した當時でも、やはり其處には、自ら（二）も後に云つてるやう、多分の浪漫主義的思想の底に、一味の宗敎的情操が流露してゐたことを觀過することが出來ない。

間もなく生活の笞に虐げられて、すべての華やかな夢から剝奪され、三年の歲月を、故鄕の落魄と北海の流浪に送つて、四十一年の春、最後の上京をした時（此から朝日新聞へ入社するまで私と同宿した）には、何もかも有りの儘に語ることの出來る强い人となつて來た。

當時の君は、自然主義の勃興、新人の擡頭に胸を躍らしながら、言葉の端々には何象徵主義を抱藏してゐた。併し自分の過去の藝術及び藝術觀を一蹴して、その興味の重心は、藝術そのものよりも寧ろ實生活、殊に社會思想の上に傾いて來てゐるのが目についた。而かも新に失業の境遇に落ちた君は何の定職もなく、小說を書き惱んでは、殆んど毎日私と火鉢を圍んで無駄話に日を暮らしたものであつた。二人は隨分議論もしたが、別

後の各自の生活、殊に二人に共通な故郷の話などになると、果てしがなくなり、夜中までも、或は興が湧くと、夜を徹して語り合つたりなどしたのであるが、(三)たゞその社會主義的論調になると、私はすぐに共鳴しかねて、何かと反對をしてゐたものだつた。

此處に私自身のことを述べるのは烏滸がましいけれど、それが最後の訪問の意味になるのであるから、少し許、その行きがかりを述べさして頂く。私は緩漫な考へ方をしてゐる方で、自分の不幸の原因を社會のせいにする議論には何時も躊躇した。與へられたる吾々の境遇は、唯一不二の事實である。而も、吾々は石や木片とちがつて、生きてゐて、刻々起る樣々な衝動を感じ、その刻々に吾々は勝手に何れかの衝動に聞いてその一を選つて行動をする。この選擇は吾々の自由である。それ故吾々のこの生活は、與へられたる境遇に於ての刻々の此の有意運動の結果であり、累積である。云はば、吾々が木石でなしに人間であるからこそ、吾々自らの創造する自己の生活を所有するのだ。吾々の幸不幸も吾々自らの創造である。之を周圍のせいにするのは、即ち自分自身を木石の位置に落すものだ。自己冒瀆である。社會組織に不備があるとすれば、その不備の責任は社會連帶のもので、二三少數者のせいではない。吾々自身と雖も亦遠く之を分擔せねばならない。何となれば、吾々と雖も瓦や石ころではないのだから、といふやうな考へ方だつた。

云つた一々の言葉は記憶しないが、さういふ立場だつたものだから、いつも其處には議論の溝渠があつた。石川君は熱した語氣で、下層生活の踰ゆべからざる貧苦の桎梏を描き、眦を決して奢侈階級の徒食を責め、こんな社會組織の不都合を、尙各自の罪として晏如として居れるかと肉薄する。私は、社會組織の缺陷を正視するのはよい。たゞ社會組織の不完全なのも、その造り手が人間だからだ。神では無いからだ。と迯すと、『それでは兎に角、社會組織の不完全を認めるか』とせまる。「認める」と答へると、『それなら、それをば人間のせいだとして放置して置くのがよいか、それを是正すべきであるか』と切り込む。是正すべきだと答へる。すると、然らば、と聲を勵まして、『既に不完全である。故に是正すべきであるとする。、、、、、、、、、、、、、と三段論法に疊みかけて肉迫して來る。さういふ結論になると私はいつも煮え切らなかつた。

「不完全だ。宜しく是正すべきである——そこ迄はよい。けれども、たゞ『、、、、、、、、』といふのは當然歸着する唯一の結論ではないやうに思ふ。、、、なしに進化（エボルーション）でも是正されて行けるからだ。二つの場合がある內、自分の思つてる一方

のみへ持つて來るのは、性急な結論だ」と論理そのものへ抗議する。

『性急？性急かな此は？』

と大口あけてアハハと笑ひながら、併し、併しと首を捻つて、實感味の豐かな社會の事相、だから普通選擧の時代が是非將來されなければならないといふやうな事まで、事細かに話されて、私も感に打たれて寢てしまふ。朝は、石川君は遲かつたし、私は務めがあつたから早く出てしまふ。務めから歸つて來ると、君の室の前を、聲かけて私が通るものだから、すぐにやつて來て、私に洋服を脫ぐ暇も與へず前夜のあとを續けるのであつた。甘い譬喩を考へて置いて、

、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、

私も夜來の陰慘な感銘が頭に殘つてゐて、この甘い譬喩にすつかり魅せられ、「やつぱり維新や大化の改新ぐらゐな改革は必要かも知れない」と譯なく折れて、それからそれへ話がほどけて行く内に、何だか少し腑に落ちなかつたさつきの譬喩のことが氣になり、ふと譬喩そのものの中に獨斷の存する點を私が氣がつき出して、

「むむ、癌と診斷するから、切開となるんだが、人間生活が、五萬年、十萬年の過去を持つとしても、このさきが尙何十萬年幾百萬年あるかしれない。して見ると、人生はまだ青年期、若しくは少年期にも達したか、達せぬかの處だ。癌ではなくつて、慢性胃弱なのかも知れない。」『すると、矢張。適度の運動と食物の注意ぐらゐでも健康になれるかな。』二人口を揃へて、『切開は又せつかちかな』と云つてアハハハと笑ふやうなこともあつた。

今から十數年の昔の事であるから、一々の言葉は覺えてないけれど、よく斯う云つた樣な議論をした。その外君の詩論、私の國字論、はては當時文壇の懸案であつた觀照論、自然主義と實行の問題なども論題となつた。

尤も此のころは、石川君もまだその思想の啓蒙時代だつたし、私に至つては、まだ啓蒙期にも達せず、あの該博な、而も實感の深味をもつ石川君の說を一々咀嚼する準備も無かつたばかりか、私は何時も受身で、大抵聽き手の役に止まり、たゞその言說の論理の校正を務めてゐたやうなものだつた。始終ちいつ

と聴いてゐて、『も一遍』など云つて繰返さして、『そこまではよい。そこから先は、まだ場合がも一つあり得さうだ。だから、さうきめて了ふのは矢張まだ性急な結論だ』と抗議しいしい擱き、石川君は『それなら』と云つて又議論を建て直し建て直するのであつた。

一體石川君は、以前は綺麗な散文や感情的な隨筆はあつたが、議論になると、結論が大飛躍をしがちで、寧ろ、その大飛躍を興味の中心とさへした。眞の結論はどうでもよい風があつて、故意に見せかけの三段論法の下から人の思ひもよらない突飛な、而も刺すやうな皮肉な滑稽な結論を導出して一座をあつと云はして喜んだりした。(究屈な席や、女子供を交へた座などでは、殊にそんな方へ脱線して僅かにその鬱勃を遣る道を見出してゐた。それ故大先輩や婦女子の人だちの中には石川君を、よく笑ふ面白い事を云ふ人ぐらゐにしか思つてゐない人が澤山ある。)理解力の明透を惠まれた詩人的直覺が、直ちに或結論を摑むことが早かつたが、ともすれば、その直覺した結論をまづ持つてゐて、あとから論理的な着物をおつかぶせようと急ぐことがあつたから、私にも屢々その論理の缺陷が見出せた。

私と同宿した一年間の後半期は、自ら文藝上の主張を實生活の上にまで徹せしめて全生活を統一しようとし、愈々浪漫的色彩を撤廢して、その『藝術の爲の藝術』が『人生の爲の藝術』に移つて來る注意すべき一轉期を示してゐた。(四) 私は人生に就き藝術に就き、實に澤山の事を君から學んだが、若し寸毫でも私が君に貢獻することがあつたとすれば、こんな事を考へては不遜至極であるけれど、その詩人的空想的飛躍の論理的掣約であつた。此の年(四十二年)の三月、君が朝日へ入社し、下宿を出て、本郷へ一家を纏めて生活の落着を得た時、(そして更に秋に入つて、一時ではあるが、愛妻節子さんに家出をされて、最後の絲まで殘る所なく繰出し盡して本當に兩手を吾々に開いてしまつた時、)(五) ぽつぽつ雜誌に新聞に評論の筆を執つて『食ふべき詩』以下數多の論文を書き出したが、その論理的精透を、密かに感歎する私の心の一隅には、人に云へない不遜な喜悦をさへ藏してゐたものだつた。殊に微笑を禁じ得なかつたのは、翌四十三年二月に草した『性急な思想』の一文であつた。標題そのものが既に私が石川君の説を抗拒するに毎々用ゐた私自身の唯一の標語であつた上、その文の發想形式にまで、私自身が常に用ゐてゐた口吻が知らず〳〵出てゐるのに逢着したからである。

――思想は勿論、君獨自のものであるが、

『妻を有ちながら、他の女に通ぜねばならなくなつた、或はさういふ

事を考へねばならなくなつた男があるとする。そして、有妻の男子が他の女と通ずる事を罪惡とし、背倫の行爲とし、唾棄すべき事として秋毫寛すなき從來の道德を、無理であり、苛酷であり、自然に背くものと感じ、本來男女の關係は全く自由なものであるといふ原始的事實に論據して、從來の道德に何處までも服從すべき理由とては無いのだと考へたとする、其處までは可い。若しも其際、問題の目的が「然らば男女關係の上に設くべき、無理でなく、苛酷でなく、自然に背くものでないところの制約はどんなものであらねばならぬか」といふ事であるのを忘れて了つて、既に從來の道德は必然服從せねばならぬものでない以上、凡ての夫が妻ならぬ女に通じ、凡ての妻が夫ならぬ男に通じても可いものとし、乃至は、さうしない夫と妻とを自覺のない狀態にあるものとして愍むに至つては、性急も亦甚だしいと言はねばならぬ。……

石川君の此論文は、當時の對自然主義の生活態度を最鮮かに語つたものであるから、序にも少し引用さして頂く。

『若しも又、私が此處に指摘したやうな性急な結論乃至告白を口にし、筆にしながら、一方に於て自分の生活を改善するところの何かの努力を營み——假令ば、頽廢的といふ事を口に讃美しながら、自分の腦神經の不健康を憂うて鼻の療治をし、夫婦關係が無意義であると言ひながら家庭の事情を緩和すべきある努力をしそして其矛盾に近代人の悲しみ苦しみ、乃至絕望があるとしてゐる人があるならば、其人の場合に於て、「近代的」といふ事は虛僞である。我々はさういふ人も何時かは其二重の生活を統一し、徹底しようとする要求に出會ふものと信じて、何處までも將來の日本人の生活についての信念を力強く把持して行くべきであると思ふ』（四十三年二月）

と結んだ。私の論理が、かう活きて役立つてゐた。

かうして、燎原の火の如く文壇をひとなめにした自然主義の思潮も、強弩の末勢、一たび「實行」の問題に逢着して停頓したとき、あらゆる傳統を叩き壞した自然主義者が、その實生活——對國家といふやうな問題をば避けてそつとして置く所謂隔一線の態度に、石川君はまづ不滿の叫びをあげ、自然主義の諸領袖だちを卑怯よばはりをして、自らこの隔一線を徹廢する新理想主義の緒口を拾つて力強く起き上つた。

『國家！　國家！　國家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに輕い問題であらうか、昨日まで私もその人達と同じやうな考へ方をしてゐた。今、私にとつては、國家に就いて考へる事は、同時に、『日本に居るべきか、去るべきか』といふ事を考へる事になつて來た。（きれ〴〵に浮んだ感想と回想の一節）。

此は四十二年十一月二十五日の稿である。この頃から翌四十三年の一・二月にかけて、石川君の人世觀は、極めて明るい、積極的、肯定的なものになり、一方、藝術をその天堂から引降すと共に、他方、生活の純化統一によつて、この二者の間の、障壁を徹し、玆に、生活則藝術の大道を打開して、その倫理觀は自己實現說に、思想的傾向は著しく國家主義的色調を帶びるやうになつて來た。

一月九日、大島氏へ寄せた書簡の一節に、

『現在の日本には、恰も昨日迄の私の如く、何らの深き反省なしに日本國といふものに對して反感を抱いてゐる人があります。私はそれも止むを得ぬ現象と思ふけれども、然し悲まずにゐられません。私は考へます。遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出來ぬ人は哀れな人です。然し現實に面相接して、其處に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりません。かくて私は現在の殆んどあらゆる批評家の言に反對せねばならぬのです。既に我々は我々の現在のいかなる狀態にあるかを知りました。この狀態は決して滿足すべきものではありません。我々は仍ち進んで、このやうな狀態になつたところの原因を探求し、闡明し、而して更に創造者の如き勇氣を以て現在の生活を改善し、統一し、徹底させねばならぬのではありますまいか。人生——狹く言つて現實といふものは、決して固定したものではない。隨つて人間の理想といふものも固定したものではない。我々は時々刻々自分の生活（内外の）を豐富にし、擴張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善してゆくべきものではないでしようか。あらゆる思想、あらゆる議論の最後は、然して最良の結論は、唯一つあります、乃ち實行的、具體的といふ事です。私は叙上の意味に於て、新らしい個人主義を力強く把持して行かうと思ひます、同じ理由から、私は、機會があつたら新日本主義といふものを說かうと思つて居ります、現在の日本には不滿だらけです。然し私も日本人です、そして私自身も現在不滿足だらけです。乃ち私は自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか……自己の生活の改善、統一徹底といふ事は、やがて自己を造るといふ事ではありますまいか。

かうして石川君自身は、藝術と生活、主張と行動を統一する全的生活に直進する新らしい光明を發見すると共に、茲に始めて、久しく失はれたる自信を恢復してすつかり力強く更生した。

わが持てる思想のすべては金無きに因する如し秋の風吹く

自ら投げて自らを葬る爆弾の自嘲の沈痛さ。その言葉はおどけてゐるけれども、その心持は決して冗談ではなかつたのである。かう自ら喝破し得た瞬間、もう其自らではなかつた。

快きあゝこの勞れ、息もつかず仕事をしたる後のこのつかれ

快く我にはたらく仕事あれそれを仕遂げて死なんと思ふ

高きより飛びおりる如き心もてこの一生を終るすべ無きか

など、此の當時の氣持のよくあらはれた愉快な歌である。

（一　啄木の生地を『年譜』に岩手縣岩手郡澁民村寶德寺と書いたのは誤。實は、兩親がもつと田舍の、同郡姫神嶽の中腹、日戸（ヒノト）村の山寺に居られた時に、そこで生れたので、二つになつた歲に、兩親と共に澁民の寶德寺に移つて來られたのだといふことを、日戸村の産なる石川準十郎氏から注意されて、思ひ出した。その事を生前故人から私も聞いたことがあつたのに胴忘れしてゐたのである。この序に些事ながら年譜の誤を訂正して置く。尙、母堂は葛原氏で、佛穎對月師の妹と訂正しておく。原が月になり、佛が仰になつてゐるから。（尤も此は誤植ではなく、指教を受けた岩崎德明師の書翰に誤があつたことを、岩崎氏に質して後に確めることを得たからである）。

(二)『食ふべき詩』の中に、過去の自分の詩作を極端に罵倒した中に以前私も詩を作つた――其頃の詩といふものは、誰も知るやうに、空想と幼稚な音樂と、それから微弱な宗教的要素（乃至はそれに類した要素）の外には、因襲的な感情のある許りであつた』云々

(三) 二人はよく故郷の秋色を偲んで涙を流した、『桔梗女郎花に埋れる岩手山の裾野！』『ウンそして山肌が油の色を湛へて見るかぎり澄んだ秋の空へ聳つあの岩手山！』『ウンそして、どんと秋草を敷いてそれを仰いでゐると、あの耳いつぱいに入る蟲の音！』『ウンそれよりも！』『ウンそれよりも：：』と云つて、互に向を遮つて、手を振りながら一語一語、それ以上の秋色を思ひ出して云ひ合ふと、互に感卿してしまつて、ぼろ〳〵涙が流れて、物もいへなくなり手が涙だらけになつてゐた。『興來れば友涙垂れ手を振りて、醉ひどれの如くなりて語りき』と云ふのは、私のことを云つたのであるけれど私から云はせれば、石川君こそ、さうだつた。そしてその翌日は、私が務めから歸つて來ると、あの思郷の歌が『金の如きノスタルヂヤ』だの、岩手山秋は麓の三方の』だの幾多の名篇が續々出來てゐるのであつた。

(四) 當時の石川君の主張を、私は歿後になつて段々自然と了得したり共鳴したりするやうになつたことが數々ある中で、この問題もその一つである。石川君は『人生の爲の藝術』でなければならないと云ひ、その人の文學にはその人の哲學がなければならないと云ふやうに傾いて來たとき、私は頑固に、藝術は獨自の價値を以て立つべきで『人生の爲』だの『何々の爲』といふことはいらない。哲學がなければならないなどといふそんな約束もないと主張したものだつた。今になつて石川君がさうなつた徑路も、理由も皆わかる。文學を以て、充たされざる現實の修補とし、それによつて餘りに惱ましい現實を暫し忘れて無何有の郷に遊ばしめるのだと解してゐると、畢竟文學といふものは弱者の自慰で、〇淫のやうなものだ、といふ結論に自ら落ちた。其は太田正雄氏と對談中、どちから云ひ出したともなく、談してる内にさうなつて來たのだ、と云つて自ら目を圓くして驚き乍ら云つた。この結論は、我が舊い文學觀に自ら投じた爆彈だつたのである。終に文學に對する根本觀念を替へなければならなくなり、新らたに生れたのが卽ち『人生の爲の藝術』への曙光だつたのである。それから生活の高唱となり、自己實現の哲學となり、社會改良論者となり、遂に二葉亭氏の『文學は男子一生を托するに足らぬものだ』といふ言葉に共鳴すると云ひ出すと共に二葉亭氏の露國入は、決して單なるロシヤ文學研究の爲ではなかつたと斷じ、自分のみ今本當に二葉亭氏の心持を理解する樣な氣がすると云ひ、それから同氏の小說を處女作まで溯つて耽讀した。後に朝日新聞社で、同氏の全集を出す時に、自らその校正を引受けて故人に奉仕する赤誠を以てその仕事にあたり、單に原稿へあたることを以て自ら滿足せず忙しい中を上野圖書館へ通つて、第一版へ溯つて校正をしてゐたものだつた。傾倒するとそれ程熱心になる人だつた。餘談なれど、隠れた美事であるから序に附記す。

(五) 私と同宿時代に石川君はかう云つたことがある。私が今度若し本を出すことがあつたら、必ずあなたと函館の宮崎君とへデヂケートする。『四十年の春以來一年間、予をして餓えざるを得しめた金田一君と予の家族を餓えざるを得しめた宮崎大四郎君に捧ぐ』と、さう書くんだと。そんなことも忘れてゐると、四十三年の秋になつて、處女歌集『一握の砂』を出すに及んで一本をわざ〳〵持つて來てくれ

たのを見たら、やつぱり二人へデヂケートしてあつた。文句は、あれでは、いくら何でも變だと思つたが、少し趣向を替へて、兩君に捧ぐ、予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものの如し云々としてあつた。何もかも、長所も、短所も、いくぢの無い所も、二人には底まで割つて餘すところもなく見せてしまつたといふやうな意味合に取れる。君がさう云つてくれたからとて、吾々の方でその氣になつてならないけれど、本當に何もかも蔽ふ所のない人となり切つてゐた。

三

併乍、若き血と汗とを以て涙ぐましく自ら築き上げたこの喜悅の塔も、若き營みの悲しさはそこには尙、一握の概念の砂が姿を消して交つてゐたのであらう。『命なき砂のかなしさよ、さらさらと、握れば指の間より墜つ』悅びの塔は一瞬のあと、一角から又崩されて行かなければならなかつた。如何に資本主義の横暴を憤つても、資本家の走狗となるを肯んぜずといつて新聞社を飛び出しては、一家はすぐにも餓死しなければならなかつたからである。三月の書信に、

『心身兩面の生活の統一と徹底！　それが僕のモットーだつた。僕はその爲に努めた、隨分勤勉に努めた。そして遂に今日の人生に於て生活を眞に統一せんとすると、其結果は却て生活の破壞になるといふことを發見した。此發見は實行者としての僕の爲には致命傷の一つでなければならなかつた。そして僕は今また變りかけてゐる』

と云つて、二重生活の止みがたなき事を歎き、意識せる二重生活をいたましく肯定する——

『僕は新らしい意味に於いての二重生活を營むより外に、この世に生きる途はない樣に思つて來出した。無意識な二重の生活ではなく、自分自身意識しての二重生活だ。……無論二重の生活は眞の生活ではない。それは僕も知つてゐる。然しその外に何ともしやうが無いのだから止むを得ない。

「生活それ自身がワナだ！」さう思ひ到つた時、僕は急にこの世の中から逃出したかつた。そして遂に逃出すとの出來ないワナだと思つた時から、僕は今迄より強くなつた。所詮のがれる事が出來ないのだから……』（三月十八日の書簡）

その上に、貧困は決定的に附纏つて心身を傷ます。足弱と老親を抱へつゝ惜しみなく實生活に我を打ち込んで、『快きあゝこの勞れ、息もつかず仕事をしたる後のこの勞れ』と歌ふあとから、『働けど／＼尙我が暮らし、樂にならざり、ぢつと手を見る』『二晩おきに、夜の一時頃に切通の坂を上りしも——勤めなればかな』かうして夜業までして、十二時、一時に歸宅するほど働きつめて、少しも樂にならうとせぬ果しの無い貧苦の道程に、若い心が暗くならざるを得なかつた。孝子であればある程その困苦が一層胸を緊めつけた。尙その上に母堂と節子さんとの間が、久しく、感情の溝渠を造つて悲しくも全く融和がつかなかつた。この苦惱が三重に日夜その心をさいなんだ。終

にこの年の暮に書いた『歌のいろいろ』といふ評論には、家族制度呪咀の聲をさへ放つてゐた。何が故に我はこの慘習を繰返さなければならぬか。新しい社會に對する憧憬が日夜その心を捉へて笑はしめなくなつた。社會主義の書を神田の軒並みに漁り、マルキシズムの一端に觸れて行つたのも此の頃だつた。そして又やはりこの暮の事であつた——石川君が晩年の思想上、耳を劈く巨彈を見舞はれたやうに大きな衝動を受けた×××の調書を見たのは。

それはスバルの編輯上、足繁く出入してゐた平出辯護士の宅に於てゞあつた。石川君は徹宵して幾千枚といふその豫審調書を盜み讀んでしまつた。當時石川君の家へ行くと、異常な昂奮で、自分で目を皿の樣にしてその口供の一々を私達の耳へ囁いたものである。、、、著書を坊間に漁つて耽讀し出したのも、それからだ。石川君晩年の社會思想の體系が頭に出來上つたのは恐らく此の時代である。死後その遺書を預つたら、二十幾冊に登る『國禁の書』があつた。（此だけは本屋も質屋も受取つてくれないからだつた）。明けて四十四年の正月である。友人瀬川深君へ書いた書簡に、「自分を社會主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。勿論社會主義は最後の理想では無い」と言ひ切つた。

土岐哀果氏と始めて交を締したのもこの一月中旬のことである。それから二週間も立たない内である。超えて二月、石川君は圖らずもあの若い命を奪ふに至る不歸の病に倒れて入院することになつてしまつた。始めは厄介なことになつた位にしか思つてゐなかつたが、

人間のその最大の悲しみが、これかと、ふつと目をば瞑れる

曠野ゆく汽車のごとくに、このなやみ、ときどき我の心を通る

かうして死其物へ面接して行つた時、その語は愈々急になり、その思想は多々益々鋭く冴えた。病院の寢臺の上から諸友へ書いた書簡の、生涯を通じて最も激越だつたのもそれである。三月退院して借間の二階に病を養ひながら、病床に危坐して火の如き語を走らす日が多くなつた。

友も妻も悲しと思ふらし、病みて仍、革命のことを口に絶たねば

あの純な明るい氣持の持主だつた石川君が、骸骨のやうな相をあげ、眦を決して社會を呪咀する叫びを聞くとき、以前とちがふ根抵の深さ、環境の慘ましさ、たとひ社會の事相に對する見方の素直さを損つて、意地惡く受取る言葉尻を見逃せなかつたとはいへ、反對をする氣には尙更、其昔、同宿の下宿で、論理の穴探しをやつてゐた氣持にはなれなかつた私は、黯然として頭を俯せて淚を呑んで聞いたものであつた。側らに看病しな

がら、『又熱が出ますから』と、はら〳〵してゐる節子さんも、遂にはだまつてうつむいて、そつと目を拭いてゐるのであつた。

私のみならず、この頃訪づれた人はみな同様な慘ましさを繰返されたことと思ふのである。私は石川君に逢ふのはつらくなつたと云つて、我が家の暮らし向きも困難だつたし、さうでなくつても、各々家を持つてからは、自然逢ふ機會の少くなつた私達は、知らず〳〵の内に、この前後から疎遠をしてゐた。

この疎遠の幾月かのある日の事なのである――例の問題になる石川君が私への最後の來訪をしてくれたのは。

四

石川君最後の來訪の日は判然と記憶に無いが、雨上りの、からつとした午前だつた。飛白の單衣物を着て見えたかと思ふので、もう七月にはいつたのではないかとも思ふが、それとも六月内であつたか、この大切なデートが曖昧なので、遺憾ながら大きな疑團がかかるのである。

兎に角、病が少康を得た間である。病の少康は五月から七月初へかゝつて、尙八月までも幾らか輕かつた。六月の十五日には、あの有名な社會主義詩、「はてしなき議論の後」などを書いてゐるし、翌十六日は「激論」「墓碑銘」などを書いてゐる。飛んで二十五日と二十七日になると、とんと調子の變つた、あの極めて情調の靜かな「家」と人間愛の涙そのもののやうな「飛行機」を作つてゐる。私は想像を逞うすると、あまり詮索しすぎるが、この間の頃ではなかつただらうかといふ氣持さへするのである。

その日の石川君は、物なつかしい態度で、そして柔らいで寧ろにこ〳〵してゐた。のみならず、私に逢つてこの事を云ひたくてその爲に態々來たのだといふ意味のことを云つてくれた言葉の響きは忘れやうも無い。私が喜ぶだらうとか、喜びさうなとかの考へ方になつたので、それを云ひたくて來た、と云ふ意味の前置があつたのは、兎に角、石川君は、かの同宿時代以來、過激な言葉で長い間私を、少くとも、はら〳〵さしてゐたといふ意識があつたからなのである。

だから此時云つた言葉は、決して、絶望の意味、自暴自棄の意味なのではないのである。『このまゝでよい』といふ語を、若い方々の内には屢々さう解する向もあるけれども、凡そどんな解釋も、さう解する程ちがつた解釋はないのである。絶望や自暴自棄は、如何なる場合でも弱者である。石川君は、決して自暴自棄や絶望をしはしない。したところで、それならば態々病床から歩いて告げに來る筈がないからだ。それよりも重大な證

據は、自分で、又思想上の一轉期に立つたと言つたことだ。

石川君の一生の轉換期は、何しても北海放浪を中心にした前後の時代で、あれを境にして、浪漫主義の詩人が社會思想家に生替つて來た。青春の幻滅と困厄と、折しも、時代を洗ひ盡した自然主義の洗禮が恐らくこれを生んだ。その後の轉期は、自身言つてゐる樣に先づ第一は、現實を肯定し、自己實現說に目醒めて、生活の統一を高唱した時、假に名づけて、石川君の新理想主義時代と呼ぶ。第二は、、、、の衝動を受けて共產主義・無政府主義まで馳突した時（私に名づけて呼ばば、石川君の唯物主義の時代）であらう。此二大轉期のあつた事は、四十四年二月七日大島氏へ宛てた書簡に、自分でも認めてゐる。

『たしか一年前に私は、私自身の自然主義以後――現實の尊重といふことを究極まで行きつめた結果として自己そのもの〻意志を尊重しなければならなくなつた事――國家とか何とか一切の現實を承認して、そしてその範圍に於て自分自身の內外の生活を一生懸命に改善しようといふ風なことを申上げた事があるやうに記憶します（前に引いた四十三年一月の大島家の文參照）。それは確かにこの私といふものにとつて一個の精神的革命でありました。その後私は思想上でも實行上でも色々とその「生活改善」といふことに努力しました。併しやがて私は、その、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、つたことを知らねばなりませんでした。、、、、、、、、、、、、、、、、ハ、、、、、、、、、、、、、、、、、、一人合理的生活を建設しようといふことは、實踐の結果、遂ひに失敗に終らざるを得ませんでした。その時から私は、一人で知らず〱の間に Social 、、、、、、、、色々の事に對してひそかに Socialistic な考へ方をするやうになつてゐました。恰度そこへ傳へられたのが、、、、、、、、、、、、、

恐らく最も驚いたのは、かの頑迷なる武士道論者ではなくして、實にこの私だつたでせう。私はその時、彼等の信條についても、又その Anarchist Communism と普通所謂 Socialism との區別などもさつぱり知りませんでしたが、兎も角も前言つたやうな傾向にあつた私、少い時から、、、、、、、、、、、、かいふことに一種の、、、持つてゐた私にとつては、それが恰度、知らず〱自分の步み込んだ一本路の前方に於て、先に步いてゐた人達が突然火の中へ飛び込んだのを遠くから目擊したやうな氣持でした云々。（下略）

さて其次の第三の轉期が卽ち玆に云ふ同じ年の暮春から初夏にかけて最後に私を訪れた時自ら云つたこの轉期なのである。

さう考へたなら、この來訪の時の所謂一轉期は、どういふ大きな意味合ひもので、どういふ方向への轉換を意味したか、といふことは、決して輕々に看過することを許さないのである。

まづ第一期に右した。第二期に左した。も一度、第三期に轉じたとすれば、どう轉じ得べきであるか。それをまづ考慮に置く必要がある。然る後に、あの際に口づから云つたその言葉と態度とを味識すべきである。『アナキズムの誤を悟つた』『自分の今到達した思想は何と云つてよいか解らないが、反對のものを二つ連ねては可笑しいけれど、社會主義的帝國主義…』（この

二名辭の連結が、どちらが上だつたか、考へると氣迷ひも起るけれど、私は迷はずに最初の記憶どほりをどこ迄もかう書く。又帝國主義も、或は國家主義の私の記憶ちがひか、石川君の云ひちがひか、とも迷つたりするが、すべての忖度を撤去して最初の記憶どほりを、やはりどこ迄もかう書く。

「帝國主義」が、よし「國家主義」でも、兎に角一方の傾向であり、之に對して社會主義（共產主義、無政府主義）もまた他の一方の傾向である。自らも認めてさう云つた此の對蹠的な正反對の二つの名辭を打連ねた所に恐らく深い意味があるのではあるまいか。云はば今迄の二大對立を抱擁した、統一態へ到達したことを意味するのではあるまいか。社會主義的帝國主義は、いはば帝國主義的社會主義でもよし、或は個人主義的國家主義でもよし、唯物論的唯心論でも、唯心論唯物主義でも、はた現象則實在だの、煩惱則菩提、罪則救、娑婆則淨土、動則靜、有則無と觀ずる一種達人の物の見方に咫尺して行つたのではなかつたらうか。さういふ境地は、固より我等輩の窺踰だも許さざる世界ではあるが、そこには、所謂善といべき善もなく、一切の矛盾を包容する世界の展開——あの側目も振らない眞劍な、熾烈な半生の精進が、遂にこの一大事を完成しようとしたものではなかつたらうか。惱めば山も歪んで屹ち、紅い花も紫にうづいた闇の底から、行き盡して自ら打開した新しい曙の裡に山は依稀としてなだらかに柳は綠、花は紅に見え渡つたのではあるまいか。『世界はこの儘でよかつたのだ』と叫んだのは即ち其の聲ではなかつたらうか。一種法悅に似たその歡びが、ひとり抑へがたく態々病床から下りてこの新發見を告げに來たのではなかつたらうか。

私は當時、反對の二名辭をかう打ち連ねる意味が解らなかつた。けれども、その言葉の端々に、何かしらずひし／＼と打たれて涙ぐましく聞き入つてゐた。のみならず、石川君の歸つたあと、家の者に向つて、本當に石川君はえらい人になつたと獨語ともつかず、繰返して云つた記憶もある。歿後すぐ書いた『啄木遺稿』の『啄木傳』の終の方へ、『漫然年齡の差を以て、弟の如く親しみ狎れてゐた私なども、晩年に於ては、一個の年若き哲人、思想家として、徹底せる崇高な人格として、中心畏敬して居た』と書き添へたのも、この時の印象が私にかう書かしめたのであつた。

世間には、『此儘でよい』と云つた『このまゝ』を、狹く『資本主義の世の中』に速斷して、『それでは此の不都合な資本主義制度を認容し、社會主義的思想を一朝にして棄て去つたか』と慷慨する人が多い。が、『世界（或は現實）がこのまゝ

でよかつた』といふ心持ちは、そんな局部的な肯定では決して無い。もつと大きく人間生活の全容を指したものでなければならない。否或はそれよりもまだ廣く、過去現在を通じ、一木一草の微に至る迄、一つとして此の世に『偶然』の無く、葉ツパ一枚も故無くしてはこぼれざる、一本の箸、一介の皿も、この世に千載の傳統なしに存するものの無い、人間一粒の涙も空しく其儘には終はらざるべき、深い大きな生命の實相へ觀入して、一指を染めることの出來ない大自然をそのまゝ、罪あるものは罪を持ちながらに美しく、陰あるものは陰を帶びながら更に生色ある、在るが儘の現實をそのまゝ受け容れることが出來ようとしたその詞ではなかつたらうか。

かういふ風に云つて來たら、或は、『啄木は自ら我は遂に唯物論者なり』とまで云ひ切つたではないか。何を喋々長談義するのだ』と嘲る人があるであらうか。私は、生々發展の長い道程を傷つきながら血みどろに續けた不斷の魂の精進を沒却して、一つの言葉、一つの姿を物色し來つて固定概念を造る機械的な人の觀方を絶對に排棄する。或は又、『あの火の樣な社會思想詩を殘して永遠に吾々を鞭韃する啄木も、貧と病に虐げられて、晩年は力なきセンチメンタリズムに妥協してしまつたか』と惜む人があるであらうか。事實をして事實たらしめよ。私の解釋が故人を淺膚にするものだが、弱小にするものだか、私はそれを顧る遑が無い。たゞ此は、少くとも吾々凡庸がする消極的なあきらめとは決して同一であり得ないやうに思ふ。運命の魔が避け難き人生の苦杯を面前へ突きつけて、『飲め！』とせまつた時に、少し少し、すゝりながら悲鳴を擧げるのが吾々人間だとする。拒んで大地へ叩きつけて死んでしまふ男がつよいか。若干の苦悶の後に、思ひ切つて大口あけて滓も殘さず飲み干してしまふ男が強いか。あの虐げられた殘虐な笞の下から、『これでよい』と叫び得る人はこの苦杯をたじろかず大口あけて飲み干す大勇でなければ出來ない所、虐げられた無道の親を倘親とする非常の子でなければ出來ない所だ。私がその日に受けた感銘は、さういふ種類の深厚なものだつたのである。惻々として打たれ、涙を落して泣けたのもそこで、また年譜へ、『涙ぐましく一切の現實を肯定』したと側叙した所以もそこであつた。決してほしいまゝに感傷的な形容詞を陳ねて美化しやうとするやうな小細工を思ひ立つ暇もないのである。今にして思ふに、たゞ『肯定』と云つたのは或はまだ私の淺膚な臆斷であつたかも知れない。もはや否定も肯定もない、在るがまゝを唯そのまゝに受け取らうとするもので、若し之を、否定を經た肯定と云へば云へようか。それともまた肯定否定を超越した絶對の境地

とでも云ふべきものであつたであらうか。

五

私は彼が此世に遺した最後の歌と詩と書簡と、歿年當時の態度や談話などを追憶して私の此の解釋の矛盾するかどうかを靜かに檢證して見たい。

先づ歌集から觀て行く。

『一握の砂』の方は、まだ焦燥だの匠氣だの、少しは自己の運命に甘へるセンチメンタリズムの痕跡をも止めてゐるけれど、『悲しき玩具』の終になると、本當に忠實な自己の内面生活の記錄になつて行つて、殊に最後のページへ近づくと、大きな悲みを内に湛へた靜かな、或は寧ろ暖かな氣分にさへ觸れて却つて涙ぐまされるものがあるのを感じる。

即ち、

胸いたむ日の悲みも、かをりよき煙草の如くなつかしきかな

（土岐氏の啄木選集には此は削られるが）

たゞ一人の、をとこの子なる我はかく育てり、父母もかなしかるらむ

兒を叱れば、泣いて寢入りぬ、口すこしあけし寢顏にさはりて見るかな

何がなしに、肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ——秋近き朝

秋近し！電燈の球のぬくもりの、さはれば指の皮膚に親しき

（秋近しと云つてゐるから八月頃か——歿年の前年の）

クリストを人なりといへば妹の眼がかなしくもわれをあはれむ

（妹さんの居たのは歿年の前年の八月である）

椽側にまくら出させて、ひさしぶりに、ゆふべの空にしたしめるかな

（椽先のある小石川の家へ引越したのはこの年の八月である）

庭のそとを白き犬ゆけり、ふりむきて、犬を飼はむと妻にはかれる

（庭のある家も、息を引きとつた小石川の家のことである）

と云つて、この歌集が終つてゐる。即ち啄木の短歌の生涯が終つてゐるのである。啄木の讀者は屢々この終りのページの餘りに靜かに終つて物足りなさをさへ覺えるのであるが、實際少くとも「死」と「貧困」の慘苦に取卷かれて世を呪つて死ぬ人の最終の歌としては、どうしても物足りないのである。

終から三十三首目が、

お菓子買ふ時も忘れて、二階より、町の往來を眺むる子かな

とあつて、明かに八月以前、まだ本鄕の床屋の二階時代の歌であり、終から四十二首目は、

病みて四月——そのとき〴〵に變りたる、くすりの味もなつかしきかな

病みて四月——其間も猶、目に見えてわが子の背丈のびしかなしみ

とあるから五月の作である。その一つ前に、

いつしかに夏となれりけり、やみあがりの目にこゝろよき雨の明

ある！

とあるのは、夏とあるから六月からあとのもので（この頃が最後の訪問の時期であつたらう）あるらしいから、この一首は前後してゐるので、以て歌集の歌の順序は全部、作の順序とは思へないが、それでも『一握の砂』とはちがひ、大凡は順になつてゐる筈だ。もう六首目のさきに出てゐるのが、例の『友も妻もかなしと思ふらし』など、丁度三・四月頃の事實とすつかり合ふのである。

長詩の方から云つても、前に云ひかけた事ではあるが、有名な社會思想詩「はてしなき議論の後」以下「激論」「墓碑銘」などを讀んで來て、最後の「家」と「飛行機」とへ行くと、非常にちがつた氣分に出逢ふことは誰しも經驗してることである。聯絡がないと云ふのではない。火のやうな熱情が、おつとりと霞を通した春の日の暖かさになつて來てゐる。人の世の是非なき嘆きは基調を成してゐるが、それは絶望ではなしに、而かも柔かに吾々の心を捉へて引きつけてしまふ。又「はてしなき議論の後」や「激論」には匠氣があり芝居がかつた所（激論などの場面は、さながら同宿時代に一所に讀んだツルゲネフのルージンである）が讀み返すと少し氣について來る嫌ひがあるが、後の二篇になると、しつくりと天眞のまゝ人間そのものが迫つて來るのを感じる。「家」の方は、長篇で引用するに不便であるが、最終の飛行機は、短いからこゝへ出す。

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日
肺病やみの母親とたつた二人の家に居て
ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

幾度讀んでも涙のしみでる作品である。蒼空の飛行機を指して『あれを見よ』と側から聲かけるその人も啄木自身であるが、眞暗な境遇の中で、リーダーの獨學をするこの少年の中にもまざ／＼と今一人の啄木の姿が生きてゐるのである。

晩年の短歌と長詩とを吾々はこの樣に點檢した。次は書簡であるが、やはり言辭の最も急峻なのは四十四年の春の頃までゞある。大事な六月、七月の交には一つも書簡が無くして、八月に飛ぶが、八月には宮崎氏へ可成長い手紙を書いてゐる。而も其環境の悲痛さは、この頃から層一層酸鼻を極めて翌（四十

五）年の一、二、三月、死に近づく程慘苦の絶頂に達したに係らず、それを報導する言辭が却て、綽々たる餘裕を以て客觀的に樂に語つてゐるのを見逃せない。

八月二十六日の長い書簡に、

…僕に至つては毎日々々つまらない單調な日を送つてゐるに過ぎない、毎日々々日が長い。毎日々々健康が欲しい。この頃は友人が大抵東京にゐないのと、ゐても日中は暑く夜はまたこの家が大分ヘンピな處にあるのとで、客が少い。毎日きまつて僕の目に入る顏は、父の顏、母の顏、妻の顏、妹の顏、子の顏――この五つの顏の外にはない、髪を五分刈にして以來、鏡に映る自分の顏を見ることさへ滅多にない。

毎日の耳に入る聲も、これら家族の聲と近所の子供らの騷ぐ聲、それから自分の小言を言つたり子供を叱つたりする聲位なもの。單調と、その單調の間に伏在する家族のいきさつとが殆んど僕を殺さんとする僕は變化が欲しい。何でも可いから變化が欲しい。目星しい本は皆質屋に秋の袷と一しよに入つてゐるし、質屋にもやれない擦りきれた社會主義の禁賣本は引越の時以來支那鞄の底にそのまゝしまつてあるし僕は殆ど全く讀書することすらない。轉居以來讀んだのは芭蕉蕪村の句集と古詩歌範といふ漢詩の本だけと聞いたら、君も多少の哀れを催してくれるだらう。……

ところが此處にまた一人僕の家に病人がふえた。一週間許りの間何となく元氣がなく、少し下痢するといつてゐた母が、一昨日の夕方にはひどくやつれた顏をしてとう／＼食卓に就かなかつた。あとで額に手をあてゝ見ると、驚いた、まるで火のやうに熱い。早速檢溫器で計ると三十九度一分あつた。妻は近所の醫者へ、妹は冷し氷を買ひに行つた。

かうして母堂がどつかり床についてしまはれ、毎日醫者が來るやうになり、ある晩は石川君自らがフラ／＼するからだで氷を貰ひに行つたりなどした。この手紙の末尾に、『富田碎花といふ男がこの春頃からだん／＼所謂「危險思想」を抱くやうになつて、この夏は名古屋から越後佐渡の方へ詞友をたよりに旅行に行き、方々からその土地の歌人四五名宛連署の繪葉書を寄越す。繪葉書にまで時々不穩な文句があるので少々弱ることがある』と書いてゐる。

更に二日立つて二十八日同じ宮崎氏へよせた手紙の追伸に『この手紙をかいてしまつたところへ、妻がかへつて來た。今迄左方の肺尖加答兒だつたのが、左はよほどよくなつてゐるが、新たに右の方が惡くなつたさうだ。』とある。一歩一歩環境が暗くなつてゆくこの邊の手紙は殆んど卒讀するに堪へない記事であるのに、その書き振りの、何でもない事を書いてゐる樣に運んでゆくのは一層我々を打つのである。

六

最後に、晩年の談話の事であるが、晩年の臥床に石川君を尋

ゐた人々は、どういふ印象を受けられたであらうか。何かその間に變化を感じられた人が無かつたものであらうか。私は其を聞きたい。

私自身は、結婚をしたり、子供をもつたり、自分の暮らしに追はれたりして、家を成してから隨分石川君に背いてゐた。(この事を思ふと、今ひとり生殘つて、友人顔して兎や角云ふことは、心苦さを覺える)。殊に、越えて一月、即ち石川君の亡くなる年になつては、私は、新年に、二つになつた女の兒を亡くして、ひた寄せに來る哀苦に、我と自身を繁務に引入れて——出版業を創める若い友人の爲に『新言語學』の著を引受けたのだつた——凡夫の愚痴を自ら封じて暮らしてゐた。それ以來、石川君には、一層逢ふ機會もなく、亡くなる日を加へて僅三度しか訪つてゐない。一度は三月始、母堂の亡くなられたすぐあと、此の時は石川君は、『自分達夫婦が、朝常の如く起きて見ると、隣室で母が夜中あたりに息を引き取つて、冷たくなつてゐたのだつた』こと、『子や嫁と同じ屋のむねの下に住みながら、死に水も取られずに死んでゐた』といふ事、それを世にもあられぬ樣に物語つて、しんみりお母さんを可愛さうがる談に暮れて、殆んどその餘の話は——何が出たか覺えがないくらゐだ。二度目は、何がなしに手紙をくれてたゞ逢ひたいと云つてよこしたので行つた。それは亡くなる十日前、丁度私が『新言語學』を脱稿した時だつた。行つて見ると、想像にも及ばない氣の毒な情態にあつた。此の事は『年譜』にも書いたことだが、簡結の爲めに少し言ひ歪んだ點もあるから今增訂旁々少し詳かに書く。石川君はその時、『ひよつとしたら自分も今度はだめだ』と云つた。『醫者は?』と聞くと、『藥代を滯るものだから、藥もくれないし、來ても呉れない』といふ。また『いくら自分で生き度いと思つたつて、こんなですもの』と云つて、自分で夜具の脇をあげて腰の骨を見せた。ぐつと突立つた骨盤の皿、髑髏の兩脚を誤つて撥いたやうな恐ろしい驚きに、私は覺えず恐い物に蓋をするやうにして、『是ぢやいけない、何よりも、兎に角まづ好きなもので滋養になるものを食べて、少し太る樣にしなくちや』と云つたら、『好きなものどころ! 米さへ……ない』と顔を歪めて笑つた。私は二の句が出なかつた。『どれ、ちよつとお待ちエんせや』(お待ちなさいよ)と、國訛りの挨拶をひとつ殘して、眞驀地に私の家へ引つ返した。道々原稿の處置を考へながら。

『年譜』では、私が此處で原稿を金に代へてすぐ其金を持つて行つたやうな云ひ方になつてしまつてるが、原稿はその日すぐ金にはならなかつた。自分の無能さをさらけ出して羞しいが、

石川君の誰かへの手紙にも見える樣に當時私は三十圓の月給取（三省堂の百科大辭典編輯所員として）だつた。それへ一週二時間の言語學を持つて、國學院から一時間一圓の時間給を貰つてゐた。丁度この日は、三十日に貰つた俸給が、仕拂ひをすましたばかりで、あとにまだ十餘圓あつた。それが一個月の私の家の經濟だつた。本の原稿から、二十圓は、はいるが、それは明日だ、明日までは待てないから、それを融通するのだと家の者へ話して、その十圓を出さして手に握つて駈けて行つたのだつた。

途でドンが鳴つて、晝さがりの滿都の櫻の花が見頃に咲きみだれ、ばら〳〵と吹雪の樣に顏へかゝるのを、私は額へさがる毛と汗と、一つ手で拂ひながら駈け〳〵して行つたことを記憶する。途すがら、表町・久堅町あたりの良い家々からは、美しく連れ立つた老若男女の群が、お花見に出盛る絶好の花見日和の祭日だつた。

『ほんのすこしですけれど』と私が、うつむき乍ら手を差し出した時、石川君も、節子さんも、だまつて何とも云はなかつた。『無躾だつたかしら』と心に氣遣ひながら二人を見ると、石川君は枕しながら、堅く目を塞いだ顏を少しうつむけて、片手を出して拜むやうな手眞似をしてゐた。節子さんは、下を向いて疊の上へぽたりと涙をおとしてゐた。それを見ると、餘りのいたはしさに、一時に私も胸が塞つてしまつた。私は、私自身の三ケ月の勞力が、たゞこの一瞬に、かうも深く酬はれようとは思はなかつた。私は私で胸がいつぱいになり、誰ひとり物も言はず、暫く三人はだまりこくつて泣いてゐたのだつた。石川君が一等さきに口を切つて、『かう永く病んでねてゐると、しみじみ人の情けが身にこたへる』といふこと『友だちの友情ほど嬉しいものがない』といふやうなことから、靜かな話をして、『私の言語學が脫稿したので』と私が話すと、自分の著述でも出來たやうに喜んでくれたりした。

それから十日程立つ朝だつた。車屋にひどく門を叩かれて出て見ると、『小石川の石川さんからです、すぐこれへ乘つて』といふ迎へだつたのである。この日は土曜で、私が學校が早いので、前夜枕元へ置いて寢た洋服を、寢床の上から着て起きて、すぐ其の車で駈けつけた。

上つてすぐ隔ての襖をあけると、仰向けに此方を向いて寢てゐた石川君の顏、それはすつかり衰容が來て、面がはりしたのに先づ吐胸を突かれたが、同時に、洞穴があいたやうに、ぱくりと其の口と目と鼻孔が開いて、『たのむ！』と、大きなかすれた聲が風のやうに私の出ばなへかぶさつて來た。私は死顏にで

も逢つたやう、膝が泳いで、のめるやうにそこへ坐つたばかり、いふ所の言葉を知らなかつた。

あの際に、何と云つて上げるのが一番よかつたらうか、私には今でもよいことばがわからない。

この場に臨んで、側に合はせの言葉などはもはや用べきものではなかつた。と云つて私の腑甲斐無さ、突差に大きく、よし引き受けた。安心してお死になさい。といへる程の何物も持ち合はさなかつたことを暴露してしまはなければならなかつた。言葉が喉へ絡みついて、傷ましく、眞暗に、溜め息を窒まらしてゐる木偶の坊に過ぎなかつた。

石川君は、それつきり目も口もつぶつていつまでも〳〵昏々としてゐた。

石川君は此の期に臨んで、卅年の交友の顏に卑怯なたじろぎの色を讀んで目を瞑つたのでありはしなかつたか。それとも夜半から待ちぬいて、一目見て、言はうとしてゐた一言を云つたので、氣がゆるむと共に再び深い昏睡に陷つたものか氣休めをしても見る。永遠に解けがたい苦しい謎である。

節子さんが其時そばへ來て、早朝、御迷惑を……ゆうべ一晩、あなたを呼んでくれと云つてきかないものですから、『今晩はもう遲いからあしたの朝』となだめると、けさは又夜中からさういつてきかないので……、やつと夜の明けるのを待つて……など小聲で話してゐると、そこへ若山牧水氏が見えた。節子さんが、『若山さんがいらつしやいましたよ』と大きな聲で幾度も幾度も呼んだ。始めは依然として昏睡してゐたが、その內に氣が着いたと見えて、何か若山氏へ云はうとする。若山氏が聞き取らうと半身をせり出して疊へ手をついた。少しにつこりして『こなひだは有りがたう』と、云つたのは、同氏に一握の砂以後の歌稿を賴んで、土岐氏を通じて、東雲堂で出すやうになつた、その稿料の屆いた禮をこの間際に述べたのであつた。

それから石川君は若山氏の膝に衝いた岩乘な手首から肩の方を見上げて、『君は丈夫なからだで羨ましいねえ』など云つた時には、私達は顏を見合せて覺えず悦びの微笑を交はした。その內に、すつかり元氣が出て來て、何か若山氏との雜誌の話などをし始めた。私を顧みては『今日は土曜で學校の日でしたね。どうかいらして下さい。』などと、此の際になつてもまだ私の缺勤に因る減收を氣にしてくれた。剩へ若山氏との話の中には、不用意に『癒つたら今度はかう〳〵』といふやうな將來の計劃に關する話氣のはいるのを聞いた。『遲くなりませんか、どうぞ學校へ』など云はれるにつれ、又、節子さんも『此の分なら大丈夫でせうから、どうぞ』と云ふので『今危篤だから、離れられな

いのだ』と悔附かせるのもいけないし、病人の心に隨つて、『では一寸行つて來ます』と私が起つたとき、輕く目で會釋をしてくれたのが、此の世のすべての最後のものとなつてしまつた。

若山氏の臨終記に據れば、それから幾分も立たなかつたといふ、容態の一變したのは。若山氏の記を引用すると

（前略、私が去り、節子さんも初めて枕許を離れて）それから幾分もたたなかつたらう、彼の容體はまた一變した、話しかけてゐた脣をそのままに、次第に瞳があやしくなつて來た。私は惶てゝ細君を呼んだ。細君と、その時まで次の部屋に退いて出て來なかつた彼の老父とが出て來た。私は頼まれて危篤の電報を打ちに郵便局まで走つて歸つて來ても何その昏睡は續いてゐた。細君たちは口うつしに藥を注ぐやら脣を濡らすやら、名を呼ぶやらしてゐたが私はふとその場に彼の長女の居ないのに氣がついて、それを探しに戸外に出た。そして門口で櫻の落花を拾つて遊んでゐた彼女を抱いて引返した時には、老父と細君とが前後から石川君を抱きかかへて、低いながら聲をたてて泣いてゐた、老父は私を見ると、かたちを改めて、『もう駄目です』と云つた。……何といふ惶しい臨終だらうと、今までとつた場所をかへて、ひつそりと置き捨てられてゐる彼の遺骸のそばに坐しながらかぶせてあつた毛布を少し引いて彼の顏を見てゐると、生前と少しも變らぬ樣子にしか感せられぬのであつた』

「何といふ惶しい臨終だらう」とは、一寸の間に急變したことを云はれたまでで、「何といふ穩かな臨終だらう」と今云ひ替へても少しも差支が無い。心ゆく友と心ゆく話をしながら流然として逝つたとでもいふのであらうか。

一方、私自身は、授業をやつて、途中三省堂へ寄つて午後休むと斷つて、久堅町へ驅けて來た時には、道ばたのポストの傍に、京ちやんを見つけた。『今時分京ちやんが此のあたりへ出てゐるやうでは』と、少し安心をしながら、尚京ちやんの兩肩へ手を掛けて顏を覗きながら、『お父さんは?』ときくと、京ちやんは『居る!』私はほつとして、まあよかつたと歩を緩めて石川君の家へ來て見ると、萬事終つてゐた。京ちやんには、年中横臥してゐるお父さんの今朝が、昨日や一昨日や、乃至この幾月來と、少しもその間にこの急劇な變化が生じたことを思ひ寄ることも出來なかつたのである。多分は、しらせの葉書を出しにポストまでお使ひに來て、折から肩へこぼれて來る何處からともなき櫻の花びらを無心にかまつてゐたのであつた。

君が既に息を引き取つたあとへ歸つて來て、布を拂つて變り果てた相貌を冷くさはつて見ても、まだ本當にさうと思へなかつた私は、烏兎匆々十年の後に至るまで、幾度この場面を夢に見たらう。凡夫の迷執といふものであらう、時には、故人の今一度脣を動かすのを見て、ア、まだ生きてる! と喜び詐りながら、何か言はうとあせつて目の覺めることもよくあつた。こ

のごろ此の夢をさへ見ぬやうになつたのが、又悲しいさびしさである。

私は繰返して思ふ。石川君の死は、平凡に似て、決して尋常一樣の死ではない。あれが若し逆に、京ちやんが取縋つて泣き、節子さんが取り亂し、君自身のた打ち廻つて絶え入つたら――それさへ少しも無理とは思はないが――どんなであつたらう。

節子さんをして、歿前歿後少しも取紊させず、幼な兒の無垢な心情には、死の暗い陰をひとつ差させずに、自分も從容として死んで行けたのは、吾々凡夫の身には、殆んど想像も許さざる往生といはなければならないと思ふ。

私の受けた石川君晩年の印象は、大凡此のやうなものであつたのである。本當の晩年に、その一年前とは違つた石川君だつたと推斷する追想も、或は暗々裡にこの印象が前提となり基調となつてさうなつたものかも知れないのである。石川君が一種の自己完成を達成してから、愈々長逝するまでは僅に半年の歲月があつたのであるから、この間に數多の人々が逢つてゐられることと思ふ。中には隨分私の推斷を裏切るやうな氣分を經驗した人もあるかも知れない。現に若山氏の前掲の臨終記の中にも、後半に

『死ぬ前々日に石川君を見舞ふと、彼は常に增して險しい顏をして私に語つた。「若山君、僕はまだ助かる命を金の無いために自ら殺すのだ。見給へ、其處にある藥がこの二三日來斷えてゐるが、この藥を買ふ金さへあつたら僕はいますぐ元氣を恢復するのだ、現に僕の家には一圓二十六錢（或は單に廿六錢であつたかとも思ふ）の金しか無い、し、かももう何處からも入つて來る見込は無くなつてゐるのだ」と（これで若山氏が歌稿を携へて土岐氏を訪づれる段になる。即ち『悲しき玩具』がそれだつた）

社會のこの缺陷の存在する限り、折に觸れ又時に依り、腕を撫して長大息することもあつたであらうし、昂奮し激語することもあつたであらう。ただそれが反噬的な、憎惡的な呪咀の代りに、それに附隨する胸を刺す苦みを自ら拂拭し得た、淨化の中にすべてを飲込んだ宥しのある咨嗟晧嘆となつてゐたのではなかつたかと想像するだけである。又一度曙光をのぞみ得た石川君にしても、時に氣分の明暗もあつたであらう、喜怒哀樂の動きにつれて語氣の變化もあつたであらう。聞く人の心にもよつて强弱の響きを異にすることも考へなければならない。私は併し、又思想の一轉期に立つと自ら云つた故人の言葉に噓があらうと思へぬ。故に適確なる反證のあがらざる限りは、尙矢張晩年、少くともその人生觀上の根底に或變化があつたといふ私の想像を棄てることが出來ないのである。

七

いくら知友のことであるからとしても、かうして思想問題へまで立入るのは、私には本來出過ぎた事である。唯々私は自身の專攻の科學の方面で、國字・國語の問題に關して一寸同じ樣な經驗を味つてゐるのである。私は學生時代から國字改良論者だつた。而もローマ字論者だつたものである。又自分の話に落ちて濟まないが、それが石川君の心持を類推する所の私の唯一の鍵であるから少し云はして頂く。私は同宿時代によく石川君へ云つたことである――

現代の我國の書寫法の此不合理・不都合、少國民の過重な負擔と無駄な歳月・精力の浪費、此儘では、たつた二十六七字で、思ふ樣に書け且讀める泰西諸國と競爭しなければならない世に、一時代同齡の兒童二十萬としても、其二十萬人が普通教育に五年づゝ損するとして總計百萬年の損失である。こんな事では國が滅亡する外はない。文字は唯々言語を目に見える樣に表記する約束に過ぎない。從來この約束を主要の知識と誤認してゐた。主要の知識の直接の媒介は言語である。文字は又その言語の媒介である。即ち媒介の媒介、いはゞ手段の又手段だ。末の手段のために本の知識を吸收する歳月や精力を浪費することは本末顚倒である。(といふのが言語學上からの當然の結論で、)それ故に、國家百年の大計の爲には、一時代の不便ぐらゐは犧牲にしても、一日も早く國字の改良を斷行しなければならない、といふのが私達の宿論であり、機會があれば、家でも外でも、學校では尙更、二十年一日のごとくこの事を說いて來た。石川君と同宿の時代、私はどんなにか此事を論じたかわからないが、それには石川君は、議論で反對しはしなかつたけれど、併し餘りぞつとしてくれなかつた。その筈、詩人の石川君には、うれひと憂と愁と悒ですつかり感じが違ふ、假名で書けば又違ふ、送假名をつけるか、つけぬでさへも可なりに感じが違ふ。ローマ字ではちつとも同じ氣持が出ないといふのである。だから、私がいら〳〵して呪詛する現代の書寫法を、石川君は案外平氣に濟まして居れた。

然るに、石川君の沒後、段々私は、言語學の理論の入口から、言語の本質そのものの考察へ入つて、ゆくりなく社會の傳承といふ民衆的事實へぶつかつて行つた。そして、一步々々必至の步みを運んで現代の事象に到達した網目のやうに連續する恐ろしい歷史的必然に打たれて來た。言語・傳說・土俗・習慣、我々が一事を知る每に、驚かれるのは、昨日が、一日々々をひろつて一步を飛ばすこと無く步いて來るやうに、ありとある社會の事

象が、少しの飛躍も、少しの無理もなく、恐らく一つの『偶然』さへもなく確實に聯絡して見えて來るのであつた。個人の影などは時代相と民衆との中に全く埋沒し、事變に跳び出して來る志士・英雄は、機既に到つて、民衆そのものを代表する稍々大きな手に過ぎなくなつた。英雄が時勢を造る――そんな事は、過去の幼稚な英雄崇拜の殘骸であり、解りよく呑込ませる爲、人の力をうんと誇張した子供だましであり、草册子の武者繪の大將のずば抜けて大きく、後方の人々が目も鼻も無く畫かれる書き方に外ならないことを知つた。

『偶然』といふ語は、實はあるべからざる不都合な語で、若し吾々に偶然に見えるものがあつたら、其は中間階梯の知識を缺如する吾々の卑怯な獨斷にすぎないか、然らずんば故意に中間階梯に目をつぶつた言ひ草に過ぎなかつた。ローマは其の成れる日に成つたのではなく、維新の改革も、大化の革新も、熟して來た柿の遂に枝を放れたものに過ぎず、風が隊したと見るのは、風が吹けば落ちるばかりに熟し切つてゐた內面の事實を無視することから起る誤解であることを知つた。すると、俺が國字改良論に目覺めたといふことは、國民が目覺めた一例に過ぎない。一葉の墜ちるのは天下の秋の故、一人の心は總て萬人の心でなければならぬ。俺一人氣がついた事は、萬人氣がついたことを意味せねばならぬ。と知つたのである。

かうして、私はいつの間にか彼のいら立たしい氣持から脫することが出來てゐた。そして『これでいゝのだ』といふ心持ちになれて居た。『これでよい』といふのは勿論、この『文字の資本主義』を肯定したのではない。出來るならば今でも國字の社會主義を斷行したい。國字の革命をさへ辭しない――出來さへすれば。

單なる手段の約束と思つた文字は――勿論言語を寫す約束的符牒に過ぎないが――この符牒は、一々裏を返して見れば、べつとりと、永い國民生活の血のりのついた、根の生へてゐる所のものだつたのである。國民性情のこの根が斷ち切れない以上は、之を國民生活から取離さうとするも離れないものだつたのである。ローマ字國字論、假名文字國字論が起つて半世紀、學者は皆その理論を盡したけれども、少しも實現に向はうともせず、一歩も捗らない所以のものは茲にあつたのである。

併乍國民性情のこの根幹も、ぼつ〳〵ちぎれかけつゝあるのを今明かに見る。漢字の行列を唯一の學問と思ふものもなくなつて來、國民の自覺が、支那文化崇拜の夢から醒めて已に久しく、もう今から、外國地名の新しいものまで漢字に齊かうとはしないし、商店の看板を見ても新名の賣藥を見ても、時勢の動

きは明らである。一千年來、漢字の行列から國語を解放して、假名の創製を完成した我が民衆は、必ずや、今後百年二百年の内には、自ら刻下の國字問題を『必要』に應じて自身で解決して行くに相違ないのである。現にその爲に一方にローマ字論者あり、假名論者あり、漢字制限論者あり、又現狀持論者もある。これらは皆この目的のために起つた民衆運動のそれ〲の色合なのである。これが歩々解決に進んで行く明らかな保證である。現に十年前まで無關心だつた各新聞社が、進んで漢字の制限に着手したのでも知れる。極めて確實な步武である。宇宙間のすべての物體の運動がその最短距離を行く樣に、吾々の國民が、この東洋の波の上に置かれて生活を始めた──この條件に於て、今日今見るこの狀態は、やつぱりその最短を來たものに違ひないのである。やゝ廻り道したとすれば、それだけの素質だつたからなので。だから書寫法のこの不都合も、これで止むを得ない唯一の事情で、その内最も適したやうに、これでも最短の道を來たのに相違ないのである。その證據は、我々の發達さして來た此の假名文字は、吾々の國語を記す上に、世界のどの文字よりも最も適してゐる（ローマ字の方がよりよいといふのは、國際的に便利だからで）。國語は一々の音節が開音節(オプンシレブル)だから、假名文字が一字々々開音節の音節を代表し、ひた〲と簡結に書き記されるが、若しローマ字を用ひると、假名一字でよい所を一々、一字づゝに不必用な分析をして書かねばならぬといふ不自然があるのがそこだ。之に反して西洋諸國語は、子音のみが二つも三つもつゞく國語である。それ故に一字一音の文字を發達さして、あの文字は、向うの言葉を書くには最も都合よく出來てゐるのである。この唯一の現實は、さうならなきやならなくしてなつた結果だからである。そこには個人の知慧を超絶した、自然の妙工が民衆の事實に存するのである。私は全民衆の力を信じたい。信じることが出來るのである。一步一步の步武が、過去に於てやつたやうに必ずこの先きも最善の步みを續けて、この難關の解決をそれ自らで見出して行くことを疑はない。『これでよい』ので、『このまゝでよかつた』のである。

勿論、『これでよい』と云つて、努力も何もせずに居るといふ意味ではない。唯いら〲呪咀する苦みから蟬脫することが出來たといふだけのことである。私は依然時機のある每に、一人でも多くへ刻下の漢字に引きずられてゐる考の間違、書寫法のもつと合理的な理想、國字改良論者の犧牲的な營と、その論據とを、若い人々へ闡明する力說の手を少しも弛めはしないのである。

石川君が存命でゐたら、お互ひの此の心持を談し合つて笑ふことが出來たであらうと偲ぶのである。石川君の『このまゝでよい』も恐らく矢張同樣で、理想と現實との溝渠が大きければ大きくなる程、あのいら〳〵した呪咀が烈しくなつたが、最も大きな溝渠を作る無政府主義が崩れると共に、主客の合一、自己の統一を完成して、長い間のいらだたしさから脱却することが出來たのであらう。敢てそれに依て學理の全部が崩壞したことを意味すべきものではあり得ない。その事は私自身の體驗からはつきりと云ひ切れるやうな氣がしてやみがたいのである。それ故に『啄木が一朝にして其の思想を棄てたか』と嘆くことは入らざる嘆であると共に、啄木は危險思想家だつたかと危惧することは、入らざる杞憂に過ぎないのである。

石川君が生きてゐたら、今どんな事をしてゐたらう、と若い人々からよくいはれる事であるが、それを聽くとき、私は淚が下るのを覺える。その後の世の中が、何もかも石川君が每日云つてゐたやうになつて來るんぢやないかと、つぶやかれてならない。

今にも崩壞しさうに云ふ、、治下のロシアの國情など、私は石川君の夢と聞流してばかりゐた。世界大戰中の新聞を見さしたら、どんなに踴躍したことであらう。白面のケレンスキは、さながら石川君のやうにも思へたりした。印刷工場の引續くストライキ、勞働組合の勃興、そこにも石川君が生きて働くやうに思へ、普通選擧の通過、無產黨の結黨、丁度石川君の世となつた。尤も、どんなに白熱化しても石川君自らは、直接行動に出る種類の人ではなかつた。策を帷幄にめぐらしたり、或は示威運動の陣頭に立つぐらゐのことはした人だつたが、決して自ら手彈を投ずる人ではなかつた。それは、頭上に鐵拳の雨下する中に平然として一指も動かさず、相手が眞赤に怒張して息せき切つた顏を仰いで、アハハハハと笑へる人だつたから。屑を上げ、眦を決する激論の絕頂で、偶々論理の缺陷を見出された時に、アハハハと哄笑することの出來る人だつた。私は何時も追想して感慨を深くしてゐることだが、あれ程每日議論ばかりして暮らして、遂に一度も喧嘩にもならずに濟んだ人である。切羽つまつた瀨戸際に、尙一閃橫さまに働く餘裕の閃きを藏した人だつた。それだから、慘苦のどん底に陷つて尙周圍の人を笑ひこけさせる大冗談を吐ける人だつた。この餘裕が如何なる切那にもすぐ自己を客觀化し得させた。この客觀化こそ、君を藝術家たらしめ、又君を終生自暴自棄から喰ひとめた。常に自己を客觀し、飽くまで自己の缺陷を正視し、本當に痛々しい血みどろの精進だつた。そして幾度か君自らを絞殺して君自らを

更生した。その熱、その力、眞の意味に於ける『自己を愛する』といふ事實を私は石川君に於て見た。切々止まない自己確立の健闘、努力、それが自己及び自己の屬する社會のよりよき建設へ向つて展開した。あの人の社會思想は、自己を不問に措いて、四圍の條件をよりよく替へようとする物的動機とは或は選を異にして、即ち經濟學說から理論づけられもし、深化されても行つたけれど、その根柢が自己革命の骨を刻むやうな内面的戰鬪の深化であり擴大であつた事が歴々として徵されるのである。この理解があつた故、私はどんな言葉があの口から走つても、石川君その人に危惧を感じることがなかつたのである。『あこがれ』の序詩『沈鐘』の一節に、『劫初このかた海底に沈んだ大きな釣鐘があつて、海の底から無間の響を遠く此の世へ送つて來る。生れて此の響きを胸に感じた幾人は、天馬空を馳ける如くに、人爲の將を超えて、世界の歴史に黃金の光を染めて行つた』と歌つてゐる。

鐘の響に變りがなく、たゞこれを胸に感じるのが萬人萬樣であるのである。

これとは稍々違つた意味に於て、啄木の『死』は、又永遠にも一つの釣鐘を新に伏せたのである。鐘の側に慕ひ寄る人々は、銘々その響を色々に傳へる。それは人々が各々の胸にもつ音叉に共鳴する音色を以て是だと考へるからである。所詮は、故人と全然同じ人格が再來せぬ限、全啄木そのまゝの響を傳へることは出來ぬであらう。同時に銘々の感得する啄木は、たとひ銘々違つても、それは嘘だとはいへない。皆全啄木のある部分で、寧ろその綜合が即ち啄木の全容を成すものであらう。土岐氏の語る啄木、江馬氏の語る啄木、私の語る啄木、その他某々氏の語る啄木、各々相違はあつても、偶々各自のもつ個性に映じた啄木であつて、等しく皆眞の啄木の一面であるのであらう。小さな一介の私自身が、啄木をしかじかと語ることも、この意味に於いてのみ有意義なので、所詮は『私の觀た啄木』『私が觸接した啄木の一面』に過ぎないのである。啄木の全容を正しく理解する上にその一荷の貢獻をすることが出來れば幸ひとするのである。その爲めに私の感銘を忠實に表現しやうと力めるだけで、何等それ以上を期待するものではない。若し夫れ、『呼子と口笛』を中心とする社會思想家としての啄木の如きは、(『あこがれ』を中心とする浪漫派詩人としての啄木、『一握の砂』『悲しき玩具』を中心とする人生派の歌人としての啄木と共に)、之を論ずるに又別にその人があるべきが故に、私は今少しもそこには觸れない。敢て好惡を以て殊更にその一面へ目をつぶるのではなく、その人にあらざることを知るからである。又それらの方面を語る人の最も多くして、此の一面の閑却されがちなことを杞憂するからである。私の書かうとしたのは、一友人として側で觀てゐた、眞實の生活を生きんとして惱みぬいた『人』としての啄木を語らうとしたに過ぎないものである。

カード物語

阿部德藏

一七〇四年に、ムネストリエがカード史を書いて以來、この研究に力を盡す學者が大分あらはれて來た。その主なるものを擧げれば、一七二〇年ダニエル、一七五七年リーヴ、一七八〇年ブライトコップ、一八一六年シンガー、一八三一年シコギヤラ、一八三七年チユシエーン、一八四二年ルベードル、一八四八年チヤツト、一八五四年ボアトダンブリイ、一八六九年メルラン、一八七六年ウイルシヤイヤアなどである。

しかしこの以前に於ても、一四五〇年頃から、斷片的に書かれたものはないでもなかつたが、カード史としてまとまつたものは、ムネストリエをもつて始めとしなければなるまい。爾來二百有餘年、幾多の學者がこの研究に沒頭し、搜索討究、努力を惜まなかつたが、いまだにその起源及び歐羅巴に移入せられた年代などについては、適確なる論證を擧げることが出來なかつた。ルベールは「カードとは一體どういふもので、どこから歐羅巴に渡來して、吾々に何を語り、また吾々はそれに就いてどういふ考へを持つべきであらうかといふことが問題である」といつた。そしてルーベルは熱心なるカード蒐集家であつて「カード史の研究に必要な資料はこと〲く集め盡し、何人も余に勝るものはあるまい」といつてゐて、しかも如上の問題に對し明確な解決をしてゐない。しからばカードそのものに依る研究もあまり賴むに足らぬものではあるまいか。

十五世紀の末葉に於ける伊太利の一派の考古學者の說に從へば、カードはアラビヤ人、サラセン人、ムーア人のつくつたもので、西班牙から歐羅巴に移入したものであるといつてゐる。また他の一派の學者達は、カードは印度に起原して、ジプシーが占考用として身につけてゐたものを、ムーア人が手に入れて、西班牙へ輸入したといつてゐる。他の一派の學說には、埃及古代の神祕哲學がタロットといふ繪カードに表象されてゐるから、カードは埃及に起原したものであるといつてゐる。また支那にそのみなもとを求める一說も決してないがしろにしては

ならない。

しからばどういふ論據のもとにカードが東洋に起原してゐるといはれるのであらうか。

一、象棋とカードに類似の點が多く、象棋が東洋のものであるといふことだけは明らかであるといふことと。二、印度のカードゲームと西班牙のカードゲームと似てゐることと。三、歐羅巴初期のカードの名稱である naibi といふ言葉、及び西班牙語でカードをあらはす narpes といふ言葉がヘブルウ或ひはアラビア語の豫言の意味をあらはす nabi. naba, nabaa といふ言葉に似てゐること。などである。

ウイリアムジョンズの「亞細亞研究」に象棋とカードとの類似點が詳しく記されてゐる。その中から引用すれば「象棋が印度人の發明であつて、六世紀にギシユヌサルマンの昔噺と共に印度から此の國へ傳へられたといふことは、波斯人が證明してゐる。この遊戲は印度で古くから chaturanga すなはち四つの anga（アマラコシヤによれば、象、馬、兵車、及び歩兵）と呼ばれた。これを古代の波斯人が chatrang と改稱した。その後亞剌比亞人がこの國を領有するやうになつては chatrang の頭文字も終りの文字も亞剌比亞語にはなかつた爲め、shatranj と改めた。そして波斯語となり、印度の方言となり、變轉して chess となつたのである。この戲は四人の人がそれぞれ君主となつてふたりづゝ一組となり互に戰ふものである」といつてバギシヤビユーランの中から「四方に八つの四角形をしるし、赤軍を東に、綠軍を南に、黄軍を西に、黒軍を北に置け」といふ象棋の規則を說明してゐるくだりを引用して、「この四つの色が、一組八種からなる印度カードのうちの四種類の基礎を成してゐるのである」といつてゐる。

印度に於けるカードが、印度で發明されたものかどうかといふことについては、多少議論の餘地はあらうが、とにかく非常に古くからそこにあつたといふことと、歐羅巴から輸入されたものではないといふことだけは明らかである。最古の年代としては、十世紀頃かとの說もあるが、それに就いては、カードそのものがこの事實を裏切つてゐる。

印度のカードは、普通圓形で、八種あるひは十種一組であるが、ときには長方形の札もある。チヤツトが王立亞細亞協會の博物館でみたといふのは、三組の印度カードで、甲は十種一組、乙、丙は八種一組である。そして何れも一種は繪札二枚、點札十枚からなり、その一番大きいものは、直徑二吋四分の三、小さいのは二吋八分の一である。材料は畫布で出來てゐるが、ニスが塗つてあるので木のやうに思はれるといつてゐた。（第二

第一圖



第二圖甲



1 2 3 4

第二圖乙

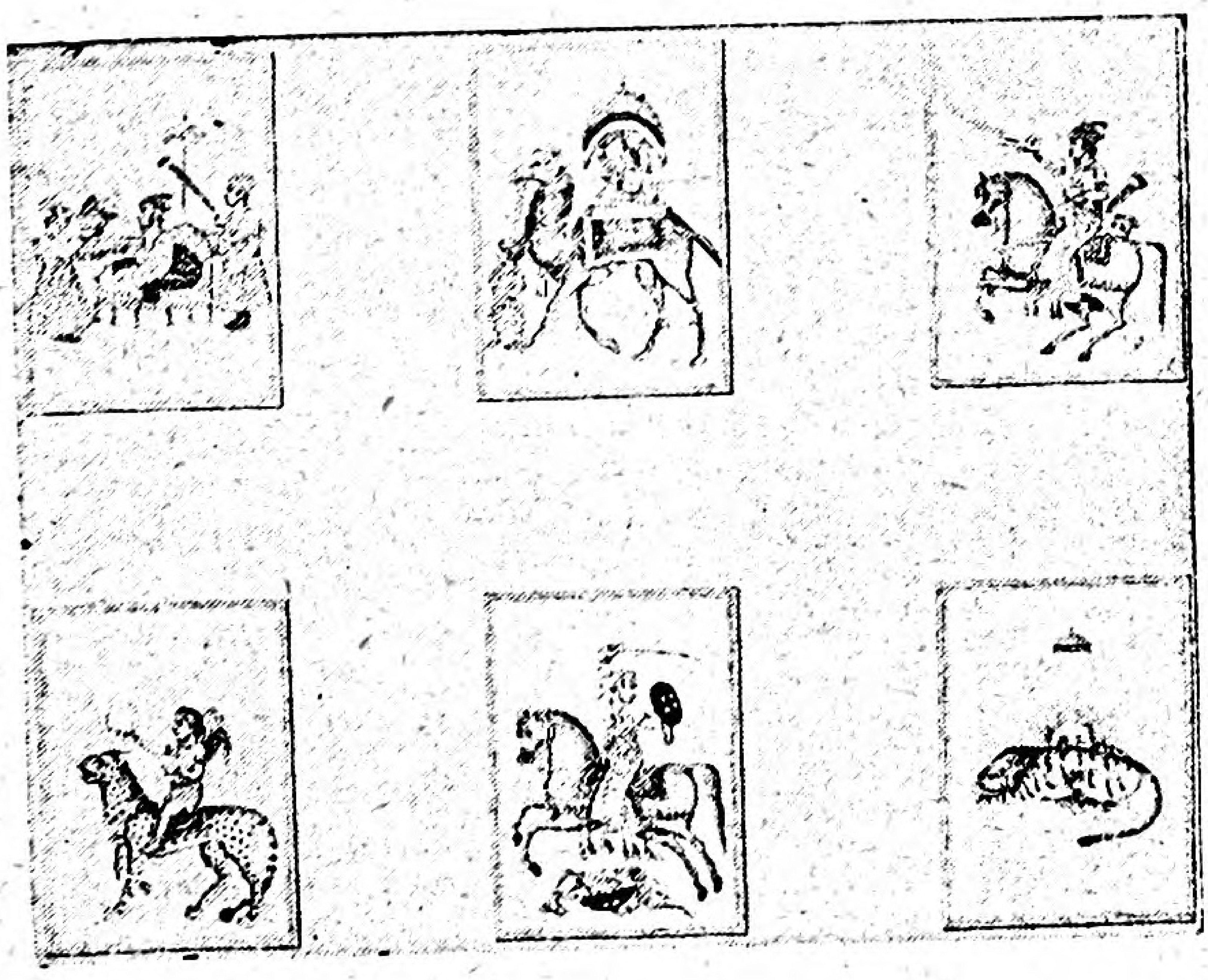


5 6 7 8

第三圖



第四圖



圖、及び末尾挿繪解說參照)

次に東洋から歐羅巴へカードが傳來した次第に就いて、シンガーの書から引用すると、「……十世紀の始めにサラセン人の一隊はピエモンの境界に一旦落ちついて、それからヴレエ地方のアルプス山まで進んで來た。このやうにしてサラセン人は、西班牙、伊太利、佛蘭西などの國民に長く接してゐたので、自然これらの國々へサラセンの文學、藝術、習慣、娛樂などを傳へる機會が多かつた。カードも亦その序に彼等から受取つたものだといふことが出來るのである」と。

またヘロドタスに依れば、カードと賽はアチス王の時代に於ける飢饉の災害中、リジア人が發明したものだともいはれてゐる。しかしヘロドタスのかいたものゝ中には、カードに關する記事は少しもないし、古代の羅馬、希臘人などのかいた勝負事の中にも、カードのことかと思はれるやうなものは一つもない。もしカードがその頃使用されてゐたとしたら、公私の風俗、習慣などについて委しく書きのこされた多くの書籍の中に、そのことについて何か記されてゐなければならない筈だ。オギイドの「戀愛術」の中にも勝負事について書いてはあるが、カードのことは見當らない。もしもカードといふものを知つてゐたならばかならず特筆大書してゐなければならぬ筈だ。

また羅馬、希臘には、カードにあてはまる言葉もなかつたやうだ。以前はカードの模樣に、異教徒偶像の繪姿が描いてあつたのを、基督教徒が近代の模樣に代へたのだといふ說もある。またシプリアンが、カードのことをかいてゐるといはれてゐるが、シンガーはそのことを打ち消してゐた。

クール・ド・ジュブランは、紀元前七世紀には、已に埃及に於てカードが使用されてゐたといふ證據を擧げようとしてゐた。しかし、もしそんなに早く埃及にカードがあつたといふことを立證出來るとしたならば、それこそカード史上の一大發見といふべきである。もしさうとしたら、希臘、羅馬人はとつくに歐羅巴へ持つて來てゐなければならない筈だし、第一カルタゴの軍隊が、西班牙或ひは伊太利へ輸入してゐなければならない筈である。またドジュブランは、運命豫斷の道具にカードを使ふ習慣から考へて、埃及人がカードを羅歐巴へふりまいたものだといつてゐる。

カードは歐洲各國のうち、いづれの國へ最初傳來したものであらうか。

獨逸國へカードが傳來した最初の年代についてブライトコップとハイネツケンは一三〇〇年をその年代としてあげてゐる。ことにブライトコップは「獨逸各都市の古い記錄に依れ

ば、一三〇〇年以前に於てはカードのことは記されてゐないが、その後の記錄にはあきらかにカードの記事があるから、一三〇〇年といふ年代は相當に確實なものであらう」といつてゐる。

佛蘭西にカードの現はれたのは、獨逸よりもおそい。サンルイの條令によつてカードの年代を定めようとするのは間違ひで、右の條令は、賽と象棋のことをいつたものである。一三六一年プロヴンス州の年鑑に依らねばならぬといはれてゐる。その後に於てはシャルル五世の御代に於けるの記錄に記載されてゐる記述と、一三六九年に同王國で發布した勝負事禁止令とによつて知られ、またパン・プレーの說としては、ランスロト所藏の「狡猾な狐」といふ寫本にカードのことが記されてゐるから、一三四一年にはすでに佛蘭西にはあつたと見なければならないといつてゐる。

ムネストリエの說によると、カードは佛蘭西のシャルル六世についてゐたグランゴヌールといふ密畫をかく畫家が、はじめてカードを書いたのだといつてゐた。しかしこれはグランゴヌールが、王の爲にカードを描いたといふだけで、グランゴヌールが發明したといふわけではない。それ故カード研究家でこの說をとり入れるものはないが、世間へはかなり擴まつてゐる。

チャットは佛國愛書家協會で印刷した、グランゴヌールがシャルル六世の爲に書いたといふカードの模寫を見て、伊太利のカードであつて、一四二五年よりも早いことはないらしいといつてゐる。（第九圖及び末尾の挿繪解說參照）

西班牙に於ては、リーヴ僧正の說によると、一二六七年西班牙人がシシリー及びキャラバリャへ入つた時に、伊太利へカードを傳へたらしい形跡があるといつてゐる。

西班牙語でカードを表す naipes といふ言葉の語源について、ビュレーはビスケイ語の Napa から起つたもので「平なる」の意味であるといつてゐる。リーヴは、Nicolas Pepin といふ人の名の頭文字である N.P. から來たもので、從つてカードは西班牙人の發明であると稱してゐる。とにかく、西班牙に於ては、一三八七年カステール王國のジョン一世の時に、カードの使用を禁止されたのも事實であると同時に、西班牙に侵入したムーア族から傳へられたといふことも確かであると思ふ

ブライトコップの說によると前にも一寸述べたとほり「古代の伊太利語でカードをあらはす Naibe といふ言葉はヘブルー語の Naibes によく似てゐて、いづれも巫術、運命豫言等の意味をあらはすものである」といつてゐる。この方がビスケー語の

第六圖



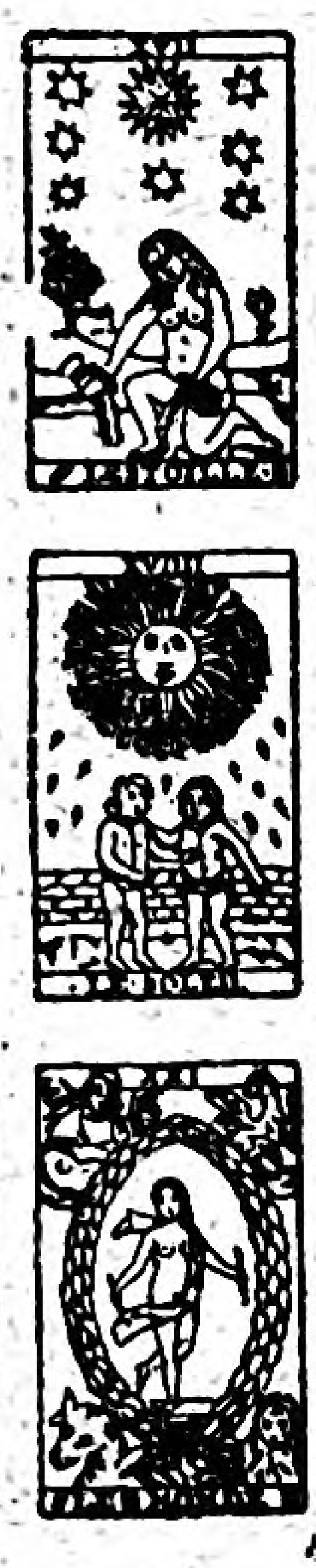
第五圖



第七圖丙



第七圖乙



第七圖甲



Napa を語源と考へるよりも穏當で、西班牙人が Naibes のbをpにかへたに過ぎないといふことになる。

伊太利に於てはチラバスチィが引用した一二九九年の記錄によつて、カードの存在を認めることが出來る。

英吉利に於ては、一二四〇年のウースターの宗教會議の宗規及びアンスチスが引用した一二七八年のエドワード一世の古文書の示す處がカードであるならば、これを最古の年代としなければならぬ。しかしこれらは象棋の勝負について書いたもので、カードではないといふ說が多數を占めてゐる。もしこれがカードであつたとしたならば、ひとり英國ばかりではない、全歐洲に於ける最古のカードの記錄としなければならぬ。

カードが筆寫から木版畫となつたのはいつ頃であらうか。たしかな年代を知ることは出來ない。しかし木版畫の始めが聖者の像とカードであつたといふことに、學者の說は一致してゐるやうである。

シンガーは、「現存してゐる木版畫の最古のものは、獨逸に於て印刷された聖クリストペールの木版畫と御告とであらう」といてゐた。とにかく獨逸人は他國人に比べて、木版畫の研究に早くから沒頭してゐたことだけはあきらかであつて最古のカード製造者が木版工で、木の上にカードを彫りつけてゐるうちに、段々に他の繪まで彫るやうになつたのである。

獨逸に木版工即ち Formschneider といふ文字がはじめて現はれたのは、一四四九年のヌレンベルヒ市の記錄で、その次に出來たのが、カード畫家をあらはす Kartenmaler といふ文字である。それ故にこの二つはそれぞれ違つた職業をあらはしてゐる。つゞいて起つた文字は Briefmaler で、この方はもつと意味が廣く、カード畫家と木版工とを兼ねてゐた。しかし一四七〇年頃の獨逸で、Briefmaler が木版工とカード畫家との併稱であつたからといつて、歐羅巴の他の國々もそのとほりであつたとはいはれまい。

フオン・ムールの美術雜誌に「最初カード製造人は木版工であつたが、聖者の像を木版におこすやうになつてから、木版工とカード工とが別々の商賣に變つたのだ」といつてゐる。またチヤツトは「歐羅巴における木彫のはじまりがカードだとして、その發展のあとをたづねてみると、實に愉快に堪へないものがある。第一、木に彫りつけたカード、第二、木に彫りつけた聖者の像や名前、第三、木版の本、」といつて、木版のはじめがカードであつたことをよろこんでゐた。

ハイネツケンが引用したその當時のウルム市の記錄によると、「カードは小さい箱にはいつて、伊太利、シシリーなどに送

られて、香料その他の貨物と交易されてゐた」とある。これでみると、その時分の獨逸のカード製造業者は、自國内ばかりではなく、とほく海外へも送り出してゐたことがわかる。これに對して、一四四一年ヴェニスで發布された條令に、外國製品及び錦繪の類の輸入を禁じ、見つけ次第沒收してゐた。これらは勿論ヴェニスの商人が、獨逸の輸入品に壓倒されるのがつらい爲に當局にたのんだものと思はれる。

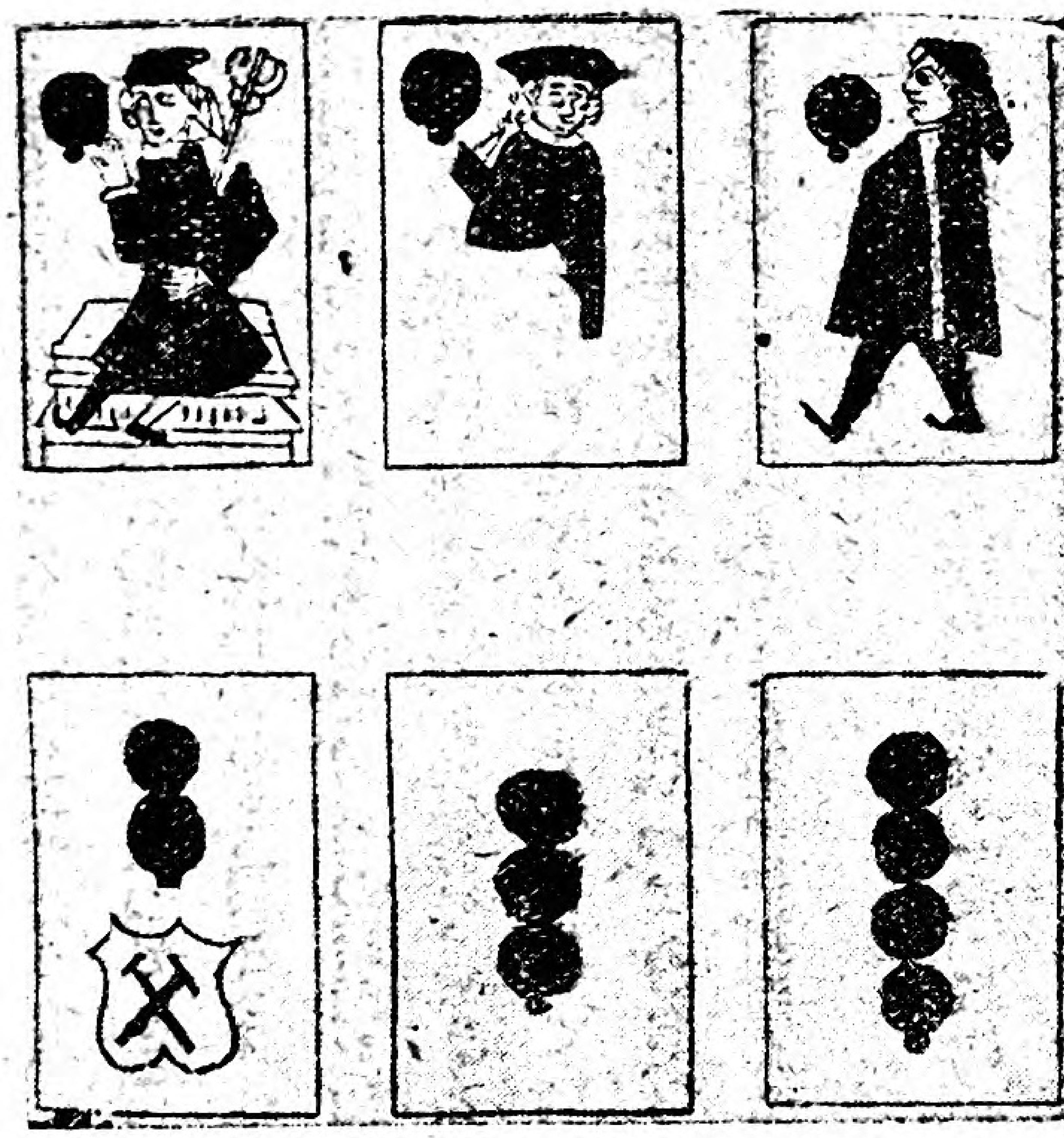
カードの種類については、Tarocchi（伊）Torots（佛）と呼ばれた繪札ばかりの一組と、Numeral といふ點札と繪札を合せた一組との二とほりある。この二つのうち、いづれが古いかといふことは未だに學者間の問題となつてゐる。

クール・ド・ジュブランの説によると、「Tarots は古代のエジプト人の間に知られてゐたもので、その語源を調べてみると Road, way の意味の Tar といふ言葉が、Royal の意味をあらはす Ro, Ros, Rog といふ言葉と結び付いて Tarog-(Royal road) となつたものである」といつてゐるが、事實は伊太利で Torocchi と呼ばれてゐたものを、佛蘭西人が Tarots と呼びなしたものと思はれる。

Tarots は特殊のものを除いては、二十二枚を一組とし、一、二、三……の數札がなく、ことごとく繪札ばかりで人世におこる諸々の事象をあらはす繪が描いてある。これ等の圖柄は、國、年代などによつて多少變化してゐるが、最も一般的な古い一組は、第七圖に示す通りである。一、奇術師、二、女法王、三、皇后、四、皇帝、五、法王、六、愛人、七、軍車、八、正義、九、隱者、一〇、運命の車輪、一一、力、一二、吊下つてゐる人、一三、死、一四、節制、一五、惡魔、一六、神の家、一七、群星、一八、月、一九、太陽、二〇、審判、二一、世界、と愚者との一枚から成立つてゐる。しかしこのカードの現はれた年代に就いては詳らかでない（末尾 挿繪解説參照）

他の一組 Numeral と呼ばれてゐるカードは、現代吾々が用ゐてゐるカードと同じ系統のもので、一組五十六枚或ひは五十二枚で、四種類にわかれてゐる。各種類に繪札四枚（或ひは三枚）と、一から十までの點札がある。けれどもこの數も一定してゐたわけではない樣だ。十五世紀頃のものは、一組がハート、鈴、木の葉、團栗の四種類にわかれてゐた。またその頃の模樣で伊太利、西班牙で用ゐられてゐたカードは、劍、洋盃、棍棒、貨幣の四種類から成り立つてゐる。これは主に獨逸のカードに多かつた。次に現代用ゐられてゐるハート、クラブ、スペード、ダイヤの四種類は、十五六世紀頃から起つたもので、

第八圖



第九圖



第十圖



第十一圖



スペードは劍の變形であつて軍閥、王侯を表はし、ハートは洋盃の變形で僧侶をあらはし、クラブは棍棒の變形で農業をあらはし、ダイヤは貨幣の變形で商業をあらはすもので、佛蘭西カードに多い。デュシェーンヤルベールは、この種類のカードの中の繪札の服裝から考證して、シャル、七世の御世一四二五年頃からはじまつたものだといつてゐる。とにかくこの種のカードが一番廣く用ゐられて、現代に至つたのである。この四種類の中の繪札が三枚の時と四枚の時とに依つて、札の總數が五十二枚の場合と、五十六枚の場合とになる。しかし、かならずしも五十二、五十六と限られたわけではない。

タロットはその札に見る通り、人生に起る事柄をかたどつたもので、もと／＼博打や遊戯に使つたわけではなく、占考、或ひは教育の目的に用ゐられたものである。しかし十四世紀の終り頃からタロット本來の用ゐ方がかはつて來て、大人の遊び道具となつた。

この外に七十八枚一組のニユウメラル系統のカードがある。メルランの説に從へば、「……利口なヴエニス人が、新しいゲームを考へ出した。しかし勝負事では、のるかそるかといふことがその本來の面目だから、それを度外視しない爲にタロット二十二枚に、ニユーメラル五十六枚を加へて、總計七十八枚一組の新しいカードをつくり、新しいゲームをこしらへたのだ」といふ。この一組に於てゲームをする場合には、タロットの方がニユメラルよりも力が強い。この新規に出來た一組に、矢張りタロットの前名であるAtuttiといふ名がつけられたが、通俗には從前のとほりTarotsと呼んでゐた。前に述べたNaidisといふ言葉も用ゐられてゐた。

クール・ド・ジユブランは「タロットは埃及の神秘哲學を表象する古文書とも看做すことが出來る」といひ、エリフアス・レギイは「タロットがなければ、古代魔術は吾々にとつて開かれざる文籍であり、猶太密教の大秘密も解することは出來ぬ」といつてゐる。

二十二枚のタロットは、最後に添へられた愚者の一枚を零とみると、埃及の神聖な數である七といふ數の三倍になつてゐる。

タロット二十二枚の偶意畫に就いての説明は、多くの學者が研究したところである。そのうちからクール・ド・ジユブラン及びエリフアス・レギイの解説を末尾挿繪解説の部に掲げる。

前にも述べた通り、カード本來の目的は占考にあることはいふまでもない。エリフアス・レギイは「タロットは古代聖者の默示の源で、確信をもつて使用することの出來る占斷の道具で

ある。實にタロットの神託は常に正しくて、豫言をしないまでも、隱れてゐるあるものを啓發し、またそれを用ゐる人々に對して最もかしこい判斷をする」といつてゐる。またレギイは「魔術史」の中で「カード一組を靜かに切つて、思ひのまゝに數枚を拔き、猶太密敎の玄妙な數に從つてならべると、カードはまじめにカードに相談をする人の質問に返事をする……しかし吾々は强ひて宇宙の靈光から、自分のみ靈感を享けやうとすると罰を蒙るかもしれない。タロットの占術は、眞實の願望であるから、敬虔な心をもつて行はない時は、危險や罪惡から免れることは出來ぬ。この場合吾々は自分の靈體を出現させ、占斷によつて宇宙靈と交はり話をさせる」といつてゐる。

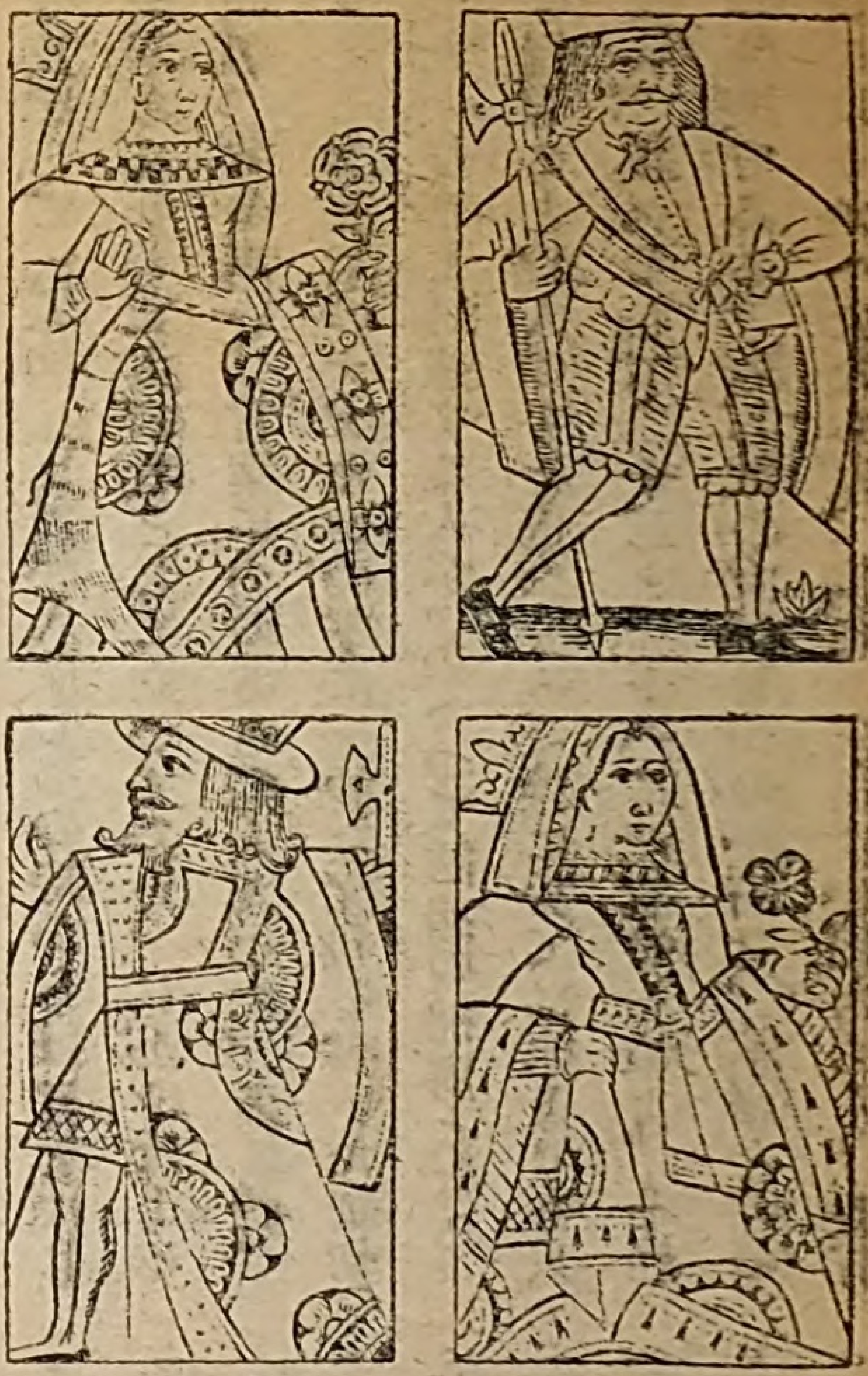
歐羅巴でカードが占考用として用ゐられたのは、いつ頃からであらうか。ブライトコップやシンガーが考へた通り、ジプシイがカードを歐羅巴へ移入したとすれば、彼等は古くからカードで占ひをしてゐたのだから、カード占ひもジプシイから傳へられたといふことが出來る。

ウイルシヤイヤーは「カードは一二七五年から一三二五年の間に、占考の目的でジプシイが歐羅巴へ持つて來たといふ說は、他の學者が嚴しく反對する所である。これとても、ジプシイが歐洲へ入り込んだ正確な年代、カードの起原地、及びカードを神秘事物に用ゐ始めた年代とが判然しないからだ」といつてゐる。

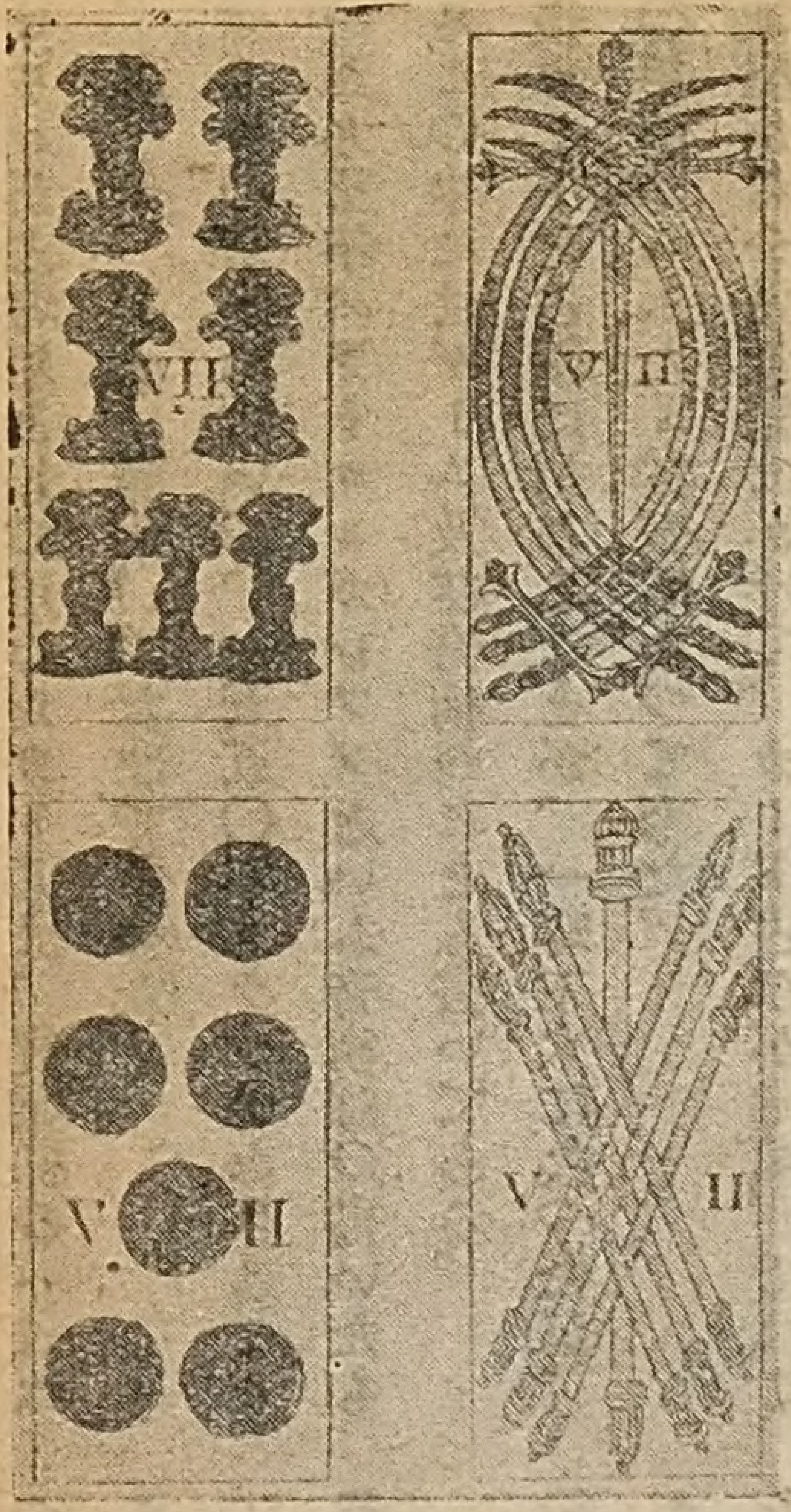
カードが歐羅巴に於て、占考用となつた年代に就いて、チャットは一八四二年の美術雜誌に載つてゐる「人のいゝフイリップが、女カード占ひ者に相談してゐる圖」といふ挿繪を擧げてゐる。そしてこの繪にある人物の服裝から考證して、シャル、八世の折と思はれるから、一四八三年から一四九八年までのものであらうといつた。また「もしこれに間違ひなければ、この繪は、十五世紀末にはカードは占考用になつてゐるといふ證據になるわけである」といつて、更に一五四〇年フランセスコ・マルコリニの著書を、確實な文獻として擧げてゐる。その書についてはシンガーの書を引用すれば「一五四〇年に印刷された、フランセスコ・マルコリニの著はした「運命」と題するきれいな本を證據とすることが出來る。その本は、その種類のものの最初の本ではないかも知れぬ。しかしこの非常に面白い本は今は稀有な珍書であつて、英吉利にも三冊とはなからうと思ふ」といつてゐる。

その本にある問題は、總計五十項で、男子について十三項、女子について十三項、殘りの二十四項が男女共通になつてゐる。殊にその書は澤山の木版が入つてゐるので珍重がられてゐ

第十二圖



第十三圖



第十四圖



第十五圖



る。

マルコリニが占考用として用ゐたカードは、貨幣印の一、二、七、八、九、十、兵士、騎士、王だけであつた。

マルコリニの著書に次いで、一五五〇年フランチェス・ジ・ミラノ、一五九三年パラトロ・ガレッソといふ奇術師の書いたものがあるこの中にはゲーム及び奇術のことも書いてある。

その後カードを占斷に用ゐることが、一時下火になつたが、一七五〇年頃からふたゝび盛になつて來た。

十八世紀から十九世紀にかけて、カード占ひが佛蘭西ではことに流行した。その頃巴里に名高い女占術者で、ルノルマン孃といふものがゐて、その勢力はジョセフィーヌ皇后やナポレオンにまで及ぼしてゐた。この婦人は七つの時から豫言をはじめ、五十年あまりも女占術者として立つてゐた。見かけはよくなかつたが、背の高い、言葉に力のある婦人だつた。ある時、ジョセフィーヌ皇后のナプキンの下に、妙な文句を書いた紙切れがあつた。「皇帝を誘惑する人が、かへつて誘惑の捕虜となる。弓も張り過ぎると狩人の手を傷つける。狩に於ては氷よりも火の方がよい。彼れをして二十三と三十一に注意せしめよ、それが不幸の連續である。若し彼の女が七つの小石を、羊齒と藥の三つの枝に取りかへたならば、彼れの友達は幸福ならん。豫言者はかくいふ」この謎をルノルマンは解いて遠征のことだといつた。狩人はナポレオンで、シリヤと和蘭は、火と氷に喩へてある。謎の數字は、讀まうとはしなかつた。七つの小石を石の王宮にたとへ、羊齒と藥は、ジョセフィーヌ皇后の富貴よりも貧乏の方がよい、といふことだと解釋した。

またこの婦人について有名な話がある。一八〇四年の一月、後に佛蘭西の最高武官となつたゼラールが、ベルナドット將軍の幕僚であつた頃、將軍をこの女のもとへ連れて行つた。將軍を裕福な商人として紹介して、いま獨逸でとりかゝらうとする商賣上のおもはくが、どうなるか聞きたいのだといつた。ルノルマンは机の上にカードを並べ、あれこれと動かして、「あなたは商人ではない、軍人でせう。しかも高級な軍人です」といつた。「違つてゐる」と將軍がいふと、占術者はかぶりを振つて「もしあなたが商賣でおもはくを立てれば、おほしくじりです。しかしふたたび後では運命どほりの仕事をはじめるでせう」とカードをならべかへて「あなたは高級武官で、しかも皇帝に縁のある人です」といつた。「皇帝とは誰れです」と、二人がびつくりすると、女は「今の執政官です」とまたカードをしらべて、「あの執政官は確に皇帝になります。今あなたとの間には雲がかゝつてゐても、離れることはありません、執政官の星

は素晴らしい勢で登つてゐます。くれ〴〵も離れてはいけません。大した權力です、世界をふんまへて仕舞ひます。あなたはとても及ばない、が王様にはなりませう」といつて机のカードをかたづけた。あとは何を聞いても、いふことはないと答へなかつた。

果して、ベルナドツト將軍は瑞典と諾威の王となつた。時の執政官はその年の十二月、ナポレオン一世として佛國皇帝となつたことはいふまでもない。

この話はサーランの著はした「シャル、・ジャン十四世の歷史」にある。

象棋が戰爭をかたどつたものであることはいふまでもない。カードを象棋の變形とすれば、カードの札は象棋の駒に當るもので、從つてカードゲームもみなもとを軍事にいたしてゐる。

しからば歐羅巴人がカードゲームを始めるやうになつたのはいつの頃からであらう。シンガーの説を擧げると、「カードのゲームは、象棋のゲームと同樣に、始め印度から亞刺比亞へはいつたかと思はれる。元來ジプシーは印度人であつて、祖國を追はれた民族らしく、各地を放浪して歐羅巴に辿り着くまでに、亞細亞と亞弗利加の北方を横切つた時に、その地方へカードのゲームをふりまいて行つたものと思はれる

しかしその當時は、どういふ模樣の札で、どういふゲームをやつてゐたか、またいつ歐羅巴へ輸入されたかといふ點については詳らかでない。伊太利及び西班牙人が用ゐてゐたカード、すなはち劍、洋盃、貨幣、棍棒の四種類は、蓋し東洋の札に由來したものであらう。

しかし是等の問題の解決に就いては、カードに關する文獻、傳說のゆたかな東洋の諸學者を訪ねて研究の步をすゝめる將來の學者に、一任しなければならぬ」といつてゐた。

この時から既に百余年を閲たが、如上の諸問題に就いては別段の進步をみとめない。たゞむかしながらの資料によつて甲論乙駁したにすぎぬやうだ。

カードゲームそれ〴〵の打ち方、年代、國別カードいかさまの打ち方、種明し等についてはくだ〴〵しく記すほどのこともあるまいと思ふから、こゝでは一切省くことにする。

カードが奇術に用ゐられるやうになつたのは、いつの頃からであらう。例底確實な年代をしることは出來ない。シンガーは「カードが占考または奇術に用ゐられたといふことは、ある點までカードが東洋の起原であることを語るもので、これ等の技術は大體東洋のものと思はれてゐる。カードが歐羅巴へはいると間もなく占斷や奇術につかつたといふことも、當然ありさう

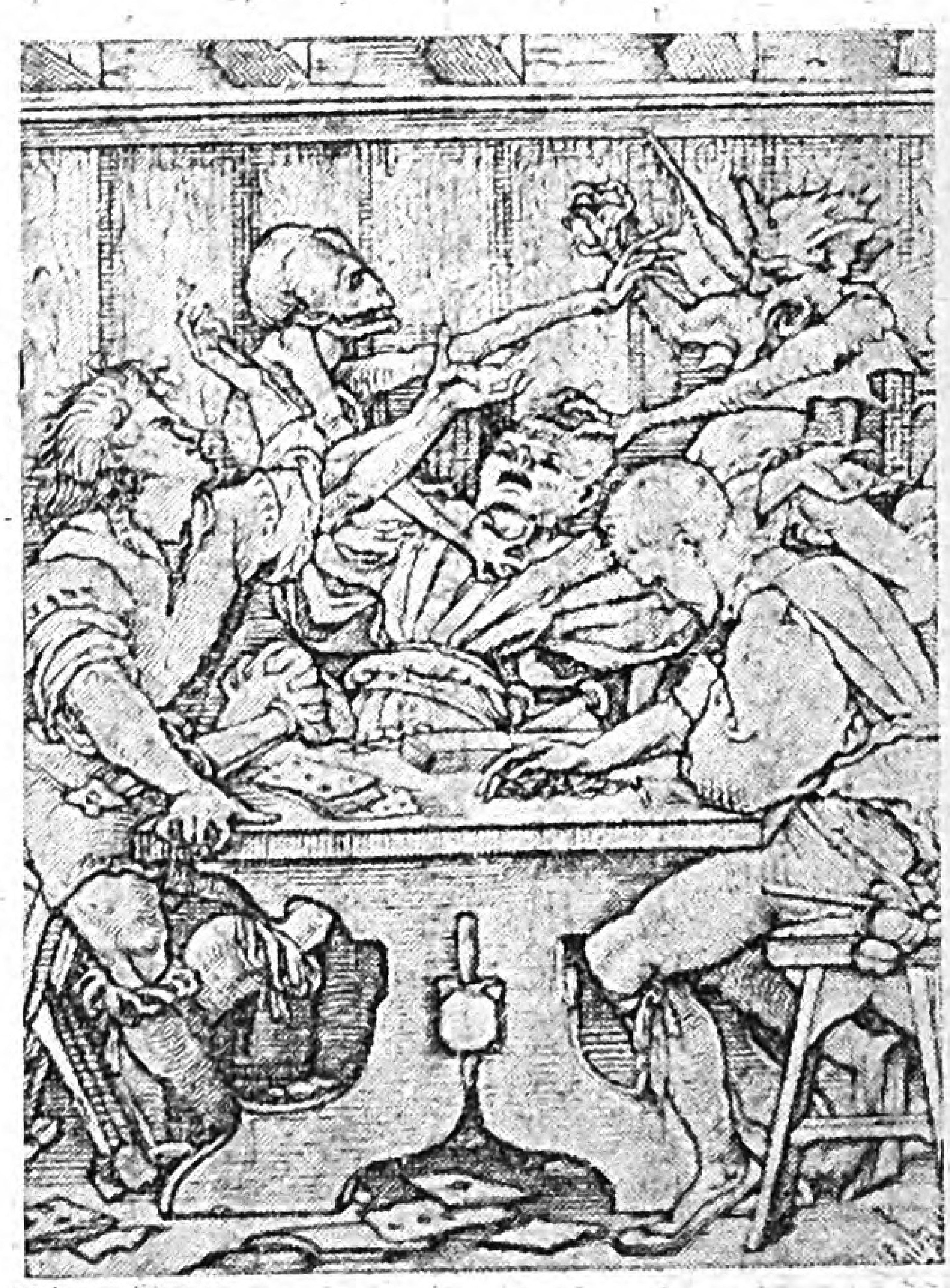
第十六圖



第十七圖



第十八圖



第十九圖



なことだ」といつてゐた。けだしカードは十五世紀の頃、物賣りなどが人呼びに手輕なカード奇術や、カード占ひなどをして、所々を流浪して歩いた頃をもつて始めとせねばなるまい。

次に文籍にあらはれたはじめとしては、

本誌十月號奇術閑話で述べた一五八四年レジナルド・スコットが著はした「妖術の曝露」によらなければならぬ。

「カードを扱ふ特別な法則、むづかしい不思議なカード奇術のやり方」といふ表題のもとに、スコットはカード奇術の種明しをしてゐる。

「……カードで奇術をつかふ時に一番大切なことは、手早くカードを切ることとである。そして常に見物の拔いたカードを一組の一番下か、或ひは見ておいた札から四五枚目の處にあるやうにする。札のある場所がわかつてゐるのだから、隙見をするなり探し出すなりして、不思議な奇術をつかふことが出來る。その場合カードを見つけてゐるな、といふことがわかつても、後で札を切つて仕舞ふから、客の疑ひも晴れることになる……」と述べて、細々とカードの切り方や、拔いた札の處へ小指を挾むこと等の種明しをしてゐる。そしてこれ等の原則を元として、次のやうな奇術の種明しがしてある。

一、一組の中から四枚の一の札を引き出し、それを四枚の繪札（兵士）に變化させる法。

二、一組の一番下の札を觀客がみて、それを切つてしまひ、その札をあてる法。

三、同じく別法にして、實際術者が其札を見ないであてる法。

四、觀客が心に思つた札を、サクラを使はずに當てる法。（譯者註、サクラとは客席にゐる術者の仲間）

五、甲が心の中に思つた札を術者が知り、その札を拔かせる法及び胡桃を割り中よりその札の名を書いた紙片をあらはす法

右のうち、第五番目のものが一番面白いから、その種明しを左に轉載する。

「燒いた太い針で、胡桃の頭の横へ穴をあけて中味を攪き出し、縱横一吋、或ひは一吋半位の紙へカードの名前、またはその數を書いて固くまき胡桃の中へ入れ、赤臘で胡桃へあけた穴を塞ぎ、その上から塵をなすつておく。胡桃が古くて茶褐色であれば、決して見付けられるものではない。そこでサクラに、術者が胡桃の中に前以つて書いていれて置いたその札を思はせて、胡桃を客の懷中、或ひはアッといはせる場所へ忍ばせて置く。そこで見物の一人に、術者が手に持つてゐる一組のカードの中から一枚拔かせる。しかしその時、あなたに然々の札をかならず拔かせますといはずに、唯どの札でもよろしいから、一

枚ぬいて下さいとだけいつて、術者がサタラに打ち合せをして、サタラが心に思つてゐる札、すなはち紙にかいて胡桃の中に入れてある札を、カードをつかふ手際でうまく觀客にぬきとらせることが出來る………」と述べて、カードの强制法（譯者註、强制法とは一組の擴げ方、或ひは繰り方で、術者が拔かせやうと思ふ札を觀客に拔かせる法）について細々の說明をしてゐるが、長くなるからここでは省く。

スコツトの述べてゐる强制法は、現代のやり方と、ほとんど變る處はない。しかし「拔かせやうと思つた札でない札を觀客が拔かうとしたら、新規蒔直しにはじめる爲に、わざと二三枚札を落してしまへ」といつてゐる處がふるつてゐる。

「普通奇術士は、この奇術にインキの入つた胡桃をつけ加へて、おしまひの藝にする。その場合、飛輕な子供に、カードを一枚心に思つてくれといひ、子供が心に思つたら胡桃を渡して割れといふ。たつた今、その奇術をみたばかりだから、子供は胡桃を割ることをいやとはいはない」子供が胡桃を割ると、中からインキが流れ出すといふ惡戲をしたのである。

この奇術は、スコットの時代から三四〇年もたつた今日でも、一二箇所改めれば立派に客間奇術としてやることが出來ると思ふ。

フランシス・ベーコンが、嘗て自分の父の家で奇術を見た話をしてゐる。それは、「甲の觀客が次にどういふ札を思ふか、何の札をぬくかといふことを、奇術士が前以つて乙の觀客に話しておき、甲の觀客に一組のカードの中から一枚ぬかせると、果して演技前に奇術士が乙に話しておいた札をぬいてゐる。」といふのである。ベーコンはこのことを、サクラの仕業としてゐた。

しかし前後の關係から考へると、これは一五七五年頃と思はれるから、その頃には既にスコットの著書にも、カード强制法の種明しがしてあるくらゐだから、自分の思ふ札を人に拔かせるといふ術は、すでに奇術士がやつてゐたとみなければならぬ。

次にカード奇術の中で一番名高い「せり上るカード」といふ奇術の種明しをする。これは四つの古典的カード奇術――從順なるカード、袖口から懷中へ通ふカード、四つのエース、貴夫人の姿見――の一つであつて、この「從順なるカード」といふのが、「せり上るカード」と後に名が變つたのだ。日本ではもと「呼びだし加留多」といつてゐた。

觀客が數枚の札をぬいて、それを殘りの札と合せ、よく切つて洋盃の中へ入れると、拔いた札だけが洋盃の中からせり上る奇術である。奇術としても非常に古く、おそらく一六〇〇年以前のものと思はれるが、傳授書の中に現はれたはじめとしては、

第二十圖



第二十一圖



第二十二圖



一六三五年に出版された「ホーカスポーカス」をもつて最初とする。その後一七七二年には、ギユイヨーの「物理と數學の慰み」の中に記されてゐる。その本は、蘭、獨、兩語に飜譯された。また一七九一年ホラート、ソオン、エツカルチヤンセンが五冊の奇術書を著し、その中の「奇術士のポケツト」といふ本の中に、この奇術の種明しが書いてある。また一八〇〇年ゲールが倫敦から出版した「知識の部屋」アストレーの「自然魔術」・一七八四年にフーパーが著した「究理娯樂」をはじめ、佛蘭西の百科全書その他數多の傳授書にも記されてゐる。

以上の如く、この奇術は最古のカード奇術の一つであるには違ひないが、あまり世間から認められてゐなかつた。しかし俳優から身を起して奇術士となつたジョン・ヘンリー・アンダーソンが一八三六年にこの奇術を發表して以來、一時に名高くなつた。アンダーソンはこの奇術に「ナポレオン奇術」といふ名をつけた。一八三八年のアンダーソンの奇術番組の中から、この奇術の解説を譯出すると、

「ナポレオン奇術――この奇術はナポレオンが發明したもので、觀客が六枚のカードを奇術士に見られないやうに拔いて、ふたゝび殘りの札と合せて、數人の觀客がよく切つてしまふ。後で奇術師が「出て來い」といふと、カードが一組の中からそろ／＼歩き出す、つまりこのカードのはたらきは、口を利かないといふだけで、外のことは何でもやる」と書いてあつた。次に種明しをする。

この奇術は、奇術士の「忠實なる友」と呼ばれてゐる黑い糸で、カードを引き上げるのである。その糸を術者自身でひくこともあれば、陰から助手が引くこともあり、あるひは時計仕掛で、卓子の中から引くこともある。一番古い法としては、糸の端を小さい錘に結び付け、その錘を砂の入つた卓子の脚の中へ入れ、靜かに砂をはきだして錘をさげ、カードを引きあげた。

しかし一番普通のやり方としては、陰から助手が糸を引く方法である。そのやり方は、前に述べたカード强制法をもつて用意してあるカードを拔かせなければならぬ。たとへば、そのカードをクラブの一から六までの六枚として、一組五十二枚のカードの外に、クラブの一から六までの六枚を用意しておく。その六枚を圖に示すやうに糸をくゞらせて卓子の上にものかげにかくしておき、その糸の端を助手が樂屋で引けば、イロのカードはイロの順にせり上る。そこで奇術士はカード强制法をもつてクラブの一から六までを、六人に拔かせる。もと／＼六枚の札は兼ねて用意がしてあるのだから、觀客の拔いた札は、何處へいれて、どう切つてしまはうとも差



支へない。奇術士はその一組を持つて舞臺に歸り、かねて仕掛のしてあるカードと合せて卓子の上の洋盃の中にいれ、クラブの一に上れといへば、その聲を合圖に樂屋から助手が糸をひくから、クラブの一がそろ〳〵と洋盃の中から顔を出す。このやり方が一番通俗のものだ。

その後各方面の奇術士が、色々な方法を考へた。その中の一つ二つを擧げれば、ハーツといふ奇術士の考へた機械仕掛のカードや、せりあげに使ふガラス製のカードスタンドで、そのガラスの柱がぐる〳〵廻つてカードをつりあげる方法や、一組のカードを函の中に入れると、函の中からカードがせり上つて蓋をあける機械函や、一組のカードの眞中に穴をあけ、リボンを通して吊しておくと、拔いたカードがせり上る新式の方法や、强制法を用ゐないやり方では、觀客が上れといつたカードを五十二枚勝手にせり上らせる法や、糸を少しもつかはない法など、ほとんど數限りない新發明が工夫されてゐるが、丁度澤山の實用新案や專賣特許の發明品が、世の中に用ゐられずに埋もれてしまふやうに、この奇術でもやはり一番手輕な古い方法が用ゐられてゐるから面白い。

次に日本のカードに就いて簡單に述べてみやう。日本のかるたで「天正」あるひは「うんすん」と呼ばれるものが歐羅巴から傳來したといふことは、日本のかるたの圖柄を、十五六世紀頃に於ける歐羅巴の札の圖柄と比べてみれば實に一目瞭然の感があらう。

和洋のカードを比較することや、語原の穿鑿をすることが極めて困難であつた昔でさへ、いづれもかるたを南蠻渡りとして、日本の發明であるやうにいひなした學者はなかつたと思ふ。こゝろみにその一二を擧げてみれば「加留多元阿蘭陀人玩レ之長崎港土人効レ之爲レ戯」。「かるたは異狄より來りたればその根元をしらず。」などのたぐひである。また語原を歐羅巴にとらぬものとしては「かるたは輕板の異るにや」。「梵語にて唐譯していふときは圖といふことなり」また「博戯犀照」に「和名抄卷四樗蒲和名加利宇知とあるをもておもへばかるたは蠻語にはあらで和語なるべし、加利宇知の約たる言葉と思はる、宇知の反「つ」なり「つ」と「た」と通へり、さればかるたといふ言葉は今のかるたといふもの渡りて彼札にその名をおふせしなるべし」とある

支那ではかるたを「葉子」といつて、古くは唐の後半期からあつたとさへいはれてゐる。「葉子」の語原に就いても諸説はあるが、「陔餘叢考」に宋人袁文の言を引いて、「葉子」のうち「葉」の字の上半を二分すると廿世即二十世となり、殘りの「木」の字と下の「子」の字とを合せると「李」といふ文字となる。二十世

は唐の二十帝の數で季は唐朝の姓であるから二十世季となつて唐の豫言であるといつたのは面白い。とにかく支那では、唐宋以來のものだから、古く支那からも渡らなかつたとはいへまいと思ふが、所謂かるたとはあらゆる點から別種の系統のものである。

とにかくかるたが歐洲傳來であることに異存はないとして、始めて日本へ渡來したのはいつ頃であらうか、

ダブリユー・エー・チヤツトはその著「カードの起原と歴史」の中の「カード歐羅巴に傳來す」の一節に冒頭して「カードはもと歐羅巴に起原したものか、あるひは他から輸入されたものか、それは兎も角として、一體いつ歐羅巴人の知る所となつたかといふことが、いまだに確められぬ問題である。もしもカードが一般に用ゐられてゐたとすれば、すでに諸大家が、それに就いてあきらかに記してゐてもよい筈だと思はれるが、誰も口を噤んでゐた所をみれば、一三五〇年より以前には僅の人を除いては、まだ大方の注意を促す程にはいたらず、また十四世期の前半期にはさらに用ゐられてはゐなかつたのだと結論することが出來る」といつてゐた。

この言葉はひとり歐羅巴ばかりではなく、チヤツトの擧げた一三五〇年をわが天正、慶長あるひは寛永といふ年代に置き代へさへすれば、そのまゝ日本のかるた史にあてはめることが、出來ると思ふ。慶長二年三月の長曾我部元親の式目に「博奕かるた諸勝負令禁止附其外不作法令禁制事」とあるから、この時代にはかなり流行してゐたものと思はねばならぬ。天正かるたの天正といふ文字がかるた傳來を示す年號であるかどうかは別問題として、かるた傳來はこの邊から洋人が始めて渡來した天文年度までの間にあることはいふまでもない。

一八一五年にエス・ダブリユー・シンガーが著した「カード史の探鑿」の中にブロームホツフといふ和蘭陀人がクルーデンといふ者から日本のカードに就いて問合せを受け、それに答へた手紙が載つてゐるから左に譯出する。

拜啓、六月二十六日付けの御手紙拜見仕り候、日本に於けるカード遊戯及びその使用法に關する御問合せに就き左に御返事申し上げ候

同地に於て使用致され居り候カードはいづれも自國製品に有之候。しかし何枚をもつて一組といたし候か、また、幾種類有之候ものか存じ申さず候。當時に於ては博奕殊にカード賭博を犯す者は嚴罰に處せらるることに相成候その勝負の方法は二人あるひはそれ以上の人々おの〳〵六枚、八枚あるひはなほおほく、の札を持ち、殘りのうち、四枚は表を上に

して並べ、他は重ねたるまゝ卓子の上に置き、手にある札の中より並べたる四枚のいづれかと同じしるしの札を打つものに有之、打ち合せたる二枚の札は、おのれの取り札として置き、取りたる札の代りとして、更に卓子の上に重ねたる札の一枚をめくりて場に加へ申し候、もしこのめくりたる札が、その前に取りたる札と同種類なる時は、それをもおのれの取り札の中に加ふることに相成り候、この際いづれも點のおほき札を點のすくなき札より先に打ち出だすものに候、斯様に各人順々に札を打ちて、こと／＼く打ち切りたる時は、各自の取り札を數へ勝敗を決するものにて、そのをり同種類の札を數多く持ち、百あるひは百以上を數ふるものを一番勝ちと定むる規則に有之候、

小生出立に際してこれらの記錄書類を日本に殘し置き候ため、遺憾ながらこの勘定の數へ方に就いては存じ申さず候

敬具

千八百十五年八月十五日

ジエー・コツク・ブロームホツフ

アール・ピー・クルーデン様

挿繪解說

第一圖　紳士淑女カード遊樂の圖（十五世紀末）

圖は木版畫にして、イスラエル・ヴン・メッケンが版木におこしたるもの、

第二圖　印度カード繪札の圖

向つて右は王をあらはすもので、二婦人王座に侍る所、向つて左は大臣白馬に跨る所。第八種よりなる一組は、第一、帶黃色、淺い盃に入つたパインナツプルのやうなものゝ印、第二、黑色、眞中の白い赤い玉の印、第三、褐色、劍の印、第四、白色、怪奇な首の印、第五、綠色、柄のない日傘の印、第六、空色、眞中の黃色い赤い玉の印、第七、赤色、斑點のある平行四邊形の印、第八、黃色、卵形印、で、これ等に對して佛敎の生死輪廻の理を土臺とする說明もあるが、こゝでは省く。

第三圖　印度カードの圖

一組七種、日印、月印、冠印、ざぶとん印、立琴印、文字印、劍印）よりなり、各種に各々繪札二枚（王、將軍）及びどの種類にも屬せぬ男女の繪札十二枚、圖はこの無所屬の繪札の中の一枚で、輕業師を描いたもの。

第四圖　古代東洋カードの圖

一組七種よりなり、數札繪札二枚（王と大臣）及び別に十二枚の繪札を添ふる總計九十六枚、象牙に描れたもの。

「エエブールが孟買で亞剌比亞の商人が勝負をしてゐる處で見たといふのも、蓋しからいふカードではなからうか。しかしニエブールは支那のカードだらうといつてゐたが、それは單に支那製の札を見たので、支那の札は全くこれとは違つてゐる。」とシンガーは圖の說明をして、何れの國のカードとも極めをつけてゐない。ウイルシヤイヤーはその著書で、シンガーのこの札に就いてしるし、波斯のカードとしてゐた。

第五圖　圓形カードの圖（十五世紀）

一組五種（兎印、鸚鵡印、石竹印、ばら印、をたまき屬印）をもつて一組をなし、各々繪札四枚、王皇后、兵士二枚（王及び皇后に屬するもの一枚づゝ）點札十枚づゝにて、總計七十枚、人物の服裝などより考證して十五世紀のものかといふ。圖は鸚鵡の四、兎の九、兎の兵士、鸚鵡の兵士をあらはす。

第六圖　貴人カード遊樂の圖（十四世紀末葉か）

貴人三人カード遊戲をなし、見物する貴人二人と從者二人。

第七圖　タロットと呼ばれるカードの圖

第一、奇術師の卓子に、賽、洋盃、ナイフ、玉などが置いてあり、手にはヤコブの棒（奇術の時手に持つ棒）を持ち、指の間に玉を挾んでゐる、これは茶碗と玉の奇術（本誌十月號、玉と茶碗の奇術參照）をつかつてゐる所で、奇術師の繪が最初となつてゐるのは、奇術の玉が手から茶碗へ見え隱れするさまを、夢幻泡沫な人生にたとへ、世の中を一六勝負の大賭博場になぞらへた所、二、三、四、五は社會の上に立つ人物を擧げたものだ。第二女法王、第五法王の服裝を見ても、このカードの古いことがわかる。このカードは、はじめ父、母と名がつけられてゐたものを、伊太利、獨逸のカード工が、法王、女法王とかへたものだ。第二、女法王、女性が冠をかむり、ヴエールをまき、胸に日輪の十字を表す、第三、皇后、翅のはえた女性が腰をかけ、冠をいたゞき、王笏の先には地球がついてゐる。靈魂生命をあらはす鷲を印としてゐる。第四、皇帝、からだは直角三角形、足は十字にくみ、錬金術者の徽をあらはす。第五、法王、大祭司がハームス及びソロモンの柱の間に坐し、神秘敎の標號をあらわす所。第六、愛人、若い男と女がお互に信仰を誓ひ、僧侶がふたりを祝福してゐる。或は、善惡の間にゐる人をあらはし、上よりは眞理の日輪、光を放ち、戀愛の矢は惡を赫す所、第七、軍車、凱旋するオシリスの神、手には王笏を持ち、頭に冠をいたゞき、二頭の白馬に軍車をひかせ、悠々と凱旋する所、オシリスの神は、寒中は姿を隱し、春先から新らしい光輝にみちて現はれるといふ傳說、第八、第十一、第十二、第十四は所謂主德を表すもので、第八、正義は、皇后が王座に坐し、手に劍と秤を持つ所、第九、隱者、哲學者が長いマントを着て、肩に頭巾を垂らし、杖をつきながら歩いてゐる、右手に提灯を持つたのは、眞理と德を求める所、カード工が隱者にかへたものだといふ。第十、運命の車輪、人が猿、犬、兎の形となり、車にくつついて運命の車をまはる、幸運の頂きから落魄の底に沈む有爲轉變の世相をあらはす所、第十一、力、かよはい女が小犬をあしらふやうに、獅子を扱ふ所、第十二、吊下つてゐる人、本來「深慮」といつて、一本足で立ち片足をあげて、何處へ踏み出さうかと探してゐたものをカード工が原圖の意味深長をしらず、圖のやうにかへたもの、特にこの繪をいれたのは、一組の中へ女法王を出した爲、發明者が罰せられてゐるところだといふ、或ひは圖をそのまゝに解釋して、職粧及び仕事の完成をあらはす所、第十三、死、十三番目に特に死を置いたのは尤もなことだと、クール・ド・ジュブランはいつて、十三の凶數の古傳を述べてゐる。第十四、節制、翅の生えた女性が、片方の水差しの水を冷す爲に、他の水差しから水を注いでゐる所、あるひは、長命液をつくる二種の水を注いでゐる所、第十五、惡魔、埃及のタイフオンといふ惡魔で、蝙蝠の翅が生へて、手足はハーピーといふ怪物と同じで、頭に角があり、そばに長い耳と尻尾の生えた小惡魔が兩手を縛られて、首から首へ綱をつけタイフオンの座へ結んである。つかまへたらはなさぬぞといふ所、第十六、神の家、金の踣つたブルタ

スの城が倒れて、拜金者を押し消したといふ、ヘロドタスが話した埃及の皇子フアルプシニットの歴史を示すもので、慾張るなと數へる所、後の人が雷と稻妻を加へたもの。第十七、群星、天狼星を表しま、はりを七つの小さい星がとりまいてゐる。その下に女が手に持つた水差しから、水をあけてゐる この婦人は天の女王イシスの神で、この神の惠みでナイル河には水が滿々と湛へられ、荒野は變じて豐饒の地となつたといふ。第十八、月、日の進む道を通つて、金と眞珠の涙を降らせる。埃及の傳説によれば、イシスの神の涙で毎年ナイル河の水を增して、埃及を豐饒の土地とする。その下に居る蟹は、巨解宮を表し、兩側の塔はヘラキユールスの有名な塔で、その下の犬は、月が天の中心を離れて、地球の極へ行かないやうに吠えてゐる所、第十九、太陽、こゝでは森羅萬象の文を表す所。第二十、審判、これもカード工が最後の審判と取り違へて、圖でみるやうな繪を描いたもの、第二十一、時を表すもので、眞中にゐるのは女神で、肩掛けをさげてゐる。まはりの圓い枠は、時の廻轉と、萬物を生ずる卵をあらはし、四隅の鷲、獅子、牛、若者は、春夏秋冬を示し、鷲は春、獅子は夏、牛は秋、若者は冬をかたどつてゐる。「愚者」途方もない着物をきて、曲事と惡德の詰つた袋を脊負つて、ぶら〳〵歩いてゐる所。

第八圖 ニユーメラルと呼ばれるカードの圖（十五世紀）

このカードは獨逸初期、木版畫の好資料で、シンガーの著書「カード史の穿鑿」に載つてゐるもの、このカードは總數四十八枚四種類（鈴、ハート、木の葉、團栗）よりなり、各種に繪札（王、騎士、兵士）三枚づゝ、數札としては一がない。スタツケリー博士は、鈴は貴族を表し、ハートは牧師、木の葉は紳士、團栗は百姓を表すもので、點札の二に記されてあるカード製造者の紋章、その他のことから考證して、十五世紀のものかといふ。圖は團栗印。

第九圖 シヤル、六世の爲に畫きたるものといはれたるカードの圖

圖は佛國愛書家協會でつくつた、シヤル、六世を慰める爲にグランゴヌールの筆になる、といはれてゐるカードの模寫繪札十七枚（愚者、皇帝、法王、愛人、運命、節制、正義、月、太陽、群星、隱者、吊下つつた人、死、審判）（第七參照）の中から拔萃したもので、正義の札。

第十圖 教育用カードの圖（十六世紀）

一組は本印、鈴印、玉印、壺印の四種よりなる。圖は本印の二。

第十一圖 獨逸人カード遊樂の圖

第十二圖 英國カードの圖（十五世紀初葉のものか）

第十三圖 獨逸カードの圖（一四九七年頃）

一組四種類（劍印、棍棒印、洋盃印、貨幣印）よりなる。洋盃印の代りに柘榴印を用ゐることもある。各種に繪札三枚（王、皇后、兵士）及び數札十枚あり、合計五十二枚よりなる。銅に彫りつけたもの、甲は洋盃印、乙は劍印、丙は貨幣印、丁は棍棒印。

第十四圖 佛蘭西カードの圖（十五世紀末葉）

第十五圖 バヴアリヤ貴人夫妻カード遊樂の圖（十六世紀初葉）

第十六圖 葡萄牙カードの圖（一六九三年）

一組四種（洋盃印、貨幣印、棍棒印、劍印）各種に王、女王、乘馬者あり、圖は四種類の乘馬者を示す。圖にある文字 OC, OD, OB, OS, はそれ〴〵洋盃、貨幣、棒棍、劍をあらはす。

第十七圖 カード入れの圖（十八世紀中葉のものか）

圖にかいてある文字は、

Cartas finnas（西班牙語）faictes par（佛蘭西語）Jean Hanovou Y.(Y は西班牙語では and の代りに使はれる) Edwar

d Warman,=Superfine cards made by Jean Hauvola, and Edward Warman.

Edward Warman はカード賣人の名前であるらしい。

第十八圖　カード賭博をいましむる圖

第十九圖　カードよろしからずと教ふる圖

一六二七年サミユエル・ワードの「不幸なる哉泥醉」の扉畫にある木版畫にして、中央の二つの區劃により古今を對照したものである。昔にあつては聖書を開き手に槍を持ち、鐙に足をかけたる所をあらはし、今にあつてはカードと賽を示し、手にパイプとコクテール入の盃を持ち、足には絹製の靴下止をつけ靴に薔薇の花飾りをつけたる圖をあらはし、今昔の世相を示す。

第二十圖　スペードのクキーンの圖(十九世紀初葉)

獨逸のギユビクトといへる人木版におこせるもの、この札より現代繪札の樣式がはじまりしものかともいふ。

第二十一圖　ギエンナ繪カードの圖(一八一八年)

第二十二圖　奇術士アンダーソン・カード呼び出しの圖

所感斷片

正宗白鳥

井上博士の訓戒

文學博士井上哲次郎氏の名と風丰（ふうぼう）とを思出すのは久振りである。

この頃、氏がその著書のうちに、神器に關して不謹愼な言辭を弄してゐたことが、世上の問題にされて、氏はつひに、すべての公職を抛つて隱退蟄居の生活を送らねばならぬやうな境涯に陷つたといふ記事を、新聞紙上で讀んで、私は人間の運命の皮肉に感慨を催さざるを得なかつた。私の頭の中にある井上博士なら、國家と國體に關して不穩な文辭を述べたものに向つては、眞先に立つて懲罰の一石を投じこそすれ、自分自からそんな不所存な行爲を敢てしようとは、夢にも思はれないことであつた。私の知らない間に博士の思想は變つたのか。それとも、注意が行屆かなかつたゝめであらうか。

私が博士の名に親しんだのは少年の頃であつた。博士が「宗教と教育の衝突」を何かの教育雜誌に連載して、基督教が教育勅語に違反してゐることを、猛烈に指摘したのに對して、高橋五郎氏が「國民の友」誌上で、基督教のために極力辯護の筆を揮ひ、博士を僞哲學者と罵り、曲學阿世の俗物と呼んだことを、私は記憶に深く刻んでゐる。今思ふに、當時の基督教徒には、新奇の思想を珍らしがつて歸依してゐたのに過ぎない者が多くて、鳩の如く柔順でこそあれ、決

して井上博士などの迫害に價ひするほどの頑迷熱烈な妄信者ではなかつたのであつたが、博士は彼等を國家と相容れざる者の如く取扱つてゐた。年少にして外來の宗教に心を惹れてゐた當時の私は、高橋氏の駁論を痛快視しながら、井上氏に憎惡を感じてゐた。博士が哲學者としてどれほど學殖が深く見識が高かつたか、私は全く知らなかつたので、卑俗な一學究として、その人となりを想像してゐた。

しかし、その實、當時の官學の教授連のうちでは、博士の如きは、書齋から街頭へ出て、世と戰ひ世を教へる勇氣と親切とを有つてゐたのであらう。それに、博士は一種の文藝趣味を有つてゐたので、その文學觀や文學的製作は、明治初期の官立大學の臭氣を帶びた產物として、明治文學研究者の一顧を價ひしてゐるのである。博士は十年代にはじめて新體詩といふ名目を以つて世にあらはれた一篇の詩集に幾篇かを寄稿してゐた。「阿蘇の山里秋ふけて、眺め淋しき夕まぐれ、いづくの寺の鐘ならん、諸行無常と告げ渡る」と云つた調子の「孝女白菊の歌」は、落合直文氏の作として「少年園」誌上に揭げられてゐたのを、私は愛誦してゐたのであつたが、その新體詩的長歌は、井上哲次郎氏原作の漢詩の和譯なのであつた。ところで、私は後で原作の漢詩をも讀んだのだが、「阿蘇山下荒村晚、夕陽欲沈烏爭還、無邊落木如雨繁、………鐘聲遠」云々の詞句が、和譯のそれよりも一層興味深く感ぜられた。私などの年齡で、漢文の素讀から文字を習ひはじめた者は、漢文調漢詩調について一種の藝術的快感を覺えるやうに習慣づけられてゐるのである。私は巽軒博士の阿蘇山下の詩と、鷗外氏一派合作の「於母影」に收められてゐる鬼界ケ島の漢譯詩とを、どれほど愛讀したことであらう。ことに後者の「江南四月草萋々、千山花落杜鵑啼、春色已歸人未返、暮雲遶樹魂轉迷」云々のあたりは、吟誦するたびに少年らしい哀愁に心腸を浸してゐた。言語と文字とに關する我々の愛着は根本的のものであつて、漢字全廢ローマ字採用が實行された時には、我々はいかに人世の落莫を感じることであらうか。

詩作家であつた博士は、在來の和歌について一見識を有してゐて、「國民之友」誌上で滔々とその所感を述べてゐた。それは一種の變痴戯論と云ふべく、古今集中の「鶯の凍れる涙今日や解くらん」を許して、鶯が涙を出す譯はないと云つたり、鶯が鳴かなければ「春來ることを誰れが知らまし」といふ和歌を許して、鶯によらなくつても、春の來ることは分ると云つたりしてゐた。つまりは昔の歌人が科學思想がなくつて、タワイのないことを云つてゐたのを難じたのであつた。一部の論者が、今日の文學に社會科學思想の缺乏してゐることを非難するのと、多少似通つてゐる。

私は、讀賣新聞記者として實世間に觸れるやうになつてから、雜誌や書籍の上でだけ接してゐた官學の諸先生を目のあたり見る機會を得るやうになつたのだが、井上博士にも、その自宅に於て親しく風采に接して教を受くることを得た。……ところが、それが極めて間の惡い場面をつくつて、記憶に殘るやうな會見として終始したのであつた。私は二十年後の今日なほ、小石川の博士の邸宅の階上で、長大質素な机に向合つて、諄々と私を說諭した博士の學究の權化見たいな面貌と言語とを、明瞭に思浮べるのである。

その頃、私は、新聞記者氣質として、無思慮にも、官學の諸教授に對する人身攻擊的品評を、數十回に渡つて試みてゐた。腹の中には毒を持つてゐたのではなかつたが、その筆鋒は粗暴で、時としては陋劣視さるべきものがあつた。井上博士をも、ある一部の世評に習つて、頻りに曲學阿世の哲學者呼はりした。

匿名でそんな論評を續けたあと、私は社命によつて、或る記念號に寄稿を依頼すべく、博士を訪問した。すると、博士は寄稿の諾否を告げる前に、私に向つて、例の惡評論の攻擊をはじめた。私は默つて謹聽してゐたが、攻擊の口調は次第に烈しくなり、それがまた何時果てるとも知れなかつたので、私は辛抱し切れなくつて、「あれはみんな、わたくしが書きました」と白狀した。

「あゝ、さうですか。それは存じませんで」と、博士は意外に感じたらしく云つた。しかし目には微笑を浮べてゐた。「あゝいふ事を書くのは、あなたの將來のためによろしくない。N博士が金錢上不純な點があるやうに惡く云つてあつたが、あの人にはあの人の主義があつて、金錢に關することは明晰に處理する方針を取つてゐるのだから、他から非難するには及ばない譯です」と云つた調子のお說諭であつた。

前後二時間にも渡る面談の間には、私も多少は辯解的放言を試みた。「あなたはどうも腦がよくない」と云ふのが、博士の結局の訓戒であつた。私は一生のうち、最も神經過敏に惱まされてゐた時代であつたのだから、博士の觀察はあるひは的中してゐたのかも知れなかつた。私は博士の家を出ると、ホツと息を吐いた。

その後、二十餘年、私は博士の著述を一行も讀んだこともないし、博士の顏を見たこともなかつた。……あの時の博士の訓戒を馬耳東風と聞流して自省するところのなかつた私も今度、博士が蟄居隱退するに至つた消息を、新聞で讀んで、自から考ふるところが少くなかつたのである。博士の痛切なる訓戒は、二十年前のあの時に私に與へられたのではなくつて、二十年後の今日に於てはじめて私に與へられたのである。

生存競爭

文壇に緣のないある知人が、私を訪問して半日を過した間に、雜談に倦んだ果ての暇潰しに、座側の新刊雜誌を見てゐたが、「新潮」をことに興味ありげに飜して、その讀後感として、「文學者もなか／＼煩いものだね」と云つた。それは通り一遍の感想に過ぎなかつたのだが、私はその言葉を緣として、不斷自分が文壇の波に浸つてゐるために、ともすると氣づかないでゐることを、新たに感じた。「新潮」といふ雜誌は、文壇の一面を覘ふには最も便利な雜誌であるが、そ

の十二月號を手に取つて見ると、文學者とても、決して閑日月を樂んではゐられないことがよく感ぜられるのである。

私たども、自己の生涯を顧みると、文壇の風波を淩いでよく今日に至つたものだと、感傷的な氣持にさへ襲はれる。自分で、も一度かういふ生涯を繰返さうと思はないばかりでなく、年少の徒が文學の社會に身を投じることを、危かしく、いじらしく思つてゐる。人間は生きてゐる限りは、何處にゐても、運命に飜弄され生存競爭に惱まなければならないのだが、文學藝術の社會だつて、決して風流平和の別天地ではないのだ。

「新潮」十二月號の文藝時評欄に於て、宇野浩二氏は、宮地嘉六氏の近作「累」を激賞してゐる。室生犀星氏も推讃してゐた小說であつて、私もそれを佳作として認めるに躊躇しないのである。私は數年前に、宮地氏のある、可成り長い小說を讀んだ時から、作家としていい素質を持つてゐることを知つてゐた。しかし、「累」を室生、宇野氏などの云つてゐるほどの傑作であるとは、私は信じ得ない。……私が、この小說のことを持出したのは、過分の好評に反對しようとするためではなくて、文學藝術の鑑賞は、傍から見たら分に過ぎると思はれるほどに惚込むやうでなければ、面白くないと感じたゝめである。過去の藝術品が時代によつて毀譽褒貶に動搖の生じると同樣に、今日の作品も、時と場合と人とによつて、高く買はれ過ぎたり、低く値踏みされたりするのを例としてゐる。そこが、藝術家に運不運のある所以であり、他の窺ひ知られない苦しみと喜びとのある所以である。

藝術家によつて現はされた眞實

先日、「大阪每日」を見ると、その文藝欄に於て、森田草平氏は藤村氏「嵐」を評してゐた。衆口一致「子供に對する

親の愛情がよく描かれてゐる」と讃美してゐるのに反對して描かれたのは形の上ばかりで、內容が充實してゐないといふのが、草平氏の論旨で、氏はそれから說を進めて「自己の眞相をも寫すことも出來る。妻の眞相を描くことも出來る。親のことをも死後には充分に描き得られるかも知れないが、子供の身については、眞相の曝露を敢てし得られるものではない」と云つてゐたようであつた。如何に冷靜な客觀的態度を持してゐる作家でも、自分の子については用捨のない描寫を試みるには忍びないであらうといふ意味のことを、氏は述べてゐたようであつた。氏はまた、藤村氏の作品は、形式は調つてゐても、中味はお芝居であると概括的な論定してゐたように、私は記憶してゐた。

私は、大變面白く草平氏の短い感想錄を讀んだ。藤村氏の作品評については必しも同意しないのであるが、自己及び自己の周圍を如實に描いてゐると云はれた作品が、案外肝心の眞相に穿徹してゐないのぢやないかと、この頃私が痛切に感じてゐることを、草平氏の說を讀むとともに、私は新に強く感じた。明治以來の自己告白自己懺悔自己觀察自己描寫の小說として、文壇に知られてゐる幾多の作品を思出して見ると、あのくらゐなことで、自己を底の底までさらけ出してゐるつもりなのかと、滑稽に感ぜられるものが少くない。あれでは、文壇の常識に於ては許される範圍內をうろついてゐる妥協的自己告白、妥協的自己描寫に過ぎないのではあるまいか。

子供の事を寸毫の斟酌なく描き得られないのみならず、如何なるモデルを採つても、それに對して何等の讓步もしないで、徹底的にそのモデルの眞相（たとへ、作者が知盡してゐるとしても）を描くことは、作家として極度に困難を感じる筈であると、私は確信してゐる。作品批評の際の徹底は、多くは近來の文學用語としての徹底で、徹底といふ文字本來の意味とは趣きを殊にしてゐるのだ。藝術を假象の世界の創造とするのは、舊い美學の定義であつて、自然主義勃興期以來、文學は忌憚なき眞實の描寫であるとされてゐるが、この頃の私はそこに疑ひを挿んでゐる。たとへば藤村の

「家」の如き、私は大なる興味を寄せて讀み、人生上の知識に於て啓發されるところも少くなかつたのだが、あの中に現はされてゐるいろ〳〵の人物は、作者が實在の人間から刺戟を得て、それ等の人物の言語行動を種として、作家自身が感得した幻影であつて、私が「家」のモデルに直面したなら、藤村氏作中の人物とは餘程異つた印象を得るに違ひないと思つてゐる。

無論作家自身が、あくまで自己を材料とした他人の眞相を追窮して描寫せんとするのは、當然の心掛けであるが、讀者や批評家がそれをそのまゝに受入れるのは輕卒である。

それについても思ふ。由來藝術には、草平氏の所謂「外形が眞相で內容がお芝居である」ものもあるし、外形がうそらしくて、內容に人生の眞實のこもつてゐるものもあるらしい。……自己の日常の行動を端から端へクド〳〵と書ならべて、それを人生の眞實として、能事終るのなら、人生の眞實描寫くらゐ氣樂なことはないのだ。人生の記錄にしても、人生の幻影にしろ、我々が今までやつて來たやうな程度の者は、藝術として甚だ淺いものであつたのぢやないかと、この頃の私は思つてゐる。

公孫樹文學

新村出

老樹名木に關する傳說は多いが、古く日本の文獻に公孫樹はあらはれてゐない。古い所の文學にも歷史にも出て來ない。それゆゑ日本の古代にはこの木は存在しなかつたといふのは早計であらうけれども、この文化樹木ともいひ得べき樹木が人に注目されなかつたとすれば、たとひ持てはやされなかつたにせよ人から全く顧みられなかつたとすれば、或はこれを中世の移入植物ではないかと疑ふのも無理はない。支那にしても、古典にも本草にもあらはれず、やうやく宋の詩文畫譜などに出てくるくらゐであるから、日本の古書に見えないといふのも不思議はない。唐代の事柄として後世の書にみえてゐるけれど、直接に當時の物としてあつかつた詩文では北宋もよほど後にならぬと鴨脚樹はあらはれて來ない。文選の賦によんである平仲などといふ樹がそれだといふ人もあつたが確證はない。明末の李時珍の本草綱目に、鴨脚は江南に原生し宋初始めて入貢せらるとあるので知られるとほり、少くとも江北には歷史以後古くこの木がなかつたらしく思はれる。歐陽修や梅堯臣の詩にもさういふ趣がみえる。梅堯臣の詩に、北人見鴨脚、南人見胡桃、などとよんでをり、歐陽修の詩に、鴨脚生江南、名實未相浮、絳囊因入貢、銀杏貴中州とうたつたのでわかる。本草では元の時の食物本草日用本草あたりから始めてこれを登錄してゐるのである。宣和の畫譜にこれをゑがいた畫圖もあるくらゐだから、北宋の中ほど以後には珍重せられてゐたことは疑ない。他日支那の銀杏のことを詳説しようと思ふから、そのをり

に譲ってこゝには省いておくが、とにかく古典的植物ではなかつたのである。古生物學上の話は別問題であるが、歴史時代文學時代に於て、この木が支那で北宋の中期すなはち西暦第十一世紀頃まで文獻にあらはれて來なかつたとすると、日本の王朝文學に出てゐないとしても格段怪しむに足らないわけである。

萬葉集のチチの實をイテフの實すなはち銀杏とする說もあるが、古人の多くも亦私もそれを否定した。その語源を一葉（イチエフ）より起るとなす說はもとより採るに堪へないが、鴨脚の近古音ヤーチャォに擬する考も直にこれを肯定することは出來ない。さりとて國語として說くのも隨分無理がある。異朝より來たなどと說く牽强な語原考もあるがこれまた論外である。とにかくイテフの語が漢字音から出たやうな氣がすることは爭へない。字音の語でも、キチカウの、リウタン（リンダウ）の、スロ（シュロ）のと歌や雅文にとられてゐるのであるから、イチヤウ又イテフだとてもその語形が歌文から全く斥けられるといふ筈はない。但しこゝでは語原論に及ぶことは略して、これも亦他日を期するのである。

枕草紙の「木は」の段に公孫樹のことが見えぬのも不思議はないが、棕梠にさへ「すがたはなけれどすろの木からめきてわろき家のものとはみえず」と書いてゐる位だから、若しその木を見たとしたら淸少納言があのきはだつた黃葉樹を閑却するわけはないやうに思ふ。さりとて「風は」の段に「九月晦十月の頃、空うち曇りて風のいと騷がしく吹きて黃なる葉どものほろ〳〵とこぼれ落つるいとあはれなり」といつたなかに、イテフがあつたとは想像出來ない。後世風俗文選や鶉衣には、花のなき草木の譜はあいにく擧げてなく、俳句としては元祿より、和歌としてはぽツつり幕末に、やつとこの樹木がよまれるやうになつたのは、思ひの外なことであつた。されば幸田露伴氏をして明治の三十二年に、「世に忘れられたる草木」九種の一つとして、かういふ歎聲を發せしめたのも無理はない。

銀杏樹は其實こそ厭はしけれ、落葉の趣きまた比無くめでだし。野寺の跡の晉緩く渡りて翁も堺に靜まるころ、墨染の夕べの暗さは漸く見はるかすほどの地を罩むるが中に、此の樹の幹あらはに聳え立ちて其蔭の落葉の敞へるあたりのみは、猶月の光も殘れるかと疑はるゝまで明るく黃ばみ渡りて暮れのこれるさま、美しといふべきなり。

明治も三十年以後にならぬと、この古代的にして而も近代的なる樹木はたゞ俳句を除き文學のうちには好遇されなかつたといつてもよい位である。薄田泣菫氏の有名な長詩「公孫樹下にたちて」が作られたのが三十四年十月、蒲原有明氏の「公孫樹」と題する四行六節詩があらはれたのが三十七八年ころである。三十九年には、夏目漱石氏が「趣味の遺傳」のうちで、駒込寂光院の化銀杏についてこの木の空前の描寫をしたのは、銀杏文學の上に最大の寄與であつた。

明治三十年以前に於ては、二十七年に志賀重昂氏が名著日本風景論に、日本の秋を叙し、また特に九州の秋の雜色をゑがいた中に、公孫樹の美をたゝへたところの文章を忘れてはなるまい。長短の差はあれ露伴の文とあはせ見るべきである。大正四年九月支那に於て大谷光瑞師が草せる「秋色」の一篇に於て、「黃葉の美は公孫樹を推す」と題する一節が注意された。

大正期に入れば、或は長詩短歌、或は小說紀行、書名にも附けられ、頌詞にもあらはれてくるといふ有樣である。與謝野夫人は牧野英一氏と共に銀杏の名歌の數々をよんだ點について知られ、川路柳虹氏が大正十年銀座の柳に對する愛着より、植ゑかへられる銀杏樹を罵倒した俗謠は舊東京の思出草として忘れられまい。西條八十氏が、

十月の朝の辻に
並び立つ四本の銀杏

をうたひ出して、その末をば

十月の朝の空の
かゞやける金の四行詩

と結んだ手ぎはを私はたゝへたい。日夏耿之介氏の「地にうごめく公孫樹」は人の知るところであるが、京都の新詩人竹内勝太氏が、その第一詩集「光の獻詞」に於て、「星夜の銀杏樹」と、「冬の想ひ」と、第三詩集「林のなか」に於て、「明るい風」と、いつもこの樹をよくうたつてゐるもの は特筆すべきである。殊に「星夜の銀杏樹」の一篇の如きは、雄渾莊重の氣人に迫るものがあり、私の愛誦措かざる所である。

立ち騷ぐ木の葉は
鋼鐵の如く火花を散らし
搖らめきながら
焰を吐いて
黑い銀杏樹は眞つ直ぐに
底もない夜の空を刺し貫いてゐる、
惱みか哀願か、
そもそもこれは絕間ない憤りか、
否、
私は聽く、
あらゆる物と戰ふ意志を、無限の意志の戰ひを。

とうたひおこし來つて、「ああ、そこに溢れる私達の精神よ、光、光、光……」と收めた雄篇は、公孫樹詩の絶唱であらう。

私は大正十四年晩秋に草した「ゲーテが寄銀杏葉の詩」の一篇に於ては、この大詩人の名句を譯出することをさしひかへたが、ゲーテ全集に、西東詩篇の全譯が出版されたので、あの兩岐銀杏葉の譯を見ることが出來たのはありがたい。そのうへゲーテの古詩に對して作つた小森氏の「銀杏の葉」と題する新しい詩もあらはれた。

古き鏡花の小說や綺堂の講談はあげるにも及ぶまいが、豐島氏の「公孫樹」、岡田氏の「銀杏の樹」、これらの二作は私の一讀を怠らなかつた所であつた。茅原華山氏の「銀杏の葉蔭」は物好きな私をそゝり、金井紫雲氏の「公孫樹禮讃」には私の感興は大いに動された。「東大寺のかたはらを正倉院にかよふ道、大木の公孫樹の葉、黃金を散り敷きたる道」を思へる竹柏園主人、「美しい朝日がこゝばかり鴨脚樹の葉がまるでお寺の瓔珞の樣にかゞやいてゐるわ」と洛北の秋を語る九條夫人。かゝる詩境を擧げ來たれば際限がないから大方にとゞめるが、とにかく大正このかた十數年この樹の文學上の題材として用ゐられることはますます盛である。

爐邊叢書の石川縣能美郡民謠集に、「一で銀杏の木、二ではとこ、三でさくら、四でしでの木、五で五葉の松」とかぞへたてるのもかはゆい。同じ叢書の越後三條南鄕談のうちの手毬歌に「一つがらがら、二つ山椒の樹、三つ蜜柑の樹、四つ柚の樹、五つ銀杏の樹」とあるのも異曲同一の民謠である。對馬の琴といふ地の大銀杏は昔から名高いが、その木についての俗謠に

琴の公孫樹は對馬の親木、枝はみね浦、葉は……。

といふのがあると、或る本で見かけたが、あいにく謠の全文を知ることが出來ないのは遺憾だ。銀杏に關する二三の俗

諺もきこえ、之に關する幾多の傳說は諸國に存するが、いづれも後日を期してこゝには述べない。

京都下賀茂に鴨脚氏がある。同氏の家名の由來は私の一とほり調べたところでは未だ明かでない。天明時代の江戸の狂歌師に銀杏滿門といふ者があつて、狂言鶯蛙集および德和歌萬載集に多くの狂歌が載せてある。その本名や略傳は知らないが、右の狂歌師の姓名は、チチノミノミツカドとよむらしい。元祿の俳人に銀杏と號した者があつて、その句は句兄弟や末若葉や焦尾琴に出てゐる。多分其角の門人でやはり江戸人であらう。久留米藩の儒者に井上鴨脚といふ人があることは、武藤長平氏の西南文運史論に見えてゐるが、私は未だその傳を詳にしない。神田錦町の氷屋の娘で流れ〳〵て仙臺に藝妓をしてゐたといふ銀杏屋の銀次といふ者のことを人から聞いたことがある。姓氏屋號別稱などにしてゐたものもあつたのだ。近きころの新作に銀杏屋の娘と題する講談を讀んだこともあつた。

家紋および文樣、その意匠に用ゐられた場合は甚だ多いが、これは文學以外であり、かた〴〵別に詳說する機會があらうと思ふ。またイテフを髷の名前にしたり、草木生物器物食物などの名にも應用したりする例が多々あるが、それも一一列擧しない。たゞ鴛鴦の銀杏羽などはいかにもよく似てゐるのに感心したことがある。それは近きころ親しき或る家の令孃が結婚の披露宴に臨席したとき、花嫁花婿のすぐ前の卓上に、をしどりのつがひの飾物がおかれてあるのを見たところ、いかにも聞きおよぶイテフ羽が葉脈もそのまゝと思ふばかりによく似て見えたのを、私は興味深くおぼえたことを附記しておきたい。

私の考へでは鴨脚樹は中世支那又は朝鮮から渡つたもの、即ち先づ銀杏いはゆる白果として輸入されて日本の土に實生として芽生えたものではないかとも思はれるが、實際古木の年輪でも調べた上でなければ確定は出來ぬこと無論である。尤も近畿地方に存ぜずして日本の東西の邊陬の土地には古來生長してゐたとも考へ得べきでもあらう。植物學者に

從へば、自生には既に亡くなり人文樹木として生存するばかりだといふが、一友は山間に自生したのを見た人があると教へてくれた。いかゞであらうか。或る女歌人が、

　　亡びゆくものとも見えずおほからに金色したるひともと公孫樹

とうたつたのはまことに同感である。

日本の五山の詩僧に鴨脚の詩句を見かけぬのは、私の眼の及ばぬためもあらう。彼等の宗とした黄山谷が人の宣城に之くを送つた詩の一句に、霜林收鴨脚といふのがある。これは銀杏の果をいつたので、鴨脚は葉を稱したのであるを轉用したのである。山谷に詩を學んだ陳後山には、之に擬ねて霜林堆鴨脚といふ句がある。これは落葉をいつたもので字の本義である。宣城といふ縣は安徽省の中で、江南に位し、宋には寧國府、今は蕪湖道に屬する。南京よりはずつと南方にある。銀杏の都會としてきこえてゐる。もと宛陵と呼んだ、銀杏詩人梅堯臣はこゝの人であつた。

蘇東坡の著だといふ物類相感志といふ書がある。元祿三年の和刻本もあり、靈元法皇もそれを乙夜隨筆に抄出あそばされたことがある。銀杏のことも散見する。雌雄相感のことがその中に見えてゐるが、後世の本草書類にもそのことは屢々あらはれてくる。平瀨氏の大發見とは話がちがふが、雌雄兩樹が相望めば乃ち實を結ぶといひ、或は雌樹水に臨んで影を照せば結實するとかいふやうな性の神祕がむかしから感ぜられてゐた。この側については、詩人のうちでは泣菫氏が「大樹の言葉」のうちの公孫樹のこの一點に觸れてゐた。（若山牧水氏の「樹木とその葉」の書中にては、イテフについての言葉はなかつたやうだ。）

東坡の物類相感志のうちに、猫兒の眼を以て時刻を知る歌を載せてある。子午は線、卯酉は圓、寅申巳亥は銀杏様、辰戌丑未は側て錢の如し、といふ諺である。私は銀杏様といふ文句に興味をもつ。イテフ様、日本でいふなら、鈴の様

とでもいふか。從つて銀杏の果實を眼の形にたとへたことがある。明の萬曆の末に成つた汝南圃史によると、吳俗みなこれを鴨眼と稱し、又白銀とも云つたとある。

銀杏のことを支那では仁杏ともいつた。鴨脚は葉がアヒルの脚に似てゐるところからいひ、公孫樹は公が種ゑて孫の代にはじめてその果を食ふことが出來るからいふ。近世白果といふのが通稱のやうだ。この仁杏といひ白果といひ白眼といひ鴨眼といふのは、元代の食物本草から既に見えた稱呼である。明代には又白杏ともいつたことがある。支那では火棗木などと呼んだ例がある。方以智の通雅等に出てゐる。また枰ともいつたとある。但し最後に擧げた一二の稱呼についてはなほ考證を經ねばならぬが、それは他日に讓つておく。

六號室

女の靴下

秦豊吉

青鞜

日本で女の靴下が問題になつた事は、今迄にたつた一度あるやうである。それは今からもう十年以上前に、平塚らいてうさんが「青鞜」といふ雜誌を出されて、婦人運動の目ざましい先驅をされた時だ。「青鞜」といふ言葉は鷗外博士の命名のやうに聞いてゐたが、勿論「青い靴下」の意味である。日本の社會で女の靴下が幅を利かした最初だらうと思ふ。

「青い靴下」といふ言葉は、獨乙では昔警察の小使や下役人が青い靴下をはいてゐたのから、探偵や間者の事を「青靴下」といふやうになつた。シツレルの「群盜」の中に、「惡魔同様に恐るべき青靴下」といふ台詞がある。それは元來が十八世紀の半ば頃に英國から起つた言葉で、初めは骨牌遊びはよしてもつと高尚な精神的な談話を交換しやうとする男女のソサイチイが出來て、その中心になつたスチリングフリイトといふ學者が倫敦に出て來て、いつも外觀を構はずに青い靴下をはいてゐたに初まり、この團體を丁度英國に來てゐた和蘭海軍提督ボスカエンが「青い靴下の會」と名づけ、從つて學才に富んでゐるが顔のまづい女を嘲弄する意味に使はれたものである。

從つて十八世紀から十九世紀にかけて、かういふ女學者女哲學者女文士の「青い靴下」のポンチ繪が歐洲繪畫界を大に賑はした。その中で最有名で且傑作と稱せられたのが、ドオミエの四十枚から成るカリケチユアである。

靴下の美

女の青い靴下はさういふ侮辱の意味にも使はれたが、近代に至つては女の靴下が文化史の上に大に侮り難い勢力を持つてきてゐる。

まづ女の腓が男と違ふ著しい點は、その胴腹のやうなふつくりした丸みと、踝に近い邊の特別な曲線のしめくくりの二つである。この特徴を更に美しく仕上げるものが靴下で、その各種の技巧をこらした色合とぴつたりと肌に合つて高い處まで屆く形とはまさに女の第二の皮膚だといはれなければならない。靴下をはいた足が裸の足よりも一層刺戟的であるのは、靴下が一切の足の外觀上餘計なものを隱して單に細くくくれたしまりの好い踝の上と、腓のふくれ上つた恰好丈を強く印象させるからである。尤もこの場合にも下にはいた靴の形や色、着物の裾、下着のもつれ、その色合、靴下どめなどから甚しい印象の强弱の影響を蒙る事は勿論である。

靴下の色

そこで靴下の美はまづ足の形に密接な關係を持つてゐるが、靴下の色も女の足を愛慕する男には極めて重大なものである。甲は絹の靴下を愛し、乙は白い色を、丙は黒い色を、丁は赤い色を好むといふ、又或者は膝までの

ものを、或者は上腿部まで屆くものを、或者は肉が透いて見えるものを好むのである。肉が透いて見える爲には黑い色が一番好い。花や模樣を織り出したものは、到底一時の流行丈で、今迄にも何度も巴里や紐育ではやつた事があつたけれど、とても永續きしなかつた。ストリンドベルクが「痴人の懺悔」の中で書いてゐる處によると、この作者がある女に目を付けた點は、上着の裾を高く持ち上げた下から露れた腓と、白い靴下がぴつたりくつついた柔な足と、膝の下にしめてある美しい色の刺繡をした靴下どめであつたさうである。

健康と靴下

そんなやうに靴下と足は離す事が出來ないが、足に就いてもいろいろな說があつて、足が丈夫なら體も丈夫だといふ觀念から、足とは一物に考へられてゐる靴が體の丈夫な事に結びつけられ、更に進んで靴下と健康とが關係あるものに民俗上考へられるやうになつたのである。花嫁の足が丈夫になる爲に、花婿は婚禮の日に嫁さんに靴下をはかせるといふ習慣もあるが、瑞西には更に幸福なる新家庭を作る爲のまじなひに、花婿は女嫁の靴下をはかせる風習がある。同樣に花嫁が花婿に靴下をぬがさせると、決して足を病む事がないといふ。獨乙のオルデンブルクではいつでも右の靴下を先へはくと痛風のまじなひになるといひ、ボヘミアでは一晩中靴下をテエブルの上に置くと、足を折るといはれてゐる。

靴下と情欲

靴下がこのやうに婚禮の日の一風習に用ひられるやうになつてくるのも、靴下と情欲とを離して考へられない證據である。一體靴といふものが…………、それから靴下まで同樣の意味に用ひられるのが普通である。例へば靴下をはく事に土耳古にはこんななぞ〳〵がある。

「…………………………。
……………………………。」

和蘭語で靴下といふ言葉は、若い娘といふ意味にも使はれ、同時…………である獨乙語の靴下といふ字は「足を持てる股」といふ字から來てゐるので、……………………。從つて「…………」といふ隱語が出來てゐる。獨乙のブロッケン山に住む魔女の犬は「靴下的」(直譯して)であるといふ文句があるが、これは大…………てゐる意である。「ラウテルバッハでわたしの靴下を無くなした」といふ有名な民謠が獨乙にあるが、これは……つた事に外ならない。

そこで靴下を脫ぐといふ事卽ち他人の前で足を露す事が、一の情欲行爲又は性欲上の所有の意味に使はれる。東ロシアでは今でも若い娘が未來の夫を當てやうとする時には、「おいで、わたしの靴下を脫がしておくれ」といふ歌をうたふのである。中世の騎士時代の習慣から轉じてきて、ブラントオムの時代になると、色男は自分の新しい絹の靴下を初め色女に八日から十日ばかりはかせる風が起つてきてゐる。

靴下と惡魔

靴下が性的象徵である所から又魔よけにも用ひられる。性的象徵が惡魔を敗かす觀念は、日本を初めどこの國にもある話である。ウエエルスでは片方の靴下をひつくり返して左の足にはくと魔法を逃れるといひ、左の靴下を子供の搖籃に入れておくと、子供の魔よけになるといはれてゐる。

幸福の入れ物としての靴下

魔よけになる位の靴下であるから、何か好

い物を入れるには都合が好い。獨乙の中部南部では至る處にかういふ習慣がある。花嫁が婚禮にお寺に行く時に、その入口で靴下又は靴の中に錢を入れると、一生金に困らぬといふ。錢の代りに麻とか穀物を入れる所もある。もし人に知られないやうに麵かパンを入れると好い事があるといふ。ロシアの市民階級又は小貴族の風習には、婚禮の晩に兩親が自分の子供の新夫婦の靴下に、相互に金を入れておいて贈り合ふ風がある。お互に靴下を脫いで、性的に所有し合ふ意味である。

クリスマスのサンタクロスのぢいさんが子供への土産物を靴下に入れるといふ觀念も、これに近いものであらう。

「あら、あなた、あたしの靴下に何か入れて頂戴よ」といふのは、西洋のぢごくの古風な金のねだり文句である。

靴下と生産力

靴下の性的意義から進んで、生産の象徵にも成つてくる事は、足や靴の場合と全く同じである。初めて家畜を牧場に追ひ出す場合には、木を伐る斧を女の赤い靴下で包んで、小屋の閾に置いて、家畜に之を股がせるといふ風習があつたのは家畜によく子を生ませやうとするまじないである。

靴下どめ

靴下に伴つて、靴下どめも同じやうに性的意義を離れない。娘の靴下どめを解く、といふ事は、靴をぬがせるとか、前掛をとくといふ事と同じ意味に使はれる。女の靴下どめが自然に解けると、色男が女の事を想つてゐるのだといはれるが、獨乙では靴下どめの代りに前掛の紐で、前掛は獨乙…………………………………。

女の足や靴を愛慕するのがもつと進んできて、女の靴下どめに至つた話にこんなのがある。十九世紀の女であるがロラ・モンテンツといふユミックオペラ歌ひの美人がミユンヘンにゐて、これが鞭で男をぶつて快を貪る類の女であつたが、マゾヒストのバイエルンのルドキツヒ一世などもこれにひつかかつた男の一人である。ロラは美人であるのと、この怪奇な樂みとで愈々人氣を高くしたが、千八百四十九年にワルシャワに行つた時にこんな事をした。ロラは舞臺で踊り乍ら靴下どめをわざと落して、それを拾ひ上げて平土間の紳士諸君の中に投げてやつた。すると見物の紳士諸君はこれを大騷ぎして取りやりして、小さく引きちぎつた斷片を大事な寶物にして持ちかへつたさうである。またロラが大勢の前で食事をしてゐると、そこへ紳士の連中が入つてきて、その靴下どめを貰ひたいと申出で、その紐を今度は金の鋏で無數に小く切つて、その小な一片宛をその場の大勢にせり賣をして、夥しい金額に上らせ、これを恭々しくロラに獻じたといふ事である。

音の誘惑

兼常清佐

○

私の友人の中には婦人讃嘆家が隨分あります。女の學校に語學だの何だの敎へに行つて、そして、女は學問がよく出來るなんて事を眞顏で言つてゐます。もしそれが本當なら、世の中に女の學者や、女の文學家などが續々現はれて、第三者の私共にも、なるほどと言はせてくれる筈ですが、實際には一向そんな

けはいも見えません。婦人讃嘆家なんて手合は一體何と考へてるのかわかつたもんではありません。

處が音樂だけは確に例外で、女が相當な權威を持つてゐる樣です。女給や看護婦が男に勤まらない樣に、ソプラノやアルトの歌だけは、まづ女でないと出來ないでせうが、然し男にも出來るピアノやヴアイオリンでも、日本では女の腕が中々冴えてゐる樣です。これは確に不思議です。

在來日本では、音樂は女給や産婆などと共に女のやるもので、苟も男子のやるものでないとされてゐたのかも知れません。それで男の偉い人が現はれなかつたから、從つて女が幅をきかせてゐたのでせう。そして音樂の仕事といへば、多くは個人の演奏だけで、大管絃樂の指揮とか、大きなジムフオニーやゾナーテの創作とかいふ樣な事でなかつたから、まづどうやら女にも出來たのでせう。

西洋の音樂の歴史では女はどれほどの仕事をしてはゐません。音樂は科學や哲學などの樣に、やはり男の事業です。女はたかだか、出來上つてゐるものを演奏する位の事です。音樂だからいふ樣なものゝ、もし日本の科學や哲學が女に牛耳をとられてゐる位の狀態であると假定したら、それは實に悲しむべき狀態であらうと思はれます。

日本よりも遙に早く女を解放した獨逸でも今音樂界に女が貢獻してゐる處はさう多くはない樣です。歌劇の女優と、女聲の歌を除いたら、公平に考へてピアノにも、絃にも、ザウエルやクライスレルなどとその大を爭ふ女はまづなささうです。況や管絃樂の指揮や創作が女に出來ようなどとは、誰も信ずる人はないでせう。それに獨り日本の女だけは特別に音樂に惠まれてゐるとも見えません。日本の音樂界を女の濶歩に委せてをくのは、何としても男の罪です。

優秀な男が今日爭ふて科學や哲學の研究に或は政治や軍事や實業などにその一生を捧げる樣に、その程度に、やはり優秀な男でその一生を音樂に捧げるものが段々と出て來てこそ、殆めて日本の音樂界は、その他の學問や事業界の位置まで昇るでせう。

○

然し或る一人の優秀な青年の身の上を考へる事は、日本の音樂界といふ樣な掴み處のない物をぼんやり考へる事とは、私には大にその趣を異にします。私は、これまでに、

『あなたこそ音樂を以つて一生の事業とすべき人である』

さう言ひたい樣な青年諸君にまだあまり遇つた事はありません。もし單に、音樂がすきだから、といふ樣な事であたら青年時代を音樂學校などで過さうとする人があるならば、それこそ實に側で見て居られない危險千萬な話です。私なら、まづお考へになつた方がいゝと言ひます。

今の日本は音樂家諸君が考へるほどには、實際諸君を要求してゐない樣に見えます。諸君の畢生の努力も、多くは十分報いられずに終るかもしれません。音樂では、外の仕事をするよりも、まづ第一に生活の安定が得難いでせう。日本で唯一つきりの日本交響樂協會の會員にしても、文壇や畫壇の人々ほどに裕福な生活の資は得られないでせう。その外、演奏會の收入にしても、また演奏會を催しうる機會にしても、必ずしも豐富だとは言はれますまい。活動寫眞館やその他の娯樂場にしても、それが音樂を特に優遇しようとは思はれません。個人教授の弟子を取るにしても、それは誰にも安定した生活だとは言はれないでせう。世の人々は、大抵偉いと言はれた少

數の人の處に習ひに集ります。東京でその道の學校の敎師になるならば、それこそ一番安樂な、努力のいらない生活でせうが、その機會は言ふまでもなく、非常に稀れです。東京以外の地で敎師の生活をするならば、それはたゞ中等學校だけでせうが、そして或はそれでやう／＼生活は出來るかも知れませんが、――恐らくそれは東京での學校の敎師よりも更に進步のない退屈な生活であらうと思はれます。そして老境に入れば絕えず後進の人に脅かされなければなりません。

日本はまだ十分な熱心を以つて諸君を要求してはゐません。國政の任に當る人々や、國の經濟を料理しうる人々がまさか本當に音樂を理解しようとも思はれないし、また音樂を理解しようとする今の若い人々の經濟力は多くの音樂家の生活を保證するには遙に足らないものです。それでもなほ諸君は身を犧牲にしてその日本の音樂界の爲めに盡すと言ひますか。然し暖く着ず、飽くまで食はずに、抑も何の樂しい音樂でせう。また例へばベートヴエンの大ジムフオニーとその哀れな生活を考へるときには、誠に犧牲といふ悲壯な情は湧いて來ます。然し山奥の女學校ではやり童謠を敎へたり、葵館や芝園館でフオックス・トロットを彈いたりして、それで身を音樂の爲めに犧牲にしたと强いて揚言しても恐らく多くの人々の心を動かし得ないでせう。

音樂の一般の理解を進めるには、山奥での童謠も活動寫眞館の舞踏曲も、富豪の子供のパイエルのおあいても、みな非常に重要なものである事に勿論疑はありません。然しそれは男の一生の事業と稱するに足るかどうかは確に考へ物です。今の日本の有樣ならば、音樂は有產社會の人々や女などに讓つて置く方が安全です。日本での音樂はまだ男子一生の仕事とも思はれません。音樂界の地位も、當分、まづその邊で滿足するより外に別に仕方はありません。それが日本の國情です。

○

この世の中は何をしても中々安樂には渡れません。たゞ生活だけの問題ならば或は音樂に限つた事ではないかも知れません。然し音樂には、も一つ最後に天分といふ問題があります。恐らく音樂ぐらゐ天分といふ事に重きを置かれるものは、他にあまりないでせう。西洋では、音樂の大家は音樂の素質の遺傳を持つた家系からでないと出ない樣にも考へられてゐる程です。

音樂の素質の遺傳といふ事を眞面目に論じた日には、大低の日本人は始めから駄目だときまつてしまいます。それほど極端に考へないまでも、今日の子供の敎育は、音樂家を作るに必ずしも適してゐるとは言へません。音樂の敎育は、子供が日本語を覺え始めると同時に、も一つ外の日本語として、序でに覺えさせなくてはならぬものでせう。音樂の技巧は實に容易な事ではありません。私共が、年を取つてから、學校で獨逸語を習つても、到底完全には獨逸語は手に入りません。音樂の技巧もそれと同じ事です。完全に、自由自在に手に入れるには子供の時から仕込まなければなりません。女學校を卒業してそれからタイプライタを習つたり、中學校を出てそしてラヂオの組立を覺えたりするのとは、その間に大に難易の區別があります。音樂史に名を飾つた人々で、子供の時親の手からかうして母語と同時に音樂を仕込まれなかつた者は極めて僅です。音樂の素質の遺傳を十分に身に供へて產れて來た天才にして、なほこれだけの修養を積まなければなりませんでした。この修養なしには如何なる天才も、たゞ枯れるだけです。然し今の日本にこの事が望まれるでせうか。

子供の時に言葉と共に音樂を習はなかつた

人はたか〳〵學校生活を始めた頃、中學で英語を習ふ位の處か、或は高等學校で獨逸語を習ふ位の處で、音樂を習ひ始めます。然しその語學が本物の英國人や獨逸人の前ではあまり威張れない樣に、その音樂も實は甚だ手遲れです。まづ生理的に手遲れだと言へるでせう。そして更に心理的にも手遲れです。

音樂が若い人々の心に美しい夢をさゝやくのは、たゞ短い年月間だけです。音の魅力は決して長くは續きません。早晩、心は音の强い刺撃に堪えられなくなります。その前に、已に音樂に對する感覺は段々と鈍つて來ます。そして音樂の熱情は一場の夢の如くに醒めてしまいます。その時期は人々の性質や修養で違います。また人種によつても違います。然し必ず來るには來ます。それまでに音樂家は、ともかく完全な技巧だけは腕に仕込んで置かなければなりません。この時期は、日本人には、或は思つたより早く來はしないでせうか。そして今の日本人の音樂の修業はこの時期の割合に非常に遲すぎます。それでもなほ音樂に大成しようと思ふのは隨分の困難です。或は無理かも知れません。この困難を凌ぎ、この無理を押し通さうとするのは餘程の決心がいります。これは、まづ考へた方が安全です。

矛盾した事を言ふ樣ですが、やはり今の日本の有樣では、音樂は出來る出來ないに係らす、とにかく女などにまかせて置くのが一番の早道です。有爲な男が手を出すほどまだ見込のあるものではありません。然し女の天地は別にあります。或る娘が音樂に大成しなくとも、實はこれでもよく〳〵です。若し或る程度の音樂家になれたら、それこそ實に社會への貢獻です。國家の慶事です。私は斷じて婦人讃嘆家ではありませんが、日本の音樂啓蒙の仕事だけは熱心なる期待を女の上にかけます。

○

音の誘惑。――それは實に身を亡ぼすものです。昔の英雄はジレーネに迷はされない樣に身を帆柱に縛りつけました。今の日本の青年諸君にも正にその覺悟が必要です。我こそは大なる音樂家に、と思ふのは、大低の場合はたゞ音の誘惑です。夢の多い、弱い青年の心にはそれはローレライの唄、ジレーネの笛の樣に、實に堪え難い誘惑かもしれません。そして、そしてそれには演奏場裡の華やかな成功へのあこがれもあります。その上にこの音の誘惑は、他の多くの誘惑ほどに、また道德的な惡名が着せられてありません。音樂の知識のない兩親は、却つてこの子こそは音樂の天才だと思ひ込みます。そしてその子を誘惑の手の弄ぶまゝに任せます。この上もない危險です。今日の青年諸君は音の誘惑に打勝つだけの意志を必ず養はなければなりません――。

私はまだ人に教訓を垂れるほど老ひ込みはしません。これはたゞ歳末の雜感です。

座談的映畫論

鈴木俊夫

映畫は、一つの新らしい娯樂の對象としてのみも存在の理由は十分にある。

映畫は新らしい夢を盛り、潑溂たる刺戟と、素晴しい魅力とを以つて人々の胸に迫り、人々の心の底に新しい情感を湧きたゝしめる。單にそれだけでも映畫の存在は充分にある。

演劇の飜譯、小說の單なる映畫化であつて

も、映畫としての表現様式の魅力は、夫等の主題若しくは取扱はれてゐる性格、或は物語に、更に一の魅力を加えた。

更に、映畫は人間の夢幻想、像の世界へまでも這入つて來てゐる。

映畫の魅力は、その表現の限りなく自由である、といふ點にある。

映畫は、人間の空想を現實にし、これに實感を與へた。

これが映畫の本質的な魅力である。

映畫は、人間の感覺に、直接に觸れる一つの對象として、特種な魅力を持つてゐる。

映畫は、人間の感覺に觸れる對象として、演劇よりは更に時間的、空間的に自由である。

映畫には音がないだけである。

が、映畫の秀れたる表現様式は、人間の感覺に音をも傳えることが出來る。

映畫の映畫としての價値は、實にこの表現様式にあるのである。

映畫が單なる描寫に過ぎなかつた時代には、映畫の特性は忘れられてゐた。

フイルムを借りての或る一つの記述に過ぎなかつた時代には、映畫は一つの藝術としての存在價値は認められてゐなかつたのである。

現在に於ては、映畫は人々の感覺に音を傳え、その律動的な場面の流れは、見る人の心に音樂的な快感を與へてゐる。

映畫の存在は新らしい單なる興味の對象としてのみでは無く、藝術の一分部に目醒しくも突入したる、一つの様式藝術としての存在でもある。

映畫のみの持つ表現様式が、完全に或る個性を持ち、一つの生命をさえ持つことに依つて、映畫には藝術としての價値が生れて來たのである。

監督は、一つの生命を映畫に創造する藝術家である。

彼は一つの個性を、彼の作る映畫の上に創造する。

彼の作る映畫には、技巧は問題ではない。

しかし、彼の映畫は、映畫として全く價値がなければならない。

映畫の價値は、決してその映畫の持つ主題にあるのでもなければ、又物語の筋にあるのでもない。

たゞ如何に映畫としてよりよく取扱はれたか、如何に映畫としてよりよく表現されたか、と云ふ點にあるのである。

映畫が單なる記錄であつては、藝術として何等の價値をも認められないのである。

一つの事が如何に緻細なる技巧を持つて描寫し盡しされてゐても、そこに何等の精神が描き出されてゐないときには、それは少しも價値がない。

映畫に於ける精神は映畫を作る人即ら監督に依らなければ生れて來ない。

この精神のない映畫、精神を創り出し得ない監督に依つて作られたる映畫には、價値がないのである。

ジエームス・クルーズの作品の「カバード・ワゴン」が、アメリカの歴史の一部の、映畫として記述に過ぎないものではあつたが、彼はよくその物語に精神を與へた。

同じ様な題材を取り扱つた映畫が、單なる西部劇で終つたのに反して、彼の作品がよく人々に深い感銘を與へ得たのは、この點にあるのである。

チヤールス・チヤツプリンは、彼の心を彼の映畫に盛つてゐる。

彼は彼の思想を映畫を透して物語つてゐる。

彼の映畫が、人々に迫るものがあるのは、彼の個性が映畫を通じて見る人々の胸に働きかけてゐるからである。

彼は、映畫の爲に生れて來た樣な人間である。

彼の精神は彼の映畫のどの一部分にでも現はれてゐる。

彼の個性は彼の映畫を全く支配してゐる。

映畫は、彼に依つて確に一つの完成を意味してゐると云つてもよいであらう。

彼の持つ映畫の樣式は、確に一つの生命を長く保つであらう。

彼の題材の取扱ひ方は確に一つの模範である。

彼の取つた形式は、この後も多くの人に依つて存續されるであらう。

カール・マイヤーの「最後の人」は、映畫の表現樣式としては唯一のものであつた。

彼は或る人間の生活を取扱つて、最も完全なる映畫的描寫を、勇敢にもなし遂げたのである。

未だ且て試みられなかつた、一つの映畫の表現樣式は彼の創造する所となつた。

フリッツ・ラングの素晴しき作品「ジークフリード」は、民族精神を描いたものとして、映畫界に生れ出でたもの中での最大なるものであつた。

彼はよくゲルマン族の創始時代に於ける傳説的興味の中に、よくその民族の精神を生かした。

これは、正しく彼の偉大さを語る最もよき例である。彼が如何に映畫のあらゆる技巧、樣式、凡てを已れのものとしてゐるか、彼が映畫の本質を如何に理解してゐるか。と云ふよき例である。

彼の精神はこの映畫の中に現はされたる精神に他ならない彼は創り出さんとしたる精神をよく現はし得た。

ジエームス・クルーズのそれと好一對の興味がある。

アメリカは映畫を生んだ。

しかし、アメリカの映畫は一つの娛樂としての對象及、映畫を商業的に價値づけた點では世界の凡ての國に秀れたが、映畫が藝術としての價値を持つ可く、あまりに見る可きものがなかつた。

アメリカの生んだ唯一の映畫藝術家はグリフイスであらうか。

彼の持つ人道主義的色彩、又は彼の境遇がわざわひしたる商業的映畫作家の態度とを取り除いたならば、彼ほど彼の個性を映畫の凡てに持つ監督は他にないであらう。

彼は俳優を自分の個性の前には一個の人形としか取扱はない。

彼のあらゆる映畫を通じて、如何なる場合も彼の映畫には、一つの型がある。

リリアン・ギッシュもカロル・デムプスターも彼の前には少しも變りがない。

二人の容貌こそは違つてゐるが、彼の映畫の中に於ての彼の描き出す人物となつては、そこに彼等の差も認められないのである。

グリフイスは彼の個性を彼のどの映畫にも殺してはゐない。

彼の映畫のどの部分にも、彼の匂がある。

彼は、まだ期待されてもいゝ監督である。

アメリカの生んだ唯一の個性を持つた監督である。

とまれ、映畫は二つの道を進んでゐる。

娛樂の對象としての存在を續け行くでもあらうし、又監督の個性に依つて生れる藝術としての存在をも更に一層認められるであらう。

映畫は一つの不思議な魅力であると云ふ點のみがこの兩者に共通してゐる。

越中富山薬賣り奇譚

木村　毅

何事も便利な東京だ。舊弊に越中富山の薬賣りが出入してゐるのは私の家位なものだらうと思つてゐたのは大間違ひで、よく聞いて見ると、近所軒並、みんなその御得意先きであるやうだ。

一體に三越には變つた商賣が多い。女郎と、三助とは別にしても、越後のわかめ賣り、毒消し賣り、越前の叩き蝶賣り、そして越中富山の薬賣り。

何しろ半年は霙や雪に降り埋められて働けず、随つて生産に乏しいあの地方の事だから、その閑散に出稼ぎして他國の富を移入して來ないでは、生活資料の補足が付かなかつたらう。だから過去に於て、あゝした商賣があの地方に發生した事はよく分る。併し開明な今日、それがまだ存續してゐる事が實は少少私の腑に落ちない。

たとへばわかめ賣りだ。あんな別に大してうまくもないものは、誰れだつてさう度々食膳にのぼす譯がない。それに食ひたくなつたら乾物屋へ行つても、海産物問屋へ行つてもたやすく得られる筈だ。交通は自由になり、貯藏法は完全になつた今日では、需要さへあればいくらでも汽車で輸送され、倉庫に貯藏されるのだ。江戸時代のやうに、茲で買ひはぐつたら、この次の時まで手に入らぬなどと言ふ事があるものではない。

事實、私が初めて東京へ出てから廿年近くもなるが、その間たッた一度も、彼等から直接にそれを買つてゐる人のあるのを見掛けた事がない。だから商賣として到底成立すまいと思はれるのに、毎年その季節になると、着物も帶も、脚絆も甲掛も、みんな紺、乃至は紺飛白で堅めた女が、菅笠を被つて『わかめいりまへんか――』と、一種の特有のメロデイを帶びた聲で街々を呼び歩く。

いづれそれが存續して行くには、それだけの理由はあるだらう。私だとて別にその絶滅を願つてゐるわけではない。どころか、傳手と機會があれば、その生活狀態を調べてみたいと思つてゐる位だ。

根氣よく歩き廻らねば商賣にならない彼等だから、健脚が第一の要件で、そのため老婆は絶無でないまでも、稀で大抵は三十五六以下の女が多い。彼等は旅に出稼ぎしてゐる三ケ月なり半ケ年なりの間は、或る特定の區劃に固より、一種のコンミユニテイを作つてゐるやうだ。若い女だから多少のふしだらも過まちもあらうが、歸國の上では、その旅先きの出來事を、絶體にどこへも洩らさないのが仲間の嚴しい不文律になつてゐると云ふ話は、誰れでも知つてゐる。そんな事を考へると多少のロマンチツクな興味を唆られる。

越中富山の薬賣りになると、その存續が奇異の念を誘ふこと更に數倍だ。たとへ都市でなくても一寸した町なら、怪しげな賣藥に對する迷信位は、疾うに驅逐してゐて然るべき醫師も薬舗もあるだらうのに、まだあんなイカ樣ものの需要があるのを、どうして訝らないで居られやう。

それは將軍樣の昔に、富山の薬賣りが全國に擴がつて、重寶がられた理由は、殊に私のやうに田舍に育つた者にはよく分る。

私の生國は北作州の山の中で、薬屋へ一里、醫者へ三里といふ程ではなかつたにしても、病氣に罹つた時は大抵、母の診斷と富山の薬で息災になつたもので、醫師の診察を乞ふた

などと云ふ事は稀であつた。胃涼炎、熱さまし、虫下し、あんま膏、千金丹などと、紹附の惡い木版で押した黄色い藥袋が、煤けた柱に掛つてゐた事を今も思出す。

　彼等藥賣りは毎年冬にさしかゝると（つまり農閑期になるので）古い藥の入換へ、消費した藥の補充、及びその代價の集收をかねて村に入つて來た。その時は單なる藥屋として以外に、祖母や母には彼等が經巡つて來た異國の珍奇な見聞の披露者として待たれ、又私達子供には色繪の施與者として待たれたものだ。

　色繪といふのは恐らく江戸の錦繪を模して作られたものであらうとは思ふが、兩者を比べると勿論、江戸と富山の文化の差以上の差があつた。それは安インキで彩色した粗雜極まる武者繪、戰爭繪に過ぎなかつた。四方天但馬守、猪早太、或はそれが日淸戰爭の影響を見せた大同江の河野軍曹、玄武門の原田重吉——さうした名前が今日も私の記憶に殘つてゐるのは、一に富山藥屋の敎化に負ふものと言へる。

　日露戰爭は色繪のテーマを、乃木大將とステッセルなどに變へたが、その頃は私も少年世界位は讀むやうになつてゐたので、もうそんなものは喜ばなくなつた。やがて東京へ遊學するやうになつてからは、風邪にも虫にもその恩澤を受くる事が絶無だつたので、富山の賣藥先生のことなどは、全く私の念頭から遠離し去つて了つた。

　約十年間の間隔をおいて、彼等と私との間に交渉が再開されたのは、家をもつて市川へ移つてからである。市川は兩國から汽車で僅々廿五分間行程の距離に位置し、町の少くとも三分の一までは料理屋、待合、つれこみ宿から成立してゐる都人のための遊蕩郷らしく思はれるが、内實は全くの農村で、隨つて越中富山も相當に幅をきかしてゐる。私の妻も彼等の巧妙な辯舌に言ひくるめられて、ツイ藥を置くことになつたのである。

　私達はその後又東京へ引越して來た。近所の手前もあるから、彼等とはもういい加減に緣切りにしたいと思つてゐたが、追跡が執拗くして、容易には解放してくれない。それに別に消費しない分まで代價を請求するわけではなし、置いて邪魔にもならぬ事だから、今でも簞笥の小抽斗を開くと、そこに桐の藥函のしまはれてゐる事は、玆に正直に告白しておいてよい。

○

　但し以上は、本稿の主目的とは何の關係もない、無用の贅辯だ。

　實は去年の暮に、その藥賣りが來て、家の者に一寸凄い話をきかして呉れた。

　雪のちらつく寒い日だつたので

『此のお天氣の惡いのに、方々歩くのは大變ですね。』と妻が言つたのが皮きりで

『いや、なあに。かうして都會を廻るのは至極なものですが、田舍廻りを受持ちにしてゐる連中は時々、こはい目を見るさうですよ。』

と言つて彼は話し初めた。

　何でも炭燒を渡世とする者の住んでゐる山奥のことだ。ある午後、與作（とかりに呼んでおく）の家を富山の藥賣りが訪ねて來て、入換へを濟ました後、

『まだ、この奥にも人家がございませうか。』

とたづねた。

『はい、半道程上つた所に、寅兵衛といふ仲間の家が一軒ありますよ。』

『日は傾いたが、半道ならば薄明りのあるうちに着くだらう。今夜はその家で宿をして貰ひませう。』

　と言つて、藥賣りは山の端の空を染める夕燒を氣にしながら、細道を上つて行つた。

　それきり彼の行方は分らなくなつて了つ

た。翌年の春、農繁期が近づくと共に全國に散らばつてゐた賣子は、みんな富山へ引き上げて來たが、彼のみ一人は遂に歸つて來なかつた。賣掛けの金を持つて逃亡したと言ふ事も考へられないではないが、どうもそんな樣子もないので、大元なる藥舗の主は直ちに失踪の屆をした。

　これより先き、その冬その土地の者の焚いた炭には、異樣な惡臭を放つのがあつた。

　それを耳にしてゐた警察では、すぐ炭燒き仲間に眼をつけて、段々探索して行くと、その藥賣りが與作の小屋まで來た事は明かになつた。

　それより奥には人家と言へば只一軒しかない。たとへ犯人でないと言つたとてそれが聞かれる筈はなく、貞兵衛はすぐ繩を打たれた。

　後に貞兵衛が自白した所によると、その夜藥賣りは一夜の宿を乞ふて、寢る前に集めた金を計算してゐた。それを見ると、彼はついフラ〳〵と惡心が起きて、生木を割る斧の背を頭の鉢に食はせて、一思ひに息の根を止めたのであつた。

　それから死體はすぐに炭かまどの中に投げこんで、上から土で塗り固めて熱火に蒸したのだから、骨も殘らず灰になつて了つたのだが、一緒に燒かれた炭に移つた脂の臭いが、とう〳〵その秘密を裏切つた。

○

　さて此の話では、事件の起つた場所がはつきりしない。當時私の家にゐた女中は石川縣生れの者だつたが、

『それは私の郷里にあつた事でございますよ。』と言つた。

　又、農民運動をしてゐる日向生れの或る友人は、

『僕の郷里でもそんな話をきいた。』と言つた。

　最後に、ある雜誌記者をしてゐる高知縣出身の友人は、

『をれの國でも、そんな話をしてゐるぜ。』と言ふ。

　してみると今後もまだ『自分の郷里にもその話がある』と名乘り出る者が幾人あるか分つたものではない。知らなかつたのは私達ばかりだつたらう。で私は『越中、富山、なかなか味をやるな』と思つた次第である。

　彼等を、異國の珍奇な見聞の移入者として、田舍の私の祖母や母が待つた事は既に書いた。中世の歐洲で、隊商の家は異域の珍貨異聞を舶載して來るので、僧侶の次に尊崇せられた事は、史を讀んだ者の等しく知る所である。同じ心理を巧みに應用して、彼等藥賣りは事によると、前記のやうな奇譚を勝手に捏造しては、風の如くに全國にふりまき、單なる藥賣りとして以外の尊崇なり、愛敬なりを以て待たれる機關としたるのではあるまいか。そしてそれを又間接に、商賣の地盤を強固にする武器として應用したのではあるまいか。

　近頃農民文學としての士族傳說を少し調べてみたのに、北は奥羽から、南は九州まで、同一の話の傳はつてゐるのがあるやうだ。古い所は知らず、徳川期以後の話で全國に傳播の著きは、存外越中富山あたりが震源地になつてゐるのがないとは限らない。

　卽ち藥賣りと、或る種の文化の分布とについて、識者の一考を煩はす所以である。

佛蘭西の人形と地方色

前田公篤

（其一）　アルザス

今でも巴里の玩具屋や百貨店などでよく見るあのアルザスの人形の着てゐる衣裳は、普佛戰爭當時まで、ストラスブウルや、サヴエルン邊りの片田舍の村の舊敎信者の娘どもが着てゐたもので、色の鮮なことと云ひ雅美で輕快なところと云ひ、どう見ても晴着としか思へないが、これはやつぱり不斷着であつたのだ。其頃は樂しかつたものだ。——新敎徒の娘どもでも幾分か仕立は違つてゐたが、やつぱり同じやうな着物を着てゐた、仕立がちがふと云つても、これは別に惡い感情からではなく、舊敎の家庭と新敎の家庭との間も至極圓滿に行つてゐた、カトリックの連中の袴は、絹を使ふことは先づ稀で大抵は赤いサージで、それに約三寸幅位の綠色の胴じめで腰のあたりを飾つてゐたが、新敎の連中となるとこれは又ずつと質素で、絹は絕對に使はないし、綠色のサージのそれに赤い胴じめをしてゐた、そして其上にもつと長い裳裾を着けてゐるのだが、それが『兵隊のリボン』と名のついた樣々な色のリボンで飾つてある、つまり此リボンで入營する許嫁者の帽子を飾つたところから、さうした名まへをつけたのである、この兵隊のリボンで頸の着物を飾らない場合には、それを紡車や紡錘に結びつけるのである。

今でも人形を見ると、胸甲を着て肩のところに赤い結目がある、シヤツは長いぶくぶくしたもので、袖口のところが締めてある、そして前掛は色絹で腰のところが飾り帶になつてゐる、ある地方では黑い前掛をつけるところもある、頭巾は地が金と銀との刺繡で、それへ世の中に知られてゐる例のアルザスのリボンを飾るのだが、その長さは所によつていろいろである、アルザスの話の序にストラスブウルの像に就いて面白い傳說を書いて見よう。

×　　×　　×　　×

無論この傳說は普佛戰爭後の話なのであるが、獨逸の領土になつた後も、佛蘭西を戀しがるストラスブウルの家庭では、夜になると窓をすつかり締切つて小聲で話し合つてゐたものだ。…………

巴里は悲痛な叫びに襲はれた、メッツやストラスブウルなどの決死の抵抗もその甲斐もなく、とうとう敵の猛襲に陷落してしまつたのであつた、滿都の人心は極度に昂奮した、今まで飢餓と戰ひ、寒さに耐へて來た子供や老人たちは、慘めな暮しに日を送つたが、誰れ一人として愚痴をこぼすものもなかつた、しかし戰敗の前には手のだしやうもないと云ふて屈辱に甘んずる心は毛頭もなかつた、寺の鐘は鳴り響く、太鼓は轟く、一時は全く喪心狂亂の體であつた、そして敗戰の後には革命さへ起つた。この騒々しい大混亂の眞さいちゆう、秋の日の蒼白な弱々しい光を浴びて、雲のやうな二つの影が肌寒い北風に吹かれながら、南から北へ、そして東から西へと魂を奪はれたやうな巴里の都の上を彷徨のであつた。

この二つの影は長い喪服を着て互に抱き合つてゐる二人の女のやうに見えたが、若い方の頭は年上の女の肩の上にうなだれて、髮を結んだその幅廣のリボンは、黑い蝶のはねのやうに風に搖られながら翩々としてひるがへるのであつた、二つの影はかうしてコンコルドの廣場までやつて來たが、丁度それは二日此方銃を手にして其處に屯した國民軍が去つた直ぐ後のことであつた。

『此處ですよ』とその影の一つは云つた、此處まで運んでくれた雲が低く降りて來ると、二人はストラスブウルの像の前に停つて、恰も神さびた祭壇にでも對するかのやうに、互

に兩の腕に像の臺を抱きながら、無言のまゝで暫しゐたが、やがて徐に消失(きえう)せてしまつた。

× × × ×

戰爭はまだ續いた、メッツやストラスブウルの運命は、今は巴里の上に落て、敵の武力に首府は開城を餘儀なくされてしまつた、全州悉く敵の手に渡つてしまつたアルザスの唯だ一つだけの町を我手に殘したいばかりに、巴里は耐へがたい屈辱を忍んで、名立たる凱旋門とコンコルドの廣場に挾まれたシャン・ゼリゼーの大通りを中心とする巴里の誇である街々を、二十四時間のあひだ敵兵どもの占領に任せることを承認したのであつた。一方は凱旋と云ひ、一方は和睦と云ふ。此不思議なコントラストをもつた二つの場所の間に、今は兇惡無道の敵兵が暴威を逞うするのであつた。…………

その夜以前の喪服に包まれた姉妹? の影が、またもストラスブウルの上に現はれて、夜明までそこに佇つてゐたが、愈敵軍の先陣が見えた時、臺石の上の像は全身を震(ふる)はせ、冷い石の眼からは涙が徐にながれるのであつた、然し唯だそれだけで他に變つたこともなかつたが、像はいかめしい姿をくづさずに拳を膝の上にかため、眼は際(はて)しない遠方を眺めて瞑想に耽るのであつた。この悲しい事のあつたその日から、名にし負ふ美しい廣場を照す幾千の燈火とそしてまさに消えんとして瞬の空にきらめく星の光とを浴びて、毎朝同じ時刻に石像の冷い眼は不思議の光に輝き、悲しい思を浮べた瞳は隣に立ちならぶ友の像に向けられたと見えたが、又徐に眼を閉ぢて沈思默想に還るのであつた。……

(其二) ロレーヌ

佛蘭西の東の一帶を蔽ふヴォージュの森、其處に培はれた佛蘭西の農民だちの生活に、自分は土地に愛着する此の國の强いそして質素(じみ)な國民性を見ることが出來る、如何にも野暮なその身ごなしと、そして耳までかくすあの白と靑との縞の木綿の頭巾はどう見ても半病人と云つた恰好で、窮屈な短いズボンに痩せた足を突出し、無恰好な木履(サボー)をはいた樣子は喩へやうもない可笑しなものである。

『佛蘭西の百姓の心持や望みを立入つて知りたいと思ふなら、そんな易しいことはない』とミシエレは云つた、そして次のやうなことを書いてゐるが、これは本當に面白い見方だと思ふ。

日曜の日に田舍を散歩して百姓を見るがよい、今、私達の前に一人の百姓が歩いて行く、まづ午後の二時の頃であらう、妻は御彌撒に行つてゐると思ふがよい、百姓は外行の着物をきてゐる、そこで私は必ず畑へ行くに違ひないと見てゐる。然しその足で直ぐ畑へ行くとは限らないが、今日は一日の休だ、畑へ行かうと又行くまいとそれは氣まゝだが、一週間の間、毎日田畑で働いてゐるぢやないか、日曜までも畑へも行かないでもよからう、案のぢやうどこかへまはる、他に何かの用があるのだらう。然しやつぱり畑へ行かなければすまない、つい自分の畑の近所を通る――よい橋だ――一寸作物を遠目に見る。然し畑へ入りはしまい、一體仕事もないぢやないか………と見てゐるとやつぱり入つて行く、まさか働くのぢやあるまい、外行の着物だもの、そして白いシャツを着てゐるのだもの、然し草の一本や二本取つたり又石ころの一つや二つ拾ひ出すのに何んのこともない、まだいつぞやの木の株を掘出すのが殘つてゐる、だが今日は鶴嘴がない、それは明日の仕事だ、そこでどうするかと思ふと、腕を組んで立ちながら何んか考へこんでゐる、長いこと作物に見いつてゐる、――隨分長い間、――まるでぼんやりしてゐるやうだ、やがて誰か自分

を見てゐるとでも思ふのか、若し他の百姓でも見るとポツポツ行つてしまふ、——然しものの二三十歩も行くと又止る、後をふり返つてもう一度最後の目を畑に向ける、それが如何にも沈病なそして淋しい目つきである。然し本當に眼のある人から見ると、それは實際熱のこもつたそして心のあふれた眞劍な眼なのである。

若しこれを愛と云はないならば、此世に何をか愛と云ふのであらう、笑つてはいけない……土地が生産のために彼を欲しがるのだ、でなければ殆牧畜もなく、又肥料もない、此佛蘭西の貧しい地方の土地は何も產出すことが出來ないのだ、愛されてこそ生產するのだ。

それはミシユレが輕妙な筆に巧に、ロレーヌ地方の農民生活を寫したものだが、今一つ面白い話を書き添へておかう。

それは秋の初め午後の五時頃、ロレーヌの或田舍で、今まで靜に歩いてゐた見事な牛の群が、だしぬけに躍り出して川の中に飛込んだ、水が飲みたかつたのだつた。そして一緒について來た小牛までが親牛の後から走つて行つた、牛を飼つてゐるのは一匹の番犬を連れた若い男であつた。………

ドルコー！　その牛飼が聲をかけると、番犬は喜び勇んで水の中にとび込む、牛は水を飲んで了ふと、其處にあつた古い小舟の近所で暢氣さうに遊んでゐる、そこに洗濯してゐた女が震へながら仕事をやめて、「怖いぢやありませんか！」——「こいつらは何もしやしませんよ」震へてゐる女に平氣な牛飼の問答が終る、得がたい野趣だ。地平線には夕陽が落ちかかつて、水の面を黃金色に彩り、頑丈な牛の姿を照らして美しい、咽喉を潤した牛は勝手氣まゝに優長な歩みをつゞける、犬は水からはいでて主人を見ながら主命如何にともの待ち顏だつたが、一寸の合圖に稻光の樣に輕快な軀を飛ばしたかと思ふと、散り亂れた群の周圍に圓環を描いて走つた、不可思議な絲が急に一疋づゝ繫ぎつけたかと思はれるやうに、犬の意思一つで牛の群は整然とならんで靜に民家の方へと小さな坂路を上つて行く、牛飼が或牧場の傍を通ると立止つて、そこに身をかがめて、雜草を取つてゐた年取つた女に挨拶をする、それは牛飼の祖母で、八十二歳の老婆であつた、そのそばには木綿の傘が開いたまゝでころがつてゐる、色褪せてもとの色も判じかねる樣な代物だ、斯う云ふ場合斯う云ふ場面に出會はしたなら、誰だつて一す考へさせられる。

『お婆さん、どうです、精が出ますね』……

……牛飼の挨拶に、婆さんの返事がかうだ『あゝ達者だよ、達者だよ、こんな仕合せなことはないよ、家の此畑に埋けて貰ひたいな……お前達はきつと私をお墓へ連れて行くだらうが、私は本當に此處で眠りたい、エ！　解つたかい、此處にいつまでも、いつまでも眠りたい、此田地のものは何もかも皆よく知つてゐるのだ、本當に思ひきれないのだ。……』

これは拵へた話ではない、本當にあつた事だ、ミシユレの描いた百姓は彼れの書物を讀んだ人は、誰でも知つてゐる、今の話は詩人の想像だと思はれるほど美しく佛蘭西の田園生活を語つてゐる、老婆の質朴な言葉に土地に對する深刻な愛着心が窺はれる、牛飼と豐な牛と忠實な番犬と、それを包む詩的な野趣、豐穰な土地、そこに勤勉なそして質素な佛蘭西の國民性が現はれてゐる。

自分がアルザスとロレーヌとの地方色を特に選んだのは、此の二州の名が佛蘭西にとつて特別な情熱を伴ふものであり、又日本一般にも容易に理解される ものであるからであ

る、然し此處に現はれた人間の感情と云ひ心持と云ひ、佛蘭西人一般に及ぼして考へて少しも間違のないところであると自分は確く信ずるのである。（一九二六・一二・七）

世界男頌

——久米正雄に贈る——

三上於菟吉

他の方面に於いては日本から出た世界男、世界女もいくらかゐるやうだ。庭球の熊谷一彌君、バタフライの環夫人、早川雪洲君なぞにしてもまづ相當廣い名を持ち、廣い顔を持つてゐるであらう。しかし何分、かうした人達は、元來が日本人の西洋眞似の仕事をしてゐるので、同じ仕事で西洋人と競爭し、彼等をまゐらせることが出來、從つて名と顔とを廣くすることが出來たわけであらう。醫者や政治家にしてもその通り、外國人と同舞臺で派手やかに長袖を舞はすことが出來て、非常に結構だ。ところが文學となると、仕事がひどく個性的なものである上に、何分日本語といふ奴が、言語學者が何と言はうとひどく獨自のものであるために、外國人に知らしめ難いのが殘念だ。たか〴〵宮森さんや何紅蓮さんの飜譯で、部分的に西洋人の好奇心を充してやるだけでは、日本の自信ある大家はつまらないだらう。もつとも文學は彼自身の藝術創造力を充せば足りるといふ人はまた別だが、すでに表現であるからには、なるべく多くの人に見て貰ひたいといふ素質を帶びずにはゐまい。こんなことは谷氏の藝術起源論を參照せずとも理窟抜きにほんたうだと思ふ。が、日本の文學がいつまでもこの島國の中に屈縮してゐるひとつの大きな理由は、文學者それ自身大てい獨高的孤立的に生活して、往往民衆からの喝采をさへこちらからお斷りしたいといふつらをしてゐるためもある。一たい君たちが活字に印刷して公布するのは何のためだと言ひたい位に小面の憎い容態振りやが多すぎるやうだ。民衆と世界とに到底理解出來ないやうな思想などゝいふものが、氣違ひの頭からでもなければ生れない筈なのだが。そして、そんな態度を取つてゐるうちに、いつの間にか心も身も乾いてしまつて、その次にはケチ臭い厭人主義でも唱ひ出すのが多くの場合の落なのだ。もうこんな文學者ばかりでなくなつてもいいかと思ふ。大體に於いて、人は自ら賣ることを心掛けてもいいのである。それは太公望のやうな、孔明のやうな、自づと見出されるのを待つ流儀もあるが、唐人の英雄たちも、多くは困難な試驗や上司への上疏で自分を賣り出してゐる。當節ことさら、だれが人様のいいところを拾ひ上げてあるかうとするひまがあるものか、自分が天下に賣るに恥ぢるやうな劣等なものなら仕方がない。さもなくば、もつと高くもつと高くと自らを賣つて、はじめてその人の才なり德なり力なりを世人に認識させ、それに依つて世人を利澤せしめることも出來るのである。そこへ行くと西人は心得たもので、たとへばダンヌンチヨなぞも、伊太利本國では、彼の文學及び文學的生活を讃頌する人ばかりではなかつた。「彼は獸は書けるが神と人とは書けぬ。彼は娼婦は書けるがマリアと母とは書けぬ。」なぞとまで手ひどい攻撃を受けてゐたが、自ら賣り、自ら發する點に於いては途方もない才腕を有してゐた。借金だらけにな

つて本國では食へなくなり、パリーへ逃げて行つて、フランス語で物を書いてゐるうちに、例の大戰。すると勿論、彼の愛國熱は全然お芝居といふわけでもなかつたらうが、思ひ立つた以上ひとにも自分にも遠慮のない遣口で、敵愾宣傳のビラを撒きながら飛行機でローマへ飛び歸つた。かくて昨日の破産者追逐者は今日の愛國英雄となつてしまつた。結局、自ら高くとすると同時に、彼自身も高く飛んで見せたのである。かうした氣持を一がいに世間師、キハモノ師として嗤つてしまふと、人間の生活はまるで動きのない庵室的なもになつてしまふ。庵室者としてもごく劣等な、何のさとりもさびもない、ひとりよがりのひねこびたものになり、最後珍奇なミイラにでもなることか、腐肉となつて蛆に食はれてしまふ。言ふまでもなく、人間にはさま〴〵な氣性があるから、それは一生一室に閉ぢこもつて、拮据勉勵してすこぶる佗びた私文學を書くのも結構だ。しかし、自由流動、潑溂たる好奇を持ち、無礙な才能を抱いた一部の人士は、怯めず臆せず高く廣く飛行すべきであると思ふ。僕の見るところを以つてすれば久米正雄君の如きはその選手だ。彼は内面的にどんな陰氣ものかも知れぬ。が、見た目の動きが壯快で輕捷ですこぶる自然的に見える。されば彼の反感者でさへもその才力を否むことが出來ぬ。惟ふに彼の如き性格は、恒に機會と意氣とのままに自由高翔を心掛けねば、折角の內容が萎縮癖を帶び、小さな固まつたものとなつて、本質的に自性を失ふかも知れぬ。では、詰らない。今度、松岡君が久米君の「破船」と同材料を他の方面から扱ふといふので、久米君當時の人氣と精力とを思ひ出した。いつか新潮誌へ僕が得人といふ言葉で久米を評し、彼は仕事の割に大きく廣い名聲を得たといふたら、彼は少し氣にしてゐたやうに見えたが、あれは悪口ではなかつた。この男がもつと全力を出したら、世界的にまでなれる人氣力を持つてゐるといふことを言ふたのだつた。この人以外には皆頭にしるした意味での世界男たり得る資格を持つた人は文界に無いやうに思ふ。彼の一考を促す所以である。新年號のものであるさうだから、濶達な問題を大いに論じ出して見たのであるが、つづき物書きの吾々の最も繁忙な時期に當り、且つ流感臥床の身であるので十が一を盡さぬ。期を得て詳論しよう。

（十二月九日）

山のことぶれ

折口信夫

明ければ、去年の正月である。初春の月半ばは、信濃三河の境山のひどい寒村のあちこちに、過したことであつた。幾すぢかの溪を行きつめた山の入りから、更にうなじを反らして見あげる樣な、岨の鼻などに、さう言ふ村々はあつた。殊に山陽の丘根の裾を占めて散らばつた、三河側の山家は寂しかつた。峠などからふり顧ると必ずうしろの枯れ芝山に、ひなたと陰とをくつきり照しわける、早春の日があたつて居た。花に縁遠い日ざしも、時としては二三の茅屋根に、陽炎をひらつかせることもあつた。氣疎い顏に、まち〳〵と日を暮す、日なたぼこりの年よりの姿が、目の先に來る。其は比喩ではなかつた。豐橋や岡崎から十四五里も奥には、もうかうした今川も德川も長澤・大久保も知らずに、長い日なた

のまどろみを續けて來た村があるのだ。

青やかな楚枝に、苔の梅が色めいて來ると知多院内の萬歳が、山の向ふの上國の檀那親方を祝ぎ廻るついでに、かうした隱れ里へも、お初穗を稼ぎに寄つた。山坂に馴れた津島天王の神人も、馬に緣ない奥在所として擇り好みをして、立ち廻らない處もあつた。

日本人を寂しがらせる爲に生れて來た樣な芭蕉も、江戸を一足踏み出すと、もう大仰に人懷しがつて居る。奥州出羽の大山越えに、魂落すまでの寂寥を感じた。人生を黃昏化するが理想の鏡花外史が、孤影蕭條たる高野聖の佛をぽつつり浮べた天生の飛驒道も、謂はば國と國とを繫ぐ道路の幹線である。雲端に霾ると桃青居士の誇張した岩が根道も、追ひ剝ぎの出るに値する位は、人通りもあつたのである。

鷄犬の遠音を、里あるしるしとした詩人も實は浮世知らずであつた。其口癖文句にも勘定に入れて居ない用途の爲に、乏しい村人の喰ひ分を裾分けられた家畜が、時計や寢ずの番以外に、山の生活を刺戟して居た。

私は、遠州奥山の京丸を訪れた時の氣分を思ひ出して見た。村から半道も、木馬路を上つて一つ家に訪ねた故老などの、外出還りを待つ間の澁茶が促した、心のやすらひから。京丸なども、もう實はわざ／＼見物に行く値打ちはない程開けて居た。

駿遠の二州の源遠い大河の末の、驛路と交叉したあたりには、ほんたうは大昔から山の不思議が語られて居た。武家の世盛りに落伍した非御家人の、平野を控へた館の生活を捨てゝからの行動が、其とてつもなく古い傳說の實證に舉げられる樣になつて行つた。

飛驒・肥後・阿波その他早耳の琵琶坊も、足まめな萬歲も聽き知らぬ遠山陰の親方子方の村が、峰谷隔てた里村の物資に憧れ出す時が來た。其は、地方の領家の勢力下から逃げこんだ家の由緒を、完全に忘れ果てゝからであつた。其昔から持ち傳へた口立ての系圖には利仁・良文や所緣もない御子樣などを、元祖と立てゝゐた。その上平家盛衰記を端山の村まで彈きに來る琵琶坊主があつた。時にはさうした座頭の房を、手舁き足舁き連れこんで、隱れ里に撥音を聽して貰うたりもした。山彥も木精もあきれて唯耳を澄してゐる、さうした山の幾夜が偲ばれる。日が過ぎて、山の土產をうんと背負はされた房樣が、奥山からはふり出された樣な姿で、山口の村へ轉げ込んで口は動かず、目は鏡の樣に見つめたきりになつたりする。山人の好奇に拐された座頭が、いつか山の岩屋の隱れ里から、隱れ座頭がやつて來るなど言ふ話を生んだのであらう。さうした出來心から降つて湧いた歷史知識が、村の元祖の御子樣や、何の大將軍とかは、すれば天子や高倉の宮其御附の都の御大身であつたのかと、村の系圖の通稱や官名ばかりの人々の本當の名が知れて、山の歷史はまともに明りを受けた。燒畑や岩地のたつきも、張り合がついて來る。盲僧の軍記語りの筋は、山も里にも緣のなくなつたずつとの昔の、とつとの遠國の事實と聞きとる習慣があつたのなら、かうした事は日本國中の山家と言ふ山家に起る筈がなかつたのである。日本の國のまだ出來ぬ村々の君々の時代から、歷史物語は、神だけに語る資格が考へられてゐた。神が現れて、自身には人の口を託りて語り出す叙事詩は、必ず其村其國の歷史と信じられて來た。國々の語部の昔から、國村の神への淪落して、祝言職となり、陰陽師の配下となつて唱門師・千秋萬歲・猿樂の類になり降つても、其筋がゝつた物語は、神の口移しの歷史で、今語られてゐる土地の歷史と言ふ考へ方は、考へられきつては居なかつた。盲僧や、盲女の神寄せの後も語り出す問はず語りの文句も、さうした

心持ちから受け入れられたのである。京鎌倉の公家武家の物語も、結局は山在所の由來として聴かれたのも道理である。だから此入譯(イリワケ)も呑み込まないで、むやみと奥在所の由緒書きを、故選から出た山人のほら話と、きめてかゝつてはならないのである。

こんな話は、山家ばかりで言ふ事ではなかつた。都一巡、「梯子や打ち盤」觸れ賣つて戻つても、まだ冬の薄日の殘つて居る郊外の村に居ながら、「昔は源氏の武士の目をよけて」と隱れ住んだ貴人の、情濃やかに、力業に堪へなんだ傍を説く、歯つ缺け婆ばかりの出て來る在所さへある。だから、非家人としての冷遇に居たゝまらずなつた前からあつた若い御子と其後見衆(メノトビト)を始めとする系圖は、實は日本一圓の古い村々に、持ち傳へられた處の草分けの歷史であつたと言へる。

若く弱(アエ)かな神が、遙かな神の都からさすらうて村に來た。其を祝(イハ)うたのは村の客の初めで、旅にやつれた御子をいたはつたのが、元は村の神主で村の親方の家の先祖と説く神話が、前の様な歷史を語らぬ、一方の村々に行はれてゐる。恐らく今三四百年も以前には此を語らぬ村とては、禁裡・幕府のお陰も知らぬ山家・海限に到るまで六十餘州の中にはなかつたであらう。

此は日本國の元祖の村々が、海岸に苫屋(トマ)を連ねた大昔からあつた神の事實である。幼い神が海のかなたの常世の國から、うつかり紛れて此土に漂ひ寄る。此を拾ひあげた人の娘が、育みあげて成人させて後、其嫁となつて生んだのが、村の元祖で、若い神には御子であり、常世の母神(オガミ)には御孫(ミマ)の御子だと考へられた。さうした傳へが村々に傳へられて居る中に、色々に變化して行つた。旅の疲れで死んだと言ひ、村の創立後遙かの後の事實で、村の大家のある代の主人に拾はれて、其家に今の様な富みを與へて後棄てられたとも言うてゐる。此若い男御子が、處女神に替つて居る處もあつた。平野で止つた村には野に適はしい變化が伴ひ、山の盆地に國を構へた地方では、山の臭ひをこめた物語に變つて行つた。

常世の若神を懷き守りした娘の話が、山國に限つては、きつと忘れられなかつたばかりでない。言ひ合した様に、殆永久と言ふ程生きてゐた姥御前(ウバゴゼ)の、白髪姿に變つて居た。此だけが、海の村と山の村との生活様式から來た信仰の變を悟るものである。

常世の國からは、ゆくりなく流れ寄る若神の許に毎年きまつて來る神及び、其一行があつた。初めは初春だけ、後に至る程、臨時の訪れの數が増した。稀なるが故に、之をまれびと稱へてゐた。此神の一行こそ、わりこんで村を占めた、その土地の先住者なる精靈たちの惱み嫉みから、村を救うてくれる唯一の救ひ主であつた。此事は、一昨年春本誌の初刷に書いて置いた。此常世神(トコガミ)の一行が、春毎に常世浪(トコヨナミ)に揺られて、村々に訪れて村を圍ひ、庶神の精靈を壓へ、村の平安の誓約(ウケヒ)をさせて行つた記憶が、山國に移ると變つて來た。常世神に壓へ鎭められる精靈(スダマ)は、多くは野の精靈で山の精靈(コダマ)であつた。其代表者として山の精靈が考へられ、後に、山の神と稱した。山の神と常世神とが行き値うての爭ひや誓ひの神事(ワザ)演劇(ヲギ)が初春毎に行はれた。村の守り神が其時する事は、呪言(ヨゴト)を唱へることであり、村の土地、家々の屋敷を踏み鎭めることであつた。さうしてわざをぎをするのが、劫初から恐らく罔極の後へかけて行はれるものとの豫期で繰り返された村の春の年中行事であつた。

青垣山にとり圍まれた平原などに國村を構へる様になると、常世神の記憶は次第に薄れて行つて、此に替るものが亡くなつた。さうして山の神が次第に尊ばれて來て、常世神の

性格を授けられて行る。常世の神の優れた部分からは、高天原とし其處に住む天つ神の考へが出て來た。村人と交渉深い峯の初めの祝福と土地鎭め、村君・國主の健康を壽ぐ方面の爲事は、山の神が務つてすることになつた。つまり山の神と村人との間の感情が、以前よりは申し合せのつき相な理會ある程度まで柔らいで來たのだ。村の生活を基礎とした國の生活、其中心なる宮廷、古く溯る程、神を迎へ神を祭る場所と言ふ義の明らかに見える祭りの場所(ニハ)としての宮廷にも、春の訪れに來向ふ者は、常世神でなく、山の神となつた。初春ばかりか、宮廷の祭り日や、祓への日などにはきつとかはたれ時の御門(ミカド)におとなひの響きを立てた。村々の社々にも、やはり時々山の神が祭りの中心となつて、呪言を唱へ、反閇(ヘンバイ)を踏み、わざをぎの振り事、即ち神遊びを務めに來た。

さうした祭り日に、神を待ち迎へる、村の娘の寄り合うて、神を接待(イツ)く場所(ニヘ)が用意せられた。神の接待場(イチニハ)だから、いちと言はれて、日本の市の起原を開かれた。山の神は勿論、里の成年戒を受けた後の淨い若者の扮裝姿(アツシ)であつた。常世神がさうであつた樣に。後漸く山の主神に仕へる處女を定めて、一人野山に別居させる樣になつて、野ノ宮(ノミヤ)の起りとなつた。山の神に仕へる巫女が、野の宮に居て、祭り日には神に代つて來る樣にもなつた。山の神は里の神人の一時の假裝ではあるが、山の神の信仰が高まつて、山の主神の爲に、山の嫁(ヨメ)御寮(ゴリヨ)が進められたのである。

祭り日の市場(イチ)には、村人たちは澤山の供へ物を用意して、山の神の群行或は山姥の里降りを待ち構へた。山の神・山姥の舞踊(アソビ)の採り物(トモノ)や、身につけたかづら・かざしが、神上げの際には分けられた。之を乞ひとる人が爭うて交換を願ふ爲に、供へ物を善美を盡す樣になつた。此山の土産は祝福せられた物の標(シルシ)である。山人の山づとは此である。此が歌垣が市場で行はれ、市が物を交易する場所となつて行く由來である。さうして山人山姥が、里の市日に來て、無言で物を求めて去つたと言ふ傳說の源でもある。其時の山づとを我勝ちに奪ひ合ふ風が、後のうそかへ・神事などの根柢をなしてゐる。又、祭りの舞人の花笠などを剝ぎ取る風をも生み出した。

「山づと」は何々。山の蔓草や羊齒の葉の山(ヤマ)縵(アツラ)や、「あしびきの山の木梢(コヌレ)」から取つたといふ寄生木(ホヨ)の頭飾(カザシ)や、山の立ち木の皮を剝いで(カ)削り掛けた造り花などであつた。かうした忍へられた山づとは、初春の家の門や、家內に懸けられた。牀柱には山かづら、戸口や調度に到るまで、山へ行つた樣に見せる山草、軒に削り掛け座敷に垂す繭玉餅花若木(ワカギ)の作枝(ツクリエダ)が、古くして新しい年の始の善を衝昂(コミア)げて來るのも、其因緣が久しいのだ。

北三州の山家の門松は、東京などのとは違つて居た。さう言へば、歲神なども常世神(トコヨ)や先祖のみ靈(タマ)に近づいた考へで祀られて居た。さう言ふ話に這入らない中に、春の初の此「言ひ立て(イダ)」も、めでたく申しをさめねばならなくなつた。「つら〳〵たらり長々しさ」を何より先にする言祝(コトホ)ぎの言ひ觧が出たと思うて、讀者に於いても、初笑ひを催して頂きませう。

霜

齋藤茂吉

信濃路はあかつきのみち車前草も黄色になりてしもがれにけり

朝づく日のぼるころしも瀬倉のしろきを見れば旅はしづけし

山々にうづの光はさしながら天龍川よ雲たちわたる

國の秀を我ゆきしかばひんがしの二つの山に雪ふりにけり

寒水に幾千といふ鯉の子のひそむを見つつこころなごまむ

みすずかる信濃の國は車前草もうらがれにけり霜をかむりて

やま峽の道にひびけり馬車は秋光魚をつみて日ねもすとほる

ここに見る赤石白根の山脈は南のかたにひくくなりつつ

桑の葉に霜の解くるを見たりけりまたたくひまと思はざらめや

ぬばたまの夜明けわたれる野の道に青き小草や霜がくれつつ

むかうより瀬のしらなみの激ちくる天龍川におりたちにけり

道芝の霜をいたしと思ほえて光あたらぬところ歩みつ

霜ふれる野のほそ川に青々と藻のゆらぐさへかなしきものを

みすずかる信濃の國や峽とほく日は入りゆきてなごりの光

旅中即興

若山牧水

厭はしく憁しき用事を持ちて北海道地方を旅行し來りぬ、その土地々々の人々に所望せられて泳みたる歌、及び即興の歌。

石狩國深川町、某君方にて

ゐろりばたに大き鉢ありて茹栗(ゆでぐり)のゆであがりたる滿たしたるかも

朝寒に鍛冶屋が鎚の冴えひゞく深川町にめざめたるかも

秋味とて鮭のとるゝさかりなり、北見國網走港にて

あきあぢの網こそ見ゆれ網走の眞黑き海の沖つ邊の波に

ひとつらに並び流るゝよ網走のその川口の眞白きごめは(註、ごめは鷗)

十勝國池田町、茉君方にて

池に落つる水は冬なりあかり戸にゐて遊べるは赤き蜻蛉なり

同國途別溫泉にて

おこしいそぐ炭火ほのかに熾りつゝ今は本降りとなりし雨かも

うつゝなに聞きゐし雨のしみじみと厠にひゞくこのねざめかも

十勝より狩勝峠を越えて石狩平原に出づ

野の末にほのかに靄ぞたなびける石狩川の流れたるらん

石狩國上砂川炭山にて、雪中所見

秋すでに蕾をもてる辛夷の木雪とくるころ咲くさまはいかに

霜はいま雫となりてしたゝりつ朝日さす紅葉うつくしきかな

夕張炭山にてはしなく舊き友に出で會ひぬ、その友の家にて

とろとろとひとり燃えつゝゐろりなる榾のほのほのあはれなるかも

この友に案内せられて炭山坑内に入る

白雪のつめるがまゝに坑木はいま坑内ふかくおろされてゆく

陸奥國新城村の友が家にて

うちわたす岡のまなかに泉湧き泉のそばに君が家はあり

新羅舊都賦

川田順

今年五月某日、慶尙北道慶州に遊ぶ。慶州驛に降車して、

低山を四方に居らせてひろびろし穂麥が原は風光りたり

この道をわが來と逃げし山羊の仔ら麥畑のなかに跳ねて居にけり

皇龍寺址

麥の穂は伸び高けれどいしずゑの大き稜石かくれずもあるや

芬皇寺

石疊む大き井筒にひたよりてさしのぞく水の暗く濁れる

古寺の筒井の水を汲み上げて鮮人は飲み居りその濁れるを

芬皇寺の僧房にはひり憩ひたり韮のにほひの鼻衝くおぼゆ

僧房のさ庭に植うる芍薬は蕾なほ固し屈みて見るに

栢栗寺途上

寺をさしてわが行く道のひとすちは穂麥が原にさやに通れり

岩山の岩むらの間にひとところ樹のしげり見えて寺は隠らふ

味鄒王陵

この大き古墳の根に相寄れる鮮人の小家らいぶせくは見ゆ

武烈王陵碑、花崗石の大龜趺生けるが如し。

栲ぶすま新羅の王のみはか邊は石碑据ゑつ石の龜の背に

古石の大龜の背は雲形彫り頸のあたりに實相華の花

王陵邊を鮮人の子どもら遊び呆けこの石の龜に悪戯すなよ

九政里第一號墳

草の屋のうしろ邊にして人の見ぬこの土墳もみささぎなりといふ

いそのかみ古墳の土踏み辷りあなやと思へば牛の糞なりき

栲紲の新羅の王の古墳をひた寄り見ると牛の糞踏みし

牛の糞に靴すべらしつあたり邊をつくづく見れば牛の糞多し

牛の糞の粘るわが靴こすりつけこすりつけたり王陵邊の草に

芝草にこすれど落ちぬ靴の裏の牛の糞こそいまいましけれ

文武王陵、土俗これを掛陵といふ。

みささぎに參來る道に石人の帶まで埋み立てらくさびし

千年を立てる石人おのづから土を窪めて埋もれむとす

石人は胡人なりけりちぢれ毛の髯深面の愛憐しきかもよ

昌林寺址

牛が犂く泥田の岸の寺の址の平らされし土は千年をそのまま

田を犂くと大きからだに撥泥あげてきたなきものは牛にしあるらし

遠くには桐の花見え古丘のこのあたり邊は泥田のみなり

牛が犂く泥田の向うの桐の花かがよひにつつ晝闌けにけり

松華山なる金庾信墓に賽す。公は新羅統一の功臣にして、追封して興武大王といふ。墓のめぐりの護石には十二支の神像を陽刻し、その技巧精妙なり。

栲衾の新羅の王のおくつきは鳥けだものら四方八面に立つ

み墓邊の守部が伴と戈とれる鳥けだものの顔の愛憐しさ

戈(ほこ)とらし十まり二つの神居ればここに近寄るまがつみはあらじ

いにしへにありける王(きみ)は獸(けもの)らを守部に立たせ安眠(やすい)したまふ

遠き世の新羅の王(きみ)のおくつきを今日の夕日のしづかに照らせる

下山の道、小古墳多し。

草山の夕かげ行くと古墳(ふるはか)の土の眼(さく)れにつまづきにける

草のなかに口開(あ)くこれの古墳(ふるはか)は掘りかへされて久しくあるらし

西川のほとりに出でて、

背(せ)を屈(かが)め笞(しもと)負ひたる鮮人のむれ一列(ひとつら)になりて岸下り來もよ

岸下りて夕日に向ふ鮮人のむれこの砂川を腰なづみわたる

凍雲集

與謝野晶子

わが心引くに任せて振まはす引くに任せて物思ふのみ

運命も神の御旨も知りやすしその外にある男のこころ

赤くして圓く平たき柿の葉のせりふも云はず土睒し

地のおち葉琥珀の破片紅玉のくだけしものもまた朽ちて行く

たそがれの雲近づきて何ごとか傳へし如く散る木の葉かな

わが身をば散る木の葉ぞと見なされずいや寂しけれ幹と思へば

秋の蜂朱金の羽をしたれども障子下りのたどたどしけれ

金星は一つなれどもあかしやの夕のおち葉かぞへがたかり

断れたる雲は乳房をしたれども枯野は知らず悲しげに泣く

わりなけれ目に浮ぶ世はいと遠し思へることは程も近き死

何故に枝に残ると問ふにかへ半日仰ぐ終りのいてふ

華奢に散る山の桂のもみぢかな日輪の粉のこぼるるやうに

われ出でて君と踏めども豐かなる色におちばの似ざる音を立つ

地の銀杏土とはならで石となるものの如くに透り行く

冬の夜の雨の荒れ行く勢ひに勝れる瀧もいかづちも無し

山の洞立ちやすらへばかはうその皮のここちす雪の夕に

天地が所をまもり靜かなりはた墓のごと覺ゆる夕

山茶花の白よおのれの白さゆゑ常にふるへて生がひもなし

あらがはず傘して雪の日に行くと傘せで行くと異れるのみ

木がらしは木の葉を吹くに氣の上りわれは爐の火に物も思はず

陸奥の旅

野上彌生子

友の家

汽車が盛岡を離れると、私は子供たちに手傳はせて棚の鞄を下し、座席に散らかつてゐた雜誌や、菓子罐や、空氣枕や、戰爭將棋の箱、扇子、手巾と云ふやうなものは、何もかも籐の籠に押し込んだ。これから訪ねて行かうとする友達のK―さんの村は、次の驛で下りて、其處から輕便に乘り換へなければならないと敎へられてゐた。時間表を見ると盛岡から約四十分である。昨夜上野を立つてから十五時間も窮屈な箱の中に閉ぢ込められてゐた子供達には、その四十分が今まで乘つて來た時間よりももつと長く見えるらしかつた。降車の支度が出來ると、彼等はもうかけないで立つてゐた。下の男の子は二人の兄達の間に挾まりながら左右の手頸を替りばんこに覗いて見て、その度にもう二十分だ、もう十五分だと叫んだ。

私自身も落着いてはゐなかつた。その感情は單なる待遠しさや、新たに見る土地に對する旅人の一般の興奮とは違つたものであつた。私は窓際に腰掛け、向ふの空に八月の、もつと正確に云へば八月九日の午前九時過の光線を全面に浴びながら、左の肩に鉈でぶちかいだやうな歪みを以つてがつしりと突つ立つてゐる、一つの立派な山を眺めてゐた。これ

は嚴手山であつた。この山の名前を何かにつけてK—さんに聞いてゐた時から、如何に長い月日が過ぎ去つたことだらう！　半時間前初めて山の姿を眼にした瞬間私を打つたこの感情は、今も胸を離れなかつた。二十年前の女學校生活が、他愛のない夢とお饒舌と盛んな食慾の外何んにもなかつた透明な、明るい過去の斷面が、スクリーンの上の映畫のやうに意識に照らし出された。この時代のお轉婆仲間で今日まで私の友達として殘つてゐるのはこのK—さんだけだと云つてもよかつた。それでなくとも女學校の友達は卒業と共に友情も終りを告げるのが普通であつたのに、私達の學校は（古い有名な學校で、また風變りな面白い學校であつたのが）私達が卒業して四五年もすると潰れて仕舞つて、學校の名前で表面上の連絡だけでも取ると云ふ方便さへなかつたので、同級生は文字通り散り〳〵になつた。何かで懐しく思ひ出すことがあつても、私は皆んなが何處にどう住んでゐるか想像することさへ出來ない程である。斯んな中で二人だけは不思議に交りを絶たなかつた。それだけ仲がよかつたのだと云へば簡單であるが、仲のよいだけならK—さんに劣らない位仲よくしてゐた友達が外にゐなかつたのではなかつた。且つ北と南と生れた土地が五百里も離れてゐたと同じやうに、私達は氣性も傾向も、結婚後の境遇もすつかり違つてゐたし、何年も逢はなかつたこともあつたが、それでも常に友達であることに變りはなかつた。併し打ち明けて云へば、私はK—さんの本統の値打を見出し、それまでの呑氣な親しみとは別な信頼と根強い尊敬を感ずるやうになつたのは、K—さんの身の上に思ひがけない不幸が生じた後であつた。K—さんは高等科を出ると從兄の騎兵將校と結婚した。九年目に夫の中佐が發狂した。二人の間には子供がなかつた。恩給と勳章に附いてゐる金の外には收入もなかつた。この酷い運命を、K—さんは想像し得る限りの素直さで受け取つたばかりでなく、一層驚くべきことには、狂つた夫に對して無事な頃よりも純粹な愛情を捧げることが出來た。斯うしてK—さんは狂人と十年間暮した後、大地震の年の冬未亡人になつた。私はやつと重い鎖から放たれたK—さんの

ためにちよつとした勤め口を見つけてあげて、その時斯う云つた。あなたは今日まであんまり生贄の血を流し過ぎたから、これからの生涯は自分の好きなやうにして樂しむとよい。――K―さんも今一度新しく始める生活に就いて希望をかけてゐた。病室に心を殘さないで門の外に出られるだけでも天國だと云つた。併しK―さんの天國は現はれた後から直ぐ消えた。勤め先に通ひはじめて丁度七日目に、郷里の實家から嫂の死を報ずる電報が屆いた。お兄さんもほんの二三年前に亡くなられたばかりであり後に殘されたのは二人の幼い孤兒と、古い大きな、既に衰運に向つてゐる大地主の家であつた。この子供たちの養育と家の管理のためにどうしても國に引つ込まねばならなくなつた時、K―さんは自ら憫むやうに述懐した。狂つた人の看護婦がやつと免職になつたと思つたら、今度はまた保姆さんだから、私も次々にいゝ役廻りね。――

汽車が迂廻したと見えて、巖手山の窪みはいつの間にか正面に移り、紫色の輝く皺になつて現はれた。一塊の大きな白雲が、その横にぽつかりと浮かんでゐる。頂上に行くほど樹木を失つて、ところどころ赤褐色の粗い肌を露骨にしてゐる山の嚴しい容は、この皺と雲に依つて盛岡の方から仰いだよりも一層印象的な面白い觀物になつた。併し私の興味は今は山から裾野の方に轉じてゐた。綺麗に刈り込んだ芝生のやうな稻、粟、きび、葉のあらびた桑、白い花に茜色の莖を透かした蕎麥、あづき、馬鈴薯――火山灰質の黑い土を蔽うて豐饒に續いてゐるこれ等の穀類や野菜の間に交つて、林檎畑らしい、既に紙袋を附けた棚作りの果樹園が立つてゐるのを見つける度に、私は、今日こそやつと約束の林檎畑を見ると思つた。巖手山とその裾野の林檎畑は、K―さんに絡まる私の古い思ひ出から切り放すことの出來ないものであつた。それにしても、秋になる度に、毎年寄宿舍に送られて來た箱詰の新鮮な林檎を、私達はどんなに貪り食べたらう。當座は唱歌も英語も林檎臭かつた。九州に生れた私が林檎の本統の味を知つたのはこの時だと云つてもよかつた。

同時にまたこれ等の林檎が北國の秋の果樹園に眞つ赤に輝いてゐる光景を想像することは、一つの異國的な詩であつた。K―さんはその林檎畑を見るために、一度どうしても巖手山の麓の家に來なければならないと云ひ張つた。私は屹度行くと約束をした。その代りK―さんも亦九州の私の家を訪ねる筈であつた。黒潮の流るゝ海の蜜柑畑を見る爲に。――私が林檎畑を見たことがなかつたと同じやうに、K―さんは蜜柑畑を知らなかつた。修學旅行で鎌倉に行つた時、長谷の觀音の横で初めて蜜柑の樹を見て、大騒ぎをして悦んだK―さんの若い姿を、私ははつきり思ひ出すことが出來る。何もかも古い昔になつて仕舞つた。而して何もかも變つて仕舞つた。富と名望の備はつたK―家の長女として、あの頃には誰よりも幸福であり、いつまでも幸福であるらしく見えたK―さんが、人一倍苦しい人生を通つて、今はあはれな世捨人である。また偶然の機會からK―さんの田舍を訪ねて、昔の遠い約束を果たさうとしてゐる私は、三人の男の子を持つた、昔の面影もない母親である。

『お母樣、もう直きよ。あと五分。』

相變らず時計の見張をやめなかつた三男は、この時反對の窓際から私の方に振り向いて呼びかけた。私がいつまでもぼんやりしてゐたので、この豫告を特に私に對して必要だと感じたらしかつた。私は立ち上つて子供達と一緒になつた。彼等は同乘者から探り出した知識で、その窓の側がプラットホームだと云ふことを承知してゐた。で私達はその方のドアの傍に集まり、めいめいの荷物を手に持ち、止まりさへすれば降りられるやうに身構へながら、それでも最後の二三分は、K―さんがこの乘換驛まで出てゐて呉れるかどうかを問題にする餘裕があつた。私と三男はそれを信じ、兄達は多分次の停車場だと云ひ張つた。半分は面白さから、私達はどちらも意見を枉げなかつた。汽車はその爭ひの中を鞆地に××驛に駈け込んだ。がたん！恐ろしいはづみをうつて停車した。私達は四人でぶつ突かり合つた。併しその瞬間

に勝利が極まつた。

『K―さんのをば様。』

勝ち誇つた三男は、プラツトホームを私達の箱を目がけて走り寄つたK―さんと、その養子分になつてゐる、見知り越しの學生の方へ子供らしい悦びの聲を張りあげた。

若し私たちが日本人でなかつたら、屹度飛びついて、抱いたり、接吻したりしなければすきなかつたであらうやうな感情が其處にあつた。併しK―さんと私は靜かに微笑し合ひ、丁寧に頭を下げ合ひ、それから次の數語を交換し合つただけであつた。

『やつと來て下すつた。』

『本統にやつと。』

『何んだかまだ嘘のやうだ。』

『私だつて、今になつてあなたの田舍の家が見られようなんて、思ひもかけなかつた。』

全く偶然であつた。ことの起りは夫が東北地方で二三の講演を引き受けたのに始まつた。この旅行は私たちにこの夏を十和田で過すことを思ひ立たせ、その思ひ立ちがまた丁度途中にあるK―さんの故郷を訪ねようと云ふ思ひ立ちを誘ひ出したのであつた。夫は先に出發した。私達はK―家に二晩泊つた後、青森縣の古間木驛あたりで落ち合ふ筈になつてゐた。

『折角入らして貰つたのだけれども、山の外には何んにも見せられるものはないのよ。――林檎畑なんかもう幾つちやゐないし、家は荒れ放題に荒れてゐて、私自身でさへ時々呆れる位なんだから、あなたが見たら屹度喫驚するでせう。』

乘り換へた輕便の最初の驛に當るK―さんの村に降りると、K―さんはそんなことを云ひながら私たちを導いた。驛から邸まで十分とはかゝらないのださうであつた。私たちは驛前の小店の並んだ、正面に巖手山がいよ〳〵間近く迫まつて聳えてゐる道をまつ直ぐに進んだ。店が切れると左右は廣々した稻田と畑であつた。頓てT字形になつた道を右に曲つて、行く手に鳶色の百姓家や、森や、木立にかこまれて伸びてゐる部落を目にした時、取つつきに立つた高い屋根や白い壁の一廓が直ぐ私の注意を引いた。直覺してあれがK―さんの家だと思つた。矢張りさうであつた。表門は廻りになるからと云つて、K―さんは小さい養魚場の傍を拔けて裏から私たちをその大きな家の中へ連れ込んだ。全く馬鹿馬鹿しく大きくて、廣くて、而して古い家であつた。中でも一番新しく――それでさへ六十年前に建て增したのだと云ふ、泉水作りの庭を控えた二間續の閑雅な離室に落ち着くまで、私たちはがらんとした幾つもの大きな藏や、身の丈ほどの雜草に蔽はれた空地や、お寺の庫裡のやうな板張りの部屋や、雨戶を閉め切つた儘の陰氣な長い廊下や、恐ろしく大きな爐を塞いである、踏むと疊のぼこ〳〵する部屋や、それと似たやうな濕つぽい、併し古風ながつしりした飾りつけのしてある部屋、さう云ふものを拔けたり、覗いて見たり、通つたりしたが、どの順序でどう步いて來たかちよつとは分らなかつた。

『斯んなにだゞ廣くても、座敷らしい座敷はほんの此處だけで、あとはもう半分腐りかけてゐるのよ。雨でも降らうものなら、方々漏り出してそれこそ騷ぎだわ。』

『どの位古いの。』

『それが分らないの。村の年寄り達も知らないつて位だから。』

併しこの家を一種特異に印象づけてゐるのは、單に廣さや古さではなく、あまりに人氣（ひけ）なく空虛なことであつた。裏

門を入つて以來、私たちは或る藏の前で莚の上に穀物を擴げてゐたムジツクのやうな二人の下男に出逢つたきり誰にも出逢はなかつた。部屋に落ち着いても洗面の水を持つて來たり、茶菓を運んだりするのは停車場にK―さんと出迎へて呉れた學生自身で、違つた顏は現はれなかつた。寧ろ現はれて來る者が存在しないかの如く、家ぢうがことりともせず靜まり返つてゐた。併し他の者は兎に角としても、K―さんの世話をしてゐる二人の小さい人たちだけはゐない筈はなかつた。私は彼等に對して愛情の交つた期待を持つてゐた。多分二人は、私たちが子供の時分珍しい客に對して示したと同じ無邪氣な好奇心から、一番に飛び出して來るであらう、而してこの短い滯在の間、彼等と私の子供たちはよい遊び仲間になるであらう、と考へてゐたのであるから、彼等の姿を見かけないのは何より當外づれであつた。私はK―さんに二人はどうしてゐるのか、何故此處へは連れて來ないのか聞いて見た。するとK―さんは二人とも非道い羞かみ屋で、知らない人には決して逢ふことが出來ないのだと云つた。

『東北の者は一體にさうだと思ふけれども、殊にK―の家の血筋の者は子供の時分から人馴れない、偏屈なところがあつて困るの。』

『幾つと幾つでしたか知ら。』

『十二に六つ。』

その幼い二人の主人が、伯母を客に取られ、母屋のどこかの隅にぽつんとしてゐるであらう光景は、ちよつと胸の痛い想像であつた。私は馴れた女中でもゐるのか聞いて見ないでゐられなかつた。

『女中たちもゐるし、それに今は妹が子供連れで來て呉れてゐるから、打つちやつておいていゝのですよ。』

K―さんは云つた。併しその說明は私を安心させると共に喫驚させた。それならば可なりな人數が其處には集まつて

ゐる筈であつた。それでゐて何故斯う音もなくひつそりとしてゐられるのであらう。それだけの人の中の誰かの話聲か、どの子供かの元氣な叫び聲が何故聞こえて來ないのであらう。そんなものが傳はるには餘りに遠過ぎるほど向ふと此方とは離れてゐるのであらうか。寧ろそれは距離や廣さや人數の問題ではなく、もつと根本的な、この古い建物自身に泌みついてゐる。人力のどうすることも出來ない寂寥のやうな氣がした。私が東京からK—さんの淋しい生活について考へたことなぞは、まだ生温いものであつたのをこの時はつきり感じた。同時に私は話だけにはよく聞いてゐたK—さんの妹さんに逢つて見度かつたのであるが、云ひ出す勇氣がなかつた。斯う云ふ空氣の中に愼ましく暮らし馴れた人を、それはただ迷惑がらせるに過ぎないやうに思はれた。

そのうちに廊下の方に珍しく多くの足音が續いて、三人の女中が入つて來た。時間過の晝飯を運んで來たのである。正直に云ふと私は斯んな取り扱ひを豫想してはゐなかつた。食事も昔風な大きな爐端で、K—さんや、その預り兒や、若し出來たら下男や女中たちやと一緒に辛い味噌汁でもすゝつて、呑氣な田舍話を聞きながら食べるのを樂しみにしてゐたのであるから、秘藏らしい蒔繪の椀に九谷の皿小鉢を揃へた立派な膳部が、十疊の上の間にずらりと並べられたのを見ると、濟まないと思ふよりは、輕い失望を先づ感じた。私は先刻から池の鯉で騷いでゐる子供たちを庭から呼び上げながら、K—さんに我儘な不平をこぼした。

『そんなことを云つたつてこの家では駄目。殊に妹は私と違つてすつかり昔流儀で、構はないで呉れなんたつて承知する人ぢやないのですもの。だからそんな方面のことは私自身が初めから降參して、妹のゐる間は何もかも任せて置くの。實際私には家の細かいしきたりなんか分らないし、私の流儀で勝手にやるとなるとまた色んな面倒が持ち上つて、空つぽのぼろ家一軒飛んだ世話燒かせだと時々厭になつてよ。でも何か云ふほど御馳走がある譯ぢやないから遠慮なく

召上つて頂戴。――斯んな膳椀だつて、以前と違つて斯んな時にでも使はなければ使ふ時がないから、妹がもの好きに出して見たかつたのよ、屹度。』

K―さんの説明には私の求めた以上のものがあつた。で私も餘計な注文を出さないで素直にこの歡待に甘んじてゐるのがこの場合一番いゝのだと云ふことを知つた。

食事はいづれも味よく甘かつた。北の海の特產らしいほやと云ふ貝は私には殊に珍しかつた。子供たちはまた子供たちで、彼等の大好きなあんずの砂糖煮や厚い玉子燒に大悅びをしてゐた。併しこの食事の間に私の興味を最も深く引きつけたものを正直に擧ぐれば、それは膳の上の食べ物ではなく、前に給仕盆を持つてきちんと坐つてゐる小さい女中であつた。全く小さい。幾ら多く見ても十二にはなつてゐまいと思はれる位の娘である。稍しやくれた小白い顏に、引詰めの束髮を結つて、紺がすりの筒袖に紅い帶を締め、着物の殘り切らしい同じ紺がすりの前掛をしてゐる。それが如何にも典型的な女中で、東京に近頃よくあるお孃さんか女學生か分らないやうな手合とは比較にならなかつた。同時にその小さい女中が、自分の地位と責任を自覺すると共に、能力に於ても十分自信を持つてゐるかの如く、泰然と落着き拂つて控えてゐる恰好は、身體が身體だけに變に滑稽に、また痛々しく見えた。

膳が引かれるのを待つて、私は餘り小さ過ぎる女中に就いてK―さんに尋ねた。

『さう云はれさうだと思つた。』K―さんは私の質問を豫期してゐたやうな調子で語つた。『でもこの邊の農家は、娘が十七にもなればもう百姓のことを教へ込まうとして奉公はさせて置かないのですからね。預かるならそれまで預つて呉れと云ふ譯になつて、ついあんな小さいうちから使はなければならなくなるの。これで昔だと、うちでも小作ばかりでなく大勢の人を使つて色々作らしてゐたので、女たちも一と通りの百姓仕事は覺えたから親の方にしてもさう急いで取

り戻す必要もなかつたやうだし、そのうちにはまた同じ雇人のうちで適當な若者を見立てゝ一緒にしてやると云ふやうな世話まで出來て、双方都合よくやつて行かれたらしいけれども、今ではそんな譯には行かないでせう。――女中のことに限らず萬事が皆んなさう云ふ風なの。昔通りには出來ない、と云つて斯うしようと云ふ新しい方法は極まつてゐないのですからね。何もかも半端でやり惡くて仕方がないわ。』

『小作爭議なんてものは。』

私たちの話はとうとう其處まで行つた。幸ひにこの邊ではまだそんなことは起らない、併し早晩來るべきものは來ると思はなければならないとK―さんは云つた。

『斯んな役にも立たないぼろ家は皆んなこわして仕舞つて、二間でも三間でもよいから必要なだけの小さい家を建て度いと思ふの。さうすれば今までの生活樣式を根本から變へることが出來て、子供たちのためにだつて將來どれ程仕合か知れないわ。――十一や十二の氣持がいつまで續くか分かりはしないけれども、男の子の方は僕は農業をやるのだと云つてゐるの。私がそれは結構だが今までのお旦那樣のやり方ではいけない。あなたが自分で鋤鍬を取つて、土まみれになつて働くのでなければ本統の百姓とは云へないと云つて聞かせると、屹度さうするなんかつて云つてはゐるけれども。――あの兒が一人前になる頃には、今より一層面倒な時代が來るのは分かり切つてゐるのですからね。その時まごつかないやうに鍊へ込んでやるのが、私の一番大事な義務だとは思ふけれども、さてそれが中々思ふやうに行かなくて――』

斯んなことをいろ〳〵考へると、時々毆られたりしても氣狂ひの看護の方が樂でよかつた、と云つてK―さんは冗談のやうに笑つた。

子供たちは學生に連れられて村の方へ見物に出掛けた。私は汽車でよく寢なかつたので、次の部室の隅に座布團を二つ並べて暫く横になることにした。直ぐ眠つた。纏まりのない妙な夢ばかり見た。而して夢がとぎれた時、眼が覺めた。可なり長く眠つたやうに思つたが、子供たちはまだ歸つてゐなかつた。K―さんも見えなかつた。相變らず家ぢうが森閑としてゐる。あたりに誰もゐないので、その寂寞は前より一層身に泌みて感じられた。私は直ぐには起きず、半分眼をつぶつたまゝ、庭の岩組の間から池に注いでゐる小さい落ち水を凝つと聞いてゐた。この水が家の中の唯一のものゝ響であつた。

私はK―さんが來て呉れるのを待つた。顏が洗ひ度かつたのである。でもK―さんは私がまだ眠つてゐるのだと思つてゐるらしく、中々姿を見せなかつた。三十分ばかり私はぼんやり待ちながら、このし―んとした母屋のどの部屋にK―さんは不斷住まつてゐるのであらうかを想像して見た。私は行つて見度かつた。せめて大きな聲で呼んで見度かつた。思つただけでどちらも敢てしなかつた。初の躊躇は其處にゐるのがK―さんのみではないと考へたからであつた。併し後のは遠慮よりは惱れに近かつた。何か一言でも聲を出せば、それは家ぢうに反響をして、怪しく鳴り渡りさうな氣がした。

その内に思ひついたことがあつたので私は庭に下り、泉水の縁にかゞんで注いでゐる水を掬つて見た。柔らかさうな美しい水であつた。洗面器は先刻のがまだ廊下の隅においてあつたのを知つてゐたから、私はそれを持つて來て水を汲んだ。而して顏を洗つたり髮をかきつけたりしてやつといゝ氣持になつたところへ、子供たちが歸つて來た。彼等は色々なものを見て來たらしい。先づ村の公園、坂上田村麿が東夷を征伐に來た時つけたのだと云ふ足跡。同じやうに何

か由緒があるのださうであるが誰も委しくは知らない二つの大きな石ころ。一列の美しい並樹、村役場と駐在所、その隣りに安置されてある赤塗りの立派な消火用ポンプ。それからこれは歸つて裏の菜園で見たのだと云ふ十數匹の兎と數頭の豚。――彼等はこれ等のすべてに就いて委しい報告を交る〳〵私にして聞かせながら、晝寢なんぞして私が一緒に行かなかつたのを非難し、後からでも是非行つて見なければならないと云つた。殊に何よりも兎と豚が氣に入つたらしい三男は、丁度其處へ母屋から出掛けて來て私の案內役を引き受けたK―さんに向つて、他のものはさし措いてもあの可愛い生き者をば見落してはならないから、一番にそれを見せて吳れと忠告した。

頓てK―さんと私は連れ立つて家を出た。三男の折角の忠告ではあつたけれども、もう暮れかけてゐたのと、御飯におくれてはならなかつたので、兎と豚は後廻しにして、先づ公園に行つて見ることにした。私たちは埃つぽい縣道をまつ直に南の方へ並んで步いた。兩側は殆んど百姓屋であつた。村を外れるまで四五町の間にさうでないものとしては、一軒の酒屋と、吳服屋を兼ねた一軒の雜貨店と、一軒の豆腐屋と、それに子供たちの報告で知つてゐた、が思つたより小さい汚い役場と、それに釣合つた駐在所と、隣のポンプ置場を見出したのみであつた。私はこれ等の上に村の反對の方にあると云ふお寺と小學校と七人の敎師と、一臺のオルガンをつけ加へて見ることに依つて、而して尙その上にK―家の法外に大きく古い建物を結びつけて見ることに依つて、村の樣子を構成的に知り得たと共に、村とK―家との關係をも一層明瞭にすることが出來たやうな氣がした。

並樹は村を出端れて頓て公園に近づかうとする道の兩側に續いてゐた。樹は日光の山奧で見覺えのあるどろと稱する柳の種類らしかつた。

『これは私の小學校の時分に父が植ゑたものなの。』

急に暮れたやうに暗くなつた、その中に白樺に似た灰白色の幹だけが眞つ直にしろ〳〵と並立してゐる樹蔭を進みながら、K―さんはさう話して聞かした。

『あなたのお父樣もいろんなことをなすつた方のやうね。』

『それも必要となれば、人のことでも村の世話でも損徳を構はずやるつて風でしたから、其處が父の立派なところには相違ないけれども、後始末をさせられたものはいゝ迷惑なの。ですから私は兄が一番可哀想だと思ひますよ。やつと一人前になるかならないから苦勞し拔いて、どうにか家の整理もつきさうになつたところへ亡くなつたのですからね。』

私たちの斯んな話は、暗い並樹から今一度明い公園に出て、その廣場に立つてゐる一つの大きな石碑の前に來るまで止まなかつた。これはK―さんのお父樣の彰德碑で、公園はその碑と、右手の小高い岡にある產土の神の社を中心にして出來てゐるやうであつた。元より大した設備はなかつたが、池や、花壇や、櫻を植ゑ込んだ土堤や、自然のまゝを利用した森や、それ等を繫ぐ小路などに依つて、殊にこの邊で最も間近く眺められる巖手山の見事な眺望に依つて、意外に美しい一廓を作り出してゐた。これ等は故人の名譽を記念する意味もあつて、K―さんの兄さんが主として拵へたものだと云ふことであつた。

『兄はまだ色々手を入れた上で、土地と一緒に村に寄附する積りだつたらしいの。私も、ですから兄の遺志通りやつて仕舞つた方がよいと思つてゐるのだけれども、少し行違ひがあつたりしてまだその儘になつてゐるのです。』

その行違ひがどんな事であつたかはK―さんは委しくは話さなかつた。併し聞いただけで判斷すると、原因は村の者が公園の土地は貰ふまでもなく自分達のものだ、と極めてゐるところにあるらしかつた。

『何んとか云ふなら、石碑なんか何處へか他のところへ移して呉れ、と云ふ態度で、それで修繕や手入だけは當然私の方がすべきものだと云ふのですもの。』

この蟲のいゝ話は流石のKーさんをも呆れさせたらしかつた。併し考へて見ればと、Kーさんはもう諦めてゐた。あの石碑から昔の感激を呼び醒まされるやうな老人達は少なくなつたのだから、どんな取扱を受けるやうになつても仕方がないであらう、而して長い年月の間には、多分櫻の土堤の前に轉がつてゐた石臼の窪みのやうな田村麿の足跡や、傍の二つの得體の知れない石塊と同じ運命に陷るであらう

歸りには日が入つた。ほんの少し前まで紺と金のほのかな輪劃を輝やかしてゐた巖手山が急に眞つ黑な巨大な塊まりとなつて私たちを追ひ立てた。並樹の中は殊に夜であつた。而してこの暗さが、頭の上に細長く仕切られた、まだ褪せきらない葡萄色の空に奇妙に鮮明な薄あかりを保たした。星が秋のやうに冴えてゐる。さう云へば日中も汗一つ出なかつたのが、夕方からはさうやつて歩いてゐても涼し過ぎる位であつた。この樣子だと十和田はもう寒いかも知れない。私たちは浴衣の袖を搔き合せ、そんな話をしながら並樹を拔けた。

丁度その時であつた。向ふの方から一人の黑い馬に乘つた男が、揃つたギヤロツプで、夕方の一と乘りを樂しむかの如くまつしぐらに駈けて來た。一本道で廣くもないのに、餘り勢よく飛ばして來たので私たちは稍周章てた。最初は一緒に遁げようとして暇がなく、左右に別々になつてやつと身を交はした。騎手はその間を勇敢に突つ切つた。珍らしく洋服を着た若い人であつた。兩脚でぴつたり馬を締めつけ、左手に手綱を執り、右手に鞭をあげ、小柄な上半身を前屈みに躍り上るやうにしながら、並樹の闇の方へ駈け去つたのを見送つてゐると、中學時代から馬ばかり乘つてゐたと云ふ、故人の中佐のことがふと胸に浮かんだ。

『あゝやつて此處いらを乘つてゐらしたのね。』

この聯想を私は口に上せないではゐられなかつた。K—さんの考へ出してゐたことも他のことではないやうに見えた。狂つた意識の中でも馬だけは忘れなかつたと云つた。

『それ位だから、士官校に入る前にもう一つぱし立派な乘り手になつてゐましたわ。私なんか子供の時分にはよく一緒に乘せて貰つたものなの。』

K—さんの調子には優しい思ひ出が籠もつてゐた。私は、十以上も違ふ而して後では夫であつた從兄の鞍の前に乘つて、この田舍道を駈け廻つた當時の無邪氣な小娘を思ひやつた。それにしてもこれ等の可憐な美しい牧歌が、あの意外な怖ろしい Finale を持ち來たすことを誰が豫想し得たであらう。

百姓屋には既に灯がついて、木立や垣根の間から淋しい瞬きを往來に投げてゐた。あれつきり誰にも逢はなかつた。一軒の家に赤ん坊が啼いてゐた。風が出た。風が出た。私たちはその中をもう何んにも話さないで、足だけ早くして歩いた

明けの朝は、いつもの癖で五時には眼が覺めた。子供たちはお揃ひの古風な絹夜具の中でまだよく眠つてゐた。私は彼等を醒まさないやうに氣をつけて蚊帳を拔けた。雪に埋められる長い冬の用意のために雨戸に摺硝子の明り取がついてゐるので、部屋の中は割に明るく、而して上天氣のやうであつた。念のために一枚開けて見ると、開けた幅だけ一杯に爽快な光が溢れ込んだ。これで安心だと思つた。今日は盛岡に行つて見る筈であるのに、昨日の夕方のやうに巖手山があまりに濃くはつきり見る時は、雨になり勝ちだと聞かされて心配になつてゐたのであつた

母屋の方の沈默は昨日と違はなかつた。Kーさんたちはまだ寐てゐるのか起きてゐるのか、そのけはひさへ分らなつた。どちらにしても召使の者だけは今まで寢てはゐないであらうから、あの小さい女中でも見つけ出して身仕舞ひの水を貰ひ度いと思つた。今一度泉水の落ち水を利用すればよいやうなものゝ、嗽ぐのは少し不安であつた。私は何處へか出口のあるらしい、葡萄棚や大きな梨の木のある露路を一つの藏に沿うて行つて見た。思つた通り藏の盡きたところに木戶があつた。併し木戶には頑丈な鍵がかかつてゐた。私はちよつと落膽(がつかり)したが、その後から急におかしくなつてひとりで笑つた。運よく木戶が開いてゐたにしても、勝手の分らない廣い邸內で、取り分けあの豆のやうなちびが如何に困難な探し物であるかを思ひついたからであつた。で、兎に角出來るだけのことで我慢しておくことにして、私は泉水のところへ引返して、髮を結ひ、顏を洗ひ、それから汽車で汚した手巾など洗濯して庭木の枝に干した。子供たちも頓て起きて來て騷ぎ出したので、その物音を聞きつけたと見えて、私の探した小さい女中が、殆んど彼女の脊丈に近い、赤塗りの手のついた水桶を提げて庭先に現はれた。何と云ふまた時代なものを持ち込んで來たことであらう。——吃驚して眺めてゐる私の前に、運び手は相變らず大眞面目で、寧ろ一つぱしの女中らしく氣取り込んでそれを据へた。その樣子が、水桶そのものゝ餘りの古めかしさや、またそのちびをわざ〳〵見つけに行つた先刻の間拔けな搜索を思ひ出すことと一緖になつて、今一度不意なおかしさに私を捲き込んだ。私は笑ひながら、而かもおかしいと思へば思ふほど彼女が可愛くなりながら、慇懃にお禮を云つた。

『どうも御苦勞樣。』

盛岡は噂に聞いてゐた通り、北に見ゆる巖手山の眺望と、町中を貫通してゐる北上川と中津川の二つの流を持つて、落

ちついた氣持のよい市街であつた。私たちはK―さんに隨いて、川添ひの、瀟洒な町や、銀座と云つたやうな目貫の大通や、古い鐵瓶と共に今ではこの町の名物である原さんの邸の白い塀や、南部氏の舊い城趾の公園や、合歡花の咲いた靜かな屋敷町、斯んなものを順々に見て歩いた。而してこの合歡花が、風土に叶つてゐるかしてどの樹も見事にのびのびと成長して、あの獨特に纖細な綠葉を茂らせ、その間に房のやうな桃色の花を群がらして立つてゐる光景は、私には意外に美しい發見であつた。實際この優美な樹が、街路樹のやうに至るところに見出される町を私は今まで見たことがなかつた。一つはそれで珍しかつたし、また町の中の綺麗な流や山の眺望に就いての如くに、この樹のことは前に聞いてゐなかつたので驚いたのでもあらうが。さて一と通りの見物を終り、川の一つを見下ろす鰻屋で空になつた胃の腑を充たし、それから林檎だの桃だの、お菓子だのと慾張つて買ひ込んだ荷物をめい〳〵にぶら下げて停車場に馳けつけて、丁度入つて來た汽車に乘り込んだ後、この町の印象として何が最も强くあとまで殘るであらうかを考へて見ると、矢張りあの合歡花が一番であるらしく感じられた。少くとも最初或る橋の袂で見出した一本のすらりとした若い合歡花を、私はいつまでも忘れないであらう。樹下には瓜賣の爺が瓜の入つた籠を横たへて休んでゐた。向ふの川の中では裸體の子供たちが大勢水を浴びてゐた。鐵砲を擔いだ兵隊が二人橋を渡つて歩いて來た。――

其夜K―さんと私は、疲れて食事がすむと直ぐ寢てしまつた子供たちの蚊帳の外で、おそくまで坐つてゐた。明朝は一番の汽車で立たなければならないのであるが、いつまたこの部屋で斯うして話すことがあるだらうと考へると、床に入る氣になれなかつた。それにしてもよくこそ來て見たと思つた。私にはK―さんの田舍の生活は來て見るまでもなくよく分つてゐる積りであつた。併しいよ〳〵來て見てこの死んだやうな村と朽ちかけた廣い家を見、その中に充ちてゐ

る寂寞と空虚に觸れて見た今では、自分は本統は何んにも分つてはゐなかつたことを知り、同時にK―さんの手紙に折折入つて來た溜息の意味をも初めて正しく解することが出來た。正直に云へばK―さんの愚痴に對しては私は十分の同情を持ちながら、時には斯んな氣がしないでもなかつた。ものは思ひやうだ。K―さんがあのまゝ東京で働いて暮してゐたとしても、眞に幸福であつたかは疑問である。社會は或る場合犬よりもより以上怖ろしい狂人である。K―さんは過去の十年間愛に依つて漸く堪へ忍んだ苦痛を、義務の苦い涙で今一度我慢しなければならないであらう。それから思へば田舍の淋しさや孤獨は何んでもない筈である。山の麓の靜かな村、先祖から住み古した立派な威嚴のある家、其處で二人の小さい甥姪と送る閑寂な生活。事情に依つては出來る範圍で何か村の爲になるやうなことを企てゝ見るもよい。K―さんのやうな性格を持ち、K―さんのやうな運命に陷つた者に取つては、これは理想的な境地であり、ひどくローマンチツクでさへもある。さうとも、これで愚圖々々云へばK―さんが間違つてゐる。――私はこの殘酷な批評をその夜隱さず打ち明けて、若し今度來て見なかつたならば、同じやうな考へ方をこの後もしたかも知れないと話すと、K―さんもさう落ちついて暮らすことが出來れば一番よいのだ、とは分つてゐるけれども、それには自分自身があまりに偉くなさ過ぎる。打ち明けたところ、今の生活が自分の本統の生活とはどうしても信じ切れない。あの可哀想な子供たちのために今一度犧牲になることが必要だとは思つても、心の底から悅んでなつてゐるとは公言することが出來ないと云つた。

『それでも今は氣候もいゝし、妹も來てゐたりすれば何んとか紛れてゐられるものゝ、軈て冬になり、明けても暮れても雪の下で、誰一人話相手もなければ、これと云ふ用事もなく、凝つとひとりぼつちで蟲のやうに生きてゐることを想像して見て頂戴。どうかするとあんまり淋しくて、孤獨で、氣が變になりさうな感じのする時があつてよ。』

私は話をそれ以上重苦しくしないために、わざと丁寧なお辭儀を一つして見せて、今後はどんな愚痴をこぼさうと不平を並べようと決して非難しないことにすると約束したので、K―さんも笑ひ出しながら附け加へた。

『尤もね、私の家が以前ほどでなくとも今少し財政の方でしつかりしてゐれば、氣持もその點だけ樂な譯だし、どうせ悟り切れないにしても幾らか暢んびりなれると思ふけれども、それが斯んな有樣ですからね、一層いけないのですよ。』

併しこのことは他の話のやうには私にぴつたりしなかつた。衰へたと云つたところで、これだけの家で、そのためにK―さんの心を餘計に暗くするやうな心配があらうとは考へられなかつた。寧ろこれ等の古雅な部屋や、立派な調度や、絹夜具やの中では、貧乏話は最も不似合なもの丶如くにさへ感じられた。私は困ると云つてもどの程度に困るのか、無遠慮に聞いてよければと、K―家の程度の地主の收入の年額はどの位あるものか尋ねて見た。うちの例で云へば、昔の十分の一にも當らないのだが、それでも一萬圓位はあると云ふ返事であつた。私はちよつと驚いた。なら貧乏どころの騷ぎではない。――併しその一萬圓から殆んど七千圓以上の地租稅や銀行利子が支拂はれなければならないのだと聞かされたので、今度は呆れてしまつた。

『この家に住まつて、昔の格式を守つてゐる間は、幾らなんでもそれだけではやつて行けないでせう。ですから年一年と餘計に苦しくなるばかりなの。この邊の古い地主の家では、大抵斯んな狀態になつてるところが多いらしいわ。それなら持つてゐる山林や田畑を手放して整理をつければよささうなもの丶、さう云ふ人たちに取つては、代々の土地を賣るのは領地に離れると同等に不面目なのだからとてもそんな勇氣はないの。たまに思ひ切つてやらうとして見たところで、そんな纒まつた賣物を誰が買ふ人があるでせう。買へさうな地位にある人が同樣に困つてゐるのですもの。これでも私の家なぞは、父の死後に兄が苦しんで整理して與れたお蔭で、これだけでもどうにか取り留めたもの丶、親類なぞ

の中には隨分氣の毒なものがありますよ。もう格式なんか云つてはゐられないから役場の小使でも驛夫でもよいから働き度いと云ふのに、それさへ出來ない、――旦那衆を使ふ譯には行かないからつて、斯うですからね。』

Kーさんの話に熱心に耳傾けてゐる間に、私はいつとなく『櫻の園』を思ひ出してゐた。假令Kーさん自身はラネフスカヤ夫人ではあり得ないとしても、ガーニフやシメオーノフは幾人かゐるであらうし、殊に『旦那方は百姓を、百姓は旦那方を賴りにしてゐらしたのだからな。ところが今ぢや皆んなてんやわんやだ。何が何やら譯が分らない。』と呟いた老下男は、昨日藏の前で、籾乾しをしてゐた年取つた作男たちの中に屹度交つてゐさうな氣がした。同時にまた私は考へた。彼等の土地を奪ふために將來のロパーヒンが果してどんな姿で現はれてくるかは極めて重大な問題であるであらうと。

時計を見ると十二時を過ぎてゐたので、私たちはやつとお休みなさいと云ひ合つて別れた。一人になつても私は何んとなく直ぐには眠れなかつた。枕に頭を載せたまゝ凝つとしてゐると、あの芝居の最後の幕切れで舞台の後に起つた伐木の音が、どこか裏の邊から傳はつて來さうに思はれた。併し私の聞いたものは、夜更けて急に高くなつた池の落ち水の響であつた。

宇樽部まで

明けの日の午前十一時過、私たちはKーさんの村から、十里の北にある古間木で汽車を捨てて、其處から十和田行の自動車に乘り換へた。汽車で降り出した雨は、時と共にひどくなるばかりであつた。目的の湖水に達するまでには、その中をなほ十三里半奥へ進まなければならなかつたのであるが、それでも私たちは行手にかけてゐる多くの期待のために悄げ込みはしなかつた。殊に子供たちは父が豫定された驛よりも手前で一緒になつたことから、――それもたつた一

停車場しか違はないのだけれども——この上なく上機嫌になつてゐた。私たちは十日間別れてゐた間の出來事や、お互ひの旅行について何もかも話さうとし、聞かうとした。縣廳の人たちの案内を受け、一昨日湖水に行つて見て昨日引き返して來たばかりだと云ふ彼は、既に一つぱしの十和田通になつて、その土地の想像以上の美しさを語つて聞かせながら、今年の夏もまたこの十和田道を四度通ることになる、と云つて笑つた。私たちの夏の旅行では父は屹度斯う云ふ役廻りになつた。先づ暑中休暇が近づき、今度は何處に行くべきかゞ問題になつて、(景色がよくて、靜かで、勉强が出來て、子供たちのためには泳ぐか漕ぐかの樂しみが與へられて、而かもなほ金のかゝらないところでなくてはならないのだから、遠い、人のあんまり行かない山の中の湖畔がいつも選び出される。)漸く場所が極まると選擇が正しかつたかどうか確めるために、彼が一人だけ先に出掛けて見て、その上で家族を迎へに來て吳れると云ふ順序になるのであつた。日光の湯元で暮らした夏には、十日ばかり早く歸つた私たちを汽車まで見送つて吳れたりしたので、終に一と月の間に日光の山を六遍まで登つたり降つたりした。

自動車は降りしきる雨の中を勇敢に突進した。幌のために眺望を妨げられたけれども、セルロイドの窓と運轉手台の隙き間を通して、私はそれでも自分たちの駈けてゐるひろ〳〵した平坦な原野を見ることが出來た。時々森が現れる。既に開墾された整然とした耕地がその間に交つてゐる。それが盡きたと思ふとまた石ころと雜草の擴がりになる。人家らしいものは殆んど見えない。如何にも廣漠とした、ゆとりのある、大きな土地と云ふ感じである。これは、東北地方が一般に持つてゐる特色であらうし、今までの僅かな旅行の間にも私は何よりもそれを感じたのであるが、鐵道の沿線から離れ、太古の荒蕪のまゝ放棄されてゐるこのあたりの地方に於て、その印象は最も著しく受け取られた。話によれば、青森縣はまだ二三十萬人の移民を納れる餘裕があるのだと云ふことである。明治の初年その計畫は一度實行され、

當時の移住民に依つて作られたもので、今では附近で唯一の繁華な町になつてゐる三本木は、古間木から四里駈け續けた後、漸く私たちの前に現はれた。

大して立派ではないが、割に大きな揃つた家が、北國風の深い軒を並べ、ペンキ塗の西洋館擬ひの建物を、間にちよい〳〵交へながら、平野の上に、何等の背景もなく、一列に、淺薄に續いてゐる。而して道路だけは普通の田舍とは比較にならない程幅廣く眞直ぐに通つてゐる。北海道の町は多分斯んな光景であるかも知れない。——その廣い一本道を町の端から端にかけて縱に突つ切つた間の瞥見に於て、私の感じたものはそれだけであり、それだけ感じればそれですむやうな町らしかつた。

雨は根氣よく降り續ける。私たちの自動車は、この忌々しい邪魔物にすつかり逆上して、もう自棄くそになつたかの如き勢で飛んで行く。田舍のこの種類の交通自動車こそ凡そ傍若無人なものゝ標本だ、とはいつても旅行の度に感ずることであるが、それが斯んな發作に陷つた場合のもの凄さは想像されるであらう。その後の六里ばかりの間は、私たちは乘つてゐたと云ふよりは鞠のやうに轉がり、操り人形のやうに踊り、喧嘩のやうにぶつつかり合つてゐたに過ぎなかつた。これで續けたら、行き着くまでには皆んなの內臟の位置が顚倒して仕舞ふに相違ない。——私たちは半分腹を立て、半分をかしがつた。唯一の救ひは向ふに下りの自動車が現れる時であつた。同じくぐしよ濡れに、泥まみれになつた仲間は、同じく不機嫌に焦慮れ込んで馳けて來る。元より一本道で、それも一台の自動車が漸く走るに足るだけの道幅しかないのだから、何處でやり過すかは大問題である。私たちの自動車はこの危險に面して初めて粗暴なヒステリを收める。而して愼重な警戒を以つて徐行しながら、それと見て同樣に速力を弱めた相手の方へ進み寄る。ショフアたちは雨覆から半身乘り出して指圖し合ひ、助手の男たちは双方の車から雨の中へ飛び下りる。斯うして二つの車は決して

通れる筈のない道を危い角度ですれ違ひ、やつと衝突を免かれて別れる。私たちの自動車はその間の遅延を取り戻さうと今一度怖ろしい勢で駈け出す。――何遍か同じことが繰り返された後、焼山と呼ぶ小さい村に入ると、途中旣に出逢つた筈で、雨のため見ることが出來なかつた一つの廣やかな流が直ぐ目の前に横はつてゐた。これは奥入瀬川であつた。私たちの取つたやうな道順で十和田に向はうとする旅人たちで、この村から湖水まで三里半續いてゐる奥入瀬の溪谷の魅力に就いて聞いてゐないものはないであらう。私たちにしても案内書やそれより確かな夫の言葉で十分な空想を拵へあげてゐたので、村から一軒だけ離れて、前に裸馬の遊んでゐる小さい牧場を持つた、如何にも山中の孤屋と云つた感じの休み茶屋で一と休みした時には、いよ／＼これからだと云ふ氣がした。たゞ、今渡つて來た一部の奥入瀬の黄灰色から推して、溪の方も濁つてはゐないかゞ心配であつたが、その代りに休んでゐた間に雨があがりさうになり、かすかに日射しさへ洩れて來た。私たちは自動車の横幌を外づして新たに出發した。

左は山に添ひ、右手に灌木の低い森を眺めながら、私たちは野生の芝草が細かく、青々して、まるで植ゑつけたやうに生えてゐる道を乘つて行つた。この芝が森の中まで續いて、木立の疎らなところには、茶色や黑や斑色の大きな牛が呑氣らしく蹲まつてゐたりしてゐる有様は、深い山の峽に入つて行くと云ふよりは、何處か廣々した高原にでも出さうな感じを見る者に與へた。併し森は直ぐ切れ、溪流と高い瀨の音が私たちの錯覺を破つた。水は氣遣つた通り濁つてゐた。でもそれを殘念がる氣持を一時忘れた程、私たちの目の前には珍らしいものがあつた。流の中に島と呼ぶにはあまり些やか過ぎる洲が、位置を計つてわざと並べたやうに散らばつてゐる。一つ一つの洲に橡や楢の老木が鬱蒼と生ひ茂つてゐる。對岸の突つ立つた山の奥から新たな川が走り出て本流と一緒になつたところでは、洲は稍大きなデルタになり、そのまゝ見事な森に成長してゐる。何かの機會に山から墜ちて來たか、岸から崩れ落ちたであらう一塊の岩さへ、

深々とした苔を纏ひ、木賊の高い茎を簇らがらせ、見上げるやうな喬木を戴いてゐる。また或る場所では洲は殆んど水中に沒して、其處に咲いた濱紫陽花に似た優しい花を、丁度水盤に盛つた花のやうに流の上に浮べてゐた。

軈て簡素な木橋にさしかゝると、道は橋と共に向側に移つた。私たちはそれまで裾を繞つてゐた山や、乘物の上に高く生ひかぶさるのを見上げて來た木立を、今度は溪流を隔てて臨みつゝ進んだ。旅人に取つてこれは一種懷しい轉換である。而してこの轉換はその後三四の橋を迎へる度に繰り返され、またその度に目に入る光景も改まつたのであるが、例へばこんもりと厚い樹木に包まれてゐた山が、水成岩質の斷ち落したやうな絶壁に代り、それに白い布とか白い絲とか、その他さま〴〵な名前で飾られた瀧が、名前に似よつたやうな形で到るところにかゝつてゐるかと思ふと、瀧に劣らぬ象徵的な名前を持つた瀬や、潭や、渦卷が次々に溪流を變化づけて現はれると云ふ風であつたが、併し、どの部分にも、水の上には最初見たやうな洲があり、洲があれば必ず樹木や、鮮やかな綠草や、愼ましやかな幽谷の花に蔽はれてゐることだけは變らなかつた。實際、奥入瀬の魅力の一半はこの可愛らしいデルタの散在だと云つても間違はないであらう。而かも他の深い溪谷を通つて下の面白い景色を眺める場合のやうに、高い距離から覗き込んでやつともどかしく瞥見するやうな不便が此處では除かれてゐる。道が低く、流に接して作られてゐるからである。手を伸ばせばデルタに達きさうな氣がする。或る場所では岸に溢れた水を轍でこね返しながら進む。斯んなことがこの溪谷に對する旅人の感情をどんなに親しく濃やかにしたか知れなかつた。私たちは單に美しい景色を眺めて行くと云ふよりは、岩根を分け、流を渉つて、眞に溪谷の底を潜つてゐるかの如き悦びを味つた。時間さへ許せばさうやつて本統に歩いて見度いものだ、と話し合つたが、その望みが十分もたゝないうち叶へられようとは、その瞬間まで思ひもかけなかつた。

三分の二來たと云ふ頃であつた。稍斜面になつて脚のやうに突き出た坂道を、私たちの運轉手は槓桿を引き、一氣に

のだ、と話し合つたが

急カーヴで駈け上り、その儘駈け下りようとして俄に進行を留めた。五六間向ふに一台の自動車がパンクしたらしく、鋭い爆音を擧げながら道を塞いでゐる。燒山の休み茶屋を一と足先きに出た自動車だと分つた。私たちの運動手は助手と共に車を下りて様子を見に行つたが、直ぐ引き返して來た。修繕が利きさうもないので、燒山から三本木に電話をかけて別に車を呼び寄せることになるであらうと云ふことであつた。やがてそれに極まつたと見えて、向の車からは白い洋服を着た年配の父親と、割に若い綺麗な母親と、小學生の制服をつけた十一二位の兄弟らしい二人の少年、これだけの乘客が下りて來た。而して如何にも當惑し切つた面持で流の端に並んだ彼等を眺めた時、また代りの自動車が十里以上の向から救ひに來るまで、その儘其處に待たなければならない彼等のことを考へた時、私たちは知らぬ顔でその前を駈け過ぎる氣にはどうしてもなれなかつた。窮屈でも構はなければ一緒に乘つて行くことにしてはどうかと、私たちは運轉手を通じて申込んだ。彼等は悦んだ。運轉手たちも有難がつた。で、早速座席を整理するために私たちも一と先づ車から下ることになつた。この意外な僥倖を、どんなに嬉しがつて私たちは利用したことだつたらう。殊に子供たちは大はしやぎで水に近づき、危い石ころを飛び渡つて見たり、岸に突つ立つた素破らしく大きな樹の周圍を計つたり、珍しい苔を取つたりした。三男は青い橡の實を一つ拾つて寶石のやうに大事がつた。その内に用意が出來上つて私たちは呼び戻されたが、見ると自動車は中から取り出された私たちの二つの大鞄と、向の車から運んで來た同種類の荷物で、掩堡を築いたやうに外側を取り巻かれ、麻縄で嚴重に固められてゐた。これで兎に角鞄二つだけの場所は當然空いた譯であるが、併し新たな四人をその隙間だけに押し込んでおく譯に行かないのは勿論であつた。私たちは出來るだけ身を縮め合つた。それでも足りないので向の奥さんは弟の子供を、私は三男を抱いた。九つの健康な男の子は、幾ら母親の膝でももう決して有難い荷物ではない。その上足の下には何か詰められるだけ詰まつてをり、頭の上にも同じやうな細

細したものが附つ着けられてゐると云ふ始末であつたが、その重たさや、息の苦しい程の窮屈さが、私には奇妙に愉快でさへあつた。斯うして古つぽけた小型のフオードは、定員の二倍の旅客を積み込み、五個の鞄をその周圍に縛りつけ、はみ出した助手の若者は外部に鞄と並んでぶら下らせ、而して今一つ、他人に邪見にしないでよかつた、と云ふ私たちのかすかな自己滿足をも一緒に乘せて、奧入瀨の起點に當る湖畔の子の口に頓て到着した。——其處に出る少し手前で、左の山から續いた暗い樹林を拔け、右の谷に小さい泉水のやうな池を見下ろしながら、その池の端に渡してあるささやかな橋を隔てゝ十和田の目覺めるばかり美しい紺碧を望んだ光景は、數年前精進湖に行かうとして、青木ケ原から赤池の上に出て、向ふに湖水を見出した時のことを私たちに思ひ起させた。

橋を渡つた上の山に立つてゐる、新しい旅館の休憩所で私たちは同乘者と別れた。この子の口は、湖畔ではほんの取つつきの足溜まりに過ぎないで、旅客は此處から船で湖を渡り、湖の中に西の方から並んで突き出た二つの大きな半島に沿うて、周圍の美しい景色を眺めながら、その向側にある休屋と呼ぶ村に落ちつくのが普通ださうであつた。併し私たちは直ぐには出發しなかつた。本統を云へば、何處に落ちつくかまだ極めてゐなかつた。夫は自分の二日間の觀察で、子供連れで机でも抱へ込んで長く滯在しようとする者には、休屋は土地も宿屋も不適當だと信じてゐた。案内の同行者は、子の口からすぐ隣りの入江に當る宇樽部を奬めたが、時間がなくて廻つて見られなかつたと云ふことであつた。考へた末、私たちの選擇は宇樽部の方へ傾いた。樣子の分らないその土地も、休屋へ行つて、夫も泊らされたと云ふ、其處の唯一の都會風な旅館とされてゐる世界公園館なるものに落ちつくよりは、より少ない冒險の如く感じられた。併し念のために宇樽部に宿屋があるか休憩所の男に尋ねて見ると、一軒だけあると云ふ返事であつた。で今一度、十和田の遊覽者で、宇樽部を名指して行く人があるかどうか尋ねると、そんなお客さんは殆んどない、と彼は無愛想に

云つた。この答は私たちを滿足させると共に、少しをかしく、氣の毒な氣持にした。休憩所は、その大げさな名前に依つて先づ私たちを怖れさせた世界公園館の支店であつたから

山の下の棧橋から、其處に繋いであつたモーターボートの一つに乘り移つて私たちは子の口を離れた。船頭は黒の詰襟に水兵帽をかぶつた若者であつた。徽章には本物の水兵帽が所屬の軍艦名を現はしてゐるやうに、金モールでちやんと世界公園館と縫取りがしてある。この名前が斯う至るところに跋扈してゐるやうでは、宇樽部が果してこれ等の雰圍氣から獨立してゐるかどうか危まれたが、併しそんな心配を知る筈のない若い船頭は、悠然と艫に坐り、正宗の空瓶に入れた石油を時々膝の前の汽罐に注ぎ入れながら、進路を左に取つて、左岸の山々と、向にまつ直ぐに伸び出た半島に依つて作られた半環狀の湖面を、丁度環の中央部に當るのだと云ふ宇樽部をさして辷つて行つた。空はすつかり晴れ上つて、午後四時過の太陽が半島の約一尺ばかりの上から燦然と輝いてゐる。湖の色はます／＼美しい。記憶に誤がなければ、十和田の透明度はフオレルの第三號であつた。取り分け殆んど完全に紫である高貴な水色は、私たちが今日まで知つてゐる十あまりの湖水の中でも比類のないものであつた。同じフオレルの標準から私たちは日光の奥の菅沼を思ひ浮べたが、併し菅沼には斯んなに明るく漫々と滿ち擴がつた豐さはない。而して水の色にも藍が勝ち過ぎて、重苦しく、壓迫的である。胃弱性の者は長くこの水を見てゐるに堪へられないであらう、私はあの沼を小舟で横ぎりながらさう考へたのを、今でもはつきり覺えてゐる。

不圖氣がつくと半島の頸に當る森の一點がかつと火のついたやうに赤くなつた。その火が丁度ナトリユムを燃やした時の如き輝やかしい黄味を加へてあたりの密林に擴がつたと思ふと、それまで厚い枝と葉とをあぶつて寂寞と立つてゐた森の樹が、一本々々珠なりに燃え上り、その珠が無類にもく／＼と重なり合つて、金と朱と黄色の錯綜がした、云ひや

うもない美妙な光と色の集團を作り上げた。同時に天は一枚の黄金であつた。而して湖は、私たちがたつた今までその美麗さを讃め稱へてゐた紫を、急に黝ずんだ銅鐵色に變へて、嚴かに沈默した。私たちは茫然とした。思はず驚くべきものを眼にした時の現つなさで、ものも云はずにこれ等の不思議に眺め入つた。古代の希臘人が不死の神の輝く捲毛をこの太陽の中に見出し、美しい水のニンフやドライアツドや、乃至もの怖ろしげな怪物たちを森や湖邊や水の底に住まはせなければならなかつた氣持が、その儘私たちの胸に浸み入るのはいつも斯んな瞬間であつた。實際にこれが半島の向側にその時沈んだ落日の斜光に過ぎないとは信じられなかつた。さう信ずるのは寧ろ間違であるやうに感じられた。船が入江の汀に近づいた。後に山を負ひ、麓から緩やかな斜面を描きながら、湖の緣まで開く擴つたやうな土地が其處に見出された。波打際には芦の茂みに交つて高いどろ柳が並んでゐる。後は畑らしい。家は正面の小さい棧橋から奥に引つ込んだ高みの木立の間にトタン葺の一棟が見え、その他には山の裾に二三の藁屋根が立つてゐるだけであつた。多分、水の上に遠く響いた發動機の音を聞きつけて小屋から飛び出して來たのであらう、裸身のまつ黑な子供たちが數人、濱邊の夕日の中に佇んで、もの珍らしげに私たちを眺めた。

『ひどくルーラルだね。』

『本統に。』

二三枚厚い板を水の上に突き出したばかりの棧橋に船が留まつた時、私たちは期待以上のものを見つけた場合の一種滑稽な滿足で顏を見合せた。此處ならあの子供たちと同じく一と夏裸身で暮らしても暮らされるのだと思つた。それにしてもどんな宿屋があるのだらう。向のトタン屋根が屹度それらしかつたが、木立に妨げられてよく見えなかつた。世界公園館には辟易しても、またあんまりひどい田舍宿では困るに相違なかつたから、私たちは先に立つて爪先き上りの

路を家の方へ歩いて行く船頭の後に從ひながら、船に乘つて、彼の帽子の徽章を見た時とは今度は反對な心配を始めてゐた。併し着いて見ると意外に立派な家であつた。而して子の口を出る時かけさせて置いた電話で用意しておいたと云ふ部屋は、湖に面した奥の十疊で、中央の三尺四方もありさうな桐の大火鉢には、冬のやうに赤い火が熾り、鐵瓶が沸つてゐた。私たちは部屋に入るとその火鉢のまはりに集まり、火の上に手をかざすのが樂しかつた程、日の落ちた後の湖は冷かつたのであつた。

主人だと云ふ五十恰好の、口髭を生やした中脊の男が入つて來た。彼は宿屋の亭主よりは、知るべの村長さんと云つた態度で話したが、話の内容も宿屋離れのしたものであつた。彼は自分の家は人を泊めるのが專業ではない。——私たちは店の硝子戸棚に酒や、ビールや、煙草や、紙や、その他の雜貨を既に見てゐた——從つて客部屋としてはこの十疊と、次の村の通りに向いた十二疊と、外に二つの小部屋があるだけである。併し斯んな淋しい場所をわざと選んで來るやうなお客さんはめつたにないし、現在とてもあなた方のみであるから、他に部屋が要るならどれでも皆んな使つて與れ、たゞ食べものは湖で捕れる鱒より外には何んにもない。それを承知ならお世話しようと云ふのであつた。私たちはそれを聞いて、その家は特に私たちのために其處に準備されてゐたものゝやうな氣がした。突然飛び込んだのであつたゞけ、そんな向見ずをしたのは今度が初めてであつたゞけ、私たちの悦びは大きかつた。主人は最後に少し自慢して、大町先生が十和田に來られる時には屹度宇樽部を訪ねて、この十疊のこの窓の下の机で書きものをされたものだと云ひ、また坐つてゐて八甲田山が見えるのは此處だと云つた。十和田附近の美しい土地と醇朴な住人を愛して終に近くの蔦温泉で亡くなつた桂月氏は、この邊では誰よりも尊敬されてゐるらしかつた。この部屋の軸物も額も、さう云へば皆桂月の落欵があつた。

風呂が出來るまで、私たちはその儘其處に坐つて、これから一と月近く自分たちの家になる筈の部屋の眺望を新たに樂しんだ。主人が敎へて行つた八甲田は、前の庭になつた廣場の右の方に當つて、高く二本並んで立つてゐる樹木の間に、一箇の帽子を置いたやうに見えた。その二本が胡桃の樹だと聞いたのも私たちにはもの珍しかつた。而して小さい棧橋や、どろ柳や、芦や、私たちが船から眺めたすべてのものが丁度逆になつて見渡される向に、湖がもう半分暮れかけて、これも蒼黑く翳つた左の半島から、遠く對岸の山々までひろ〳〵と續いてゐる。船の影も見えなければ、人の聲もしない。その中に先刻の裸身の子供だちだけが、歸るのを忘れたもの丶如く、いつまでもそのところで遊んでゐるのが、空つぽの濱べよりも淋しげにひつそり見えた。私たちは今更のやうに靜かなよい場所を探し當てた滿足を話し合ひながら、或る期待を以つて彼等を見守つた。大きい兄弟たちが最も熱心に。——二人に取つては、場所の靜けさも美しさも結構として、斯んなに凉し過ぎては果して湖で泳げるであらうか、あの裸ん坊たちがその實例を見せて呉れないであらうか、それが問題なのであつた。と、偶然にも、寧ろ彼等の心配を知つたかのやうに、濱の子供たちは棧橋の上から一齊に飛び込み、もう確かに非常に冷たいに相違ない暮れ方の湖を平氣で競爭して泳ぎ出した。私たちはをかしくなつて笑つた。併し兒たちはこれでやつと安心し、而して初めて本統にこの場所が氣に入つたやうに莞爾々々した。

おまささん

呑氣な、樂しい、それで秩序を失はない、私たちがあり度いと思つた通りの生活が始まつた。私たちは毎朝五時過にはもう起きる。顔を洗ひ、短い散歩をし、歸つて相變らず赤い火の熾つた火鉢のまはりでお茶を飲んでゐると御飯になる。食後はめい〳〵暫く別れる。上の二人の兒たちは彼等の勉强部屋として二つの机を用意して貰つた別棟の四疊半にか

る。食後はめい／＼暫く別れる。上の二人の兄たちは彼等の勉強部屋として二つの[illegible]て貰つた別棟の四疊半に。父さんはその儘その部屋に。私と三男は次の十二疊に。今一度お晝御飯で一緒になるまで、私たちは其處で讀んだり、書いたり、代數をやつたり、英語をしたり、畫を描いたり、思ひ／＼のことをする。午後にはまた散歩。天氣がひどく凉し過ぎなければ子供たちは泳ぐ。父さんも時々一緒に引つ張り込まれる。私だつて一町位なら泳げるのだが、それよりも濱邊のどろ柳の蔭の流れ木に腰かけて見物する方に廻る。お八の後は輕い讀書。ブルタークの英雄傳が最も子供たちに悅ばれた。それから風呂に入つて、晩御飯になつて、日が暮れると直ぐ眠る。暗い石油ランプしかない湖畔の夜は。それが最も賢い方法であり、同時に自然でもあつた。私たちは日中の愉快な運動ですつかり疲れて仕舞つてゐるから。斯んな暮らし方は、勿論土地と宿の條件が申分なく揃つてゐたために出來たに相違なかつたが、その他に今一つ私たちをこの家に心易く打ち解けさした面白い原因があつた。それは五ノ戸の方から夏だけ雇はれてゐるのだと云ふ一人きりの女中が、おまささんと云ふ名前を持つてゐたことであつた。私たちは同じ名前の女中を去年の暮まで使つてゐた。彼女は四年間忠實に働いて吳れて嫁に行つた。それ故私たちが此處でその名前を呼ぶのは、長い間吹き馴れた笛を吹くやうなものであつた。まさや、――遠慮のない、馴れ切つた親しさでさう呼んだ代りに、ほんの少し他人行儀におまささん、――と呼ぶだけである。と、おまささんは聲に應じて現はれて、どんな用事でも厭な顏をせずにやつて吳れる。尤も私たちより外には誰も呼ぶお客さんがなかつたからでもあるだらうが。

男の人たちのことは知らないが、女の方では名前と人柄とは奇妙に切り離されない關係を有つてゐるやうな氣がする。お千代さんなら何處かにどうしてもお千代さんらしい感じがあり、お花さんならまた動かすべからざるお花さんらしさが附着してゐる。一と頃私はちよい／＼出逢つたり、親類の端になつたりする事柄で淸子さんと呼ぶ女の人を五人知つてゐた。この五人の淸子さんは、それ／＼違つた育ちや境遇にをり、お互ひ同士知り合ひでもなかつたに拘はらず、皆ん

な何となく似通つてゐた。容貌とか、氣性とか、聲とか、身體つきとかで。ちよつと見には氣がつかない程度でも、何か云つたり、したりすると、忽ち共通な清子さんらしさが現はれて來るのを、私はいつもひとりで面白がつたものであるが、この場合の二人にも同じ類似があつた。おまささんは私たちが四年間一緒に住んだまさやと同じ位小作りであつた。而して身體に釣り合つた狹い肩ときやしやな手足を持つて、くる〱と小まめに働く工合から、細面の割にしては大きな少し突き出た口と、二重瞼のこれも飛び出加減の、ぽかんとした黑眼で、何處となく鯖のやうな感じのするところまでそつくりであつた。併し小說でもないのに、二人の類似をはつきりさせるためとは云つても、若い女の顏を斯んな風に描寫したのは餘計であつたかも知れない。私の書き方で若しおまささんを餘り綺麗でないなんて考へる人があれば、それは間違ひである。反對におまささんはちよつと美しい女中さんであつた。いゝえ、長い滯在の間に彼女から受けた好意と便宜を思ふと、もつと非常に美しいと賞めなければならない位である。實際、おまささんがゐなかつたら私たちは困つたであらうと思ふ。何故ならば、おまささんは女中であつたばかりでなく、また私たちの大事な通辯でもあつたから。

K—さんの村にゐた間も、K—さんが純粹な田舍言葉で女中たちに話す時には、子供たちは何を云つてゐるのか分らないと云つてをかしがつた。長い間K—さんの訛や調子に馴れてゐる私にさへ大體の意味しか呑み込めなかつた位であるから、此處の一層世離れた言葉は、私たちには皆目通じなかつた。たゞ主人だけは例外であつたが、その他はおまささんを通じなければ、何を賴むことも聞くことも出來なかつた。この不便は、或る時殆んど外國に暮らしてゐるかのやうな思ひを私たちにさせた。

濱邊に出る。其處には最初見たやうな子供たちが五六人、多い時には二十人以上常に群れてゐる。女の子も交つてゐ

る。男の子は例に依つて勇敢に裸身か、でなければ兄か父親のお古らしい、だぶ〳〵の半纏のやうなものを引かけてゐる。女の子の身なりも男の子に劣らず見すぼらしい。而して皆んな大概赤ん坊をしよつてゐるがその赤ん坊が悉く裸身で、それを小さい姉達は自分の肌に直接におつつけ、丁度一枚のぼろに二人包まれる便利な方法を取つてゐる。狭い弓形の、云はゞ一つの緣に過ぎないこの湖畔の土地は、全部で二十九戸あるのだと云ふ勤勉な家々で、中央の一筋の道を殘した以外は皆んな耕され、空地と云つては宿屋の前の僅かな廣場と、それから一軒おいた先隣りの小さい小學校の運動場きりないのだから、その二つで遊んでゐない子供たちは、屹度濱邊に集つてゐる譯になるらしい。位置から見ても此處が一番優秀な遊び場であるのは勿論であつた。第一此處なら泳ぎ度い時すぐ飛び込める。實際彼等は一日ぢう泳いでゐるやうに見える。女の子も負けずに泳ぐ。彼等は棧橋の上で手早く着物を脱ぎ、赤んぼはその中に上手にくるんで置いて、よち〳〵歩ける程度なら一緒に連れて、勇ましく飛び込む。また泳げないでぼんやり立つてゐるだけでも此處では十分面白かつたであらう。子の口から何か船で運んで來たとか、棧橋の上手に繋いである宿屋のモータ・ボートで誰かゞ出掛けたとか、若しくば向の沖を大きな遊覽船が休屋の方に今日は何度辷つて行つたとか、彼等のプリミチヴな興味を滿足させるやうな珍らしいことを一番に知ることが出來たらう。濱に並んで、遠くの湖上を熱心に眺め入つてゐる子供たちを見る度に、私はその船と共に走つてゐるであらう彼等の好奇心を、可愛くあはれに思ひやつた。私たち自身からして、異常な見物であつたに相違なかつた。濱で出逢ふ時、また私たちの部屋の前の庭を通り過ぎる時、彼等は丁度沖を眺めて立つ時とそつくり同じ視線を私たちに投げる。名前は何と云ふか、年は幾つか、學校ではどんな唱歌を教はつたか、お伽話は好きか、私たちはそれを見る度に彼等と斯んなことを話して見度くてたまらなかつた。併し話しかけてもいつも失敗した。初めは恥かしくて返事をしないのかと思つてゐたら、もとよりそれもあるが、本統は私たちの

言葉が通じないのだと分つた。彼等の仲間同士のお饒舌が私たちに丸つきり分らなかつたと同じに、後では可なり親密になり、私たちの差出すお菓子を悦んで食べたり、部屋の縁側に遊びに來たりするまでになつたに拘はらず、最後まで笑顔と身振の交換で我慢しなければならなかつた。實際、滯在の終りまでにあらゆる注意力を聽覺に集めてやつと私たちが彼等の中から理解し得た言葉は、かんづ（多分勘次）と呼ぶ少年の名前と、彼が八つになると云ふことであつた。

小學校に通つて、校長と教師と小使とその他のすべての職員を兼ねてゐるのださうであるが、兎に角一人の先生があつて、國定教科書に依つて授業を受けてゐる子供たちがこれであるから、他は想像されるであらう。併し單に言葉としては、十和田の言葉は決して惡い響ではない。盛岡地方の土語ほどひどくは氣にもかゝらず、早いテンポで、尻上りに囀るやうに續けるのを聞くと可なり美しい。それに田舍の呑氣さと、一つは隣家に呼びかけるにも小さい聲では間に合はない必然の習慣から、住民は皆んな調子が高く、取り分け女たちは何處までも透るやうな綺麗な聲を持つてゐる。私たちは一度濱邊を散歩してゐる時に、若い夫婦らしい男女が畑をさし挾んで高い聲で、話してゐるのに出逢つた。畑の向の道に立つた女が美しいソプラノで何か一生懸命まくし立てると、湖に近い方にゐる男がそれに對して同じ位に一生懸命で答へる。立派なテノルだ。女がそれを聞いてまた何か云ふ。男がまた答へる。混み入つた指圖でも受けてゐるらしい。まるで意味の分らない、泣き込んだ、歌のやうなその調子と、山や、畑や、美しい湖の背景から、私たちはオペラの中の伊太利語のカプレットでも聞くやうな氣がして、皆んなで立ち留まつてそれを聞いた。

一度は斯んなこともあつた。或る日の晝飯後十疊に集まつてゐると、店の方で三人の男の聲で何か大話が始まつてゐる。いつもの如く村の者が寄つて何か話し込んでゐるのだと察せられた。彼等の話してゐるのを聞く度に、どうにかして理解しようとして凝つと耳傾けるのがもう癖になつてゐたので、その時も私たちの注意は直ぐその聲の方に引きつけ

られて仕舞つた。何を云つてゐるのか相變らず分らない。併し非常に熱心に、勢込んで、轉がすやうな急調で、三人負けずに饒舌り合つてゐるのを聞くと、自分たちと同じ人種の言葉だとはどうしても信じられなかつた。伊太利人が喧嘩してゐるのだ、私たちはさう云つて笑つた。それとも佛蘭西人の醉つ拂ひかも知れない。いや寧ろ支那の留學生だ。神田の支那料理屋の二階に行くと、あの通りの言葉が聞かされる。――私たちがめい〳〵自分の臆說を主張してゐる間に、茶目な次男は廊下へ出て、喧嘩してゐる伊太利人と、佛蘭西人の醉つ拂ひと、支那の留學生に似てゐる十和田人は、果してどんな顏したお親爺さんたちかを覗きに行つた。と思ふと、彼は忽ち死にさうな笑ひ聲を爆發させて駈け戻り、その儘部屋の中へ轉がり込んだ。――店の三人の男は行商の支那人であつた。

斯んな山の隅々まで入り込んだこの驚くべき商人たちは、私たちのおまささんに赤い皮の金入かなんか買はせたらしい。

まるびとすぐりとその他の食べ物

着いた明けの日のことであつた。

朝御飯をすますと、私たちは少し歩いて見ようとして出掛けた。宿の前に道と並んで一間幅ばかりの川が流れてゐる。濱邊は食事前の散歩と前の日の觀察でほゞ様子が分つてゐたから、私たちはその川に沿ひ、左手の村の方へ足を向けた。船からは見えなかつた藁屋根が道と川を挾んで、一方は湖水寄りに、一方は山際にとび〳〵に立つてゐる。間の畑に作られてゐる野菜類を見ると、東京では二月前から一般に食べてゐた茄子や南瓜が今花であり、或る場所では麥がまだ刈られずに殘つてゐた。田の稻にしてもやつと一尺足らずで、畦道には菫が咲いてゐた。凉しい筈であつた。實際

さうやつて朝日に照りつけられてゐても汗一つ出ないし、却つてぽか〳〵して氣持がよい位であつた。而して頭の上に高く十月の空のやうに澄み切つた天を眺めて行くと、如何にも場所違ひな遠いところに來たと云ふ感じが强くした。

丁度小學校の前であつた。私たちは川岸の灌木の間に一本の珍らしい果樹を見つけた。木振りが林檎に似て、葉は稍小さく縮れ氣味で、葉裏が茱萸のやうに白い。それに西洋梨の形をした、大さも略同じ位の實が生つてゐる。併し色は靑い。而してその靑い肌に紫蘇色のまばらな斑點のあるところは、ちよつと不熟な地桃を聯想させたが、感じは今少しごつごつとして、全體の歪な恰好と共に雅味があつた。私たちはその時川緣にしやがんで洗ひものをしてゐた一人のお婆さんに尋ねた末――勿論半分以上手眞似で――それがまるびと云ふものだと分つた。恐らく土語であらうが、名前も面白いと思つた。尙ほそれはどうして食べるのか、もつと熟するのか、さうすればどんな色になるか、委しく知り度かつたが、お婆さんは私たちが分らない外國語で急に話しかけられた時のやうな當惑らしい、併し幾らか面白さうな、ぽんやりした顏で、何を聞いても莞爾々々してゐるだけであつた。お仕舞ひには私たちも一緒に笑ひ出し、まるびの質問は斷念したが、それでも直ぐにはお婆さんから目を放すことが出來なかつた。喫驚するほど美しいお婆さんだつたからである。多分もう七十に近いらしく、髮はまつ白であつたが、楕圓形の端正な顏には皺一つなく、それが娘のやうな豐頰で、うす紅く、艶々してゐた。若し他のところで、そんなに年を取つて、見窶らしいなりをして、それでそんなに美しいお婆さんを發見したならば、確に不思議な存在の如く見えたであらう。併しその時はその一本の珍奇な果樹のために、下の流の緣にそんなお婆さんがゐたと云ふことが自然らしく、寧ろなくてはならなかつたもの丶如く私たちには受け取れた。

まるびの樹を過ぎて少し行つたところから、道は次第に濱の方へ曲つて、湖岸の山の森に通じてゐる。道端の標杭で子の口に出る道だと分つた。里程は一里半であつた。私たちは遠く行く積りはなかつたのだけれども、ぶら〳〵歩いてゐ

るうちに半分近くまで來て仕舞つた。榉、白樺、楢、椽、楓、馬醉木、山梨等、私たちの貧弱な植物の知識でもそれと知られるやうな樹が、他の無數の分らない、凄いやうな大きな樹と入り交つて、右はその儘山に、左は湖水まで突入してゐる。朽ち株や、腐つた木の葉や、菌類や、苔や、それ等から發する森特有の匂ひが鼻を打つた。道はやつと一人が通れる幅しかなかつたので、私たちは學校生徒の如く縱に一列になつてその中を進んだ。私は前から二番目の三男の後に續き、遙な梢の頂つぺんに、一枚の青い絹ハンケチのやうにかゝつた天を見上げたりしながら、旅をして斯んな僻地のほそ〴〵した道を通る度にいつも考へることを、この時もまた思ひ出してゐた。誰が初めて此處に足跡をつけたか。――何十年か、何百年か分らない、遠い過古に、或る人の或る時の何かの興味、若しくば何かの必要が共處に踏み込まうとする意志を彼に生じさせ、またどの點からするのが最善であるかの智慧ある判斷を與へ、終にそれを實行させた。これが道の起源に相違なかつた。而して後に續いたものが無心にその足跡を辿ることに依つて、知らず〳〵先蹤者の意志を繼承し、その智慧を今日まで明白に生かしてゐる點に、寧ろさうしなければならなかつた點に、私は道の面白さを見る。人間のよい意志とよき智慧の結果に於て、これ程、偉大な、而してこれ程自然な例が外にあるだらうか。

後に人の足音がした。私たちは申合せたやうに皆んなで振り返つて見た。二人の村の女が、股引に手襷がけの働き姿で、手拭を冠り、高い背負ひこを擔いでやつて來た。而して私たちがやり過す積りで、そのまゝ道の端に横並びに立ち留まつてゐる傍を足早に通りかゝつたと思ふと、後の女が

『坊さん。』

確かに斯う呼びかけて、三男の前に黑い手甲のはまつた右の手をさし出した。子供も反射的に同じやうにした。女は銃砲玉の形をした綠色の木の實を十ばかり相手の小さい掌に握らした。私たちが名前を聞くと、拗よく直ぐ答へた。

「すぐり。」

ではグース・べりだ。私たちは斯う云ふ方が寧ろ親しいその木の實を初めて見て珍しがつた。皆んな一ツづゝ貰つて口に入れ、甜甘い汁を味ひながら私たちは頓て宿の方へ歸りかけた。すつかりいゝ氣持になつて而して何んと云ふ優しい女の人だらうと思ひながら。

食べるものは湖に取れる鱒より外にはない、とは最初から念を押されたことであり、私たちもそれは承知の筈ではあつたが、併し約束が餘り嚴重に守られ過ぎるのを見ると、私たちは閉口するよりは段々をかしくなつた。食器も立派ならず、料理も味がよく、またいろ〳〵御馳走もつくのであるが、重な材料は悉く鱒である。この湖の鱒はカバチェッポと稱する種類の姫鱒で、大きくとも八九寸しかないのだから、先づその儘で燒かれたり煮られたりする。刺身も鱒の刺身なら、椀にも、小丼にも屹度薄桃色の美しい身が入つてゐる。少くとも食事の度に一人の膳に一尾半の鱒は費されるらしい。それで子供たちは計算を始めた。一人が一尾半として五人では七尾半、三食分なら二十二尾半だから、若しこの十和田に三十日間滯在するとすれば、合計六百七十五尾の鱒が私たちの胃袋に入る勘定だと云ふのである。皆んな呆れた。

朝、これ等の鱒を漁夫たちが濱から運んで歸る時の光景は一つの畫であつた。彼等は何かの蔓で編んだ、大きな手提のやうな籠に入れてそれを運んで來るが、大抵一人ではなく、濱まで出迎へてゐたかみさんや、子供たちに取り卷かれてゐる。而してかみさんや子供たちもめい〳〵同じ蔓の籠を提げ、默々として、併し夫は自分の十分な獲物に滿足し、妻は船の上の主人の骨折を思ひ、子供たちは子供たちで父親の漁の技倆を自慢しながら、どろ柳の蔭を家の方へ連れ立つて歩いて行く。

或る朝私たちは彼等の船着場に行つて見た。それは子供たちが一番氣に入りの泳ぎ場にしてゐる棧橋の上手の濱から、また一町ばかり奥の方へよつた小さい入江であつた。朝日のきら〳〵と照り輝いた汀には、丸木舟のやうな細長い漁船が三四艘既に歸りついてをり、年寄や、若いのや、數人の漁夫が周りにたかつて、めい〳〵の船から銀色の獲物のずつしり入つた箱を抱へ下ろすと、かみさんと子供たちが手傳つてそれを例の蔓の手提に取り分けた。汚れた網を手早く洗ひ上げて、後の丸太で組みあげられた乾場に、機の絲を揃へる時のやうに丁寧にかけ渡してゐる女たちもあつた。これ等の女たちは、あのまるぴの蔭のお婆さんほどではないが、大抵揃つて大抵立派な目鼻立ちで、美しい皮膚とすらりとした姿を持つてゐた。そんな仕事をしてゐるところを見ても、素朴で、おつとりして、殆んど優美だと云つてもよい位物靜かである。この特長は男たちの間にさへあつた。彼等には私たちが海岸で知つてゐる漁夫たちの荒々しさや、喧騒などは少しもなかつた。皆んな香氣さうで、ゆつたりして、多くとも少なくとも、置いた網に入つただけの獲物で十分滿足してその日〳〵を樂しまうとしてゐるかの如く見えた。一番端の舷に腰掛けて一ぷく吸ひつけ、片手は下に踞まつて鼻をすりつけてゐる茶色の大きな犬に與へながら、隣の船の者と漁の模樣を話してゐる一人の年とつた、白い顎鬚のある漁夫を見た時、私は殊に強くそれを感じた。そのまゝで彼は支那の古詩か南畫中の一人物ではないだらうか。西洋の畫の中でも同じやうな情感を人に與ふるものを私は一つだけ知つてゐる。シヤヴアンヌの、基督にそつくりな顏をしたあの漁夫の圖である。

併し次の瞬間、私達の注意は乾場の前に石油の空箱に腰掛けてゐる、見馴れない一人の洋服の男に引かれた。彼は新しい夏帽に眼鏡をかけ、膝から下は茶色のゲートルで卷き立てゝゐると云ふ逹者拵へであつたので、私たちは初めは通りがかりの旅行者が、私たちと同じく旅中の無邪氣な興味で、足を留めて見物してゐるのだとばかり考へてゐた。併し

その内に彼は上衣のポケツトから小さい手帳を取り出して、漁夫や、かみさんや、子供たちが箱から莖の手提に移した魚の數を一つ〳〵記入し出した。私たちはやつと分つた。同時にどんなに呑氣に悠々と氣樂さうに見えてゐても、彼等は矢張り畫中の漁夫ではなかつたのを知つた。洋服の男はこの湖の鱒の最初の養殖者で、今はその漁業權を占有して二つ目の半島の對岸に住んでゐるM——家から、毎朝湖岸の漁場々々に派遣される監督者の一人なのであつた。

宿に歸つた時、私たちは主人から權利者と漁夫たちとの間にどんな割合で獲物が分たれてゐるかを聞いた。嚴正に四分六分だといふことであつた。

『四分と六分。』

K——さんから聞いた小作米の割合も矢張り同じ律であつたのを私は思ひ出した。五と五でなくて四と六の對比である。差違から云へばたつた一分である。併しこの一分の開きこそは、現代の最も重大な世界の問題——働く者と働かせる者との間に横はる運命的な溝であり、あらゆる論議と爭鬪の的であり、地球上の國家と社會を通じて將來どんな型かに於て必ず出逢はなければならないであらう一つの旋風の根であることを感じた。

滯在が長くなるに從つて臺所でも流石に氣を揉み出したらしく、罐詰ものらしい魚類や肉類がをり〳〵膳に上つた。その他みづと稱する、この地方だけのものだと云ふ、ちよつと蕗に似た、酸つぱい味のする野生の植物や、胡桃の實や、得體の知れない菜つぱや、この湖畔に生じて、およそ口にすることの出來るあらゆる野菜や、木の實や、乃至草根木皮の類まで代る〳〵現はれ出した。このことは本統を云ふと三度〳〵の鱒と同じく私たちを閉口させたのではあるが、併し乏しい材材でどうにかして膳の上の單調を破らうとしてゐる家の人たちの慘憺たる苦心を想像すると、不平は云へ

なかつた。却つて愉快な氣持でそれ等の奇妙な食べ物を頂戴したのであるが、殊に或る日の珍味は私たちを非常に驚かした。その御馳走が何であつたかお分かりになりますか？　お豆腐が出たのです。どの方角を考へて見ても、數里以内にお豆腐屋が存在しさうには見えなかつたので、私たちはそれがどんな方法で手に入つたかをおまささんに尋ねて見た。家で拵へたのだと彼女は無造作に答へた。私たちは一層吃驚した。殊に女の私は、あの上品な滋養の多い食べものがめいめいの臺所で造る以外に手に入らないとすれば、どんなに手數のかゝる、從つてどんなに贅澤な御馳走であつたであらう、とよく考へたことがあつたので、私たちのために、わざわざ豆がふやかされたり、挽かれたり、煮られたり、絞られたりした面倒を思ふと、色の冴えない、にがりの勝つたその硬いお豆腐が有難かつた。

斯う書くと私たちの膳にはそんなものばかり載つて大事な鱒が影を潛めたやうに見えるかも知れないが、決してさうではなかつた。變化は鱒以外のことである。これだけは、どうかして臺所で私たちの鱒に關する計算を知つて、歸るまで必ず合計六百七十五尾は食べさせなければならないと決心してゐるかの如く、忠實につけて出した。たゞその出し方に彼等の可愛い技巧が加つた。それは初めのやうに皿の上に一尾公然と鱒だと名乘つて反つくり返らせて置くやうな下手はしないで、成りたけ秘密に、鱒らしくなく見せかけようとする。うどん粉の覆面をしたり、ロール・キャベツのやうに何かの葉つぱにくるまつたり、白ソースのやうなどろりとしたものゝ中に潜んで現れるのは常套手段であつた。これ等のカムフラージュを看破することが、頓て私たちの食事時の一つの樂しみになつたが、或る晩には皆んなうまうまと欺まされかけた。うす暗いランプの下にいつもの如く並べられた五人分の食膳の一つの皿に、まん丸な黑い牡丹餅の如きものが載つてゐるのが、次の部屋に集まつてゐた私たちの目を引いた。恐らく牡丹餅かも知れなかつた。上にも述べたやうにわざわざお豆腐を拵へてくれたり、或る時は註文の蕎麥を打つてくれたり、お强飯を蒸してくれたりした

のだから、不意な牡丹餅で私たちを悦ばせないとも限らない。——私たちは莞爾々々して膳の前に坐つた。併し箸を當てると牡丹餅の餡の代りに皮が破れ、相變らずの薄桃色の身が現はれた。哀れな鱘は、頭と尾を角兵衛獅子の子供のやうに背中で附つ着け合はされ、その上から淺草海苔をかぶせられてゐたのであつた。

雀も、半分お世辭に賞めてからよく食べさせられた。こんがりと味よく燒いた醬油の附け燒は、元より拙くはなかつたが、それが鱘と競爭で色んな皿に飛び込むやうになり、殊に吸物椀の中に、蛙の子のやうな恰好をした胡桃と組んでぽつかり浮いてゐたりするのに出逢ふと、少からずがつかりした。併し皆んなの氣分はそんな僅かな無氣味さ位で損はれるには快活過ぎたので、それはいつも一つの滑稽感に轉じられた。私たちは雀のつる〳〵した小さい丸い頭臚が果して誰に似てゐるかを議論した。而してその度に知つてゐる人や、畫で見た人の禿頭がたしかに一ダースは數へ上げられた。

私は斯んな諧楽に甚大な興味を持つてゐる。寧ろマニアだと云つてもよかつた。これは私がひどい近眼で、その癖眼鏡をかけないので、ものを正確な形で觀察するよりは、印象で見るやうに習慣づけられてゐる爲に生じたことだと信じてゐるが、實際私は何かを見て、取り分け誰かを見て、それと類似のものを探し當てない限りどうしても氣がすまなかつた。丁度書きものをしてゐて、ぴつたりした表現の見つからない場合に感じるあの苛立たしい焦慮と同じ氣持であり、運よく適當な對象を發見した時の悅びは、また前の見つからなかつたものを見つけ得た瞬間の悅びのみが匹敵する。而して私はそれを自分の得意な句や言葉を紙に書き留めるやうに頭の中に疊み込んで樂しむ。例へばオスカー・ワイルドはミロのヴィーナスに似てゐるとか、フランスの首相のポアンカレー氏は私たちが知つてゐる家の年取つたセツ

ターにそつくりだとか、内村鑑三氏は狼と兄弟分に相違ないとか、いつか淺草で見た外國の曲馬團の中の獅子使は、森鷗外氏の假裝ではなかつたかとか、夏目先生の眼と鼻と角ばつた顎の感じは、狂言の『脫け殼』や『伯母ケ酒』に使ふ鬼の面だとか云ふ類である。生き者には限らない、私は何か房のやうな人や、箱や、棒や、壺や、海老錠のやうに見える人をさへ、頭の底の百味簞笥に丹念に仕舞つてゐる位だから、この雀の禿頭の問題に對してどんなに熱心であつたかは分るであらう。私は皆んなの推擧した禿頭がどうも氣に入らなかつた。私自身は最初は沙翁を指名したのであるが、沙翁の頭と額のカーヴは、雀のに較べると稍膨らみがあり過ぎ、殊に兩鬢に僅かにくつ附いてゐる毛髮が全體のつる〳〵した感じと牴觸した。次ぎにはドレの描いたドン・キホオテを思ひ出し、同時に新聞紙上でよく見るダヌンチオの見事な禿頭が意識に浮かんだ。これだ、と私は思つた。雀の金槌のやうに圓い、而して細い柔らか味のある線の頭蓋骨はどうしても羅何系のものだ、さう云つて私がダヌンチオ說を力說すると、父さんが、それでは寫眞なぞではなく私たちが皆んな逢つて知つてゐる、羅何人種の理想的な禿頭を思ひ出させてやらうと云つて、一人の外國紳士の名前を擧げた。それは某國大使館の書記官X——氏であつた。私たちはそれを聞くと歡聲をあげて、滿場一致で贊成した。X——氏は、頭の恰好ばかりでなく、額よりも頭の上から突き出たやうに見える高い鼻と、いつも喫驚したやうに見開いたまん丸な茶褐色の眼に依つて、正しく擬ひもない燒雀であつた。

盆踊

一と月おくれの盂蘭盆會が近づいて、子供たちが踊の調子らしい歌をちよい〳〵謡つて步くのを聞くと、私たちはさてこの夏は此處でどんな盆踊を見るだらうと噂した。毎年違つた土地で違つた踊を見るのは樂しみであつた。私たちは

濱で友達になつた娘の子たちに、一つ踊つて見せて貰へまいかと——言葉がはつきりしないのだから、此方で先づ踊るやうな手振をして見せて頼んだが、皆んな恥かしがつて笑ふだけで、踊らなかつた

併しいよ〳〵十五日になると、お盆は何より先にまづ彼等に來た。子供たちはめい〳〵思ひ〳〵の服裝で平生の面目を一新した。男の子も變なだぶ〳〵の古半纒を捨てゝ、兎に角彼等自身のものらしい布子やシャツを着た。常に頑固な裸體組の一人であつた或る子供は、丈も裄もつんつるてんの絣絆に、何處からどうして手に入れたのか、若しかしたらいつかの支那人に賣りつけられたかも知れない茶色の靴下に、赤いゴム靴を穿いて、大威張で出掛けて來た。實際これは一異彩であつた。而して女の子の方でこの靴下と靴に對抗し得るものとしては、先づ宿の小さい二人の妹娘の友仙メリンスの單衣をあげなければならないであらう。でなくとも二人だけは不斷から他の娘たちほどひどい身なりはしてゐなかつたのであるが、それでも今日の晴れ着は、東京の同じ年頃の小娘が、フランス土産の洋服をつけた時位得意に相違なかつた。眞岡の古浴衣に赤いしごきをやつと貰ひ出した仲間の娘たちは、絶えず二人の周りを取り卷き、そんな美しい着物を着た友達と遊ぶ光榮を爭つてゐるかのやうに見えた。

日が暮れて、月が宿の丁度正面の山の上に出た。頓て踊も始まるであらう。宿の前の廣場で踊るのだと云へば、十二疊の方の雨戸の硝子から覗ける筈であつたが、私たちは食後の散歩かた〴〵出て見ることにした。併し踊り手らしいものはまだ誰も見えない。寧ろ不斷の夜と何んにも變つたことはない。たゞ宿の向側にある、長女が養子と出してゐるのだと云ふ店先で朝から飲んでゐた五六人の年寄たちが、未だに大陽氣で續けてゐるのと、子供たちが例の晴れ衣裳のまま叫んだり、反ね廻つたりしてゐるのが、いつもと稍違つてゐる位なものであつた。私たちはまるびの木と反對の道をさして並んで歩いた。その内には踊も始まるであらうし、村の方にはせめて盆提灯の一つも出てゐるかも知れないか

ら、樣子を見て來ようとしたのであつた。左の山傳ひに一緒に隨いて來た月は、仲秋のやうな皎々とした光で道案内をした。道と並んでゐる川は、光だけ分けて貰つて、違つた方へ向はなければならない云ひ譯をしながら流れてゐる。その幽かな瀨々らぎの音が、畑や、それを限る濱邊や、その向に橫はる湖へかけて一面に輝く粉末になつて滿ちてゐる月光に對して、沁み入るやうな一つの調子を與へた。數へても十軒以上とはない藁屋根がその中にぽつ〳〵と浮かんでゐる。山際のものはまつ黑で、湖に近い方は銀色である。而してどの家も深夜の如く靜まり返つて、提灯は愚か、お盆らしい鉦の音一つせず、普通の暗いランプの火影さへ見えなかつた。多分若い者のやうに踊る氣もない人たちは、朝から寢たきり寢續けてゐるのかも知れなかつた。この眠りの堪能と、手打の蕎麥と、酒と、踊る者には踊と、それで彼等のよいお盆は過ぎて仕舞ひ、生前に同じ經驗を積んだお精靈樣もそれで滿足して下さるのであらう。

やつと始まつたと見えて、踊の歌と手拍子が聞こえて來た。引つ返して見ると、大人と子供で二三十人ばかり、多分村で寢てゐない者の全部であらうと思はれる人數が集まつて、その中で四五人の娘と、店で飮んでゐた仲間から加はつたらしい、腰のふら〳〵したお爺さんと、汚い印半纏の若者と、浴衣に尻はしよりの一人と、それに私たちの馴染の女の子が二人入れて貰つて踊つてゐる。顏を包んだ手拭でよく分らないが、大きい娘の中の二人は、宿の姉娘たちのやうであつた。歌はこれ等の娘たちが順々にうたつてゐる。例の澄み通つたソプラノである。而して急な、詰まつた間拍子で、鋭角的に突き上つて行くうたひ方には、誠に陸奥の山の娘の歌らしい哀調が籠つてゐるが、彼等の話よりは幾らか分かりがよい。皆んなの歌が大變よく揃つた。麥の出穗よりよく揃つた、と云ふやうな意味の文句もうたはれ、その後に、女の子たちが度々繰り返してゐるので、私たちもそれだけは覺えて仕舞つた、ほんさ、よい、よいと云ふ合唱が添へられる。振は盆踊に共通な素朴なもので、歌の節に連れて左右の足を交る〳〵蹈み出したり、引つ込めたり、兩方

の手をも同じやうに振つたり、伸ばしたり、くるりと半分廻つたりするだけであるが、娘たちは皆んな上手に踊つた。一つは彼等がこの村の他の女たちのやうに、まつ直なよい姿勢を持つてゐたからであつた。それに不斷もさうである通り、廣い帶の代りにしごきのやうなものを卷いてゐるだけなので、美しい下半身の線が一層すらりとして引き立つた。併し娘たちは美しい姿ほど美しい踊り衣裳をつけてゐる譯では元よりなかつた。正直に云ふと、それは毎日の仕事着とは別なものだと云ふに過ぎなかつた。宿の姉娘たちらしい二人さへ、小さい妹たちの晴れ着には及びもつかぬ木綿絣のお揃ひである。たゞ手拭と足袋だけは、皆んな揃つて眞新しい。あの中には、無くてならないその二つの踊り支度のために、お盆前特別に骨折つて働いた娘もあつたであらう、と考へると、彼等が醉つ拂ひのお爺さんや、たつた二人の若者や、小さい女の子を相手に無邪氣に、併し非常な熱心さで、ありつたけの聲を張りあげ、此處を先途と踊つてゐるのが、變に涙ぐましくなるほど可愛く、哀れであつた。

十六日の晩の踊にはちよつと面白い戯曲的の過程があつた。

その日の晝頃、私たちは私たちの横の道を湖の方へ下つて行くと三人の娘と、一人の脊の高い印半纒の男を見た。初めは村の娘たちかと思つたが、メリンスの華美な色の着物と荒い柄の浴衣がさうではないのを私たちに悟らせた。と云つて、遠くから湖を見に來る遊覽者の種類では確かにないらしかつた。この見當のつかない一と群れは、暫く湖邊をぶらぶらしてゐた末、後では棧橋に繋つてあつた宿のモーター、ボートの中に坐り込んで仕舞つた。彼等は其處から去り兼ねるほど湖の美しい景色が氣に入つたのであらうか。さうは信じられなかつた。ではいつまでもあんな處に陣取つて何を始める積りであらう、おまささんがお晝御飯を持つて來た序に、私たちはこの疑問をおまささんに打ち明けた。する

とおまささんは、あの連中は休屋のもので、宇樽部に踊に來たのだと云つた。成る程。私たちは顔を見合せた。二つの半島の彼方から、山越しでわざ〳〵踊りに出掛けて來た彼等の熱心が面白かつた。

併しそれにしても彼等は餘んまり性急過ぎた。日はまだ頭の上にあつた。踊るまでには少くとも數時間待たなければならないであらう。彼等は實際辛抱強く待つた。いつまでも船を離れないで。屹度その儘夜になるのを待つ覺悟を極めてゐるかのやうに見えたが、それでも三時時分になると流石に待遠しさに堪へ兼ねたやうに、娘たちは替り番こに、得意らしい美しい聲を張り上げてうたひ出した。昨夜聞いたのと同じのもあれば、違つた調子の歌も交つてゐた。男だけはうたはないが、彼は鍔の廣い夏帽子を阿彌陀に冠り、卷煙草を銜へ、若い三人の娘の騎士としての今日の役目に滿足し切つてゐるかの如く、而してまた彼等の上手な歌と、その歌を辱しめない踊で、この村の娘たちや若者たちを驚かすのを樂しんでゐるかの如く見えた。その樣子を部屋から眺めてゐると、私たちも早く日が暮れて彼等に踊らしてやり度い氣持になつた。同時に私たちは一つの心配をした。あの人たちは晩の御飯はどうする積りだらう。何か用意して來たのであらうか。――既に暮れかけて、赤い夕日のさした船から、娘たちが歌をやめて立ち上つたのを見た時、私たちは村の方へ食べるものでも探しに行くのであらうと考へた。併し娘たちは濱を遠くは行かず、道からちよつとそれたどろ柳の木立のあたりで立ち留まつたと思ふと、無雜作に、また非常に自然に着物の裾をまくつて、三人揃つて悠々と用を達した。

やつと夜が來た。月も前の晩に劣らずよい月であつた。私たちは晝間の連中の踊に好奇心を持つてゐた。どんな樣子か後で行つて見ようと話しながら食事をしてゐると、いち早く踊り出したものがあつた。前の晩よりたつぷり一時間早かつた。屹度あの一組に相違ないであらう。おまささんに聞くと矢張りさうであつた。私たちは頓て出掛けて見た。

踊つてゐる。三人の娘は晝間の派手な姿の上に三人とも手襷を掛け、お揃ひらしい手拭で顔を包み、船の中で歌つた

のとはまた別な熱心さで聲を振り絞つて踊つてゐる。男はと見ると、これは、晝間うたはなかつた如くこの時も踊らうともしないですぐ側の暗い木蔭に控え ゐた。彼は騎士らしい忠實さで娘たちを保護すると共に、自分が豫期した通りの效果を見物人に與へたかどうか知らうとするやうに見えた。この娘たちの歌と踊には誰だつて釣り込まれないものはない筈だ。而して皆んな飛んで來て一緒に踊り出し、三人を中心として盛んな踊の輪が出來上るに相違ない。——若し彼がそんな風に考へてゐたとすれば、それは案外な成行になつた。

尤もその夜廣場に集まつた村の男女は、たしかに前の晩の人數よりは多かつた。それはまた休屋からわざ〳〵やつて來た人々に對する興味に外ならなかつたが、同時に村の者に取つては、彼等がどんなに面白くうたつても、踊つても、寧ろ面白くうたつたり踊つたりすればするほど、一種の侵入者としか見えないやうであつた。その感情は村の娘たちの態度に著しく現はれた。彼等は昨夜と同じ踊り支度で來てゐながら、一緒に踊らうとしなかつたばかりでなく、彼等自身たちの踊をさへ始めなかつた。而して五六人友達仲間でかたまつて、周りの見物の中に交つてゐる傍に、若者たちもより添つて何か小さい聲で話し合つてゐた。併しその一つの目的のために、山越えで半日前からやつて來た勇ましい娘たちは、それ位で悄げ込みはしなかつた。而して不利なその形勢な中で、彼等が、多分村の娘たちには挑戰的に見えたほどの度胸で、敢然と踊り續けてゐる様子は、厚がましいより悲壯に感じられた。

不圖氣がつくと、私たちの直ぐ傍に立つてゐた村の若者の一人が、周りの人の輪の中をかい潜つて騒いで遊んでゐた男の子の或る者を呼んで、耳打ちをしながら短かい棒のやうなものを渡した。男の子は心得て駈け出した。何をするのかと思つて見てゐると、腕白小僧は踊つてゐる娘たちの足許に近づいて、手拭で隱した一人々々の顏に、丁度芝居のフツト・ライトが送るやうな、明るい光の縞を投げかけた。娘たちの歌は叫び聲に代つた。踊は亂れた。彼等は逃げ出し

た。見物の村の者はそれを見て歡呼を擧げた。私たちにしても、思ひつきな懐中電燈の惡戯が可笑しくないことはなかつた。處が處であつたので一層面白かつたのであるが、彼等の周章て方を思ふと氣の毒になつた。同時に、あのお客さんを迎へて、快く一緒に踊つてやる雅量のなかつたのを、私たちの大好きな宇椅部の娘たちのために惜んだ。

併し歸つて床に入つてうとうとしてゐるうちに、私は今一度休屋の娘たちのうたふ聲を聞いたやうな氣がした。そればかりではなかつた。聞き覺えのあるこの村の娘たちの聲や男の聲も順々に聞こえた。彼等は皆んなで仲よく一緒に踊つてゐるらしかつた。でもそんなことが有り得るだらうか。――さう思ひながらその儘眠つて仕舞つたので、私は朝になつても信じなかつた。さうあらせ度いと望んだ氣持が夢になつたに過ぎないと思つてゐた。併し念のためにおまささんに尋ねて見ると、矢張り夢ではなかつた。彼等は終に盛んな踊仲間になつて、十二時過ぎまで踊り抜いて歸つたと云ふことであつた。私は喫驚した。安心したやうな嬉しさを感じた。それにしても何が彼等をさう急に結びつけたものであらう。それが知り度くてならなかつた。

優曇華

家ぢうで誰よりも健康な長男が病氣になつた。風邪らしかつた。原因もはつきりしてゐた。子供たちが昨日泳いだ時は少し寒かつた。下の二人はがむしやらに飛び込んだけれども、兄は躊躇して泳ぐのを止めさうにした。彼の斯う云ふ用心深さは性質でもあつたが、一つは赤ん坊の時分から餘り大事に育て過ぎた影響であり、十七にもなれば今少し積極的に何んでもやる位にさせ度いと、近頃殊に感じてゐたので、私は水着のまゝ濱邊で愚圖ついてゐる彼を勵ました。小さい弟たちでさへ平氣で入れるのに、兄さんのあなたがこれしきの水に寒がるなんて恥です。彼はこの言葉で飛び込ん

だ。頭痛がすると云つて、一度入つた勉强部屋から私たちの部屋に彼が戻つて來たのは明けの朝のことであつた。額に手を當てゝ見ると熱かつた。併し不用意にも今年に限つて私たちは體温計も藥も持つて來なかつた。毎年使はず仕舞ひになるのと、荷物を出來るだけ少くしようとしたために、わざと省いたのであつた。宿に何かないか尋ねて見たら、おまささんが色んな賣藥を持つて來て呉れた。悉く富山製の何々丸の種類であつた。中でも六神丸と稱せられて小さい硝子の管に入つた黑色の微粒はこの土地の愛用藥で、大抵の病氣は皆んなこれで直して仕舞ふのださうであつた。どちかと云へば私は藥に就いては不斷から多く期待しない方であつた。富山の六神丸でも、支那の本場のでも、或はどこかの十二神丸でも、安靜にして寢てゐるほどよい藥ではないと信じてゐたのであるが、それでもこの時はその自然療法のみに委せては置けなかつた。で、兎に角服藥させ、私の部屋を病室にして看護した。自分が求めて病氣にさせたのだから、私の心は詫びと後悔で一杯であつた。枕許に坐り、手拭で額を冷やしてやりながら、熱でほてつた彼の顏を見てゐると、今まですつかり忘れて仕舞つて思ひ出したこともない一つの出來が不圖記憶に甦つた。

東京を立つ一週間ばかり前のことであつた。長男は子供部屋の壁の隅で捕らへたのだと云つて、草色のたよ〳〵とした身體から二本づゝ左右にボートの櫂のやうに突き出た、あの美しい、透き通る翅を持つたうす翅蜻蛉を持つて來て見せた。彼はこれで優曇華を拵へて見るのだと云つた。昔の人たちが何か普通でない事の前兆として怖れてゐる優曇華が、このうす翅蜻蛉の卵に過ぎないとは私も知つてゐたが、實驗を見たことはなかつた。二三日すると彼は旨く行つたから見に來て呉れと云つて私を自分の机に引つ張つて行き、抽斗からライオン齒刷毛の空箱を取り出して見せた。箱の中は一面の優曇華であつた。私はその無數の白い支柱と、その上に振り撒いたやうに附着してゐる、同じ白色の小さい點々を眺めながら、斯う話して笑つた。若しお國のお祖母樣でもゐらしてたら、旅立ちを前にして飛んでもないことだ

と、さぞ氣になさるだらうね。――

私の思ひ出したのはこの話である。而してその時には蝶の卵や蠶の卵を見るのと違つた感じはしなかつたに拘はらず、今は急にその優曇華が無氣味になつて來た。それと息子の不意の病氣に何か繋がりがあるやうな氣がしてならなかつた。實際優曇華が年寄の信じてゐるやうな不吉なものであるとすれば、それがうす翅蜻蛉の卵だと云ふ科學的の證左が何んにも恐怖を減じさせはしなかつた。問題はどうしてそんなものを彼がわざ〳〵拵へて見たかにある。その偶然なもの好きが怖ろしかつた。さう思つて見ると、いつになく體溫計も藥も持つて來なかつたことや、泳ぎたがらないのを無理に勸めて泳がしたことまで、すべてが優曇華の不吉な象徵を役立させるための素因であつたやうに考へられた。萬一にも彼の病氣が單なる風邪でなく、この儘この山の中で重態に陷るやうなことにでもなつたらば――樣々な悲しい想像が私たちを震ひ上らせた。その日までの樂しさなぞは一瞬の間にけし飛んで仕舞つた。

併し彼は三日たつと段々に快くなりかけた。中途で一度ぶり返しをやつたけれども、六日目にはもう完全に癒くなつた。皆んなどんなに嬉しがつたらう。落ち度のある私は殊に拜み度いほど有り難かつた。ところが彼が起き立つてから二日とたゝないうちに、今度は三男が入れ代はりに病氣になつた。私たちは再び周章てた。症狀は兄と同じであつたが、兎に角兄の方はもう一人前になりかけた强い肉體を持つてゐたに反して、これは彼の半分も年取らない子供であつた。ぐつたりして、急に赤ん坊に返つたやうに小さくなつて寢てゐる彼を見ると、一度消えかけた優曇華の恐怖が再び勢を盛り返した。これまでの夏はどんな山の中に連れて行つても、どんな不便な簡素な生活をさしてもついぞ、煩つたりしたことのない彼等が、二人まで斯んなことになると云ふのは、たゞ事ではないやうに感じられた。兄の病中に警察電話を利用して、十二里先の三本木に注文したバイエルのアスピリンと共に、やつと體溫計が屆いたのも善し惡しであつ

た。今まで額のほてりや、舌の色や、食慾の加減で大まかに推量してゐた容體が、銀水線の胡魔化しのない昇降に依つて、その度に嚴正に指示された。低い時はそれも嬉しかつたが、反對の場合だと、皆んなの不安と憂惧は體溫計のなかつた前より倍になつた。せめての頼みは、同じ症狀だから經過も多分兒の通りに行くだらう、すれば三日もたてば熱もそろ〳〵下る筈だと云ふことであつた。併しその日になつても依然として三十七度五分以上に絡んでゐる執拗な熱を見ると、私たちの怖れは凝結した。親切なる宿の主人が、呼ぶならいつでもその手配をするからと申出てゐた醫者のことが初めて眞面目に私たちの考慮に上つたのは三日目の晩であつた。それはこの湖畔から四五里手前の或る村に住んでゐる村醫だと云ふことであつた。三年に一度あるかないであるが、それでもどうかして富山の六神丸ではどうしても癒らない病人が出來た場合には、近傍の村では皆この村醫を借りに行くのだと云ふことであつた。それに昨年までの老人と違つて、今度のは學校出の若いお醫者さんで中々評判もよい、と主人は言つてゐた。併し私たちはその説明で澤山な氣がした。その村醫さんにわざ〳〵來て貰ふのは、もう一服六神丸を飲ませて見るのと大差ないと信じてゐたのであるが、三日目の熱は私たちの意見を變へた。どんなお醫者さんにしろ、兎に角一度診察して貰つて、病氣の性質だけも知ることは、決して無駄ではないであらう。その上で一番よいと思ふ方針を極めて適宜な處置を取ればよい。

朝になると主人は早速その村の役場へ電話をかけて呉れた。村醫は丁度近くの村へ往診中で、晝頃でなければ歸らないが、歸れば直ぐ行かせると云ふ返事であつた。十二時に歸つたとして、而して貸切りの自動車に乘せて來たとしても子の口までは一時間かゝる。それからまた船で湖を横ぎるのだから、早くても二時頃だらう、と主人は云つた。私たちは餘り信用してもゐない、それどころか昨夜までは來て貰ふ積りさへなかつたお醫者さんが不思議にも急に待遠しくなつた。彼を信用しなかつたのは間違ひであり、その氣持は田舍のものと云へば判斷なしにけなさうとする都會風な傲慢で

あつたと考へるやうになつた。私たちはどんな名醫を迎へる場合にも劣らないほど、謙虚な、慇懃な氣持で今は彼を待つた。彼が來て吳れさへすれば何もかもよい事情に一變しさうに思はれてならなかつたので、いよ〳〵一時過になつて、子の口から醫者の着いた知らせの電話がかゝり、約四十分の後湖上に遠く發動機の響を聞きつけた時には、非常に嬉しかつた。

お醫者さんはやつと着いた。白つぽい脊廣を着て、痩せた、脊の恐ろしく高い、二十七八位に見ゆる若者であつた。顏も身體に負けず痩せて、長く、その割には廣い立派な額で、その上に少くとも六寸はあるだらうと思はれる赤い髮毛が、夏帽子の下で亂された儘くしや〳〵に縺れてゐるところは、その下にある怒つた大きな鼻や、それに釣り合つた大きな口と共に、ちよつとグロテスクであつた。若し細面のお獅子のお面と云ふものがあるなら、彼はその最もよい標本になれさうであつた。併しお醫者さんは顏に似合はぬおとなしやかな樣子で、寢床に近づき、診察にかゝる前に今日までの經過を尋ねた。私たちが委しく答へると、その鬚をゆすつて一々領首きながら聞いた。それから傍の鞄を開けて聽診器を取り出し、二つのゴム管の端を左右の耳に押し入れながら、セルロイドの棒を患者の擴げた胸の上に當てたと思ふと、嚴然と號令するやうに云つた。

『大きく息をして!』

私たちは喫驚して彼を眺めた。病人の子供がにやりとした。それほどお醫者さんの聲は唐突に高く響いたのであつたが、併し彼自身は非常な眞面目さで型通りの診察を續けた。而して腸の一部を押へて見て痛くないかとか、頭痛がするかとか尋ねて、それに子供がちつとも痛くないとか、頭痛は大してしないとか答へると、彼はくるりと私たちの方を向いて、珍しさうに話しかけた。

『お子さんから斯んなはつきりした言葉を聞くのは實に久しぶりです。』

彼は靜岡縣の人で、この地方に來た時には患者の云ふことがちつとも分らないで困らされたものだ、と述懐した。で、あんな大きな聲で病人に命令する癖がついたのかも知れない。——私はさう思ひながら、手洗の水を勸めた。

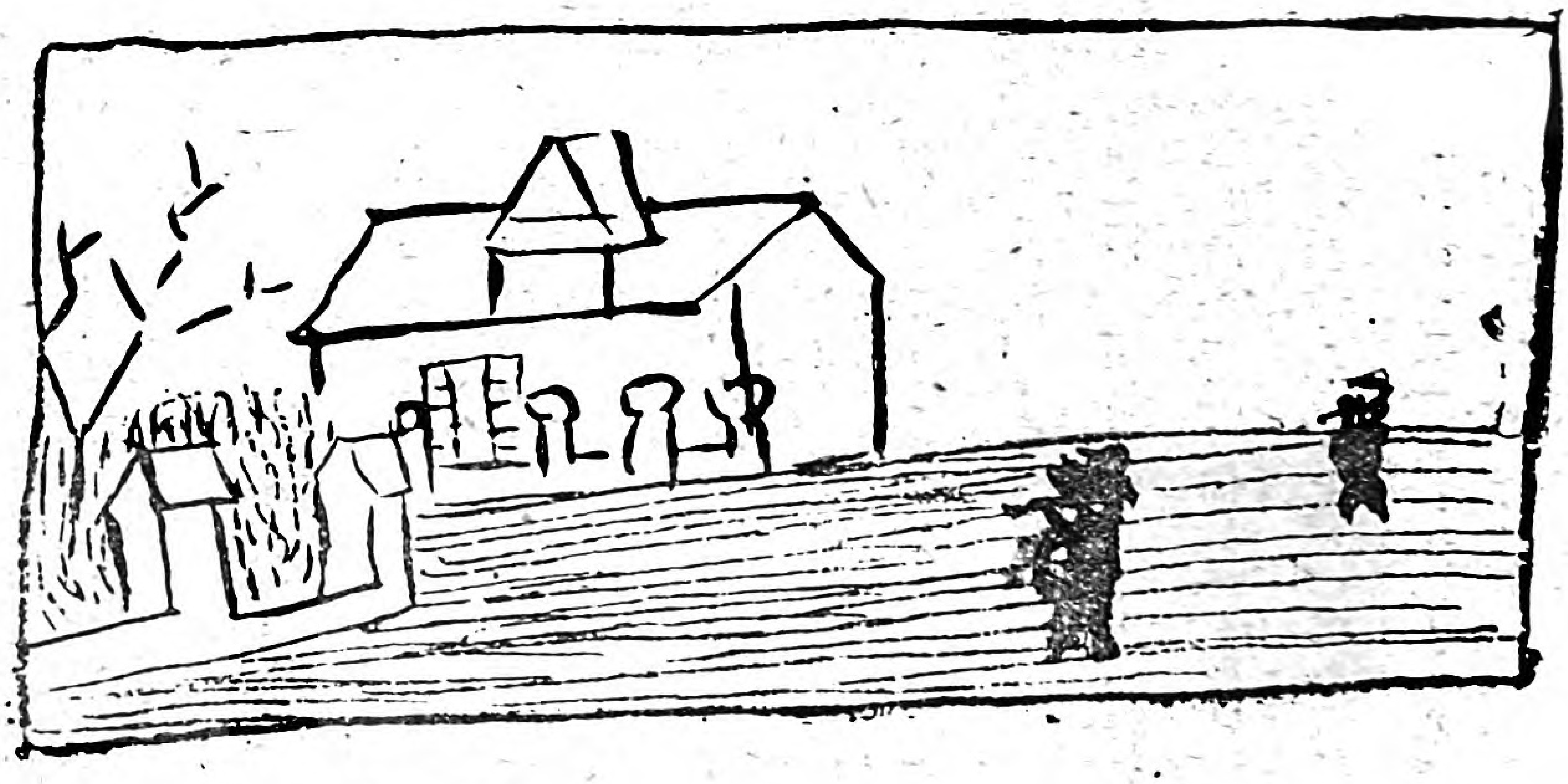
診察は終つたのだ。私たちは聞かうかしたものを聞かなければならない。一體病氣は何であらうか、單なる風邪に過ぎないだらうか。これまでの經過に何か心配な徴候は見えないであらうか。——と、彼は濟まして泰然として答へた。

『ちよつと分かりませんなあ。胃腸でも惡くしたのでせうかなあ。風邪のやうでもありますなあ。そんな藥でもあげて見ますかなあ。——』

その晩私たちは病人の枕許に集まつてお醫者さんの口癖を代る〳〵して見て笑つた。たつたそれだけの漠然とした診斷のために、東京の一流の專門醫に負けない診察料を支拂はされた上、自動車代だ、モータボート代だと數へ立てると、ちよつと狐につままれたやうな馬鹿々々しさを感じたが、私たちは腹は立たなかつた。仕合せにもその夕方から病人の熱が下りかけたからであつた。診て與れただけで、お藥は飮まなくても病氣が癒る位、あのお醫者さんは非常にえらいに相違ない。私たちはさう云つて悦んだ。併し今一度あのお醫者さんを煩はすやうなことがあつては大變であつた。私たちはいろ〳〵考へて見た末、急に東京に歸ることに極めた。

二日續いた山の恐ろしい暴風雨がやつと落ちついた明けの日、私たちは立つた。病人の熱はまだ本統ではなかつた。暴風と出水に壞れた十三里の道を自働車で運ばれてゐるうちに彼は一層わるくなつた。古間木驛から汽車に乘る時には褞袍に包んでやつと抱へ込んだ程であつたが、それでも私たちはあのまゝ湖畔に留まつて、あのお醫者さんにかゝつてゐるよりは危險ではないと信じてゐた。殊に優曇華は兄の拵へたもので、彼と關係はない筈だ。——さうであつた。彼には終に關係はなかつた。而してまた優曇華は矢張りうすばかげろふの卵以外の何ものでもなかつたことが判明した。三男は上野に着く頃にはけろりとして快くなつた。私は多分高山病の一種であつたらうと思つてゐる。

新年號創作特別附録



何が彼女をそうさせたか

(五幕八場)

藤森成吉

第一幕

人物

すみ子。　十三歳。

阪本佐平。　五十二三歳。

問屋の主人。

山下。　巡査部長。

時

大正五年十一月初旬。

處

東京市外の靜かな町。

舞臺

上手寄り稍斜めに、問屋風な店の一部。下手へ板塀。塀の上には立派な土藏が突ツ立つてゐる。下には美事な切石の濠。塀の中の植え込みの落葉が、少し散らばつてゐる。

幕あくと、すみ子ひとり下手から出る。愛くるしく美しく魅力ある顔。殊に眼がすばらしい。十三歳にしては非常にマセたところが見える。桃割れに結ひ、着物は洗ひざらした子供ッぽい物。出來るだけ年を小さく見せるやうに苦心してある着つけ。肩からズックの古びた鞄をさげてゐる。秋晴だが風は寒いのに、足袋もはかない草履穿き。

すみ子。ああ、くたびれた！

四方を見廻して切石の上へ腰をおろす。又周圍を見、鞄の中から燒芋を取り出して、うまそうにガツガツ食べる。一つ濟ませて、何か遠くを思ひやるやうなウツトリした眼つきで正面上方を見、他の芋を取り出す。

彼女が最初の芋を食べてゐる時、塀の横手に佐平出、蔭からそッと見てゐる。二つ目へ食ひついた時、突然飛び出して來て頸すぢをつかまへる。

佐平。すみ子ッ！

彼女びつくりして立ちあがらうとする。佐平の力によろけ。

すみ子。痛いわ！（焼芋を棄てて兩手で彼の手をもぎ放す。そして怨めしそうに見あげて）痛いぢやないの、おぢさん！

佐平。あたり前よ。手前、何でいつまでも油を賣つてやアがるんだ。

すみ子。遊んぢやゐないわ。

佐平。ゐねえ事があるもんか。おれアさツきからあとをつけて、みんな知つてるぞ！（平手で横鬢をくらはせる。）

彼女兩手で眼を抑へる。

そのあいだに、佐平鞄をあけて見る。新聞へくるんだ焼芋をモ一つ取り出す。

佐平。こんな買ひ食ひばツかりしやァがつて！

すみ子。（涙に濡れた眼をあげて）買つたんぢやありませんわ。そりやァみんな貰つたの。

佐平。うそつけェ。（抛り投げやうとしたが、一口に頬張る。そして鞄の底の銅貨や銀貨をチヤラチヤラ搔き集めて、片手の掌に載せて目分量を見て）あれから歩いて、まだこれツぱちきり貰はねえのか？

すみ子。（やや反抗的に）そんなに揃かないでしよ。

佐平。いけねえ、これツぱかり。――手前は、この頃毎日貰えが減つて行くな。

すみ子。（用心して稍後退りながら）あたいが減るんぢやなくて、おぢさんの慾の方が殖ゑるんだわ。

佐平。（眼をいからせて）この小便垂れ！（手をふりあげる。）

彼女すばやく飛びのく。

佐平。口ばツか、ツベコベと、小まツしやくれやがつて、腕の方は鈍る一方だ。

すみ子。だつて、あたいもうこんなに大きくなツちやツたんだもの。そうそう子供並みに哭れやァしないわ。

佐平。そんなら餘計一所懸命やらなくちやァいけねえぢやねえか。どうして、手前はこの頃そう怠けたがるんだらう。ふん、こないだ拘留に遭つてから、悸氣がついたんだな。

すみ子。(首を振つて)そうぢやないわ。

佐平。ぢや何だ？

すみ子。(思ひ切つて)あすこの巡査部長さんが、いろいろ教へてくれたの。

佐平。部長が？ふうん、どんな事を吐かしやァがつた？

すみ子。ここを出たら國へ歸れツて……。

佐平。(嘲笑つて)へん、埼玉の田舍か？生憎誰も國にやァゐねえと來てら。おツかァはまおとこと逐轉、親父ァ病氣の揚句ののたれ死。——たツた一人の叔父貴にでも見つかつたもんなら、又淺草の子供芝居へ賣り飛ばされる位えが關の山さ。なァすみ子。

すみ子。(遠慮がちに)今から思やあ、あたいあの子供芝居の時の方がずツとよかつたわ。

佐平。何だと？——(言葉を變へて)昔の事あ何でもいいもんさ。手前が大きくなつてから憶ひ出しやあ、今の暮しァ極樂だあ。

すみ子。(ほんきで)あたい、これからもつと淋しい目を見なけりやァいけないんなら、いつそ死んぢまつた方がいいわ。

佐平。はははは、子供の自殺かい？こいつァ大笑ひだ。そんなに急に世の中の無常を御感ずり遊ばしたなあ、やつぱり部長の入れ智慧からだらう。彼奴、外にどんな事を云やァがつた？

すみ子。もし國で誰も相手にしなかつたら、おれが何とでも心配してやるツて……。

佐平。おツとどツこい、横ツちよからふんだくられておたまり小法師があるもんか。てツきりそんな事ぢやァねえかと思つたから、すぐおれが手くばりしたんだ。

すみ子。（怨めしそうに見て）ひどいおぢさん！　そして、部長さんから貰つたお金まで取りあげちまつて。――部長さんがそう云つてたわ、あたいは猿だつて。そして慾深の猿廻しのおぢさんにみんな搾られちまふんだつて。

佐平。そいつが手前に利いたんだな。やい、手前、部長の馬鹿野郎の云ふ事なんか本氣にしたら、それこそ大間ちがひだぞ。

すみ子。だツて、あの時は、あたい部長さんの云ふとほりだと思つたわ。

佐平。（怒つて）この恩知らずめ！　手前が苛められてるのを救ひ出してやつたなあ、一てえ誰だ？　うむ？　そればかりか、おれが今まで見せてやつた芝居はみんな忘れちまつたか？

すみ子。（負けない調子で）おぼえてるわ。

佐平。おぼえてたらそんな事が云へた義理か？おれはな、一遍學校へ行つた事もねえ可哀想な手前に、どうかほんとの人間の道をわからせてやらうと思つて、散々ツぱら閑や金を使つてああして芝居を見せて廻つたんだぞ。唯の酔狂や面白づくでやつた眞似ぢやァねえや。手前の見た芝居で、誰が主人の事を猿廻しだなんて、怪しからねえ事を吐かす奴がある？　見ろ、御殿様の仰せなら、たとへどんな無理無體だつて、みんなチャンと守つて行くぢやァねえか。そ

れどこか、よろこんで死にせえするぢやアねえか。それが昔ッから日本の眞人間の道だ。それにはづれた眞似をする奴あ、光秀でも大野九郎兵衛でも、見ろ、みんな人でなしの畜生にされて、ぶざまにくたばッちまふんだ。

すみ子。（眞面目な口調で）おぢさん、芝居ッて忠義の事ばッかり演るもの？

佐平。そうさ。それが第一だつてヱ道理を敎へるもんだ。そうでねえ芝居なんて、あつたつてくだらねえ馬鹿げた物ばッかりよ。

すみ子。（半ば不審そうに）そうを？

佐平。（氣づいて）やい、餘計な事で、唯せえ短え秋の日を潰させやアがつて、さッさと廻れ！　ぐづぐづしてると、そのままにやあ濟まさねえぞ。

すみ子なほ考へてゐる。

佐平。（荒く）何を愚圖ついてやアがる。（彼女を突き飛ばす。）

すみ子よろけて見あげる。

佐平。きッとそうやつて遊んでゐる事だと思つて、今日はわざわざ見張りに來たんだ。ついて來なくつたつて、手前がどこにどうしてゐるか位えな事アちやんと見とほしだが………（顎でしやくつて、「行け！」と命令しながら睨む。）

すみ子、默つてとぼとぼと上手店の方へ歩いてゆく。

芝居の訓戒が始まつた頃から、店の帳場へ主人出て來て、頻りに帳面を調べてゐる。

すみ子。（それを見て、鞄の中から厚紙の書付を取り出し、一寸佐平を振り返つて進み寄つて）御免下さい。

主人熱心に調べて顏をあげない。

すみ子。（聲高に繰り返す）御免下さい。

彼、やつと顔をあげて彼女を見る。

すみ子。（丁寧に頭をさげて）どうぞこれを御らん下さいまし。（疊敷きの上へ身體を伸ばして、書付を帳場の方へ差出す。）

主人。（眼鏡越しに見やつて）何だね？　――ああ孤兒院か？　わたしンとこは、それ、そこに貼つてあるやうに、諸勧化物貰ひ一切おことはりツて事にしてるから、さきへ行つておくれ？

すみ子。（押し返して）濟みませんけれど、一寸御らん下さい。

主人。（顔をしかめて）今忙しくて、迚もそんなものをよんでる暇はないよ。

すみ子。でもどうぞ一寸……。

主人。ないつてツたら！

すみ子。濟みませんけれど………（可憐に、又頭をさげる。）

主人。うるさいなあ。……（プリプリしながら我を折つて）何が書いてあるんだい一體？（書付を取りあげて）哀願書？　ふむ、（聲を立ててよみつづける）謹で四方の御慈善閣下に奉願候。小生儀明治三十七八年兩度日露戰役の際、陸軍近衛歩兵上等兵相勤め、滿洲の野に轉戰し、凱旋後一旦本國へ歸省中、彼の風土の變れる地に寒暑を凌ぎたる爲めなるか、俗に云ふ風疾病に罹り、永々開成堂醫院の厚き御施療を受け居りしも、病症日々に重きを加へ身體手足自由を失ひ、戰功に依り一時金は御下賜有之候得共、長病の爲め費消仕り、加ふるに愚妻昨年十月十四日肺患に罹り、二子を遺し黄泉の客と相成り、他に頼るべき親類無之、重々の不幸を悲しみ一時割腹せんと迄決心致し候得共、跡に

残す二子の愛に氣も心も顚倒し、當然軍人の守るべき道も忘却し、唯々四方の御慈善者の厚き御慈悲に浴し、以て親子の生命を保全仕度、何卒博愛慈善の志を以て、多少にかかはらず御義損被下度此段奉願候。

下谷區入谷町十三番地　太田友吉

娘太田ムメ

開成堂醫院印

慈善御尊下樣御中

……………（笑ひ出して）ははは、慈善御尊下樣はよかつたなあ。こりや、お前さんのお父さんが書いたのかい？

すみ子。はい。

主人。友吉さんはなかなか文句がうまいね。

すみ子。……………。

主人。お前さんは、下谷からわざわざこんな方へ廻つて來たのかい？

すみ子。はい。

主人。そいつア御苦勞樣だな。——だが、そんなに歩いたら隨分貰ひがあつたらう。（書付を返す。）

すみ子受け取る。彼再び帳面へ眼を落す。

すみ子。（意外そうに）旦那さま！

主人。（うるさそうに）何だい？

すみ子。少しでも頂かせて下さいませんか？

主人。（顔をあげて）よんでくれッて云ふからよんであげたんさ。お蔭で暇を潰されたぜ。

すみ子。でも……。

主人。（鋭くペン先きで貼紙の方を指して）そこに貼つた紙を御らん。お前よめないのか？

そのあいだ、佐平は塀傍へ突つ立つて彼女を監視してゐる。貰ひが手間取れるのに業を煮やして、忌々しそうに兩脚を踏み鳴らし舌打ちをする。

その時、下手から巡査部長山下がサアベルを振つて出る。迂散臭そうに傍を過ぎやうとして、靴音とけはひに振り向いた佐平の顔を見て、突然彼の襟へ手をかける。

山下。（同時に）おい！

佐平。（逃げ出そうとして間に合はず）旦那ですか？

山下。旦那ですか、ぢやアない。貴樣、又惡い事をやつてるな。

佐平。（神妙な樣子をして）どう致しまして。

その時、斜め横のすみ子が物音に振り向く。思はず「あツ……」と聲を擧げる。

山下。（彼女を認めて）見ろ、ほら。（片手で佐平をこづきながら、片手で彼女を指す。）

すみ子。（佐平の眼色に構はず）おぢさん！（鞄を鳴らせながら馳け寄る。）

山下。（一寸睨んで）まだ、お前手先きに使はれてるな。

すみ子。（情なさそうに見あげて）だツて――。

山下。又すぐつかまつたのか？

彼女うなづく。

山下。うむ。立派な現行だ。おい佐平。貴様、こんな可愛さうな子供に詐欺を働かせて、罪たア思はないのか？

佐平。(もがきながら)旦那、どうか今日だきやア見逃してやつて下さい。後生です。これからアもう、御言葉どほり決してやりません。

山下。(笑つて)そして今度あ淫賣婦にでも賣り飛ばすか？もうちつと薹も立つたし、顔も奇麗だしな。

佐平。旦那、……….

山下。このあいだッから貴樣を探してるんだ。思ひがけない處で出會つて、今日は何よりだ。さあ一緒に來い。………

(引ツ立てながらすみ子に向つて)すみ子！ッてッたな？お前。

すみ子うなづく。

山下。もう今度は、決してこんな奴につかまらせないやうにしてやるぞ。大丈夫な處へ世話をしてやるからついといで。

(上手へ進む。)

すみ子つゞく。

主人、騷ぎに土間へ降り、店先きに立つて眺める。

主人。(通る山下へ向つて)御苦勞さま――。

山下。(一寸帽子に片手をあげて)や。

すみ子。きまり惡さうに俯いて去る。

主人。(見送つてから)だから、諸勸化物貰ひ一切おことはりッて云ふんだ。――(笑ひ出して)はははは、飛んだ活

劇を無料（ただ）で観たな。（舌打ちして）だが、餘計な暇を潰させやがツた。（いそいで帳場へあがつてゆく。）

第二幕

人物

すみ子。

原。養育院収容者の身元調べ係り、四十三四歳。

敬三。中年の跛者。

忠助。老人。
平治。老人。
おすず。赤んぼを抱へた、もと女工。
おふく。老婆。
おちか。老婆。
（以上、収容者）

その他大勢の老爺老婆等。

時

前幕から一週間ばかり後。

處　養育院内の離隔室（收容者を、最初一週間ばかりごちや混ぜに入れて置く室。）

舞臺　廣い室。正面奥にドア。板の間に、簡單な寢台が幾つか所狹く並んでゐる。その端の一つにすみ子がゐる。大體前幕の着つけ。周圍の寢台上に、よき按配に、男女收容者が横になつたり起きあがつたりしてゐる。着物は青服やいろいろ。或る者は板の間の上で何かゴソゴソやつてゐる

幕あくと、中央寢台の上のおすずが、赤んぼに乳房を含ませてゐる。身體が弱つてよく乳が出ないので、（幕あく前から）赤んぼしきりに泣いてむづかる。

おすず。おお、よし、よし。（一生命懸あやす。）

敬三。（突然、一つ置いた横の寢台から唸る）うるせゑなあ！

が、赤んぼは、吸つて見ては又切なそうに泣き出す。

平治。赤んぼだもの、泣くなア仕方ねえ。

敬三。いくら赤んぼだツて泣きすぎらあ。しよツちう泣いてばツかりゐるぢやアねえか？

おふく。お乳が出ないせいだよ。

おすず。（涙ぐんで）さうですの。——おやかましくて、ほんとに濟みません。

忠助。乳の出ねえも無理アねえや。押し麥五分の南京米を食はされて、おまけにお汁や香々や煮メばツかりと來ちやアな。
すみ子。(見かねて端の方から飛んで來て)おばさん、又御守りしてあげましよ。
おすず。ありがとう。ちやあ一寸抱いて下さい。すみちやんが抱いて下さると、いつも妙におとなしくなるから……。
すみ子。あたい、赤んぼが大好きだから、赤んぼの方でも好いてくれるんでしよ。(抱き)ヨチヨチ、ヨチヨチ……

(と、搖ぶりながら室の中を歩き廻る。)

赤んぼ、なかなか泣きやまない。

おちか。(眺めて歎息して)男ツてもなア、ほんとに薄情なもんだねえ。こんなまだ若え人にからかツて、子供を生ませて、その揚句ドロンを定め込むなんて——ちツたあ、女や赤んぼの身にもなつて見るがいい。
おふく。全くさ。わたしが此の年になつて、こんな養育院なんかの厄介にならなけりやアいけなくなつたも、みんな男の薄情のお蔭さ。男の畜生め!
平治。全く女が赤んぼを持つて棄てられちやあ、どうする事も出來なくなるべえなあ。
おちか。(おすずへ)お前さん、工場へ行つてたんだつてね。相手の男も、やつぱり工場の人?

おすず默つてゐる。

おちか。(重ねて)同じ工場の人?
おすず。(低く)えゝ。
忠助。棄てられるやうな男に欺されるなんて、お前さんもちつと馬鹿だツたね。
おふく。(怒つて)お默り、老いぼれめ!そう云ふお前さんこそ、さぞ女に欺されない御悧巧さんだツたらうよ。

敬三。（吹き出して）誰があんな爺を欺す馬鹿があるもんか？
おふく。なにさ、あれで自分ぢやあウント惚れられたつもりだらう。
平治。おばアさん、なかなか手厳しいな。
おふく。當り前さ。

そのあいだに赤んぼ次第に泣きやむ。

おちか。おやおや。すみちやん、お前ほんとに子守りが上手だねえ。いつか默つちやつたわ。
おふく。（相變らず毒ツぽい調子で）今まで、散々子守りをして來たんだらう。
おすゞ。（すみ子の方へ兩手を差し出して）どうもありがたう。
すみ子。いゝえ、いゝんですよ。寢るまでもう少し抱かせて頂戴。
おちか。まだ寢ないの？
平治。（感心したやうに）お前さんは、まだ子供の癖にほんとにやさしいな。大きくなつたら、さぞいいお母さんになるだらう。おれのお光も生きてたら、今頃丁度これツ位になつてるだらうに。（鼻を啜る。）
おちか。わたしもさ。おすみちやんを見ると亡つた娘を思ひ出して仕方ないんだよ。こんなに縹緻はよくなかつたけれど、どこか馬鹿に眼鼻が似てゐて……。
敬三。（向ふで大あくびして）おいおい、何をくだらねえ愚痴をしやべり合つてるんだい？糞面白くもねえ。子供がどうしたツてんだ？

赤んぼ又一聲二聲泣き出す。すみ子あやして默らす。

敬三。(舌打ちして)チエッ!又やりやアがる。花より團子ツて、腹が減つちやアどうしたツて駄目よ。――乳が出ねえ位えなら、いツそ今からお母アと引ツ放した方がいいや。

おすず。(聞きとがめて)え?室が定つたら、あの、赤んぼと別れるんですか?

敬三。そうとも。

おすず。(驚愕して)まア――どうしやう。………いゝえ、わたし別れないわ。どんな事があッたツて別れたりしないわ!

敬三。そんな事を云つたツて、赤んぼは幼兒室、女は女健か病室と、チヤアンと昔ツから定つてるんだ。

おすず。でも、わたし此の子を取られる位なら、もう生きてたくない!

敬三。取つて食やアしめえし、なアに大きくなるもんなら勝手にならア。

おすず。いや、いや、いや………(泣き伏す。)

おふく。(半ば諷刺的に)捨てられた男の種でも、あんなに可愛いもんかねえ。

すみ子。(おすずの傍へ寄つて)おばさん。そうしたらあたいも幼兒室へ行くから、よろく代つて看てあげますわ。

おすず。(突ツ伏したまま)ありがたう。でも、でも………。

女達や平治、霎時沈默する。

忠助。(敬三へ向つて)大將!お前馬鹿にここの事が明るいなあ。

敬三。(ニヤリ顔をゆがめて)そうともさ。何度も何度も御世話さまになりやあ、大抵明るくならずにやゐられねえや。

忠助。え、何度も？——そんなに大將、ここが御得意なんかい？

敬三。御得意ともさ。かう見えても、これで七度目さ。

皆。（異口同音に）七度目？

敬三。（得意になつて）ふふん、お前達見てえな新米たアちツとものがちがふぜ。

忠助。（好奇に滿ちて）だが、どうして又大將、そんなに幾度も入つて來られたんだ？　受附で、よく何とも云はなかつたな？

敬三。（いよいよ得意になつて）だから、お前達新米たアちよいと估券がちがふツてんだ。牢屋なら差しづめ名主株だぜ、え、おい！

おふく。養育院の名主さまぢやあ、たんと幅も利かないねえ。

敬三。冗談云ふない。そんなら誰かおれの眞似が出來るか？

忠助。おれも又いつここを出されるか知れねえ。こんなまづい物ばツか食はせやがツて、着物だツて、もうそろそろ十一月の半分だツて云ふにまだ襦袢と單衣物一枚ツきり貸してくれねえやうな處ア、出されたツてあんまり未練もねえが、もし又行き倒れにでもなつた時の參考に、一つその秘傳を聞かせてくんねえか。

敬三。參考はよかつたな。………その行き倒れが秘傳よ。

忠助。ほう、行き倒れさへしりやア、いくらでも又入れて貰へるか？

敬三。入れて貰へるか、野たれ死にするか、どツちか一つよ。

おふく。あんまり勿體ぶらずにおしやべりよ、名主さま！

敬三。お前、こんな處へころげ込むに似合はねえしたたか婆さんだな。ぢやあ惜しいが敎へてやらあ。全く無料の代物ぢやアねえぞ。

おふく。代は見ての御戻りツて事にしとくれ。

敬三。つつしんで聞きやアがれ。――いいか、ぶツたほれるなら、まづ地の利を選べさ。共同便所の入り口がいツちいいや。

おちか。まアきたない。

敬三。そのきたねえとこが附け目さ。何しろ始終人の出入りする場所だらう、それ、すぐ人目にやアつく。邪魔にやアなる。近所の交番へ走つてくれるも早けりやあ、巡査の來るも早えや。今時、人が見つけねえかもわからねえやうな寒い家の蔭なんかにへたばつて、長え事辛え思ひをする位え馬鹿げた事アねえぞ。知らせが早えばかりぢやアねえ、何しろ場所が場所だ、いざ診察するツて段になツたツて碌すつぽ診やアしねえや。ヱヱきたねえ野郎だ、また何だツてこんな處へ寢ころびやアがつたんだ、ツてんで、すぐさま行路病人として院送りにしてくれら。――どうだ、こんな手ツ取り早え手が外にあるかの。

忠助等。なるほどなあ。

敬三。だが、その巡査がやツて來た時がコツ物よ。ウンウンうなつてるてえと、おい、こら、何だこんな處へ倒れやアがつて！とか何とかツてんで、一つ靴で蹴られるか小突かれるに定つてら。その時、ハツと思つて頭をあげたりなんかしたらもうおしめえよ。けんつくを食はされて、すぐ又追ツ拂はれるが關の山よ。そいつを反對に、もう逆も生きた空もねえやうに、かうぐツたりして餘計あはれに叩るんだ。その氣合一つが、勝つか負けるか毛筋一本の境目よ。

忠助等。（且つ感心し、且つ興がつて）ふうん、なるほど。

平治。あきれたもんだなあ。

おちか。まアほんとに。

敬三。そうやつて、東京各區をあッちの便所でブッ倒れ、こッちの便所でころがつて、ぐるぐる廻つて入つて來るんだ。ここ迄送り屆けられせえすりやあ、もう〆この兎よ。いくら顔を知つてたッて、澁々入れねえわけにやあ行かねえ。一旦入りせえすりやあ、今度出すなあちよいと面倒だから、當分安心して暮せるッてえわけさ。

忠助。なるほど、うめえ工夫もあるもんだなあ。

おふく。（敬三へ）お前さん養育院荒しかい。え、世の中にやあ、上にやあ上手があるもんだねえ。

敬三。當り前よ。これだけ考えつくにやあ、今迄どれだけひでえ目に遭つてると思ふんだ？一てえおれ達見てえな跛の不具者ア、△△△何だ彼だつて云ふからにやあ、さアどうかおいで下せえッて向ふから呼びに來るが當然だらう。仕事を見つけてくれるならくれるがいいや。その保證もしてくれねえからア、大手を振つてここの門を潜つたッて何の差し支えがあるんだ？

忠助。（奇聲を發して）ヒイヤ、ヒイヤ。

敬三。それどこか、おらアここの待遇改善を叫んでやりてえんだ。何だいあの飯ア？この着物ア？この寒空に向つて、血の氣のねえ年寄りやひよわえ子供が、一てえ單衣の一枚やそこらで凌げるか凌げねえか、えらい幹事さまにやあ皆目おわかりにならねえとよ。そう云やアすぐ、何て思つても費用が不足だからと來る。うそつけッ、みんな高え月給を取りやアがつて。……そんならそれで、慈善事業の何のつてえらそうな顔をしやあがるな。まアこの死んでゆく人

間の多い事を見ろい。もともと身體が弱えからだ何だかだツて吐かすが、一てえその前にこの着物（自分の青い單衣をひツ張つて）をどうしてくれるんだい？え、おい？

忠助、おふく等。全くだ。

おちか。ほんとに、養育院ぢやなくて△△し院だわ。

敬三。着物ばかりぢやアねえ。こんな寢台だけあつて、枕一つ貸さねえ、裸一貫手拭一本貸さねえやうな處で、人間用が足りるかい？だから、こゝン中あ盗人（ぬすつと）が大流行（おほはやり）だ。うつかりしてゐるもんなら、端から盗まれちまわア。毛だツて爪だツて、いゝや、生命だつて盗まれかねねえぞ。

忠助。ヒイヤ、ヒイヤ、

敬三。老いぼれ！おい、變な掛聲をしてくれるねエ。——そんな身の廻りの物あ、自分の仕事の金で買えツてえ有難え仰せだが、よく行つてやツと月一圓や二圓の小遣で、何が買へるんだ？

その時、正面のドアをあけて原が入つて來る。一寸人間味を持つた顏。——みんなびツくりして居ずまひをなほす。

原。（敬三へ向つて）今大きな聲でしやべツてたのはお前かい？

敬三。（頭を掻いて）へえ、さうです。

原。何を又雄辯をふるツてたんだい？

敬三。（身體をすくめて）へえ、その一寸……。

原。何か又ここの不平を云つてたね。

敬三。いやはや、聞かれちまひましたか？――でもまァ原さんでよかつた。後生ですから、どうか外のかたへは内密にしといて下さい。
原。うん、云やアしないよ。直せるもんなら、僕も云つて直して貰ふんだがね――。
すみ子。(赤んぼを抱いたまま馳け寄つて)原のおぢさん！御ねがひがありますわ。
原。ええ――おう、又赤ちやんを御守りしてるね。
すみ子。赤ちやんに、どうか牛乳をやつて下さい。
原。やつぱり乳が出ないか？
すみ子。えゝ、だからどうしても寝られないんです。ほら、いくらだましてやつても、あんに欲しがつて御口をスパスパやつてましよ？
原。ほんとにな。よしよし、ぢやあ何とか監護さんに頼んで見やう。
すみ子。(一寸頭をさげて)ありがたう、おぢさん。(おすずの傍へ行つて)おばさん、よかつたわね。
おすず。ほんとにありがたうよ。――さ、すみちやん、今度はわたしが抱きませう。さぞ重かツたでせう。(赤んぼを抱き取る。)
原。(その様子を見て)すみちやん、手があいたら、一寸來てくれないか？
すみ子。何か御用？
原。ああ、――いいや、ここで話したツて構はない。……お前小間使ひに行く氣はないか？
すみ子。小間使ひ？

原。あのね、今東京市の市参事會員て役をしてゐる秋山義雄ツて、養育院ともいろいろ關係の深い人がゐるんだよ。その奥さんから今朝電話がかゝつて、誰か一人可愛いはしツこい御小間をよこしてくれないか、ツて云ふんだ。で、いろいろみんなで相談した揚句、お前がよからうツて事になつたんだ。普通なら、まだ入つて來て一週間も經たないやうな者を、いくら何だツてそとへ出すわけにやあ行かないが、お前なら可愛らしいし、はしツこいし、それに氣だてもやさしいし、どんな處へ出したツて大丈夫だからツて僕が大いに主張したもんだから、そんならツて事に定つたんだ。こんな處とは較べ物にならないほど暮しもいいし、第一、お前がこれから世の中へ出て一人前になる爲めに、どんなにいゝ手がかりかわからないと思ふんだが、どうだい、行つてみる氣はないかい？

外の男女達。よう、素敵な口がかかつたもんだなあ。とても大した話だ。

おふく。(殘念さうに) わたしも若かツたらねえ。

敬三。笑アせるない。ぢやアお前、お針にでもくツついて行け！

笑聲等雜然。すみ子默つて俯いてゐる。

原。(重ねて) 行かないか？

すみ子。(顔をあげて) おぢさんさへよけりや——。

原。(笑ひ出して) おぢさんは別にいいも惡いもありやアしないよ。ただお前に、又秋山さんによからうと思つて、僕あ云つてるだけさ。

外の男女達。行け行け、すみちやん！そんないい口が又とあるもんぢやアねえ。

すみ子。（なほ躊躇ふやうに）でも、原のおぢさん、行つたらもう歸つて來られないんでしよ。

原。行くんなら、歸らないつもりでなくッちや、………（笑つて）お前、そんなにここがいいのかい。

すみ子。（頭を振つて）いゝえ、よかアないけれど、あたいが行つちやふと、あの赤ちやんが――（赤んぼを指す。）

原。赤ちやんにはチヤントお母さんがゐるし、……いや、お母さんはじき分れなけりやアいけないが、別に世話係りが附くよ。

すみ子。でも、あたいおばさんと約束したんですの。おばさんの代りに看てあげるッて。

原。（動かされて）そうか？

おすゞ。（傍から）すみちやん、ありがたうね。ほんとに。――でも、お前さんの爲めだから、どうか構はず行つて頂戴。

原。お母さんだッて、時々行つて會へるんだよ。それに牛乳も不自由ないやうにするし……。

すみ子。あら、會へるんですか。

原。ああ。

おすゞ。（よろこんで）まアよかつた――。

原。ちやあ行つても、いいだらう？

すみ子。えゝ――でも、赤ちやんと別れるのがやッぱり辛いわ。

敬三。（腕を組んで）面白え子だなあ。

おすゞ。すみちやん、どうかほんとに行つて下さいよ。

すみ子思案してゐる。

原。(困つて)お前の外にやアべつに心當りがないし、弱つたなあ。

すみ子。(決心して)そんなら行きますわ。

原。行くかい。

すみ子。えゝ。

大勢。それがいい、それがいい。

すみ子。その代り、ようく赤ちやんを見てね。

原。よし、大丈夫だ。

すみ子。何時ッから行くんです?

原。ひどく性急(せつかち)な電話でね、今すぐにも、僕の方ぢやあ行つて貰ひたいんだ。

すみ子。(考へて)ぢやあ行きましよ。だけど、誰か附いてッて下さるんでしよ?

原。無論さ。何處に向ふの家があるかさへ、お前知らないんだからね。

すみ子。誰が行くんですか?おぢさん?

原。僕あ行けないが、誰か小使が送つて行くよ。

すみ子。(激しく)いけません、いけません。そんならあたい行かない!

原。(びツくりして)なぜ?

すみ子。なぜッて、わかつてるぢやありませんか。あんなヨボヨボのおぢいさんと一緒なら、あたいすぐ又途中で掠(さら)はれちまふわ。あの坂本佐平の仲間が、どこにでもドッサリゐるんですもの。あたい又きッと連れ戻されて、前見たい

な事をしなくちやいけません。誰かシツかりした、ウント強い人が附かなくツちや駄目。

原。（うなづいて）さうか。

すみ子。どうか幹事さんにさう云つて頂戴。

原。よしよし。ちやあ、誰か極腕ツぷしの強い人を選つて貰はう

すみ子。そんなら一寸待つて頂戴。（自分の寢台へ馳け戻り、わづかな持物を手早く小さな風呂敷包みにする。）

原。いいかい？（ドアの方へ行かうとする。）

すみ子。待つて――（皆の方へ向つて頭をさげて）おぢさんやおばさん。いろいろ御厄介になりましたが、これから行つて來ます。

皆。お目出度う。――行つといで。

忠助。おふく等。羨ましいなあ。

すみ子。これがお別れかも知れませんから、丈夫でゐて下さい。（おすずの寢台に走つて）おばさん、氣らくにして、どうか早く丈夫になつて頂戴。

おすず。（シツカリすみ子の手を握つて）すみちやんこそ、丈夫でゐておくれ。ほんとに御世話になつたわね。いつか又會ひたい事ねえ。

すみ子。きツと會ひましよ。赤ちやんと一緒に。――赤ちやん、さようなら！（赤んぼの背中へ手をかけ、頬や額へ接吻する。やがて、振りかへり振りかへりドアへ行く。）

――幕

第三幕

人物

秀子。秋山義雄夫人。
すみ子。
おせい。女中。
お琴。女中。
勇次。抱え俥夫、五十四五歳。

時

前幕の翌日午頃。

處

市參事會員秋山義雄邸內。

舞臺

上手寄り、舞台三分の二位は疊敷。女中部屋の一部の氣もち。正面奥、壁の上部に硝子戸が作られ、向ふに青い常盤木の列の葉が見える。葉を透し、上手蔭玄關へ行く砂利道の人の姿を覗く事が出來る。雨風の荒れ日のころ。部屋の手前は、奥の室々へ通じる廊下。それにつゞいて、舞台三分の一の下手、台所の板の間の一部。午飯の際部が、もうすつかり支度されてゐる。板の間の奥は台所入口の三和土。その先きに曇硝子の戸。——部屋の台所や廊下とのしきりの障子等は、いいやうに裝置される。

幕あくと、部屋でおせいやお琴がいろいろすみ子に聞いてゐる。すみ子は、見ちがへるばかり奇麗な桃割れに結ひ、着物も立派になつてゐる。

おせい。ちや、お前さんのお父さんは、埼玉のお百姓?

すみ子。(うなづいて)えゝ。

お琴。わたしや又、養育院の人ツて、お父さんもお母さんもわからない人ばかりかと思つたわ。

おせい。そんな事があるもんかね。——(つくづくすみ子を眺めて)でも、お前さん見たいな奇麗な人がゐるとは、わたし夢にも思はなかつた。

お琴。おまけに、お百姓の娘でね。

おせい。(すみ子に)お前さんが芝居に出てゐた時は、さぞ可愛かつたでせうねえ。

その時、砂利道を玄關の方へかかる俥のベルの音がする。硝子戸の窓から、植ゑ込みの葉を透して、梶棒を引いてゆく勇次の姿が見える。

おせい。あら、お孃さまのお歸り。
お琴。そらお歸り！
二人はあはてて立つて廊下へ出、上手蔭へ馳けて行く。すみ子もつゞく。と一緒に、「お歸り！」と勇次の聲が聞えて來る。つゞけて玄關の方から、「お歸りなさいまし。」「お歸り遊ばせ。」と云ふ女中連の聲。
やがておせいお琴達走り戻り、板の間の膳部を待つて行く。――入れ換へに、臺所の硝子戸をあげて、合羽姿のビシヨ濡れの勇次が入る。年の割りにふけた老人。あとを閉め、「やれやれ！」と呟きながら合羽を脫ぎ、懷の手拭ひで顏や頭を拭く、板の間の隅に置いてある箱膳を引き寄せ、板の端へドカリと腰をおろして茶碗なぞ取り出す。
その時、又おせいとお琴戻つて來て、「寒かツたらうね、勇さん！」と聲をかけながら、お櫃や湯を入れた藥罐やお菜の鉢を出してやる。
勇次。なあに――ツて云ひてえとこだが、隨分こてえるねえ。
おせい。ひどい雨風だもの。
勇次。又意地惡く、眞ツ正面から吹きつけやがる。
お琴。ウントお湯を熱くしといてあげたわ。
勇次。そいつあありがてえ。（藥罐を引き寄せ、茶碗の飯へ濛々と立つ湯をぶツかけて搔ツ込み始める。）
おせい達部屋へ坐りながら、

おせい。こんな荒れ日にやあ、送り迎へも大變だわね。
勇次。(水鼻を啜りあげて)なアに、これッ位えな雨風あ昔なら屁のカッパだが、年を取るツてえと、人間あきれるほど意氣地がなくなるもんさ。殊に今年になつてから、メッキリいけねえ。
お琴。勇さん、もう何年位引ッ張つてて?
勇次。倖か?
お琴。えゝ。
勇次。そうさ。初めて曳いたのが二十二三の盛りだッたから、今年で三十年の上になるな。
お琴。長いわねえ。――ここへ來てからは幾年?
勇次。十五年目だよ。
おせい。ぢやあ、まだお孃さまの生れない先きね?
勇次。先きとも。………前の、なくなつたお孃さまの生れた年だもの。
その時、上手から廊下へすみ子出る。手に魚の皿を持つ。
すみ子。あの――お孃さまのお魚に骨が一本あつたんですツて。持つてツて見せておいで、ツて奥さまが仰いました。
(皿を女中達の前へ出す。)
おせい。おやそう?(取つて眺める。)
お琴。(細い骨をつまみあげて、眼の前へかざして)あら、ほんとにね。
おせい。あんなに念を入れて取つたのに、まあどうしてあッたんでせう。

お琴。（兩手で頬へ恰好して見せて、すみ子へ）お孃さまプリプリ?

すみ子。えゝ、もうこんな物食べないつて……。

お琴。そうでせう。

おせい。どうも濟みませんでしたツて云つて頂戴。――いや、わたし御詫びに行くわ。又後が大變だから。（立つてゆく。）

すみ子つゞいて去る。

お琴。おせいさん、濟みません。――（ひとり語のように）また奥さまの大かみなりだわ。

勇次。（皿の方を覗いて）何だい?

お琴。あなごのうま煮よ。

勇次。なるほど。こいつアちつと骨ツぽいや。

お琴。おせいさんど、隨分念入りに毛拔きで取つたんですけれどね。おせいさんなんぞ、眼が惡いからつて眼鏡まで掛けて……。

勇次。何もこれ、咽喉へ突き刺さツたの何のツてえぢやなし、そうガミガミ云ふにや當らねえや。

お琴。それがさ、もし突き刺さつた日にやどうする、ツて仰るのよ。

勇次。その手で行きやあ、長屋や乞食の子なんざ、端から魚の骨で命を取られてゐなけりやアいけねえや。御總領がなくなりなすツてからツてもの、奥さまの心配振りやアちツと桁をはづれてるな、前だツて隨分やかましいにやアやかましかツたが。――おれに云はせりやあ、だから餘計弱くなる一方よ。おれ見てえな年になツちやアもう何も彼もお

しめえだが、子供のうちア少し位えの無理こそ藥よ。それで反つて丈夫になるんだ。あれぢやあ、いよいよ弱く氣むづかしくなるばツかりさ。

お琴。ほんとに、お孃さまは氣むづかしいわねえ。まだ十の、尋常三年生だつてのに、まるで七十のお婆さん見たいにやかましいわ。

勇次。云はされ放題にされりやあ、人間誰だツて、そうならア。殊に子供ア正直だ。生れた時から、自分の事ア何でも他人がやツてくれるもんと、ちやアンと思ひ込んでるんだからな。勉强に學校へ通ふんだツて、おれのやうな御抱え俥が足の代りをするし……。

お琴。足の御代りも、こんな日にやあ樂ぢやないわね。

勇次。なアに、いくら弱つたツて、おれだツてただ飼ひ殺しにされる氣アねえ。こんな日にこそ、小せえ子供を步かせるなア可哀想よ。だからこんな時だけ使ふなら、よくわかツてる。だが、どんないい御天氣の日だツて、ぽかぽかして氣もちがよくツて、子供なら步きたくて步きたくて仕樣ねえ筈のやうな日だツて、朝出がけに曳かせ、午飯を食ひに歸る送り迎へに曳かせ、又退けに曳かせるぢやあ、ちツと馬鹿げてら。

お琴。ほんとにね。でもそうでなかつたら、勇さんもうお拂ひ箱かも知れなくてよ。

勇次。ちげエねえ。旦那ア此の頃チョクチョク自働車に乘ツかるしな。世の中アまツこと奇妙に出來てら。――だが、どうせもう俥ア長え命ぢやアねえ。その時アおらア庭男か下男の專賣に變るつもりよ。旦那も、まさか年寄り一疋棄てもなさるめえ。

お琴。そりやあ長年勤めた勇さんだもの。おまけにこんな廣い御屋敷で、旦那樣は市參事會員の、飛ぶ鳥も落す御威勢

だもの……。

勇次。ところがそいつが、大きい聲ぢやあ云はれねえが、この頃チョイと影がさして來たツてえ噂を、おらあ小耳へ挾んでるんだ。

お琴。あら、どんな?

勇次。(聲を低めて)何でもな、市の砂利だのセメントだのを商人から買ひあげる時賄賂を取りなすつて、そいつが明るみへ持ち出されかかツたとか、いや、うまく揉み消しちまツたとか、そんな噂よ。旦那が、どツかこの頃屈托してなさる樣子を、おらアどうもそのせいぢやアねえかと睨んでるんだ。

お琴。そう云やあ、御邸へは、前からよく商人や請負師見たやうな人が訪ねて來るわね。

勇次。それよ。旦那も慾の深えの何のツて方ぢやアねえが、ああいろんな儲け一方の人間との關係ばツか多くちやあ、弱え人間のこツた、何日どんな間違えがヲツ始まらねえとも限らねえ。――だが、どうかそんないやな事のねえやうにしてえなあ。もしもの事でもあつた日にやあ、奥樣がたばかりぢやアねえ、使はれてるおれ達まで、飛んだ世間に肩身の狹え思ひをしなけりやアいけねえからなあ。

お琴。ほんとだわ。

勇次。(歎息して)立寄らば大樹の蔭ツてよ。いつまで辻待ちをやツてたツて張り合ひのねえ話だ、それより、お邸へ抱かれてせえゐりやあ食ひ扶持もはぐれツこなし、それに何かツて時氣樂だらうと思つて、おらァここへころげ込んで來たんだが、考えて見りやアあんまりいい思案でもなかツたやうだな。なるほどまづ食いツぱぐれアねえが、窮屈ア窮屈だし、働きだツてらくぢやアなし、……これで頼む樹蔭に雨でも漏つた日にやあ、目もあてられねえや。

お琴。その噂、奥樣は御存じかしら。
勇次。(嘲笑的に)奥樣ア使ふ一方の御生れよ。取る方の事あ、萬事夢にも御存じあるめえ。――お琴さん、お前、おれがこんな話をしたなんて事を、決して奥樣へ云つちやアいけねえぜ。
お琴。云ふもんかね。
途端、おせい戻つて來る。
お琴。叱られて?
おせい。ああ。魚の骨ばかりぢやア濟まなくツて、キツカケに、散々あれやこれや御叱言を頂いちやツた。
お琴。今日は、内もそとも荒れ日だわねえ。
勇次。はははは――内もそともはよかツたな。明日の新聞にやあ、風速二十メエトルの颶風襲來、とか何とか、デカデカに出るぜ。
おせい。(一寸睨んで)相變らず口の悪い人ね。(思ひ出したやうに)すみちやんが、お給仕しながらびツくりしてたわ。
勇次。(飯のあとの湯を注ぎながら)あの子、とても別嬪だね。
お琴。いやな勇さん。
勇次。(眞顔に)だつてさうぢやアねえか。お孃さまなんたア、較べ物にならねえぜ。天一坊ぢやアねえが、あれでお孃さまの着物と取ツ換えて見るがいい、誰だツてあの子の方をお孃さまと思ふに定ツてる。
おせい。馬子にも衣裳ツてね。

勇次。そりやアどつちの事たい？
おせい。どつちもさ。
勇次。ヘツ、お前もあんまりロアよかアねえや。
お琴。小間使ひは奇麗仕事でいいけれど、御孃さまの御相手は一寸骨だわ。あの子が來た御蔭で、わたしこれから御勝手の方が主になつてうれしいわ。
勇次。すみ公は、それだけ可哀想だ。
お琴。だつてまだ子供だもの。……それに、お孃さまと年もちがはないし。
勇次。だから餘計いけねえかも知れねえや。
その時、すみ子が娘の膳をさげて來る。
おせい。（見あげて）もう御濟み？
すみ子。えゝ。
お琴。（立ちあがつて）ぢや、わたし奥樣のをさげて來やう。
勇次。そんなら、おれも愚圖々しちやアゐられねえや。（いそいで湯を飲んで立ちあがる。そして、隅の方へ行つて茶碗を洗つたり拭いたりし、もとどほり箱へ收めて合羽を着て出てゆく。）
お琴のあとから、すみ子もおせいも去る。お琴、食べ荒した膳を持つて來て板の間へ置き、又走つてゆく。やがて「行つてらつしやいまし！」と云ふ合唱がして、幕初めのやうに、女中部屋の硝子戶へ勇次の曳く俥車が映つて消える。しばらくして、おせいを先頭にお琴すみ子戾つて來る。

お琴。何だか、馬鹿にお腹が空いたわね。
おせい。まつたく。——寒いも寒いし、奥のお膳を洗ふのはあと廻しにして、すぐ食べませう。
お琴。そうしませう。
めいめい自分の膳を出して、板の間の上へ坐りながら盛る。娘達の魚の残りや、海苔や、香の物なぞの菜。
おせい。すみちやん、今日はおどろいたらうね？
すみ子默つて ニツと笑ふ。
お琴。時々こんな事はあつてよ。慣れちまへば何ともなくなるわ。
すみ子。（不審そうに）お嬢さまの御魚は、始終骨を拔きます？
おせい。そうよ。ここの御邸では、どなたの御魚でも。
すみ子。（眼を見張つて）まあ！
お琴。お嬢さまは、だから、よその家へ行つて骨のついた御魚が出るとあがれないの。御邸の風を知つてる御家では、お嬢さまへ魚をあげる時はやつぱり骨拔きで出す事になつてるの。
すみ子。（わからないやうに）どうして御自分で骨を御取りにならないんでしよ？
お琴。取る位なら、食べない方がいいの。
すみ子。（眞顏で）隨分御不自由ですね。
お琴。（笑ひ出して）ほほほ、不自由はよかつたわね。人間あんまり自由過ぎると、反つて不自由になつちやふかも知れないわ。すみちやんなんか知らないだらうけれど、えらい人や御金持つて、みんなそう云ふ不自由なもんよ。

おせい。そう云や、今夜御風呂にお孃さまが御入りになつたら、すみちやん洗つてあげて頂戴ね。
すみ子。え？
おせい。それから、あがる時はよく拭いてあげるんですよ。
すみ子。（一々びつくりしたやうに）はい。
お琴。（威かすやうに）うつかりしてると、拭かずに着物を御着せしてよ。御自分では決して御拭きにならないから。
——この前そうやつて、わたし御風邪を引かせてすツかり叱られちやツたわ。
その時廊下へ夫人秀子が出て來る。ヒステリイ性の權高い女。一寸障子の蔭に立ちどまつて聞き耳を立ててから、台所へ來る。おせい達振り返つて、おどろいて居ずまひを直す。
秀子。まだわたし達の御膳を始末しないのね？
おせい。（頭をさげて）濟みません。
秀子。食べる前に一寸洗つたらよさそうなもんぢやないか。そうした方が、同じ食べるにしても氣がらくで、御飯もおいしいだらうに。
おせい。いつもそうしておりますんですが、今日は冷たう御座いますし、つい……。
秀子。（舌打ちして）お前達は、ほんとに手間ばツかり惜しんでるんだね。まさか、あとでお前達の茶碗や御皿と一緒クタに突ツ込んで洗つたりはしておくれでないだらうね。
おせい。そんな事は決して致しません。
秀子。どうだか。——少し見に來ないと、すぐこれだからねえ。

皆默つて箸の手をやめる。すみ子、傍の醬油注しを取つて香の物へ掛けやうとする。

秀子。（見て）おすみ。お前、香の物へむらさきを掛けちやいけなよ。躾けの爲めに、うちぢや召使ひには一切さう云ふ事はさせない定めになツてるんだからね。

すみ子びツくりして醬油注しを戻す。

秀子。おせい。お前からよく云つて置かなくちや駄目ぢやないか。一體そんな處へむらさき注しを置いて、きツとお前達始終コソコソ掛けてるんだらう。

おせい。さうぢや御座いません。これは今、御殘りの海苔を頂くのに使つたので御座います。

秀子。そんならいゝが。……おすみ、お前知らなかツたから無理アないが、これからいろいろおせい達に聞いて御置き。

すみ子。（唇を嚙んで）はい。

秀子。云ふ事さへよく聞きやあ、この後どんなにでも引き立ててやるからね。今まで、お前は不しあはせな目にばツかり遭つて來たさうだけれど、これからはほんとにしあはせになれるよ。どう？　昨日來たばツかりでも、もう隨分しあはせな氣がするだらう？

すみ子俯いたまゝ默つてゐる。

秀子。食べ物だツて、養育院なんかとは較べ物になるまい。そんな海苔や御魚なんぞ、あそこにゐたんぢや食べやうツたつて食べられないだらう？

すみ子相變らず無言。

すみ子相變らず無言。

秀子。養育院の御飯なんて、普通の人間ぢやあ一口だつて食べられないんだッてね。くさくてまずくて。……一體、御魚なんて匂ひでも嗅ぐ時があるのかい？

　すみ子、慄える。

秀子。目刺しの一疋でも附く事があるの？ないんだらう？——どうして返事しないの？はづかしいのかい？

すみ子。（突然顏をあげて）奥さま、御魚位始終食べてゐます。こんな殘り物なんぞ、みんな犬にやつてますわ。（云ふなり、魚の皿を取つて土間へ投げつける。皿、板の間の端へ當つて、けたたましい音を立てて壞れ飛ぶ。）

おせい、お琴等。（仰天して）まア！

　すみちやん！

　すみ子、默つて秀子の顏を睨みあげる。

秀子。（見る見る蒼白く血の氣を失ひ、額へ青筋を立てて）おすみ！何て眞似を主人へ向つてするんです？

すみ子。（押し戻すやうに）子供だと思つて、あんまり馬鹿にしないで下さいまし。

おせい、お琴等。（すみ子へ取りついて）そんな事を云つてないで、早く御あやまりなさい。

　早く御詫びなさいよ。

すみ子。（首を振つて）あやまりません。あやまるなら、奥さまの方からあやまツて下さい。

秀子。（荒々しく）何ですツて、おすみ！もう一遍云つて御らん！

すみ子。云ひます……。

おせい。（遮つて）すみちやん、いけませんたら——（秀子へ向つて、代つて手を突いて頭をさげる）奥さま、どう

ぞ御勘辨なすツて下さいまし。まだ子供で、それに逆上(のぼせ)て、もう何にもわけがわからなくなツてるんで御座いますから……。

すみ子。おせいさん、かまはないで下さい。

お琴。すみちやん！

おせい。（重ねて秀子へ）どうぞわたしに免じて、今日のところは御許し下さいまし。

秀子。（きかない調子で）何をわたしがあやまる筋があるんだね、おすみ？養育院ぢやあ御魚をつけまい、ツてツたのが悪いのかい？

お琴。（すみ子をゆすぶツて）早く御詫びなさいツてツたら！

秀子。ぢやアお前、あそこぢやアこんな魚は始終つけるんだね？

すみ子。（反抗的に）つけますとも。

秀子。よし、たしかに御云ひだね？もしつけなかツたら承知しませんよ。そうしたら、すぐ養育院へ送り返しちまふからそう御思ひ。（板の間を蹴立てて去らうとする。）

おせい。（取り縋つて）もうどうぞ御やめ遊ばして……。

秀子。（振り放して）いゝえ、どこまでも咎めなけりやあ置きません。こんな、どこの馬の子か牛の子かわからない、養育院なんかの子供に馬鹿にされて、秋山の奥として默つてられるもんですか！——まあ何てあきれ返つた子だらうね！こんな者をよこすなんて、ほんとに養育院も養育院だ！（睨みつけて去る。）

おせいお琴等呆然として見送る。やがて顔を見合はせて、

おせい。まあ大變な事になつたわねえ。

お琴。まあ！

おせい。（すみ子の肩へ手をかけて）なぜ、もう少し我慢しなかつたの？

すみ子。（初めて潤み聲になつて）だつて、おせいさん！――（彼女の膝へ顏を伏せる。）

その時、舞台裏で電話のベルの音がする。

秀子の甲走つた聲。小石川の千六百五十九番へ掛けて下さい！――えゝ、千六百五十九番！（間もなく）もしもし、あなたは養育院？……養育院ですか？――わたし市參事會員の秋山の奥ですが、至急幹事さんを呼んで下さい。……えゝ幹事さん、……秋山……。

――幕

第四幕

第一場

人物

すみ子。十六歳。

市川新太郎。役者、十九歳。

長谷川辰雄。琵琶の師匠、三十五六歳。

おわか。その母親。

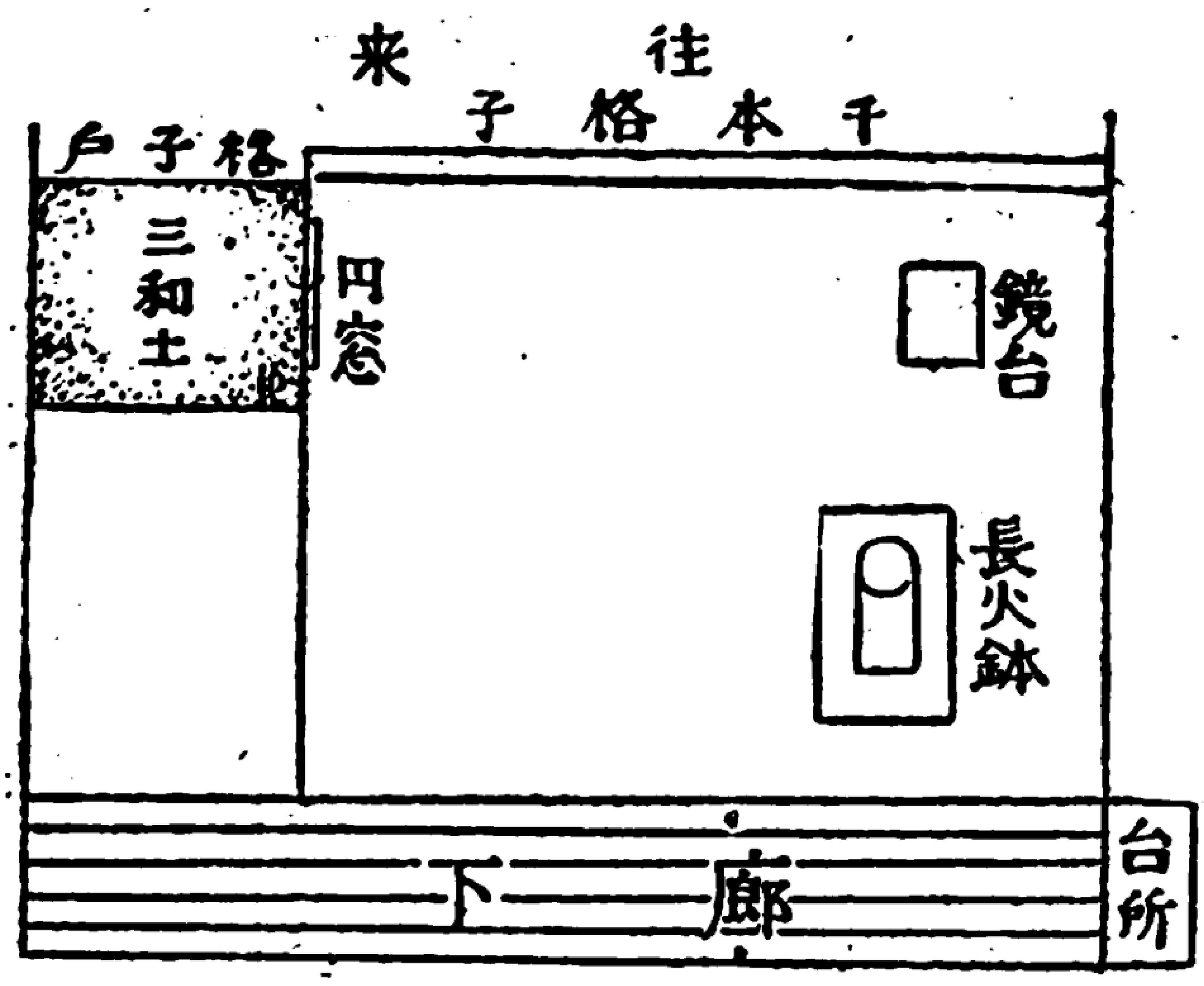
外に牝猫一疋。

時

前幕から三年後の春の夕方。

處

淺草の割合靜かなしもたや通り。長谷川の家の中。



舞臺

下手奥、曇硝子を嵌めた格子戸。その前、三和土の上り口。次が突ツつきの小間。上り口の横手は、粋な明月形の圓窓。

それより上手全體居間。正面奥は張り出し型の千本格子。その內側に、曇硝子の戸が閉てられるやうになつてゐる。居間の前手には銅壺附きの長火鉢が据ゑられ、その背後上手シキリの壁には、袋をかけた琵琶（教授用や稽古用）が、三つばかり懸かる。鏡台その他諸道具よき場所。

上り口の間と居間の前面は、上手蔭の台所や別室へ通じる氣組みの廊下。

（大體、前幕の割り方を應用される。）

幕あくと、母親おわかが外行きの着つけで鏡台(長火鉢の奥あたり)の前に立て膝して、髪を見たり衣紋をつくろつたりしてゐる。すみ子、その後方にゐる。前幕より大人びた顔形。

おわか。(立ちあがつて)ぢや行つて來るから、よく留守番しておくれ。そのうち辰雄も歸つて來るだらうから。

すみ子。はい。

おわか。辰雄が御飯を食べてなかツたら、あのお茶を出すんですよ。

すみ子。はい。

おわか。(土產物の風呂敷包みをかかへて上り口へ降りながら)いい人だといいが……(獨語)。

すみ子。(膝をついて)お早く。

おわか。賴みますよ。(格子戸をあけて去る。)

あたたかい春の夕暮。街にはもう淡く電燈が點り始めてゐる。すみ子居間へ戾らうとすると、黑の牝猫が廊下から飛び込んで來る。

すみ子。おや、玉や、どこへ行つてたの?

猫あまへて、ニャオニャオ鳴きながら裾へ取りつく。

すみ子。(抱きあげてその顏へ頰ずりしながら)お前、あんまり牡猫から呼ばれるたんび行つちや駄目よ。そしてギャアギャア追ひ廻されて、……御覽、こんなに瘦せちやツたぢやないの?

猫、又眼を細くして鳴く。彼女、抱いたまま千本格子の手前の張り出しへ腰をかける。猫の聲を聞いて、はやくも

そとで牡猫の鳴き聲がする。

すみ子。ほらほらほら……すぐあれだもの。ほんとに悄らしいッてないわ。（格子戸から上手そとを眺める。）

その時、上手奥、格子のそとを市川新太郎が通りかかる。若い役者らしい細面色白の、眼に艶を持つた青年。一寸粋な、が、あまり上等の役者らしくない着つけ。――すみ子を見る。彼女見返す。眼を見合はせて、新太郎思はず足を留める。すみ子凝視する。

新太郎。（又行かうとして二三歩踏み出し、再び踏み返つて）あの、……あなた、すみちやんぢやありませんか？

すみ子。え、――あなた新太郎さん？

新太郎。ああ、やツぱりすみちやんでしたか？

すみ子。（猫を棄てて）まあ、隨分しばらくでした事ね。

新太郎。ほんとに久し振りだツた。どうも妙にあなたに似た人だと思つて、……でも隨分大きくなツたから――。

すみ子。新ちやんも大きくなりましたわ。

お玉、棄てツぽかされた不平に頻りに鳴く、が、顧みて貰へない。

新太郎。今ここにゐて？

すみ子。えゝ。

新太郎。奉公ですか？

すみ子。え、――あなたは何してらッしやる？

新太郎。（微笑して）僕は、相變らずの役者商賣ですよ。

すみ子。やツぱり清遊館?
新太郎。どうして……あんなものは、もう夙の昔潰れちまひましたよ。今は宮戸座へ出てます。
すみ子。あら、あたしちつとも知らなかツた。
新太郎。あれから、もう芝居の仲間へはちツとも入らない?
すみ子。えゝ。
新太郎。そう。もう芝居は嫌ひになつたの?
すみ子。いゝえ、やつぱり大好き。――でも、とてもそんな都合に行きませんでしたもの。
新太郎。一體、どうして今まで暮して來たんです?
すみ子。どうしてツて、迚も一口にやしやべれませんわ。(氣がついたやうに)新ちやん、何なら少し入つて休んで行きませんか?
新太郎。入つてもいいが、誰もゐない?
すみ子。えゝ、今みんな留守です。だからちツとも構はないわ。――こツち。(上り口の方へ行く。)
新太郎。そう?(入口の方へ向ひ、格子戸をあけて中を見廻しながら腰をかける。)琵琶の御師匠さんですね?
すみ子。えゝ。
新太郎。いつツからゐて?
すみ子。まだ一月ばかり。
新太郎。その前は何處?

すみ子。（答へ澁つて暫く間を置いて）小石川の方。
新太郎。そう。小石川のどう云ふ處？
すみ子。（モヂモヂしたが、思ひ切つて）養育院。
新太郎。養育院？
すみ子。えゝ、惡い奴につかまツてたのを、或る巡査部長さんに助けて貰つて入れられたんですの。でも、そのあいだ二度ばかりそとへ出ましたわ。だけど、みんな變な處ばつかしで、又戻つて、院の附屬小學校へ入つて、今まで勉强してたんですの。
新太郎。ほう。そりやアいろんな目に遭つたんですねえ。でも、又かうやつて何年ぶりかで會へるなんて、ほんとに不思議だねえ。
すみ子。ほんとに。――あの時分の仲間の人、みんな一緒に宮戸座にゐて？
新太郎。なんの、僕一人つきり。みんなチリチリバラバラになつちやツてね。
すみ子。まあ一人ツきり？
新太郎。そう思ふと、全く淋しいね、源三郎や喜若や赤助は死ぬ、あとの者は、やつぱりすみちやん見たいにどこかへ行つちまつて。
すみ子。あら源ちやんや赤助さん死んで？
新太郎。（うなづいて）まだ若い身空で、可哀想なもんでしたよ。そう云ふ僕なんぞも、いつ死ぬ事やらね。
すみ子。そんな心細い事云はないもん。

新太郎。これはこれは、御叱りとは恐れ入つたな。が、ほんとに顔を合はせりやアなつかしいねえ、何だか、聞きたい事やら話したい事がドッサリある氣がする。同じ淺草に住んでるなら、ついでにこれからは遊びに來ませんか？

すみ子。行きますわ、是非。

新太郎。（懷中から紙入れを取り出し、小型の名刺を抜き出して）僕の處番地はここ。

すみ子。どうもありがと。（なつかしさうに透し眺めて、帯のあいだへ入れる。）

新太郎。僕も、又時々訪ねやう。變ぐられないやうに、一寸家の人達にも云つといて下さい。

すみ子。さうしませう。あたしも新ちやんを訪ねるのが氣樂だから。

その時、格子戸が開いて辰雄が現れる。中折れインバネスのリユウとした身なり。片手にステッキを持つてゐる。酒を飲んでゐるらしく、顔が大分赤い。

すみ子。あ、お歸りなさいまし。（頭を下げる。）

辰雄。ああ。（帽子を取つて、新太郎の姿を見廻す。）

新太郎。（立ちあがつてすみ子へ向つて）御主人？

すみ子。（うなづいて）え。（氣がついたやうに、いそいで立つて電燈を點ける。さツきから、あたりが大分薄暗くなつてゐる。）

新太郎。（辰雄に向つて）お留守にすみちやんと話してゐて、失禮しました。

辰雄。（迂散くさそうに電氣の光で見て）いや、――――どなた？

新太郎。宮戸座へ出てゐる市川新太郎つて申す者です。

すみ子。（傍から引き取つて）昔、一緒に淺草で御芝居をしてゐた仲間で御座います。
辰雄。（新太郎とすみ子を見較べて）ほう、そう？
新太郎。さツき一寸通りかかりましたら、すみちやんがやつぱり見てゐたもんですから。
辰雄。そうですか。すみちやん、お前芝居なんか演つてた事があるの？
すみ子。（やや恥しそうに）はい。
辰雄。そいつア初耳だねえ。（新太郎へ向つて少し底意的に）殊にそう云ふ昔馴染ツて、なつかしいもんでせうなあ。
新太郎。全くです。——これから又時々話したいと思ひますから、どうぞあがらせて下さいまし。
辰雄。承知しました。
新太郎。今日は、ぢやこれで失禮いたします。
辰雄。ま、いいぢやありませんか。粗茶でも一杯。
新太郎。いえ、これからまだ小屋の方に用が御座いますから、この次ゆつくり、……（すみ子へ）ぢや、御免なさい。
すみ子。御免下さい。

新太郎去る。外トップリ暮れてゐる。

辰雄見送つてあがる。インバネスを脱ぐのをすみ子受け取る。

辰雄。（居間へ入らうとして振り返つて）お母さんは？
すみ子。さツき小島さんから御使ひで、今夜御飯をあげ旁々御話したい事があるから、ツて事で、少し前お出かけになりました。

辰雄。そう? (居間の電燈のスヰッチをひねり、ドカリと長火鉢の向ふへ腰をおろす。)
すみ子。(インバネスを釘へ掛けて) 御飯はまだで御座いませう。
辰雄。夕飯かい?——いや 友達んとこで御馳走になッて、もう何もいけない。
すみ子。そうで御座いますか。(立つて行かうとする。)
辰雄。(呼びとめる) ちよッと。
すみ子。(振り返つて) はい?
辰雄。(長火鉢の前を指して) ま、御座り。
　すみ子やや不審さうに座る。
辰雄。今の市川とかッて若い人、ほんとに宮戸座の役者?
すみ子。はい——そう云つてました。
辰雄。お前よく知らないのかい?
すみ子。今日初めて聞いたきりですから。
辰雄。うむ。——(考へるやうに) お前、いつ頃から會つてるの?
すみ子。(わからないやうに) え?
辰雄。(笑ひながら) 今まで時々會つてたんだらう?
すみ子。(首を振つて) いゝえ、子供芝居をしてゐた時のまんま、一度も會ひませんでした。
辰雄。ほんとに、お前芝居なんかしてたの?

すみ子。はい。

辰雄。どこで？

すみ子。清遊館。

辰雄。ほう。だが、なぜそんなら、今までちッとも話さなかつたの？

すみ子。でも――（俯く。）

辰雄。（言葉を變へて）ぢや、隨分芝居も好きだらうね。

すみ子。はい。

辰雄。（つくらふやうに）さうとわかつてれば、時々芝居も覩せてあげたのに。

すみ子默つてゐる。

辰雄。（急に思ひついた風に）ぶらぶら歩いて來たら、醉ひがさめて何だか薄寒くなつて來た。今夜は稽古もなし、もう一口飲まうかしら。――（すみ子へ向つて）まだ御酒はある？

すみ子。御座います。

辰雄。ぢや、濟まないが一本つけてくれないか？

すみ子。はい。（立つて廊下から上手へ去る。）

辰雄見送つて、立ちあがツて千本格子の手前の曇硝子を全部閉める。それから一寸考へて、上り口へ行き、格子戸へ螺旋の栓をさす。戻つて來ると、一寸鏡台を覗いて分けた髪や口髭を撫ぜる。そこへ、すみ子が銚子や猪口や雲丹の瓶や小皿を載せた盆を持つて出る。

辰雄。やあ、御苦勞御苦勞。（座蒲團の上へ胡坐を搔く。）
　すみ子、盆を火鉢の傍の疊へ置く。
辰雄。いゝ、いゝ。簡單にここへ載ツけやう。（盆を取つて猫板の上へ載せながら）すみちやんは氣が利いてるな。すぐこんな雲丹なんぞ見つけ出して來て。
　彼女はほゑみながら銅壺の蓋を取つて見、一杯入つてゐる湯を金柄杓で錢瓶へ分ける
辰雄。おツと、もう結構。（銚子を銅壺の中へ拔ける。）
辰雄。（呼びとめて）御肴ならもう澤山だよ。
すみ子。でも――。
　彼女立つて行かうとする。
辰雄。なァに要らない。それより、ここで一つ御燗しておくれ。
すみ子。はい。（猫板の横へ燗番に坐る。）
辰雄。（見惚れるやうに彼女を眺めて）お前がそこにゐてくれれば、何よりの御肴さ。
すみ子。あら………（赤くなりながら、上手に雲丹を皿へ取る。）
辰雄。お前も一緒に御あがり。
すみ子。ありがたう御座います。（云ひながら眞面目に銚子を押へる。）
辰雄。遠慮する事アないよ。お母さんはゐないし。
すみ子。はい。

辰雄。(又つくづく顔を見て) ほんとに可愛い顔をしてるねえ。わたしはお前が來てッから、何だか急に妹が出來たやうで、うれしくッて仕方ないんだよ。

すみ子。まあ御戯談ばッかり。

辰雄。ほんとだよ。妹とも思へるし……いや、やッぱり妹だな。去年の暮女房をなくしてから、呑氣は呑氣だが變に淋しくッて仕方なかつたのを、すみちやんが來てから急に明るくなッた。お前も、どうかわたしの妹のつもりでゐておくれ。

すみ子。いゝえ、そんな事……。

辰雄。(遮つて) だからお前はまだ子供だッて云ふんだよ。ちッとも遠慮する事アない。ほんとにわたしはそう思ふんだ。ね、そう思つてもいいだらう?

すみ子。でも——。

辰雄。でもぢやアない。はいッてお云ひ。

すみ子。………。

辰雄。(執拗に) はいッて云つておくれ。(情熱的に彼女の手を握りしめる。)

すみ子。(びッくりしながら低く) はい。

辰雄。よく云つてくれた。ぢやお前、ほんとにわたしを兄と思つてくれるんだね。わたしはお前が、來た時ッから好きで好きで仕方なかッたんだ。いつかその事を云はうと思つてたんだが、今夜はほんとによかつた。(愛情に堪えられないやうに、強く手を握る。)

すみ子びつくりして俯く。

その時、お玉を中心らしい戀猫達の叫びがけたたましく起る。辰雄、一寸おどろかされてそとを覗ふ。猫達の唸りつづく。

すみ子。（顔をあげて）お玉かしら？

辰雄。（氣勢を挫かれて）この頃隨分やかましいねえ。（思ひついたやうに銚子を指して）もうそろそろいいだらう。

すみ子。（握られた手を拔いて銚子へ當てて）もう少し。

辰雄。なに、少しアぬるくたツて構はないよ。飮んでるうちだんだん熱くなるから。（猪口を取りあげる。）

すみ子銚子をあげて注ぐ。

辰雄。（一口に飮んで）一つ。（すみ子へさす。）

すみ子。（おどろいて）いゝえ、あたし……（銚子を取りあげる。）

辰雄。（それを奪ひ取つて）まあ一口だけ御相手しておくれ。（猪口を押しつける。）

すみ子。でも、あたし子供ですもの……。

辰雄。（笑つて）ははは、子供だツていいぢやないか。是非今夜は一つ受けとくれ。（無理に彼女に猪口を持たせ、酒を注ぐ。）さ！（困つてゐる彼女に、手を持ち添へて飮ます。）それでいい。それでいい。それが固めの印しだよ。

すみ子默つて彼へ返す。

辰雄。（受けながら）御酒はお前初めて？

すみ子。いゝえ。

辰雄。ヤツぱり、前飲まされた事がある？

すみ子。はい。

辰雄。何だ、そんなら構はないぢやないか。（上機嫌で彼女から注いで貰つて飲みながら）お前琵琶は好きかい？

すみ子。はい。

辰雄。嫌ひぢやないの？

すみ子。好きで御座いますわ。

辰雄。そんなら丁度いい。お前さへその氣があれば、吟じかたや彈きかたをよく敎へてあげやう。

すみ子（面喰つて）どうぞ……。

辰雄。何だつてね、お前わたしが御弟子達に敎へてるのを聞いてて、隨分もう歌をおぼえてるんだツてね。昨日だか台所でひとりでうたつてゐたのをお母さんが聞いて、まアあの子は何て頭がいいんだらう、迚もちつとやそつとの御弟子ぢやアかなはないつて、ひどく感心してたよ。そんなに出來るの？何なら、そこで一つうたつて御らん。

すみ子。いゝえ……（耳朶まで紅くなつて頭を垂れる。）

辰雄。何もそんなに恥しがらなくたつていいぢやないか。今いやなら、いつかゆつくり聞かうよ。やつぱり昔芝居なんかしただけあつて、きつと藝の方は何でも嚥み込みが早いんだらう。もし何だつたら、わたしお前を立派な琵琶の師匠に取り立ててあげて、一緒に御弟子を敎へる事にしやうよ。

すみ子。……。

辰雄。そんな事、いやかい？

すみ子。いゝえ。
辰雄。よろこんでなる？
すみ子。はい。
辰雄。ぢやきツとそうしてあげるよ。そしてお前に看板でも掛けさせて暮したら、わたしもどんなに張り合ひだか知れない。が、すみちやん、そう話が定つたら、一つわたしに頼みがあるんだがね。
すみ子。………。
辰雄。約束をしてくれないか？
すみ子。（顔をあげて）なんで御座います？
辰雄。べつに改まるほどの事ぢやないが、あの市川ツて人に、これから會はない事にしてくれない？
すみ子びツくりしたやうに見あげる。
辰雄。（慾情的に眞劍な顔つきになつて）ツて云ふのは、わたしほんとにお前の兄さんになりたいからさ。然も、たツた一人の兄さんにね。
すみ子解せないやうに見つめる。
辰雄。わからない？
彼女無言。
辰雄。あの市川ツて云ふ人を、すツかり忘れちやツて貰いたいんさ。
彼女俯く。

辰雄。いやかい?

すみ子。(ためらひながら顔をあげて)でも旦那様へは――。

辰雄。わたしへ?

すみ子。また新しい奥さまがいらツしやるんで御座いませう?

辰雄。(一寸つかへて)ああ、今日のお母さんの話かい?――なアに、そんな事アまだどうなるかわかりやしない。向ふは見ず知らずの人だし。……それに、それはそれ、これはこれ、べつに構やしないぢやないか。

すみ子俯く。

辰雄。(押しつけるやうに)ね、いいだらう?

彼女默つてゐる。

辰雄。(堪え切れなくなツて)すみちやん。わたしの云ふ事を聞いておくれ!(いきなり彼女の背中へ片手を廻して引き寄せやうとする。)

彼女びツくりして身躰を放す。辰雄捕へやうとして立ちあがり掛ける。彼女突然飛び立つ。

辰雄。(突ツ立つて)すみちやん、お前いやツて云ふのかい?

彼女おどろき慌てて、上り口の方へ逃げ出す。

辰雄。(一種狂的に笑ひ出して)はははは、そこの格子戸は、もう誰も來ないやうに栓をかツてあるんだ。

すみ子。えツ!(仰天して、台所へ行く廊下へ馳け出す。)

辰雄。これ、すみちやん!(途中をつかまへやうとして、長火鉢の端に突き當つてよろめく。)

その際に、すみ子燕の如くに逃げる。彼追ふ。つゞいて激しく障子や臺所の戸をあける音。

辰雄の聲。すみちやん!　うそだよ。今のは戯談だよ!戯談だよ!

——幕

第二場

人物

すみ子。

市川新太郎。

老漁師。

時

前場から一週間ばかり後の月夜。

處

相模の海岸。

舞臺

下手三分の一ばかり松林。月を遮つて少し暗い。斑な影が手前の砂地へ落ちてゐる。——松林につゞいて上手ずつと低い岩。

松や岩の向ふに、相模灘の滿潮が打ち寄せ、滿月近い月光の爲めにキラキラ光り輝いてゐる。その蒼い明るい光の爲め、岩の小蔭は反つて著るしく暗い。波の音。

幕あくと、下手から新太郎とすみ子手をつなぎ合つて出る。

新太郎。（松林を拔けると一眸のもとに展開される月夜の海を見て、思はず）おお、何て素敵だらう！

すみ子。ほんとに奇麗ね。

一緒に見入る。

新太郎。まるで、芝居の書割り見たいだね。

すみ子。書割りなんか迚も追ツつかないわ。

新太郎。そりやあ淺草の芝居のやつぢやアね。

すみ子。いゝえ、どんな書割りだつて——（思ひ入るやうに）どうして人間のしてゐる事ツて、みんな汚いでせうねえ。こんなに自然はいいのに。

新太郎。人間にだツて隨分奇麗な世界はあるさ。ただ僕達が知らないだけさ。

すみ子。（首を振つて）さうぢやないわ。……でもうれしいわ。この中へ飛び込めば、もう世の中をみんな忘れちやへるんですね。

新太郎。そうさ。まるで龍宮城へでもつづいてるやうだわ。

すみ子。ほんとに。（うれしさうに）あたし達のしあはせは、あの中にあるんですわ。

新太郎。うむ。（未練さうに）だが、まだ生きてたい氣もするね。

すみ子。え？

新太郎。だつて、切角うれしい契りをむすびながら、金につまつて一週間やそこらで死ぬなんて少し情ないや。

すみ子。あら、まだそんな事云つてて？

新太郎。無論情死はうれしいさ。だが、こんなにまだ僕達は若いんだからな。

すみ子。そりやそうですけど……（獨語的に）あたし、あんまりつづけていろんな世の中を見て來たせいかも知れないわ。

新太郎。（同じく獨語的に）あの時すみちやんさへ來なけりや、まだ生きてるんだが——。

すみ子。（キツとして）え？

新太郎。（ほほえみながら）そうぢやないか。

すみ子。（眞劍な調子で）そうなら、ほんとに濟まないわ。

新太郎。が、今はすみちやんさへゐなけりやあ未練はないんだ。

すみ子。（彼の顔を見つめて）新ちやん。あなた、ほんとによろこんで死んで下さる？

新太郎。ほんとも。（彼女を抱いて強く唇を押しつける。）

彼女返す。

すみ子。(やがて)あんまり愚圖々々してゐて、もし誰かに見つかるといけませんわ。
新太郎。さうだ。
二人一緒に岩にのぼる。
新太郎。入つても離れないやうに、身體を一緒に結ひつけやうね。
すみ子。えゝ。(手早く自分の扱帶を解く。)
新太郎。(その影の月に閃くを見ながら)あんまり月や海がよくつて、死ぬなんてうそ見たいだな。
すみ子。あたしはうれしくつてうそ見たい……。
解き終つた扱帶を、新太郎受け取つて二人の身體をシツカリ結びつける。
新太郎。息をそろへて、うまく一緒に飛び込まなくつちや駄目だよ。
すみ子。新ちやん、合圖して頂戴。
新太郎。よし。
すみ子。もつと岩の端へ立ちましよ。
二人、下駄と草履をぬいで一緒ににじり進み、對ひ合つて立つ。
すみ子。(元氣よく)べつに書置きもないし、お月さまへでも御別れしませうか。(月を仰ぎ見る。)
新太郎。(一緒に仰いで)ああ。お月さま左樣なら!
すみ子。さよなら!
再び接吻する。

新太郎。いゝかい？

すみ子。え。

新太郎。（低く）ヒイ――フウ……三ツ！

二人一緒に飛び込む。ドブーシと云ふ水音。――あと冴えわたる月光。變らない浪の音。

老漁師。（やがて飛びつけて）急に岩から見えなくなつたが、もしや又飛び込んだんぢやねえか？（岩の上の履物を見て）やつぱりそうだ！（すばやく繩の帶を解き棄て、ドテラをぬぎ、赤黑く痾々した褌一貫の裸になつて、腰をかがめ海を覗く。しばらくして）あつ浮いて來た！　來やがつた！（海へ摑みかかるやうな恰好をして飛び込む。）再び水音。

――幕

第五幕

第一場

人物

すみ子。

矢澤うめ子。天使園主任の婦人、五十二三歲。

おかく。收容されてゐる婦人の一人、三十歳位。

時

前幕と同じ年の五月初旬朝。

處

キリスト教婦人收容所天使園の居間。

舞臺

質素な室の作り。上手前に机一つ。押入れ、行李等、よきやうに置かれる。正面奥の壁へ、「神は愛なり。」「叩けよ、さらば開かれん、求めよ、さらば與へられん。」等筆太に書いた大洋紙が貼りつけられ、上の長押に、彩色のキリスト磔刑の額が掛つてゐる。下手奥に障子二枚の入口。

幕あくと、おかく風呂敷をまとめながらすみ子と話してゐる。外の女達は、朝飯後の休み時間を庭へ遊びに出たりしてゐない。

おかく。わたしなんか、これで隨分早く出る方さ。ねエすみちやん、お前さんも早く出たいと思つたら、出來るだけ上べをおとなしくて、ハイハイツて何でも奥さんがたの云ふ事を聞いてゐなくちや駄目よ。そして暇があつたら聖書

でも見て。――なアに、見てゐるやうな顔さへしてゐりやアいいんだよ。どうせあんな糞面白くもない本を、誰が眞面目でよむもんかね。一枚もよんだら、わたしなんぞ四ツ五ツもアクビが出らあ。

すみ子。（たしなめるやうに）そんな聖書の惡口を云ふのは、よくありませんわ。

おかく。おやまア、その調子、その調子。そう云ふ顔つきをして、如何にも本氣に聖書の言葉を信じて、悔い改めてるやうな風をしてゐれば、奥さんがたにすツかり信用されて、わたし見たいにきツと早く出られるよ。

すみ。（不審そうに）おかくさんは、今迄ここにゐてちツとも神さまを信じてゐなかツたんですか？

おかく。ゐるかゐないか、神さまが、一等御存じさ。そりやあ、信仰を持つてる事はいい事だらうさ。でも、持てなくて早く出たい者は、そう云ふ顔つきでもしてゐるより仕方ないぢやないか？ 神さまは、わたしちツとも嫌ひぢやないわ。（額を指して）だツてあんな、一寸見たツて如何にも御人好しらしい顔つきをしてるぢやないの？ もしかしたら、あれも猫ッ被りかも知れないけれどね。だけれど、わたしここの窮屈さが大ッ嫌ひさ。わたし見たいな暮しをして來た者にや、こんな處は、考へたら一日だツてゐたたまれやしない。

すみ子。窮屈なのも、やつぱり修養の爲でしよ？

おかく。おやまあ、だからお前さんまだ子供だつて云ふんだよ。こんな、カラキシ人の自由を認めない、手紙一つ思ふやうに書けない處が、何か修養場なもんかね？（思ひ出したやうに）ああそうそう、ゆうべ云つたあの手紙、ほんとにお前さん書かない？

すみ子。えゝ。

おかく。だつて、ぢやお前さん、もうその人が嫌ひになつたの？

すみ子。いゝえ。
おかく。今もなつかしいんだらう？
すみ子。（俯いて）えゝ。
おかく。そうつて、何しろ情死までしやうとした仲だもの、そんなに思ひ切れて堪るもんかね。向ふだつて、きつとお前さんと同じやうに戀しがつてるよ。お前さんの手紙を持つて行つてやつたら、ほんとにどんなによろこぶか知れないわ。
すみ子。…………。
おかく。誰だつて、みんな出て行く者に頼むんだよ。わたし見たいな、出す宛もないお氣の毒さまは別だけれどね。もう三四本頼まれてるわ。お前さんのもついでに出してあげるから、早く書きなさいよ。
すみ子。でも……。
おかく。でも？
すみ子。あたし、もうあの人思ひ切つてますわ。
おかく。あれ、今のさつき思ひ切れないつて云つたぢやないか？
すみ子。なつかしい事はなつかしいんですけれど、氣が弱い人ですし………。
おかく。どうせ氣が弱いから、情死なんかしやうとしたんさ。
すみ子。それもそうですが……。
おかく。が？――何よ？

すみ子。（言葉を變へて）あたしもう、どうしても思ひ切る決心をしましたわ。そして何もかも忘れて、新しい生活へ入る氣なんですわ。
おかく。つて云ふのは、神さまを信じる事？
すみ子。えゝ、そして、ほかの事はみんな忘れちまひますわ。
おかく。ぢや、たとへここを出ても、もう新太郎さんとは會はないつもり？
すみ子。えゝ。
おかく。あらまあ、大へんな信心屋さんねえ。そんならなほの事、今度一遍だけやさしい言葉をかけて御やりなさいよ。
すみ子。でも、そうすると又あと思ひ切れなくなるから……。
おかく。切れなくなつたらなくなつた時の事で、いいぢやないの。まアじれつたいつ！その後大分身體が弱つてゐるかつて事だから、新太郎さんだつて、この後いつまで生きられるかわからないぢやないか？いやだねえ、この人ツたら。こんなに人に口を酸つぱくさせて、何て情のない片意地者だらう！
すみ子。（堪えられなくなつて）おかくさん、あたしほんとに御親切はうれしいわ。
おかく。わたしばかりでなく、御當人こそモ少し親切におなりなさいよ。二人が氣の毒だと思ふばツかりに、わたしこんな餘計な御せツかいを云つてあげてゐるぢやないの？
すみ子。それはわかツてますわ。
おかく。わかツてるなら御書きツたら。――もうそろそろ仕事の鐘が鳴るわ。そんな事云つて、あとで後悔したツて

知らないわよ、ほんとに。………さ、ここに鉛筆と紙があるから、走り書きでいいから！（鉛筆と軍用書簡箋を押しつける。）

すみ子ついに負けて、机の上で書き出す。

おかく。（傍でよむ）なつかしい新太郎さま……。

すみ子。（紙を取つて）あたし、よんだりしちやいや！

おかく。はいはい。氣むづかしい御姫さまだねえ。ぢやあ乳母やはこつちで眼をつぶつてますから、どうぞ御早く。（向ふむきに、荷物をまとめる。）

すみ子手早く簡單に書いて、疊んで、口で糊をしめして貼りつける。

その時、舞台そとで仕事始めのベルが鳴り渡る。

すみ子。あつ、もう仕事の時間だわ。ぢやおかくさん、どうぞ。（書簡箋を渡す。）

おかく。承知のすけ。……出來たら、わたし訪ねて手渡ししてあげるわ！

すみ子。（立ちながら）丈夫でゐて頂戴！

おかく。お前さんもね。――なアに、又時々來るわ。その時そつと返事を持つて來てあげるわ。

すみ子障子の方へ走つてゆく。

丁度あけやうとする時、そとから矢澤うめ子があける。どこか嚴しい顔つきの肥つた女。すみ子びツくりして、思はず御辭儀する。

うめ子。何を愚圖々々してるんです？（云ひながら、素早くすみ子の肩越しに、懐へ書簡箋を突ツ込んでゐるおか

くを認める。)

すみ子。濟みません。(頭をさげたまま走り去る。)

おかく、うめ子の聲にふり振つて、おどろいて風呂敷を結ぶ。

うめ子。(入つて來て)もう支度は出來ましたか?

おかく。はい。

うめ子。ぢや、そろそろ出かけませう。――(おかくの懐を指して)何を入れたの?

おかく。(ギックリしながら)はい?

うめ子。何か手紙見たいなものを入れたね?

おかく。はい、あの、わたし……。

うめ子。(遮つて)一寸お見せ。(片手を出す。)

おかく俯く。少時二人沈默。

うめ子。(重ねて)お見せ!

おかく。(急に兩手を突いて頭をさげる。)奥さま、どうぞ御免下さいまし。

うめ子。(受けつけない調子で、膝を落して)お見せなさいつて云つたら!

おかく。(仕方なく)はい。(書簡箋を取り出す。)

うめ子。(取つて上書をよむ)淺草公園、宮戸座內、市川新太郎さま……。

おかく。(泣き聲になつて)奥さま!どうぞ神さまの愛によつて御許し下さいまし。

うめ子。（返事をしないで、封を破つて默讀してから）これ、すみ子から頼まれたの？
おかく。はい奥さま。
うめ子。そう云ふ事は、ここでは固く禁じてある事を知りませんか？
おかく。（絶體絶命的に）よく知つております……でも、無理矢理すみちやんから頼まれたもんですから、つい可愛想になつて――。
うめ子。人が可愛想なら、神さまの掟はどうなつても構はないんですか？切角立派に今日出やうつて云ふのに、そんな罪を犯しては困るぢやありませんか？
おかく。奥さま、どうぞ、今日だけは御見逃し下さい。わたし、奥さまの御力で今日ここを出られるのを、どんなに神さまに感謝してゐますか知れません。それを、それをこんな眞似をして、………まつたく惡魔に魅入られたんで御座います。でも、もう奥さまの御言葉で心から悔い改めて、惡魔は追ひ出してやりました。どうぞ御信じ下さい。
うめ子。（それに答へず見つめて）きつと、すみ子に押しつけられたんですね？
おかく。はい。
うめ子。まあ何ていけないすみ子だらう！あんなにいつも眞面目な熱心そうな顔つきをしてながら。――やつぱり、長いあいだの罪は仲々ぬけないんだね。よし、これをいい機會に鍛えなほしてやらう！
おかく。（哀願の調子で）奥さま、どうぞわたしと一緒に、すみちやんも許しておやり下さい。あの子も決して惡氣でした事ぢやアなく、まつたく一寸惡魔に魅入られただけで御座いますから……。
うめ子。いゝえ、あれは充分悔い改めなければいけません。おかくさん、あなたはほんとに悔いてますね？

おかく。はい、もうどんなに悔いてますかわかりません。
うめ子。ぢや、今日は切角出る日でもあり、あなは許してあげます。
おかく。（悄れて）ありがたう御座います。でも奥さま、どうぞ神さまの愛によつて、もうすみちやんに何も仰らないで……。
うめ子。（嚴とした口調で）いゝえ、あの子はどこまでも悔い改める必要があります。（書簡箋を懐へ入れる。）

──幕又は暗變

第二場

人物

すみ子。
矢澤うめ子。
その他、助手、客、收容者達、大勢。

時

前場の翌朝（日曜

處

舞臺

天使園講堂（兼仕事部屋。）

上手に白いクロースをかけた說教用の高台。台上には、奧に赤や紫の濃いあづま菊の花を一緒くたに挿した瀨戶の大花瓶。手前に聖書讃美歌集等。——台背後の壁の黑板には、讃美歌を書いた大洋紙の綴ぢたのが懸かる。黑板上の壁には金の十字架。テエブル奧手にオルガン。

正面奧の壁は、キリスト一代記の彩色畫で飾られ、その上中央に、外國の一派の創始者の白髮赤顏の肖像が、金緣の額に嵌められて見おろしてゐる。下にミシン二台ばかり。下手に入口。部屋全部疊敷。

幕あくと、說教台橫手で、洋裝のうめ子がすみ子を訊してゐる。

うめ子。今朝集りの前に、わざわざあなたをここへ呼んだのは、外でもないけれど、わたしゆふべ不思議な夢を見たんですよ。

すみ子うなづいて見あげる。

うめ子。きつと、わたしがいつも深く深く信じてゐるからでせう、神さまが夢に御現はれになつたの。白い長い髯の生へた、それはそれは神々しい方でしたがね。わたしへ向つて、大へん珍らしい事を御告げになつたの。それはねえ、すみ子が今大へんな秘密を持つてるツて……。

すみ子思はず俯く。

うめ子。その御聲で、わたしびツくりして眼がさめちまツたんですがね、今でも大そう不機嫌な神さまの御樣子が、アリアリ眼に殘つてます。わたし、確かにあれは正夢だと思ふけれど、あなた何かそんな覺えはありませんか？

すみ子默つてゐる。

うめ子。すみ子さん。神さまはね、何より僞りをお嫌ひになるんですよ。いつも教へるように、正直な人でなければ決して天國の門へは入れません。神さまは何でも御見透しです。もしあなたが神さまに申しわけない事をして、おまけに何知らぬやうな顏なんぞしてゐれば、神さまはきツと重く罰しなさいますよ。たとへまちがツた事をしても、正直に懺悔して了ひさへすれば、神さまはいつでも許して下さいます。

すみ子。（急に顏をあげて）奥さま。それはあたしが手紙を書いた事で御座いませう？

うめ子。（答へず反問的に）どんな手紙を書いたんです？

すみ子。（兩手をついて）奥さま、濟みませんでした。

うめ子。（押し返して）書いたなら、一とほりそのわけを云つて御らんなさい。

すみ子。はい。——おかくさんが昨日出てゆく時、新太郎さんへ手紙を屆けてあげるから是非お書き、ツて云つて下さつたもんですから……。

うめ子。（鋭く）いけません。あなたはここにおかくさんがゐないと思つて、他人に罪を押ツかぶせやうと思ふんですか？

すみ子。（びつくりして）いゝえ。

うめ子。あなた、きツと自分の方から賴んだんでせう？

すみ子。（少し考へてから悄れて）はい、さうで御座いました。
うめ子。（稍高に）それ、さう云ふ風に初めッからうそを吐くんだからいけません。自分がいい子にならうと思へば思ふほど、神さまは重くお責めになりますよ。おかくさんは、もうここから自由にそとへ出て行けるほど、大へん立派に生れ變つた人です。その人が、どうしてあなたにそんな罪を勸めたりするもんですか。もッと正直におなりなさい。
すみ子。（涙ぐんで）はい。
うめ子。なぜ又、そんな昔の人へ書かうと思つたんです？
　すみ子俯いて默つてゐる。
うめ子。きッと、逢つてつまらない話でもしたくなつたんでせう？　あなたは、あんな罪にけがれてゐる人と又前のやうな事をしたいんですか？
すみ子。……
うめ子。（すみ子の可憐な姿態を眺めて、ほとんど一種憎しみの調子で）あなたの肉體は、まだ小さいなりをしてほんとに深い罪を犯してるんですよ。見たところは人一倍奇麗でゐながら、けがされにけがされて來たんですよ。然も、それがみんな男の爲めです。役者の人にしろ、琵琶のお師匠さんにしろ、養育院の原とか云ふ人にしろ……。
すみ子（おどろいて顏をあげて）いゝえ、あたし決して琵琶のかたや原さなぞとは……。
うめ子。（冷かに）でも、わたしは今までさう聞いてます。
すみ子。それはまちがひです、奥さま。大まちがひです。原さんなんか、あたしそんな事を云はれては申しわけありま

せん。

うめ子。そうですか？ ぢや、それはどうでもよ御座んす。けれども、そんな風にいろいろ云はれるツて事が、つまりあなたの落度です。それを考へれば考へるだけ、おこなひを愼しまなくちやアいけないぢやありませんか。罪の女ツて大低そうですが、殊にあなたの場合は、男から離れる事が一切の罪から離れる事なんですよ。

すみ子。………。

うめ子。一體相模の海岸から飛び込んだ時、もうあなたは死んでゐる筈ぢやありませんか。それを思ひがけなく助けられたのは、まツたく神さまが精神的に生かさうと御考へになつたからですよ。キリストが十字架に御かかりになつて、七日目に又蘇りなすツたやうに、あなたも一遍死んで新しく生れ變つてるんです。昔の罪人のあなたと今のあなたとは、まるツきり別の人なんです。警察から連れて來てあげた時も、その事はよウく話してあるぢやありませんか。もうそれを忘れてるんですか？

すみ子。いゝえ、決して忘れません。

うめ子。そんなら、なぜ今度のやうな事を仕出來すんです。切角今まで一所懸命勉強して來た事が、この手紙一つで、又すツかり水の泡になつて了つたぢやありませんか。まあ何て恐ろしいでせう。——仕方ないから、今日から又新しくやり直さなければいけません。この家までけがされましたよ。ここは名前どほり天使園で、みんな野の百合のやうに清い、天使のやうな氣もちの人ばかりが住む家です。

すみ子。（堪えられなくなツて）奥さま。どうぞもう御許し下さい。あたし、この後二度とあんな事はしませんから。

うめ子。きツとですか？

すみ子。ばい。
うめ子。よく聞きましたよ。その誓ひを決して忘れちやいけませんよ。
すみ子。はい。
うめ子。ぢや神さまも許して下さるでせう。でも、あなた自身のほんとの潔めの爲めに、又神さまへのあがなひの爲めに、もう一度大勢の前で證なさい。
すみ子。（びツくりして）え？
うめ子。丁度今日は日曜の禮拜日です。そとからも禮拜のかたがやツて來ますから、その前で殘らず懺悔なさい。
すみ子。（思はず膝へ縋りついて）奥さま、それだけはどうぞ勘辯して下さい！
うめ子。（不思議さうに）なぜ？
すみ子。でも、あたしもうほんとに奥さまの前で悔い改めましたもの。
うめ子。それはわかツてます。けれども、もう一層あなたを潔く强くする爲めに……。
すみ子。いゝえ大勢の前では迚もあたし辛くツて出來ません……。
うめ子。その辛さを堪えるのが、あなたの爲めなんです。
すみ子。（思ひ切つて）さうは思ひませんわ。
うめ子。（キツとして）そう思へないのは、まだあなたが充分悔いてない證據です。
すみ子。（怨めしさうに見あげて）でも奥さま。どうぞ憐れんで下さい。
うめ子。（嚴しく）憐れむからこそ、こんなに云ふんですよ。この前も話したぢやありませんか、外國の或る人殺しの罪

人が、自分の犯した罪の重さに堪えられなくなツて、往來へ倒れて、土へ頭をすりつけて全世界に許しをねがツたツて話を。

すみ子。でもあたし手紙を書いたツきり、別に人殺しなんか……。

うめ子。いゝえ同じです。

その時入口をあけて、そとからの參會者（おもに老人）が三人ばかり入つて來る。つゞいてベルが鳴つて、助手や收容の婦人達が馳け出して來る。

うめ子。ア、もう時間が來ました。ぢや、きツと證なさいよ。

すみ子。奧さま！

縋るのを、うめ子構はず立ちあがつて客達の方へ行く。

客達。お早う御座います。（頭をさげる。）

うめ子。（禮を返す）お早う御座います。

客A。いい按配に結構な御天氣ですな、神さまの御惠みで。

うめ子。ほんとにありがたい事で御座います。さ、どうぞ御坐り下さい。

客ＡＢＣ達。ありがたう。（上手說敎台に近い方の疊へ坐る。風呂敷包みや手提袋をひらいて、聖書や讃美歌集を取り出す。）

收容者達（中年、妙齡、少女等）ゴタゴタに坐る。

すみ子みんなに見られるのを恐れて、密と涙を拭いて、うなだれて舞臺手前の婦人の中に加はる。――うめ子、助

手と一緒に舞台奥に立つて見廻す。

客A。（花瓶の花を指しながら他の老人に）いいあづま菊ぢやありませんか。

客B。わたしもさツきからさう思つてました。（うめ子の方を向いて）奥さん！

うめ子。はい。

B。あの菊は、やつぱり婦人がたの御丹精ですか？

うめ子。（得意さうに）さうで御座います。

A。大へん御美事です。

うめ子。（ニコニコして）左様ですか。あゝいふ物を作らせると、魂の方にも大へんよろしいんで御座いますよ。魂の花も、どうか澤山あんなに咲かせたいもんで御座います。——さう云へば、昨日又一人出ましたよ。

C。おや、さうですか。誰ですか？

うめ子。おかくつて云ふ妹です。

C。ああ、おかくさん！　それは御目出度う御座います。

うめ子。ありがたう御座います。それもいつも皆さまの御力添へのお蔭で。——今日も（一寸すみ子の方を見て）いい證をお聞かせ申します。

牧客の婦人達、さツきからの樣子にうすうす悟つて、すみ子へ眼を注ぐ。すみ子一旦あげた顏を又垂れる。

A。（好奇的な調子で）それはたのしみですな。

うめ子、みんな揃つたのを見て説教台へ進む。助手、オルガンのうしろへ腰をおろす。

うめ子。ではこれから始めます。――初めに御一緒に（うしろの洋紙を指して）讚美歌四百二十七番の第一節をうたひませう。――一節だけで御座いますよ。

老人達の或る者は、わざわざ讚美歌のペエジを繙す。オルガンの合圖鳴りひびく。次いで、うめ子を先頭に全衆「春のあさけ、夏のまひる、あきのゆふべ、冬の夜も、いそしみまく、みちちのたねの……」の歌を合唱する。

うめ子。（終ると）お祈りをいたします。

皆俯く。

うめ子。（誇張的な口調で）おお天にましますわたくし達の父よ、優渥なる御恩寵によりまして、今日只今、愛する兄弟姉妹と一緒に、斯くも美はしい五月の初めの日曜の朝を迎へました事を、深く々々御禮申します。

「アーメン」と云ふ聲が起る。

うめ子。（つづけて）過ぐる一週間、わたくし達はあなたの御榮えの爲めに、また道の種の足り穗となつて茂る事の爲めに、いろいろと苦心してまゐりました。幸ひその効果が御座いまして、いよいよあなたの偉いなる御力を知る事が出來ました事を、心から感謝いたします。

老人等の聲。アーメン！

うめ子。けれども、まだまだわたくし達の力は弱く、しなければならない仕事は山のやうに、また海の水のやうに澤山に御座います。どうぞこの上ともに御恩寵を下さいまして、わたくし達のいと小さきいそしみの成就いたしますやうに、延いてあなたの御國の一日も早く來りますやうに、切に御惠みを御ねがひいたします。

人々。アーメン！

うめ子。なほ今日の天使園の集りの爲めに、どうぞ祝福を垂れさせたまへ、アーメン！

全衆和して「アーメン。」オルガンの音「ブーン」と鳴る。

うめ子。それでは、もう一つ讃美歌をうたひます。（背後の洋紙を翻して）三百五十六番の第二節、爾曹が名の天に錄されしを喜びとすべし……。

再びオルガンの合圖ひびき、全衆「わがつみとがは、はまのまさご、かぞへえぬまで、さはにあれど……」の歌を合唱する。

うめ子。（濟むと）これから日曜の說教をいたします。（間を置いて）その前に、一寸時間を頂きまして、姉妹の一人に證をさせます。これは普通の順序では御座いません。が、今日御話して見たい聖書の中の言葉が、その姉妹の事に大へん深い關係が御座いますので、先きへ證をして貰つた方が餘計わかつて頂けるだらうと思つて、臨時に變へたので御座います。どうぞ御承知おき下さい。（老人達の方へ向つて一寸頭をさげる。）

老人達頭をさげ返す。

うめ子。（大びらに呼ぶ）では、すみ子さん！

全衆一齊にすみ子の上へ視線を集める。

うめ子。ここへ來て證をして下さい。

すみ子痙攣的に身體を慄はせて俯く。傍の者、低く「すみちやん！」と言ひながら肱で身體をつつく。

うめ子。（重ねて）さツき約束したやうに、みんなの前で證して下さい。

すみ子相變らず默つて動かない。

うめ子。（咎めるやうに）すみ子さん！
すみ子。（眞ッ蒼になつた顏をあげて）あたし、御約束なんかしません。
うめ子。（意外そうに）だッて……。
すみ子。（首を振つて）いゝえ。
　うめ子怒り氣味になつて睨む。すみ子見つめ返す。全衆緊張して來る。
うめ子。（集會の空氣が壞されそうになつたのを感じて）よ御座んす。あなたがどうしても恥しくッて言へなければ、わたしが代つてあげませう。（會衆の方へ向きなほッて）皆さん！……。
すみ子。（途端突然起ちあがッて、半ばうめ子へ向つて、半ば會衆へ向つて、咽ぶやうに叫ぶ）愛だなんて——神さまが愛だなんてみんなうそです？
　みな驚愕して彼女を見る。
すみ子。（つづけて）あたしがあんなに御詫びしたのに、許さないで、どこ迄も苦しめて恥を搔かせやうなんて、そんな神さまなら決して愛ぢやありません。神さまが愛なら、あたしもう夙に許して貰つてる筈です。
皆。（唸る）まあ！
うめ子。（肝癪を起して）お默りなさい、すみ子さん！
すみ子。いゝえ申します。神さまは愛でも何でもありません。何だかわかりません。そんな神さまなんか、ない方がずッと增しです。あたし今迄ほんとに神さまを信じやうと思つたんですけれど、もう信じません。
　全衆動搖する。

うめ子。（怒りの爲めに蒼ざめて）まあ！そんな神さまをけがすやうな事を云つて！まあ！（急に天井を仰向いて）お神さま。どうぞこの罪深い子の言葉を、御きき棄て下さいまし。

傍の仲間達も（すみ子の着物を引ッ張り合つて）すみちやん、およし？

すみちやん、御坐りッたら！

すみちやん！

すみ子。（屈せず）天使園なんてうそです。何もかも大うそです。

老人達。まあ、何てひどい事を云ふ娘だらう！

おそろしい子供だ。

あれが、いつだッたか新聞に騷がれた有名な不良少女ですよ。

すみ子、立つたまま、涙の迸る顏を兩手で押へる。

――急速に幕

第三場

人物

すみ子。

うめ子。

その他天使園の女達。

巡査。

時

前場の當日の夜中。

處

天使園に近い路傍。

舞臺

上手奥、平家建ての向ふに、天使園の二階建ての建物が燃えあがつてゐる。すさまじい火炎の色。散亂する火の子、幕あく前から擂りばんの半鐘の叫び。燒け落ちる物の音。はじけ飛ぶ響き。それに混つて、逸早く馳けつけた消防夫達の罵り合ふ聲。ポンプの唸り。充滿したキナ臭い匂ひ。

第一に、うめ子が亂れた髮形で、小さな手提げ金庫を持つて上手から逃げ出して來る。

うめ子。まあ何て不意だらう！――――でも、やツと逃げ出したわ。（燃えてゐる家を仰いで、髮をつかんで慟哭的に）ああみんな燒けちまふ！燒けちまふ！（胸を打つて）折角あんなに馳けずり廻つて、賴み廻つて、やツと集めた寄

附金で建ッた家だのに……。（急に氣づいたやうに右手の小金庫を眼の上へかざして）持つてるわ。ああよかッた！これだけでもせめて持ち出せて、ほんとによかッたわ！（つゞいて思ひ出したやうに）女達はみんなどうしたらう？　誰か燒け死にやしないか知ら。───（悚然としたやうに）もし大勢死んだら、──だつて仕方ないわ！わたしのせいぢやなし──仕方ない！（つまづきながら下手へ馳け去る。）

收容されてゐた女達四五人、寢衣一つで、裾もハラハラあとから斷續して飛び出す。

口々。おお恐い！

ああ怖ろしい！

もう少しで出られないところだッたわ！

ほんとによかッたわねえ。

喘ぎ、咽び、よろめき、抱き合ひながら下手へ去る。

あとへすみ子出る。

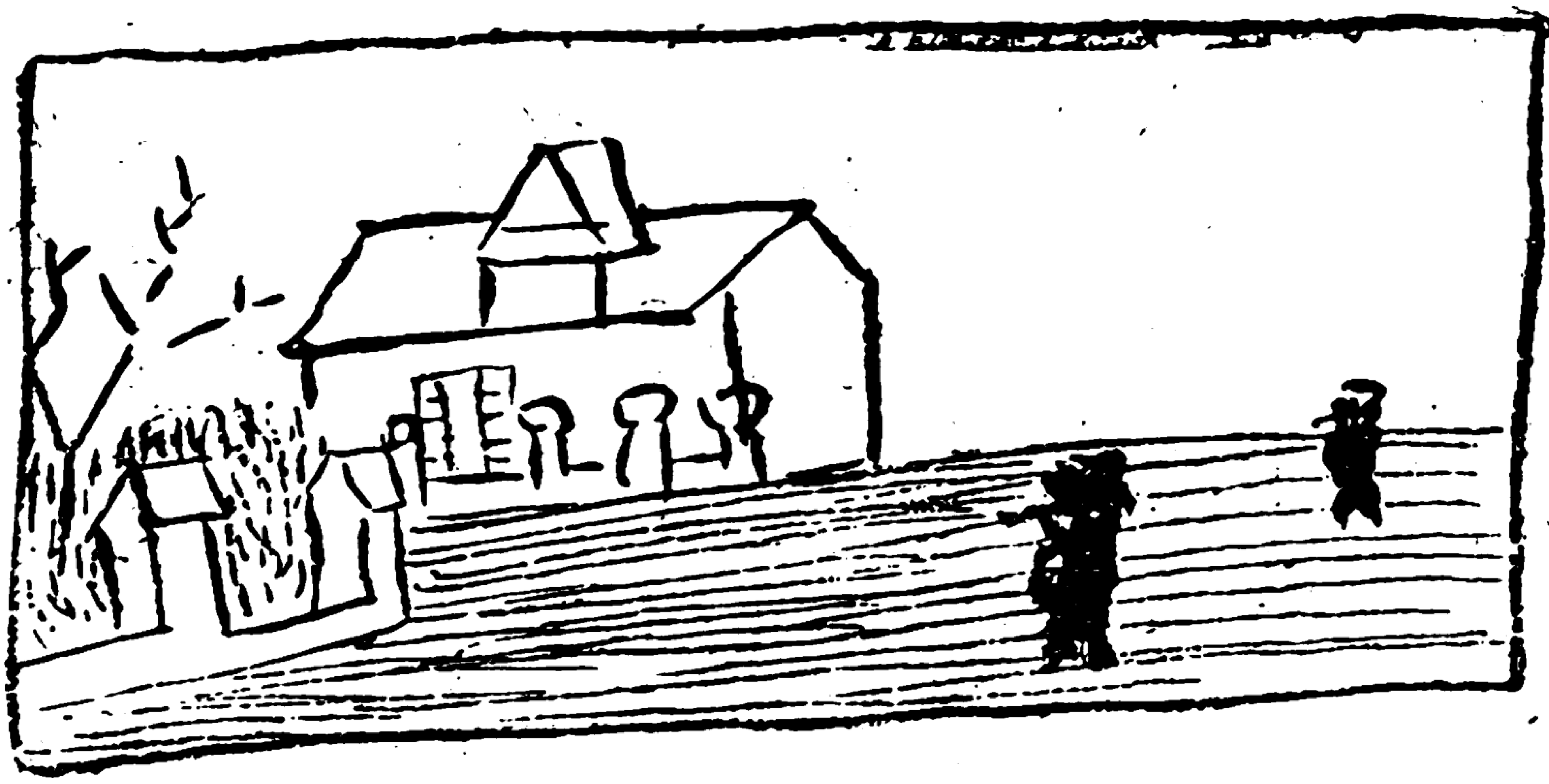
すみ子。（血走つた眼で猛烈な火勢を見つめ、歡喜のあまり兩手をあげて踊り廻つて）何てよく燃えるだらう！何ていい氣もちだらう！あの憎らしい家がすッかり灰になッちやふんだわ。……ほほほほ、赤い天使がドッサリ舞ひあがつて行くわ。みんな天國へ向つて行くわ。───ああうれしい！うれしい！みんな燒けろ！世界ぢう燃えちまへッ！

そのあひだに、巡査が下手から出、有頂點になつてゐる彼女の樣子をしばらく窺ひ見て、ツカツカと進み寄つて手荒く肩をつかむ。彼女びッくりして振り仰ぐ。

巡査。こら、何してる？
　　彼女答へない。
巡査。（鋭く）變な樣子をしてるが、お前きつと此の火をつけたんだらう？
　　彼女默つてゐる。
巡査。（小突いて）そうだらう？
すみ子。（決然とした態度で）そうです。
巡査。（やや面喰つて）なに、そうだつて？
すみ子。（キツパリした口調で）あたしつけました。
巡査。（火事の明りでしげしげ彼女の顏を眺めて）お前、天使園の者だな？
すみ子。ええ。
巡査。そうか。よく白狀した。さ、一緒に來い！（下手の方へ引ツ張つて行く。）
すみ子。（引ツ張られながら、歡喜に堪えられないやうに火を振り返つて）うれしいわ！うれしいわ！
　　その時、燃えさかる炎の空へ、電氣で大字が浮びあがる。「何が彼女をそうさせたか！」……彼女達去る。舞臺暫時空虚。凄慘たる字と音の中に幕。

（市場氏に贈る）

1926、12



奈良をたつ前

武者小路實篤

一

三十日の夕方であらう。春秋社の笹本君から手紙をもらつた。この春から出さうと思つてゐる用事の手紙だらうと思つた。あけて見た、果してさうであつた。しかし其處に意外のことがかいてあつた。

「曠野社の騷動に先生のお名前が引き合ひに出されたりしてゐますので、神田氏が大へん心配してゐられました。僕も今は何ら先生と曠野社と關係なきことをきいてつまらなく騷ぐ連中（新聞社の人々）を不快に思ひました。報知新聞につまらないことが出てゐました。もう御存知かとも思ひますが一應お耳に入れておくためにその新聞をお送りいたします。又毎夕にも出てゐたさうです」

自分はそれをよんで曠野社の騷動とはなにか知らんと思つた。僕は何にも聞いてゐなかつた。だから見當がつかなかつた。何か又事件が起つたのか、それにしても騷動と云ふ言葉は大業だと思つた。神田君が心配してゐるのは可笑しいと思つた。

それだけ僕は何か曠野社に事件が起つて、それもあまり名譽でない、そして自分が其處にひつぱり出されて、わるい役をさせられてゐるのだと思つた。しかしいくら考へても曠野社のことで僕が非難されるゆはれはないのだから、僕について心配することはない。あれば曠野社についての心配でなければならない。神田君が僕のことを心配してゐるらしいが、それは餘計なことだと思つた。

それだけ中々あくらつなかき方がしてあるのかと思つた。報知だと母がよむかも知れない。母に心配させては氣の毒だと思つたが、それ以外は氣にすることはない。曠野社のことは曠野社できめることで、何にも知らない僕がこゝで心配しても始まらない。

それで僕はすぐ笹本君に新聞のことは氣にすることはないと思ふと云ふ意味の手紙をかいた。報知を見てからと思つたが、神田君が心配してゐるときくと何かかきたかつた。

僕は新聞に惡口を出されることにはなれつこになつてゐる。しかし矢張り氣にはなつた。しかし自分に責任のないことをくよ〱思ふのは僕の恥ぢる所だし、なれてもゐるので、心が空虛になるやうな氣持にはならずにすんだ。戰つてやらうと云ふ氣はした。

「でる杭は打たれる、それならうたれて見やう」

自分は十六七年前にそんなことをかいたことがある。今でも自分は同じ氣持をもつてゐる。

二

自分は曠野社については九月に上京した時曠野社の木村莊五君が來てくれた時、一寸曠野社の話をきいた。その時木

村君は以前村の會員許りでやつてゐた時分がなつかしいやうに云つてゐた。そして經濟上にも中々苦しいやうな話をしてゐた。それは僕には意外であつた。僕はそれまで曠野社は景氣がいゝのだと許り思つてゐた。何しろ月に二萬圓近かくが入るわけなのだから大したものだと思つてゐた。しかし聞いて見ると、村の會員の人は月四圓五十錢の小遣ひももらへないのだと云ふ話だつた。しかし今度の古典全集の第二回の募集がうまくゆけば、今度こそもうかるだらうと云ふやうな話だつた。それがうまくゆかなかつたら大變らしい話だつた。

又その時自分は曠野社の内に三つの分子がよりあつまつてゐることをきいた。世間普通の雇ひ人と、村の會員であつて給料をもらつてゐる人と、それから給金はもらはない村の會員と、この三つの關係が中々厄介らしいやうな莊五君の口ぶりだつた。

しかしくわしいことは自分はきゝもしなかつたし、莊吾君も話さうともしなかつた。

しかし景氣がいゝと皆と噂をしてゐた自分は意表外な氣がした。しかし別に相談されたわけではないので、自分はきゝながしにしてゐた。

しかし今莊五君の言葉を思ひ出して見ると、この三つの關係がもつれたのではないかと云ふ氣がした。しかしそれがどうもつれたか、自分にはわからなかつた。その後、曠野社の人からは一つの手紙さへうけとらなかつたから。しかし之はあたりまいのことであつて、別に珍しいことではない。だから氣にはしてゐなかつた。今でも自分は大して氣にはしてゐない。又自分が氣にしても始まらないことである。

しかしその晩、矢張り少しは氣になつてゐた。夜目がさめると、いろ〳〵のことを考へる内に曠野社の騷動、新聞種、神田君の心配なぞが頭にうかんで來た。しかし正しい形をとつてはあらはれては來なかつた。それよりは自分は自

分の今かきつゝあるある創作のことや、今計畫してゐる新しき村の女の會員の會合のことや、和歌山へ引こす家のことや、來春やる雜誌のことなぞの方が、自分の頭をより多く占領してはゐたが、時々は笹本君の手紙の文句を思ひ出した。

僕は夜目がさめた時、一番頭がいゝ。その時いろ〳〵のことを考へるのは自分の子供の時からの癖である。

三

翌日十二月一日の朝新年號の脚本を書かうと思つたが、思つたやうにかけなかつた。二日がメ切り日なので少し氣になつたが、例の運命のことを信じることの厚い自分は一生懸命になれば何處からか救ひが來て道がひらけるやうに思つてゐるのでさう不安は感じなかつた。

晝飯食つてまもなく渡邊君が來た。

渡邊君は奈良の新しき村の支部の仕事をしてもらつてゐる、村にも半年許りゐた人だ。渡邊君はくるとまもなく福岡の藝者が昨日やつて來て、東京へ行つたと云つた。

自分はあんまり不意なのでおどろいた。一寸はどんな女か見たかつたやうな氣もした。その藝者は二十日程前に、プラトン社氣附けで僕に手紙をよこした女だ。藝者をしてゐるのが實に閉口らしく、其處からぬけ出したいのだが、借金が二千何百圓あつて中々ぬけ出せない事情をこまかに書いて、訴へて來た。僕は長い手紙は實に嫌いな男である。殊に身上話をなが〳〵とかゝれてゐるのをよまされるのは閉口である。自分の頭を奪はれるからである。自分は好きな小說も中々よめない。自分の頭を軌道からはずすのがいやだから、僕は殆んど毎日、自分の頭をある方向に向けて集注することを強いられてゐる作家の一人だから、殊に頭のよく働かない、考へ不足の手紙をよむのは嫌いである。殊に個人的

私的生活に立ち入るのは好きでない。しかし手紙をよまないわけにもゆかないので、よむが、大概の場合あまりながいとゝばしてよむ。あとで暇の時によみなほさうと思つてそのまゝにしておくことが多い。

この時も、少しとばしてよんだかと思ふ。しかし同情さすあるものがあつた。本氣さがあつた。自分は一寸どうにかしたい氣もしたが、自分はその方の專門家ではないし、法律上のことは少しも知らない。たゞ他人に迷惑なことさへしなければいゝのだ位いに思つてゐる。そして藝者には僕は近づきがないので、その世界のことはまるで知らない。二千何百圓の金でもすぐ出せる自分なら出す氣になつたかも知れない。しかし自分はそんな身分ではない。新しき村でもうんと大きくなつてゐれば、その内ではさう云ふ問題についてよく頭の動く實行家も出來ると思ふが、今誰に任せていいかわからない。

又その藝者の手紙の内に、たつた二千何百圓と云ふ意味のことがかいてあつたが、そのたつたには少し不快を感じた。矢張り藝者根性にかぶれてゐると思つた。僕は二三十圓の金で病氣が助かる人が、その金がないので死んでゆく事實がいくらでもあると思つてゐる。僕の友人でも月に十圓あまりの金がないので、藥がのめずにゐる人もある。そんなのは友人でどうにかなると思ふが、今の世では、殊に今の不景氣な日本ではたつた二千何百圓なぞとは普通の人なら云へないと思ふ。しかし僕は自分でわかるやうに手紙をかくことは出來ないので、渡邊君にたのんでいゝやうに返事してくれと任せた。

僕の處には助けてくれと云ふ手紙は時々くる。隨分中には珍らしいのもある。新しき村にゐた時、朝鮮の海で心中して朝鮮の人に救はれた男女が來たこともあり、奈良へも人妻と逃げて來た人もあり、又その他助けてくれと云ふ、女や男はよくある。しかし藝者は始めてだつたので、一寸興味をもつて二三の人に話した。しかし渡邊君に任せて安心して

ゐたので、忘れてゐた。

それが十日程前だつたらう、渡邊君の顏を見ると不意にその藝者のことを「どうなつたらう」と聞いたら、渡邊君は云はふと思つて忘れてゐましたと云つて、少し元氣になつたらしい手紙をよこしましたと云つた。それで僕もよかつたと思つて、氣にしないでゐた。處が二三日前だつたか、女の人が東京へその中ゆくから、その時奈良によりたいと云つてきましたと渡邊君は云つた。

しかし僕はその女のくる時分は奈良には自分はゐないと思つた。まだ中々來はしないのだと思つてゐた。女の人はくると云つても何かとおそくなるものと自分はきめてゐたから。

處がその女が昨日來て、東京へ行つたのだと云ふから自分は一寸おどろいた。なぜ自分の處へつれて來なかつたのだらうとも思つたが、渡邊君は遠慮でもしたのか、女が來たがらなかつたのかと思つたが、それもいゝだらうと思つてゐた。

渡邊君の話だと三四日たつと又奈良に歸つてくるらしく、それ迄に渡邊君は何か仕事をさがすことをたのまれたらしく、眞杉さんの處にその女の人のことをかいて、いゝ方法があつたら世話してほしいやうに云つたと云つてゐた。

眞杉さんと云ふのは關西婦人の記者をやつてゐる人で、昨日僕の處へ用があつて來た時渡邊君も來てゐ、其處で婦人救濟會（?）の話なぞも出、眞杉さんはその方の人を知つてゐるやうな話だつたので、渡邊君は手紙を出したのかと思つた。渡邊君は僕に相談せずになんでもやるたちなのを、僕は一方よろこんでゐた。だから僕に相談せずに眞杉さんの處へ手紙を出したことも僕は別に不思議には思はなかつた。しかし急がしい眞杉さんにいろ〳〵のことをたのむのは氣の毒な氣もした。しかし眞杉さんならよろこんでやつてくれるかと思つた。（渡邊君は昨日僕の處から歸つたらその藝者

が來てゐたらしい）

渡邊君はその他その藝者がまだあまり藝者かぶれしてゐないこと、何處へ行つても藝者がゐるのを不愉快がつてゐることなぞ話してゐた。其處へ基督青年會の石田さんが見へた。

石田さんはもつと早くくるわけだつたが、眞杉さんから電話がかゝつて、大軌で待ちあはせる約束をしたのに、眞杉さんが三十分たつても來ないので、電車にのらうとしたら切符切る所へ來て大きな聲でよばれたのにはおどろいたと云つた。

實は昨日眞杉さんが來た時、僕は石田さんに逢つてもらつて石田さんが前からくわだてゝくれてゐた新しき村の女の集りをすることを相談してもらうことをたのんだのだつた。それで石田さんと大軌であつてその話をしたわけだつた。話が早いのに感心した。そして石田さんは四日に婦人の集りをすることがきまつたことを知らせてくれた。僕は四日だけが暇だつたので四日にしてもらふことを眞杉さんにたのんでおいたのだつた。石田さんが僕の處へ來たのは他の用だつたが、丁度いゝ時に眞杉さんと逢つてくれたのを僕はよろこんだ。

「あの人はいゝ人ですが、かはつてゐますね」石田さんはそんなことを云つた。石田さんは僕とさう齡のちがはないい年の男で、眞杉さんは若い女だから、人ごみで大きな聲でよばれて手をふられたら一寸氣まりがわるかつたらうと思つた。眞杉さんの方は平氣かも知れないが。

僕は石田さんに藝者の話をしたら、眞面目に働く氣があれば相談にのつてもいいと思ふやうな話だつた。何んでも他人まかせで安心しやうとする自分はそれをきいて、うれしく思つた。又石田さんと眞杉さんに任せて安心してゐればいいだらうと思つた。又その方がその藝者の人にとつても幸福だらうと思つた。

其處へ文畫をかく濱田君が來た。

僕はそれ等の人に曠野社の騷動の話をもち出して見たが誰も知らなかつた。報知新聞も來なかつた。

四

その晩自分は夜なかに起きて脚本のつゞきをかくつもりで、寢まきを着かへずに、羽織と足袋をとつて八時頃四つになる新子をねかしつけながら自分もねた。昨日少し寢不足なのでよくねてしまつた。夜中に一寸目がさめたが起きる氣になれなかつた。六時頃、まだくらかつたが起きて電氣をつけて仕事にかゝつた。仕事にかゝる前程自分は神妙な心になることは少ない。仕事がよくゆくかゆかないかは自分の力とは僕には思へない。

何かの許しなしに仕事はよくゆかないものと自分は信じてゐる。

それと同時に仕事のよくゆくかどうかは一種の信仰だと思つてゐる。今度はいゝものがかけると云ふ自信をもてないではいゝ仕事は出來ないと思ふ。

ともかく仕事は思つたよりはかどつてくれた。自分は道がひらけないと思つた所に不意に道がひらける時は、何か自分を守護してくれてるものがあるやうな氣がして、うれしくなり、感謝したくなる。

朝飯前と後で、二十枚あまりかけた。いゝものとは思はないが、かけて不義理せずにすめたことをよろこんだ。

かき上げて時針を見たら十一時少し前だつた自分はあはてゝ晝飯の用意をさせて、茶づけをたべてゐた所へ、T社の井伊君が見へた。原稿をわたした。紙數が少ないのは氣がひけたが、無駄足をさせずにすんだことをよろこんだ。井伊君はすぐ歸らうとするのをまつてもらつて、茶漬けをほうばり、そして一緒に出かけた。自分はその日午後一時に難波

で電車にのつて和歌山へゆく約束になつてゐたから。和歌山へは今度引こす家を見にゆくのだつた。井伊君に曉野社の騷動のことをきいたが知らなかつた。大軌の電車にのると、僕をたゝく人があるので見ると畫家の九里だつた。今晩東京へゆくのださうで、僕が奈良をたつてから奈良へ歸るのをきいた時、うまく逢へたのをよろこんだ。上六で九里や井伊君にわかれ、難波に行つたら十二時半にまだなつてゐなかつた。大阪の村の會員の吉田君も見へなかつた。それで時間つぶしに本屋をさがしに近所をあるいて一軒の小さい本屋を見つけた。其處で他によみたいものも目につかなかつたので、アサヒスポーツを買つて、又難波にゆくと改札口に吉田君が來てゐてくれた。

五

和歌山へつくと和歌山の會員の林君兄弟が來てゐてくれた。おくれて瀧本君が來てくれた。吉田君も、林君も、瀧本君も曉野社のことは何にも知らなかつた。吉田君は社では東京の新聞では報知切りとつてゐないと云つた。自分はその報知に出てゐるはづなのだと云つたが、氣がつかなかつたと云つた。

僕は可笑しいと思つた。

家は四軒さがしておいてくれた。三度目に見た家が、家賃も三十五圓で、日あたりもいゝので、四つの內で一番氣に入つた。非常に氣に入つたともゆかないが、どうせ三ケ月たらずで切りすまないのだから、贅澤を云ふ氣はしなかつた。

それから紀三井寺に行つた。紀三井寺のながめはよかつた。林君達が昔はこゝらは美しかつたと云つたので、僕は「君達の生れない前にこゝらを見てゐる」と自慢してやつたが、大がい忘れてゐた。僕は十六の時、今から二十六年程

前に紀三井寺に來たことがある。姉の死んだ翌年の夏だ。姉の墓が和歌の浦口の近所にあるので、それをおまいりに、母と兄と僕と。その時兄は十九であり、自分は十六であつた。母もまだ四十八だつた。姉の死を母は氣がちがう程悲しんではゐたが、丈夫ではあつた。

名所の畫のかいてあるセンベイなぞが自分にはたのしみな時だつた。

姉の墓があるので、何となく和歌山はなつかしい。自分はこゝでいゝ兄弟をもつことをよろこんでゐる。

それからすぐひきかへしたら、五時三十五分發の電車にやつとまにあつた。のつて二三分たつと電車は動きだした。大阪へ着いたのが七時頃だつたので、ロシヤのバイオリンひきの音樂會をきゝにゆく氣になり、吉田君をさそつて朝日會館に行つたら眞闇だつた。それから朝日の人にきいてもわからないので毎日の方へ行つて私の前の新聞見て中央公開堂でやつてゐるのを知つて又其處へ一圓タクシーをはしらせた。

一つすんだ所にまにあつた。何年ぶりかでいゝバイオリンをきいた。クライスラーをきいて興奮したやうには興奮しなかつたが、しかし矢張り感心し、力がわいて來た。そして皆と一緒に手がいたくなるまで拍手した。

知つてゐる人は放送局の伊達君だけだつた。しかし金曜會をいつもやむを得ない理由ですかしてゐた自分はこゝで久しぶりに伊達君に逢へたのをよろこんだ。

しかし曠野社のことは知らないらしかつた。

十一時半頃、奈良についた。今日はいくら新子でも迎ひには來てゐまいと思つたら、ちやんと文香におぶさつて來てゐたにはおどろいた。僕を見ると例によつて夢中によろこんだ。早くねすぎて目がさめて、そして僕を迎へに來たがつたのださうだ。

若い時母の愛に抵抗出來なかつた自分は今また、このちびの新子の愛には叶はない。實際僕を見てこんなにまでよろこんでくれる者はないやうに思ふ。妹の妙子に母を奪はれた新子は僕を自分のもの丶やうに思ひ、夜中に目がさめても僕の顏さへとなりにあれば、安心して又すや〱とねむつてゆく。僕の顏がないと大へんである。この頃は少しよくなつた。大きくなつて少しはわかるやうになつた、少しも泣かなくなつた。だが二つ三つの時、僕が居ないと大へんだつた。

親の愛と、子の愛とどつちが強く、どつちが絶對か。少くも獨立出來ない子供の親への愛は絶對のもの丶やうに思ふ。

歸つても報知は來てゐなかつた。

六

翌日は三日である。

その日おそく目がさめると昨晩二度留守に來た、大阪毎日の記者が來た。

曠野社のことだらうと思つてゐたら、話がちがつた。

「靜岡からあなたをたよつて藝者が來たさうで、それをM氏の夫人が金を出して救ふと云ふ報道が來たので、それをしらべる役を命じられて來たのです」と云ふ意味のことを云つた。

自分はなんだと思つた。そしてそのために昨晩二度も來、大軌の奈良驛で僕の歸るのを待つてゐ、そしてとう〱僕に逢へなくつて奈良に泊つてゐると云ふ記者に同情した。なぜかと云ふと、至つて簡單な話だつたから、新聞種になる

とは素人の僕には考へられなかつたから。そして M氏の夫人が金を出すなぞとは僕には思ひもよれない事實だから、自分は例によつてありのまゝを云つた。

自分は一日の夕のことをかきおとしたが、一日の夕に藝者をたづねて僕の處へ來た男があつた。僕はその男を渡邊君の方へまわした。そのやうに新聞の記者も渡邊君の處へ行つてもらうより仕方がなかつた。M氏の夫人のことも僕は何にも知らなかつたので、簡單に否定してしまふわけにもゆかなかつた。

靜岡は福岡のまちがひだこと、女は僕の處へ逃げて來たのではないこと、萬事渡邊君に任せてゐること、自分は女から手紙をもらつただけのこと、それも渡邊君にわたしてあることを話した。記者は感じのいゝ人だつた、だから僕も不快を感ぜずになんでも話した。それから記者は渡邊君の處へ行つた。文香（女中ではないが、女中と同じようなことをしてもらつてゐる人）に案内さした。文香は歸つて來て渡邊君はゐなかつたと云つた。

その時分に報知が來た。あけて見ると朱でしるしがついてあつたので、よんで見た。

ごく短かく曠野社が二人首を切つたので、僕の攻擊の演說會を、僕が日ごろあまり尊敬してゐない連中がづらりとならんで催することがかいてあつた。

馬鹿々々しいと思つた。そして曠野社を新しき村のやうに思ひ込み、曠野社のしたことで僕が攻擊されるのはわりがわるいと思つた。

曠野社は新しき村ぢやないことはわかり切つた話である。よし名前が新しき村出版部であらうとも。このことは少し調べればわかることである。そして恐らく僕を攻擊する人々もこのことは知つてゐるはづと思ふ。さもなければ、曠野社でそんな事件が起つた時、僕に何とか云つてくるはづだ。相談しになり、きつ問しになり、處がまるで僕の處には何

とも云つて來ない。曠野社からも云つて來ないが、反對の人達からも何とも云つて來ない。云つて來ないのが當然である。僕は曠野社とは緣のない人間なのだから。よし曠野社が新しき村出版部と云ふ名を今でもつかつてゐやうとも、それは今まで出した、又今出しつゝある本の關係でやむを得ないのだ。日向の新しき村の人々は曠野社が今でも新しき村出版部と稱するのを神經にやんでゐるのを、僕はなだめてゐた。

曠野社のおこりは始めつから村の出來と性質がまるでちがつてゐた。村は精神が主であり、曠野社は自治が主であつた。村では村の精神にそむく方法で金をとるわけにはゆかないが、曠野社はともかく金をとらなければならなかつた。村は無條件の寄附金だけで始めた。曠野社は利子をはらう金を借りて始めた。村は生活費をたゞにする運動だつた。曠野社は金をとつて生活する方針だつた。だから曠野社と云つて、新しき村印刷部とは云はなかつた。たゞ始めは働く人は村の會員許りだつた。今は雇つてゐる人の方が遙かに多いらしい。主義で集つてゐる人は少數で、あと仕事に必要な勞力は金で得る方法をとるやうになつた。だから曠野社に集つてゐる多くの働く人は村の會員でなく、社會主義的傾向のある組合の人らしかつた。僕は曠野社の人からこの九月に一寸うはさをきいたゞけで、くわしいことは知らない、その人は村の會員で、村の會員許りでやつてゐた時分の曠野社をなつかしく思ふやうに僕に話してゐた。

そんな狀態だから、曠野社にさう云ふ方面の爭議が起るのは當然のやうに僕は思つてゐる。どつちが無理か、又どこまでは正當であり、何處からがわるいかも、自分は少しも知らないのだ。

勿論それは新聞が早や合點して、新しき村出版部と云ふ言葉からすぐ僕を連想したのかも知れない。それたら笹本君の手紙通り、その點では新聞記者だけの早合點かも知れない。しかし世間の人は早合點の人が多い。誤解されるのも馬

鹿氣てはゐる。しかし辯解しても始まらない、本當のことはいつかわかると思つた。

そして新聞見たので反つて安心した。正體をつかんだら馬鹿々々しさがはつ切りしたので。

七

午後から濱田君や、渡邊君が來たので新聞を見せて笑つた。

自分は新聞は嘘をかく名人なことをよく知つてゐる。一寸の會話でもまちがはずにかゝれたことは殆んどない。だから新聞をそのまゝ信じるのはよくないことは知つてゐる。が、かうはつ切り名まであげて僕を攻擊するやうにかいてあるのを見ると、さすがに嘘許りとは思はない。殊にその內には事實に不忠實な連中も入つてゐるから、如是閑なんかの名が入つてゐるのは滑稽である。如是閑のつまらぬ偶像破壞的皮肉の薄さには時々愛想をつかすが、ともかく日本では利口もので、のぼせ上らないたちと思つてゐるだけ、それが曠野社攻擊の尻馬にのせられて何か僕の惡口でも云へば滑稽だと思つた。又片上伸とか、大山郁夫なぞと云ふ頭のつぶしのきかない連中が、すまして尻馬にのつて事實無根のことを饒舌るのは滑稽だと思つた。その他は當然らしいから、たゞ無視してすめた。が、それにしても少し馬鹿々々しすぎる。之には誰か黑まくが居て、たのんで步いて、それ等に滑稽な役をさせる人間がゐるのではないかと氣もまわして見たくもなつた。しかしそれはあてにはならないが、ともかく僕を曠野社のことで攻擊するのは、おかしい。笑ふより仕方がない。

しかし僕は半信半疑だつた。

濱田君は僕がもうぢき奈良を去るので、他の人にたのまれた分もよせて三四枚僕に字をかいてくれと云つた。他の人

ではないからすぐ承知してかいた。
其處へ京都から外山君が來た。
外山君をつかまへても僕は新聞の記事の話しの馬鹿々々しさを話した。
人ちがいで死刑になる囚人もたまにはあるものだ。僕はそれから見ればなんでもないやうなもの丶、新しき村の悪口を云はれるのを默つてはゐられない。東京にゐたらすぐ演說會でもしてやるのだがと思つた。
事實に不忠實な人間共、なぞと一寸どなつて見たいやうな氣がした。

八

その夜二時頃おきて七枚ばかりのものをかき上げてねた。朝、新聞を見ると僕の寫眞が藝者の寫眞の胸の處に小さくくつついて出てゐる。どうも名譽なこと丶思はないわけにゆかないで、苦笑した。記事には悪意はなかつたが、自分はあまり利口な人間ではなく、事件については自分は何にも云はなかつたからではあるが、無定見を示して、たゞ同情許りしてゐるのが、恥かしいが、しかし出てしまつたのだから恥かしがつても仕方がないと思つた。
どうも自分はつまらぬことでよく新聞に出る奴だと思つた。反省もしたくなつた。もつと深く女の運命や、行動について正當な考へ方しておかず、他人まかせで安心してゐる自分が罰をうけたのだとも思つた。しかしさうひどくは恥かしいとは思はなかつた。
それからおきて原稿を書かうと思つたが、夜おきたのでくたびれたので、少し寢坊して十時頃おき、十時半頃大阪へ出かけて、茶谷君の處へ十二時頃出かけた。茶谷君は、村の大阪支部をやつてゐる人で、僕の信用してゐる人だ。

僕は其處で冬の外套を買つてもいゝ氣になつてゐることを話したら茶谷君はすぐ賛成した。

茶谷君は去年の十二月僕が村からキタナイ十年近かく着ふるした、（それも兄の古かなにかだつた。さうでないかも知れないが、）冬の外套を見るとすぐ外套を買ふことをすゝめてくれたが、僕は外套に金を出すのは勿體なくもあり、損のやうな氣もするので斷つた。時々自分でもキタナイのが氣にもなつたが、それはごく程度がよわく、平氣な時が多く、又少し得意な時もあり、それが又耻かしくもあつた。しかしこの春それを村へ着てゆき、夏の外套とかへて着て見ると、外套でこだわる氣はまるでなく、實に氣らくに着てあるけるのをよろこんでゐたが。いつのまにかまた冬が來て、夏の外套を着てあるくのはいつのまにか僕だけになつた。

電車でも往來でも、不思議に皆冬の外套を着てゐる。それもさうであらう。もう十二月だから。しかし僕より金のなささうな人も冬の外套を着てゐるのには感心した。

それで大してゞはないが、少しづゝ又外套にこだわり出した。

しかし茶谷君にきいて見ると、二三十圓で買へるつもりでゐた外套が七八十圓もしさうな話で少し勿體ない氣がした。それなら行基燒のツボが買へると思つた。

僕のゐる近かくの骨董屋に一つほしいツボがあるが、それが八十圓なのでかへずにゐた。尤も三百圓の畫を最近買つたのだが、僕の買つたものでは一番高いものだが、その時はやすいと思つた。しかし外套に七八十圓かけても頭もよくはなつてくれないと思つた。

それに茶谷君の處へあづけてある金が百圓位いのこつてゐると內々思つてゐたら、紙代をとりに來たので、茶谷君の處には三四圓切り金がのこつてゐないはづなので、なほ買ふ勇氣はなくなつた。しかし高いからやめるとも云へないの

で考へこんでゐた。

一體から云ふことになると自分は非常に決心のニブイ男である。それは何にも道徳的意味があるのではない。僕は他人に四五十圓の金を出し惜みしながら、いゝ畫をかうためなら五六百圓でも、まだそんなに出したこともないが、よろこんで出す男である。尤も畫によるが。しかし着物のためには一圓の金を出すのも惜しい。なんだかムダな氣のする男だ。自分の內心の要求とそれはピッタリしない。

そのくせ他人の注意をひくことや、物好きなことは嫌ひだ。着物は他人目に立たない限り考へたくない。勿論、趣味のわるい着物は嫌ひだ。

それで僕は着物のことはいつも他人に任せ、そして他人が買ふと大がいの場合、怒る。

僕が房子と結婚する前は母がいつも着物を買つてくれて、僕に怒られてゐた。その時いつも母は「裸で木をぶらさげて步くわけにはゆかないぢやないか」と云つた。

僕はまだ着て步ける着物があることを主張するが、買つてしまつた着物の惡口を云つても仕方がないのでそのまゝ着ることにしてゐる。房子は僕のそのくせを知つてゐるから、いつも僕に內證で買つてつくつておく。僕はそれを知らずに、五六度着たあとで、氣がついて怒ることがあるが、もうあとの祭りだ。

いつだつて怒らないことはないが、いゝ着物を着せて一緒に步きたい房子は、いつもうまく僕をだまして買つて、だまして着せることにしてゐる。

今度の安子はそんな才はない。僕に相談せずには着物は買はない、買へば足袋位いのものだがそれでも怒られる。だから僕は今度始めて自分で買ひたくなるまで買はずにすめることになつた。それだけ今度は周圍の人が注意してくれ

る。志賀の細君は、僕が兄貴が、西洋へゆく時すてていつた鳥打をさがし出してかぶつてゐるのを見て、――それも僕がかぶつてからも二年たつのでやぶけ出した。――帽子だけはかへてほしいと云つた。志賀の細君は僕の從妹だから、僕には氣らくに何んでも云へるわけなのだ。又茶谷君や、他の友人達を何かと心配してくれる。見るに見兼ねると云ふわけである。

それで茶谷君はすぐ金を銀行にとりにやつてくれ、そして決斷のニブイ僕を白木屋につれてゆき、そして僕が口をきく前に出來あいで一番高い、七十三圓の外套を買ふことにきめる。僕はもつとやすいのでいゝと一寸云つて見たが頭から否定された。そのくせ茶谷君自身はもつと安いのをきてゐるらしい。

しかし見くらべれば僕でもいゝ方がいゝとは思ふ。七十三圓だとあと七圓加へるとツボが買へるので勿體ないとは思ふが、しかしいゝ外套が出來るのも滿更いやでもないので、茶谷君に任せた。

そして今迄着てゐた夏の外套と、たつた今買つた冬の外套と着かへ、そして一圓タクシーにのつて、土佐堀の青年會へ行つた。

外套は少しきまりがわるい、帽子がヤブレてゐるまゝなので、僕の體面が少したもたれてゐる、それで少し安心が出來る。どうも新しい外套なんて云ふものはキマリのわるいものである。千人の前で演説をするよりはキマリがわるい。

今年になつて一番キマリのわるかつたのは奈良の公園でスケッチブックに山をかいてゐた所を中學生二人に見に來られたことだつた。その自分の繪の幼稚さがあまりひどいので、額から汗が出た。かくすのもいやだつたが、すぐ繪をかくのをやめるより任方がなかつた。それをぬかすと、新しい外套で女の人達の集つてゐる所へ出かけるのが、はづかしい方の第一のものに屬する。―大たい僕はこの頃あまり恥かしい氣なんかしなくなり、自分ながら圖々しいのに愛想が

つきる時があるのだが、へんな時に恥かしさと云ふものは頭を出すものである。尤もそれはごく程度のよいもので、その位いの程度では又何處か新しい外套の立派（？）さに快感を感じてはゐた。

會場につくと、大阪の會員の坂本君がすぐ出て來た。坂本君は大阪の支部會の世話役である。「皆きてゐる？」ときいたら「集つてゐる」と云つた。自分は不明な言葉で茶谷君と外套を貰ひに行つた云ひわけをしないわけにはゆかなかつた。勿論、坂本君には僕の云つた意味は通じなかつたらう。

それから皆集つてゐる處へゆくと、眞杉さんがすぐとんで來て僕がぬいで持つてゐた外套をうけとりに來た。

會は思つたより盛會だつた。僕は十人も集ればいゝと思つたが、四十人あまりも來た。そしてテーブルがつぎ〳〵とはすにのばされていつたので、「まるで日本の地圖見たやうだ」と云つて笑つた。椅子も不足してあとからあとから持ち出された。

皆、今朝の藝者の寫眞わきに僕の寫眞がくつついてゐるのを見てゐるらしかつた。くる時電車でもその新聞のその處を二三人おいて向ふで見てゐる人があつた。それはさう氣まりがわるいとも思はなかつた。氣まりがわるくないこともなかつたが、氣がつくわけはないと思つたし、その方の修業はつんでゐる。

九

自分はこの頃よく惡口を云はれてゐる。席上でも、ある女の人から、何とか云ふ雜誌に僕の惡口があんまりひどく出てゐたが、あんなのは名譽毀損にはならないのかと質問をうけた。「氣にならないからいゝのです」と僕は答へたが、この頃は兎角風向きがわるいのだが、集る人には少しも影響しないのは、氣持がわるくなかつた。

先づ石田さんが饒舌つた。石田さんはかう云ふ會をやるのになくてならない方で、僕は石田さんが村のことに熱心なのをいつも感謝してゐるものだ。石田さんは若い女學生の人も多いので、かんでふくめるやうな調子を何處かに見せて話をした。

それから席をなほしたり、テーブルをふいたりしたあとで僕が話した。

「どんな運動にも女が加はらない運動は大きくならない」と云ふ意味のことをトルストイが云つてゐることから話を始めたが、もうよくは覺えてゐない。

皆、靜かにきいてゐてくれるので話がしよかつた。

集つた人は新しき村に熱心な人許りではないが、しかし皆眞面目に何かを求めてゐるのが感じられ、若い人達は生々してゐるのが感じられた。

新しき村の女子部と云ふものが、かつちりした基礎の上に出來上る時もやつと來たやうな氣もした。しかしさう思ふと、僕が東京へでもゆくと消えはしないかと云ふ氣もしないことはなかつた。まだお互の間がしつくりしてゐない處があるやうに思つた。

しかし石田さんや、眞杉さんや、坂本君がゐてしつかりやつてくれゝば大丈夫なやうな氣もした。女の問題は、たとへば今日新聞に出された藝者のやうな問題は新しき村女子部で解決をするやうになれば隨分いゝと考へた。

新しき村は所謂社會運動や、政治運動とはちがうが、しかしその方面ものに出來たらなほいゝと云ふ氣はある。ただ自分はその方にムクとは思はないが、他に適當な人が出ればその方面にも働きたく思ふ。殊に不幸な隣人のために力强い味方になりたく思ふ、しかしそれには力强い協力者が澤山あつまらなければならない。集まれば何か出來る。

この日、女の人が七八人村に入會したのはよろこびであつた。その他の人も毎月僕が關西にゐる間、會をすることを望んでくれた。

自分は日向の村からすぐ東京へゆかず、關西へ一年程ゐたことを今更によかつたと思つた。

東京へ行つたならなほ働くつもりだが、時々關西に來て、關西ものにしたいと思つた。

一〇

會が終つてから十何人かあとにのこつて晩飯を一緒に食つた。皆、氣樂に話した。そして六時頃殘つてゐた人々と一緒に食堂を出、電車道の方へ歩いた。

七八人一緒に電車にのつた。自分は茶谷君と皆に挨拶して途中でおりて、柳屋へ行つて、僕の大祖父さん（?）の短ぢやくを買つた。

僕はこの頃、自分の血のつゞく人々のものを買ひあつめたい氣持が少しづゝして來た。なんだかなつかしい氣がして來た。齢のせいかも知れない。大祖父さんはもう少し生てゐたら、七卿落ちか、八卿落ちになる所だつたと母に聞いてゐる。その大祖父の字ではないかと思つてゐる。

八時すぎ奈良へつ(づ)いたが、新子は來てゐなかつた。もう寢たのだらうと思つて歸つて見ると安子一人だつた。

新子も妙子も迎へに來てくれたわけだつたのが、一寸外へよつてゐる間に、僕は歸つて來たらしいので、がつかりした。又出なほしてよろこばしてやりたくも思つたが、七八町歩く勇氣はなかつたので、待つことにしたら、ねて歸つて來た。氣の毒した。

安子は積極的には理想な妻ではないが、消極的には隨分いゝ妻だと思つてゐる。こんなことはかく必要もないと思ふが、ある意味でこの一文は或る男の話のつゞきと見てもいゝと思ふからかいておく。

安子は積極的には僕の仕事を少しも助けない。いつも家に引こみ、たまに出れば買ひもの位いで、村の會員にも滅多に逢はない、會に出ることは絕對にない。

女の會員なぞと親しくする質でもない、家に許りゐる。そのかはり僕に少しも不安の感じを起させない、そして又僕のエネルギーを少しも奪はない。嫉妬なぞと云ふものはお互に忘れてゐられる。だから消極的にはいゝ妻と云つていゝと思ふ。仕事の上からはよき妻とは云へないかも知れないが、しかしそれが又僕には都合がいゝのだから、僕はおちついた滿足を感じてゐる。それに二人の子が丈夫で病氣一つしないことは實に幸福である。

二

こんなかき方をしてゐると又誰かにおこられるだらう。喜ばすかも知れない。僕が下らない仕事をすることを喜ぶ人人は。

しかし實を云ふと自分はあと六時間たつと奈良を去るのである。その奈良を去る前に之をかき上げ、そしてたのまれてゐる字をかき僕の留守に引越す注意をし、手紙を二つ三つかゝなければならないのだ。

こんな藝當してまで原稿をかく必要が何處にある。自分でもないと思ふ。しかしかゝないとなんだか義務を果さない良心のいたみを感じる。それでともかくこの小說でない小說をかき上げやうと思つてゐる。讀みたくない人は讀まないでほしい。「惡口を云ふ人は云つてほしい。」僕は名譽をすてゝでも義務は果したい男だ。しかし金のために之をかいてゐ

ると思はれては困る。あることで僕はこの一年祿金はとらないでもいゝ身分になつたから。金の力もつよいのであらう。しかし義理はなほつよく、義務はなほ强い。正義は更につよく、愛は一番つよいかも知れない。しかし僕程度の人間は、まだ義務で强いられることが必要かと思ふ。

話は前にもどす。

五日が來たことにする。

午後から奈良支部の僕の送別會の演說會がある。兄弟の仲川君がさそいに來て、一緖に出かける。途中で大阪の兄弟杉本君にあふ。それから又昨日も來てくれた大阪の北村さんにあふ。ゆくとすぐ兄弟の西久保君が僕をおくる話をしてくれる。

僕は聞いてゐて少し淚ぐんだ。聞き手は皆で四五十人か。會員が半分位いゐる。その他の聞きに來てゐる人も常連許りである。

西久保君は僕が奈良を去るのを淋しがつてくれる。僕も淋しい氣になる。僕をほめてくれる。少し恥しい。大げさな言葉も出る。それは僕に値ひしない。しかし僕と兄弟姉妹との間には理窟なしに愛が通つて來てゐることを感じる。僕はその點では幸福ものである。今の世で眞心から愛されてゐる點で僕は仕合せものすぎると思ふ。どうして僕は人々に愛されるのかわからない。僕は我儘ものであり、勝手なことばかり行つてゐる。心に思つた通り云つてゐる。しかしそれがうれしい人には本當によろこんでもらへるらしい。

僕はそれを感じる。誰も其處にゐる人が僕の去るのを淋しがつてくれてゐる。僕はそれが淋しいが、それが又うれしい。自分のやうなものを心から愛してゐてくれることが。

西久保君は、しかし僕が東京へ行つて働くことはよろこんでくれる。そして奈良支部は僕が居なくなつても心配のないことを語る。

それは本當である。それで僕は安心して奈良を去れる。奈良にはいゝ會員が澤山ゐる。自分が居ても居ないでも同じ人間だ。自分は知らない同士をむすびつける。むすびついた兄弟同士が仕事をする。僕はそれを默つて見てゐればいゝのだ。

奈良ばかりではない。大阪、神戸、京都も活氣が出來てゐる。本當に僕を愛してくれてるよき人々がゐてくれることは思つても涙ぐめる。僕は何か與へてゐるかも知れない、しかし自分はそれ以上のものが生れてゐることを知る。

西久保君がおはつて自分は饒舌べる。

自分は八日の午後一時半奈良を去り、新しき村へゆき十日程して來て和歌山にすみ、そして二月の半ば上京することを話す。

そして和歌山は姉の墓がある處、そして東京へゆくと又一寸和歌山にはゆけないこと、和歌山の支部のためにも働けたら働きたいことなど話す。

又奈良に來てよかつたことを話す。奈良にゐた一年の間の仕事は僕には忘れられないことを話す。よき兄弟姉妹を知つたこと。文學の仕事も、僕としては實行の多かつたこと、そして出來も決してわるくなかつたこと、奈良の自然や、古美術が自分の心を洗ひ又、ひきしめてくれたこと、それから又東京へ行つてする仕事の抱負なぞをしやべつた。

それから又自分の次男根性について話した。

それは何でも他人まかせにすること、與へられた運命をよく生かさうとすること、つまり子供の時から兄の行かうと

思ふ處へつれてゆかれ、自分で何處へゆくかを知らずにすましてゐたこと、又何を貰ふのでも兄に貰つてもらつてそれで感謝し滿足してゐたこと、それが今でも僕の運命を支配して、僕はいつでも他人によつて用意された運命に從ふことなぞを話した。奈良へ來たのも兄が西洋に行つたからのこと、そして志賀が居たこと、母が二月堂を信じてゐることなぞ。東京へゆくのも母の身體のため、本屋に雜誌を出すことをすゝめられたため、のこと。

しかし與へられた運命は出來るだけ生かすことが必要なこと。そして運命から戸をたゝかれた時、靜かに戸をあけて其處から招かれる方に出てゆくこと。

其處に僕の生き方があることなぞを話した。

それから支部の相談。

それから紀念寫眞。

それからその晩、村の會員が送別會をしてくれたこと。

自分はうれしく感謝してそして、九時半頃家に歸つた。子供達はねてゐた。

新潮の中根氏から手紙が來てゐた。

見ると中にこんなことがかいてあつた。

「曠野社の問題で先生の御名が出ることは隨分御迷惑の事と存じます、此の頃の長島氏とはそんなに深かい御關係もないと思ひますのに困つたことで御座います」

之をよんだら、矢張り本當だつたのだと思つた。すると急に腹が立つて、讀賣に出さうと思つて原稿をかいた。

「恥を知れ。

今の曠野社を新しき村だと思つてゐる事實にたいする無良心者達が何を云つたつても自分は無關心ですましてゐればいゝと思つてゐたが、東京の友人からその人達の無良心を怒つて來たのですましてはゐられなくなつた。

事實をよく調べよ。知りもしないことを云ふな。僕に責任があると思ふなら、なぜ直接に僕の處へ手紙をよこさないのだ。僕は居處をかくしてはゐない。友達の首切られるのに同情しておきながら、僕にハガキ一つよこさなかつたのは、長島君と僕との關係がどうだと云ふことを本當は知つてゐるからだらう。

又僕は讀賣切りとつてゐないことを知つてゐる人があるはづだから讀賣でなぜ非難しないで、僕の目にふれない處や、聞へない處で大きな顏をするのだ。

本當のことは知つてゐるのだらう。そして知らない顏をしてゐるのだらう。

恥を知れ」

床に入つてもつぎ〳〵と腹が立つので、惡口が浮んで來た。原稿にかけば十五六枚の惡口が、頭に浮んで消えていつた。その内には自分もつかれて來た。そしてふと見ると、新子が實に平和な顏してねてゐた。

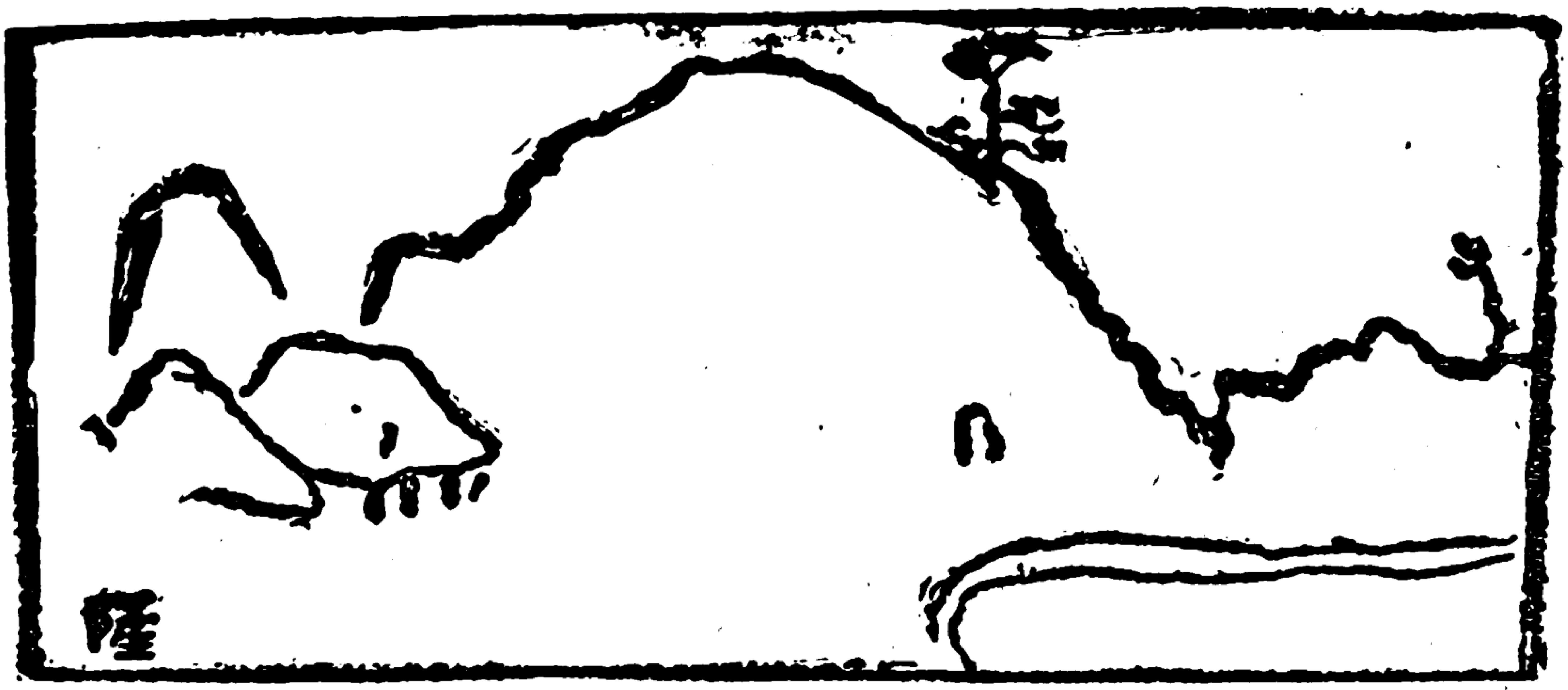
僕はそれを見ると急に心がよはくなつた、泣きたくなつた。子供を幸福にしたい、平和にしたい。

僕に何處までも戰ふ勇氣がないのは殘念なことではあるが、僕はつまらぬことはほつたらかしておけと云ふ氣になつた。

そして夜半に目がさめた時、讀賣りにかくよりは小說にかいてやれ。

改造の約束に何にをかいたらいゝか困つてゐた時なので、本當のことをかけと思つた。

そして出來たのが之である。（二六、一二、八）



明るい人

犬養健

一

三人は、三十になる良人と二十五の妻と四つの娘とは窓に顔をならべて、はじめて降りる停車場で頼りになる人間の梶田を捜した。登り坂のトンネルを絶えず細かく搖れながら次々に拔けたあとで、汽車にしては妙に反動のない物靜かさでその驛に入つたのだ。山の鳥が啼いてゐた。

當てにしてゐた梶田の姿は霧でまぎらされてゐた。梶田は案外な方角から大學生らしい雨外套の服裝で近づいた。梶田がこの高原で、大學の講師をしてゐる或る西洋人の避暑先きに寄寓してゐるのを知つて、土地不案内の良人が――禎三が出迎へを頼んだのだつた。

「すつかり療りましたね」

「ああ、すつかり療つた」

禎三はその快活な答をこのひと月のうちに、東京の家で、電車のなかで、銀座の

街頭で、何十度か繰り返してゐた。
「合憎の霧だな。構はないんですか」
「それが心配なら山なんぞに來ないよ」
「その調子ならもう大丈夫だ。大ぶん氣が病をつくつてゐたといふ噂だつたけれども」
「誇張だらう。學校の連中の話はとかく面白いからな」
「さうでもなかつたやうよ」
芳子といふ名の禎三の妻が、もう云つてもさし障りがないといふ様子で後ろから口を入れた。
「梶田さんのお宅では皆さん、お變りいらつしやいませんの」
「ありがたう」
「ほんとに田舍じみてしまひまして、いろいろの方の御様子にうとくなつて」
「落葉松の匂がするね」禎三は濕つた三和土に靴の音をたてゝ大股に歩きながら、息を吸ひ込んでゐた。「この匂はずつと前に赤城山で嗅いだことがあるな」
「何年ぶりなんです。こんな、普通の旅行は」
「足かけ三年さ。——まる一年十ケ月。——入海の一年十ケ月つて君、短くないよ。同情したまへよ」
禎三は快癒した病人に特有な子供らしさで、訴へるやうな眼差を殊更梶田に向けた。事實梶田は禎三が以前よりも饒舌になつた事に氣がついた様子だつた。八月の中ばを過ぎて、向ひ側のプラットフオームにはもう引き上げの旅客が一二組、上り列車を待つてゐた。女連れを人力で先きに送つて、禎三と梶田とは驛から半里あまりの輕井澤の町へ、白く

續いた曇り日の街道を歩き出した。そして禎三の入る家といふのは町からさらに五町ほど離れた處だつた。町の八百屋の用聞きが、一度締つたその家の雨戸を除いて置いてくれる筈だつた。一度締つた、といふのは禎三の伯母にあたる未亡人が其處をひと夏の契約で借りて、四五日前に用事で歸京したばかりだからである。

日の落ちるにはまだ相當に間があつた。落葉松と薄の多い高原のあちこちを散歩してゐる身綺麗な女連れが遠くに見えたり、すぐ行く手に現はれたりした。

「此處の町はあゝいふ連中で盛んださうだね」

「斷髪が大勢ゐますよ」

「芳子がこの土地の派手なことを氣にしてゐたよ。彼奴はすつかり海岸の女になりかけてゐたからね。僕も御同樣なんだ。この六月に、醫者からもう大丈夫だつて笑はれて東京に出てね。——もう靜かな場所はゐてもたつても我慢が出來なくなつて、秋までの豫定を早めたんだ。——東京へ出るとぢきに銀座の喫茶店へ入つたんだ。夕方でラヂオが聞えてゐたよ。そこへ壁にずらりと圖案風の女の横顏の綺麗な廣告ビラが一面に貼つてあるんだ。殘らず同じビラなのが、かへつて色どりのうへに効果があつたんだ。それから出入りする男も女も思ひ切つて活潑でね。可笑しな話だけれども僕は壓迫されてしまつたよ。まぶしい氣がしたよ。クリスマスの賣り出しの頃のやうな刺激を受けたんだ。田舍を引きあげてよかつたと思つたよ。東京に出てからしばらく身綺麗にする努力をしたよ」

「三津(みと)といふと江ノ浦の手前でせう」梶田は怪訝な顏をした。「ラヂオぐらゐ聞けばよかつたのに」

「病人臭いことが厭だつたんだね。それに僕の病氣は夕方からが一番頭がはつきりして大事な時間だつたんだ。それから、彼處でよく聞えるほどの機械は高さうだつたし。——でも實際はラヂオぐらゐで時間を忘れた方がましなくらゐ

に、すつかりちぢむさくなつてゐたよ。——誰か僕に出會つた奴がさう云つてゐなかつたかい」
「うん。おやぢじみてしまつたといふやうな話を聞いたけれど」
梶田は、一時ひどく陰氣で、無口になつてしまつてゐるといふ、その頃の禎三に就ての噂を多少訂正して云つたのだ。
「さうだらう。本當をいふとあの頃は」禎三は五つ年下の梶田をちらと横目で見て、多少冗談のやうに云ひ足した。「それこそ、人生は何だらうといふやうな事ばかり考へてゐたからな」
禎三は自分の事ばかり語りたい慾望から早速爬爪らしい話を持ち出した事に引け目を感じてゐた。しかし梶田はいかにも初心な青年らしい顏をわづかばかり不機嫌にしてゐた。それがいつも浸浸した話をする時の梶田の表情だつた。一體禎三はいま家業を繼いで醫學者になつてゐる梶田の兄と、或る寄宿舍の設けられてある學校で同級生だつたのだが、面白い交際以外に微妙な友情が欲しくなる時には、彼はいつも同胞ぢうで一番のらくらしてゐると家庭で云はれてゐる——つまり物事に激し易くて志望のきまらない、この弟に相手を求めるのだつた。
禎三は今も梶田の氣持のいゝ無言に引き込まれた。火山に近くて輕石に似た土質のいつまでも白い、いつまでも平らな道は話に沒頭するに適當だつた。
「あんまり自慢の出來た話ではないけれどね、僕は——人間が宇宙にとつて別に必要でもないといふ事なぞが——何といふか——妙に不滿だつたんだよ。僕は三津の入江で漁り火を見るのは好きだつたけれども、星は美しいと思はなかつたよ。星は恐かつたよ。星を見てゐると自分が微菌よりも小さい事になるからね。よく不意に「どうしたらいゝだらう」などと獨り言を云つて芳子を驚かしたよ。芳子のやうな奴を困らすのは少し罪だつたな」
葦の向うに白い煙が線をひいて、上り列車の屋根のつらなりだけがいかにも平原らしい無雜作な速力で近づいて見え

た。

「でも今年になつて不意にね――僕あ、必要不必要以外から人生を考へるやうになつてから、かう、肩が下りるやうな氣がしたよ。人生が不必要以下だとも云へるやうな一種の獨特なものだと思つたら、急にかう、自由なやうな氣になつたんだ。――あとで醫者に聞くと弛んだ胃の組織が物事を陰氣な方に考へさせるものださうだね。多少本當らしいな。だから君も芳子も同盟して氣が病をつくつたんだなどと云ふけれども、僕のはその反對らしかつたよ。胃から來た神經衰弱だつたかな。肝臓がわるくなると氣わづらひをするなんていふ說も、あんまり笑へないよ」

「そんな說があるかしらん」

梶田は笑ひ出した。

「何かの飜譯本で讀んだよ。――ずつと昔の學說らしかつたよ」

梶田の云ふとほり、二人は斷髮姿の西洋婦人の目立つ、いかにも避暑地らしい町の通りにさしかゝつた。禎三は物珍らしく兩側の店屋を見廻しながら話を途切らせた。

二

禎三一家がその輕井澤の町はづれに來たのは禎三の伯母の親切からだつた。そして話の起りは芳子が伯母へ出した暑中見舞の便りだつた。禎三は七月のはじめに伊豆の入海の借家を引き上げて、もしも東京の暑さに早速堪へられなかつたならば、何處か氣儘に旅行する心意だつた。ゆつたりと氣儘になるといふ事は、どうもその三年の間禎三からも妻からも失はれてゐた。禎三には健康が稍々恢復するにつれて少しづつ整理して置いた文章からの收入があつた。その病後

第一の收入を禎三は子供のやうに喜んだ。――かういふ事柄を細かく、恐らく浮き浮きと芳子は伯母に宛てゝしたゝめたのだつた。

世話燒きで人のいゝ伯母にはこの便りが何か胸に觸れたのだ。そして伯母は芳子に云つて寄した。――わたしはこの九月の伯父さんの七回忌その他で豫定よりも早く引きはらふ。入れ替りにいらつしやい。古びた家で汚いが氣兼ねがなくていい。契約は九月一ぱいになつてゐるのだから八重子の袷を持つて來てゆつくりするといゝ。若い人がこの暑さにこしらへたものを、落ち着かない宿屋なぞで費(つか)はせるのは勿體ない。

手紙の書き振りに現はれてゐるとほり、その伯母――福田の伯母は禎三夫婦を大變親身に思つてゐた。その伯母は芳子を小さい時分から知つてゐた。といふのは、芳子は禎三の義從妹にあたるからだつた。

禎三が義從妹の家に出入りしてゐる五六人の女學生のなかから――二十代に獨特な感情で禎三はそれらのどの女學生にもそれぞれ多少の美點を感じてゐたが――そのなかから彼の知りぬいてゐる、謎のない、昨日のとほりの從妹を選んだのは、彼女が家庭の妻に向いてゐることゝ、もう一つ彼女が美人といふ型ではないために一種細やかな心遣ひで愛しな事が出來ると考へたからだつた。禎三はさういふところのある人間だつた。要するに仲のいゝ從妹と離れたくはなかつたのだ。實際、禎三の妻に對する心持には、いまだに從兄妹であつた頃のさういふ影が殘つてゐた。――

伯母が古びてゐると云つた家は、町から碓氷峠の方へはづれた雜木林のなかにあつた。八百屋の用聞きの來るのが遲くて、二人が話し續けながら着いた時には階下の部屋の掃除の最中だつた。二階の雨戸を梶田が開けた。禎三は隣りの物置き部屋から捜し出した、儉約家の西洋人の使ひさうな疊み寢台を組み合せて、いきなり寢心地を試すやうにその

上へ仰向けになりながら、戸が一枚一枚除かれるにつれて高まる何處かのせゝらぎの音を聞いた。

黑いほど碧い入江の規則的な渚の音を彼は思ひ出した。蜜柑と魚との豐富な温泉村兼漁村での生活を思ひ出した。其處ではいつも周圍の單調さに知らず知らず釣り込まれて、禎三の意固地な考が自分の內部へ過度に嚴しく向けられてゐたのだ。さういふ狹い生活はもう過ぎた。

「君のゐる家もこんな建て方かい」

疊み寢台のうへの禎三が窓の梶田に聲をかけた。

「この倍は廣いかな。でも小さい子供がうるさくつて思つたほどノートの整理も出來ないんだ。もしかすると十日ほど峠町へ登つて、やつつけて來るかも知れない。この春に大分休んだから苦しいんだ」梶田は何か自分の性質にぴつたりと合ふ一生涯の仕事にぶつかる事を空想して、迷つて、そのために差し當りの大學の卒業が遲れてゐるといふ風な性質だつた。「兎も角も學校を出てしまうんだ。ノートがなければ出てもしまへないからな。十日——一週間ばかり御不沙汰するかも知れませんよ。あとで十分遊びたいから」

「梶田さん」と芳子が階段から聲をかけながら上つて來た。「御飯召しあがつていらつしやつてもいゝんでせう。ではね、あなた」芳子は今度は良人に云うのだつた。「少し八重子を遊ばせて下さいな。煮物の忙しい間」

娘は階下で階段のとほりに聲高く女中に甘えてゐた。娘は潮風と温泉とですばらしく丈夫だつた。そして禎三は一體に子煩惱だつた。始終目近くにある、伸びずにおかない生命力の見本として、その四つになる娘は禎三に影響を與へてゐた。

「その間谷川へでも出て見ようか」

「いゝでせう」

雨あがりで水量の増してゐるらしいせゝらぎの音が、禎三の心をしきりに豐かにしてゐた。禎三は、現在生きて働いてゐる心を豐かにするものはすべて大切にするやうになつてゐた。

「梶田さん」隣りの物置を覗いてゐた芳子は、久しぶりの健康な生活に浮き浮きして、壁の向うから話しかけた。「この物置ね、薬浦團やほかのがらくたを始末すると、一寸した部屋になりますよ。どうぞ御遠慮なくお泊りに」

「えゝ、ありがたう」梶田は戸外へ向いた儘林に云ふやうにして答へた。「この家なら、よく散歩でそこの道を通つたんですよ。道理でこの間うち、急に締つたと思つた。急に締つた家といふものは寂しいな」

「ほんとねえ、このとほり電燈の球は外してあるし、籐椅子は隅に積んであるし」

「さつき物置を覗いたらね、古スリッパの下でこほろぎが啼いてゐましたよ」

「ひと先づ夏が過ぎたといふ様子だね。この家は」

娘が行李から出した人形を抱へて上つて來た。そこで、一家がまだ居馴れない、林を見透したそのひと部屋に集つたわけだつた。いかにも避暑地に遁れ走せに入つた心持が、梶田と八重子とを除いて良人にも妻にも共通だつた。

三

梶田は話のとほり妙義の山々の見える、そして試驗勉强の學生がよく滯在する、峠町に行つてしまつた。禎三の到着のためにそれを延ばしてゐたのかも知れなかつた。だが禎三にしても色や、動きや、聲のはじめての土地で、友達なしにゐる事はさう苦痛ではなかつた。彼の頭は恢復しはじめてゐた。そして禎三は頭のはたらく時に一層話相手を求める

といふ質の人間ではなかつた。寧ろ獨りで默つてゐる時に獨自の人間だと云つてよかつた。それに秋の山は彼をなほさら東洋人にした。東洋人は獨りでゐる時に強い――さういふ處世術を作りあげたし、西洋人は隣人になる時に強い處世術を作りあげた。――大ざつぱではあるが禎三はそんな風に考へてゐた。そして都會に戻つて來た禎三のさし當つての空想は、その二つを豐かに調和させる生活だつた。一つの雲と對ひあつても賢人と對ひあつた時のやうに人生のことを十分考へる靜かな日と、すべての結末を忘れて生き生きと發展せずにゐられない毎日の生活を愛して、隣りの友人にも向う側の友人にも善良に振舞ふ活動的な日と、彼は兩方持ちたかつたのだつた。

健康といふ事がほとんど美徳に思はれたので、彼は努めて林や山道を歩きまはつた。

さういふ四五日目だつた。禎三は淺間山を大きく眺めやうと考へて峠――碓氷峠ではなく、町から沓掛へ抜ける近道になつてゐる鶴溜りといふ名の、柔かい勾配の丘に登つて行つた。其處まで行けば淺間山の赤味を帶びた紫の膚が大きく禎三の方へのしかゝつて見えるのだつた。直きに霧が下りて來た。禎三は五六町の草原を引返して、輕便鐵道の建物もない、寂れた停車場のベンチに休んだ。

輕便鐵道は小瀬といふ溫泉場を通つて山あひを草津へ出てゐた。そして禎三の休んだベンチのあたりは丁度眺望の廣いところで、淺間を一方に見上げると同時に、反對の南には輕井澤の暮れ方の家並が小さく塊つて見えるといふやうな地點だつた。今しがた淺間の膚を隱した霧はもう禎三の周りに濃く流れて、彼は洋服の襟を立てゝゐた。やがて輕便鐵道が霧のなかを來た。輕便は草とベンチだけの停車場で申し譯に停ると、工夫二人を降してまた走つた。その短い間だつた。禎三は二三人並んで向うむきに腰掛けてゐる若い女連れの、かういふ會話を耳にした。

「薄がすつかり穗を出しましたのね」

「えゝ、今が見ごろね。もう少したつと、そら、あんまり白つぽくて、ぼやぼやつとなるでせう」

「でもね、そのぼやぼやつとなる時分まで居て見ようと云ふのよ」

そして話し手同志が頬笑んだやうな間があつた。

まつたく禎三と輕便鐵道との周りは、軌道のための土堤までもすべて艶艶しいうす茶の穗を出した薄だつた。その亂れた薄の穗を透して、やはり伴れの一人らしい洋服姿の男の肉付きのいゝ肩先からパイプ煙草の匂ひが漂つてゐた。

禎三はその聲を聞いておやと思つた。この物音もない寂れた霧の景色のなかで、いかにも悧巧な感じのするその會話に――漁村の質朴な會話に倦き倦きした後で――ふと惹きつけられたが、それ以上に彼は聲に聞き覺えがあるやうに思つたのだつた。彼はベンチから立ち上つて、二三尺高い軌道のうへをもうゴトゴトと走りはじめた客車を覗かうとした。無駄だつた。だが輕便が十間ほど先きの軌道のカーヴで、低い町への合圖のやうに長く軋る音をたてながら曲つた時に、禎三は二十三四の婦人が立ち上つて、搖れる身體に調子をつけながら霧がくれの淺間の頂きをもう一度覗かうとしてゐる姿をみとめた。

それは薄墨色に近い輪廓だつた。しかし禎三はたしかにその人だと感じた。

輕便は下り坂にかゝつてすぐに草に隱れた。しかし禎三は安つぽい小型の軌道に殘されたあのパイプ煙草の强い匂に一種嫉妬に近い心持、自分が長い間田舍者だつた自覺から來てゐる孤獨な心持を感じた。

それはほんの三四分間の出來事だつた。

その人とは禎三の妻の――昔の從妹の、あの仲間には入つてゐなかつた同窓生だつた。

その人は禎三も芳子も一年のうちにめつたに逢ふ事のない、しかし禎三も芳子も心からその人柄を愛してゐる娘だつ

た。

またその人は芳子と婚約したてゞあつた禎三——一番健康で、一番生活力に富んで、一番自分を肯定してゐた頃の禎三を知つてゐた、みとめてゐた人だつた。

禎三の妻は、昔ながらの從妹は、靜か過ぎる入海の借家で、時々その人が良人の「詩」なのだと云つて揶揄うのだつた。別に惡意といふものもなく、たゞ陰氣な話題を避ける時にそんな事を云つた。そして禎三は、擦れからしでもない妻がさういふ事を棘もなく云ふ事が出來るのは、一つには妻が彼と幼な馴染の近親だからであり、他にはその娘の人柄の德から來てゐるのだと考へてゐた。だが、禎三がさう考へるのは、やはりその人が彼の「詩」である證據かも知れなかつた。——

禎三は不意にその輕便を追ふ氣持になつた。そして峠のゆるい勾配を登山家のやうに何か目的地を持つ足どりで勢よく降りて行つた。彼は輕便が山の襞に沿つて大きく迂回して行くので、早く步きさへすれば下の停車場で落ち合ふわけになると考へたのだ。峠の麓は町はづれまで續いた草原だつた。だがその草原は實際に急いで步いて見ると、禎三の想像したよりもずつと時間のかゝるものだつた。禎三は顏に抵抗して來る霧に睫毛を濡しながら、襯衣の下の蒸されて汗ばんで來るのを感じた。そして禎三が町はづれの停車場に着いた頃には、シグナルはもう通行安全の靑い燈に變つて居り、その火色はいかにも何事もなかつたやうに夕闇のなかで平和に溶けてゐた。

四

「おい、今日鵜溜りに行つたら松子さんらしい人に逢つたよ」

「どなたにですつて」

禎三が家に歸つた時には、芳子はもう、霧を避けて雨戸を閉め、これも借用の置電燈の下で娘に食べさせる小魚の骨を丹念にとつてゐた。それがたゞ一ヶ所殘してあるガラス戸の入口から見えてゐた。禎三は靴の紐の上にこゞみながら聲をかけたのだ。

「ほら、毛々。ほら、毛々」

ひとりで先きへ晩飯をはじめてゐた娘は、菜を頬張つてゐるために不自由な舌を動かして、入つて來た父親を指さしてゐた。

「毛々かい。いゝね」

禎三は卓の上に投つてある縫ひかけのジャケツの事だらうと考へて、娘のためにその色合ひを褒めてやつたのだつた。このジャケツもその一兩日忙しく續く濃い霧が、急にこしらへさせたものに違ひなかつた。

「さうぢやないのよ。あなたの睫毛に水が溜つてゐる事なのよ。さうでせう、八重ちやん」

娘が首肯くと芳子はさも面白い行違ひでもあつたかのやうに、なほも娘を笑はせようと努めてゐた。食事の匂、閉めた雨戸、燈火、早速の笑ひ聲、禎三は忽ち子供の時から知りぬいてゐる人間の傍にゐる、平凡な、隔てのない——自分の妻に就てさう云ふのは可笑しいが——空氣に取り巻かれるのを感じた。

「どなたに會つたんですつて」

「松子さん。下山さんさ。鵜溜りで。どうも確かにさうだ」

芳子はそれを聞くと稍々誇張して驚いた表情を見せた。これも禎三が十年來謂はれを知つてゐる表情だつた。それは

まだ十七八であつた芳子の姉の隆子が、女學校の英語教師をしてゐる或る西洋婦人の樣子を眞似ては禎三達を笑はせたものだつた。

「本當？挨拶なさらなかつたの」

「それが向うは輕便に乘つてゐたんだ」

「そんな事なの」芳子は氣拔けした樣子だつた。「確かに松子さんかしら。でもあなたは松子さんを往來で見つけるの、いつも早いから」

「馬鹿な」

しかし芳子はもうその友達の事をしんみり考へてゐた。

「松子さん、どう、やはり支那や佛蘭西を引つ張り廻されたやうなところがあつて？」

「相變らずらしかつた。昔のとほりきものだし」

「でも少しは變つたこと？」

「第一霧でよく分らないんだよ。相手は二三尺レールが高いし」

「こつちは脊伸びして覗いたんでせう。さあ八重ちやんこのお魚」

「さうなんだ」うまい當て方だと思つて禎三は疊の上に仰向けになりながら苦笑した。「何でも二三人女連れが塊つてゐた。それにハイカラな紳士と」

「お兄さんぢやないの」

「兄さんと違ふやうだつた。あの兄さんは煙草は吸はなかつたよ。霧のなかで西洋の刻みの匂がした」

「何だか大變細かい話になつたのね」芳子は久しぶりで氣に入つた話題に打つかつたやうに快活だつた。「ぢやあ松子さん、もしかすると極まるんぢやないかしら」

「何が」

「そのハイカラな方と」

禎三は置き電燈の天井にある巨きい影を見て、先刻の峠の草のなかで感じた孤獨な心持を思ひ出してゐた。

「松子さん、隨分、遲れてゐるんですもの」

芳子が娘の玩具のやうな赤い箸を動かしながら、落ち着いた溫かい口調で云つた。さうでもないよ、二十五ならば今の世の中では、禎三はさう打消す氣で妻の昔の友達を一人一人頭に浮べたが、彼の憶ひ出せる名前は皆苗字が變つてゐた。

「松子さん、あんないゝ人なのに、なぜ遲れてゐるんでせう」

芳子が又もや燈のすぐ横で獨り言のやうに呟いた。

「パッとしないからさ。――目立たないんだ」

「目立たないかしら。それあ派手とは云へないけれども。――さうかしら。――わたしね、校友會で會つても松子さんは下の級のひとよりもずつと若くつて、娘娘してゐるので本當にいゝと思うのよ」

「あの人は自分のいゝところに氣がついてゐないんだ。だから美しさがぼんやりしてゐるんだ。それが、男から見ると平凡なんだよ」

「男つてそんなものでせうか」

「馬鹿なんだ」
「まあ誰が」
「松子さんとの縁談をはづしてしまつた何人かの男がさ。丁度いゝんだ。そんな奴には過ぎてゐるんだ」
「まあ」顔を擧げた芳子は良人の云ひ過ぎに愕いたといふ風だつた。「さうするとあなただけが悧巧なのね」
「お前も馬鹿ぢやない」禎三はやはり仰向いた儘多少言葉を和らげた。「松子さんを褒めるやうに强制したのはお前だつたよ。お前、松子さんと喧嘩した事があるかい」
「えゝ、しようと思へばいつだつてするわ」
そして彼等は戸を透して霧の密度の感じられる部屋のなかで、共處にゐないい人のためにゆつたりした心で笑ひ出した。

五

多少誇張して云へば禎三はその娘の運命の小さくない岐點に二度關係してゐると云つてよかつた。その最初の時は禎三と芳子とが結婚の問題をきめようとしてゐる年だつた。それは禎三の暑中休暇がもう五六日で始まらうといふ頃だつた。禎三はぢきに九十日の自由を獲やうとしてゐる寄宿生に特有な、生き生きした、稍々荒々しいほどの氣持でゐた。そこへ事務室への電話で、芳子が相談したい事があるから是非來てくれと云つて寄したのだ。

禎三は忙しいと云つた。休みになつてからにしろと云つた。それから運動場の上の遠いあやしい雲を見て今日は降りさうだと云つた。それは皆從妹から云ひ返された。

これがその娘——下山松子の縁談だつた。縁談は芳子の姉の隆子が持ち込んだものだつた。隆子はその年のはじめに正金銀行に勤めてゐる法學士に嫁いで横濱に移つてゐた。その横濱の新居から從姉は芳子に手紙を寄したのだ。内容を云へば——主人の同僚で××さんといふ法學士があるが、大變出來る人で、あなたの級の下山さんかAさんか何方かをその人にどうかと思ふ。そして××氏の學校時代の成績や家庭や趣味はこれこれと記したうへ、結局芳子の考を知らせてくれと云ふのだつた。

しかし芳子の知つてゐるところではAには嫁ぐ先きが極つてゐた。殘る人は松子だけだつた。だが、まだほんの女學生氣質だつた芳子はこれに當惑した。問題が荷に過ぎた。そして返事を延び延びにさせてゐるうちに、その日隆子が横濱から出て來ると云つて來たのだ。

芳子は時計を見上げて、もう直きに姉さんが來ると云つた。そして禎三に向つて、あなたは下山さんを見た事もある、わたしから噂を聞いてもゐる、あのやうなおつとりした、無邪氣な人の事を「二人のうちどつちでも」などと云はれるとわたしはむつとする、でも萬一その法學士の方がいゝ人で、下山さんも氣に入るやうだつたらわたし一人で裁斷するのは空恐しい事になる、相談に乘つてくれないか、こんな風に芳子は要するにその齢らしい案じ方で氣を揉んでゐた。

禎三と芳子とはその時品川の方角に薄墨色を帶びてむくむくと立ち登つてゐる大きい入道雲の見える、二階の窓先きで話してゐた。そして血氣盛りで、物事を理想化して考へずにゐられない禎三をもやはり不快にしたのは、新婚の家で若い紳士たちに取り卷かれて少し浮き浮きし過ぎてゐる、社交好きな從姉の態度に對する想像だつた。何か取引賣買の匂がし、何か氣の利いた會話に隱れた肉感的なものゝ匂がした。

「姉さんは話の調子で何でも引き受けてしまうんだね」禎三は顏を顰めてそれだけの事を云つた。
「それにしてもあんまり大ざつぱだわ。家にゐる頃はあんなに西洋崇拜だつた癖に」
「新らしい附き合ひが面白くて仕樣がないんだよ。——君は簡單に斷ればいゝぢやないか。そんな事は極めにくいと云つて」

芳子はそのくらゐの助言でも力を得た表情をした。從姉を待つ間、芳子はまぶしい窓際に、照り返しで光る大型の寫眞を持ち出して來た。禎三が下山松子の寫眞を見るのは、つまり靜止してゐる松子を見るのはその時がはじめてだつた。松子は一種ぼんやりした顏立ちの、そしてぼんやりしたところのある美しさを持つた娘だつた。落ち着いた黑眼が大き過ぎて困ると云つた風だつた。その大き過ぎる眼を寫眞屋に向けるのを躊躇してゐる樣子だつた。まだ熟さない肩先きはふつくらした顏立ちのわりに狹くて、その釣合が何となく剽輕だつた。それが稍々固くなつてゐる全體の樣子をおのづから救つてゐた。それは何處か枝の堅苦しい、そのくせ花瓣の色の淡く柔かい、初初しい桃の花を聯想させた。

話題の主人公がこれほどに不知哉力を增してゐやうとは、禎三は思ひもつかなかつた。
「いゝお孃さんだ。——前より大變綺麗になつたね」禎三は寫眞を返しながら、自分から不意に窮屈に云つた。
「ね、さうでせう。わたしさう云うだらうと思つてゐたの」芳子は愛情の眞新らしい人間に特有な寬大さで、妙にはしやいでゐた。「わたしの組では、さうね。——わたしもまあ入れて置くとして——下山さんとHさんと三人がきつとあたと氣が合うわ」

芳子はそれをいかにも明るく、單純に、宣告するやうに云つた。
やがて從姉が階下に來た。從姉は無人の茶の間に待つてゐた。從姉は半年のうちに太つて美しかつた。それは新婚の

滿足から來てゐる美しさの以外のものではなかつた。從姉は入つて行つた二人を一寸揶揄した。若い男たちとの新らしい交際のなかでなかなか學問をした事が明らかだつた。だが禎三と芳子とが松子についてぽつりぽつり不同意をのべ、あの娘さんにはさういふ話は元來向きさうもないのだと主張すると、從姉は反感を籠めた艶のある眼差を二人に等分に向けながら聞き流してゐた。快活で器量よしで勝氣な從姉はあきらかに氣色を害してゐるらしかつた。

夕立が來た。庭木が搖れた。しぶきが緣側に跳ねた。そしてかういふ事にはよく氣のつく芳子が家ぢうの硝子戸や雨戸を締めに立つて行つた。

「下山さんは一種特別な人なんですよ。あの人は一寸ぼんやりしたやうな人なんです。下山さんのいゝところが始めからよく分つてゐる男のところへ行かないと、あの人は何だか可哀想だと思うんですよ」

二人限りの跋の惡さから禎三は稍々上氣した口調で云つた。トタンの庇を烈しく打つ雨の音で双方の話はよく聞きとれなかつた。

從姉は「え？え？」と顏を顰めて聞き返へしてゐた。從つて禎三の云ふ事は、繰り返すために自然と主意が强まつた。從姉は怒つた眼差だけを腹癒せに美しく光らせてゐた。

「どうもそれほどにいゝ方だとは存じませんでした」從姉は故意とそんな風に云つた。

「さうですか」禎三も不愛想に云つて負けてはゐなかつた。

「つまり世間並みにしてはわるかつたのね」

「え？」

禎三もまた聞き逃した。そして彼も聞き返す時に、思はず隆子の顰め顏を眞似てゐた。

「世間並みな事を持ち込んでおわるかつたのね、といふのよ」

「さうです！」

この文學中毒がといふ表情を、從姉は夕立の騷動のなかで閃めかした。

「禎三さんもすつかり尊敬しちやつたものね」

「え？」

隆子は五月蠅い天井へ仰向いて、苛々と聲を高めた。

「あなた、本當は、好きなんぢや、ないの」

「何を云うんです」

禎三も同じ高い聲で應へた。羞みと昂奮のために顏を赤くした。

「ちやんと分つてよ。嫉妬（やきもち）なんだわ」

「姉さん、そんな事を、云うと」

だが禎三はそのやうな言葉を平常の二倍も高い聲で云ふのに氣が差してしまつた。彼は自己解剖から貞節と不貞との不思議な混合を感じた。彼はどもつて、たゞ睨んだ眼差だけを精一杯從姉に据えてゐた。

「そんな事を云うと――」

やはりトタン庇（ひさし）の音のために大きい聲の效能がないので、彼は激しい手振りをした。

隆子はさすがに脅えたやうだつた。それは禎三の口から出る極端な罵りを豫期したゝめか、それとも禎三が釣り込まれて自分でも思ひがけない、誇張した事を云つてしまひはしないかといふ恐怖のためか、何方かよく分らなかつた。現

も角も隆子はその瞬間女らしく禎三に壓倒された。

芳子が入つて來て話はまた外れた。やがて一時の感情を押し鎭めてゐる二人の面前で、庇の雨垂がきらきらと透明に滴つた。

禎三も芳子も隆子も生き返つたやうにガラス戸を開けた。

この雨の最中の爭論は禎三にとつて長い間印象的だつた。

隆子は話を沙汰やめにした。

それから六年過ぎた十一月の或る晩、禎三は松子の兄の兼雄と公園の大木の多い暗い道を歩いてゐた。

禎三が松子と言葉を交すやうになつてから、もう五年經つてゐた。

松子はその時成熟し整つて、何か匂ふものを發散してゐた。松子は新芽のつゞく街路樹の横で大變赤い顏をした。禎三が從姉と云ひ爭つた事を有り難く思つてゐると芳子に傳へた事があるためだつた。

その五年このかた、禎三は忍耐といふ言葉が全然不適當でもない心の狀態にあつた。彼が眼のあたり接して來た松子は想像よりも遙かに柔和で、善良で、純白だつた。あまりに純白なために、控へ目に振舞ふ事柄、口數少なく云ふ事柄が何か間がぬけたり、剽輕だつたりした。しかし控へ目に振舞ふ事柄、口數少なく云ふ事柄はいかにも自身では樂しげだつた。松子は禎三の結婚の小さい祝宴にも列した。そして禎三は絕えず松子に對する引力を或る程度以上につのらせまいと努力した。嚴格な家庭に育つた習慣を自分から利用して、その事に堅い意志を用ゐた。禎三の心が或る風韻を持つ時どきは、松子に出會つた日いちにち何といふ事なく活氣を帶び、溫かな性格からの影響をうけ、詩を持ち、物に感

じ易くなり、陶醉に近いものを追ふ心持になるのだつたが、眼の前の妻が——幼な馴染が、無邪氣に松子のことを好意をもつて話題にのぼせたり、從妹時代の惰勢で彼のその好みを輕くからかつたりする樣子を見ると、同じ自分の意志でもつてその心持を制肘する力を恢復するのだつた。芳子は禎三のその好みをおもに文學的なものから來てゐると信じてゐた。その單純さは一種の力だつた。もしも禎三の松子に出會ふ度數が一年に三四度を超えてゐたならば、そして松子の人柄に少しでも媚態を持つことの出來る分子があつたならば、この意志ももう少し壞れ易かつたかも知れなかつた。だが幸ひにも松子は常に禎三にとつて或る距離を隔てた存在になつてゐた。松子はもとの同窓の友達を平常訪ねて歩くといふやうな質ではなかつた。そして禎三にしてもその五年間は一番嚴しく自分を批判してゐる時期だつた。そのうへ禎三は醫者に注意されてしばらく伊豆に引込んだのだ。

　松子はその間に突然北京へ行つた。北京には松子の姉の良人が對支文化事業の公務で滯在してゐた。禎三はそれを妻へ來た北京風景の繪葉書で知つたのだつた。「今日はこの佛蘭西兵營を拜見にまゐりました」——こんな便りを芳子は禎三に見せて、いかにもあの人らしい迂濶さだと云つて可笑しがつてゐた。だが禎三はその時すぐに、松子が稍々遲れつゝある縁談のために、有望な外交官の集まつてゐるその一種の國際競爭場的都會へ行つたのだと感じた。實際松子は二三年の間に、まるで良人が長く不在してゐる若夫人のやうに地味で物靜かになり變つてゐた。禎三は白い大理石の唐獅子を飾り、楊柳を奧深く植ゑ込んだその異國風な佛蘭西兵營の門のなかへ、どういふ青年外交官がさりげなく松子の養兄夫婦の相伴を引き受けたか、その靴の音を聞きとるやうに無言のまゝ空想したのだつた。渚の音の規則的な入海の家で。

　しかし松子は獨身の儘歸つて來た。

翌年松子はまた、父親が事業のために行つてゐる巴里の旅寓先で健康がすぐれず、細かい世話が要るといふので、突然出發して行つた。例の義兄が國際聯盟に關した公用で瑞西へ出張する折に同行したのだ。これも禎三夫婦の想像では縁談のため——少くも娘に格をつけたいといふ父親の心遣ひのためとしか思はれなかつた。たゞの看病としては富豪の娘でない限りあまりに大ぎやうに過ぎた。

しかし松子はまた結婚の噂もなしに父親について歸つて來た。それ以來半年の間、禎三はまだ松子に出會はなかつたのである。

禎三はこの二度の外遊のあとで、松子が以前の松子と塵ほどの變化もない娘だと知つて、抑へても抑へても湧き起る快活さをどうする事も出來なかつた。彼の心には結果として、松子の獨身をそれほどに強く望んでゐるものがあつた。——いま禎三と秉雄とは十一月のその晩、公園の公共會館にあつた音樂會の歸りだつた。音樂會は佛蘭西の若いピアニストが研究的に連續して開いたもので、その晩が最後の催しにあたつてゐた。そのピアニストは九月のはじめに來て日本の秋一ぱいを演奏しながら過したわけだつた。

禎三はその頃新しい醫者の診斷をうけに時をり上京してはこの音樂會に通ひ、秉雄もある發動機の研究所で働いてゐる多忙のなかを欠かさず聽きに來てゐた。二人とも小遣ひの大部分を音樂、ことにピアノの演奏を聽くためにはたく點で同好の仲間だつた。秉雄は妹から話を聞いてゐて初めから禎三に打ち解けてくれた。秉雄は學生風に見えて篤學者だつた。時をり音樂學校や公共會館で見かけるこの兄妹は、どの會場でも最も控へ目に振舞ふひと組だつた。二人はほとんど禎三を見かける時だけ中休みに席を立ち、禎三も兄妹を見つけた日は、ほかの知りびとの次ぎ次ぎの雜談を外すのだつた。

もう凩が吹いてゐた。二人は外套の襟を立てた。後から來る會場歸りの自動車の頭燈(ヘッドライト)のために二人は何度も路を避けた。伊豆に行つてゐる事が胸の病のためのやうに下山一家に解(と)られたくはなかつたので、禎三は努めて何でもない話をさへ拵らへた。子供らしい虛榮心だとも云へた。すると兼雄は思ひがけずこんな事を云ひ出した。

「ああ。あなたに手紙をあげようと思つてゐたのですが、こんな次手(ついで)で失敬だけれど、申し上げませうかしら」

「何ですか」

「妙な話なのですが。——M・Nといふ人を御存じですか」

「知つてゐます。一つ上の級です」

「その方、どんな人ですか」

「どんなつて」

「性質だの、頭がいゝとか、わるいとか」

禎三はその時、松子がやはり獨身で歸つて來た事實を變にはつきりと、現實的に感じた。しかし同時に、M・Nのやうな男との話にまで家で乘り出すやうでは松子の境遇も明るくはない、あの男の噂ぐらゐ聞き合はせればすぐに知れさうなものだと考へた。M・Nはどう見てもぐうたらな、平凡な徒食者だつた。

「迷惑かも知れませんが」禎三が默つてゐるので兼雄が續いて云ひ足した。「どうせほかの人にも聞くのですから」

「松子さんの緣談ですね」

「さうです」

禎三は低い聲で考へどほりの事を云つた。禎三は動搖してゐて、その男について不必要に寛大な說明をしては、すぐ

後で自分を漠然と不愉快に感じたりした。

「そんな風の人では、この話は駄目ですね」と兼雄がしつかりした口調で云つた。「僕が反對しませう」

風が來て彼等は顏を俯けた。目に見えない、凸凹の多い暗い土の上で、乾いた欅の落葉の舞ふ音を禎三は聞いた。

「これぢやあ、もう冬ですね」暫時して兼雄がまた話しかけた。

「ル・メニルは丁度秋一ぱいかゝつて演奏會をやつたわけですね。第一回の時にはこの邊の欅で百舌が鳴いてゐたから――」

「さうそ。この横で運動會がありましたね。――もう當分音樂會はないでせう。――僕は冬ぢうは妹の下手なやつで我慢するのです。妹はどうせぼやぼやしてゐるから」

禎三は闇のなかで兼雄の愛情を見拔いた。

「松子さんは――」

「親爺のタイプライターを打つてやつたりしてゐます。彼地で覺えたのです」

「お父さんはまだはつきりなさらないんですか」

「さうでもないんですよ。妹が彼地で氣まぐれに秘書になつて見たりしたんでせう。親爺が喜ぶものだから。――柄にないんです。――親類の子のピアノのレッスンをとつたり」

禎三は馴れない東京の初冬の夜氣が身體に浸み透るやうに、變な淋しさの強く浸み込むのを感じた。松子の未婚でゐる事が甚く淋しい、これは彼にとつて初めての經驗だつた。

「奥さんは」

と、途切れがちな話を繼ぐのはやはり紕雄だつた。

「あれこそ、濱邊でぼやぼやしてゐます」

「すつかりお母さんになられたさうですね。——妹がお噂を聞いて來て、感心して居りましたよ」

そして省線の急に明るいプラットフォームで、二人はまたいつお目にかゝるとも云はずに反對の電車に別れた。彼等はいつもさういふ遠慮したところのある親しみを保つてゐた。丁度芳子と松子との間柄のやうに。

そして翌年の夏の輕井澤の話になるのだつた。

六

峠の輕便鐵道で松子を見かけてから三四日といふもの、禎三は船が結局舟つき場に入るやうに、散歩のをりの林や山道から結局町の通りを一度ぬけるやうにして、何となく松子に出會ふ事を期待してゐた。芳子も同樣だつた。三津、東京、この土地と旅の仕度を繰り返しまとめたり解いたりした彼女は若さのわりに出不精だつたが、それでも娘を連れて日用品を買ひに出る際には、やはり松子に似た姿を目ざとく眼で追ふのだつた。町に霧が下りると、墨いろの雨傘の混雜するなかで、同じやうなコートの姿を一層たびたび見誤つた。

九月に入らうとしてゐる町は寂れる前に來るひとしきりの賑やかさを見せてゐた。山國風のくすんだ屋根の下で衣服地、骨董、レース、書籍などの、出張商店の大半が競賣の廣告を軒に貼り、また競賣をすでに始めてもゐた。その店々に絶えず身綺麗な西洋人と東洋人との人だかりがあつた。しかし松子は見當らなかつた。

「松子さん、きつときまりがわるくつて出て來ないのよ」芳子はしまひにそのやうな獨斷を下してゐた。

「何故」

「だつてそのハイカラな方と、もしそんなお話ならばよ。——えゝ、あの人はさういふ人なのよ」

「すつかり極め込んだな。こつちがあんまり町なかへ出かけないからだよ。それに輕井澤と云つても、家が妙に廣く散らばつてゐるからな」

だが禎三にしても一つ名の土地で松子の後ろ姿さへ見かけない事は不審だつた。彼は規則的な運動ごとに、蜘蛛の巣のやうなかたちに擴がつてゐるその平原の知らない小徑に好んで入つて行つた。知らない屋根に好んで近づいた。雜草の茂つた道端に不意にあらはれる知らない門札や、飼犬や、女中らしい婦人に好んで新鮮な注意を向けた。

さういふ禎三が松子のゐる家を見つけたのは偶然にも娘の病氣からだつた。——その午後、八重子は禎三の机の傍で何となしにぐつたりしてゐた。彼女は珍らしく晝寐をせびつた。そして禎三が例のとほりに日の落ちるまで歩いて歸つて來た時には、八重子は妙に見かけのわるい眠起きの顏で、八度台の熱を出してゐた。その朝からの樣子で、あきらかに腸の疾患だつた。芳子は引越しごとに持つて歩いてゐる、用意の子供向きの甘いひまし油を飲ませた。だがそれは純粋のものよりも多少成分が淡いらしく、夜の九時を過ぎても效き目がなかつた。さうかうしてゐるうちに熱は九度にのぼつた。

禎三は純粋なひまし油を貰ひに、夕方帽子をぬいで樂しみながら歸つて來たばかりの同じ道を、東京から出張してゐる藥局——冷たい飲みもの店兼帶の藥局へ出かけて行つた。月がその扉に貼つた、夕刻五時かぎりと斷つた名札を照してゐた。禎三はもう椅子を白塗りの卓の上に殺風景に積みならべ、ソーダ水用のさまざまな色のシロップの大瓶が變に薄汚く見える時間外のひつそりした店に入つて、ひまし油、湯たんぽ、洗腸器、その他の品々を、二階から降りて來

た薬剤師に相談しては、両手に持ちきれるだけの包みにして貰つた。月あかりの青白い林のなかの一軒家の窓際で、十六七の娘らしい影法師が、しきりにピアノの愛らしい練習曲を間違へるそばから繰り返してゐた

禎三夫婦はぼうつと紅みのある顔で眠つてゐる娘を起した。娘が新らしいひまし油の味を厭がつて泣きわめくのを禎三は押へつけ、ほとんど狂暴な心持で無理に飲ませた。この薬の效き目は明け方近くにあつた。それは宵のまゝの薄黄ろい電燈を消すにも、戸を新らしく開け放すにも、半端な陰氣な時間だつた。

「これできつと熱が下つてよ」

その一二年自然と看病馴れのした芳子が、便器にかゝつてゐる娘を注意深く後ろから抱きながら、低く、怒つたやうに云つた。その妻の言葉から禎三は一時に安堵を感じて、床へ行くなり熟睡してしまつた。

彼は妻に起された。陽が疊敷きの半分に射してゐるのを見て彼は稍々狼狽した。娘は一見さばさばと安眠してゐるやうに見えた。實際熱は夜中よりは下つてゐた。だが彼の前に立つた芳子の顔つきは異様だつた。

「あなた」と芳子が靜かに云つた。「夜なかに出たものをいま念のために調べたら、どうもよくないのよ」

禎三は廊下に首を出して妻の示す便器のなかを凝視した。ピンセットの指すところに、新らしい鮮かな油繪具の微かなはねが二三つ散つてゐるやうな印象を彼は受けた。血便だつた。

「大病だといけない。しつかり、しませうね」

「うむ。しつかりしよう」

と禎三は眼を外らせて、妻の言葉どほりを機械的に云ひ返した。

薬剤師の教へてくれた町はづれの醫者が來た。だが町はづれの醫者の診斷も手當も、禎三が考へてさへ曖昧なものだ

つた。それで、彼は昨日から多少延び〴〵にしてゐたかたちだつたが、その醫者を送つて歸る車夫に、峠町の梶田へ手紙を渡すことを頼んだ。この場合彼には醫學者の家族で、それに土地にもすでに見知り合ひの出來てゐる梶田が唯一の頼りになるのだつた。禎三は看護婦のことゝ、そして出來る事ならば東京へ確かな小兒科醫を依頼して貰ひたいことゝを書いたのだ。

四時近くに梶田が活氣づいて――さう、自分がひき緊つてゐる禎三は窓硝子越しに感じたのだが――入つて來た。三人は、芳子をも入れて對ひあふと、さあこれから取りかゝつた仕事を續けるのだといふやうな様子を見せた。

「看護婦のことは、いま家へ電報をうつて置きましたよ」

「本當にありがたうございます。本當に」芳子はあやうく涙をこぼしかけた。

「さあ、お前は八重子に附いてゐてやれ」

氣の立つてゐる禎三は、この場合すべき事だけをぐんぐんと事務的にやつてのけたいといふ苛立たしさを感じたのだつた。芳子は辯解するやうに梶田へ泣き笑ひに似た顏を見せながら、二階に上つて行つた。

「それから醫者ですがね。小兒科ぢやないけれども、僕の父や兄と同じ研究所にゐた人で、沓掛寄りのところに來てゐる人がある」

「さうか――」

妻を叱つたばかりの禎三は露骨に明るい顏をした。

「君は顏を一寸知つてる筈だ」

「何ていふ人だね」

「高木つて云つて」

「高木？」

「えゝ、高木つて云つて、そら、醫科のボートが一時連勝した時分に漕いでゐた――」

それは彼等の學校での熟語で、つまり舊の醫科大學の端艇部の選手といふ意味だつた。――だが禎三には思ひ出せなかつた。

「顏を見ればたぶん分りますよ。三番を漕いで、僕たちは凄い奴だと思つてゐた。――僕もこゝで腸をこはしてね、その人に藥を貰つたんですよ。こゝは水がよくないし、それに明け方が冷えるから。――八重子さんのも、惡いものを喰べてゐないとすれば水ぢやないかな。兎に角御案內しますから。――その人の所へです。――すぐ出かけませんか」

禎三は二階に向つて聲をかけ、上着を待たずに靴を履いた。

だが芳子が急いで階段を下りて來る時に、梶田は禎三に靴箆を貸しながら持ち前の氣のないやうな調子で云つた。

「芳子さんと同じ學校の人がその前隣りに來てゐる。姉さんや甥と」

七

梶田は西日の橙色にあたつてゐる、自然に枯れた太い松の木を二本立てた、その無雜作な門を敎へた。禎三が運動のをりに此處を素通りしたのも無理はなかつた。彼はそれを何處かの物持ちの別莊の表門だとばかり考へてゐた。だがそれは烏潟といふこの邊の地主の所有地で、そこに四五軒塊つてゐる借家への共通の入口を體裁上つくつたまでの事だつた。門の內をうねつた細い道を挾んで、灌木と禎三の丈より高く茂つた萩とが奧の家ならびを隱してゐた。

「すぐそこですよ」

梶田が輕石まじりの土をザクリザクリ踏みながら、無口になつてゐる禎三にその灌木と薄との曲り角を顎で示した。

實際そこには二つの家の脊面があつた。井戸端では並んだ青い空瓶が靜かに反射してゐた。勝手口の煙だしは透明な熱氣をゆるがせてゐた。育たないコスモスが咲き亂れてゐた。玄關には幾つかの小さい靴と幾つかの大人の下駄とが塊つてゐた。そして前庭に——と云つても野原に低い土垣をめぐらしたまでのものらしかつたが——人の氣配が感じられた。

其處に松子が立つて、日に晒した男の子の雨外套を取り込まうとしてゐた。

一瞬間松子は複雜な激しい表情をした。

そして松子は顏を赤らめた。五年前のやうに。松子はその娘つぽい、構はない浴衣のことを困惑してゐた。

「まあ——」

と松子は云つたきりだつた。洋行前の大きい、軟かな眼が禎三に据ゑられてゐた。

松子はもう一度下手に云ひ替へた。

「まあ、森島さんが輕井澤に——」

松子の姉の幹子、その五月に北京から歸つて産をし、その儘ひと夏を日本で靜養してゐる幹子が茶の間らしい角の部屋から緣側に出て來た。幹子は妹の分を奪つてもう少し澤山云つた。

「まあ、森島さんでいらつしやいましたか。いつこちらへ——」

幹子は妹の顏立ちをもつと晴れ晴れさせ、もつと或る美しさを自覺させたやうな婦人だつた。彼女は案内役の梶田へ振り向いた。

「學校で何年ぐらゐお逢ひでしたの。——さうね。大ぶんお逢ひね。森島さんはもうお父さんでいらつしやるのですもの」

松子が洗つた眞白い足袋をはき替へて來た。松子は前に聞けなかつた事——芳子のことをしきりと訊ねた。

「この間、遠くからお見かけしました」

緣先で茶を飮み、帽子を弄つてゐた禎三が云つた。

「どちらでゝございましたか」

「鶴溜りです。輕便に乘つていらつしやるところを、僕が氣が付くのが遲かつたものだから。——それ以來妻と町で氣をつけて居たのですけれども」

「ああ」幹子が、それを云はれて稍々困つてゐる松子へ振り向いて笑ひ出した。「妹は相變らずでございます。わたし達、淺間山の「押し出し」つていふ——溶岩の澤山あるところ——あすこへ參りましたんですけれど、妹はうつかりして轉んでしまつて。氣をつけて降りるやうに云はれてゐる傍からもう轉んだりして。本當に見つともなくつて。(松子は傍で停めもせずに笑つてゐた)——あれからずつと家に居りましたの。ガーゼを當てゝゐるものですから片方はわたくしの足袋をはいて——でもわたくしはよく町へ出ましたが」

沓掛の方角からの西日がいかにも直接にといふ感じでそこに居いてゐた。そして影が長かつた。禎三は、轉んで跛足をひいてゐるといふ稍々滑稽な松子にしろ、下山の家で茶をねぎらはれ、緣側に腰かけて日を浴びてゐるといふ事が何か不思議だつた。

「いえ僕たちも町へは出不精なのです」と彼が云つた。「それに妻が出る時にはいちいち子供を連れなければならない

し」

「お嬢さん、お四つでいらつしやいましたね」

と松子が話題をもとめて尋ねた。禎三は病氣のことを云ひ出さうとした。

「お變りいらつしやいませんの」

「ところがそのお嬢さんが」と煙草を喫んでゐた梶田が、改まつた會話を切り上げる役目を心得たやうに、口を入れた。「昨日から寢てしまつたんです」

「え？」松子が顏を上げ、幹子が聞き返した。

「それでね、僕が高木さんに頼んで見ようと思つて、來たんです」

禎三の豫期したとほりそこでまた會話が混亂した。二人の子の母親である幹子は要領よく八重子の容態を訊ねると、即座に松子に、下駄を突かけて高木へ使させた。穩やかな口調を替へないで手取り早く事を運ぶその幹子のために、禎三は椽先で輕々した親しみのある氣持に惹き込まれた。松子の聲が薄の深い隣り家で聞えてゐる。禎三は彼よりも前夜ずつと眠る時間の少なかつた妻を家に殘して、その瞬間、子供の病氣から起るさま〴〵な物々しさを喜ぶ氣持に打ち克つことが出來なかつた。

運動家型の高木は後ろに禎三を立たせ、梶田より一歩先きに行くことにして沓掛から輕井澤に通じてゐる縣道を、東の碓氷峠の方向へ自轉車を走らせた。此處もまた兩側を高く薄に覆はれた、白い、洗つたやうな、平らな道だつた。高木と禎三の塊つた影はほとんど木立の影のやうに長かつたが、それはもう今しがたのやうに濃いくつきりした色ではなか

つた。二人の正面に碓氷峠、愛宕、一文字、富士見などの、町を包む山々が頂だけを夕映えさせて連なつてゐた。梶田がゐないと、高木との話は途切れがちだつた。

「君の奥さんは松子さんの同窓だつて」

「さうです」

高木は鈴を鳴らして道の大きい迂回に沿つた。それは道といふよりは一二寸の深さの流れにして目高を泳がせたいくらゐだつた。

「一體、あなたのところはどの邊になるのかなあ」

「あすこですね」

禎三は愛宕の右横、獸の脊のやうに緩くうねつてゐる細長い一文字山の麓の、青い煙が靄に溶けて靡いてゐる低いあたりを指した。そこはもう愛宕の投げる影のなかに入つてゐた。彼は煙のありかで家を敎へるなどといふ事は初めてだと考へた。

「四つだと云ひましたね、お孃さんは」

やはり太つた脊を見せた儘高木がまた唐突に云つた。

「さうです」

禎三は四つといふ年齢が何か惡いのではないかと思つて、身體の中心をとりながら答を待つた。だが高木は「大正×年の入學の人が、四つの娘さんのおやぢになつたかね」と云つたきりだつた。

高木は先刻から下山の隣人としての伸んびりした話と、醫者としての事務的な話とを巧みに區別してゐた。高木が最

初松子の後から輕石まじりの庭先に入つて來た時、禎三はその丸い肩先を一眼見て峠の霧の日のことを想ひ出し、幹子が松子を使に向けたのはさういふ理由からだつたかと誤解したのだつた。だが高木の後から父親によく似た達者な男の子が從いて來た。禎三は高木をどうも見覺えてゐなかつた。高木は學生時代には骨格がもつと目立つ方で、結婚してから太つたのだといふ梶田の話だつた。實際さういふ體質らしかつた。――その高木は禎三に記憶の殘つてゐる煙管を銜へながら、醫者特有の不得要領な返答で、八重子の容體がいゝのか惡いのか、大體の病名さへ輕々しくは云はなかつた。幹子はさういふ高木の態度をよく呑み込んでゐて、禎三を心配させるやうな方向には話を向けないやうにしてゐた。だが松子は落ちつかずに、禎三の前でもう少しはつきりした意見を云はせようと無駄に試みてゐた。松子は高木の雜談の妙な中途でそれを試みたりした。

「四つといふ歳はかういふ病氣にはどうなんでせう」

不安を堪らえ得ずに、禎三はいま訊ねて見た。

「うむ。五つ六つ、その頃は危險ですがね。早くつてよかつたとも云へるね」高木の表情が、後ろの彼には見てとれないのだつた。「しかし熱も脈もさう惡い行き方ではないのだから。――長くかゝるかも知れないが、命にどうといふ事は先づ、ありませんね」

幌自働車が後ろに近づいて、高木は振り返りながら薄とすれすれの道端にハンドルを向けた。また話が途切れた。

「松子さんの挫いた足は大したことはないのですか」

しばらくして今度は禎三が云つた。稍々風を切つて行く自轉車の上で、正面の山や霧や夕映えが彼には妙に近しいものに思はれた。

――紐を長くのばした雷燈の下での高木の診斷は、「疫痢といふほどではない」といふ事だつた。いきなり疫痢の名を持ち出されて夫婦はぎくりとした。ふたりはその程度に迂濶だつた。少くも禎三は、疫痢などといふものはもつと特別な、目に見えて愚かな不衞生から來るものとばかり考へてゐた。その疫痢にごく近い病菌が――生存慾の猛烈な無數の微生物が、眼の前の惱げな娘を襲つてゐるのだつた。

禎三は娘のうつらうつらしてゐる事が切りに氣懸りになつた。

高木は、小娘のやうに脊なかを丸くして彼を視つめ、本能的に語尾を一つ一つ强めて手當のことを聞き返してゐる芳子に、はきはきと指圖してゐた。

「もう一度ひまし油をかけて。出るものが、どうしてどうして、まだ少ない。――濕布の上の懷爐は下の布が焦げるくらゐでないと効きませんよ。三つお並べなさい。かうつと。――この邊が一番肝心だと思つて。（高木は自分の左下腹部の坐骨に近いあたりを教へた。）――それから每日かまはず洗腸して。四百グラムから五百グラムぐらゐ。――洗腸は反對する醫者が多いが、わたしは必らずいゝと思つてゐます。（高木も頭腦のはたらく快さから活氣を帶びて來たのだ。）――いゝや！疫痢ならもう今ごろは夙うにいけませんよ。――看護婦は今夜來るのですな」

八

七十二時間經つて娘はどうやら危險期を通り越した。熱と脈と、血便の分量と、しきゝりなしに來る便意の度數と、さういふものがすべて或る危險圏に一步入らずにすんだのだ。高木はこれが來年か再來年の出來事だつたら、そして偶

然海岸で達者に育つてゐなかつたらと、後で打ち明けてゐた。天佑だと思ひたまへと云つた。

その次に來たものは絶食の後の動物的な饑だつた。それは緊張らしい慾望だつた。それはあの七十二時間の間に八重子の腸部の末端までを侵さうとしてゐた病菌の生存慾よりも弱いとは云へなかつた。八重子は十五分おきぐらゐに暴れて泣きわめいた。その時は全く野生の小動物だつた。東京から來た年若な看護婦なぞでは、その猛烈な小動物は手に負へなかつた。八重子は一匙の赤酒レモナーデや番茶を嚙む音をたてゝ、直接に胃に投り込むやうにして呑んだ。カチリといふ歯の響きがするのだつた。娘の傍にゐる間は繪本を片端から讀んで聞かせ、クレオンで繪を描いて見せ、叱り、だまし、そして終ひには疲れて同じ部屋の疊に仰向けになつてしまふ禎三も、休息のために逃れるやうにして前の林のなかを歩きまはる時には、そのすさまじい食慾に感嘆するのだつた。それは三度の食事ごとに藥を飮んでゐた、つい先頃までの彼の貧しい食慾とは比べものにもならなかつた。ああ、本當にえらいものだと、彼は美德に感歎するやうに感歎した。一歩家に入れば娘のその同じ本能のために困憊するのに。

それから更に五六日。

二階の部屋では薄い覆ひをかけた電燈の下で、芳子が娘に低い聲でお伽噺を讀み聞かせてゐた。八重子が空腹を忘れるのはたゞ噺に頭を向けてゐる間だけだつた。階下の部屋では禎三が妻のその水音のやうに單調な聲を耳にしながら、椅子を二つ寄せて足を投げ出してゐる梶田と置電燈の傍で話し込んでゐた。梶田は八重子の病氣が峠を越すといふ間、一時泊り込んでゐてくれたのだ。それから彼は消毒はしたが、子供の多い講師の家を遠慮して、同じ英國人で大使館付陸軍大尉の寓居に移つてゐた。

三人は、梶田と禎三とと芳子とは今しがた娘のうたゝ寝の間に有り合せのもので食事を濟ませたのだつた。梶田は高木の家からの歸りだつた。高木はその日沓掛のホテルに來てゐる先輩の博士に招かれ、八重子の朝からの容體書きを梶田が留守宅に屆けてくれたのだ。――菜はもう冷えてゐた。だが三人は忙しいビルディングに勤めてゐる同僚のやうに、甘味さうにそれを呑み込んだ。食卓の端には晝間食べるのを忘れて、高木の夫人が芳子へ見舞にくれた餅菓子が、そつくり鉢のなかに冷たく塊つてゐた。

「さうそ」寢不足から二重瞼になつてゐる芳子が午飯と同じ燒魚の味を十分に樂しんだ後で云つた。「梶田さんにおすゝめするの忘れましたのね」

「少し固くなつてゐる」梶田が餅の一つを指で押してゐた。「これあまるで學校のおやつですね」

「あゝ學校のおやつだ」

禎三は笑つて答へた。寄宿生だつた頃に運動競技を中途でやめる氣がしなくて、間食時間の喇叭を聞き流してしまふと、晩食の卓にその餅菓子がいつも稍々固くなつて殘つてゐるのだつた。

「さうだ。これあ味も丁度學校のおやつだ」梶田がその餅を食べ、煙草の烟を甘味さうに電燈に打つけながら、寛いで云つた。その一兩日稍々肩を下ろしてゐる禎三夫婦の樣子が、梶田にも影響してゐたのだ。「貰つておいて蔑してはわるいかな。――學校ぢやあよく食事の時間に遲れて行つて、人のゐなくなつた食堂でこつそり煙草を吸つたものだつたな。だから今でもね芳子さん、僕にはかうやつて煙草を掌で包むやうな癖が殘つてゐるんですよ」

「まあ」

芳子は早く看護婦の食事と入れ替つてやらうといふ、その方に氣をとられながら返事をした。

「君は煙草ぢやあ罰は喰はなかつたかね。おい、舍監が食堂に入つて來た時の眞似をちよつとして見たまへ」

梶田は芳子の氣をひき立たせてやらうといふ風に、扉口へ驚いて振り向く表情を眞似ながら、煙草を持つた手を大袈裟に後ろに隱して見せた。芳子は卓掛を丸めながら大きく笑つた。久しぶりの三人の笑ひ聲だつた。――いま梶田は汽車旅行の人がするやうに狹い籐椅子のうへに上手に橫になりながら、引き續いて寄宿舍の話をぽつりぽつり喋つてゐた。梶田が平常無口で、不得要領で、そのくせ激すると極端になる性質だつたゝめに、同級の生徒が鐵拳制裁の相談をしてゐるのを、年上の禎三が宥めた事があつた。禎三はその時たゞ、梶田の兄に對する心持からやつたのだつた。そして梶田の平常の無口の裏に何か親しみのあるものを發見したのはその後の事だつた。それに禎三は、傍で付き合ひにくい亂暴者とされてゐた下級生の厚意を自分にだけ向けさせた事に、その齡頃らしい得意を感じてもゐた。彼は、梶田が一見聯絡のないやうに突然カツとするのは、平常相手の話題を細かい心持で尊重し過ぎてゐるからだと解つてゐた。その傾向は彼自身にも多少あつたのだ。――

家の周圍は一面に蟲の聲だつた。その蟲は芳子の音讀のつゞいてゐる天井の方にも、床の下にも少しばかり啼いてゐた。天井の方は例の古スリツパアの捨てゝある物置きだつた。床の下は――恐らく黴くさい、靜かな乾いた土のなかに違ひなかつた。「秋の寢床は土に近い」――かういふ知人の小說家の言葉を禎三は默つて想ひ出してゐた。實際禎三の籐椅子も梶田の籐椅子も、その時大變土に近かつた。

車夫が表の戶をたゝいた。禎三が開けると細かい粉の散つてゐる月あかりのなかで、その車夫は手紙を持つてゐた。

「下山さんからです」

「何だらう今頃」

「高木さんの言傳ぢやないかな」と梶田も身體を起してゐた。「松子さんが晝間取り次いで、そんな事を云つてゐた」

禎三は封筒の上に、幼いところのある特徴を持つた字で芳子を宛名にしてあるのを讀みながら二階へ上つて行つた。

その幼い感じの字は芳子へ北京から來た。萬里長城の下車驛から來た。新嘉坡から來た。スエズから、マルセイユから、ニースから、リオンから來た。日本にゐる頃よりも遙かに澤山來た。禎三はよく覺えてゐる。それは禎三が病氣になつて彼の仕事をしばらく中止しなければならなくなつた時に、一番正直に氣を揉んで寄した便りの一つだつた。ひいては、親戚の大半にあまり重んぜられてゐない禎三一家の、それ相當の値うちを素朴に認めてゐてくれる便りだつた。そして退屈な漁村の家で芳子が心から動かされたのは實にその點だつた。――

「八重ちやん、あと十四分よ。十四分。――この針がこゝまで行つたらきつと重湯あげてよ。ね、もうちつとの辛抱」

間歇的に來る娘の不機嫌を宥める聲が階段まで聞えてゐた。看護婦が重湯をとりに降りてゐるのだ。芳子は娘の枕元の小さいちやぶ台の上で、避暑地土産と云つた出來の、色どりの濃い獨樂(こま)を澤山一度に忙しく廻して見せてゐた。

「赤が勝つか。青が勝つか。――今の、郵便だつたの」

「松子さんからだ」

「また?」芳子は額を擧げ、例の媚びるとも調弄(からか)ふともつかない頬笑みを浮べながら、「八重ちやんの病氣以來、松子さんとはすつかり二三年分の文通ね。――いかゞ」

と云つた。だがそんな風に浮き浮きと云ふのは、彼女自身にとつて松子が同じ土地にゐる事實が、氣のつく以上に力になつてゐるためだつた。

「おい、車夫が待つてゐるんだ。早く讀むといゝ」

だがペン書の細かい字を追つて行くうちに、芳子は不意に明るい彈みに滿ちた娘つぽい笑顏に變つた。廻し手に氣移りのされた獨樂は一つ一つくるくるとよろけて止つた。

「八重ちやん、好い事」と芳子は蹲んでその笑顏を娘の枕に近寄せた。そして彼女は故意と内密話のかたちにして云うのだつた。「明日からね。——聞いてらつしやいよ。お食事の時にビスケットが二つとね、それからスープがいゝんですつて」

「ビスケットとスープ！」

娘の落ち窪んだ眼は一時に光つた。彼女は四歳の子供にそぐはない、衰弱のために出來た皺を額に寄せ、眼を一心に大きく擴げ、ほとんど泣き出しさうな笑顏で禎三に知らせた。

「ねえ、ビスケットとスープだつて。ビスケット二つもだつて」

「えゝさうよ。さうよ。それからね、まだあるのよ、八重ちやん」芳子も釣り込まれて震へる聲を高めてゐた。「明後日からスープやね、薄いお粥をね、下山さんの小母さんが此處へ持つて來て下さるつて。いゝでせう。嬉しいでせう。下山さんて、ほら、この間玩具の簞笥を屆けて下さつた小母さまが」

「車夫、歸してもいゝんですか」

梶田が何故かむつつりした顏つきで入つて來た。

「ちよつと今。——走り書きでお返事書きますから」

「ねえ、ねえ。あしたからビスケット二枚もですつて」八重子は梶田にも泣きかけた笑顏を向けた。「それからスープもですつて」

「いゝのねえ、八重子さん、僕も貰ひたいなあ」

梶田は柄になく愛想を云つてゐた。彼は禎三へも振り向いて繰り返した。

「ほんたうによかつたなあ」

「――いろいろと御不自由のうへ、芳子様大變お疲れのやうに高木様から伺ひましたので、わたくしちよいちよいお手傳ひにあがります。高木様御夫妻先ほどお歸り遊ばして、お粥もこの分ならば一兩日うちによろしいとの事で、ほんとにほんとにわたくしからもお喜び申しあげます。それからお粥を普段のよりも薄く焚きます程度、わたくし高木様の仰ることを覺えまして、明後日二重鍋を町で求めて上ります。――明日のビスケットは不二屋支店にてニレツトといふ小型の、輕く出來てゐるのをお屆け致します。――」

これが禎三の立ち讀みした手紙だつた。

「八重子、ちきにお前、お粥だぞ。いゝね」

禎三は梶田の前で或る感動を強いて押へながら云ひかけた。

「八重ちやん」と鉛筆を走らせながらちやぶ臺の上に低く蹈んだ芳子が、縋つたやうな聲を出した。「その粥をね、下山さんの小母さまが、煮々して下さるんだつて。スープもとつて下さるんだつて」

「素的ですよ。八重子さん。固つたものが許されるやうぢや、もう大丈夫だ」

「さうだ、もう安心だよ」禎三は自分の感情を持て餘して、やはり顏を顰めた儘、八重子に熱心に云ひ聽かせた。「ねえ、この間話したらう。お粥が食べられるやうになるとすぐに太るつてね。――不思議なものだよ、君。牛乳などではそこまで力にならないんだ。(と彼はもどかしくなつて梶田にも同時に話しかけた。)――それがお粥だと八重子、すぐに

太るよ」

「こんなに？」八重子は仰向いた儘はしやいで兩手を擴げて見せた。「梶田さんより？」

「あゝ、僕より」そして梶田まで不意に、可笑しなほどの昂奮にとらはれた口調で云つた。「下山さん、いゝ小母さんだなあ！」

「うむ。いゝ小母さんだ」禎三は無意味に手近かの眞紅な獨樂をとつて強く廻した。急に停めてはまた強く廻した。「いい小母さんだね」

彼は梶田の前で一種の幼い感動をだんだん現はしてしまつた。獨樂はしきりに騒いでゐる娘の前で、無邪氣に勢一ぱい廻つてゐた。獨樂の全力で廻つてゐる事は善い事か。惡い事か。善い以外か、惡い以外か。――禎三が自分の様子を梶田に對して工合わるく感じたのは一二分經つてからだつた。

（次號完結）



牡丹

中條百合子

人間の哀れさが、漠然とした感慨となつて石川の胸に浮ぶやうになつた。

石川は元來若い時分は亂暴な生活をした男であつた。南洋の無人島で密獵をして居た事もある。××町に住むやうに成つて、いろ／＼な暮しを見きゝする間に、偶然なことから或家族、と云つても極く特別な事情の一家と知り合つた。

××町といふのは、東京の西北端から、更に一里半ばかり田舍に引込んだ住宅地の一つであつた。××町の入口を貫いて、或郊外電車が古くから通じて居た。終點が河で、夏は有名な遊園地であつた。或信託會社と、專門家の間ではネゲテイブな意味で名を知られて居るその電氣會社とが共同で計畫して開いた住宅地が××町であつた。自然の起伏を利用した規則正しい區劃、東と西の大通りを縁どる並木、自働車路など、比較的落付いた趣があつたので、知名な俳優や物持ちが別宅などを建てた。石川は、そのやうにして段々××町が開けて行く草分から町の入口——よく小さい別莊地の入り口に見るやうに、半町ばかりの間かたまつて八百屋、荒物屋、

食糧品屋から下駄屋まで軒を並べた場所に住んだ。往來の右手の小高いところに木造のコロニアル風の洋館があつて、それが永いこと貸家になつて居る。其邊からもう町の大通りである櫻並木が始つて居た。天氣の好い冬の日など霞んだやうに遠方まで左右から枝をさし交して居る並木の下に、赤い小旗などごちや／＼賑やかな店つき、さてはその表の硝子戸に貸家札を貼られた洋館などを見渡すと、どうやら都離れて氣が輕やかになり、本當の別莊地へでも來たやうな氣がしない事もない。

石川は、無人島でアメリカへ賣り込む鳥の羽毛を叩き落すのをやめてから、或請負師の下に使はれるやうになつた。その親方は手廣く商賣をし、信託會社にも關係があつた。今××町の中にある凝つた建築の邸宅で、その請負師の仕事が大分ある。あらかた建つだけの家が建ち、信託會社も請負師も住宅地から手を引いた。後に石川だけ遺つた。先の親方時代からの緣故で、大工、植木などの職人は勿論、井戸替、溝掃除、細々した人夫の需要も石川一手に注文が集つた。纒つた建築が年に幾つかある間合を、暇すぎることもなく十五年近く住みついて居るのであつた。

五年前、櫻が咲きかける時分石川は豫期しない建築を一つ請負ふことになつた。十五日の休みで、彼は家に居た。裏のポンプのところで、下駄屋の犬と巫山戲て居た。すると、女房が遽しく水口から覗いて

「ちよいと！お前さん」

と變に熱心なおいで／＼をした。石川は、猶尻尾を振つて彼の圍りを跳び廻る犬を

「こらこら、さあもう行つた、行つた」

とあしらひ乍ら、何氣なく表の土間に入つた。上り端の座布團に男女連れがかけて居た。入つて行つた石川の方に振り向いた女の容貌や服裝が、極だつて垢ぬけて贅澤に見えた。

「いらつしやいまし」
せきが土間に立つたまゝ
「事務所からきいておいでなすつたんですつてさ」
と云つた。インパネスを着た年配の紳士は
「いそがしいところを御邪魔だらうが、一寸相談して見たい事があつたのでね」
と云つた。石川は始めその男女を、世話されて居る者、して居る者といふ風な關係に思つた。××町の家の女主でさういふのがよくあるのであつた。ところが話して居るうちに、女の方が今度新たな家を建てようとする人で、男はたゞ後見役の位置に居ることが分つた。四十がらみのその女は、
「ずつと下町に居るから當分淋しくつて困るかも知れないと思ひますけれど、私も倅も體が丈夫な方ぢやないから、一つ思ひ切つて閑靜なとこへ引込んで香氣に暮さうと思ひましてね」
などゝ、靜かなうちに齒切れよく話した。
「若し御願ひするとなりやこの方に萬事御相談願ふことになるんですよ。私なんぞ繪圖を見せてお貰ひしたつて、目の前に出來上つてからでなけりや、どつち向いて入る譯なんだか見當がつかない有樣なんですもの」
何となし鷹揚な女であつた。石川は間數や、大體の好みなどを訊いて帳面につけてから、連立つて土地を見に行つた。大通りをずつと奥まつてから右に入つた空地であつた。石川は思はず
「あゝ此方ですか」
と、雜草を掻き分けて踏み込み乍ら云つた。

「此處はいゝ地面です。あの通り北がずつと松林で圍まれて、斯う南が開いて居ますから。――五百坪ですか」

「そうでしたつけね。…………去年來た時から見ると其邊の樹も太くなつたやうですね」

「同じ信託地の內でも、彼方側は低いし、時代のついた木なんぞ一本もありませんから、さて建てるとなると、庭が大變です」

女は都會人らしく氣味惡さうに空地の入り口に袂を搔き合はせて佇んで居た。裏の松林から時々松籟が聞こへた。雜草の蔭に濃い紫菫が咲いて居た。

見積りも面倒なく濟んで、地形にとりかゝつた。石川の經驗ではすらりと進み過ぎた位の仕事であつた。實を云へば、見積書をもつて行つて手金を受取る迄、石川は大して當にして居なかつた。其程話しの切り出された抑々から何か皆の心持が單純であつた。――永年の宿望を遂げて、貯蓄した金でさて一軒建てようといふ人々のやうに、騙されやしまいかと心配したり一圓でも廉くていゝものを使ひたいとか、こせついて癪に觸るやうなさもしいところが、飯田の奥さんにはちつともなかつた。――が、後見の手塚準之助が、あのひと、あのひとと呼ぶ彼女は、世間で云ふまゝの內容に於て奥さんなのであらうか？息子を持つた中年の女を他に呼びようないので便宜上の呼び名であるのだらうか。せきは、一言の下に

「玄人さお前さん、一目見たつて分るぢやないか」

と斷定した。石川は、南洋の無人島で終日遙かな水平線ばかりを見詰めて居た時から、上瞼が少し重たく眼尻のところで垂れ下つて居る船乘らしい眼付になつた。その幅廣な視線で、元氣な石女の丸まつちい女房を見下し乍ら

「それは分つて居るよ………だがね」

「だがね、どうなのさ……」
「……ふむ―」
「いやだよこの人つたら……」
女房は、やがて
「でもいゝ裝をしてなすつたねえ」
と云つた。
「何でもなささうに彼那指環はめて居られる身分になりたいねえ」

工事が進むにつれ、原宿に住んで居る手塚が一日置き位に見廻りに來た。一緒に幸雄といふ息子も來るやうになつた。廿三四の母親似の若旦那であつた。角帽をかぶつて居た。
「若旦那――大學ですか」
「あゝ」
「本鄕ですか」
「うん」
「御卒業はいつです」
「出して呉れりやあ來年さ」
面長で顏の色など、青年にしては白すぎた。いかにも母親の注意が細かに行き屆いた好い服裝をし、口數の尠い男だ。

が、普請は面白いと見え、土曜日の午後からふらりと來て夕方まで居て行くことなどあつた。母親もさうだが、この大學生にも何處か內氣に人懷こいやうな處があつた。草を拉いで積み重ねた材木に腰かけ、職人達に蕎麥を振舞ひ、自分も食べた。

「不味い蕎麥だなあ」

「そりや市內からいらしつちや蕎麥や鮨は駄目です」

「此邢のつきやないのかい」

「何にしろ一軒ぎりですからね」

「ふうむ――いゝ店出したつて立ち行かないんだらうね」

「顧客の數がきまつてますからね――若旦那、御卒業なすつたら此方から御勤めですか」

幸雄は、植えへる松の根を、職人が多勢かゝつて締めて居るのを見乍ら

「勤めなんかいやだねえ」

と答へた。

「何です？法律ですか御專門は」

「經濟だよ」

「――實業家ですね」

「…………………」

幸雄は、母親のことを石川に話すに、決してお母さんとか、其位の年頃の若者らしくおふくろなどと云はなかつた。

新橋、新橋と云つた。

「新橋も今年の夏は此方で暮らしたいらしいよ、間に合ふだらうかね」

現在新橋に住んで居るのでさう呼ぶのかと石川は思つた。すると或時、原宿の手塚が

「あの人も、元は新橋で鳴らしたものさ――太郎つて云つてね」

と云つた。幸雄は或身分の高い人との間に生れた一人息子で、相手の死後あり餘る手當で生活して居るのであつた。

「この家だつて、幸雄がいづれ一家を構える場合を考へて建てる氣になつた譯さ。小さい時引き離されて居たりしたから幸雄の方ぢや大した氣持もあるまいが、生んだものにして見れば親一人子一人の境涯だからね」

成程さういふ心持であつたかと、石川は二間續の離室に好意を感じ乍ら闘面を見なほした。

三日經つと立前の晩であつた。

夕飯を仕舞つて一服して居ると、

「今晩は」

と若い女の聲がした。

「どなた」

女房が、流しの前から應へた。

「石川さんはゐらつしやいませうか」

「えゝ居りますが――どちらさんからです」

手を拭き〳〵出て見ると、それは女中を連れた飯田の奥さんであつた。

「おやまあ失禮いたしました、さあさあどうぞ」

その聲に石川も顏を出した。

「や、大變おそく御出かけでしたな、どちらからか御歸りですか」

飯田の奥さんは大儀さうな風で、黑いレースの肩掛けを脫した。

「この間ぢゆうは段々どうも御世話樣でした、私もちよく〳〵來たいとは思つても何しろ遠いもんですからね」

茶など勸めたが、飯田の奥さんの顏色がたゞでなく石川に見えた。

「――いよ〳〵十八日立前になりますが――いゝ天氣にしたいもんです。……奥さんもどうか御出で下さい、矢張りあゝいふ時は、御本人が居て下さると下さらないでは張合が違ひますからね」

「――實はそのことで急に上つた譯なんですがね――十八日に間違ひなく立前出來ませうか」

石川は、どういふ意味か分らず、濃やかに蒼白い奥さんの橫顏に眼を注いだ。

「此方の仕度は悠くりですが……何か御都合の惡い事でも起りましたか」

「本當に此那ことにならうとは夢にも思つて居なかつたのにねえ」

奥さんは、黑い堅絞の單衣羽織の肩も俄にこけたやうな顏付をして

「肝心の幸雄の工合がわるくなりましてね」

と云つた。

「道理でこの頃御見えなさいませんでした。どうしなさいました?」

「どうした故か頭の工合が惡いらしいんです。……恥を御話ししなければ分らないけれど、急に暴れ出しましてね、刃

物三昧しかねない有様なんですから、……本當に……」

石川は、幸雄の寧ろ女らしい位の擧動を知つて居るので却つて信じ難いやうであつた。

「前から其那癖がおありだつたんですか?」

「いゝえ、それどころか、内氣な代り私みたいな者の子と思へない程學校だつて出來て居たんですよ」

さし組んで來る涙を銀鼠の紋縮緬の袖で押へ乍ら、奥さんは

「大學を來年出るといふ間際に此那事になるんですからねえ」

と淋しく頬笑んだ。石川は、挨拶のしようなく感じた。奥さんが極く若い時の子と見え、幸雄がぞろりとした和服でなど居ると、母子には見えないやうであつた。それ故母親が猶氣の毒らしかつた。醫者が迚も家には危くて置けないから病院へ入れろと云ふが、普通に云つて聞くことでないから、立前を口實に此方へ寄來す。手筈をして此方から無理やりにでも病院へ連れ込むといふのであつた。

「飛んだことになつて、まことに御迷惑でせうが、職人衆には何とでもしますから、どうぞよろしく御願ひ申します。

――そりや勘が早いんですから、與々も知らん顔でね――たゞどうぞ刃物だけは悩かないとこへ始末させといて下さい。萬一とんでもないことを仕出來したりすると申譯ありませんからね……」

十八日は、空の色が目にしみる快晴であつた。五月で、躑躅が咲いて居た。濃い紅の花が眞新しい色の材木や庭石の馴染まないあらつちに照りかへした。石川から其朝になつて事情をきかされた職人逹は

「へえ、其奴は事だ」

と驚いた。

「彼那旦那がおふくろを追廻すなんて話みてえだな。大學もたそくにならねえもんと見へるね」
「どうせ棟は上げられねえが、側をちよい〳〵いぢくつて置くんだな」
九時頃自働車の爆音が裏の松林に聞えた。
「何だい」
「病院の自働車だ」
晝少し前になつて原宿と伴立つて幸雄が來た。
「御苦勞だね」
「いゝお天氣で何よりでした」
「これからかい」
應待など石川の眼には何處も異常が認められなかつた。さうかと思つて見ると、僅に眼が血走つて居るのと、幾分せかついて居る位が目立つだけであつた。却つて手塚の方が亢奮をかくせない様子で
「――仕度はいゝんだらうね。主人公が來たがらないんで困つたよ」
と云つた。
「こゝは貴方が御主人だから御出で下さらなくちやあ立前になりません」
石川は、さり氣なく跋を合はせた。
「奥様はどうなさいました」
幸雄は、ステツキを腰にかつて、働いて居る職人を見守り乍ら

「今に來るだらう」

とぼんやり答へた。

「おーい、かゝるぜ」

主屋の桁に職人が攀登つた。威勢の好い懸聲で仕事が始つた。手塚はいつになく頻りに幸雄に話しかけた。

「彼處の樫がどいたら偉く見晴しがよくなつたな、何だらうあれは………商人の住宅にしちや廣すぎるな」

幸雄は、遠く見晴す丘の裾に青い屋根の洋館がポツリと建つて居る方に目をやつたが何とも返事しなかつた。

「立つてちや草臥れちやうね、やつこらと」

手塚は運び込んだなりの庭石の一つに腰を下した。軈て幸雄も來て傍にかけた。いつの間にか背後の生垣の處に植木屋に混つて詰襟を着た厳丈な男が蹲んで朝日をふかし始めた。石の門柱を立てる、土台の凝固土に菰がかぶせてある。其處から、ぶらりと背廣を着た四十がらみの男が入つて來た。

「やあ」

手塚は立ち上りさうにしたのを再び思ひなほして、かけたまゝ

「これは〳〵」

と帽子に手をかけた。背廣の男は

「通りがゝりにひよつと見るとどうも貴方らしかつたんでね」

と云つた。

「なか〳〵立派に出來ますね」

「いや、主人公は此方です。——濱さんと云つて御親しく願つて居る方です、飯田幸雄」

幸雄は、薄色の中折れを片手で頭からむくやうに脱いで形式的に禮を返した。

「やあ、どうぞよろしく。——これで建坪はどの位ありませうかね」

幸雄は面倒さうに

「引くるめて卅五坪くらゐなもんです」

と答へた。

「ふーむ。——此處からだと電車の停留場はどの見當になるでせう」

幸雄は默つて居た。すると手塚が思ひ出したやうに

「貴方、今日は何です、電車ですか」

と訊いた。

「いや、自動車でやつて來ましたが…………何です?」

手塚は片手の指で半白の髭が延びた顋を撫でゝ居たが、彼方を向いて鳶の働くのを眺めて居る幸雄の肩を輕く叩いた。

「君、この方が自動車で來られたんださうだが、丁度いゝ工合だ、歸途乗せていたゞいて病院へ廻つて行かうぢやないか」

自信のない不自然な微笑を浮べて居る手塚を幸雄はきつと頭を廻して睨んだが、見るうちに相恰が變つた。唇まで土氣色をし

「いやだ！」
ときつぱり拒んだ。
「一寸廻る分にはいゝだらう、対手だもの」
「いやだと云つたらいやだ」
其は晝間の普請場に響き渡る大聲であつた。幸雄が立つ。續いて手塚も突立つた。相手を睨み据ゑ乍ら、幸雄は手さぐりで素早くステッキを取らうとした。ステッキはもう其處になかつた。
「畜生！」
如何にも口惜しげで、石川の心に同情が湧いた。幸雄の二の腕を背廣の男が捉へた。
「何する！」
「おとなしく君が病院へさへ來れば何でもないんだ」
「騙したな！、よくも此奴！　退け！　退きやがれつたら！」
幸雄が藻掻けば藻掻く程、腕を捉へて居る手に力が入ると見え、彼は顏を顰め全身の力で振りもぎらうとしつつ手塚と醫員とを蹴り始めた。朝日を捨てゝ、詰襟の男が近よつた。
「おい、若いの、頼む、押へつけてくんな」
共時は桁の上に登つて居た男まで降りて來て圍りにたかり見て居た。
「どうだいこれは。──よりつけやしない──二三分でいゝんだ、これを卷くまで手をかして呉れ」
麗らかな日光にキラ〳〵光る白木綿を見ると、幸雄は一層猛り立つた。

「どけ！放せ！放せ！」

三人の男が扱ひかねた。一人が腰を捉まへた拍子に、ビリビリ音がして單衣羽織が綻びた。必死で片腕にぶら下つて居る手塚が殺氣立つて息を切らし乍ら

「拘はん、拘はん」

と頭を振つた。

「遠慮して居る場合ぢやない、おい！石川！」

石川は、後から幸雄の肩を確り押へ

「若旦那！　若旦那！氣を落付けなくちやいけません」

と云つた。

「靜かにしなすつたつて分る話だ。――若旦那！」

熟練し切つた樣子で荷でもくゝるやうに詰襟の男が幸雄の踝の上から兩脚をぎり〳〵白木綿で卷きつけ始めた。足許が棒のやうになつたので足掻きがつかず諸に倒れさうになつては、立ちなほつて荒れる。容赦なく腹を締めつけ、遂に兩腕も緊く白木綿の下に卷き込まれて仕舞つた。幸雄は、今はハツ、ハツと息を吐き乍ら、鳥肌立つて蒼い頰の上にぽろ〳〵涙を流し始めた。男共は葬列でも送るやうに鎭まりかへつた。愈々擔ぎ上げられて、數步進んだ。突然子供がしやくり上げて泣くやうな高い歔欷の聲が四邊の靜寂を破つた。

「石川！　イシカワ！」

いゝ加減心を亂されて居た石川はあたふた病人の頭の方に駈けよつた。

「助けとくれ、ドーカ助けとくれ！石川」
仰向いたまゝ食ひつくやうに石川を見る病人の眞實溢れた兩眼から限りなく涙が流れ落ちた。
新しい家に移つて來て、奧さんは三年の間一人で暮した。女中と爺やが居るだけであつた。
「――散歩の出來るやうな庭にじないちやなるまいねえ。この間もお醫者さんが、なるたけ家でも病院に居る時のやうに規則立てゝ暮させなけりやいけないつて云つてゞしたよ
始めの目論見と違つて、平庭のまゝ芝生が出來たり、南を向いてフレームが出來たりした。靜に絶間なく幸雄を待つて居る母親の心が石川に傳はるやうであつた。
病人は足掛四年目になつて戻つて來た。
住宅地には生垣が多い。山茶花を垣にしたところもある。栗の葉が濃く色づいて廣い初冬の靑空の下に益々乾いて行く。低いところで白や紅の山茶花が咲き散る。落葉焚の煙が見とほしの利く櫻並木の通りにも上つた。緩やかな勾配を石川は住宅地の奧の方へ歩いて居た。土藏を請負つた仕事場に行くところなのであつたが――ずつと後の方で
「おーい」
と呼ぶ女の聲がした。落葉を鳴らして行くと又
「おーい」

と聞える。歩いてゐるのは石川ぎりであつた。右手は手入れよく刈込まれた要の生垣で、緣側の眞赤な小布團に日が當つてゐるのが見える。怪訝に思ひつゝ振返つて見ると、派手な帶のところだけ遠目に立たせ若い女が小走りに此方に向つて來る。石川が止ると、手を擧げてひどくおいで〳〵をし、力を盛返して駈け出した。變に縋りつくやうなところがある。双方から近よると、石川は

「何だね、お君どんぢやないか」

と云つた。飯田の小間使ひであつた。

「何か用かい」

君は息が切れて口が利けない。口が利けない儘、石川の着て居る羅紗のもぢりの袖を摑んでぎゆう〳〵來た方に引張つた。

「來て下さい、直ぐ。よ！　よ！」

不圖石川は火でも粗忽したのかと思ひ

「火か？」

と訊いた。お君は、ふつくりした束髮の前髮が千切れさうに首を横に振つた。

「――奥さまが大變なの」

いきなり、お君の眼から大きな涙がころがり落ちた。

「早く來て下さいよ、奥樣が本當に大變なのよ」

大股に戻り乍ら、石川は頻りに訊くが、十七のお君は動顚して泣き乍ら

「大變なのよ、變に成つておしまひなすつたらしいのよ」
と云ふだけだ。娘らしい頬に透き徹つた涙が輝やいてふりかゝる様が可憐であつた。
「仕様がねえぢやないか、確り仕なけりや」
「此方、こつち」
大きな八つ手が植込みになつた横から石川は台所口に廻つた。硝子戸が開いて、外套を着た男が佇んで居る。男は石川を見ると、ひよいと頭を下げて傍へどいた。
「あら、歸らないで下さいよ貴方！　貴方」
といふ奥さんの聲に石川は
「やあ」
と入口に立つたが、ぺつたり流し前の簀子に座布團もなしで坐り込んで居る彼女の風體と其邊に引散らかしてある物品を一目見ると、君が泣き出したのも無理なく思へた。石川は上り框に蹲み、
「どうなさいました、え？　奥さん」
と聲を勵ました。石川の胸に、三年前幸雄が力づくで病院に連れて行かれたのを見た時と同じ、酸つぱいやうな鼻の髄が痛いやうな感情が甦つた。奥さんは手元にあるだけの株券、公債、銀行通帳、寶石の入つた装身具類などを悉く簀子の處へ持ち出し、
「これだけ財産があるんですから、本當に、御迷惑はかけませんよ、――だからどうぞ今日から親類になつて下さい、……ね、私達そりやあ淋しく暮して居るんですよ、二人ツきりでね、幸坊と私と二人ツきりでね――

と心をこめて訴へて居るのであつた。傍で、年寄の女中が氣が氣で無ささうに其等の物を他人の目からかばはうとして居る。石川を見ると、奥さんはのり出し、一層優しく、如何にも佗しい境遇に如何にも堪え切れぬらしく云つた。

「ね石川さん、さうですわね、貴方だつて親類になつて呉れるでせう？　二人つきりでねえ、私と幸坊とねえ、財産はあるんですものねえ……」

そのやうに親類に成つて呉れと懇願されて居る者は、電燈會社の集金人であつた。石川は台所へ上つて

「奥さん、あの人には私から親類になるやうによく話しますからね、一先づ此那物は仕舞つて置きませう」

と云つた。

「親類になる迄に無くなるといけませんからね」

彼女は子供のやうに石川の後に跟いて台所と部屋との間を往復した。

「ぢやその指環は、右の引出しに入れて下さい。——でもねえ石川さん、あの人本當に明日來て呉れるでせうね、親類になつて呉れなかつたら、私どうしたらいゝだらうねえ」

「大丈夫ですよ奥さん。——さあよく見て居て下さい。おい、お君どんも來て。——この株券と帳面は此處ですよ、この黒い袱紗の中です、わかりますか」

奥さんは縞お召の羽織の袖を左右から胸の前で掻き合はせ、立つたまゝ合點合點をして居たが、急に

「あら大變だ、ね、石川さん、あのダイヤの帶留ね、何處へ行つちやつたかしら」

膝を突くなり、我武者羅に小箪笥の引出しを引くるかへした。

「あゝ私あれをなくしちや大變なんですよ、あれがないと私——どうしたらう。此處に仕舞ひやしなかつたかしら」

彼女は俄に心配し始めた。石川は
「これですよ、此處に在りますよ、奥さん」
と手に押しつけて持たした。
「まあ、有難う。──ね石川さん、あなた本當に今日から親類になつて、いろ〳〵相談にも乘つて下さいね。──瀧やや お君はもう成つて呉れたの。……ねえ」

原宿の計らひで看護婦が雇はれて來た。
奥さんは長火鉢の前に坐つて
「まあどうして此那にお人形さんが入つて居るんだらう」
と、眼の力が人間以上に成つたやうに灰の中にあるどんな小さい燠の破片でも見付け出した。
「ほら、又此處に──お人形さんですよ、お人形さん、」
手當り次第傍の湯呑の中に入れる。
「おや、あの壁にもついて居る──さう云へば……君や、一寸おいで」
大柄な、手など薄赤くさつぱりした看護婦が
「何か御用ですか、私が致しませう」
と云つた。
「いゝえね、さつき手水に行つたとき、あすこに大きなお人形さんが居たのを思ひ出してね、君や、おいでよ」

奥さんは幾時間でも壁だの湯殿のタイルだのをぼぢくつて餘念なかつた。そこにはきつと蜘の巢の跡とか塵とか針の先程のものがついて居、人形に見えるのであつた。引ずつた粹なお召の袂や袂を水でびしやくにし、寒さでがたく震へ乍ら緣側ぢゆうに洗面所の水を溢らして掃除をする氣のこともある。偶々奥さんが正氣に近くなつて居る時來合はせると、石川は一種異樣な心持になつた。世の中にはこのやうな廻り合せの親子さへあるものだらうか。卅近い幸雄を奥さんは幸坊幸坊と呼んだ。

「ねえ幸坊や、お前さんどうぞ早く體をよくして又學校へ行つてお呉れ、俥でも自動車でも何でもお前の好きなものに乘せてあげるからね、そして、どうか一度母さんの前へ、十圓でも十五圓でもいゝから、これは私が勤めてとりましたといふお金を見せてお呉れ。…………………ね、幸坊や、たのみですよ」

さめぐと母の涙が甕れた頰を濡すのであつた。

「きいてたの? 幸坊――」

幸雄は聞いて居る。一間隔てた六疊に幸雄の眞鍮燦く寢臺があつた。その上にゆつたりと仰臥したまゝ、永久正氣に戾ることない幸雄が襖越しに

「いゝよ、心配しないでも行くよ。――いゝから、福ちやんも新橋へおかへりよ」

と返事するのであつた。福ちやんと呼ぶのが如何にも母親の果敢ない一生を云ひ當てゝ居るやうであつた。その返事を聞くと奥さんは猶歎いた。

「どうしてさういつまでも本當でないだらうねえ――幸坊。ちやんと散步をおしなさいよ」

「あゝ」

「ねえ石川さん、切ないんですよ私あゝいふのをきいて居ると、ねえ石川さん」
泣いて泣いて、又變に成つて仕舞ふのであつた。

不幸な親子のうちへ訪ねて來るのは原宿だけであつた。それも義務上一年に數へる程顏を出すに過ぎない。奥さんは、寒中餘り水に濡れては震へて居たので肺炎を起して歿した。幸雄は全く孤獨な者となつたのを心の何處かで感じたらしく見えた。箪笥の中から茶箪笥の中まで異常な注意深さで管理した。台所まで口を出すので、石川は或時

「台所のことは女の領分ですから、婆やにお委せなさいまし」
と云ひ含めた。
「貴方は旦那様ですから、ちやんと奥に居らして、食べたいものをお云ひつけなさい。さうすれば何でも出來ますから」
「——さうかい、できるかい」
「きつと出來ます」
石川は、何の魅力でか誰の云ふこともきかない幸雄の信頼を受ける唯一人の者であつた。

朝起きる、寝台で牛乳を飲む。着物を着換へ、顏を洗つてから、庭に出る。ちびた下駄を穿いて晝までぶら／＼歩き廻る。午後晝寝。又散歩。夕飯後風呂に入つてきつちり八時には床に入つた。九時に婆やが燈を消して歩くのだが、その間に口を利くのは朝御用きゝが來た時だけであつた。笑ふことがない。幸雄は散歩——と云つても庭内を歩き廻る爲だけに、そのやうに威嚴に滿ちて生きて居るのだらうか。

石川に分つて居る病人の心持は、花が好きといふことだけであつた。庭にまだ霜どけがする。その時分から、病人は枯芝の上を歩きつゝ

「ねえ石川、ダリヤの球根持つて來とくれよ」と注文した。

「少し早すぎませう」

「いゝよ、もういゝよ、咲くよ」

石川は、その邊にころがつて居る腐つた球根でもかまはずもつて行つて土に埋めて見せた。

「乾くといけないねえ、枯れると困るよ」

時候が時候だし芽の出ようはないのに、病人は樂しんで朝起きると、土に水をやつた。夕方歩いても水をやる。一日の中を久しい間立つて眺めて育つのを待つた。春の彼岸頃、石川は今度こそ本物の球根を運んで來て花床に植込んだ。

「旦那、こつちの方がようございます。あれは駄目ですよ、もう」

「さうかい」

水をやりすぎるので、ダリヤは夏が來ると莖と葉ばかり堂々と丈高く繁つた。青い繁みの頂上に、それでも少々赤い花がつく。石川が來るのを待ちかねて、病人は

「咲いたよ――ごらんよ――よく咲いたねえ」と、それがまるで貧弱な花でも實に悅ばしさうに賞めるのであつた。氣持よさが聲から溢れた。

庭に、燒材を埋めて緣にした特別の花壇がある。其處には二株の牡丹が植ゑられて居た。石川もこれには寒肥え其他怠らず手入れするので毎年季節が來ると、二株の牡丹はそれ〳〵に見事な淡紅の花を咲かせた

五月初旬の雨上りの日、石川は久しぶりで病人の樣子を見に行つた。

「旦那は?」

「御散歩でせう」

龍の髯を植ゑた小徑から庭へ入らうとする石川の行手に、ぱつと牡丹の花とその前に佇んで我を忘れて居る幸雄の姿が寫つた。この間來た時はまだ大分堅さうな莟であつた。それが夜の間に豐かな春を呼吸して、一輪は殆ど滿開に、もう一輪、心を蕩かすやうな半開の花が露を帶びて匂つて居る。年來生活の活々した流れや笑を失つた家と庭には何處やらあらそへない沈滯が不健康に黝ずみ澱んで居る。そこへ只一點、精氣を凝して花瓣としたやうな熾んな牡丹の風情は、石川の心にさへ一種の驚きと感歎をまき起した。

「——見事に咲きましたな、旦那」

幸雄は、夙に石川の來たのを知つてゞも居たかのやうに悠くり云つた。

「きれいぢやないかねえ、石川。——いゝねえ」

「いつ咲き始めました?」

「——三日ばかり前だよ——ねえ石川、本當にきれいぢやないかねえ……」

「立派です」

石川には病人が無心な花の美しさに心を奪はれて居る樣がいぢらしく感じられた。歩いては眺め、止まつては眺めして居たものと見え、例によつてちびた男下駄は、足の指まで雨上りの軟い庭土でよごれきつて居る。石川は

「餘り立つて居らつしやるとお體に惡うございますよ」

と注意した。

「緣側にいらしたらいゝでせう、彼處からでもよく見えますぜ」

幸雄は默つて向きかはり先に立つて步き出した。幸雄は手の先については非常に潔癖で、一寸木の枝を弄つただけでも石鹼で洗つた。足の方になると其が信じられない程平氣であつた。どんなによごれて居ても、それなりで眞白い敷布の中へでも入る。今も獸のやうに泥でよごれた足の裏のまゝずか〱緣側に上つた。

「お茶もつといで」

お茶が來た。

「お茶菓子もつといで」

幸雄は

「石川、お菓子おあがりよ」

とすゝめた。すゝめ乍らも、幸雄は牡丹の花に見とれて居るのがあり〱分つた。實際少し遠のくと重々しく艷な淡紅の花の姿全體が、サク〱した黑土との配合、品よく張つた葉の繁り工合とともに、却つて近くで見るに增した趣がある。掌に、皮が干上つて餡から饐た臭のする櫻餅をとつて貰ひ乍ら石川は

「――來年は一つ株分けをやりませうな」

と云つた。幸雄は何日、間に日が經つて居ようと、この前石川が來た時買はせた菓子の殘りをきつちり仕舞つて置いて、丹念に次にもそれを出すのであつた。

「あしたの朝、あの方もさくね」

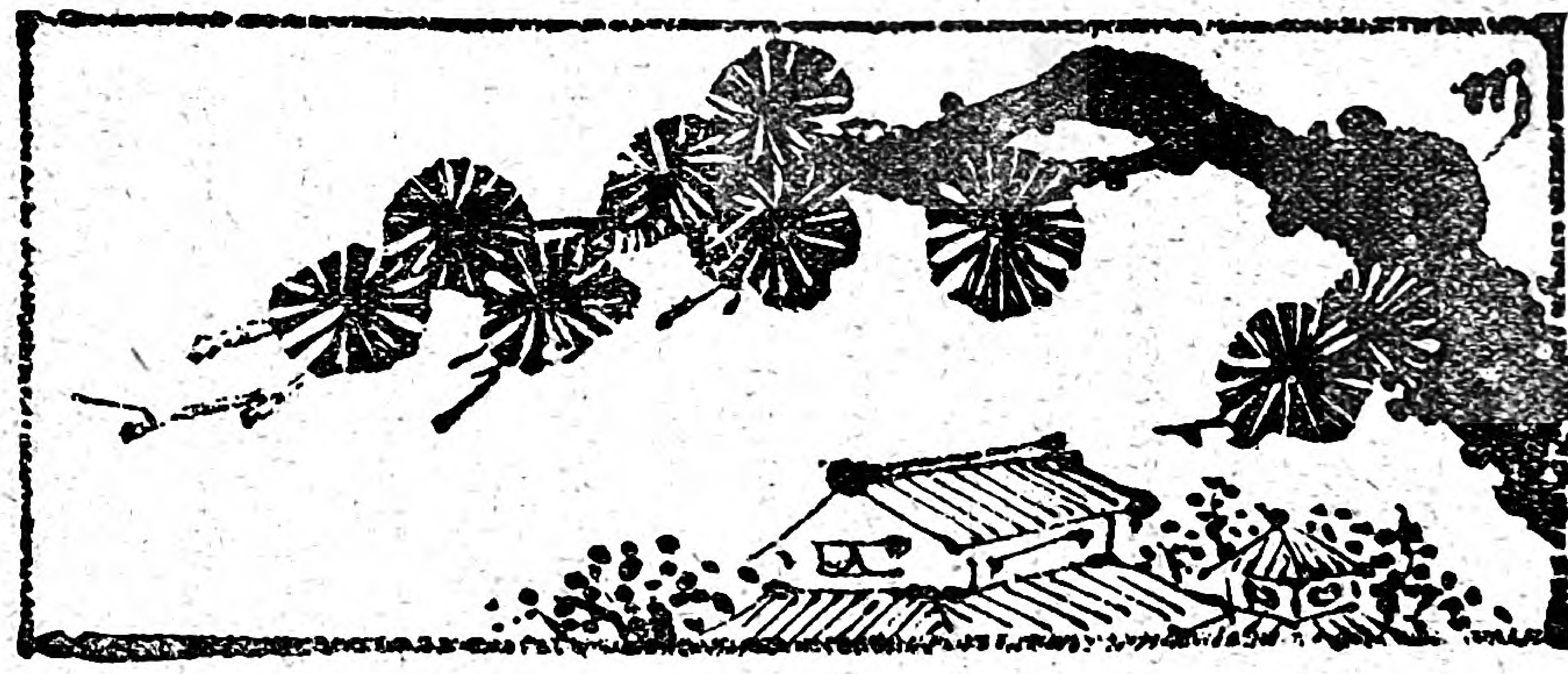
「もうあすこまで開くと一息です」

「…………いゝねえ…………………」

恍惚と和いだ眼に限りない滿足の色を泛べて見入つて居た幸雄は、迚もその素晴らしい花から遠のいて居られないらしかつた。彼は又下駄を穿いた。そして、花壇に近づく一歩一歩を、味ひ樂しんで居るかのやうに靜かに進んで行つた。やゝ暫く眺めあかした後、彼はそつと片足下駄のまゝ花壇に踏み込んだ。大事な貴いところへ忍び込むやうにそーつともう一足入つて、彼は顏を極度の用心深さで花に近づけた。九分通り咲きこぼれた大輪の牡丹は、五月の午前十一時過ぎの太陽に暖められ頭痛がする程强い芳香を四邊に放つて居る。幸雄は蘂に顏を押し埋めつゝその香を吸ひ込んだ。

ほゝけ立つた幸雄の黑い後頭部を見て居た石川は、うつかりして居たが不意に不安に襲はれた。石川は腐つた櫻餠を緣側に置いて立つた。

「…………どうなさいました？――――」幸雄はそろ〳〵顏を擧げて此方を向いた。其を見て石川は心に衝擊を感じた。一層蒼ざめた幸雄の面長な顏は牡丹の大きい照りかへしで白い焰のやうであつた。その白い焰を貫いて何と神々しい異常な大歡喜が揺れて居ることだらう。病人の心の奥の暗いところで、あゝ今牡丹が此世のものでない美しさを以て咲き擴がつて居る。――さう思はせる顏だ。石川は可怖いやうな心持に打たれた。狂つた人間の心が彼の心をきつく壓した。



暗夜行路

志賀直哉

四

不圖、或る不愉快な想像が浮んだが、謙作は無意識にそれを再び押し沈めようとした。然し息が彈み、心にもなく亢奮して來るのを彼は出來るだけ抑へて、靜かに續けた。

「默つてゐずに、何んでも云へばいゝぢやあないか。お前は俺が何か非難してゐると、さう思ふのか？」

「そんなこと………」

「正直に云へば非難ぢやないが、俺は非常に不愉快なんだ。停車場で見た瞬間から氣持がチグハグになつて、少しもぴつたり此方へ來ない。抽象的な氣持の上ばかり云ふのは分らなくて、氣の毒とも思ふが、何か變だよ。――――お前は要さんや水谷の事を何時までも拘泥つてゐると思ふかも知れないが、別の事だ。全然別かどうか分らないが、何にか氣持が抱合はない感じなんだ。其處に不純なものが感じられ

るのだ。一體どうしたんだ。今までこんな事ないぢやないか」

「…………」

「二階に聽こえるのはいやだ。此方へ來ないか」

謙作は身をずらして、寢床に空地を作つてやつた。直子は元氣なく起きかへつて、來て、其處へ坐つた。憂欝な、無表情な、醜い顏をしてゐた。ぼんやりと床の間の方へ眼を外らしてゐたが、其處には先刻甚く喜んだ壺や函がある。然し今はそれらとは全く遠い氣持でゐるのが分かつた。

「坐つてないで横におなり」

直子は動かうともしなかつた。

二人は暫く默つてゐた。謙作の頭の中は熱を持つたやうになり、疲れたまゝ冴えてゐた。靜かな晩だ。寢靜まつた感じで四邊は森々としてゐた。そして只此座敷だけが熱病にうかされ、其處には「凶」といふ眼に見えぬ小さなものが無數に跳躍してゐるやう謙作には感じられるのだ。

「兎に角、もう少し物を云つちやあ、どうだい。かうこぢれて來ては此まゝで、眠むるわけには行かないし。——それともお前は何んにも云はないと決心でもしてるのか？」

「…………」

「はつきり云つて、事に依つたら怒るかも知れないが、それでいゝぢやあないか。怒る事なら怒れば直るかも知れないし、兎も角はつきりさして、その上で解決をつければいゝ。どうなんだ」

「…………」

「かうやつてゐればお互に段々息苦しくなるばかりだぜ」

直子は矢張り返事をしなかつた。

「――俺は何んの爲めに、こんなにお前を責めてゐるか自分でも分からない。何を云はうとしてるか少しも分らないんだ。だから、お前も何んにもないんなら、ないと、それだけ、はつきり云つていゝんだ。――それだけの事ならはつきり云へるだらう?、どうだい。ないのか?――えゝ? 何んにもないのか?」

直子は急に眼を堅く閉ぢ、首を曲げ、息をつめて顔中を縮にした。そしてそれを兩手で被ふと、いきなり突伏し、聲をあげて烈しく泣き出した。謙作は不意に自分の顔の冷めたくなるのを感じた。彼は起き上り、何か恐しいものに直面したやう、波打つ直子の脊中を見下ろしてゐたが、少時すると彼は自分の心が夢から覺めたやう却つて正氣づいた事を感じた。彼は直子の此樣子を、どう判斷していゝかと先づ思つた。次に彼は兎に角自分達の上に恐しい事が降りかゝつて來た事を明らかに意識した。

五

直子と要との關係は最初から全く無邪氣なものとは云へなかつた。それはそれ程深入りした關係ではなく、單に子供の好奇心と衝動からした或る卑猥な遊戯だが、それを二人は忘れなかつた。色々な記憶の中で、それだけが寧ろ甘い感じで直子には憶ひ出されるのだ。

春、未だ地面に雪の殘つてゐる頃だつた。小學校から一度歸つた要は父の使で直子の母を呼びに來た。直子は近所の年下の女の兒を對手に日あたりの緣で飯事をしてゐた。それが面白く、「お前も要さんとこへ行かんか」と母に誘はれた

が、斷はつて、遊びに餘念なかつた。

少時すると、もう歸つたと思つた要が庭口から入つて來て、二人の仲間に入り、金盥に雪を積んで來ては飯にして遊んだ。

緣が解けた雪で水だらけになり、皆の手はすつかりかじかむで了つた。三人はその遊びをやめ、部屋に入り、火燵にあたつた。

要は近所の兒を邪魔者にし、「あんた、もうお歸り」こんな事を切りに云ひ出した。然し女の兒は歸らなかつた。すると、要は「龜と鼈」といふ遊びをしようと云ひ、直子に赤間關の圓硯を出して來さし、其遊びを二人に敎へた。それは硯を庭に隱して置き、子供になつた女の兒が硯を探して來る。そして障子の外から「お母さん龜を捕りました」と云ふ。直子のお母さんが「それは龜ではありません」と答へる。其時、要が大きな聲で、「鼈」と怒鳴ると云ふ遊びだ。二人には何の事かさつぱり解からなかつたが、それをする事にした。

女の兒が要の隱した硯を探してゐる間、二人は火燵に寢ころんでゐた。そして漸く見つけ出し、それを持つて來た時、要はいきなり「鼈」と怒鳴つて飛起き、一人ではしやぎ、跳り上つたり、でんぐりがへしをしたりした。

この遊びは下男から敎えられた。そして、その卑猥な意味は要だけには幾らか分つてゐたが、直子には何の事か全く分からなかつた。只、火燵で抱合つて居る間に直子は嘗て經驗しなかつた不思議な氣持から、頭のぼんやりして來るのを感じた。三人は幾度か此遊びを繰返へした。暫くして、直子の兄が學校から歸つて來て、二人は驚き、飛起きたが、直子は兄の顏をまともに見られぬやうな、わけの解らぬ恥かしさを覺えた。

要と直子との間では二度とかう云ふ事はなかつた。然し此事は不思議に色々な記憶の中で、はつきりと直子の頭に殘

つた。

それ故、直子は謙作の留守に要が不意に訪ねて來た時、かすかな不安を感じたが、感じる自身が不純なのだとも考へ、殊更、従兄妹らしい明かるい氣持で對するやう努めた。翌日、水谷や久世が來て、花を始めた時にも、かういふ第三者が居て呉れる事は却つていゝと思ひ、人妻として不都合だと云ふやうな事は少しも考へず、自分も仲間になつて夜明かしをしたが、夜が明け、日の光に尙、遊び続けて居ると、流石に體力で堪えられなくなり、食事の事など總て仙に頼んで、自分だけ裏の四疊半に引き下がり、ぐつすりと寢込んで了つたのである。

直子が眼を覺ました時は、もう家の中は暗かつた。直子は湯殿へ行かうとし、途中、唐紙の隙間から座敷を覗くと、三人は未だ一つの座蒲團を圍み、同じ遊びを續けて居た。皆、眼をくぼまし、脂の浮いた油ぎたない顔をしてゐた。三人は一寸した事にもよく笑ひ、普段それ程でもない久世までが他愛なく滑稽な事を饒舌つて居た。

直子は身仕舞ひを濟まし、仙と一諸に夜食の支度をした。

三人は食事の間も落ちつかず、人生五十年だけやつて、レコードを作らうなど云つてゐた。そして、直ぐ又始め、直子も一緒になつたが、前日から一睡もしない三人はおりてゐる間にも、一寸横になると直ぐぐつすりと眠りに落ちて行つた。要は肩や首の烈しい凝りで、甚く苦しがつて居た。

十時頃になり、遂にやめた。三人は一緒に湯に入り、騒いで居たが、間もなく、久世と水谷は歸つて行つた。要は座蒲團を折つて、それを枕に長々と仰向けに寢て居た。直子は幾度か床に入るやう勸めたが、「今、行きます」と云ひ、中々起上がらなかつた。仕方なく、直子は丹前をかけてやり、側で雜誌を讀んでゐると、暫くして要は不意に起き、

「おやすみ」と云ひ捨て、二階へ上がつて行つた。

直子は睡むくないので、其まゝ其所で雜誌を讀み續けて居た。そして、どれだけか經つた時、直子は不圖、二階で要が何か云つて居るのに氣づき、立つて階子段の下まで行き、其所から聲をかけてみたが、要の返事が、寢ぼけ聲でよく聽取れなかつた。直子は段を登つて行つた。

「肩が凝つて眠れない。按摩を呼んで貰らへないかな」

「さあ、一寸遠いのよ。それも早ければかまはないが、もう十二時過ぎよ」

要は不服らしく返事をしなかつた。

「仙も今、丁度寢たとこだし、今から起こしてやるのも可哀さうね」

「そんなら要らない」

「余つ程凝つてるの？」

「キリ〳〵痛むんだ。頭がまるで變になつちやつて、眠むれないんだ」

「私が少し揉んで上げませうか」

「いゝえ、澤山」

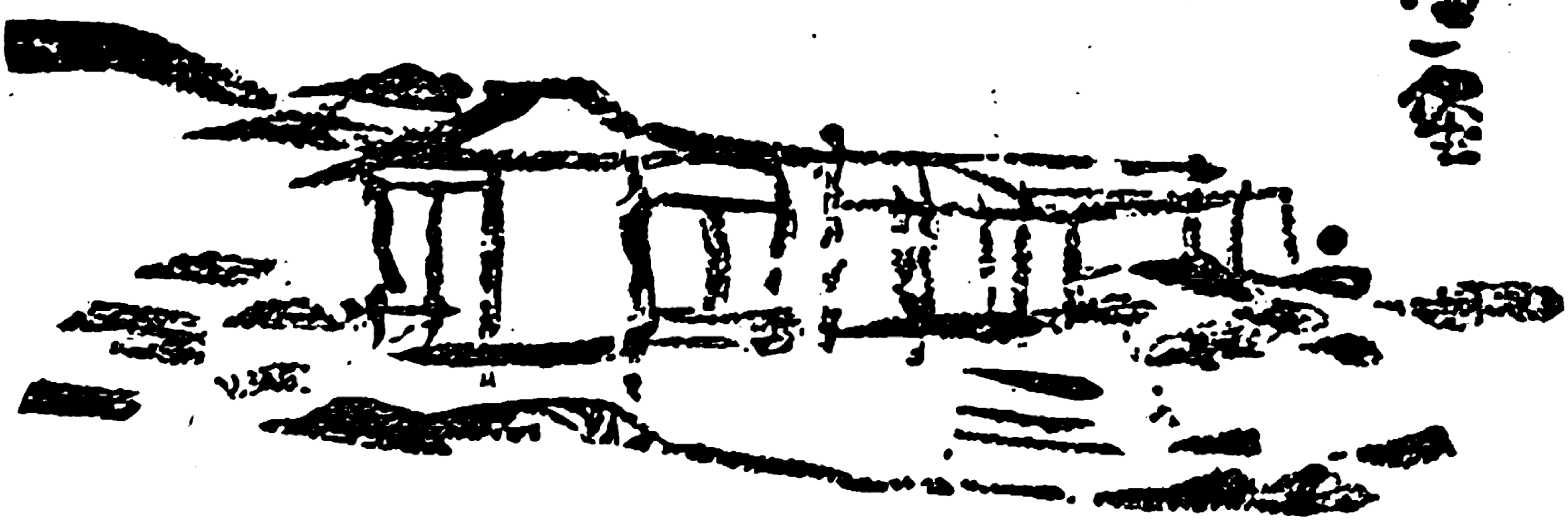
「割りに上手なのよ」

直子は部屋へ入つて行つた。そして要の首から肩の邊を揉み始めたが、その凝り方は到底女の力では受けつけさうもなかつた。

「少しは利きさう？」

「うむ」
「利かないでせう？」
「うむ」
「何方なのよ。いやな要さんね」直子は笑ひ出した。「かうして揉んでる間に、早くお眠りなさい。あしたお起きになる頃、按摩を呼んどいて上げるから」
直子は暫く、さうして揉んでやつた。要は少しも口をきかなかつた。直子はもう眠つたかしらとも思ひ、然し止めて、若しおきて居られたら氣まりが惡いとも考へた。
要が不意に寢がへりをした。直子は驚き、手を離したが、要は其手を握り、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。要は眼を閉ぢたまゝそれをした。直子は吃驚したが、小聲に力を入れて、
「何をするのよ」と云つた。
「惡い事はしない。決して惡い事はしない」こんな事を云ひながら、要は、、、、、、、、、、、、、、。
直子は驚きから、一寸變心しかけた。そして叱るやうに、「要さん。要さん」と抵抗し、起き上らうとしたが、、、、、、、、、、、直子を動かさなかつた。そして、
「惡い事はしない。決してしない。頭が變で、どうにもならないんだ」これを繰返した。
から云ふ爭ひを二人は暫く續けて居たが、仕舞ひに直子は自分の身體から全く力が脱け去つた事を感じた。それから理性さえ。
直子は靜かに二階を降りて來た。仙に覺られる事が恐しかつた。そして、床に就いたが、何時までも眠むられなかつた。
翌朝、直子が眼を覺ました時には、要は出發し、もう家には居なかつた。

（つゞく）



白木蓮の咲く頃

徳田秋聲

一

狹い書齋兼應接室の古障子を開け放してゐると、白々と咲き滿ちた白木蓮の花明りが顏に差すやうな朗らかな或る日の晝、融が部屋の眞中においた卓の前に坐つて、妻と何か話してゐると、舊式な滑りのついた格子戸を開けて、誰れかゞ訪ねて來た。滑りを開ける音も格別耳につく程ではなかつたが、何かから秘やかな人の氣配がしたやうなので、二人で聽耳を立てた。多分線を背にしてゐた妻のお庄が立つて玄關へ出て行つた。妻が復つて來た時、一封の手紙が彼の手に渡された。彼女の表情はいくらか緊張してゐるやうに感じられた。

手紙は紹介狀であつた。引くらかへして見ると、それが北海道の或る大きな新聞の編輯にゐるM——氏からのもので、澤夫人の州江を紹介したものであつた。

M——氏とは東京の二流どこの新聞社で、何かの用事で、一度顏を逢はせたことがあつたので、融は四十そこ〳〵の、薄くなりかけた髮のもじや〳〵した其の風貌を

直ぐ思ひ出すことができた。彼は親しくしてゐる有名な詩人M、M氏の義父に當る人なので、東京でも逢ふ前からその名を屢耳にしてゐた。

手紙の要旨は、澤夫人の長編小説を見たうへで、物になるか何うかを鑑定してくれといふやうな意味で、若し此の作品が世間に問ふだけの價値があるならば、貴下の盡力で書肆へ紹介していただきたいといふのであつた。

融は今まで澤山の小説志願者の訪問や原稿の送致を受けたけれど、かう云ふ風に更まつた紹介狀をつけられたことは、數へるほどしかなかつた。

「どんな人？」

「何だか美しい人ですよ。旦那さまと子供さんをつれて。」妻はいくらか驚嘆の口調であつた。

「通して。」

入つて來たのは乳のやうに色の白い、髪のたつぷりつや〳〵した立派な紳士であつた。續いてその良人にふさはしい美しい夫人の、派手々々した姿が、お伽噺の王女のやうな愛らしい純白の洋裝をした女の子を先きに立てゝ、彼の目の前に現はれた。

長いあひだに、この見すぼらしい書齋に幾何十人と云ふ色々の人が來て坐つた。が、彼は格別部屋の貧弱なことを恥かしいとも思はなかつた。しかし其の日の澤夫婦の訪問にはちよつと「困つたな」といふ氣がしたほど、負目を感じた。

「これは北海道の大ブルジョウアだ。」融はその瞬間さう思つた。

妻も少し狼狽てたやうに、緣側へ出て落着きなく彼等を見てゐた。

「どうも汚ないところで……。」

澤夫婦も氣の毒さうな表情をしてゐた。

澤氏は目縁の腫れぼつたい美しい目と、グリーク風の隆い鼻や、形のよい頭の持主で、輪廓が彫刻のやうにくつきりしてゐた。彼はお召ぞつきの、ぞろりとした扮裝をしてゐたが、にやけたところはなかつた。そして始終恥らうやうな目をして、口數を聞かなかつた。夫人はとみると、彼女は髮を耳隱しに結つて、ほんのり薄紅味をもつた薄皮出の面に、幸福さうな若さの晴々した氣分を湛へてゐた。

「何といふ似合ひの夫婦だらう。」融は思つた。

話は簡短であつた。良人は赤門出の法學士で、夫人はA―市の女學校出であつた。作品を公やけにしたいために、わざわざ夫婦で遙々上京して來たので、東京の文壇のことは少しも様子もわからないものだから、新聞社の人に紹介狀をもらつて、お訪ねしたといふのであつた。

「大變ですな、遠いところを。原稿お持ちですか。」

夫人は持つて來た原稿を、卓の上へ出した。

「ほんとうに拙いんでございますけれど。」

融はその厚い積み重ねを前に直した。

「書生や從妹に清書させたものですから、字が亂暴で……。」

「拜見しませう。いつ迄東京においでゝすか。」

「一週間ばかり居たいと思ひますの。」

「至急見ておきますが、出版といつてもなか／＼ね。」融は原稿を開くのを躊躇してゐた。

「出してくれるところがあれば、自費出版でもよろしうございますの。」

「ちや、ちよつと見ませう。」

融はさう言つてぺら〳〵と三四枚目を通して行つた。ペリオツドやカンマがきちんとしてゐなかつたし、成程字も亂暴で、ひどく讀みづらかつた。文章も調つてゐなかつた。しかし讀んでみると、漂渺として取留のない叙情脈の書出しが、殆んど粗暴に近いやうな熱情をもつてゐるのを感じた。

「は、おそろしい熱情ですね。」融は呟いた。シユクリームを食べてゐた王女は、小水が出たくなつた。

「恐れ入りますが、お厠をどうぞ。」夫人は羞恥の表情をして、子供に手を添へて起つた。

「穢苦しうございますから、どうぞ此方で。」妻は緣側からするやうに言つた。

「いゝえ、それでは餘り失禮でございますから。」

「かまひませんの。お小さいんですもの。さあ何うぞ此方で。」

夫人の舟江は、子供の手をひいて、澤氏の後ろから緣側へ出て行つた。そして厠へ入つて行つた。その時彼女の目に、庭の西側にある散り方の白木蓮が目についたのであつた。

間もなく彼等はつい近くの宿へと歸つて行つた。

「美しい人が來たもんだね。」融は後で妻に話した。

「さうですね。」

「だが、あんなに調子つぱづれに馬鹿叮嚀にしなくてもいゝんだよ。」

融は妻がどうかすると、ひどくへた〳〵するのを、苦々しく思つた。

「でも、子供さんを連れてゐますからね。」

「だつて、先きが何んなブルヂョウアであるにしたところで、あんなにぺこ〳〵するのは見苦しいぢやないか。」

「別にぺこ〳〵しやしませんよ。」

二

間を一日おいて、澤氏が一人でやつて來た。彼は卓の向ふに坐つて、いくらか性急氣味で、結果を知らうとしてゐた。

融は先日こて〳〵持込んで來た北海道の土産物のお禮などを言つた。鰊だの、鮭の燻製だの、其からこのわたに昆布、そんなやうな物を、どつさり持込んで來た。

融はいつもの無精で、まだ能くは讀んでゐなかつたが、口の方ばかり見たところでも、ちよつと困ると思つたので、それをお世辭氣なしに話した。

「まだよく拜見してゐませんけれど、こんな風の藝術憧憬は何うかと思ひますね。」

「はー」澤氏は前日よりも少しゆつたりとした態度で、腕組をしたまま聽いてゐた。

「藝術のために家庭を棄てるといふような事が、しよつ初めに出てゐるんですが、そんな事はどうも困ると思ひますね。」

「……。」澤氏は眉のあたりを心持曇らせて熱心に聽いてゐた。

「それも作品が優れてをれば、御紹介の勞くらゐ取つてもいゝと思ひますけれど、表現したいことが鬱勃として内面に

湧き返つてゐるのは可いとしても、これぢや何だか餘り空漠すぎて、捉へどころがないやうな感じがするんです。酷評のやうですけれど、文章も亂雜で、文字なんかも隨分間違つてゐるようですね。今の文壇の一般の調子から言つて、ひどく懸放れたもので、本屋の方でも出してはくれないだらうと思ひます。」

「は。」

「まあ私なら藝術なんかおやりにならん方がいゝと思ひますね。お見受けしたところ、お子供さんが二人もあつてづゐぶん御幸福な御家庭のやうですが、こんな風に藝術かぶれがしてゐて困るでせう。失禮ですが、藝術に走るつもりで、家庭をお棄になるやうなことがあれば、當方もお困りでせう。藝術で生活して行ければ可いですけれど、それはなかなか困難です。女の場合は殊に危險ですよ。貴方も恐らく餘り好いこととは思つておいでにならないんぢやないかと思ひますが……」

融は小說志願の青年男女に、いつも言ふやうに、しかし今の場合はもつと手嚴しく遣つつけておく必要があると思つたので、無忌に言つた。

「いや、それは私もよく言つたのですが……。」澤氏は辯解するやうに言つたが、差恥を含んだやうな美しい血色が褪せて、顏が持前の白さに冷めてゐた。彼は心から首肯してゐるらしく見えた。

「無論書きたい人は、止むに止まれない內面的欲求から來るのですから、殊にかういふ情熱があるとすると、何か書かずにはゐられないんでせうが、私は不贊成ですね。口の方だけでは解りませんが、これは何をお書きになつたんでせうか。貴方もお困りのやうなことはないんですか。」

「いや、それは私も考へたのですが、若し書く才があるものなら世の中へ出さしてやりたいと思ひますので。」

「才がないとは思いませんね。もつと調節したら好いものかも知れません。何かしらぐら〳〵と目の眩むやうな眞劍なものがあるんですが、何分書き方が粗雜ですから。しかしそれよりも私はこの强烈な藝術憧憬を危險だと思ふんです。」

格子戸の開く音がした。茶の間にゐた妻が出てみると、それは澤夫婦の宿の男衆であつた。小樽から電報が來たから早くお歸りになるやうに言ふのであつた。

融は何んだか變に思つた。多分待遠しがつて夫人が迎ひに寄越したんだらうと思つた。

「何お作はもつと讀んでみたいと思ひますが、若し外にお見せになるやうでしたら。」融は原稿に手をふれながら言つた。

「いや、先生の御批評を伺へば、それで滿足なので……。」

澤氏はさう言つて還つて行つた。

融は言ひすぎたと思つたけれど、後悔はしなかつた。あの業平のやうな良人をもつた、牡丹花のやうな艶やかな夫人が、良人の齎らす報告をきいて、何んなに失望するだらうと氣の毒に思つたけれど、容易に思ひ止まりさうにもない氣風のやうにも思へた。

その晩融の長男が外から返つて來て、あの夫婦が通りを散歩してゐるところを見たと言ふのであつた。

「ひどく目に立つ人だね。」

「さうだね。」

融は後でよく聽かされたが、その時澤夫人は、子供の愛子をつれて、氣遣はしい時間を消すために、大學の構内へ入つて池のほとりの芝居に遊んでゐた。吉か凶かを知るのが不安でならなかつた。

「舟江力をおとすよ。」

良人の澤氏は、さう前置きをして結果を報告した。

それからその翌日、舟江夫人が單身でやつて來た。着つけがちよつと前と變つてゐるやうであつたが、矢張り美しかつた。融は何か知ら近よりがたい一種の雰圍氣を感ずるのであつた。そして其の目や鼻や口や、一つ〳〵について見るよりも、顏全體の感じから姿が、今迄手近に見た何の女よりも魅力があるやうに感じた。

「昨日御主人にちよつと私の考へをお話ししておきましたが……。」

「何うも恐れ入りましてございます。お恥かしいものをお目におかけしまして。」

「いや、作品そのものは實は未だ十分見てゐないんです。しかし貴女が旦那さまや子供さんを棄てゝ、藝術に沒頭するといふことが、貴女方の御不幸になると思ふんです。」

「御心配かけて濟みませんでございます。」夫人は少し紅くなつて、片手を疊に突きながら、

「中央文壇のことなんて、ほんとうに何んにも存じませんので、づゐぶん向ふ見ずだとお思ひになつたでございませうと思ひますの。」

「そんな事もないが……。」

「ですけれど、私は家庭を棄てようと申すのではございませんの。あれを一つ世間へ出していたゞければ、それで潔くことは止めて、忠實な家庭婦人で始終しようと思つてをりますの。小樽では相當社會的にも認められてをりますものですから、出版するために私が作品を揭げて上京したといふことが、もう大業に新聞に書き立てられると言つたやうな有様で、一般に興味の目をもつて見てゐられますし、皆さんから期待されてをりますので、あれだけは是非出して見たう

ございますの。」

「成程ね。それぢやお困りですね。」

「何せ書きたくて書きたくて、仕方がございませんでしたの。もう長いあひだの憧れなのでした。訴へずにはゐられないやうな氣持なのですけれど、何しろ何んな風に書いたらいゝものか、薩張り見當がつきませんでした。しかし書きだして見ますと、思ひのほかすら〳〵書けるものですから、調子に乘つて、夜の目も眠らずに書きなぐりましたの。あれは本の書き放しのものですから、御批評を伺つて、十分手を入れようと思ひますけれど。駄目でございませうか。」

「いや、駄目とも言へないでせうが、ちよつと……。」

「藝術で食べて行かうといふ野心もございませんから、出してさへいたゞければ、自費出版でもようございますの。」

「さうですか。」

「自費出版にしましたら、どのくらゐございましたら。」

「さあ、遣方一つでせうが。」

「宅は三千圓くらゐかけても可いと申しますけれど。」

「そのくらゐあつたら、まあ。」融は「愈々ブルヂョアだな」と思つた。そしてそんなに迄思ふなら、一と骨折つてもいいやうな氣がした。

「どつちにしても、是ぢや駄目ですから、私ももう少し讀んで見ませう。」

「恐れ入りますけれど……。」

それから融は少し彼女の身の上について訊いた。彼女の口吻によると、實家はA―市に近い海岸の町での物持ちで、

ちよつと大きい舊家のやうな話であつた。

「お幾歳ですか。」

「二十四でございますの。」

彼女の話では、A——新聞にゐるO——氏が、ちやうど澤氏の高等學校時代からの友人であるところから、昨日澤氏がその人に逢つて、作品の出版のことについて助言を求めたところ、O——氏も心配して、更に文藝部のD——氏に紹介して、その盡力を仰ぐことになつた。

三

「水は流るゝ」と題した澤夫人の作品が、多くの讀者の前に出現するまでには、それから半年以上もの月日がかゝつた。

その頃には彼女は既に澤夫人ではなかつた。

融はその作品を出すことについて、O——氏の來訪をも受けて、方法について協議も凝したし、日本橋の古い書肆と交渉のあるS君にも話した。

その前に、夫人は二週間ばかり滯在してゐた宿を引拂つて、一度小樽へ歸つたが、間もなく出直して來た。

融は小樽からの夫人の禮手紙を一度受取つたが、筆不精で返事を書きそびれてしまつた。彼女の姿が、暫らくぶりで再び彼の書齋に現れることになつた。

「何うなさいました。」

「あちらでお産をすまして參りましたの。」

「お産があつたんですか。」

彼女は八月の腹をかゝへて、聯絡船で本州へ渡り、そこから長い汽車に搖られて上京したのであつた。そして又た出産のために歸つて行つた。勿論辯護士の玄關を張つてゐる澤氏の用件のあつたことも、想像された。

「それに今度は、澤がこちらに出張所を設けましたので、多分重もに東京にゐることになるでせうと思ひます。」

「ぢや子供さんもつれて。」

「書生も二人つれて參りました。」

「どこに居ます。」

「田端の方に一軒借りましたの。汚ないところですけれど、お序がございましたら、どうぞお立寄り下さいまし。」

彼女の原稿は、その頃O──氏が融の手元から引取つて、文章に手を入れてもらふために、D──氏の方へ託されてあつた。勿論それは夫人の意志でもあり、O──氏D──氏の好意でもあつた。融は手が省けたが、出版については責任を感じてゐた。

O──氏は夫人の小樽へ歸つてゐるあひだに、二度ばかり其の事で融に逢ひに來た。

やがて融の交渉が通つて、日本橋の書肆の手へその原稿は渡つて行つた。間へ入つたS──が、手を入れてゐたD──氏から引受けて持ちこんで行つたのであつた。しかし出版の話は、思ふやうにてきぱきとは行かなかつた。

「そんな人のものだつたら大いに賣れるかも知れませんよ。」

「それに金も出すさうだから。何しろ小樽では女王のやうに花やかな雰圍氣をもつてゐる女らしいんだから。あちらでは出ない前から、評判になつてゐるものと見えるんだ。」

融とS——氏とのあひだに、そんな話が取交はされて、それから分量澤山の其の原稿が、日本橋の書肆へ持ち込まれたのであつた。

出版の行き悩んでゐることは、夫人も知つてゐた。それに初めほどの意氣込みもなかつた。

「あれは今S書肆にありますが、私の序文があれば出すとか何んとか言つて、まだ話が決まらないんです。」

「何んだかそんなやうに、O——さんからも伺ひましたの。」

「しかし序文なんか何うですかね。」

「書いていたゞければ結構でございますけれど、餘り恐れ多いとおもひまして。」

「いや、そんな事はない。たゞ貴女も今度東京へ移つて、文藝をやる便宜もできたのですから、私などの序文なんかつけずに出した方がよくはないかと思ふんです。それに序文は尤も不得手なので……だから書かないんぢやないが、何んだか却つて貴女の讀者の範圍を狹くするやうですからね。」

融は書くのを避けたのではなかつた。この女を引き立てるのは餘りに人氣のない自分の名だと思つたからであつた。

その話はそのまゝになつた。融は交渉中の書肆が愈よ駄目なら、最近出版事業を初めた若い友人のK、A氏に話してみようかとも思つたが、二人の位置から言つて、押しつけがましいこともしたくなかつた。

「家へ來る女の長編を一つ出版してやりたいんだけれど。自費出版でもいいんだけれど。」

「へえ。」

「若し折があつたら……。」

「さうですね。」

そんな事で話は其れきりになつた。

すると或日また夫人が訪ねて來た。初めて來たときほどの生彩はなかつたけれど、それは一つは東京の生活に親しんで來たのと、度々逢ふせゐだと思はれた。しかし何處か悄れた感じであつた。

夫人はいつもの通り、入口の片隅に小くなつてゐて、敷き物をすゝめても滅多に敷かなかつた。それにお愛相をしたさうに出て來る融の妻にも、口數を利かなかつた。融のところでは、何んな人が來ても、妻がそこへ顏を出すことになつてゐた。彼女が性來人に興味をもつてゐるのと、客にお愛相をするのが、一つの趣味でもあつたからだが、お世辭のいへない融も彼女がゐてくれた方が、何時の場合でも助かるやうに思つた。勿論例外もあつた。てんで趣味や話の合はない婦人客などの前に、彼女の出現することは、看てゐる融にも、いくらか苦痛な場合もあつた。對照して見ることを厭はしく思ふことも時々あつた。

澤夫人の場合でも、彼女は手持無沙汰に引退るやうなことが多かつた。融と夫人は遠いところで遠慮がちに話したが、夫人は何んな場合でも長居はしなかつた。

「お忙しいところ恐れ入ります。」夫人はいつでも詫びるやうに言ふのであつた。

澤氏の破産した話の出たのは、ちやうど其の頃であつた。出版費の話が出たとき、融がそれを催めると、夫人は極わるさうにその事を告げた。

「私はちつとも存じませんでしたの。」

融には信じられなかつた。つい近頃まで、妻の作品出版に三千金を惜しまなかつた人が、そして東京へ出張所まで出して、K政黨にも氣脈が通じてゐて、政界へ乘出さうとしてゐるともいふ話なのに、この前夫人から聞かされて、それ

を悦んでゐたのに、それから幾許にもならない今日此頃、あれほど花々しかつた運命が、遽かに顚覆へつてしまふなどは、想像もできないことであつた。

「何うしてゞすか。」

「やつぱりあの人が遣りすぎたんでございませうね。あちらでは信用がありすぎたものですから、つい御影石の山なんて買ひまして、それが巧く行きませんでしたの。」

「山やいけない。」

「さうでせうね。」

「何んとかならないんですか。」

「今整理中なんですの。澤はあちらへ參りました。でも事によると、さう酷いことにならずに濟むかも知れませんの。」

「さうですかね。」

「でも隨分手を擴げてありますから、私たちの運命も何うなつて行くか解りませんわ。」夫人は目を潤ませた。

「あなたの御實家から、救ひの手が延びないんですか。」

「父が生きてをりますうちでしたら、何うにかなつたでせうけれど、兄の代になつてしまつたものですから。それに今までにも、時々三千四千と出してもらひましたの。」

融はまだ本當に合點が行かなかつた。現實味の乏しい夫人の話にもどこかベールのかゝつたやうなところがあつて、てつきり來なかつた。しかし其の時ほど夫人が長く坐つてゐたことは一度もなかつた。

「あの本は駄目でございませうか。」

「さうね。何處でもなか〳〵出してくれないからな。出せば大いに賣れるものかも知れないんだけれど……。」

夫人はやがて暇を告げた。

「いつもお仕事のお妨げばかりしまして。」

融は門を出るまで見送つてゐた。

四

或る日また夫人がやつて來た。彼女は鼠色の洋裝をしてゐた。そのためか顏がいくらか寂しく見えた。洋裝には美しすぎる顏や姿であつた。細過ぎる體に、あの派手な日本服から醸される妖艶さが消されてしまふからであつた。

「度々お妨げをして、恐れ入りますけれど、今日は先生にお願ひがございまして……。」

夫人は身輕な洋裝だけに、氣分も態度も何時もより輕快であつた。それにこの前來たとき話がいつになくしみ〴〵して、泣いたりしたので、親しみが加はつてゐた。遠い距離にあつた彼女が、遽かに父のやうな懷しみを彼に感じてゐた。

「破産問題は何うなりました。」

「何ですか能くわかりませんけれど、澤もお友達の骨折で、こちらで會社へ勤めることになりさうなんです。月給なんて僅かで氣の毒だけれど、やつて見ないかと言つてくれますの。そのうちには何んとか整理がつくでございませうね。」

「ちや小康を得てゐる譯ですね。」

「えゝ、まあ、不安は不安ですけれど。」

彼女はもう良人には頼つてゐられないばかりか、事によると助けなければならない破滅になつたので、出もしない本なんか當てにしてゐられなくなつた。いつそカメラの前に立たうと思つて、良人に謀つてみたところ、澤もその方が成功するだらうと許してくれたといふのであつた。

「それで恐れ入りますけれど、先生はM――會社を御存じでせうと思ひまして。」

「さうね。知らないこともないが……あすこにR――といふ人がゐて、幅が利くんださうです。以前淺草の劇場にゐたんですが、その男なら能く知つてゐます。しかし隨分骨の折れる仕事らしいな。」

「さうでせうね。」

融は映畫界の知識に乏しかつた。過ちなく澤氏夫人を撮影所に紹介する自信がなかつた。若い花形作家のK――氏ならば、夫人をその方面へ紹介するに十分の格があると思つた。映畫に限らず夫人が若し東京に居ついて藝術道に參するつもりなら、もつと若い流行作家の誰々へも紹介して、その力を借りる必要があると兼々思つてゐた。そしてその話を夫人にもしたこともあつた。

「しかし撮影所のことは、私にはよくわかりませんから、一つK――君にでも紹介しませうか。K――君なら顔も廣いし、人氣もあるから、それに近頃あの撮影所に關係してゐるやうだから、貴女の前途に取つても有力な背景となるだらうと思ふ。映畫女優になる決心なら、これから一つ行つて見ませんか。」

「結構ですわ。恐れ入りますけれど、お伴さしていたゞきます。」

融はちよつと妻に其の事を告げて、早速彼女と連立つて出た。街路樹の銀杏が較々黄ばみかけて、初冬らしい日差しが、ペーブメントの上にこぼれてゐた。日和下駄をはいた融は、ごちん〳〵した足取りで、薄鼠色の洋服に同じ色の深

い帽子をかぶつた夫人と並んで歩いてゐたが、何となくそぐはない感じで、極りが悪かつた。

「さあ居るか何うかな。」

K—氏の家ちかくへ來ると、融は空しく留守を食つて歸るときの夫人の失望を想像するやうに呟いた。

「よく出ますから。」

「は。」

幸ひK——氏は家にゐた。融は正直なところ美しい夫人を紹介することを、いくらか得意に感じてゐた。K——氏はちやうど評判の高い或若い美しい人と結婚式を擧げたばかりで、いつもがらんとしてゐた二階の書齋が、鏡臺や長火鉢やお召の座蒲團などで新世帶らしい色つぽい雰圍氣に色どられてゐた。二人は上り口の部屋へ案內されて、暫らくK——氏の上つて來るのを待つてゐた。起きたばかりのK——氏が下へ顏を洗ひにおりた後へ案內されたのであつた。融は彼女を氣輕にしようと思つて、自分でも氣輕な態度を取つてゐた。

「その洋服は……。」

「今度田舍から持つてまゐりましたの。」

「北海道で作つたんですか。」

「は。」

そこへK—氏が、例のにこ〳〵した顏をして上つて來た

「いや何うも失禮を……。」

融は傍に小くなつてゐる夫人を、早速紹介して、來訪の意味を告げた。

「僕では駄目だから、貴方に一つ紹介していたゞきたいと思つて。」

K—氏は躊躇なく引受けてくれた。

「ぢやあ一つこれから、一緒に撮影を見に行きませんか。」

「さうね。是非、何うです。」

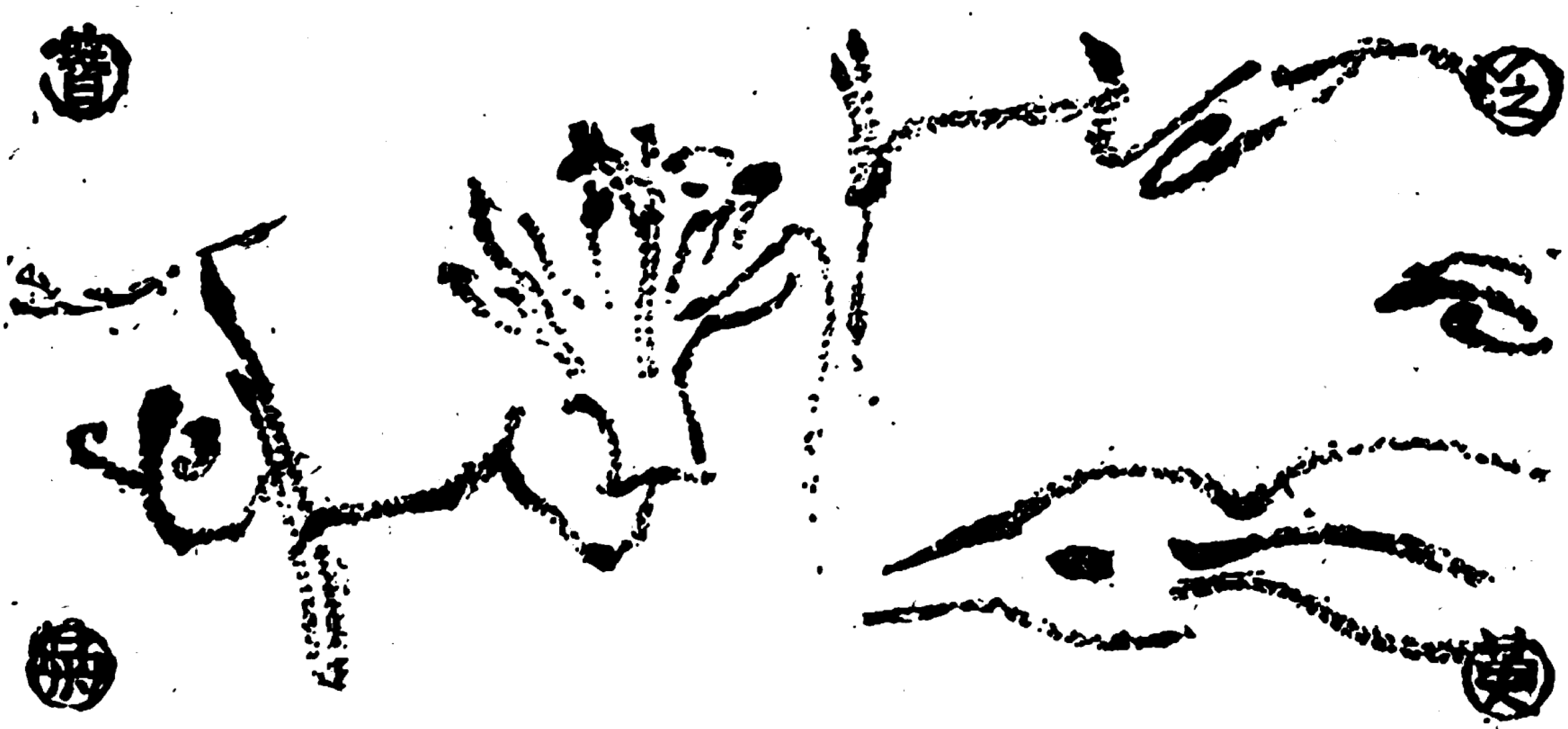
「結構でございますわ。」

融はK—氏に悉皆引渡してしまふ氣にもなれなかつた。K—氏も二人だけではちよつと變だらうと思はれた。

融はこんな身裝でもと思つたので、ちよつと着ものを着かへに家へ歸つて、出直して行つた。K—氏の玄關へ入ると、二人の爽やかな話聲が洩れてゐた。

やがて新調の背廣に着かへたK—氏と三人づれで外へ出た。融は漸く自由な氣持になることが出來た。

（或長編の序曲）



私は見た

里見弴

看護婦が夕飯のために出て行つたあと、能勢は、私の枕頭の小椅子に、窮屈さうに膝を重ね、宙に浮いた方の足頸を動かして、上靴と踵をピタリ／＼打ち合せてゐた。十一月初旬の、ぢきまた冬が來る、と思はせるやうな雨の宵だつた。

「眠られさうかね」

上瞼の裏が痛く、あいてゐるのが苦勞だつたので、話の杜切目を幸に、静かに眼を閉ぢてゐたが、

「うゝん、眠やしない。……なぜ？」

「いや、眠られさうなら、こつちも默つてゐようと思つてさ」

「なんか話してくれよ。ちつとも眠くはないんだから」

「まア、然し、眠られさうなら、眠た方がいゝぞ」

「お芳はどうしたんだい」

「ちよつと歸つて、すぐまた出直して來るつて」

「いつ」

「うん、つい今しがただ」

「何しに歸つたんだ？」

「なんかうちの方の用だらう。それに、もう一週間近くも湯にはいらない、とか云つてた」

ひとこと斷つて行けばいゝのに、と、さういふお芳の仕方を氣に食はなく思つたが、他人の知つたことではなし、そのまゝ默つて、目をつぶつてゐた。

「ときに、あんまりだしぬけだが、あの人、籍を入れてあげたらどうなんだい」

ふわりと、何氣なく云はれたその言葉が、その輕さゆゑに、却つて、あたまにピンとこたへた。思はず首をねぢ向けて、正面に能勢を見た瞬間、直感されたとほりの、何氣なげにでも云ひ出すよりほかに術のない困惑の表情が、微かながら、友達の秀た眉宇を、一刷毛翳らせて過ぎた。その一瞥でたくさんだつた、――それ以上は突き極めたくはなかつた、――私は、靜かに顏をもとの位置に返しながら、

「なぜだい」

「なぜつてこともないが……」

「お芳が、君からさう云つてくれつて賴んだのかい？」

「そんなこたアないよ！」

力の罩りすぎた否定が、却つて私に、肯定の暗示となりさうだつた。顏は天井に向けたまゝ、眼の隅から見やると、能勢も懸命にうけとめて、

「それア、君、斷然そんなことはない！」
「ぢア、君一箇の考から、その必要があると思つたんだね？」
「必要の不必要のと云ふやうな、無論そんな大問題ぢアないが、たゞさうした方がよささうだと思つただけのことさ」
「さうかね」
「さうかねつて、それア、君にすれば、どつちでも差支ないことかも知れないけれど、お芳さんにしてみれば、もう夙うからさうしてほしかつたに違ひないんだし……」
そこで、不自然にボツンと斷れたが、我ながら意地がわるいと感じながらも、私は冷かにあとを促したてた。
「それから？」
「君だつて、何も別に、それを拒む理由なんぞあるまいと思ふんだがね」
「それアない」
「なけれアさうしないか。さうすれば、今からだつて、赤ちやんを、君ンとこの嫡子に屆け直すことも出來るんだし……。矢つ張りそれア、私生子といふのは、物心がついてから、自分でさうと知つた時、……それア君、可哀想だよ。考へなくつてもいゝことまで、きつと、いろ／＼それア考へるに違ひないんだからね。……兎も角、どつちでもいいことなら、この際お芳さんの籍を入れて、それと共に、赤ちやんを、濱崎家の相續人にして置くんだね。その方がいいよ、君……」
この、友達の言葉は、一々もつともだつた。云はれるまでもなく、自分から進んでもさうしたいくらゐだつた。――にも拘らず、私は、抑え難い不快に、思はず知らず荒々しい聲をたてゝ了つた。

「一體、俺は、もう死ぬにきまつてるのかい？」
「な、何を云ふんだい！」
「この際、……いま君は、慥にこの際と云つたね、……この際、相續人をきめて置かなければならないやうな、俺はそんな容態なのかい？まア、それから先にはつきり聞かせといて貰はふ！」
「さうか！」
と、さも餘裕ありげに笑つてみせて、「君は、そんなとこへ考へをもつてつてたのか！　どうれで！……さうか、それで解つた！　どうも、いやに突慳貪だと思つたよ」
「笑つたね？」
「それア笑ふさ」
「無理にもね！……まさか、お察しの通り、君の死んだあと、相續人がきまつてないと困るんだ、とも云へまいからね」
「いや、君がさう云へ、と云ふんなら云つてもいゝ。事實、君の云ふ通り、それは困ることにやア違ひないんだからね。そして……」
「解つてる！　そして人間は、晩かれ早かれ、必ず一度は死ぬものだから、とかう附足さうといふんだらう！　誰が、……誰がくそ、その術に乘るもんか！」
「でも足もないよ。さうどうも先潛に、ひとの云ふことを、惡い方へ惡い方へとばかり釋るんぢア、なんにも云へやアしないよ」
「さうとも！　云はないがいゝ！　そんな底の見え透いた空世辭なんぞ、ちつとも聞きたかアないんだから！」

「困るなア！さうどうも……」

「困れよ！いくらでも困れよ！」

能勢は、急に噴き出した。――今度は無邪氣らしかつたが、

「まるで子供だね」

さう云つてなほ笑ひ續けた。

私にしてみれば、その子供扱ひが、何より癪にさはつてたまらない矢先だつたが、でも、さうはつきり云はれてみると、有繋に自分も顧られた。――先刻からの應酬を、第三者の目で、たゞその現はれた形だけについて觀るならば、成程私は横車を押し、先方の氣持の裏へ裏へとばかり潛り込んで行つた態はあるだらう。また、それに對して、不擇な顔ひとつ見せずに、始終笑ひをもつて應へてゐた能勢は、自分より遥に上手の人間らしく見えたに違ひない。約て云へば、いかにも子供扱ひをうけるのがあたりまへのことに思へさうな場合だつた。それだけに、さういふ世間並の觀方を笠に着て、いやに納り返つてゐる友達の態度が、いよ〳〵もつて癪にさはつた。

「馬鹿！」

反應や輕蔑で一杯になつた肚の底から、この言葉が迸り出た。

これには、能勢も、吃驚して私を見返した。……ピタリと目と目を合せてゐたが、…………本氣になつた時の目こそは、あけ擴げた窓だ！　そこに、私たちは、お互の心の奥を觀た、――とまア、その時の私には感じられたのだ……。

急に和み穩いで來た心持が、じわ〳〵と、私の眼に涙を送つてよこした。同時に、能勢の眼もうるんだ。お互の眼に涙を見たことで、私たちの感情は誇張された。――氣持よく涙が零れ落ちた……。

能勢とは、小學校時分からの、ほんとうに親しい友達だ。おまけに、四月前に、私とお芳との間に生れて來た義輔の、再生の恩人と云つてもいゝ。

嫁つて間のない家内に、西班牙風邪といふ手應のないやつで死なれてから、私の鰥生活は八年つゞいて、――それくらゐだから、二度と結婚する氣なんぞなかつたのだが、去年、ふとしたはずみで、家内が故家からつれて來てそのまゝづッとうちに居ついて了つた女中のお芳と、夢にも思ひがけない、さういふ仲になり、さうなつてみると、女のいゝ性分がはつきり解つて來て、以來私は、しみ／＼本氣で愛してゐるのだ。

ほどなくお芳は姙娠したが、十一ケ月を越しても生れないので、帝王切開をうけ、無事に胎兒を取り出さすことが出來た。一貫百二十匁もある大きな嬰兒だつた。案じられたお芳の手術が、醫者も驚いたほど順調な經過をとつたのに引き代へて、この、憎々しいほど發育した嬰兒の方は、生後五日目から、黑吐病といふ奇病にかゝつて、みる／＼うちに小さくしぼんで行つた。それもその筈で、便に混つて、どん／＼血がおりて了ふといふ厄介な病氣だつたから、忽ち死は目の前に迫つて來た。

輸血でもしてみるほかはあるまい、といふだんになつて、私は、自分のさう丈夫でもない體を顧慮してゐる遑はなかつた。どう考へても、他人の血なんぞ注入されるのは可厭だつた。言下に私は、自分の血を役にたてゝくれるやうにと申出たが、醫者は、私の細い腕を掴んでみたりしながら、亞米利加あたりには、平生うんと滋養を食つて置いて、一回二十弗くらゐで生血を賣る、變つた商賣の男もあるんだが、と、さもものの足らない顔つきで話した。よしんば、日本に

も、さういふ生血賣があつて、電話一本で早速かけつけて來てくれるとしても、そんな奴の血を、我が子の體内に送り込むやうな氣になれるもんではない。私は、とてもやりきれない亞米利加主義の好適例と、醫者の無駄口とに腹をたてて、一時も早く自分の血をとつてくれるやうに急ツついた。

嚴密な檢査で、私の血液に、どういふ病毒も潜んでゐないことが慥められてから、醫者も仕方なしに、痩ツぽちの私で間に合せることにした。――結果は頗る有望だつた。私は躍りあがり、それからは、毎日のやうに生燒のビフテキなどを食つて、二回目を、まだか〳〵と催促した。五日、一週間と間をおいて、四回目のすんだあと、或る日私は、會社の事務机の上に頬を倚せかけたと思ふと、それきり意識を失つて了つた。それで、知らない間に病院に擔ぎ込まれてからもうかれこれ三月になるが、今だに臥たつきりだつた。

その間に、――これは近頃になつて漸く聞かされたことだが、能勢が、みづから進んで、その健康な體から七回までも血を頒ち與へてくれたおかげに、義姉は、眞に九死のうちに一生を得、お芳も、いゝ按配に肉のあがりが早く、すつかりもと通りの體になつて、相前後して、二人ともとう夙に退院してゐた。

最後にとり殘されたのが私だつた……。

……輕く叩して、返事も待たずに、いきなり看護婦がはいつて來た。

「今、ちよつと話があるから……」

能勢が、慌たゞしく、手巾で顔ぢう撫で廻しながら、鼻聲でさう云つて制めたが、看護婦は、薄暗い火影に、私の涙にも氣がつかない樣子で、事もなげに、

「僕がみといてあげるよ」

「それに、お藥もありますし……」

平氣で近よつて來た。能勢は、枕もとをあけると見せて、默つて椅子から立ちあがり、窓際に佇んで、雨の夜のおもてを眺めてゐた。

まだ濡れ乾かない私の頰に氣がついてから、やつとのことで場合を會得した看護婦は、急にまがわるくなつたか、檢溫も投藥もそこ／＼に、やがてまた慌たゞしく出て行つて了つた。

「降つてるのかい？」

うは目づかひに、幅の廣い友達の背なかを見やりながら、繼穗なく私はかう聲をかけた。

「降つてる。……散つた銀杏の葉に、瓦斯燈の灯が映つて綺麗だ」

そば近く寄添つてゐた心を、急に手荒く突き離されて、私は、寂しく自分ひとりに返つた。……落葉の美しさがにじみ込んでゐる心とは思はなかつたのに……。

けれども、ひとりに取り殘されたことで、却つて私の心持は鎭まり落ちついた。能勢が、どれほど自分たちの上に深い親しみをもつてゐてくれるか、そんなことは知れきつた話だつたが、それに甘へて、事每に突ツかゝつて行かうとする私自身が、今更のやうに情なく顧られた。——結局人間は一人ツぼつちだ。それはほんとうのことだ。そのほんとうのこと知つてゐるなら、どんな場合でも、自分ひとりの、しつかりした心持をもつてゐなければ駄目だ。ちつとでもたよる氣があると、忽ちそこから崩れて、何も彼もだらしなく、ぐちや／＼ツとわけ解らなくなつて了ふのだ。いつでも、ほんとうのことだけは忘れちア駄目だ……。そんなことを思つてゐた。——これまでにも、何遍考へたか知れない

ほどの解りきつたことを、まるで、新しい大發見のやうに……。

能勢が、小椅子に戻つて來でかけた。

「ぢア、今の話は、當分まアそのまゝにして置くかね？」

私は、急に弱々しくなつて、どうといつて、きつぱりした意思の決定を失つて了つた。

「張合のない云草だが、正直、そのことは、僕はどうでもいゝ。お芳がさうしたいと思ふんなら、さうしといてやつてくれ給ひ。御面倒序に、一切君に任せるから」

「さう！」

能勢は勇みたつて「ぢア、さうすることにきめやうぢやないか。お芳さんもお芳さんだが、子供の將來のためには、是非ともさうしといてやりたいからな」

友達の、その調子について行けないばかりでなく、私の氣持は、ますく滅入り込んで了つた……。死にたくない死にたくない、と思つた……。

「もし俺が死んだら……」

或る晩、ふと私がさう云ひかけると、忽ちお芳が、まるで子供の泣面のやうに、働りなく顏ぢう皺だらけにして、

「もうどうぞ、後生一生のお願ひ、それだけはどうぞ……」

と、掌の平を合せてみせた。その様子には、引きよせて愛撫してやりたいものがあつたが、私は、自分の頰に、ほんの微な笑ひの影さへ許すまいと努めながら、その日一日、あたまにこびり着いてゐた考へをさらけ出さうとした。

「俺が死んだら、なんでも大抵なことは、能勢に相談するといゝ。金のことも任せて大丈夫だ。たゞ、もしヒヨツと、お前に誰か好きな人でも出來たといふやうな場合……」

「そんなこと！……わたくし……」

「まア、默つて聽いとき！萬一さういふことが起つて來たら、その時には、誰にも、……能勢にだつて云はない方がいゝよ。聞けば、誰だつて、大抵な人ならとめるにきまつてるし、とめられてよすくらゐなら、初めのうちに、さういふ氣持を、自分で押し殺して了つてもすむわけなんだから。ね、さうだらう？」

「どうしてそんなこと仰有んでせう」

半分泣きかゝつて、「いくらなんでも、わたくし、そんな……」

「お前だからさう云ふんぢアない。又女つてものは、誰でも必ずさうだ、といふ風な考へ方をしてゐるわけでもないんだ。然し、さういふことゝいふものは、いつ何時、どこで、どういふ風にして持上つて來ないとも限らないからね。現に俺たちがさうぢアないか。お前だつて、俺だつて、八年の間、毎日のやうに顔を見合せてゐながら、夢にも思はなかつた事だ。それだつて、かうなつてみれば、必ずしも出鱈目な、一時の出來心だつたとも云へないんだ。その證據には、――一番早い話が、あとでちつとも後悔なんぞしたかつたぢアないか。これは決して負惜ぢアない。また、自分で自分を慰めてるやうな氣持でもない。ほんとに俺は仕合だと思つてるんだ。十二分に滿足してゐるんだ。さういふわけだから、あんまり愉快な話ぢアないけれど、どうか氣持をわるくしないで聞いとくれ。よく解つておくれ。ね、解るだらう？」

「それはよく解つてますけれど……」

「將來のことか？……だから、必ずさういふことが起つて來ると云ふんぢアないよ。もし、萬が一……」

「いゝえ。萬が一にも、萬々が一にも、そんなこと、決して……」

「まアいゝ」

私は穩な氣持で微笑へた。「お前が、今さう思ふのはあたりまへだ。俺だつて、これが、反對にお前の方から、一寸さきは闇の世の中ですからね、もしヒョツとわたしに好きな人でも出來たら、なんて云ひ出されたとしたら、無論それア不愉快なことは知れ切つてるよ。どんなに理屈ではもつともだと思つたつて、それアきつと慍る、滅茶苦茶に慍る……。だけど、時が經つて、萬一さういふ場合に臨んだとしたら、その時には、俺がこんなことを云つた氣持が、きつとよく嚥み込めるに違ひない。……さう、その時にはまだほんとうには解らないかも知れないが、それからまた三四年も經つたら……」

「後生ですから、どうぞもうほんとうに勘忍してくださいまし……」

「あゝ、よさう。……氣の毒だ、可哀想だとは思ふんだけど、俺も、一遍は云つとかないと……」

張りつめた氣持ひとつで、こゝまでは保つたが、と、忽ち目の前が昏んで行つた。心臟に掌をあてがつてみると、低くたよりない脈が、ドヽ〱ドヽ〱とのべたらに刻んでゐた。

醫者はなんと云はふとも、その掌の平の感覺には、あんまり正直すぎるほど、總てのことがはつきり映つて來た。痩さらぼえた肋間に、一握の生命が、どうやらかうやら脈動してゐるだけのことだつた。

「おい」

「は」

「なんだ、まだ泣いてるのか」

「いゝえ」

と、襦袢の袖口で鼻の穴を突きあげるやうにして、「なんで御座います？」

「不愉快な話の序に、もう一つ云つちまふがね、俺は、正直いふと、義輔の體のなかに、あかの他人の血が泥り込んだことに就いちア、理屈は兎も角、あんまりいゝ氣持はしてゐないんだよ。……無論あの子にとつて、能勢が、再生の大恩人だといふことは解り切つた話で、それを今更兎や角いふんぢアないが、然し、その話を聞かされた瞬間の、俺の氣持を云ふと、どうも、多少自分で扮飾したやうなところがあつたな。これを、親として、有難く思はない法はない、といふ風に、自分で自分に云ひ聽かせて、無理にも納得させて了つたやうな、……と云ふと少し大袈裟になるが、……無論それほど意識的ぢアなかつたが、然し、その喜びや感謝の氣持に、どこか純粋でないものゝあつたことは慥だ。その點、ひとつは、あとから聞かされたからで、能勢の、それこそほんとに獻身的な申出を、その場合、ぢかに聞いたとしたら、ヒヨツとすると斷つてゐたかも知れないけれど、有難い！と思ふ感激は、もつと〱純粋だつたらう。それア、きつとさうに違ひないんだから、いま云つたやうな俺の氣持には、いくら病中だつて、俺に一言の斷りもなしにやる奴アない、といふやうな不満もあつたんだらう……」

「ですけれど、それア、そのときにも申しあげたやうに……」

「それアよく解つてるんだ。その時分の俺の容態が、とてもそんな相談に與かれるやうなもんぢアなかつたつてことは、それア醫者に云はれるまでもなく、自分でちやんと承知してゐるんだ」

「それもさうですけれど、第一、相談なんて、とてもそんな悠長な場合ぢアなかつたんですから……」

「だからさ、さういふ處置をとつたことを、今更兎や角いつてるわけぢアないんだよ。第一、能勢の親切に對しても、

假にもそんなことの云へた義理ぢアないんだし……」

「さうですとも！」

ポンと出鼻を叩かれた態に、口を噤んで、思はず私は、改めてお芳の顔を見詰めてゐた。……そこには、悪意といふほどではないにしても、慥に「ちつとおたしなみなさい！」といふくらゐの、積極的な氣强さはあつた。――それだけでも意外だつた。私に對して、爪の垢ほどの反意でももてるお芳とは、夢にも思はなかつたのに……。事は少さいが、私の驚きは大きかつた……。

無言のまゝちつと見詰められて、忽お芳はしよげ返つて了つた。伏目に、膝の上で、兩掌を絞りあげてゐた。――それを見ると、可哀想になつて來た。

「だから、俺の云ふことが、むちやだつてことは、自分でもよく承知してゐるんだよ。他人の子に、一滴でも惜しい生血を頒けてやるなんて、並一通りの親切くらゐで出來るこつちやアない。それを、そのおかげでやつと命をとりとめた子供の親から、あんまり愉快でない、なんて云はれたら、……だから、俺ア、初ツからむちやだつて云つてゐるんだ。實際、そんな亂暴な話つてないよ」

「え、ですからわたくしも、一生かゝつても、御恩返しのしやうがないやうな氣がして、……いつそのこと、あのまゝ義ちやんも助からず、わたくしも死んでゐたら、なんて、勿體ないことを思ふことだつてあります。……ほんとに、その方がよかつたかも知れない……」

急にお芳は、襦袢の袖口を引き出して目にあててると、もの寂しげにしく〳〵泣きだして了つた。

その氣持は、私にはよく解つた……。

よく考へてみれば、私さへ生きてゐれば、すべてなんでもないことなのだ。義輔の體のなかに、他人の血が流れてゐようとどうしやうと、大した問題ではないのだ。能勢の親切だつて、一生有難くは思ふけれど、重くるしく恩に着て、そのためにどうのかうのといふやうな問題ではないのだ。……なほよく考へてみれば、私がだん／＼衰弱して行くばかりだといふことが、……それがいけないのだ……。

「俺が死んだらどうする」

「すぐわたしも死んで了ひます」

豫期した通りの返答だつた。——私は、それを、十分滿足に感じながら、口にはさうは云へなかつた。

「そんな馬鹿なやつがあるもんか！」

望んでゐた通りの答を、私はかう、一言のもとに跳ね飛ばした。さうしながらも、いくらなんと云つたつて無駄だ、といふ氣はしてゐた。私がゐなくなつたあと、生きて行けるお芳とは思へなかつた……。

「假令どんなことがあつても、お前は死んぢやアいけない。自殺なんて、よく／＼の弱蟲のすることだ」

「もと／＼わたしは弱蟲なんです」

涙のなかからやつとさう呟いた。

「そんな風に、自分で自分にたかをくゝるのが、お前の一番いけない癖なんだ。どんなことがあつても、決して氣をおとしちやいけないぞ！いゝか！おまけにお前はもう義輔といふものゝ阿母さんなんだから、自分一人の體のやうに、勝手なまねは出來ないぞ！」

「あの子だつて、一度も二度も死にかゝつて……、助かつた方が不思議なんですから……」

「だからさ、……だから尚更大切に育てあげなくちアならないわけぢアないか。ない壽命なら、夙にそのとき死んでる筈だ。それを、不思議にも助つたつてことは、謂はゞ特赦の恩典にあづかつたやうなものだ。尚更大切にしなければならない一生だ。それを……、そんな勿態ないことを云ふと罰があたるぞ！」

云つてゐる私の目からも、涙がとめどなく流れた。私は一生懸命ほんとうのことを云つてゐたのだ。決してだましにかゝつてゐるわけではなかつた。それだのに、さう云つてゐる私の目の前には、まづ子を殺してから、自ら死なうとしてゐるお芳の姿ばかりが映つて來た……。

「死んぢやないぞ！　決して死んぢやアいけないぞ！」

云ひながら、私は布團から手を差しのべた。お芳がそれを、しつかり掴んでくれた。

「さア、約束しておくれ！　決してそんな心得違ひはしませんつて、ちやんと約束しておくれ！」

左の袖で顔を覆ふたまゝ、すぐお芳が、ガクリ〳〵と大きく頷き返した。

「よし！　きつとだね！　約束したよ！　堅く約束したよ！」

もう一度頷かせて、ほツと私は、安心のといきを洩らした。

……萬一のことがあつたら、義輔だつてわたしだつて、一刻も生き殘りはしやしません！——まるでさういふ堅い約束をさせたやうに、私の心がそれで安まつた……。

もう私は口が利けなかつたが、お芳には、なんでも心持が通じた。

「……目をあげるとすぐ、顔をよせて來て、耳もとで、

「なんです？義ちやんですか？」
泣くのを見て、慌たゞしく出て行つた。
足もとの方へ目をやつた。と、そこから能勢が立つて來て、
「なんだ？　なんか用か？」
といふやうな顔つきを差し出した。
私にはもうなんの未練もなかつた。たゞ、お芳にも義輔にも天壽を完して貰ひたかつた。ほんとうに、心の底からさう希ふやうになつてゐた。あとの心配といへば、五日前の晩の約束だつた。
「お芳に氣をつけてくれ」
その氣持は、けれども、もつと輕い意味にとられた。
「大丈夫だよ、きつと引きうけた！　安心しろ！」
さう一言々々に力を入れて、はつきり云つて聞かせられた。
私は、口の利けないことを、ちよつともどかしく感じた。
眠つてゐる義輔を抱いて來た。着ぶくれた胸のところを抑えて、顔全體をよく見えるやうにする手があつた。見ると、それは、お芳のうしろから廻した能勢の手だつた。節高な、なんとなく父親らしい手だつた……。
義輔の、はち切れさうな頰を見て、こんなものを、さうむざ〳〵殺されてたまるものか、と思ひ、續いて、まさか殺す氣遣はあるまい、といふ安心も來た。
「もうよし、あつちへつれてけ」

といふ氣持で首を振つた。うしろからの手が、肩ごしに子供を宙に吊りあげ、それをまた看護婦が誰かに渡してやつた。

お芳が私の手を把つて、大きな涙をボロボロこぼしてゐた……。

私は目をつぶつた。

……今度あいた時には、お芳と並んで、能勢も泣いてゐた……。

ほどなく、たうとう私は死んだ……。

……私は見た……。

お芳が、私の名を刻んだ石の前に、首を垂れ、掌を合せてゐた。悲みをほかに、心が重かつた。今だに生きながらへてゐるといふことは、私と交へた言葉を反古にしなかつたればこそだ。それが、——その約に反かなかつたことで、却つて、私の前に面伏な氣持にされてゐた。少くとも、こゝでは、——私の名を刻んだ石の前では、そのことについてなんにも考へまいとしてゐた。

「義ちやん」

振り向いて、子守女の方へ手を差し延べ、そろそろ肝笑ひをするやうになつた嬰兒を抱きとりながら呟いた。「さア、阿父樣にあ！んなさい。これ、あんたの阿父樣ですよ」

正面に額を石へ向けて、自分の膝をかゞめることによつて、幾度も子供にお辭儀のまねをさせた。

……私は見た……。

その時、一番近い停留所と、この墓地との間を往復する乗合自動車のなかに揺れながら、能勢が、ヒョツとするとお芳さんと一緒になるかも知れない、と思つてゐた。その、なんでもない事實の豫想が、心をあたゝかにした。組み重ねてゐた足を組み直し、衣嚢から煙草を出して火をつける拍子に、膝を枕に、腰掛にねかしてあつた花束が、床へすべり落ちた。そのパラフィン紙の包を、今度は大切さうに片手に捧げ持ち、なほ揺られて行つた。

……私は見た……。

茶屋から案内にたつた印袢纏の男を振りむいて、

「赤ちやんもつれて來てゐなすつたかい？」

「へえ」

男は、閼伽桶を右から左へ持ちかへながら、ぶつきら棒に答へた。能勢は、十日ばかり見ないが……、と、義姉に現はれて來る早い發育を樂しく思ひやつた。

……私は見た……。

兩方からの歩みが、丈の高い松の木の下で出逢つた。

「まァ、態々どうも恐れ入りました」

お芳は、今したばかりの襟巻をかなぐり取りながら、「丁度日曜にあたりましたから、多分おいでくださるまいと思つてましたのに……」

「なぜ？日曜でなけれァ、午前なんぞに來られやァしませんよ」

「でも、たまの日曜をひとつお外しになるのは、ずゐぶんお辛いんでせう？」

「どうして？」

「ゴルフ」

「あゝ」

と、快濶に笑つて、「なに、それァお午ツからだつて……」

「ほんとに、いつもお忙しいところを有難う御座います」

「いや」

能勢は、挨拶もそこ〳〵に、うしろに從つた子守のそばに立ちよつて、「義坊、どうした！どれ、かしてごらん」

「おかげ様で、この節はすつかり丈夫になりまして……」

「よう、重くなつたな」

目方を量るやうに上下（あげさげ）して、能勢は、そのまゝ私の墓石の立つてゐる方へ歩きだした。

子供と引きかへに、子守がうけとつた花束を見て、

「まア、綺麗なお花ですこと！」

「義坊、もうお前、阿父さんとこへ行つて來たのか」

「えゝ、お先に……」

お芳が引きとつて答へ、子守からうけ取つた花束を、子供の鼻の先へ突き出してみせた。「けーけでしよ、あんた、見えて？」

垣のそとに立つて、茶屋の男が扉をあけるのを待ちながら、

「ヤア、もう一杯だなア」

「なんでしたら、竹筒をとつて參りませうか」

「あゝ、御苦勞だけれど、ちよつとひとつ走り行つて、持つて來て貰はふか」

「でも、ずゐぶん遠いんですから」

と、お芳が、「もしなんでしたら、こゝには少し分けておあげして、うちの佛樣の方に供へさせて頂きませうかしら。……なんて、あんまり綺麗だもんだから惜しくなつて……」

「えゝ、それアそれでもよござんすよ」

「よござんすか？　ぢア、さうさせて頂きませう」

「どつちへ供へたつて、結局おんなじ佛樣のことですもの。……ねえ、義坊！」

云ひながら、子供を守に返し、外套と帽子をぬいで垣根にかけた。

……私は見た……。

私の名を刻んだ石の前に、恭しく頭をさげた能勢の心持は、宗教となんの係りはなくとも、墓參といふことを、誠に快い行事の一つと感じる、その、ごく輕い意味で、ほがらかに明るかつた。その上、私を愛惜する氣持も、まだ生々しくて、深かつた。

入れ代つてお芳が、もう一度そこへ來て頭をさげたが、今度は、私については、なんの感じも起さずに、すぐ花立の前にしやがむと、能勢の持つて來た花束のパラフイン紙を丁寧にほどき、一莖づゝ拔き出しては、前から立つてゐた花のあつこちへ挿し込んでゐた。

「いゝ天氣ですね」

うしろで、外套を着ながら、能勢が、晴れ亙つた郊外の冬空を見あげて云つた。

「えゝ、いゝ按配に穏で……。今からすぐに駒澤ですか」

「えゝ。……八郎がゐたら、今頃は、無論もうあつちで一緒になつてますね」

「貴方にも負けないくらゐ好きで御座いましたわね」

「さう云へばね、僕、あんたにちつと御無心があるんですがね」

「へえ、なんでせう」

「いづれ僕も、お形見分にあづかれるんだらうと思ふんだが、どうせ頂くもんなら、僕のほしがつてるものを貰つた方が、故人だつてきつと喜ぶに違ひない……」

「だから、遠慮なく云ひますが、僕、クラブのセットがほしいな」

「えゝ、それアさうですとも……」

「クラブつて……?」

「ゴルフの……」

「あゝ、あの棒ですか」

「いゝせう?」

「えゝえ、いゝどころぢアありませんわ! どうぞおもちくださいまし」

「さう、それア嬉しいな! ぢア、早速歸りによつて貰つてつてもいゝかしら」

「えゝ、さうなさいましな。なんにも御座いませんけれど、御飯でも差上げたいと思つて居りましたところなんですが、折角かきいれの日曜日をお防げしましても、却つて……」

「いゝえ、そんなことはないけど……」

「ぢア、是非おいでくださいましな。支度つてほどのこともして御座いませんのですけれど、ヒヨッとしたらこゝでお目にかゝれるかも知れない……、さうしたら、御都合でうちへいらしつて頂かうと思ひまして……」

「さうですか。それアどうも……」

「およろしいんでせう?」

「えゝ……」

「でも、無理においでねがつても、……わたくしばかりぢア、お話相手にもなりませんしね……。ほんとにつまりませんわね」

「實際つまりませんよ。駒澤に行つてゝも、ヒヨイとうしろから來て、肩でも叩きさうな氣がして……」

そこらの木の枝で、さかんに鵯の啼き交してゐるのが、冷く爽に空氣に響き亘つた。

……私は見た……。

廣間の突きあたりの、階段の下の戸棚にはいつて、お芳がガタ／＼いはせてゐた。

「重いでせう。僕が出しますよ」

能勢も立つて行つて、はいらうとしたが、なかの暗さに、ふと足を止めた。

「よござんす。大抵だせさうです」

「まア貴方、こつちへお出なさい」

廣さから云つても、二人は窮屈だつた。——入れ代つて、能勢がはいり、サックごと引きずり出して來た。

「これアね。細井君だつたかの倫敦土産で、なか／＼上等なんです」

「さうですか。わたくしなんぞにはなんだかさつぱりわかりませんけれど、ずゐぶん大事がつて……」

「さうでせうつて。八郎なんぞに振り廻させるにやア、ちつと勿態ないくらゐの代物ですよ」

手當り次第に、お芳は一本抜き出すと、見やう見眞似に握り拳を重ねて、

「なんでも、こんな風に持つんですわね」

能勢が、笑顔で、

「うまい／＼、それでいゝんですよ」

褒められると、急にてれて、お芳は、そこらの壁に寄せかけやうとしたが、握りの革が、むかふから掌の平に吸ひついて來た。——無論、それは、私の掌の脂が、乾燥した冬の空氣にも係らず、まだそこをねとつかせてゐたからだつた。

「あ」

音にもれぬほどの叫びをあげて、お芳は、慌たゞしく兩掌の平を揉み合せた。顔色があせてゐた。

「なに？」

「いゝえ……」

……私は見た……。

能勢にも、とは云へ、その感覺は、握らずして傳はつてゐた。

「うちの佛樣」と云つても、洋館のことで、別に佛壇らしい佛壇があるわけではなく、たゞ私の寫眞の引伸しが、額緣に入れて立てかけてある居間(シティング・ルーム)の飾棚に、墓地から持つて歸つた花束が、遺愛のペルシヤ壺に生けられてあつた。——やがて二人は、その前を通つて、食堂にはいつた。

……私は見た……。

空の暗い夏の夜、ベランダの床を匍ひずり廻つて、ひとり大人しく遊んでゐる義輔を間に見おろして、能勢とお芳とが、籐椅子の差向ひに凉んでゐた。

「相變らず目が堅いんだな」

「えゝ、今日はまた特別お晝寢が永かつたから」

子供についてゞも語るよりほかに、これといつて話題はなかつた。それは、なくてもちつとも困らなかつたが、反對に子供は、是非そこに、二人の間に置きたいもので、それでゐて、ほんの微かながら、邪魔もの〻感じだつた。

食初(くひぞめ)の祝に、能勢の贈つた、柄を輪にした銀の匙で、がり〱床を掻いて廻つてゐたが、ペタンと坐ると、いきなりそれを頰張つた。

「おい〱、そいつアちつと汚いね」

「駄目よ、お口に入れちァ」

お芳が取りにかゝると、子供は、それを啣へたまゝ、クルリと尻を向けて逃げだした。

「あぶない、あぶない！　それつア咽を突く……」

「義ちやん、あんた……」

抱きあげられて、丸々と繃のはいつた手足をじたばたさせてゐるのへ、能勢が、卓から林檎を一つ取つて立ちあがり、鼻の先へつきつけながら、

「おい、これがいゝよ、これが」

子供が、すぐそれへ手を出す隙に、お芳は、うまく匙を取りあげて了つた。

「噛るかな？」

「大丈夫ですとも！」

「ぢア今度はそいつで遊ぶんだ」

もう一度床の上におろされた子供は、自分の頭ほどもある林檎の轉げて行くあとを追つて、嘻々と聲をたてながら、片手跛行にそこらぢう匍ずり廻つた。――見おろして、二人は、樂しげな微笑を浮べてゐた。互に、その顔つきを、第六感的に心の壁に映しながら……

幸福な無言が永く續いてから、

「さア」

と、能勢は、籐椅子を軋ませ立ちあがつた。「そろ〳〵出かけませう。子供のすることを見てゐるときりがない」

「まア、およろしいぢアありませんか。……まだお早いんですよ」

「あんまり早くもない」
能勢は、絹紬の、ダブ〳〵した背廣の袖口をまくりあげて、「九時二十分……。うちイ歸つて十時……」
「いくら馴れても、ほんとに不便なとこで……。もうどうせこんなに廣くは要らないんですから、もつと小じんまりした家で、……あんまりまた騷々しいとこも可厭ですけれども、もうちつと市內へ近いところへ越したいと思つてるんですよ。どうでせうね、いけませんかしら？」
「いけないつてことはないけれど……」
「こゝは、折角御自分ですつかり設計なすつてお建てなすつたうちですから、手離すのは可厭ですけど、いゝ人を見つけてお貸するなりどうなりして……」
「さうねえ……」
「ほかのことは兎も角として、義ちやんが、急に熱でも出したとかなんとかいふ時なんぞ……」
「それに、この頃のやうに、かう世の中が物騷だと、普段だつて……」
「さうなんですよ。殊にこのごろの郊外と來たら……。泥棒くらゐは仕方がないとしても、なんてえと切つたはつたでせう？　ですからねえ……」
「まア、藤吉がゐることはゐるが……」
「あの人だつて、一週に一度は宿直の晩がありますしね……」
「さうねえ……」
「越しちやアいけませんかしら？」

「それア、そんなこと、どうしようと貴方次第ぢアありませんか。はたで、いけるもいけないもありませんよ」
いつの間にか、能勢はまた坐り込んでゐたが、ふと氣がつくと、氣忙なげに煙草に火をつけながら立つて、「然しまア、さう急ぐこともないんだらうから、貴方も、なほよく考へて御覧なさい。同じ越すにしても、一周忌でもすましてからとかなんとか、……どうでもいゝやうなことだけれど、いろ〳〵またそんなこともあるかも知れない」
「さうですね。……わたしにしますと、ひと思ひに越して了つた方が、いろ〳〵思ひ出すたねも少くなつて……。でも、それア……」
「成程ね、さういふこともありますね」
「でも、それア……」
「まア、なほよく考へお置きなさい。いよ〳〵越すとなれア、家は、どこでも、今わりにあいてますから、見つけるのには雑作ありませんよ」
「さうですかねえ」
「……ぢア、いづれまた……」
「さよですか……」
「どうも御馳走さんでした」
「いゝえ、もう。いつも、なんにもお搆ひできませんで……」
云ひながら、二足三足玄關の方へ行きかけた時だつた、ベランダから庭へおりる階段を、コロ〳〵コロンと林檎のころげ落ちる音がした。――見返る二人の目の前に、義輔が、コロリと框からでんぐり返る瞬間の姿があつた。聲もたて

ずに、互に押しのけるやうな勢で跳んで出た。——白い少さな洋服姿は、ほのかに、五段下の三和土の上にあつた。敏捷く駈けおりて、胸へ抱きとつたと思ふと、そこへ折り重つてお芳が轉びかゝつて來た。

「大丈夫々々々！」

「だつて、泣かないぢアありませんか」

ひと塊になつてベランダに駈けあがり、電燈のもとに立つた。

……私は見た……。

藤吉や子供には、かすり傷ひとつなかつた。吃驚して、遽には泣聲もたて得なかつたのだ。それが、能勢の手から、母の手に渡ると、急にワツと泣きだした。

藤吉や子守も跳んで來て、みんなで體ぢう調べ、熱までとつてみて、いよ〳〵何事もなかつたと知れた頃には、泣き方も大ぶん鎭まりかけてゐた。

「子供には神様がついてるつて云ふが、まつたくねえ……。何しろ、あの三和土まで行つたんですからねえ……」

「ほんとにねえ……」

お芳も階段口に來て見おろした。怖しさは、却つて今になつて胸さきを冷させた。

「あゝあ、ほんとに可怕かつた、可怕かつた！」

その調子がいかにもむきだしだつた。少しのつくろひもなかつた。珍しいものでも見るやうに、能勢は、ちつとお芳の横顏を見詰めた。——いきなり目のなかゞ熱くなつて來た。

「よかつた、よかつた！

亢奮から、お芳は、耳朶を眞赤にし、娘々したお喋りになつて、なほ獨語に呟き續けた。「大丈夫、どんなことがあつたつて、義ちやんだけは、きつと立派な人に育てあげてお目にかけます」

やがて子供の泣きじやくりが、だん〱に、靜な寢息に變りかけた。輕く背なかを叩き、細々と子守唄を歌つてゐたお芳は、目つきで「ちよつと失禮します」といふ意を通はせると、足音を忍んで二階へあがつて行つて了つた。

あとで能勢は、その胸に對して、こつちからも、「僕ももう歸りますから」といふこなしをして、すぐ席を立てばよかつた、と思つた。そのくせ、暗い空に目を放つて、身動きひとつしずにゐた。

階段から眞直こつちへ歩みよつて來たお芳の微笑で、能勢は、漠然と、今がその時だ、と思つた。迎へるやうに立ちあがつて、さて然し、癖になつた低聲で云つた言葉は、

「ぢア、いづれまた……」

「さようですか。それアどうもおそくまで……」

お芳も、囁くやうな嗄聲で、小腰をかゞめながら近づいて來た。――する〱と、どこまでも近づいて來て……。

……私は見た……。

いきなり、がつしりと大きな胸のなかにゐた。背筋につくばかり、ガクンとうしろに投げかけられた首、それに覆ひかぶさつた首、ピタリと接した唇。……穩な微笑のうちに、する〱と近よつて來て、なんの前ぶれもなしに、事が、いきなりそこへ飛んだ。

……私は見た……。

二人の生活からは、見るまに嘘がなくなつて行つた。何事も見えたまゝ、聞えたまゝ、感じられたまゝ、はつきり互の心に映るやうになつた。

隅から隅まで眞實が行き亘つて行つたなかに、一番眞實でなければならない瞬間に……。

私について語られるお芳の言葉にさへ、嘘もかくしもなくなつた。

……私は見た……。

お芳がつくたつた一つの嘘を。

それは、私が、彼女に對して、何一つ隱すことがなくなつてからでも、時に行つたところの欺瞞だつた。――私から彼女に遺して來たたつた一つの嘘だつた。

さうとは夢にも知らずに、彼女がまたその嘘をつくのを。

……その時、彼女は、私の影らしいものを見て、急に身を起し、闇のなかに眼をこらした。

「どうしたんだい?」

「いゝえ、なんでもないの……」

私の遺して來たたつた一つの嘘が、そこに第二第三の嘘を孕み、やがて無數の仔を生まうとしてゐるのを見た……。



「九月一日」前後のこと

谷崎潤一郎

今から約十年前、大正五年の秋頃であつた。私は「病蓐の幻想」と題する短篇を書いて、同年九月か十月號の中央公論へ發表した。それは地震に對する恐怖と、それに基く幻想とを主にして取り扱つたもので、私はその中に、明治二十七年の夏の地震、――私が九歳の時に目撃した光景に就いて、下の如く回想してゐる。――

――尤も彼は、今から二十三四年前、多分明治二十六年の七月に、(六年とあるは記憶の誤り。)大地震と云つてもいいくらゐの素晴らしい奴に出會した覺えがあつた。ちやうど彼が小學校の二年の折であつたらう。午後の二時時分、學校から歸つて、臺所で氷水を飲んでゐると、いきなり大地が凄じく搖れ始めた。「大地震だ!」と、彼は咄嗟に心付いたが、何處をどう潜り拔けたのか、一目散に戸外へ駈け出して、大道の四つ角のまん中につくばつてゐた。その頃彼の家では日本橋の蠣殼町に仲買店を出して居て、恰も後場の立つてゐる最中であつた。米屋町の兩

側に軒を並べた商店の土間に溢れるほど雜沓してゐた相場師の群衆は、誰も彼も金の取引に氣を奪はれて、日盛りの苦熱を忘れてゐたが、突然、ぐわら〳〵〳〵と家鳴震動し出すや否や、右往左往にあわてふためき、殆んど路次のやうな、窮屈なせせこましい、往來のぎつしり詰まつた家並の下を揉みに揉んで逃げ惑うた。…………

………あの時彼は、前に云つた大道の四つ角に蹲踞つて、生きた空もなくわななきながら、世にも珍らしい天變地異をただ夢の如く眺めて居た。夢だ！　ほんたうに夢のやうな恐ろしさだ！　其の後二十幾年も彼は此の世に生きてゐるが、あの時のやうに薄氣味の惡い、あの時のやうに物凄い、あらゆる形容詞を超絕した光景を、爾來一遍も見た事がない。彼が避難した地點と云ふのは、今の蠣殼町の東華小學校の門前に近い、一丁目と二丁目との境界にある大通りで、今でもあの四つ角には交番が建つてゐる筈だ。何でも彼の經驗に依ると大地震と云ふ物は地が震へるのではなく、大洋の波のやうに緩漫に大規模に、搖り上げ搖り下ろすのであつた。自分の足を着けてゐる地の表面が、汽船の底と全く同一な上下運動をやり出した時を想像すれば、恐らく讀者はその氣味惡さの幾分かを、了解する事が出來るであらう。………いや、汽船の底と云つたのではまだ形容が足りないかも知れない。寧ろ輕氣球のやうに、——蹈んでも蹴つてもびくともしない、世の中の凡べての物よりも頑丈な分厚な地面が、寧ろ輕氣球のやうに、さも輕さうにふらふらと浮動するのである。さうして、其の上に載つかつて居る繁華な街路、碁盤の目の如く人家の櫛比した、四通八達の大通りや新道や路次や横丁が、中に住んでゐる無數の人間諸共に、忽ち高々と上空へ吊り上げられ、やがて悠々と低く降り始める。彼は比較的見通しの利く四つ辻に居た爲めに、此の奇妙なる現象を眞にまざまざと目擊した。彼の前方へ一直線に走つてゐる、坦々たる街路の突きあたりには、遠く人形町通りが見えてゐたが、其の路の長さは大凡そ二三丁もあつたであらう。然るに訝しむべし、此の二三丁の平な路が、彼の蹲踞つてゐる位置を基點

として、恰も起重機の腕の如く棒立ちになり、向うの端の人形町通りを、天へ向つて持ち上げるかと思ふ間もなく今度は反對に深く深く沈下し出して、彼は全く急峻な阪の頂邊から、遙か下方の谷底に人形町通りを俯瞰する。ああ其の時のこはさ恐ろしさ！　人間が、測り知られぬ過去の時代から生存の土臺と頼み、光榮ある歴史を其の上に築き、多望なる未來を其の上に繫いで、安心して活動してゐた大地と云ふ物が、斯く迄も不安定に、斯く迄も脆弱であらうとは………

私は今日、此の文章を讀み返して見るのに、あの時の大地が「大洋の波の如く緩漫に大規模に、揺り上げ揺り下ろ」したと云ふのは、どうもほんたうとは信ぜられない。しかしながら、子供の頭に非常に恐ろしいと感じたことは、案外正確な記憶を留めるものであるから、當時の私は、事實さう云ふ印象を受けたのであらう。思ふに四つ角へ逃げ出した時には、既に最初の激動が終つて、ゆるい餘震が續いてゐたに違ひなく、それが怯え切つた少年の眼に怪しい錯覺を與へたかも知れない。兎にも角にも、此の回想を書いてから更に十年の歳月を隔てた現在に於ても、私はあの時の光景を、矢張り此の通りに喚び起すことが出來るのである。そればかりでなく、私はたしか前記の四つ角へ母と一緒に逃げたのであつた。そして親子は、餘震が止んでしまふまで互ひにしつかり抱き合つてゐたが、當時の私の身の丈はやうやう母の胸のあたりへ屆く程であつたと思ふ。なぜかと云ふに、さつき氷水を飲んでゐた私は、どう云ふ譯か逃げる拍子に夢中で筆を握つてゐたので、氣がついて見ると、母の白い胸板に墨が黒々と着いてゐた。

地震の際に母と一緒に逃げた記憶は此れのみでない。その數年前、明治二十四年の濃尾の大震の時は、東京も可なり強く感じたが、その頃の私は茅場町に住んでゐた。搖れが來たのは早朝のことで、母と私とは「スワ」と云ふや家を飛

び出し、裏茅場町の通りを靈岸島の方へ跣足で走つた。今はつきりと覺えてゐるのは此れだけだけれども、そんなことは幾たびもあつた。「お前が騷ぐものだから、子供までが臆病になる」と、父はさう云つてよく母を叱つた。

母親が子に及ぼす感化は、父親のそれよりも强い筈だから、私が大の地震嫌ひになつたのは勿論そのせゐもあるであらう。しかし私は、何と云つても明治二十七年のあの恐ろしい經驗が最大の原因であるやうな氣がする。いつたい私は地震のみでなく、かみなりにも弱かつたから、私も十歲前後までは、かみなりと云ふと意氣地がなかつた。然るに後年、雷に對する方の恐怖は薄らいで行つたに拘はらず、地震の方のは、年を取るほど募つて行つた。そして私は、「病蓐の幻想」を發表する前、小說「惡魔後篇」の中でも、主人公の佐伯といふ大學生が地震を恐れる心持ちを、長々と書いてゐるのである。佐伯には照子と云ふ戀人がある。彼女は大柄な、恰幅のいい女であつて、彼女が梯子段を上つて來ると、二階全體がグラグラと搖れる。「そら地震だ！」と、佐伯は蒼くなつて飛び上る。尙又「病蓐の幻想」の中に、「――彼は地震が大嫌ひであつた。地震に就ては隨分いろいろの書物を讀んで、可なり豐富な知識を持つてゐた。………日本の家屋はヤワな西洋館に較べて、案外耐震力の强靱な事や、大地震の際には必ず前に異常な地鳴りを伴ふ事や、少くとも彼のやうに、年中氣に病んでびくついて居る理由のない事を、充分心得て居る癖に、彼はやつぱり明け暮れ其れが心配になつた。住宅を移轉する時、田舍の旅館に宿を取る時、女郞屋待合で夜を過す時、彼が眞つ先に思ひ出すのは地震に對する用意であつた。怪しげな西洋造りの三階四階の建物などへは、成るべく這入らないように努めて、這入つてもそこに飛び出してしまつた。淺草邊の活動寫眞を見物するのに、彼は大概出口に近い隅の方に立ち竦んで、いざと云つたら逃げ出す用意を怠らなかつた、さうして無事に見物が濟んで、小屋を出ると、『まあよかつた』と胸を撫でて、命拾ひをしたような氣持になつた」と云ふ一節もある。此の「彼」や佐伯の臆病が、私自身のことであるのは云ふ迄もない。私

は死んだ大隈侯爵を好かなかつたが、彼が地震嫌ひであり、地震が揺ると、不自由な體を近侍の者に扶けられながら、特に邸內に拵へてある地震除けの部屋へ逃げると云ふ話には、同情も出來、羨ましくもあつた。私はさう云ふ部屋を作れる身分ならいいけれども、自分のやうな境遇の者が、侯爵の如き不自由な體であつたら、嘸困るだらうと思つたりした。

「自分の生きてゐるうちに、恐らくは四十になる迄の間に、きつと東京に安政程度の地震がある。」——別に此れと云ふ理由もなしに、私にはそんな豫覺があつた。そして年々、歲の暮れになると、「ああ、今年もとうとう大地震がなくて濟むのかな」と思ひ、どうせ免れない運命であるなら、いつそ早い方がいいやうな氣もした。青年時代の私の心配は、必ず遭遇しなければならぬ大地震と徵兵檢査とを、無事に通過し得るかどうかの一事であつた。徵兵檢査を嫌つた譯は、兵役そのものが厭なのでなく、機械體操が恐かつたからで、中學時分に一度棚から落つこつて氣絕しさうになつた私は、でも中學なら、いくらか教師が手心をしてくれるからいい、兵士に取られて、無理に高い梁木を渡らせられたり、鐵棒の稽古をさせられたら、やり損つて大怪我をするに極まつてゐる、さうなると氣絕どころでない、下手をまごつけば命を落すか、うまく行つても不具者になるに違ひないと考へてゐた。が、檢査は二十六の歲に脂肪過多でハネられたが、地震の方はいつになるのか、なかなかやつて來なかつた。けれどもきつと近いうちに來る、自分が四十になる迄の間には。——だから私は、その災難を首尾よく辷り抜けないうちは、四十以後まで生きられると云ふ自信がなかつた。昔の人が疱瘡を濟まさない間は、命を借り物と思つたやうに、その大地震を逃れる、逃れないが、一生の運試しだ、それが濟んだら、自分は定めし氣がせいせいして、落ち着いて仕事が出來さうに思へた。

私は誇張してゐるやうに取られないため、何故そんなに大地震の襲來を恐れてゐたかを、玆にもう一度說明して置く必要を感ずる。私と雖、大地震で死ぬ人の數は、助かる人の數に比べて、ずつと少いことぐらゐはよく知つてゐた。死

ぬ人の中でも、火に包まれて燒かれる者が多いのであつて、安政の時の藤田東湖母子のやうに、梁に敷かれて壓死する場合は更に少い。東湖母子も一旦は無事に逃れたのだが、火を消さうとして戻つて來たので、二度目の搖り返しを喰つたのであつた。だから最初の一撃にさへやられなければ、火を避けるのはそれ程むづかしいことではない。大地震には必ず大火が伴ふことを忘れずにゐて、いざとなつたら、いち早く郊外へ逃げればいいのである。――が、此れは理窟で、かみなり嫌ひの人間は、遠雷の音を聞いただけでも顔色を變へる。同樣に私は、ほんのちよつとした微震に遭つても忽ち胸がドキドキして眞つ青になり、じつと据わつてゐることが出來ず、反射的に立ち上つて慌てふためくのが常であつた。その慌て方が又滑稽で、二階の方が一階よりも後で潰れるものであることを承知してゐながら、夢中で梯子段を驅け下りることがしばしばあつた。此處なら安全だと分つて居る時でも、とても落ち着いてゐられないで、却つて危險な場所へ逃げた。つまり私のは、逃げるために立つのでなく、動搖を感ずるのが恐いから立つので、自分が體を動かしてゐれば幾分が胡麻化せるからであつた。その證據には、決して安全とは云はれないのに、電車か汽車に乘つてゐる時大地震に遭へばいいと云ふやうな、氣持ちさへしてゐた。私の恐れたのは實に此の慌てる性質、――自分自身で奈何とも制し切れないうろたへ方にあつた。箪笥の蔭とか机の下とかへ、じつと潜んでゐればいいものを、自分は必ずウロウロ騒ぎ出すだらう。此處から大丈夫と云ふ見定めもなしに、滅茶苦茶に走り廻るだらう。さうすると十中の八九はやられる。きつと何かの下敷きになつて壓死を遂げる、――私はそれを思つたのであつた。私の最も願ふところは、孰方へ逃げても崩れ落ちる物のない廣い原ッぱのまん中で、眞つ晝間出遭ふことであつた。（私は地割れと云ふものがそれ程危險でないことを聞かされてゐた。）しかし昔から、大地震が日中に起つた例は甚だ少い。大概夜から朝のうちへかけてが、殊に午前中が、一番多い。だから戸外で出遭ふ望みは乏しい譯で、寢坊の私、いつも十二時近くまで寢てゐる私と

しては、睡眠中に襲はれる覺悟をしなければならない。然るにもう一つ因果なことには、私は不意に眞つ暗な中で眼さますと、全く部屋の方角を取り違へる癖があつた。床の間だと思つて入口の方を捜してゐたり、押し入れだと思つて窓に打つかつたりするやうなことは、毎日起居する室でありながら珍しくなかつた。それで地震が暗いうちに起るとすれば、——さうでなくとも雨戸が締まつてゐるとすれば、——もうどうしても無事に逃げられる筈はなかつた。私はいよいよ絶望した。假りにさう云ふいろいろな場合が註文通りうまく行つても、明治二十七年の時でさへあんなにびつくりしたのであるから、それ以上の奴に見舞はれたら、驚愕の餘り、その場で卒倒するかも知れない。私の心臓はその恐怖に堪へられないで、最初の一撃を喰つた刹那に「ウム」と參つてしまふであらう。それを思ひ、かれを思ふと、私はいつそ麻睡劑でも嗅がされて、知覺を失つてゐる時に地震に遭ひ、誰かに擔ぎ出して貰ふより外に萬全の策はないのであつた。その意味に於いて、私の母方の祖母は實に羨ましい人であつた。彼女は安政二年の折に十七の娘盛りであつたが、家が潰れるのを知らずに寢てゐた。眼がさめて見ると、枕もとの行燈が倒れて、灯が消えてをり、頭の上に引き窓が來てゐた。彼女は震動が止んだ時分に、そこからのこのこ這ひ出したのであつた。

　さう云ふ私であるからして、心配しても無駄だと思つて半ばあきらめてはゐたものの、三十の歳に妻を娶つて所帶を持つやうになつてからは、矢張り地盤や家の間取りを氣にしないではゐられなかつた。私は元來下町が好きであつたから、結婚の當初、妻の里方に近い關係上、向島に居を構へたが、安政の時に本所淺草深川が最もひどくやられたのを知つて、間もなく小石川の原町へ移つた。(「病蓐の幻想」はその時に書いた。)さうしてそこに五箇月程ゐて、今度は同じ原町の十四番地にある、建築學のN工學博士が建てた、小じんまりした、シツカリした家に轉じた。それはあながち地震の用意ではなかつたけれども、東京にゐた頃、私が一番安心して住んでゐられたのは、此のN博士の家作であつた。

けれども地震はやつて來ないで、その年(大正六年)の五月、地震嫌ひの母が死んだ。次いで私たちは同年の暮れ、相州鵠沼のあづまや旅館の別館のやうな離れを借りた。沙地は危險であるとは云へ、二た間しかない平家建てであつたから、そこでも割合ひに平氣でゐられた。が、何より彼より、地震の恐怖から完全に解放されたのは、大正七年十月初旬から十二月下旬へかけて、支那大陸を旅行してゐた約二た月の期間であつた。支那にも地震が絶無ではない、しかし多くは四川雲南地方にあるので、私が遊歷した方面は、往昔は知らず、近年にさう云ふ例を聞かない。私は實に生れて始めて、地震のない國に住む心安さと、せいせいした氣分とを以て、どんな高い建物へも登り、古い煉瓦の家の中でも眠つたのであつた。そして私は、「あゝまた地震國へ戻るのかなあ」と、さう思ひながら日本へ歸つた。越えて翌年の二月下旬に、安政六年己未の歳に生れた父が、六十一で死んだ。私はその時も、かう云ふ風に一つの大地震と、次ぎの大地震との間を、一杯に生きて死ぬのは、廻り合はせがいいのである、その直ぐ後の時代の者は、損な順番を受け持つのであると思つたりした。

その後私は、前の小石川原町の家に近い本郷曙町に約十箇月、相州小田原十字町の西海子通りを這入つたところに約一年八箇月を暮らした。小田原へ行つたのは、その年はやつた流感のために妻と子供とが氣管を弱くして、轉地の必要があつたからだが、いつたい地震の災害は大都會ほどひどいのである、田舍は埋立て地が少いから地盤もいいし、人家が疎らで火に包まれる憂ひがない、まあその點では小田原の方が東京よりもいくらか僾しだと云ふ風に、氣休め的の理窟をつけて、私は强ひて安心してゐた。そのうち大正十年の九月になつて活動寫眞の仕事の都合から、今度は横濱の本牧へ越した。此の家は南京蔀のペンキ塗りではあつたけれども、前に露西亞人が住んでゐたとか云ふ西洋館で、ヴェランダの下は直ぐひたひたと海につづき、靑い波が石崖に打ち寄せてゐた。そして私たちの家族はみんな、私も、妻も、

娘のあゆ子も、そこの海氣が性に合つたのか、急にめきめきと丈夫になつた。糖尿病に惱んでゐた私は、血色がよくなり、體重が增し、娘もなかなか引かなかつた三十七度前後の微熱が、次第に下つた。

或る晩、越して來てから一と月餘り過ぎた時分の、午後九時頃のことであつた。當時川崎にゐた辻潤が訪ねて來て、二階の書齋で話してゐた。私は彼とさし向ひに、安樂椅子に腰かけてゐたが、突然ぐいと椅子のクションがめり込んで、腰がズシンと沈んだ氣がした。「地震だ！」と、氣が付く前に私は旣に梯子段を馳け降りて、玄關から表へ飛び出し、ぶるぶる顫へながら門の柱に掴まつてゐた。實に急激な上下動に始まつて、恐らくは明治二十七年以後の、最大のものであらうと思はれる强震であつた。けれども私以外には誰も飛び出した者はないので、やがて恐る恐る家へ這入ると、せい子が一人聲も立てずにぐうぐうと眠つてゐた外は、さすがに皆が驚いた樣子をしてゐた。七十四になる妻の祖母は、長生きをする人の常で、呑氣であつたが、それでも布團から起き上つて「大きうございましたねえ」と云ひながら、据わつてゐた。私はやつとその時に、置き去りにした辻潤のことを思ひ出した。やや暫くして二階へ上ると、辻は私の顏を見るなり、

「や、大きかつたねえ！」

と云つたが、私の慌て方がひどいと云ふので、アツハ、アツハ、笑ひ轉げた。彼はあの最中、泰然と椅子にかけたまま動かずにゐたのであつた。

その晩、辻が歸つてから、獨り書齋に起きてゐた私は、夜がしんしんと更けた時分に、普通の人には分らない程の微かな餘震を一二回感じた。「矢張りさつきのは大地震の形式を備へてゐたんだな」と思つた。

が、その明くる年、大正十一年の四月には、更にそれ以上の强震があつた。生暖かく、うらうらと晴れた春らしい朝

の、たしか十一時前後であつた。私は寢台が浮き上るやうな感じを受けて眼を覺ましたが、はつと氣が付くと家ぢゆうがもうメリメリ鳴つてゐた。夢中で寢台を飛び降りるのと、下から床が衝き上げて來るのと一緒であつた。私は足が地に着かないで前のめりに轉びかけた。そして梯子段を駈け降りる途中で、二度目の激しい上下動を喰つた。家全體が一擧に搖り上げ、搖り下ろされた。私は中段で動けなくなり、兩手でしつかり左右の壁を押さへようとして、トン、トン、トン、と、臀餅舂きつつそのまま下まで滑り落ちた。「おい、早く早く！　湯殿へ逃げろ！」と大聲に叫んで、自分が眞つ先に避難した。その湯殿と云ふのは日本風の風呂場で、湯槽と云ふ恰好な支へがあり、その一と棟だけ平家であつたから、一番安全な場所であることを平素から家族に話してあつた。私は湯殿のガラス障子から、隣りの吉田と云ふ人の家が、グラグラ搖れてゐる狀態をありありと眺めた。それは總二階の日本家屋で、妙に彈力のある、をかしな譬へだが、臀振りダンスの女の腰のやうなネバリ強い搖れ方をしてゐた。

　此の地震は横濱が最も大きく、東京では號外が出た。午後になつてから、山下町で人死にのあつたことが分つた。此の日あゆ子は小學校の遠足で、祖母が附き添つて三溪園へ行つてゐたのは、何よりの仕合はせであつた。彼女は三溪園の塔の頂きが破損したのを見たばかりで、明治二十七年の際の私のやうな、恐ろしい思ひをせずにしまつた。妻とせい子とは、その時分は毎朝のやうに、一丁も二丁も沖の方の干潟へ出て、淺蜊や蛤を掘つてゐた。だから此の二人も案外平氣に過してしまつた。二人は海の方から、陸地の家々の動くのがはつきり見えたので「此れは大きいな」と感じただけであつたと云ふ。結局梯子段から落ちて向う脛を擦りむいた私が、一番損をした譯で、もつと大きい地震であつたら、私一人がやられてゐたに違ひなかつた。私は午飯を濟ませると、山下町の慘事の跡を見物に行つたが、中華民國領事館の前に、明治初年に建てたやうな古ぼけた煉瓦造りの、小さな支那科理屋がある。死んだのはそこの娘で、十六七になる

支那人の少女であつた。彼女は往來へ逃げ出したとたんに、二階の煉瓦が崩れて來て、その下敷きになつたのであつた。私はそれを見るにつけても煉瓦造りの危險なことをしみじみと感じた。山下町の支那人街は殆んど全部煉瓦であるから、もう少し地震が大きかつたら、一軒殘らず潰れたであらう。が、幸ひにも破損したのはその家だけで、それもぴしやりと行つたのではなく、ほんの二階の壁の一部分が、穴を明けたやうになつてゐた。娘は運惡く、たまたまそれが落ちかかる眞下へ來たので、表へ逃げさへしなければ何事もなかつたに違ひない。好いお天氣の、ぽかぽかとした午後の日ざしが照つてゐる路上には、屍骸も煉瓦も既に取り片附けてあり、茶色の地面に鐵の赤錆びやうな血痕が、大きく圓く滲み込んでゐた。見物人ももう疎らで、外字新聞の記者であらう、一人の若い西洋人が領事館の柵に乘りながら、キヤメラを向けてゐるだけであつた。しかし私は、「慌てるのは禁物だ」と云ふ教訓を覿面に見せられ、自分の身に引き較べて今更のやうに慄然とした。

去年の末から今年へかけて二度も大きな奴が續いた、三度目正直と云ふことがある、いよいよ今度は安政程度のものが來るかな。――そんな豫感がする一方、私は四月の强震を立派な大地震であると見做し、あれで濟んでしまつたのだと云ふ風にも考へたかつた。現に角煉瓦が崩れたり、一人でも人死にがあつた以上は、大地震と云つて差支へはない。さうだとすると、あれが安政の次ぎの奴ではないのかな。三十年來、今か今かと待つてゐたのはあれだつたのかな。此れで自分は厄落しをし、疱瘡を濟ました譯なのかな。「何だ、アレか、アレがさうなのか、案ずるよりも產むが安しだ。」――私はひそかに「しめた」と思つた。そして自分の幸運を感謝し、嬉しさにぞくぞくした。が、その直ぐ後から、まだ喜ぶのは早過ぎるぞ、油斷をしたら大變だぞ、近々に一つどえらいのがあると、聞きたくない聲が聞える氣もした。私は雜誌や新聞に出る地震の記事、地震學者の談話等に能ふ限り注意を拂つた。

ここで少しく横路に外れるが、元來私が、日本に於ける地震學の發達を衷心より希ひ、自分の生きてゐるうちに、一日も早く地震の豫測が出來る時代に到着することを望んでゐたのは、私としては當然の心理であらねばならない。不思議な因緣――と云へば云へるが、大森博士は私と同じ小學校（日本橋區阪本小學校）の出身で、出身者中一番先に、――私がまだ尋常何年かで居る時分に、――博士の學位を得た人であつた。その頃の「博士」と云へば珍しかつたし、殊に商人の子弟の多い日本橋區內の小學校から理學博士を出したのであるから、一日學校では博士を招いで祝賀會を催したくらゐであつた。さう云ふ關係から、私は親しく博士の謦咳に接したこともあり、博士がどんな場合にも煉瓦塀の橫を通らないなどと云ふ逸話を聞いてゐた。そして子供心にも、博士が地震を研究する大學者であることに、此の上もない信賴を感じた。此れは有り難い。斯う云ふ學者が現はれた以上、自分が大きくなる迄には地震の豫報が出來るやうになるだらう。さうすればもう心配はない。――私は小學校の生徒の頭でぼんやりとそんなことを考へ、小さな胸に微かな希望を宿したのであつた。が、此の希望はその後遂に裏切られた。いつたい日本の地震學が少しも進步しないのは、學者たちにも責任があるけれども、それより寧ろ彼等の環境、――一般の社會が惡いのであると私は思ふ。嘗て「大阪朝日」であつたか「每日」であつたかが社說に於いて此の問題を論じたことがあり、「地震國たる日本が、此の科學の發達を期するのは世界に對する義務であるのに、政治家も富豪も實業家も眼先の事にのみ囚はれて、精神的にも物質的にも學者を援助しようとしないのは、文明國たる資格がないと云はれても、一言もあるまい。若しも歐米に日本の如く頻々と地震に惱まされる國があつたら、地震を豫知する方法は夙に發見されてゐたかも知れない。それでなくとも、今に獨逸あたりが一と足先へ失敬して、日本は世界の物笑ひとなり、赤耻を搔かされるであらう」と云ふ趣旨を述べてゐたのは、實に同感であつた。此のくらゐ私の言はんとする所を言ひ、私にピタリと來たものはなかつた。私は

どれ程、日本人の地震に對する無神經を恨めしく思つたか知れなかつた。東京市の役人は井戸を潰し、名園名木を濫りに切り開き、甚だしきは濠や海を埋め立てて、その脆弱な地盤の上へマツチ箱のやうな家を建てる。市民もそれを平氣でゐる。あれでどううして恐くないのかと思ふ度に、私一人がヤキモキしてゐるやうな氣がした。かう云ふ國柄では、成る程地震學が發達しないのは當り前であつた。それに學者たちの方も、餘り腑がひないやうに見えた。震災豫防調査會などが、地震に處する心得として民衆を警めてゐる事項も、常識の範圍を一歩も出てゐない。彼等の仕事は、徒らに過去の記錄を集めることと、せいぜい「何何式」と稱する地震計の改良ぐらゐだ。さうしてしばしば、大學と氣象臺とで震源地の測定が違ふ。此れを今村博士の說明に依ると、「同じ大學構内にある二つの地震計に就いても、一つは三浦半島を指し、一つは鹿島灘を指すやうな場合は珍しくない。地震計の針の上ではほんの僅かな狂ひである」と云ふ。しかしわれわれは地震計の上に住んで居るのではない。三浦半島と鹿島灘では、實際に於いて大變な相違だ。

私は日本の地震學にあいそを盡かして、「若しも獨逸が地震國であつたら、――――」と、望めないことを望んだりした。獨逸と云ふ國が歐羅巴のうちでも、擇りに擇つて地震の稀な土地であるのが、獨逸國民には仕合はせであるが、私のためには最大の不幸であるとしか思へなかつた。それでも矢張り獨逸をアテにする氣があつた。そして最近、獨逸に於いて地球物理學が發達し、遂に日本を指導する位置になつたと云ふ話を聞き込んだ時には、馬鹿に頼もしい心地がした。

四月の地震の直後に於いて、大森博士の談話と云ふのが例の如く新聞に出た。博士の說は、かう引き續いて强震があるのは、更に大きい地震が來る前兆であると思ふかも知れぬが、必ずしもさうとは云へない。却つて小地震が頻發する方が、大地震の憂がないのである。だから近々東京地方に大地震が起ることはなささうに思ふ。何もそんなに騷ぐには

及ばぬ。と云ふやうなほんの氣休め的のもので、いつもの極まり文句であつた。私は此れを信じたいのは山々であつたが、どうも安心がならぬ氣がした。その後私は、氣象臺の藤原博士が、私の友人たちが組織する一匡社の會合の席で、「小さい地震が澤山あるから、大きい地震がないと云ふことも云へないんですよ。要するに現在の地震學では何も分つてゐないんです。兎に角日本の地震帶がそろそろ活動期に這入つて來たので、ずゐぶん大地震があるかも知れない」と洩らされたのを、その會合に出席してゐた一人から聞いた。さうなつて來ると、今の本牧の家はいけない。家そのものは潰れないとしても、下の石垣が壞れた場合に、海の方へ崩れ落ちる危險がある。海を離れて、地盤の堅固な山手へ移轉した方がいい。――私はさう思つて、内々山手の借家を搜した。

大正十一年の十月に、私たちは山手の二百六十七番のAにある、前にミス・マラバアの住んでゐた平家の洋館へ引き移つた。此の山手と云ふのは、西洋人が"Bluff"呼んでゐる外人の住宅區域で、昔からの地山(ぢやま)であるから、市中で一番地盤がシツカリしてゐることは疑ひなかつた。そして日本人區域のやうに家並みがぎつしり詰まつてゐないで、一軒一軒の間隔が相當にあり、ところどころに開港以前からの大木が聳え、葉がこんもりと繁つてゐた。「越すならあの邊に限る」と思つて空家を尋ねてゐた矢先、ちやうど九月に颱風があつて本牧の家へ波が打ち上げ、私ばかりか家族がみんな怖ぢ氣づいて移轉を急ぐ氣になつたのは、今考へると、何が仕合はせになるか分らなかつた。私はそこへ轉居した時、「此れならどんな大地震でも潰れツこはない」と、直覺的にさう感じた。元來石造や煉瓦造りの西洋館は日本家屋より弱いけれども、南京蔀(なんきんしたみ)の木造のものは、日本のそれよりも震動に堪へる。日本の家は屋根と床との間を柱で支へてゐるだけであるのに、南京蔀の洋館は、一面に木で圍つてあつて、つまり木の箱も同じである。本牧の家も南京蔀ではあつたが、今度の家はその上にも屋根の勾配の極くなだらかな平家であつた。そしてその兩隣りの家も平家、向う側の家

も平家、平家ばかりがそこに五六軒集まつてゐて、どの一軒が倒れかかつても隣りへさし響く心配がなかつた。殊に右隣りの露西亞人の住まひは、此れは又不思議な家で、屋根も壁も殘らずトタンのなまこ板で作られ、夏冬は嘸困るだらうが、理想的の耐震家屋であつた。前の往來もゆとりがあつて、五六台の自働車が並んで通れた。おまけに山手は市の郊外に近いのであるから、いざと云ふ時、避難するのに充分の餘裕がある。で、かう云ふ風にいろいろの條件が備はつた借家はめつたにない。此處なら私が慌てて表へ飛び出さうと、家ぢゆうを駈けずり廻らうと、野原のまん中と同様に、見渡す限り何も危險なものはないから、勝手氣儘に臆病性を發揮してよかつた。私は近頃こんなに安心したことはなく、すつかり大丈夫と思ひ込んだせゐか、その後その家で一二回微震に遭つたが、不思議と前のやうに慌てなかつたし、動悸のするやうなこともなかつた。それでいよいよ此れなら確かだと云ふ氣になつた。「大地震が來るなら今のうちに來てくれ、どうぞ此の家に居る間に。──」私の願ひはそれであつた。

しかし何事も、十が十まで好都合には行かないもので、地震に對して安全な平家は、私のやうに靜かな書齋を必要とする者に取つては、仕事の上に支障が起りがちだつた。矢張り二階か離れのやうな座敷でないと、家族や來客の話し聲が耳につく。その家の書齋は寢室と浴室に挾まれてゐて、間に廊下があるのでもなく、風呂へ這入るには書齋を通つて行く始末だから、私は結局、書き物が忙しくなり出すと、原稿を抱へて何處かのホテルへ逃げ込まなければなかなかつた。(私は西洋流に椅子に着かないと書けないのであつた。)それでその後約一箇年ばかりの間は、花月園ホテル、フジヤ・ホテル、海濱ホテル、熱海ホテル、はふやホテル、小涌谷ホテル、オリエンタル・ホテル、メソネツト・ホテルと、京濱間から鎌倉箱根あたりへかけての、ホテルと云ふホテルを廻り盡した。

大正十二年の正月、「婦人公論」の原稿を書くべくフジヤ・ホテルに泊まつてゐた時、たまたま市川猿之助、同夫人、

八百藏、團子の諸君と落ち合ひ、自働車で長尾峠へ行た。自働車がトンネルを過ぎて、富士が一と眼に見渡される峠の茶屋の前で止まると、その茶屋の掘つ立て小屋がグラグラと搖いだ。冬のことなので、ひつそりと空家になつてゐる小屋が、いつまでいつまでも動いてゐるのが、ちよつと薄氣味惡かつたけれど、私は割り合ひに落ち着いてゐられた。ホテルにゐたら嘸醜態を演じたらうに、戸外でよかつた。いい時に猿之助君は誘つてくれたと、さう思つた。

ホテルと云へば、――殊にオリエンタル・ホテルなどは、――最も禁物の建物であるのに、さう云ふ所を擇つて泊つて歩いてゐたのは、後から思ふと不思議であり、身の毛の竦つ感じがするが、當時私は、次第に健康が恢復し、心臓が强くなり、二十年來嘗て覺えぬ程體の諸機關が順潮になつて來て、一時はひどく惱まされた神經衰弱が、一枚一枚薄紙を剝ぐやうに輕くなりつつあつた。そして今度の轉居以來、地震に對する强氣が出來て、何處へ行つても餘りビクビクしないやうになつてゐた。又運よくも、それほどホテルへ泊りながら、ホテルで地震に遭ふやうなハメには、一遍もならかつた。私は少し圖に乘つた形で、油斷してゐた。

三四月頃の或る晩、その時分われわれの倶樂部の如き觀があつた尾上町の「アカシヤ」へ寄つた時、私は女將のお千代さんから、横濱の實業家小野哲郎氏が、「今年の八月一ぱいに、横濱は全滅するやうな大地震がある」と、豫言してをられると云ふ話を聞いた。小野氏は何か卜筮の術に凝つてをり、自分で占ひを立てて見たので、冗談でなく、眞面目に信じてゐる證據には、避難場所として本牧の邸内に平家の別館を建築する計劃を立て、店の倉庫にも手入をする積りで、目下準備を急いでゐる、と云ふのであつた。從來の私がかう云ふ話を耳に入れたら、氣にしなければならないのだが、妙なことに其の時は上の空で聞き流した。小野氏は私の舊友であつて、私よりも若輩の青年であろから、さう云ふ人の、畑違ひの豫言などは取るに足らないと思つたのであらう。それに私は、地震の豫言には今迄たびたび欺されて

ゐた。豫言の後で地震のあつた例がなかつた。私は豫言を聞かされると、却つて安心する癖がついてゐた。恐ろしいのは、誰も一と言も豫言をせず「地震」と云ふもののあることを皆が忘れてしまつたやうに、世間がしーんと靜まつてゐる時であつた。

越えて五月の末であつたか六月であつたか、私とは最も緣故の深い東京日本橋龜島町の偕樂園へ遊びに行つたことがあつた。私は二階の主人夫婦の居間に通され、そこの窓から八丁堀のせせこましい人家の屋根を眺めながら、ふいと細君のお喜代さんにこんなことを云つた。──

「おきよさん、東京と云ふ所はだんだん亂脈に、まるで玩具箱を引つくり覆したやうになつて行きますね。まあ此のゴタゴタした町並みを御覽なさい。此れで安政のやうな大地震があつたら、四方八方から火事が起つて、あなたがたは逃げる所がありやしませんぜ。此處の家は潰れないでせうが、直ぐ逃げ出しても逃げ場がないから、よつぽど巧く立ち廻らないと、燒け死んでしまひますぜ。あなたがたはよくこんな所にゐられますねえ。」

私は別に何と云ふ氣もなく云つたのであつた。小野氏の豫言が頭にあつた譯でもなかつた。お喜代さんは私の地震嫌ひを知つてゐたし、云ひ方が少し仰山だつたので、

「さうねえ。」

と云つて、唯笑つてゐた。

さてその年の夏は、愉快な賑やかな夏であつた。七月には妻と、あゆ子と、せい子とを連れて、前橋から伊香保に行き、そこで萩原朔太郎君や、同君の二人の令妹と一緒になり、男二人、女五人で、榛名山へ登つた。八月になると、私たち親子三人は箱根の小涌谷ホテルへ轉地し、せい子は鎌倉の小町園に暑を避けて、時々箱根へ遠征に來、みんなで大

湧谷見物に行つたり、強羅のプールで泳いだりした。仙石原に滞在中の市川左團次、同夫人、松蔦、壽美蔵、荒次郎の諸君が、連れ立つて遊びに來たこともあつた。隣りの宿屋には吉右衛門氏が泊まつてゐた。が、そのうちだんだん避暑客も減つて來るし、九月に這入れば、あゆ子の學校が始まるので、私は一旦妻子を送つて横濱へ歸り、更に自分だけ仕事を持つてホテルへ引き返すことにきめた。三人は八月二十七日に小涌谷を立つた。せい子も既に鎌倉から戻つて來てゐたが、横濱はまだ可なり暑かつた。それでも暑い暑いと云ひながら、翌日の二十八日には、長らく口に入れなかつた鵬珍樓の支那料理を喰べて、早速舌の保養をさせた。二十九日の正午頃、私は芝の改造社へ「愛すればこそ」の印税を取りに行くため、詰め襟のダッグの服にヘルメットを被つて出かけた。新橋で降り、驛の裏口から出て、そこから二三丁の改造社へ行かうとすると、向うからHの來るのとパッタリ出遇つた。私はHが、つい此の間私をモデルに使つたことを思ひ出して、くすッと笑ひたいやうな發作を感じた。Hの口もとにも同じ可笑しさを堪へてゐるらしい様子ゐひが見えたが、彼は極まりが悪さうに眼を外らした。

同日夕刻、用を濟まして歸宅した私は、折柄訪ねて來た梶原覺造氏と、妻とを誘つて、名前は忘れたが、何とか云ふ横濱中で一番うまい天ぷら屋へ行き、かきあげを食つた。

八月三十日の夕刻、私と妻とは高砂町（?）の玉屋で晩飯を濟ませ、私はその足で横濱驛から小田原行きの汽車に乘つた。妻は散歩がてら、プラットフォームまで見送りに來た。

八月三十一日の午後、小涌谷ホテルの滞在もう一箇月程になり、多少鼻について來たので、仕事をするには場所を變へた方がいいかと思ひ、此の夏蘆の湖畔に新築された箱根ホテルへ、一日二日試驗的に泊まつて見ようと云ふ氣を起した。私は折鞄に原稿用紙、備忘錄、旅行用の小壜に詰めたウイスキー、バイエル・アスピリン、下劑、睡眠劑等を入

れて、晩餐の時間前に小涌谷を立ち、乘合自働車で湖畔へ向つた。

箱根ホテルはフジヤの經營で、支配人は顏馴染のある元の「はふや」の主人であつた。そして外觀は巍然たるコンクリートの五層樓であつたから、內部は、凡べて西洋間であらうと豫期してゐたのだが、行つて見ると、西洋間は一階にだけしかなく、それもその晩は滿員で、已むを得ず、三階の日本間で辛抱しなければならなかつた。私はその座敷へ通つた時、さう云ふ大きな建て物の中へ這入つた場合の常として、直ぐに「地震」と云ふことが念頭に湧いた。火急の際に此の三階から梯子段を降りて表へ飛び出す暇はないが、しかし湖水に面した方に、相當に廣い露台がある。その露台は鐵筋コンクリートであらうから、そいつが崩れ落ちる筈はあるまい。よし、若しもの時はあの露台へ逃げよう。――私はそんなことを考へながら、日本間では仕事は駄目とあきらめて、いつもより早く床に就いた。夜に入つてからは大變な豪雨で、そのために却つて地震の方は大丈夫と思つたけれども、（大森博士は大風大雨中に大地震はないと云つて居られた。）土砂降りの音が耳について寢られず、カルモチンを飮んで漸く眠つた。

九月一日午前八時半、私は場所が變つたせゐか、例になく早く眼をさました。何處のホテルへ泊まつても朝の食堂へ出たことなどはめつたにないのに、その日は珍しく、九時過ぎに一階の食堂へ降りた。食事が濟むと、又三階へ上つたが、矢張り座敷が氣に入らないし、仕事が出來なければ斯うしてゐても間が拔けるので、いつそ小涌谷へ歸らうと思つた。私は直ぐに會計を命じ、十一時半に出る乘合自働車で湖畔を發した。夜來の雨は上りかかつて、足の早い雲がちぎれちぎれに空を流れ、時々ぱつと日が照つて往來の水たまりが光つてゐた。元箱根へ來ると、自働車は殆んど滿員になつてた。私は運轉手の後ろの、一番前の席に腰かけ、私の橫には葡萄牙人らしい色の黑い若い婦人が乘つてゐた。元箱根からは蘆の湯へ行くまで、路が暫く上りになる。そのあたりで、又一としきり細かい霧雨がざあッと來た。幾度も降

つたり止んだりして、濕氣を含んだ冷めたい空氣がひたひたと車の中を侵した。葡萄牙の婦人はうすいジョウゼットの服を着て、兩腕を露はにしてゐるので、此れでは風邪を引くだらうにと、そんなことを思つたりした。その黒い、肉づきのいい腕には、じーツと見るとむくむく毛が澤山生えてゐて、一本一本の毛の先に、小さな白い水蒸氣の玉が結ぼれてゐるのが、絹絲のやうに綺麗であつた。

此の婦人は薫の湯で降り、私の周圍は日本人の男子ばかりになつた。そこを出てからは左側は高い崕、右崕は深い谷に臨んだ曲り角の多い路であつた。此夏道普請をしたばかりのところへ、前夜の豪雨で洗ひ流されて、凹凸が激しく、自働車が非常に搖れる。雨は殆んど降つてゐないが、たまにガラス窓へ點滴があたり、裾の切れた銀の脚が空間に見える。車はグーと右へ曲つたかと思ふと、忽ちグーと左へねぢる。私の眼の前には、活動寫眞の移動撮影を見る如く、山山谷々の鳥瞰圖が右から左へ、次ぎの瞬間には左から右へ、急速度を以て繰り返し展開される。

「降ろして下さい！　降ろして下さい！」

その時後部に乘つてゐた獨逸人の一團の一人が叫んだ。

「こんな所で降ろせるものですか、此處は道普請をしたばかりで地盤が脆いんです。もう少し安全な所まで行きます。」

私は運轉手が一生懸命梶を取りながら、怒鳴り返す聲を聞いた。前方の地面にみみずの這ふやうな裂け目が出來、それがずるずると伸びて行つた。路の端が谷の方へ崩れ始めた。

「大地震——」此の感じは、ゆつくりと私の意識に上つた。私は徐かに席に着いたまゝ巨人の手を以て引きちぎれるやうに搖いでゐる樹々の梢を見た。森や峰が一と塊りになつて動くのが分つた。半丁程先で谷に行きあたる路の突角が、正に起重機の腕の如く上下してゐた。明治二十七年の記憶が、明瞭に私に甦つた。いやあれどころか、此れこそ安政程

度の地震だ。小野哲郎氏の豫言が中つた！　咄嗟に私は「しめた」と思つた。汽車か電車で遭遇したいと願つてゐた私の希望は、自働車に依つて充たされたのだ。私は最初の一撃の來た瞬間を知らずに濟んだのだ。突然私の腦裡には昔の母の俤が浮かんだ。墨が黒々と附いてゐる母の白い胸板が見えた。母が生きてゐたら、どんなに驚いただらうと思つた。それから私は、横濱の家族の身の上を案じたが、此の地震は多分關東一圓の地震であらう、さうだとすれば横濱よりも東京の方がやられてゐる。横濱は比較的安全、……殊にあの家は大丈夫だ。さうして家族は、祖母も、妻も、あゆ子も、せい子も、ちやうど此の時刻には家に居るに違ひない。ただ會へるのはいつの事やら、――東京も、横濱も、小田原も、箱根も、東海道の沿道が悉く火になるとしたら、早くて半月、遲くて一と月の後であらう。自分の知人で、今此の瞬間に壓死したものは誰々であらうか。横濱ではドクトル石浦と、平尾榮亮の兩君がきつとやられてゐる。石浦氏は毎日正午十二時にまがね町の遊廓へ檢黴に行く。遊廓ではとても助かるまい。平尾君も山下町の古いぼろぼろの西洋館の事務所で晝飯を食ふ。同君も恐らく無事ではなからう。……

最初の激動がまだ續いてゐる間に、此れ等の考へが稻妻のやうに私の頭を通り過ぎた。その時自働車は、五六丁のカーヴを命がけで走つて、やつと十坪ほどの平地のある地點で停まつた。

（大正十五年十二月稿）

豫告

文學評論

谷崎潤一郎

來月號より氏が獨特の文學觀を登載す。從來我國で試みられた單なる文藝時評でなく、氏が涉獵したる世界的傑作の讀後感並びに映畫藝術、その他文學に關するあらゆる方面に亘りての忌憚なき精緻の觀察で、氏一流の奇峭の見、以つて讀者の滿足を得るものと信ず。

改造社

編輯だより

◇普選の實施を前にして無產政黨が四つも出來た。幾つできたからとてかまわないが、力が岐るれば岐るほど微弱のものとなり、遂に何等の威力も發揮し得ぬこととなる。須らく大悟一番するの時である。

◇日本出版界あつて以來の一大壯觀であつた現代日本文學全集は世界的新記錄を收むるに至つた。第一回配本『尾崎紅葉集』は去十六日既に配本濟みとなつた。價格、內容、裝幀等賞讃の聲に充ちている。本集のために泉鏡花氏及德田秋聲氏、和田利彥氏等が盡力して下さつた。厚く御禮を申のべる。

◇第二回配本は第九編『北村透谷集、樋口一葉集』と決定し、目下印刷中、一月末迄には一本も遲滯なく讀者の机邊までお屆けします。

◇本全集の眞個の價値と、これに濺げる我等の努力は、前回配本せし『尾崎紅葉集』に依つて、各位の遍き識認を得てゐることと思はれるが、今回配本すべき『透谷、一葉集』の內容は、それにも優つて讀者は滿足さるることと私どもは自信してゐる。例へば內容の選擇に於ては、一層自由なる態度を以て臨み得たから、隨つて同集の內容は完璧なものである。

◇一葉が明治に輝く一大作家であり、透谷の最後また劇的である。透谷、一葉の歿後三十有餘年を經たる今日、その文名を口にする者と雖も而も、事實彼等の明治文學に貢獻した眞の功績と勞苦を諒解するものは尠ない。今、更に逸文を加へて新版を出し、玆に百萬讀者の高覽に供するは、我等の感慨尠からざる所である。終りに本集のために努力して下さつた藤村、露伴、孤蝶諸氏に感謝する。

◇第二回配本は前記の如く、一月末までに配本する。會費未納の方は一月五日迄に必ず到着するやう御送金下さいとのこと。

◇一月から每月「改造社文學月報」を發行する。これは本全集讀者のみに無代配付し一般に公賣せず。

◇新年號の創作欄に新銳藤森、犬養兩氏の大作が得られた、そして里見、谷崎、武者、志賀、德田、中條氏の力作が打揃つたことは嬉しい。野上彌生氏の久方振りの大作また再讀の値あり。論文も阿部、末弘兩氏が多忙を押して本誌の懇請に應じて下さつたことを謝する。

◇『改造』は二月號に於て總ての點に一大改革をするであらう。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十五年十二月十七日 印刷納本
大正十六年一月一日 發行

(價壹圓五拾錢)

編輯發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 山本三生

印刷所 東京牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二・電話銀座四五五八